

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 239

百間川原尾島遺跡 8 百間川沢田遺跡 6

旭川放水路改修に伴う発掘調査 XIX

2013

岡山県教育委員会



1 縄文時代晩期貯蔵穴（土坑1）（北から）



2 溝12（東から）



1 土坑70 (南から)



2 製塩炉1・2 (北東から)



1 弥生時代後期水田（水田5～7）（東から）



2 弥生時代前・中・後期水田土層断面（南西から）



3 弥生時代後期水田稻株痕跡（西から）



1 溝12出土土器



2 粘土帯土器 〈93〉



3 松菊里型模倣土器 〈98〉



遺跡遠景（南西から）



1 環濠集落北西部（西から）



2 環濠断面（西から）



1 円形周溝墓 1 (北から)



2 掘立柱建物 1 (北東から)



円形周溝墓 1 出土土器

序

江戸時代初期に整備された岡山城とその城下町は、現在の岡山市街の中心部に位置していますが、岡山県の三大河川の一つである旭川の氾濫による災害を被る地域でもありました。

こうした中、17世紀後半に、岡山藩の家臣で優れた土木設計・施工者であった津田永忠らによって、岡山城下を洪水から守るため増水時に旭川の水を東側に分岐し、操山丘陵の北裾から東端を南流させ児島湾に注ぐ人工的な放水路として築造されたのが百間川です。

この百間川は、おもには荒手と呼ばれる3か所の越流堤と堤防が築かれたのですが、旭川の増水時以外は田畑として利用されていたようです。

昭和40年代には当時の建設省により、堤防の補強や低水路掘削などの本格的な改修工事が計画されましたが、百間川内には弥生時代の遺跡の存在が知られていました。

地下に影響を与える低水路掘削工事などは広範囲にわたっていたことから、岡山県教育委員会は百間川全域の遺跡確認調査を実施するとともに、現状保存が困難な場所については昭和52年から記録保存としての本発掘調査を実施することとしました。

以来、平成20年度まで32年間にわたって発掘調査および整理、報告書刊行を継続してまいりました。平成17～21年度の5年間は、改修事業計画により本発掘調査は中断しておりましたが、平成22・23年度には再開することとなり、本書はこの2年間の調査内容をまとめた報告書です。

百間川遺跡群の報告書としては19冊目となる本書に収載した百間川原尾島遺跡では、弥生時代後期末の洪水砂によって埋没した水田や水路を検出し、また百間川沢田遺跡では弥生時代前期の環濠の北端部を検出し、過去の調査成果とあわせて環濠と環濠に囲まれた内部の様相をほぼ明らかにすることができました。

本報告書が学術研究に寄与するとともに、埋蔵文化財の保護・保存のために活用され、また地域の歴史研究のための資料として広く役立つならば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査および報告書の作成に際しましては、旭川放水路（百間川）改修に伴う埋蔵文化財保護対策委員会の先生方から多くの御教示と御指導を賜り、また国土交通省中国地方整備局岡山河川事務所をはじめとする関係各位からは多大な御協力をいただきました。記して厚く御礼申し上げます。

平成25年12月

岡山県古代吉備文化財センター
所長 平井 泰男

例 言

- 1 本書は、岡山県教育委員会が旭川放水路改修に伴い、国土交通省中国地方整備局と岡山県の委託契約に基づき実施した、百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の発掘調査報告書である。契約事項は文化財課が行い、発掘調査及び報告書作成は岡山県古代吉備文化財センターが担当した。
- 2 本報告書は、百間川遺跡群の報告書の第19冊に当たり、百間川原尾島遺跡の報告書では第8冊、百間川沢田遺跡では第6冊となる。
- 3 百間川原尾島遺跡は、岡山市中区原尾島を中心に所在する原尾島遺跡のうち、百間川の河川敷にかかる遺跡範囲を指す。百間川沢田遺跡も同様に、岡山市中区沢田に所在する沢田遺跡のうち、百間川の河川敷にかかる遺跡範囲を指している。
- 4 発掘調査は、平成22年度に亀山行雄・内藤善史・團奈歩、平成23年度に弘田和司・小林利晴・内藤善史・團奈歩が担当して実施した。調査面積は、合計7,516㎡である。詳細は、本文の表1に示すとおりである。
- 5 発掘調査及び報告書の作成に当たっては、旭川放水路改修に伴う埋蔵文化財保護対策委員会を設け、次の方々に委員を委嘱した。対策委員各位からは、終始有益な御指導と御助言を賜った。記して深く感謝の意を表す次第である。

池葉須藤樹（元中学校校長）〈平成22・23年度〉
稲田孝司（岡山大学名誉教授）〈平成23・24年度〉
亀田修一（岡山理科大学）
出宮徳尚（元岡山市教育委員会）
松本直子（岡山大学）〈平成22年度〉
山本悦世（岡山大学）
- 6 本報告書の作成は、平成23年度に弘田（2・3月）が、平成24年度には弘田・團（4～3月）と小林（7～9月）が担当して実施した。
- 7 本文の執筆は、調査担当者が分担し、文責は各項目又は遺構ごとの文末に記した。
- 8 本報告書の編集は、百間川原尾島遺跡を團が、百間川沢田遺跡を弘田が担当し、全体編集は團が行った。
- 9 本報告書に関する遺物のうち、一部についての鑑定及び分析を次の方々に依頼し、有益な御教示を得るとともに、白石氏からは報文を頂いた。記して厚くお礼申し上げる。

土器の胎土分析 白石 純（岡山理科大学）
石材鑑定 鈴木茂之（岡山大学）
- 10 本報告書に関する遺物のうち、一部についての分析、測定及び同定を次の機関に委託した。

花粉分析・植物珪酸体分析・放射性炭素年代測定・樹種同定：パリノ・サーヴェイ株式会社
樹種同定：株式会社吉田生物研究所
- 11 本報告書に関する遺物のうち、一部について保存処理を次の機関に委託した。

木器の保存処理：株式会社吉田生物研究所

- 12 遺物写真の撮影については、江尻泰幸氏の協力と援助を得た。
- 13 本書に関連する出土遺物並びに図面、写真、マイクロフィルム等は、岡山県古代吉備文化財センター（岡山市北区西花尻1325-3）に保管している。

百間川原尾島遺跡グリッドの座標

点名	日本測地		世界測地	
	X	Y	X	Y
B・C-31	-147518.393	-34386.773	-147174.747	-34633.651
B・C-32	-147531.127	-34371.351	-147187.480	-34618.230
A・B-42	-147643.046	-34204.396	-147299.390	-34451.284
A-44	-147660.801	-34167.182	-147317.143	-34414.072

※A・B、B・Cは、20m間隔のグリッドの中間、10m地点に当たる。

百間川沢田遺跡グリッドの座標

点名	日本測地		世界測地	
	X	Y	X	Y
204-F	-147660.291	-34180.093	-147316.634	-34426.983
205・206-J	-147683.161	-34097.772	-147339.501	-34344.665
206・207-J	-147703.084	-34096.018	-147359.423	-34342.912
206・207-L	-147699.577	-34056.172	-147355.915	-34303.067

※205・206、206・207は、20m間隔のグリッドの中間、10m地点に当たる。

百間川米田遺跡グリッドの座標

点名	日本測地		世界測地	
	X	Y	X	Y
A-27	-147380.3883	-31323.7061	—	—
A-31	-147384.4812	-31363.4962	—	—
Z-27	-147370.4406	-31324.7270	—	—
Z-31	-147374.5335	-31364.5170	—	—

百間川兼基遺跡・百間川今谷遺跡のグリッド座標については、「百間川今谷遺跡」4に掲載している。

凡 例

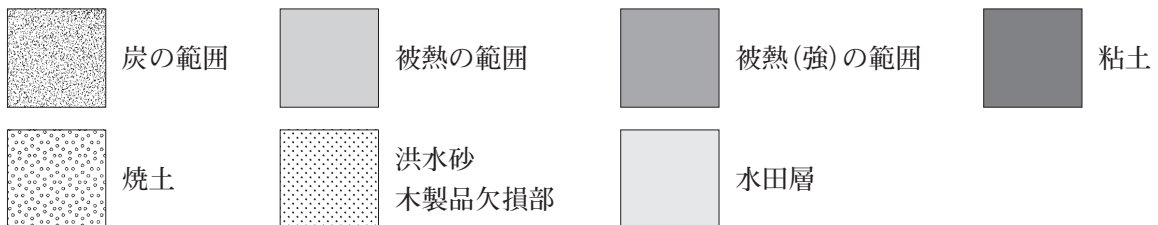
- 1 本書では、従来の百間川遺跡群発掘調査報告書での小字名を用いた調査区名の設定は行っていないが、本報告書の対象範囲は、百間川原尾島遺跡の「川内・三ノ坪調査区」に、百間川沢田遺跡では「横田・高縄手A調査区」に当たる。
- 2 百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡とも遺跡全体に20m方眼のグリッドを組んでおり、縦横の軸線それぞれに数字とアルファベットを付している。遺構の位置などを示す場合、各グリッドの北西角の軸線交点に区を付して、たとえば34-D区、206-H区と呼ぶ。
- 3 本報告書に示す北方位は基本的に磁北であり、遺跡付近の磁北は西偏7°6′を測る。
- 4 本報告書に使用した高度は、すべて海拔高度である。
- 5 本報告書の遺構及び遺物実測図の縮尺率は次のとおり統一し、一部の例外については個別に縮尺率を図示及び明記している。

遺構 竪穴住居：1/60、建物・柱穴列：1/60、井戸・土坑・溝断面：1/30

遺物 土器：1/4、石器・石製品：1/1・1/2・1/3・1/4、木器・木製品：1/4・1/6

金属製品：1/3、土製品：1/3、ガラス製品：1/1

- 6 本書の遺構全体図に示す遺構名には、次の略称を用い、土坑名は番号のみで表記した。
竪穴住居：住 掘立柱建物：建 井戸：井 柱穴列：列 土器溜まり：溜
島状高まり遺構：島
- 7 遺構番号は、両遺跡とも遺構の種別ごとにそれぞれ1から通し番号を付した。
- 8 遺物番号のうち土器以外のものについては、その材質を示すため番号の頭に次に示す略号を付した。なお、遺物番号は各種類ごとに通し番号とした。
石器・石製品：S、木器・木製品：W、金属器・金属製品：M、土製品：C、ガラス製品：G
- 9 土器実測図における中軸線左右の白抜きは、小破片のために口径の推定が困難で、口径がおおよそ1/6以下であることを示す。
- 10 遺構図における、被熱範囲や炭の分布範囲などについては次のとおり表現し、そのほかのものに関しては、個別に例示している。



- 11 土層断面図等に使用した土色は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色標監修）による。
- 12 本報告書第1図に掲載した地図は、国土地理院発行1/25,000地形図の備前瀬戸・西大寺・岡山北部・岡山南部を複製・縮小し、加筆したものである。
- 13 過去の調査で検出された遺構や遺物を説明する場合、掲載報告書名等を次のとおり略している。

遺構の場合 「百間川沢田遺跡3 掘立柱建物4」 → 「百沢田3 建物4」

遺物の場合 「百間川沢田遺跡3 土器溜まり1-1870」 → 「百沢田3-1870」

14 本報告書の時代・時期区分は一般的な政治史区分に準拠し、それを補うために世紀などを併用している。また、弥生時代から古墳時代前半期の時期区分は、「百間川原尾島遺跡1」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』39で採用した土器編年に基づき、百・後・Ⅱなどの略称も使用している。

編年対比表

時代		遺跡	百 間 川	雄 町 ^(註1)	上東・川入 ^(註2)
弥 生 時 代	前 期	津 島	百間川前期Ⅰ		
		門 田	百間川前期Ⅱ	雄 町 1	
			百間川前期Ⅲ	雄 町 2 船 山 2	
	中 期	南 方	百間川中期Ⅰ	高 田 雄 町 3	
		菰 池	百間川中期Ⅱ	船 山 5	
				菰 池	
				雄 町 4	
		前 山 Ⅱ	百間川中期Ⅲ	前 山 東	
				雄 町 5	
	仁 伍		雄 町 6	上東・鬼川市0	
	後 期	上 東	百間川後期Ⅰ	雄 町 7	上東・鬼川市Ⅰ
				雄 町 8	
		上 東	百間川後期Ⅱ	雄 町 9	上東・鬼川市Ⅱ
				雄 町 10	
		グランド上層	百間川後期Ⅲ	+	上東・鬼川市Ⅲ
酒 津		百間川後期Ⅳ	雄 町 11	才 の 町 Ⅰ	
	雄 町 12		才 の 町 Ⅱ		
古 墳 時 代	前 期	王 泊 六 層	百間川古墳時代Ⅰ	雄 町 13	下 田 所
			百間川古墳時代Ⅱ	雄 町 14	亀 川 上 層
			百間川古墳時代Ⅲ	雄 町 15	川入・大溝上層

註1 正岡睦夫「雄町遺跡－弥生式土器、土師器－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972年 PP.110-113

註2 柳瀬昭彦「川入・上東－川入・上東道遺跡の弥生式土器及び古式土師器について－」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』16 岡山県教育委員会 1977年 PP.171-181

目 次

巻頭カラー図版

序

例 言

凡 例

目 次

第1章 地理的・歴史的環境	1
第2章 発掘調査及び報告書作成の経緯と経過	
第1節 調査に至る経緯	5
第2節 調査の経過	6
第3節 調査の体制	7
第4節 日誌抄	8
第5節 報告書の作成	
1 体制と経過	10
2 報告書作成の方法	14
第3章 百間川原尾島遺跡	
第1節 遺跡の概要と調査区	17
第2節 弥生時代前期以前の遺構・遺物	
1 概要	20
2 土坑	27
3 焼土	64
4 溝	64
5 水田	80
6 土器溜まり	81
7 下がり	81
8 柱穴	82
9 旧河道	85
10 杭列	88
第3節 弥生時代中期の遺構・遺物	
1 概要	98
2 竪穴住居	103
3 土坑	103
4 溝	123
5 水田	125
6 柱穴	127
第4節 弥生時代後期の遺構・遺物	
1 概要	128
2 竪穴住居	133
3 井戸	135

4	土器棺	138
5	土坑	138
6	製塩炉	151
7	溝	152
8	土器溜まり	158
9	柱穴	160
10	島状高まり	160
11	洪水砂埋没遺構	160
	(1) 微高地西側の水田関連遺構	160
	(2) 微高地上の水田関連遺構	172
	(3) 微高地東側の水田関連遺構	173
第5節	古墳時代の遺構・遺物	
1	概要	174
2	竪穴住居	179
3	井戸	185
4	土坑	192
5	溝	194
6	下がり	200
第6節	中世以降の遺構・遺物	
1	概要	202
2	溝	207
第7節	包含層の遺物	208
第4章	百間川沢田遺跡	
第1節	遺跡の概要と調査区	211
第2節	縄文時代の遺構・遺物	
1	概要	214
2	炉	217
3	土坑	218
第3節	弥生時代前期の遺構・遺物	
1	概要	226
2	竪穴住居	231
3	土坑	233
4	環濠	246
5	溝	252
第4節	弥生時代中期の遺構・遺物	
1	概要	254
2	墓	254
3	土坑	260
4	水田	261
第5節	弥生時代後期の遺構・遺物	
1	概要	262
2	井戸	265
3	土坑	273

4	溝	275
5	洪水砂埋没遺構	276
第6節	古墳時代～古代の遺構・遺物	
1	概要	282
2	竪穴住居	285
3	掘立柱建物	291
4	柱穴列	295
5	井戸	296
6	土坑	306
7	溝	308
8	その他の遺構	311
第7節	中世以降の遺構・遺物	
1	概要	312
2	土坑	312
3	溝	315
第8節	包含層の遺物	316
第5章	自然科学分野における鑑定・分析	
第1節	百間川原尾島遺跡の鑑定・分析	
1	百間川原尾島遺跡の花粉分析	319
2	百間川原尾島遺跡の植物珪酸体分析	323
3	百間川原尾島遺跡の放射性炭素年代測定	327
4	百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析	330
第2節	百間川沢田遺跡の鑑定・分析	
1	百間川沢田遺跡の花粉分析	332
2	百間川沢田遺跡の放射性炭素年代測定	334
第6章	総括	
第1節	調査の概要	
1	百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡	337
2	遺構・遺物の概要	337
第2節	百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の変遷	
1	弥生時代の集落	341
2	古墳時代の集落	345
3	中世以後の百間川	349
第3節	遺構と遺物	
1	環濠集落	352
2	円形周溝墓	354
3	百間川原尾島遺跡の方形土坑について	357
4	弥生時代前期から中期の過渡期の土器について	359

遺構一覧表

遺物一覧表

新旧遺構対照表

図版

報告書抄録

目 次

第1図	遺跡位置 (1/2,000,000)	1	第50図	土坑31 (1/30)	50
第2図	百間川周辺遺跡分布 (1/50,000)	2	第51図	土坑32 (1/30)	51
第3図	設定グリッドと調査区位置 (1/8,000)	6	第52図	土坑33 (1/30)	51
第4図	百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の調査区と 掲載報告書 (1/2,000)	12	第53図	土坑34 (1/30)	51
第5図	百間川遺跡群の調査年次と 掲載報告書 (1/7,500)	15	第54図	土坑35 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	51
第6図	調査区位置図 (1/3,000)	17	第55図	土坑36 (1/30)・出土遺物 (1/2)	52
第7図	基本層序① (1/60)	18	第56図	土坑37・38 (1/30)・土坑37出土遺物 (1/4)	52
第8図	基本層序② (1/60)	19	第57図	土坑39 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	52
第9図	縄文晩期河道・土坑1位置図 (1/150)	20	第58図	土坑40~42 (1/30) ・土坑40・41出土遺物 (1/2・1/4)	53
第10図	弥生時代前期遺構全体図 (1/1,000)	21	第59図	土坑43 (1/30)・出土遺物 (1/3)	54
第11図	縄文時代晩期~弥生時代前期遺構配置図 (1/400)	23	第60図	土坑44 (1/30)	54
第12図	弥生時代前期微高地遺構配置図 (1/200)	25	第61図	土坑45 (1/30)	54
第13図	土坑1 (1/30)	27	第62図	土坑46 (1/30)・出土遺物 (1/4)	54
第14図	土坑2 (1/30)	27	第63図	土坑47~49 (1/30)・土坑47出土遺物 (1/4)	55
第15図	土坑3 (1/30)・出土遺物 (1/4)	28	第64図	土坑50 (1/30)・出土遺物 (1/4)	55
第16図	土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)	29	第65図	土坑51 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	56
第17図	土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/4)	30	第66図	土坑52 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	56
第18図	土坑6 (1/60)	31	第67図	土坑53 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	57
第19図	土坑6出土遺物 (1/4)	32	第68図	土坑54 (1/30)・出土遺物 (1/4)	57
第20図	土坑7 (1/30)・出土遺物① (1/2)	32	第69図	土坑55 (1/30)	57
第21図	土坑7出土遺物② (1/4)	33	第70図	土坑56 (1/30)・出土遺物 (1/4)	58
第22図	土坑8 (1/30)・出土遺物 (1/4)	33	第71図	土坑57 (1/30)・出土遺物 (1/4)	59
第23図	土坑9 (1/30)・出土遺物 (1/4)	34	第72図	土坑58 (1/30)	59
第24図	土坑10 (1/30)	34	第73図	土坑59 (1/30)・出土遺物 (1/4)	59
第25図	土坑10出土遺物 (1/2・1/4)	35	第74図	土坑60 (1/30)	60
第26図	土坑11 (1/30)・出土遺物 (1/4)	36	第75図	土坑61 (1/30)・出土遺物 (1/4)	60
第27図	土坑12・13 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	37	第76図	土坑62 (1/30)・出土遺物 (1/4)	61
第28図	土坑12出土遺物 (1/4)	38	第77図	土坑63 (1/30)	61
第29図	土坑14 (1/30)・出土遺物 (1/4)	38	第78図	土坑64 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)	61
第30図	土坑15 (1/30)・出土遺物 (1/4)	39	第79図	土坑65 (1/30)・石包丁出土状況 (1/3) ・出土遺物 (1/2・1/3)	62
第31図	土坑16 (1/30)・出土遺物① (1/4)	39	第80図	土坑66 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	63
第32図	土坑16出土遺物② (1/2)	40	第81図	土坑67 (1/30)	63
第33図	土坑17 (1/30)・出土遺物 (1/2)	40	第82図	土坑68 (1/30)・出土遺物 (1/4)	64
第34図	土坑18 (1/30)	40	第83図	焼土1 (1/30)	64
第35図	土坑18出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	41	第84図	焼土2 (1/30)	64
第36図	土坑19 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	42	第85図	溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)	65
第37図	土坑20 (1/30)	42	第86図	溝2・3 (1/30)・溝2出土遺物 (1/2・1/4)	65
第38図	土坑20出土遺物 (1/4)	43	第87図	溝4・5 (1/30)	65
第39図	土坑21 (1/30)	43	第88図	溝6 (1/30)・出土遺物 (1/4)	66
第40図	土坑21出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	44	第89図	溝7 (1/30)・出土遺物 (1/4)	66
第41図	土坑22 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	45	第90図	溝8・9 (1/30)・溝8出土遺物 (1/4)	67
第42図	土坑23 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	46	第91図	溝10 (1/30)	67
第43図	土坑24 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)	46	第92図	溝11 (1/80)	67
第44図	土坑25 (1/30)・出土遺物 (1/4)	47	第93図	溝11出土遺物① (1/4)	68
第45図	土坑26 (1/30)・出土遺物 (1/4)	48	第94図	溝11出土遺物② (1/4)	69
第46図	土坑27 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	48	第95図	溝12 (1/30)	69
第47図	土坑28 (1/30)・出土遺物 (1/4)	49	第96図	溝12上層出土遺物① (1/4)	70
第48図	土坑29 (1/30)	50	第97図	溝12上層出土遺物② (1/4)	71
第49図	土坑30 (1/30)	50	第98図	溝12中層出土遺物 (1/4)	72
			第99図	溝12下層出土遺物① (1/4)	73

第100図	溝12下層出土遺物② (1/4) ……………	74	第153図	土坑86・87 (1/30) ……………	122
第101図	溝12最下層出土遺物 (1/4) ……………	75	第154図	土坑88 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	122
第102図	溝12出土遺物① (1/4) ……………	76	第155図	土坑89 (1/30) ……………	122
第103図	溝12出土遺物② (1/4) ……………	77	第156図	土坑89出土遺物 (1/4) ……………	123
第104図	溝12出土遺物③ (1/4) ……………	78	第157図	土坑90 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	123
第105図	溝12出土遺物④ (1/2・1/3) ……………	79	第158図	溝14 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4) ……………	124
第106図	溝13 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	80	第159図	溝15 (1/30) ……………	125
第107図	水田1 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3) ……………	80	第160図	水田2 (1/30)・出土遺物① (1/2) ……………	125
第108図	土器溜まり1 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……	81	第161図	水田2出土遺物② (1/2) ……………	126
第109図	下がり1出土遺物① (1/4) ……………	81	第162図	水田3 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……………	126
第110図	下がり1出土遺物② (1/4) ……………	82	第163図	柱穴出土遺物 (1/2・1/3・1/4) ……………	127
第111図	柱穴出土遺物① (1/4) ……………	83	第164図	弥生時代後期遺構全体図 (1/1,000) ……………	129
第112図	柱穴出土遺物② (1/2・1/3・1/4) ……………	84	第165図	弥生時代後期遺構配置図 (1/400) ……………	131
第113図	柱穴出土遺物③ (1/3) ……………	85	第166図	竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/3) ……	133
第114図	旧河道 (1/80) ……………	86	第167図	竪穴住居3 (1/60) ……………	134
第115図	旧河道出土遺物① (1/2・1/4) ……………	87	第168図	竪穴住居3出土遺物 (1/1・1/2・1/3・1/4) ……	135
第116図	旧河道出土遺物② (1/4) ……………	88	第169図	井戸1 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	136
第117図	杭列 (1/60) ……………	89	第170図	井戸2 (1/30) ……………	136
第118図	杭列1立面 (1/60) ……………	91	第171図	井戸2出土遺物 (1/4) ……………	137
第119図	杭列1南北方向断面 (1/60) ……………	91	第172図	土器棺1 (1/20)・出土遺物 (1/4) ……………	138
第120図	杭列1筵状編み物検出状況 (1/20) ……………	92	第173図	土坑91 (1/30) ……………	139
第121図	杭列1断面模式図および 杭列1・2推定復元図 ……………	93	第174図	土坑92(1/30) ……………	139
第122図	杭列1出土遺物 (1/4) ……………	94	第175図	土坑93 (1/30) ……………	139
第123図	杭列1・2出土遺物 (1/6) ……………	95	第176図	土坑94 (1/30) ……………	139
第124図	杭列2出土遺物① (1/6) ……………	96	第177図	土坑95 (1/30) ……………	139
第125図	杭列2出土遺物② (1/6) ……………	97	第178図	土坑96 (1/30) ……………	140
第126図	弥生時代中期遺構全体図 (1/1,000) ……………	99	第179図	土坑97 (1/30) ……………	140
第127図	弥生時代中期遺構配置図 (1/400) ……………	101	第180図	土坑98 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	140
第128図	竪穴住居1 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……………	103	第181図	土坑99 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	141
第129図	土坑69 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……………	104	第182図	土坑99出土遺物② (1/2・1/4) ……………	142
第130図	土坑70 (1/30) ……………	105	第183図	土坑100 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	142
第131図	土坑70出土遺物① (1/4) ……………	106	第184図	土坑100出土遺物② (1/4) ……………	143
第132図	土坑70出土遺物② (1/4) ……………	107	第185図	土坑101 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	143
第133図	土坑70出土遺物③ (1/3・1/4) ……………	108	第186図	土坑102 (1/30) ……………	144
第134図	土坑71 (1/30)・出土遺物① (1/2・1/4) ……	109	第187図	土坑103 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	144
第135図	土坑71出土遺物② (1/4) ……………	110	第188図	土坑103出土遺物② (1/4) ……………	145
第136図	土坑71出土遺物③ (1/4) ……………	111	第189図	土坑104 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4) ……	146
第137図	土坑72 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……	112	第190図	土坑105 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	146
第138図	土坑73 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	112	第191図	土坑106 (1/30) ……………	147
第139図	土坑74 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	113	第192図	土坑107 (1/30) ……………	147
第140図	土坑75 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……	114	第193図	土坑108 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	147
第141図	土坑76 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	115	第194図	土坑109 (1/30) ……………	147
第142図	土坑77 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4) ……	116	第195図	土坑109出土遺物 (1/4) ……………	148
第143図	土坑78 (1/30) ……………	117	第196図	土坑110 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	148
第144図	土坑79 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……	117	第197図	土坑111 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	149
第145図	土坑80 (1/30) ……………	117	第198図	土坑112 (1/30) ……………	150
第146図	土坑81・82 (1/30) ・土坑81・82出土遺物 (1/3・1/4) ……	118	第199図	土坑113 (1/30) ……………	150
第147図	土坑83 (1/30) ……………	118	第200図	土坑113出土遺物 (1/4) ……………	151
第148図	土坑83出土遺物 (1/4) ……………	119	第201図	土坑114 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	151
第149図	土坑84 (1/30) ……………	119	第202図	製塩炉1・製塩炉2 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	152
第150図	土坑84出土遺物 (1/2・1/4) ……………	120	第203図	溝16 (1/30) ……………	152
第151図	土坑85 (1/30) ……………	120	第204図	溝17 (1/30) ……………	152
第152図	土坑85出土遺物 (1/4) ……………	121	第205図	溝18 (1/30) ……………	152
			第206図	溝19 (1/30) ……………	153

第207図	溝20 (1/30) ……………	153	第260図	土坑117 (1/30) ……………	193
第208図	溝21～溝28位置図 (1/200) ……………	153	第261図	土坑118 (1/30) ……………	193
第209図	溝21～溝28 (1/30) ・溝21・24・25出土遺物 (1/4) ……………	154	第262図	土坑119 (1/30) ……………	193
第210図	溝29 (1/30) ……………	155	第263図	土坑120 (1/30) ……………	193
第211図	溝30 (1/30) ……………	155	第264図	土坑121 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	194
第212図	溝31・32 (1/30) ……………	155	第265図	土坑122 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	194
第213図	溝33 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4) ……	156	第266図	溝44～54位置図 (1/200) ……………	195
第214図	溝34～38 (1/30)・溝34出土遺物 (1/4) ……	157	第267図	溝44 (1/30) ……………	195
第215図	溝39～溝42 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	157	第268図	溝45 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	195
第216図	溝43 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	157	第269図	溝46 (1/30) ……………	196
第217図	土器溜まり2 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……	158	第270図	溝47・48 (1/30) ……………	196
第218図	土器溜まり2出土遺物② (1/4) ……………	159	第271図	溝49・50 (1/30)・溝49出土遺物 (1/4) ……	196
第219図	土器溜まり3 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	159	第272図	溝51～53 (1/30)・溝51出土遺物 (1/4) ……	197
第220図	柱穴出土遺物 (1/4) ……………	160	第273図	溝54 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	197
第221図	島状高まり1 (1/60) ……………	160	第274図	溝55 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	197
第222図	洪水砂埋没遺構全体図 (1/1,000) ……………	161	第275図	溝56 (1/30) ……………	197
第223図	洪水砂埋没遺構配置図 (1/400) ……………	163	第276図	溝57 (1/30) ……………	198
第224図	水田4 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	165	第277図	溝58～60 (1/30)・溝58・60出土遺物 (1/4) ……	198
第225図	水田5 (1/30) ……………	165	第278図	溝61 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	199
第226図	水田5出土遺物 (1/2) ……………	166	第279図	溝62 (1/30) ……………	199
第227図	水田6出土遺物 (1/4) ……………	166	第280図	溝63 (1/30) ……………	199
第228図	水田6・7 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	166	第281図	溝64 (1/30) ……………	199
第229図	水田7稲株痕跡 (1/80) ……………	167	第282図	溝65 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	199
第230図	水田7稲株痕跡断面 (1/10) ……………	168	第283図	溝66 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	199
第231図	稲株痕跡集中検出場所 (1/2,000) ……………	168	第284図	下がり2出土遺物 (1/3・1/4) ……………	200
第232図	水田7 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……	169	第285図	下がり3出土遺物 (1/4) ……………	201
第233図	水路1 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4) ……	170	第286図	昭和52年に残存した条里地割と調査区 (1/2,000) ……………	202
第234図	水路2 (1/30) ……………	170	第287図	中世以降遺構全体図 (1/1,000) ……………	203
第235図	島状高まり2 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……	170	第288図	中世以降遺構配置図 (1/400) ……………	205
第236図	島状高まり3 (1/40)・出土遺物 (1/4) ……	171	第289図	溝67 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	207
第237図	島状高まり3と下層溝 (1/300) ……………	172	第290図	溝68・69 (1/30) ……………	207
第238図	水路3 (1/30) ……………	173	第291図	包含層出土遺物① (1/4) ……………	208
第239図	水田8 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	173	第292図	包含層出土遺物② (1/4) ……………	209
第240図	古墳時代全体図 (1/1,000) ……………	175	第293図	包含層出土遺物③ (1/2・1/3) ……………	210
第241図	古墳時代遺構配置図 (1/400) ……………	177	第294図	調査区位置図 (1/3,000) ……………	212
第242図	竪穴住居4・5 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	179	第295図	基本層序 (1/60) ……………	213
第243図	竪穴住居6 (1/30・1/60) ……………	180	第296図	低位部トレンチ断面 (1/80) ……………	214
第244図	竪穴住居6出土遺物 (1/3・1/4) ……	181	第297図	縄文時代遺構全体図 (1/1,500) ……………	215
第245図	竪穴住居7 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	182	第298図	縄文時代遺構配置図 (1/400) ……………	215
第246図	竪穴住居8 (1/60) ……………	182	第299図	炉1 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4) ……	217
第247図	竪穴住居9 (1/30・1/60)・出土遺物 (1/3・1/4) ……………	183	第300図	土坑1 (1/30) ……………	218
第248図	竪穴住居10 (1/30・1/60) ……………	184	第301図	土坑1出土遺物 (1/4) ……………	219
第249図	竪穴住居10出土遺物 (1/4) ……………	185	第302図	土坑2 (1/30) ……………	219
第250図	井戸3 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	186	第303図	土坑3 (1/30) ……………	219
第251図	井戸4 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	187	第304図	土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……	220
第252図	井戸5 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4) ……	188	第305図	土坑5 (1/30) ……………	220
第253図	井戸6 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……	189	第306図	土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……	220
第254図	井戸6出土遺物② (1/4) ……………	190	第307図	土坑7 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	220
第255図	井戸7 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4) ……	190	第308図	土坑8 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	221
第256図	井戸8 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	191	第309図	土坑9 (1/30) ……………	221
第257図	井戸9 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	192	第310図	土坑10 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……	221
第258図	土坑115 (1/30) ……………	193	第311図	土坑11 (1/30) ……………	222
第259図	土坑116 (1/30) ……………	193	第312図	土坑12 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……	222
			第313図	土坑13 (1/30) ……………	222

第314図	土坑14 (1/30)・出土遺物 (1/4)	223	第367図	土坑64 (1/30)	242
第315図	土坑15 (1/60)	223	第368図	土坑65 (1/30)	243
第316図	土坑16 (1/30)	224	第369図	土坑66 (1/30)	243
第317図	土坑17 (1/30)	224	第370図	土坑67 (1/30)	243
第318図	土坑17出土遺物 (1/4)	225	第371図	土坑68 (1/30)	243
第319図	土坑18 (1/30)	225	第372図	土坑69 (1/30)	243
第320図	土坑19 (1/30)	225	第373図	土坑70・71 (1/30)	244
第321図	土坑20 (1/30)	225	第374図	土坑72 (1/30)	244
第322図	弥生時代前期遺構全体図 (1/1,500)	227	第375図	土坑73 (1/30)	244
第323図	弥生時代前期遺構配置図 ・土坑部分図 (1/300)	229	第376図	土坑74 (1/30)	244
第324図	竪穴住居1 (1/60)・中央穴 (1/30) ・出土遺物 (1/4)	231	第377図	土坑75 (1/30)	245
第325図	竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4)	232	第378図	土坑76 (1/30)	245
第326図	土坑21 (1/30)	233	第379図	土坑77・78 (1/30)	245
第327図	土坑22・23 (1/30)	233	第380図	土坑79・80 (1/30)	245
第328図	土坑24 (1/30)	233	第381図	環濠断面位置・遺物出土地区 (1/1,000)	246
第329図	土坑25 (1/30)	234	第382図	環濠西部断面 (1/30)	247
第330図	土坑26 (1/30)	234	第383図	環濠西部出土遺物 (1/2・1/3・1/4)	248
第331図	土坑27 (1/30)	234	第384図	環濠東部断面 (1/30)	249
第332図	土坑28 (1/30)	234	第385図	環濠東部出土遺物① (1/4)	250
第333図	土坑29・30 (1/30)	234	第386図	環濠東部出土遺物② (1/2・1/3・1/4)	251
第334図	土坑31 (1/30)	235	第387図	溝1 (1/30)	252
第335図	土坑32 (1/30)	235	第388図	溝2 (1/30)	252
第336図	土坑33 (1/30)・出土遺物 (1/4)	235	第389図	溝3 (1/30)	252
第337図	土坑34 (1/30)	236	第390図	溝4・5 (1/30)	252
第338図	土坑35 (1/30)	236	第391図	溝6～8 (1/30)・出土遺物 (1/4)	253
第339図	土坑36 (1/30)	236	第392図	溝9 (1/30)・出土遺物 (1/2)	253
第340図	土坑37 (1/30)	236	第393図	溝10 (1/30)	253
第341図	土坑38 (1/30)	236	第394図	溝11 (1/30)・出土遺物 (1/2)	253
第342図	土坑39 (1/30)	237	第395図	溝12 (1/30)	253
第343図	土坑40 (1/30)	237	第396図	円形周溝墓1・円形周溝2位置 (1/200)	254
第344図	土坑41 (1/30)	237	第397図	弥生時代中期遺構全体図 (1/1,500)	255
第345図	土坑42 (1/30)	238	第398図	弥生時代中期遺構配置図 (1/500)	255
第346図	土坑43 (1/30)	238	第399図	円形周溝墓1 (1/60)	257
第347図	土坑44 (1/30)	238	第400図	円形周溝墓1土層断面 (1/30)	258
第348図	土坑45 (1/30)	238	第401図	木棺小口痕跡 (1/20)	258
第349図	土坑46 (1/30)	238	第402図	周溝内遺物出土状況 (1/10)	258
第350図	土坑47 (1/30)	239	第403図	周溝内土坑及び出土状況 (1/20)	259
第351図	土坑48 (1/30)	239	第404図	円形周溝墓1出土遺物 (1/2・1/4)	260
第352図	土坑49 (1/30)	239	第405図	土坑81 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)	260
第353図	土坑50 (1/30)	239	第406図	水田1 (1/300)・畦畔断面図 (1/30)	261
第354図	土坑51 (1/30)	240	第407図	弥生時代後期遺構全体図 (1/1,500)	263
第355図	土坑52 (1/30)	240	第408図	弥生時代後期遺構配置図 (1/500)	263
第356図	土坑53 (1/30)	240	第409図	井戸1 (1/30)・出土遺物① (1/4)	265
第357図	土坑54 (1/30)	240	第410図	井戸1出土遺物② (1/3・1/4)	266
第358図	土坑55 (1/30)	240	第411図	井戸2 (1/30)・出土遺物 (1/4)	267
第359図	土坑56 (1/30)	241	第412図	井戸3 (1/30)	268
第360図	土坑57 (1/30)	241	第413図	井戸3井戸枠 (1/4)	269
第361図	土坑58 (1/30)	241	第414図	井戸枠内堆積過程 (1/40)・出土遺物 (1/4)	270
第362図	土坑59 (1/30)	241	第415図	井戸3出土遺物① (1/4)	270
第363図	土坑60 (1/30)・出土遺物 (1/4)	241	第416図	井戸3出土遺物② (1/4)	271
第364図	土坑61 (1/30)	242	第417図	井戸4 (1/30)・出土遺物① (1/4)	272
第365図	土坑62 (1/30)	242	第418図	井戸4出土遺物② (1/4)	273
第366図	土坑63 (1/30)	242	第419図	土坑82 (1/30)・出土遺物 (1/4)	274
			第420図	土坑83 (1/30)	274
			第421図	土坑83出土遺物 (1/4)	275

第422図	溝13 (1/30) ……………	276	第459図	井戸10出土遺物② (1/4) ……………	306
第423図	溝14 (1/30) ……………	276	第460図	土坑84 (1/30) ……………	307
第424図	溝15 (1/30) ……………	276	第461図	土坑85 (1/30) ……………	307
第425図	溝16～20 (1/30)・出土遺物 (1/2) ……………	276	第462図	土坑86 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	307
第426図	溝21・22 (1/30) ……………	276	第463図	土坑87 (1/60) ……………	307
第427図	弥生時代後期水田全体図 (1/1,500) ……………	277	第464図	溝23北西部 (1/60)・周辺出土遺物 (1/4) ……	308
第428図	弥生時代後期水田全配置図 (1/400) ……………	279	第465図	溝23南東部・溝24 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	309
第429図	水田2 (1/300)・大畦畔平面 (1/30) ・出土遺物 (1/4) ……………	280	第466図	溝25～28 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	310
第430図	水田3 (1/300)・土層断面 (1/30・1/60) ……	281	第467図	溝29 (1/30) ……………	310
第431図	古墳時代～古代遺構全体図 (1/1,500) ……………	283	第468図	溝30 (1/30) ……………	310
第432図	古墳時代～古代遺構配置図 (1/500) ……………	283	第469図	溝31 (1/30)・出土遺物 (1/1) ……………	311
第433図	竪穴住居3 (1/60) ……………	285	第470図	溝32 (1/30) ……………	311
第434図	竪穴住居4・5 (1/60) ……………	286	第471図	溝33 (1/30) ……………	311
第435図	竪穴住居4出土遺物 (1/3・1/4) ……………	287	第472図	下がり1出土遺物 (1/4) ……………	311
第436図	竪穴住居6 (1/60) ……………	287	第473図	中世以降遺構全体図 (1/1,500) ……………	313
第437図	竪穴住居7 (1/60) ……………	288	第474図	中世以降遺構配置図 (1/500) ……………	313
第438図	竪穴住居7石敷土坑 (1/30) ……………	289	第475図	土坑88 (1/30) ……………	315
第439図	竪穴住居7出土遺物 (1/4) ……………	289	第476図	溝34 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	315
第440図	竪穴住居8 (1/60)・出土遺物 (1/3・1/4) ……	290	第477図	包含層出土遺物① (1/4) ……………	316
第441図	竪穴住居9 (1/60) ……………	291	第478図	包含層出土遺物② (1/4) ……………	317
第442図	竪穴住居10 (1/60)・出土遺物 (1/4) ……	291	第479図	包含層出土遺物③ (1/2・1/3) ……………	318
第443図	掘立柱建物1 (1/60) ……………	292	第480図	花粉化石群集 ……………	321
第444図	掘立柱建物2 (1/60) ……………	293	第481図	植物珪酸体の産状 ……………	324
第445図	掘立柱建物3 (1/60) ……………	294	第482図	百間川原尾島遺跡の暦年較正結果① ……	329
第446図	掘立柱建物4 (1/60) ……………	295	第483図	百間川原尾島遺跡の暦年較正結果② ……	329
第447図	柱穴列1 (1/60) ……………	296	第484図	竪穴住居内出土土器と粘土塊の胎土比較① ……	331
第448図	柱穴列2 (1/60) ……………	296	第485図	竪穴住居内出土土器と粘土塊の胎土比較② ……	331
第449図	井戸5 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	297	第486図	百間川沢田遺跡の暦年較正結果 ……………	336
第450図	井戸5出土遺物② (1/4) ……………	298	第487図	百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の微高地 (1/5,000) ……………	337
第451図	井戸6 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	298	第488図	百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の 弥生前期～中期変遷 (1/5,000) ……………	343
第452図	井戸6出土遺物② (1/3・1/4) ……………	299	第489図	百間川原尾島遺跡の微高地における 弥生時代前期～中期の遺構 (1/1,000) ……	343
第453図	井戸7 (1/30)・出土遺物 (1/4) ……………	300	第490図	百間川沢田遺跡の古墳・古代集落 (1/1,500・1/3,000) ……………	346
第454図	井戸8 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	301	第491図	岡山近隣の周溝墓 (1/500) ……………	355
第455図	井戸8出土遺物② (1/4) ……………	302			
第456図	井戸9 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……………	303			
第457図	井戸9出土遺物② (1/4) ……………	304			
第458図	井戸10 (1/30)・出土遺物① (1/4) ……	305			

表 目 次

表1	百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡調査一覧 ……	6	表14	中世集落の消長 (県南部) ……………	349
表2	文化財保護法に基づく提出書類 ……………	9	表15	百間川沢田遺跡の墓坑幅 ……………	355
表3	旭川放水路改修工事に伴う発掘調査報告書一覧 ……	13	表16	岡山近隣の円形周溝墓面積 ……………	355
表4	分析試料 ……………	319	表17	岡山県内の弥生時代の方形土坑 ……………	358
表5	花粉分析結果 ……………	320	表18	百間川原尾島遺跡竪穴住居一覧表 ……………	362
表6	分析試料 ……………	323	表19	百間川原尾島遺跡井戸一覧表 ……………	362
表7	植物珪酸体分析結果 ……………	324	表20	百間川原尾島遺跡土坑一覧表 ……………	362
表8	百間川原尾島遺跡の放射性炭素年代測定結果 ……	328	表21	百間川原尾島遺跡溝一覧表 ……………	364
表9	百間川原尾島遺跡出土遺物の胎土分析結果 ……	331	表22	百間川原尾島遺跡土器一覧表 ……………	365
表10	花粉分析結果 ……………	332	表23	百間川原尾島遺跡石器・石製品一覧表 ……	374
表11	百間川沢田遺跡の放射線炭素年代測定結果 ……	336	表24	百間川原尾島遺跡土製品一覧表 ……………	376
表12	百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の 主要遺構数 ……………	341	表25	百間川原尾島遺跡金属器・金属製品一覧表 ……	376
表13	百間川各遺跡の主要遺構数 ……………	345	表26	百間川原尾島遺跡木器・木製品一覧表 ……	376
			表27	百間川原尾島遺跡ガラス製品一覧表 ……	376

表28	百間川沢田遺跡竪穴住居一覧表	377
表29	百間川沢田遺跡掘立柱建物一覧表	377
表30	百間川沢田遺跡柱穴列一覧表	377
表31	百間川沢田遺跡井戸一覧表	377
表32	百間川沢田遺跡墓一覧表	378
表33	百間川沢田遺跡土坑・炉一覧表	378
表34	百間川沢田遺跡環濠・溝一覧表	379

表35	百間川沢田遺跡土器一覧表	380
表36	百間川沢田遺跡石器・石製品一覧表	383
表37	百間川沢田遺跡土製品一覧表	384
表38	百間川沢田遺跡金属器一覧表	384
表39	百間川沢田遺跡木製品一覧表	384
表40	百間川沢田遺跡ガラス製品一覧表	384
表41	新旧遺構名称対照表	385

写真目次

写真1	埋蔵文化財保護対策委員会 〈百間川原尾島遺跡〉	10
写真2	弥生時代水田層層序 (南西から)	18
写真3	土坑1 出土ドングリ	20
写真4	土坑4 (南から)	29
写真5	土坑9 (北西から)	34
写真6	土坑10〈26〉	35
写真7	土坑22石包丁出土状況 (南から)	45
写真8	土坑65石包丁出土状況 (北東から)	63
写真9	柱穴15〈256〉	84
写真10	柱穴17〈261〉	84
写真11	旧河道 (北東から)	86
写真12	杭列1 (北から)	91
写真13	杭列1 南北方向断面 (西から)	91
写真14	筵状編み物検出状況 (北から)	92
写真15	筵状編み物断面状況 (南から)	92
写真16	筵状編み物部分、保存処理後 (表裏)	92
写真17	杭列1 埋土 (西から)	93
写真18	杭列2 基礎部 (南から)	93
写真19	杭列1 遺物出土状況 (北から)	94
写真20	弥生時代前期～中期遺構面 (南から)	98
写真21	溝11・14 (南西から)	98
写真22	土坑70〈289〉	106
写真23	土坑70〈293〉	107
写真24	土坑70〈297〉	107
写真25	土坑71〈308〉	109
写真26	土坑71〈309〉	110
写真27	土坑71〈314〉	111
写真28	土坑75〈左から: 331・332・333〉	114
写真29	土坑76 (西から)	115
写真30	土坑77 (西から)	116
写真31	土坑84〈348〉	120
写真32	土坑85 (南東から)	120
写真33	土坑89〈362〉	123
写真34	溝21～28 (南西から)	128

写真35	弥生時代後期水田 (水田7) (東から)	128
写真36	竪穴住居3 (南から)	134
写真37	竪穴住居3 (北東から)	134
写真38	土坑111 (南から)	149
写真39	土坑113 (南から)	150
写真40	稲株痕跡検出状況 (東から)	168
写真41	水路1・2 (南西から)	170
写真42	竪穴住居6 周辺検出状況 (北西から)	174
写真43	竪穴住居6 内石敷 (北西から)	174
写真44	竪穴住居7・8 (南西から)	182
〈百間川沢田遺跡〉		
写真45	土坑1 炭・焼土出土状況 (南から)	218
写真46	土坑15焼土出土状況 (西から)	223
写真47	環濠断面 (南西から)	226
写真48	環濠内遺物出土状況 (南から)	226
写真49	竪穴住居1 (南から)	231
写真50	竪穴住居1 中央穴断面 (南東から)	231
写真51	水田1 土層断面 (南西から)	261
写真52	土坑83 (北西から)	262
写真53	溝14～20 (南西から)	262
写真54	井戸枠内土器出土状況 (南西から)	270
写真55	掘立柱建物4 布掘り掘り方 (西から)	282
写真56	井戸5 (西から)	282
写真57	竪穴住居9 (南西から)	291
写真58	土坑87 (南から)	307
写真59	溝23北西部 (南東から)	308
写真60	溝34 (北から)	312
写真61	近世遺構面 (北東から)	312
写真62	土坑88 (東から)	315
写真63	花粉化石	322
写真64	植物珪酸体	326
写真65	花粉分析プレパラート状況	334
写真66	足守川左岸堤防の土層断面	350
写真67	ヘラ描き沈線文と櫛描き沈線文を併用した土器	360

図版目次

〈百間川原尾島遺跡〉		
巻頭図版1	1 縄文時代晩期貯蔵穴 (土坑1) (北から)	
	2 溝12 (東から)	
巻頭図版2	1 土坑70 (南から)	
	2 製塩炉1・2 (北東から)	
巻頭図版3	1 弥生時代後期水田 (水田5～7) (東から)	
	2 弥生時代前・中・後期水田土層断面 (南西から)	

	3 弥生時代後期水田稲株痕跡 (西から)	
巻頭図版4	1 溝12出土土器	
	2 粘土帯土器〈93〉	
	3 松菊里型模倣土器〈98〉	
〈百間川沢田遺跡〉		
巻頭図版5	遺跡遠景 (南西から)	
巻頭図版6	1 環濠集落北西部 (西から)	

- 2 環濠断面（西から）
- 巻頭図版7 1 円形周溝墓1（北から）
2 掘立柱建物1（北東から）
- 巻頭図版8 円形周溝墓1出土土器
- 〈百間川原尾島遺跡〉**
- 図版1 1 縄文時代晩期貯蔵穴（土坑1）（北から）
2 弥生時代前期水田（水田1）（北西から）
- 図版2 1 土坑6（南から）
2 土坑12・13（東から）
3 土坑15（南から）
- 図版3 1 土坑25（北から）
2 土坑26（南から）
3 土坑27（南から）
- 図版4 1 土坑5（西から）
2 土坑56土器117出土状況（南から）
3 溝12（東から）
- 図版5 1 旧河道と杭列1（北から）
2 杭列1（東から）
3 杭列1（北から）
- 図版6 1 弥生時代中期水田（水田2）（北西から）
2 弥生時代中期水田（水田3）（北西から）
- 図版7 1 竪穴住居1（北東から）
2 土坑69（南から）
3 土坑75（東から）
- 図版8 1 土坑83（南西から）
2 土坑85（南東から）
3 溝14（北から）
- 図版9 1 弥生時代後期水田（水田4・5）（北西から）
2 弥生時代後期水田（水田8）（西から）
- 図版10 1 溝21～28（西から）
2 溝34～38（西から）
3 溝19・島状高まり2（北から）
- 図版11 1 水路1・2（東から）
2 島状高まり2（北から）
3 水田7微高地取り付き部（西から）
- 図版12 1 竪穴住居2（北西から）
2 竪穴住居3（北東から）
3 土器棺1（北東から）
- 図版13 1 井戸1（北東から）
2 井戸2（東から）
3 土坑99（東から）
- 図版14 1 土坑100（南西から）
2 土坑103（北から）
3 溝31・32（西から）
- 図版15 1 古墳時代前期竪穴住居（住7～10）（北から）
2 竪穴住居6（北西から）
- 図版16 1 竪穴住居9（東から）
2 竪穴住居10（南西から）
3 井戸3（北から）
- 図版17 1 井戸4（南東から）
2 井戸7（南から）
3 井戸5 上面礫検出状況（西から）
4 井戸5 粘土検出状況（南東から）
- 図版18 1 溝48・49（北から）

- 2 溝65・66（南西から）
3 下がり3（南西から）
- 図版19 1 中世以降水田区画（南東から）
2 溝67（南から）
3 溝68・69（西から）
- 図版20 土坑5・10・23・35・40・溝7出土土器
- 図版21 土坑56出土土器、溝12出土土器①
- 図版22 溝12出土土器②、土器溜まり1・旧河道出土土器
- 図版23 杭列1・土坑76・85・竪穴住居3出土土器
- 図版24 土坑99・100・製塩炉1・2出土土器
- 図版25 島状高まり3・竪穴住居6・9・10・井戸3出土土器
- 図版26 井戸6・8・9・土坑122・下がり2・3・包含層出土土器
- 図版27 石器・石製品
- 図版28 木器・木製品
- 図版29 木製品・金属製品・土製品・ガラス製品
- 〈百間川沢田遺跡〉**
- 図版30 1 炉1（北西から）
2 土坑1（東から）
3 土坑15（南西から）
- 図版31 1 弥生時代遺構全景（東から）
2 竪穴住居2（南から）
3 環濠西部断面（西から）
- 図版32 1 円形周溝墓1周溝底土器出土状況（南から）
2 円形周溝墓1周溝内土坑（南から）
- 図版33 1 井戸3上層（南から）
2 井戸枠・礎盤（北西から）
3 井戸枠内礫敷き（南から）
- 図版34 1 水田3（南西から）
2 溝16～20（北から）
- 図版35 1 古墳時代全景（東から）
2 竪穴住居7（北から）
3 竪穴住居7石敷き土坑（南東から）
4 竪穴住居7焼土面（南から）
- 図版36 1 掘立柱建物1・2、柱穴列1（東から）
2 井戸9（南西から）
- 図版37 1 溝23南東部（南東から）
2 溝34（北から）
3 溝34断面（南から）
- 図版38 竪穴住居2・炉1
・土坑1・7・8・14・17・33出土土器
- 図版39 土坑60出土土器、環濠西部・環濠東部出土土器①
- 図版40 環濠西部・環濠東部出土土器②、
円形周溝墓1出土土器
- 図版41 井戸3・4出土土器
- 図版42 井戸5出土土器、井戸7出土土器①
- 図版43 井戸7出土土器②、井戸8出土土器、
井戸9出土土器①
- 図版44 井戸9出土土器②、井戸10出土土器
- 図版45 溝23周辺・包含層出土土器
- 図版46 石器①
- 図版47 石器②・金属器
- 図版48 井戸3井戸枠

第1章 地理的・歴史的環境

百間川は、岡山城下を洪水から守るため、江戸時代初めの寛文9（1669）年から貞享4（1687）年にかけて旭川の放水路として造られた人工の河川である。その流程は約7～8km（現在は13km）に及び、旭川東岸に形成された沖積平野である旭東平野の南端に位置する。百間川遺跡群は、この百間川の河床下に存在する縄文時代から近世にかけての複合遺跡群であり、上流から百間川二の荒手遺跡、百間川原尾島遺跡、百間川沢田遺跡、百間川兼基・今谷遺跡及び百間川米田遺跡の6遺跡からなる。

中国山地に源を發し瀬戸内海に注ぐ旭川は土砂を運び、河口付近に沖積平野を形成した。現在でもいくつかの旧河道の痕跡が認められ、かつての旭川が大小に枝分かれしていたことをうかがわせる。旧河道の長年の堆積作用により形成された旭東平野は、西を旭川、北を龍の口山丘陵、東を芥子山及び山王山丘陵、さらに南を操山丘陵によって囲まれた、まとまりをもった地域である。

旧石器時代 旭東平野における旧石器時代の遺物はほとんど知られていないが、操山丘陵の旗振台古墳北部遺跡でナイフ形石器が採集されている⁽¹⁾。

縄文時代 遺構・遺物が増加するのは後期になってからである。百間川原尾島遺跡では微高地上で後期後葉の焼土面と土器溜まりが、百間川沢田遺跡で後期中葉の多くの土器や石器とともに貯蔵穴や炉床・貝塚が見ついている。晩期になるとさらに遺跡数が増加し、百間川遺跡群全体と雄町遺跡⁽²⁾で遺物が出土している。中でも百間川沢田遺跡では晩期後半の土器とともに石鍬や太形蛤刃石斧・石包丁状石器が見つかり、これらの遺物から農耕を行っていた可能性が指摘されている。

弥生時代 弥生時代前期の遺構は、百間川原尾島遺跡、百間川沢田遺跡、百間川米田遺跡などで確認されている。百間川沢田遺跡の微高地上では、南北約95m、東西90mの楕円形と推定される前期中頃の環濠が見つかり、その内部で竪穴住居7軒が検出された。また、旧河道を挟む東側には、土坑墓と木棺墓で構成される前期末～中期初頭の墓域があり、同様の墓域が百間川沢田（市道）遺跡でも確認されている⁽³⁾。環濠内の円形周溝墓は、環濠集落廃絶後に作られたことが確認された。前期の水田は百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡で検出され、いずれも微高地上の凹部か縁部に立地し、畦畔による水田区画が長方形を呈するなど、地形に規制された様子がうかがえる。

中期の遺跡は、百間川遺跡群、雄町遺跡、赤田遺跡⁽⁴⁾、乙多見遺跡⁽⁵⁾などが知られる。百間川兼基・今谷遺跡の中期中葉の掘立柱建物群の周辺からはガラス滓を多く出土し、単なる集落遺跡とは性格を異にするといえる。操山丘陵の谷部に立地する兼本鳥坂遺跡からは3個の銅鐸が出土している⁽⁶⁾。雄町遺跡からも銅鐸が出土しており⁽⁷⁾、銅鐸を保有する拠点的な集落であったと考えられる。中期の水田は百間川原尾島遺跡、百間川沢田遺跡及び百間川兼基・今谷遺跡で検出し、前期の水田と重複して検出した例も多い。



第1図 遺跡位置 (1/2,000,000)

後期の遺跡数は飛躍的に増加し、加えて集落規模の拡大化が顕著となる。百間川遺跡群では、百間川原尾島遺跡が拠点的な集落と考えられ、また百間川遺跡群では後期末の洪水によって堆積した砂によって集落や水田が覆われ、当時の景観を復元するのに良好な遺跡である。弥生墳丘墓には唐人塚東弥生墳丘墓⁽⁸⁾が知られているのみである。百間川米田遺跡や備前国府推定地(南国長)遺跡⁽⁹⁾といった平地部の調査で特殊器台が散見されている。



- | | | | |
|-------------------|--------------|--------------|------------|
| 1 百間川原尾島遺跡 | 2 百間川沢田遺跡 | 5 中島城跡 | 6 唐人塚古墳 |
| 3 百間川兼基・今谷遺跡 | 4 百間川米田遺跡 | 9 備前車塚古墳 | 10 居都廃寺 |
| 7 賞田廃寺 | 8 浄土寺 | 13 北口遺跡 | 14 成光廃寺 |
| 11 宍甘山王山古墳 | 12 備前国庁跡 | 17 中井・南三反田遺跡 | 18 雄町遺跡 |
| 15 備前国府推定地(南国長)遺跡 | 16 ハガ遺跡 | 21 幡多廃寺 | 22 赤田遺跡 |
| 19 乙多見遺跡 | 20 原尾島遺跡 | 25 網浜茶白山古墳 | 26 操山109号墳 |
| 23 赤田東遺跡 | 24 網浜廃寺 | 29 金蔵山古墳 | 30 沢田大塚古墳 |
| 27 湊茶白山古墳 | 28 旗振台古墳北部遺跡 | 33 正木城跡 | 34 妙見山城跡 |
| 31 明禪寺城跡 | 32 兼基島坂遺跡 | | |

※本章における遺跡名称は既刊報告書による。最新の遺跡名称については、岡山県GISを参照されたい。

第2図 百間川周辺遺跡分布 (1/50,000)

古墳時代 古墳時代の集落は、百間川遺跡群をはじめ雄町遺跡、赤田東遺跡⁽¹⁰⁾、原尾島遺跡⁽¹¹⁾などの遺跡が弥生時代の集落に引き続いて営まれる。原尾島遺跡で中期末に白玉の生産が、原尾島遺跡と北口遺跡⁽¹²⁾で7世紀前半に製鉄関連作業が、北口遺跡では土師器生産も行われ、手工業生産を行っている状況が明らかになってきた。百間川兼基・今谷遺跡では、5世紀前半代に、竪穴住居とそれを上回る数の総柱建物で構成される集落が見つかり、この集落を貫く大溝が、集落と消長をほぼ同じくしていることから、遺跡南側の丘陵上に位置する金蔵山古墳⁽¹³⁾を造営するための物資を運搬する運河と考えられている。さらに集落については、古墳造営のキャンプ的機能を部分的に担っていたとする指摘もある⁽¹⁴⁾。百間川原尾島遺跡や赤田東遺跡では、7世紀代にそれまでの竪穴住居から掘立柱建物主体へと集落構造の変化が認められる。

この平野をとりまく丘陵上には数多くの古墳が築造され、平野の北側の龍の口丘陵には、前期前半の前方後方墳である備前車塚古墳⁽¹⁵⁾、東側の山王山丘陵に穴甘山王山古墳⁽¹⁶⁾が築かれている。また、平野の南側の操山丘陵には、特殊器台形埴輪を伴う操山109号墳⁽¹⁷⁾や網浜茶臼山古墳⁽¹⁸⁾、そして継続的に湊茶臼山古墳⁽¹⁹⁾、金蔵山古墳という大形の前方後円墳が築かれる。一方、後期古墳としては龍の口古墳群や操山古墳群があり、いずれも小規模な円墳に横穴式石室を有する丘陵上の群集墳である。また、巨石を用いた大形石室を持つ唐人塚古墳⁽²⁰⁾が築造される。唐人塚古墳は後述する賞田廃寺に隣接するように築かれており、深い関連性があると考えられる。刳り抜き式石棺には、兵庫県の竜山産の凝灰岩（竜山石）が使用されている点が注目される。平野部では中井・南三反田遺跡⁽²¹⁾において、墳丘が削平され周濠のみとなった群集墳も見つかり、

古代 旭東平野北西部には備前国府があったことが想定され、備前国庁跡が県指定史跡となっているが、その実態はよく分かっていない。近年、周辺での調査が進み、ハガ遺跡⁽²²⁾で官衙関連遺跡が見つかるなど、徐々に実態が明らかとなってきているといえよう。具体的に国府の政庁の位置を成光廃寺の位置とする指摘もある⁽²²⁾。古代寺院としては賞田廃寺⁽²³⁾、成光廃寺、古都廃寺、幡多廃寺⁽¹⁴⁾及び網浜廃寺が知られており、このうち賞田・幡多両廃寺については発掘調査が行われ、いずれも盛期の奈良時代に畿内中央でも有力寺院にしか見られない凝灰岩製の壇上積基壇を採用し、賞田廃寺は二塔式伽藍であることなど、中央寺院に匹敵する内容が判明している。これらの二寺と古都廃寺は、上道郡を本貫地とする上道氏の氏寺と考えられ、この上道氏の勢力地の中心に備前国府が選地されたことは、政治的な意図があったと解釈される。周辺の国府に関連する遺跡には百間川遺跡群があり、百間川米田遺跡では、船曳き道や運河、倉庫群などが見つかり、遺物として「上三宅」墨書須恵器、「市」墨書土師器、「官」逆字押印須恵器、帯金具などの公的性格をもつものがあり、国府との位置関係からいって、国や郡が建設を行った国府津と理解できる。百間川原尾島遺跡では、平安時代初頭の大溝から墨書土器とともに人形や齋串などの木製模造品が出土し、律令的祭祀である大祓の品々の一部と考えられ、このことから遺跡周辺に備前国府の祓所が存在したと考えられる。

中世～近世 中世の集落は、百間川原尾島遺跡や百間川米田遺跡、ハガ遺跡⁽²²⁾などがある。百間川原尾島遺跡では鎌倉時代の屋敷墓に輸入陶磁器や鏡を副葬するものがあり、また、室町時代の屋敷地は溝、堀や道路で区画されていて、条里制地割による規制と考えられる。ハガ遺跡からは15世紀前後と考えられる土器焼成窯が見つかり、集落における手工業生産の一端がうかがえる。百間川米田遺跡では、中世を通しての集落とその南側に堀割（運河）が検出された。さらに、遺跡の北側を流れる河川には、長さ約1 km内の3か所に中世の橋梁3本と近世の橋梁1本が架けられていた。このうち最大と

なる中世の橋梁は全長40m、幅3m前後を測る。これらには再三の補修・改修の痕跡が認められ、長期間にわたる橋の維持・管理がなされていたことがうかがえる。このうちの一つの橋梁の基礎から東大寺瓦⁽²⁴⁾が出土していることなどから、橋梁の築造工事には、浄土寺を拠点に活躍した俊重房重源が関わっていた可能性も考えられる。以上の百間川米田遺跡の遺構群のあり方は、水上交通と陸上交通が接する要衝の地として栄えた港湾施設を想起させる。

戦国時代には大・小の山城が築かれ、永禄10（1567）年、前年に操山丘陵に築かれた明禅寺城の攻防を巡って宇喜多直家と三村元親が戦った「明禅寺崩れ」と呼ばれる当時の備前で最大の合戦が行われた際に、宇喜多直家に味方したとされる中島大炊の本拠地である中島城の比定地周辺が、近年発掘調査された⁽²⁵⁾。この調査で大規模な溝で区画された館跡が見つかり、これが中島城である可能性が強まった。この調査においては周辺で中世～近世のかけての集落とともに水田や墓域なども確認されており、長期的な変遷を追うことができる。

近世遺構としては、百間川築造に関連する遺構がある。百間川二の荒手遺跡では、洪水調整の要として設けられた越流堤とその両端の導流堤が見つまっている。一方、百間川原尾島遺跡では大規模な土取り跡が見つかり、築堤に伴うものと推定されている。

以上、本章は百間川遺跡群の既刊各報告書の第1章「地理的・歴史的環境」を参考に、一部加筆して執筆した。 (團)

註

- (1) 鎌木義昌「岡山市域の無土器時代遺跡と遺物」『岡山市史・古代編』岡山市 1962
- (2) 「雄町遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』1 岡山県教育委員会 1972
- (3) 『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1992
- (4) 『幡多廃寺発掘調査報告』岡山市教育委員会 1975
- (5) 正岡睦夫「岡山市乙多見における溝改修工事に伴う出土土器」『岡山県埋蔵文化財報告』3 1973
- (6) 鎌木義昌「岡山県兼基遺跡」『日本農耕文化の生成』1961
- (7) 高橋護「岡山市雄町遺跡の銅鐸」『考古学雑誌』第75巻第4号 1990
- (8) 宇垣匡雅「特殊器台・特殊壺」『吉備の考古学的研究』（下）1992
- (9) 「備前国府推定地（南国長）遺跡」『岡山県埋蔵文化財調査の概要1996（平成8）年度』岡山市教育委員会 1998
- (10) 『赤田東遺跡』岡山市教育委員会 2005
- (11) 「原尾島遺跡（藤原3丁目地区）」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』139 岡山県教育委員会 1999
- (12) 「北口遺跡」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999（平成11）年度』岡山市教育委員会 2001
- (13) 西谷真治・鎌木義昌『金蔵山古墳』倉敷考古館 1959
- (14) 高田浩司「吉備南部における古墳社会形成期の様相」『環瀬戸内海の考古学』下巻 古代吉備研究会 2002
- (15) 近藤義郎・鎌木義昌「備前車塚古墳」『岡山県史』第18巻 岡山県 1986
- (16) 宇垣匡雅「吉備の前期古墳Ⅱ 宍甘山王山古墳の測量調査一」『古代吉備』第10集 古代吉備研究会 1988
- (17) 宇垣匡雅「網浜茶臼山古墳・操山109号墳の測量調査一吉備の前期古墳Ⅲ一」『古代吉備』第12集 古代吉備研究会 1990
- (18) 『神宮寺山古墳 網浜茶臼山古墳』岡山市教育委員会 2007
- (19) 近藤義郎「湊茶臼山古墳」『岡山県史』第18巻 岡山県 1986
- (20) 「唐人塚古墳石室の測量調査」『岡山市埋蔵文化財調査の概要1999（平成11）年度』岡山市教育委員会 2001
- (21) 「中井・南三反田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』92 岡山県教育委員会 1994
- (22) 『ハガ遺跡』岡山市教育委員会 2004
- (23) 『史跡賞田廃寺跡』岡山市教育委員会 2005
- (24) 「史跡万富東大寺瓦窯跡」『瀬戸町埋蔵文化財発掘調査報告』1 瀬戸町教育委員会 2003
- (25) 「中島遺跡 宮南遺跡 国長遺跡 天神河原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』221 岡山県教育委員会 2009

百間川遺跡群の報告書については、第2章第5節の表3に挙げる報告書一覧を参照されたい。

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

旭川の東岸、百間川の河床下に「百間川遺跡」が所在することは早くから周知され、昭和40年度に岡山県教育委員会が発行した『岡山県遺跡地図』には、旧国道2号をはさんで百間川A遺跡と同B遺跡として記載されている。旭川対岸に所在する津島遺跡と常に対比され、その重要性を問われながらも、範囲、性格等に不明確な点が多いままであったこの遺跡に、発掘調査のメスを入れるきっかけとなったのは、江戸時代の初めに旭川の氾濫から岡山城下を護るために造られた百間川を、300年ぶりに旭川放水路として改修する計画であった。

昭和43年、改修工事計画を知った岡山県教育庁社会教育課（現文化財課）は、建設省（現国土交通省）岡山河川工事事務所に対して、工事予定地内に文化財保護法に基づく周知の遺跡である「百間川遺跡」が所在すること、昭和32年6月11日閣議了解「文化財保護に関する関係官庁間の連絡強化について」の趣旨に沿って文化財の保護に遺漏のないよう計らうことを申し入れた。

その後、昭和49年に土地買収交渉の決着を受けて始められた文化課（現文化財課）と河川工事事務所の協議は、昭和50年10月には、基本的に範囲が確定した埋蔵文化財包蔵地については発掘調査が終了した後に改修工事を施行することで合意し、昭和51年4月10日付の文化財保護法第57条の3（現第94条）に規定する事前協議通知、同年9月1日付の予備調査依頼を受けて、同年11月から、第1次調査として現在の岡山市中区竹田から海吉までの約7.5km間で115か所の確認調査に着手した。

調査の結果、原尾島・沢田・兼基の3か所に大規模な微高地が所在し、多時期にわたる遺構・遺物が重複することが明らかとなり、その面積は約14万㎡に達した。早期完成が待たれる改修工事に対応するため、幅約30mの堤防下となる約6万㎡は調査対象から除外し、発掘調査は掘削新設される幅約80mの低水路にかかる約8万㎡を約5年間で実施することとなった。

昭和52年4月、調査員7名を担当として本調査が開始された。調査の進展に伴い、微高地間の低位部で弥生時代終末期の洪水砂に埋まった水田跡が良好な状態で確認され、さらに下層には前期にさかのぼる水利施設が残るなど、量的にも質的にも想定を凌駕する「百間川遺跡」が次々とその姿を現した。このため、当初計画を見直して、最初の5年間で低水路幅80mのうちいずれかの側40mを通水できるよう調査を進め、調査員12名6班が担当した昭和56年度上半期までに必要な調査を終えた。昭和57年度以降の調査は、発掘調査担当者を半数以下に縮減しながら続けられ、工事計画の再見直しによる中断となった平成15年度末までの発掘調査面積は、207,465㎡に及んだ。報告書の刊行も昭和55年11月の第1冊以降、定期的に行われ、平成20年度末までに18冊を刊行している。

現場の中断から5年を経た平成21年4月、岡山河川事務所から文化財課へ協議があり、改修工事を再開するに当たって未調査範囲約2万㎡のうち当面約8,000㎡の発掘調査が依頼されたため、平成22～25年度の4年計画で発掘調査と報告書作成・刊行を受託することとした。

なお、残る未調査範囲について、改修工事の実施時期は全くの未定である。 (弘田)

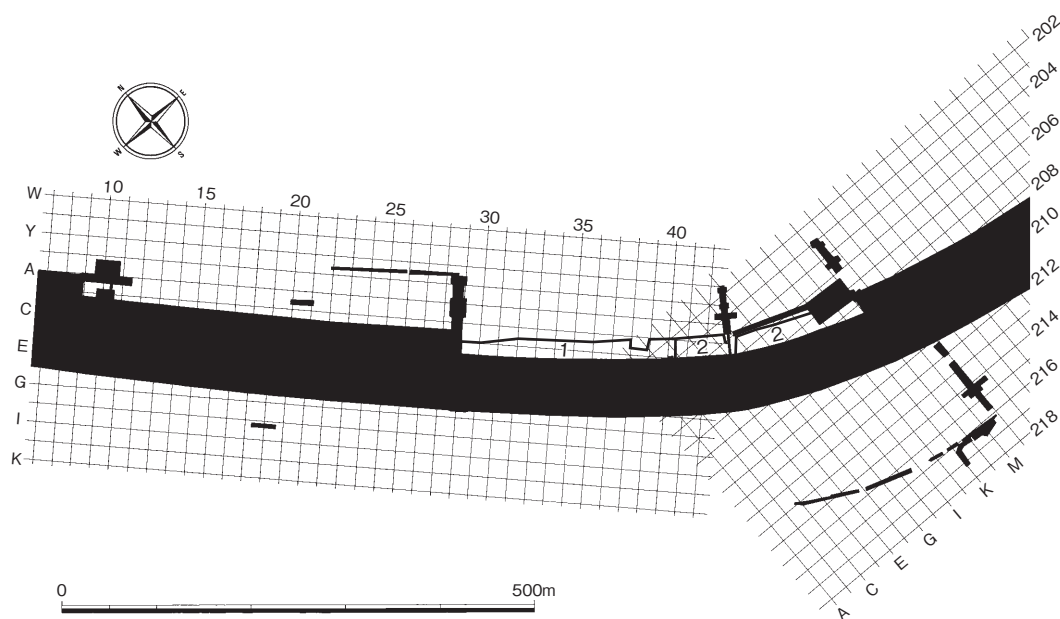
第2節 調査の経過

平成22年度は、百間川原尾島遺跡の調査を行った。当初は調査範囲の大半が低位部であり、弥生時代後期水田層の調査が主体であったが、部分的には縄文時代にさかのぼる河道や弥生時代前・中期水田も存在しており、それらの調査を行った。また、年度後半は微高地上での弥生時代前期から古墳時代前期にかけての集落に当たった。遺構密度は濃く調査は難航したものの、年度末には予定どおりに調査を終了させることができた。

平成23年度は、前年度に続き百間川原尾島遺跡微高地の調査や、微高地東側の低位部において弥生時代中・後期水田及び前期の溝群の調査を行った。8月からは、さらに下流側の百間川沢田遺跡の本体へと調査を進め、古墳時代前期の集落や弥生時代前期の環濠及びその内外において竪穴住居、土坑、円形周溝墓などを検出した。このほか、周辺の低位部では、厚さ60cmにも達する弥生時代後期末の洪水砂下の後期水田層を、さらにはその下層における前・中期の層や縄文時代とみられる河道の調査を行った。年度末にはそれらを全すべて完了し、すべての資材を文化財センターに撤収した。（弘田）

表1 百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡調査一覧

	遺跡名	調査区	調査担当者	調査期間	調査面積	遺構数	遺物数
1	百間川原尾島	29～40-B～C	亀山行雄・内藤善史 ・團奈歩	H22.4.1～H23.3.31	4,005.79	150	153
2	百間川原尾島	41～43-A～B	弘田和司・小林利晴 ・内藤善史・團奈歩	H23.4.1～H24.3.31	3,510.40	226	298
	百間川沢田	203～207-F～L					
				計	7,516.19㎡	376	451箱



第3図 設定グリッドと調査区位置 (1/8,000)

第3節 調査の体制

本発掘調査は、旭川河川改修事業に伴って国土交通省中国地方整備局と岡山県との委託契約に基づいて実施したものである。契約に係る事務は岡山県教育庁文化財課が行い、発掘調査は岡山県古代吉備文化財センター調査第二課が、調査に係る事務を同センター総務課が担当した。

岡山県教育委員会は、発掘調査の遂行にあたり、遺跡の保護・保存並びに調査・報告書作成の専門的な指導及び助言を得るため、岡山県遺跡保護調査団の推薦を受けた方々に「旭川放水路（百間川）改修に伴う埋蔵文化財保護対策委員会」の委員を委嘱し、御指導、御助言を仰いでいる。（弘田）

旭川放水路（百間川）改修に伴う埋蔵文化財保護対策委員会委員

池葉須藤樹	（元中学校校長）
稲田孝司	（岡山大学名誉教授）〈平成23年度〉
亀田修一	（岡山理科大学）
出宮徳尚	（元岡山市教育委員会）
松本直子	（岡山大学）〈平成22年度〉
山本悦世	（岡山大学）

また、発掘調査時の土壌調査については、趙 哲済氏（財団法人大阪文化財研究所）の協力を得た。記して感謝する。

平成22年度		総括副参事（総務班長）	上田 利弘
岡山県教育委員会		主 任	植木寿美子
教 育 長	門野八洲雄	主 任	越野 忍
岡山県教育庁		主 任	行守 智和
教育次長	増本 好孝	〈調査第二課〉	
文化財課		課 長	島崎 東
課 長	田村 啓介	総括副参事（第二班長）	亀山 行雄
参 事	光永 真一		（発掘調査担当）
総括副参事（埋蔵文化財班長）	宇垣 匡雅	副 参 事	内藤 善史
主 任	米田 克彦		（発掘調査担当）
主 事	一色 武	主 任	團 奈歩
岡山県古代吉備文化財センター			（発掘調査担当）
所 長	児仁井克一	平成23年度	
次 長（総務課長事務取扱）	片山 淳司	岡山県教育委員会	
参 事	中野 雅美	教 育 長	竹井 千庫
〈総務課〉		岡山県教育庁	

第2章 発掘調査および報告書作成の経緯と経過

教育次長	阿部 淳二	総括副参事（総務班長）	上田 利弘
文化財課		主 任	植木寿美子
課 長	村木 生久	主 任	行守 智和
参 事	光永 真一	〈調査第二課〉	
総括副参事（埋蔵文化財班長）	宇垣 匡雅	課 長	弘田 和司
主 任	石田 爲成		（発掘調査担当）
主 任	一色 武	総括主任（第二班長）	小林 利晴
岡山県古代吉備文化財センター			（発掘調査担当）
所 長	平井 泰男	副 参 事	内藤 善史
次 長（総務課長事務取扱）	片山 淳司		（発掘調査担当）
参 事	中野 雅美	主 任	團 奈歩
〈総務課〉			（発掘調査担当）

第4節 日誌抄

平成22年度

- 平成22年4月1日（木） 百間川原尾島遺跡1区 発掘調査開始。
- 6月24日（木） 第1回埋蔵文化財保護対策委員会開催。
- 7月9日（金） 百間川原尾島遺跡1区 弥生時代中期水田写真撮影。
- 8月9日（月） 百間川原尾島遺跡1区 弥生時代前期水田写真撮影 調査終了。
- 8月10日（火） 百間川原尾島遺跡2区 調査開始。
- 9月2日（木） 百間川原尾島遺跡2区 古墳時代遺構写真撮影。
- 10月28日（木） 第2回埋蔵文化財保護対策委員会開催。
- 11月19日（金） 百間川原尾島遺跡2区 弥生時代後期遺構写真撮影。
- 11月21日（日） 第1回現地説明会開催。
- 12月6日（月） 百間川原尾島遺跡2区 弥生時代前期遺構写真撮影。
- 12月20日（月） 百間川原尾島遺跡2区 弥生時代旧河道写真撮影 調査終了。
- 12月21日（火） 百間川原尾島遺跡3区 調査開始。
- 平成23年1月21日（金） 百間川原尾島遺跡3区 古墳時代遺構写真撮影。
- 2月3日（木） 第3回埋蔵文化財保護対策委員会開催。
- 2月26日（土） 第2回現地説明会開催。
- 3月18日（金） 百間川原尾島遺跡3区 弥生時代遺構写真撮影。
- 3月22日（火） 百間川原尾島遺跡3区 調査終了。
- 3月31日（木） 調査完了。

平成23年度

- 平成23年4月1日（金） 百間川沢田遺跡4区 調査開始。
- 5月18日（水） 百間川沢田遺跡4区 古墳時代全景写真撮影。
- 7月7日（木） 第1回埋蔵文化財保護対策委員会開催。

- 7月14日(木) 百間川沢田遺跡4区 弥生時代微高地全景写真撮影。
 7月16日(土) 第1回現地説明会開催。
 8月1日(月) 百間川沢田遺跡5区 調査開始。
 8月9日(火) 百間川沢田遺跡6区 調査開始。
 9月12日(月) 百間川沢田遺跡4区 弥生時代中期水田全景写真撮影。
 10月17日(月) 第2回埋蔵文化財保護対策委員会開催。
 10月21日(金) 百間川沢田遺跡4区 調査終了。
 11月17日(木) 百間川沢田遺跡5・6区 古墳時代全景写真撮影。
 平成24年2月6日(月) 第3回埋蔵文化財保護対策委員会開催。
 2月25日(土) 第2回現地説明会開催。
 2月28日(火) 百間川沢田遺跡5・6区 弥生時代前期微高地全景写真撮影。
 2月29日(水) 百間川沢田遺跡5・6区 航空写真撮影。
 3月16日(金) 百間川沢田遺跡5・6区 調査終了。
 3月31日(土) 調査完了。

表2 文化財保護法に基づく提出書類

平成22年度

埋蔵文化財発掘調査の報告(法第99条)

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積(m ²)	原因	報告者	担当者	期間
岡吉調 第6号 H22.4.7	集落跡・生産遺跡 (水田) 百間川原尾島遺跡	岡山市中区原 尾島地先	4,680	河川改修	岡山県古代吉備文化 財センター所長	亀山行雄・内藤善史 ・團奈歩	H22.4.1～ H23.3.31

埋蔵文化財発見の通知(法第100条第2項)

文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋 第1419号 H23.3.22	土器・陶磁器・石製品・土製品・木製 品・金属製品・ガラス製品等計整理箱 153箱	岡山市中区原尾島 百間川原尾島遺跡	H22.4.7～ H23.3.22	岡山県教育委員会 教育長 門野八洲雄	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター

平成23年度

埋蔵文化財発掘調査の報告(法第99条)

文書番号 日付	種類及び名称	所在地	面積(m ²)	原因	報告者	担当者	期間
岡吉調 第3号 H23.4.1	集落跡・水田 百間川沢田遺跡	岡山市中区 沢田地先	3,620	河川改修	岡山県古代吉備文化 財センター所長	弘田和司・小林利晴・ 内藤善史・團奈歩	H23.4.1～ H24.3.31

埋蔵文化財発見の通知(法第100条第2項)

文書番号 日付	物件名	出土地	出土年月日	発見者	土地所有者	現保管場所
教文埋 第1372号 H24.3.16	土器・陶磁器・石製品・土製品・木製 品・金属製品・ガラス製品等計整理箱 296箱	岡山市中区沢田 百間川沢田遺跡	H23.4.7～ H24.3.16	岡山県教育委員会 教育長 竹井千庫	国土交通省	岡山県古代 吉備文化財 センター

第5節 報告書の作成

1 体制と経過

遺物の整理・報告書の編集作業は、平成23年度に調査員1名（2か月）、平成24年度に調査員3名（うち2名が12か月、1名は3か月）で行ったほか、出土遺物については基礎的な整理作業としての水洗・注記作業を平成22・23年度の発掘調査と並行して実施した。

報告書作成の対象となる調査区は表1及び第3図に示すとおりであり、整理対象面積は百間川原尾島遺跡が4,764㎡、百間川沢田遺跡が2,752㎡である。百間川原尾島遺跡において整理対象とした遺構は、竪穴住居10軒、井戸10基、土坑123基、水田3面などである。出土遺物は、土器のほかに木製品・金属製品・土製品・玉類・石製品があり、整理箱の合計は320箱を数える。また、百間川沢田遺跡は遺構が、竪穴住居10軒、掘立柱建物4棟、井戸10基、土坑88基、水田2面ほかがあり、遺物は土器、木製品、金属製品、土製品、玉類及び石製品で、整理箱の合計は56箱を数えた。

整理作業は、遺物の復元と実測を行った後に製図作業や写真撮影を経て編集作業に進んだ。これらの作業については遺構に伴うものから順次行い、同時に土器以外の遺物の台帳作成と選別・抽出を進めた。出土品の中心をなす弥生時代前期から中期にかけての土器の製作技法や年代決定については、整理担当者を中心にとりわけ慎重に検討を加えた。また、金属製品や木製品については必要に応じて保存処理作業を実施した。なお、編集作業終了後も、遺構原図や写真、遺物の収蔵整理を行っている。遺物は実測や報告書掲載の有無で分類し、報告書掲載遺物については、掲載番号順に分けコンテナで古代吉備文化財センター収蔵庫に収納している。

遺構図面については、個々の遺構の整理・検討を加えた後に製図作業を行った。また、隣接する既報告の『百間川原尾島遺跡5』、『百間川沢田遺跡3』などにつながる遺構の検討を行い、全体図や個別遺構図に反映させた。

本書に掲載する遺物の点数は、百間川原尾島遺跡で土器が692点、石器・石製品が161点、金属製品が6点、土製品が17点、ガラス製品が2点である。百間川沢田遺跡では土器が295点、石器・石製品が33点、金属製品が1点、土製品が1点、ガラス製品が1点、木製品が4点である。

平成24年11月16日（金）に開催した埋蔵文化財保護対策委員会では、報告書作成状況の報告を行い、各委員から遺構・遺物についての有益な御指導・御助言を賜った。（弘田）

旭川放水路（百間川）改修に伴う

埋蔵文化財保護対策委員会委員

池葉須藤樹（元中学校校長）

稲田孝司（岡山大学名誉教授）

亀田修一（岡山理科大学）

出宮徳尚（元岡山市教育委員会）

山本悦世（岡山大学）



写真1 埋蔵文化財保護対策委員会

また、遺物の整理・報告書の作成に関しては、次の諸氏、機関の協力を得た。記して感謝する。(50音順)

小郡市埋蔵文化財調査センター、片岡宏二氏（朝鮮半島系土器の資料調査）、平井典子氏（弥生前期から中期土器の製作技法及び年代）

なお、本報告書は、旭川河川改修に伴う発掘調査報告書の第19冊である。表3にI～XIXまでの報告書名を掲載する。なお、受託事業名称の変更に伴い、副書名をこれまでの「旭川放水路（百間川）河川改修工事に伴う発掘調査」から、本書では「旭川放水路河川改修に伴う発掘調査」に変更している。

平成23年度

岡山県教育委員会

教育長 竹井 千庫

岡山県教育庁

教育次長 阿部 淳二

文化財課

課長 村木 生久

参事 光永 真一

総括副参事（埋蔵文化財班長） 宇垣 匡雅

主任 石田 爲成

主任 一色 武

岡山県古代吉備文化財センター

所長 平井 泰男

次長（総務課長事務取扱） 片山 淳司

参事 中野 雅美

〈総務課〉

総括副参事（総務班長） 上田 利弘

主任 植木寿美子

主任 行守 智和

〈調査第二課〉

課長 弘田 和司

(2・3月、報告書作成担当)

平成24年度

岡山県教育委員会

教育長 竹井 千庫

岡山県教育庁

教育次長 松尾 茂樹

文化財課

課長 光永 真一

参事 嶋田健一郎

総括副参事（埋蔵文化財班長） 宇垣 匡雅

主任 石田 爲成

主任 河野 但彰

岡山県古代吉備文化財センター

所長 平井 泰男

次長（総務課長事務取扱） 大崎 智浩

総括参事 中野 雅美

〈総務課〉

総括主幹（総務班長） 岡部 一

主任 行守 智和

主任 岡村 涼平

〈調査第二課〉

課長 弘田 和司

(報告書作成担当)

総括副参事（第一班長） 澤山 孝之

主任 團 奈歩

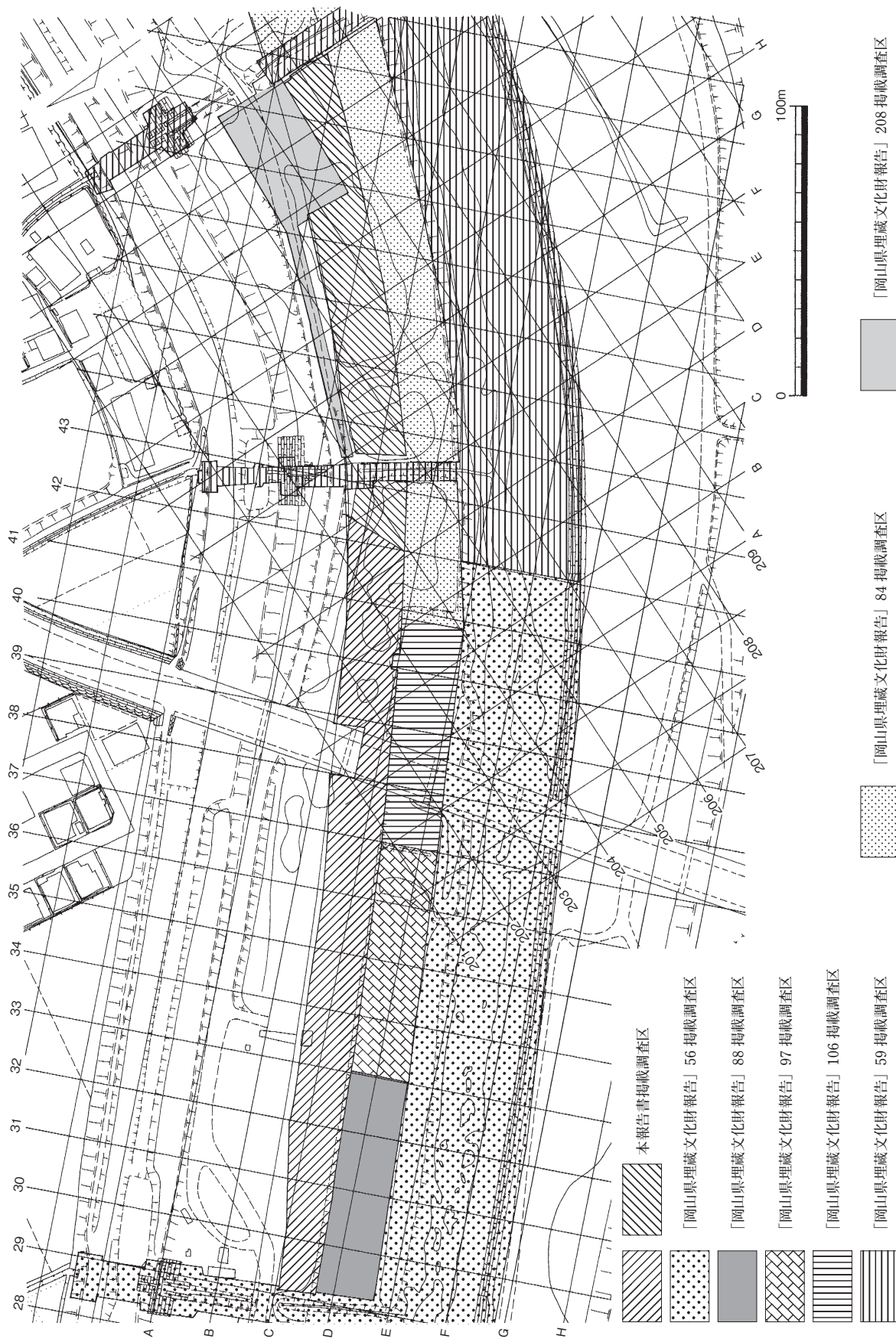
(報告書作成担当)

〈調査第三課〉

課長 亀山 行雄

総括主任（第二班長） 小林 利晴

(7～9月、報告書作成担当)



第4図 百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の調査区と掲載報告書（1/2,000）

表3 旭川放水路改修に伴う発掘調査報告書一覧

番号	編 著 者 名	書 名	シリーズ名・番号	発行年月
I	江見正己・伊藤 晃・浅倉秀昭・柳瀬昭彦 中野雅美・内藤善史他	百間川原尾島遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告39	1980 11
II	井上 弘・下澤公明・松本和男・岡田 博 浅倉秀昭・福田正継・江見正己・中野雅美 内藤善史・平井泰男・島崎 東他	百間川沢田遺跡 1 百間川長谷遺跡 百間川岩間遺跡 百間川当麻遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告46	1981 11
III	高畑知功・正岡睦夫・井上 弘・下澤公明 渡辺 光・山磨康平・浅倉秀昭・岡本寛久 江見正己・中野雅美・内藤善史・平井泰男 島崎 東・光永真一他	百間川兼基遺跡 1 百間川今谷遺跡 1	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告51	1982 11
IV	井上 弘・松本和男・岡田 博・二宮治夫 平井泰男・光永真一	百間川当麻遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告52	1982 11
V	正岡睦夫・高畑知功・平井泰男・島崎 東 光永真一・井上 弘・下澤公明・渡辺 光 岡田 博・二宮治夫・岡本寛久・中野雅美	百間川原尾島遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告56	1984 11
VI	二宮治夫・正岡睦夫・井上 弘・下澤公明 柳瀬昭彦・山磨康平・岡田 博・高畑知功 浅倉秀昭・岡本寛久・江見正己・中野雅美 平井泰男・島崎 東・光永真一他	百間川沢田遺跡 2 百間川長谷遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告59	1985 11
VII	岡本寛久・平井 勝・柳瀬昭彦・井上 弘 宇垣匡雅・平井泰男・江見正己	百間川米田遺跡 3 (旧当麻遺跡)	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告74	1989 4
VIII	平井 勝・井上 弘・柳瀬昭彦・浅倉秀昭 古谷野寿郎・岡本寛久・江見正己 宇垣匡雅・阿部泰久・高田恭一郎	百間川沢田遺跡 3	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告84	1993 3
IX	宇垣匡雅・平井 勝・江見正己・柳瀬昭彦	百間川原尾島遺跡 3	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告88	1994 3
X	平井 勝・岡本寛久・高田恭一郎	百間川原尾島遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告97	1995 3
XI	柳瀬昭彦・高田恭一郎・岡本寛久 平井泰男・井上 弘	百間川原尾島遺跡 5	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告106	1996 3
XII	平井 勝・柳瀬昭彦・岡本寛久・宇垣匡雅 浅倉秀昭・江見正己	百間川兼基遺跡 2 百間川今谷遺跡 2	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告114	1996 3
XIII	柳瀬昭彦・弘田和司・平井 勝・高田恭一郎 山磨康平・根木智宏・澤山孝之	百間川兼基遺跡 3 百間川今谷遺跡 3 百間川沢田遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告119	1997 3
XIV	物部茂樹・山磨康平・井上 弘・宇垣匡雅 中野雅美・根木智宏・柳瀬昭彦・松尾佳子	百間川米田遺跡 4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告164	2002 3
XV	小嶋善邦・宇垣匡雅・高田恭一郎・柴田英樹 物部茂樹・松尾佳子・柳瀬昭彦・稲谷知子	百間川原尾島遺跡 6	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告179	2004 3

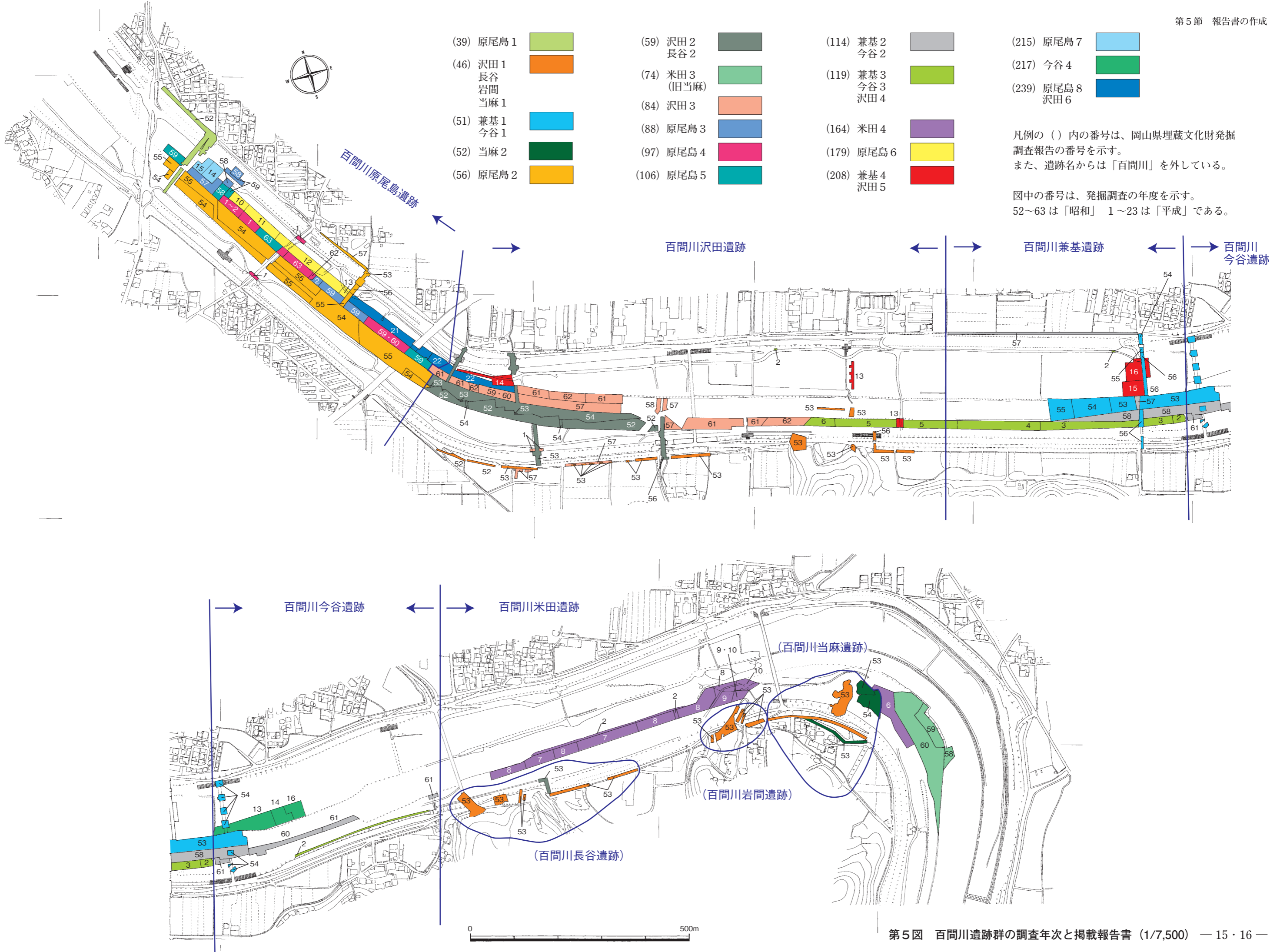
番号	編 著 者 名	書 名	シリーズ名・番号	発行年月
XVI	高田恭一郎・和田 剛・物部茂樹・浅倉秀昭 澤山孝之・稲谷知子	百間川兼基遺跡4 百間川沢田遺跡5	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告208	2007 3
XVII	高田恭一郎・下澤公明・山磨康平	百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告215	2008 3
XVIII	物部茂樹・高田恭一郎・小嶋善邦・團 奈歩 和田 剛	百間川今谷遺跡4	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告217	2009 2
XIX	團 奈歩・亀山行雄・弘田和司・内藤善史 小林利晴	百間川原尾島遺跡8 百間川沢田遺跡6	岡山県埋蔵文化財 発掘調査報告239	2013 12

2 報告書作成の方法

今回の報告書では、隣接した百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡の2遺跡の調査成果を収録している。百間川遺跡群の調査は、第5図に示すように、調査が細分されて行われてきたことから、小字を基に設定した調査区ごとに報告されている。今回は、幅約20m、長さ約200mの細長い調査区であったことから、小字ごとに調査区を設定して報告せず、百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡のみを分割して掲載することとした。また、百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡の境界については、大字境が百間川沢田遺跡の微高地上を南北に通っているため、過去の報告書に倣い、平成23年度に調査した低位部内に設定している。藤原樋門が低位部内を通っていることから、この部分で遺跡の境界にすることもできたが、古代以降の溝の存在などを考慮し、樋門よりも西側に設定することとなった。このため、同一の水田の区画を、百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡の二つに分けて報告することとなっている。

時期区分については、昭和55年度に最初に刊行された百間川原尾島遺跡1「旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅰ」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告39』の第2章「調査の契機及び経過」のなかで述べられており、編年対比表が掲載されている。以降、19冊におよぶ報告書はこの編年対比表に準拠して時期区分が行われ、「百・前・Ⅲ」といった年代の記述が行われてきた。また、この時期区分に合わせて時代ごとの概要をまとめて報告する形をとっている。今回、報告書作成にあたって、百間川原尾島遺跡の微高地で検出した遺構のなかに、弥生時代前期から中期（百・前・Ⅲ～百・中・Ⅰ）にかけての遺物を共伴する遺構がいくつか認められた。遺構（特に土坑）の形状などからも、この微高地の集落は弥生時代前期末から中期初頭の時期をひとつのまとまりとして捉えるほうが実態に合うと考えられるが、今までの体裁に合わせ、弥生時代前期と中期にわけて掲載することとした。実態とは乖離する点については、第6章の総括において集落の変遷を述べることによって補うこととする。また、弥生時代前期と中期の遺物が共伴する遺構については、中期の遺構として取り扱い、出土遺物の図には中期の遺物だけでなく、前期のものも掲載することによって、共伴の状況がわかるように努めた。

遺構番号については、基本的には北西優位で通し番号を付しているが、百間川原尾島遺跡の弥生時代前期・中期の土坑については、その形状を分類し、その分類ごとに番号を付しているために、全体図の中の土坑番号は、結果として煩雑になっている。（團）

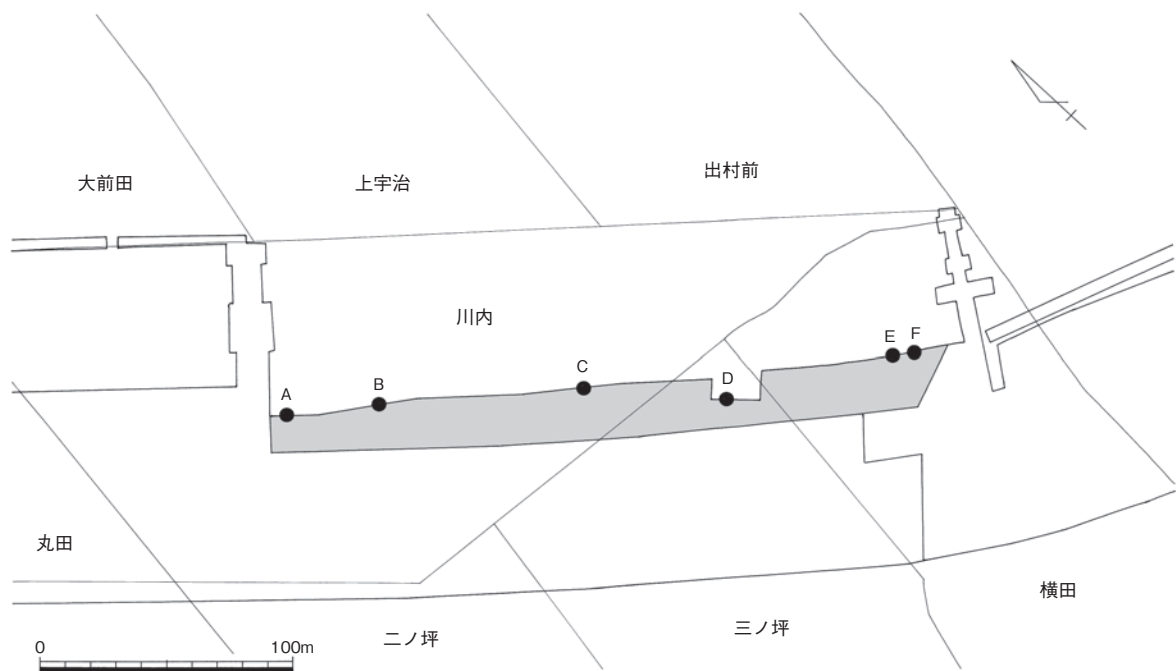


第5図 百間川遺跡群の調査年次と掲載報告書 (1/7,500) — 15・16 —

第3章 百間川原尾島遺跡

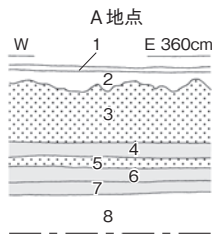
第1節 遺跡の概要と調査区

百間川原尾島遺跡は、弥生時代～古墳時代の旭東平野における中核的な集落遺跡であり、特に弥生時代後期末の洪水による土砂で埋まった弥生時代後期水田が注目される遺跡である。本調査区は、南北幅約20m、東西幅約250mと細長い形状をしており、調査区の西端からおよそ4/5の200mは低位部、東端50m部分に微高地が位置している。調査区は、百間川原尾島遺跡全体からみれば東端に位置し、百間川沢田遺跡と接している。この百間川沢田遺跡には、低位部を挟んでわずか100mの微高地上に弥生時代前期中葉の環濠集落が位置しており、環濠集落の廃絶以降の集落や墓域の変遷を考えるうえで重要な、弥生時代前期末～中期初頭の集落を今回の百間川原尾島遺跡の調査で改めて確認することができた。また、旧河道では、井堰の可能性が考えられる杭列と水路が検出され、弥生時代前期における土木技術と水利用を考えるうえでも重要な発見となった。弥生時代後期水田では、水田と水路の関係が明らかとなり、昭和56年に調査された稲株痕跡とされる遺構が今回も検出され、再検証する機会となったといえる。基本層序は、A地点の西端の低位部では、基盤層直上に弥生時代前期水田層が、その上層に中期水田層・弥生時代中～後期と思われる洪水砂の間層を挟んで弥生時代後期水田層が見られ、弥生時代前期に水田とした部分は、弥生時代を通して水田として利用されていたことがわかった。その低位部でも、B・F地点では基盤層の直上で弥生時代後期水田層を検出しており、低位部のなかでも弥生時代後期になってから水田として利用した箇所が確認できた。C・D地点では微高地の



第6図 調査区位置図 (1/3,000)

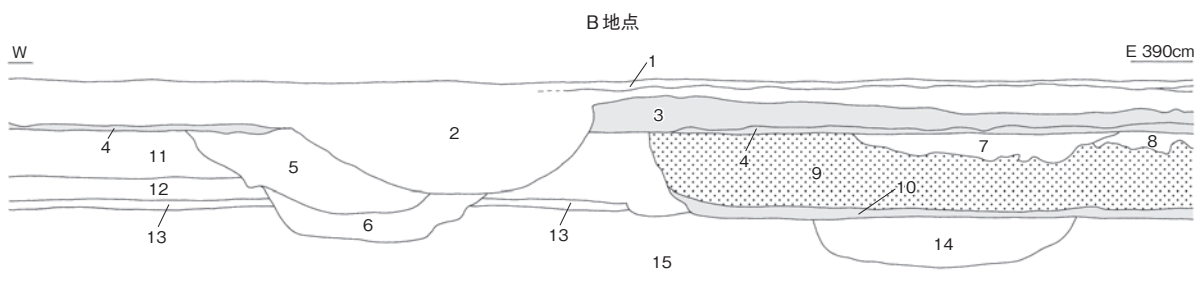
第3章 百間川原尾島遺跡



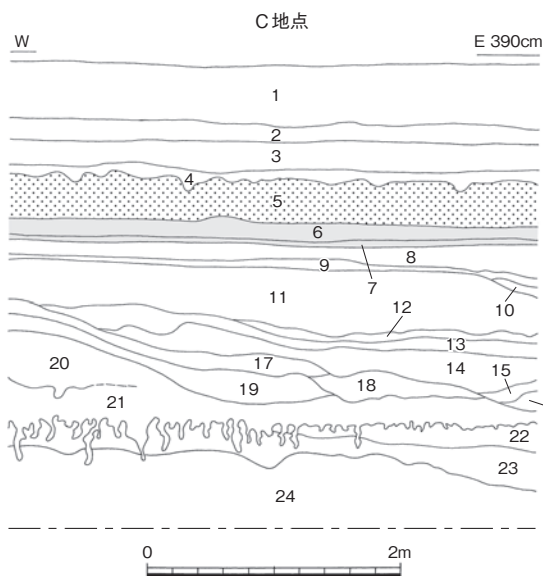
- 1 〈表土〉
- 2 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘性微砂 〈古墳時代前期包含層〉
- 3 浅黄色 (2.5Y7/4) 細～粗砂 〈弥生時代後期末 洪水砂〉
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 〈弥生時代後期水田層〉
- 5 にぶい黄橙色 (10YR7/2) 微～細砂 〈弥生時代中～後期? 洪水砂〉
- 6 灰黄色 (2.5Y6/1) 粘性微砂 〈弥生時代中期水田層〉
- 7 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘性微砂 〈弥生時代前期水田層〉
- 8 褐色 (10YR4/4) 粘性微砂 〈基盤層〉



写真2 弥生時代水田層層序 (南西から)

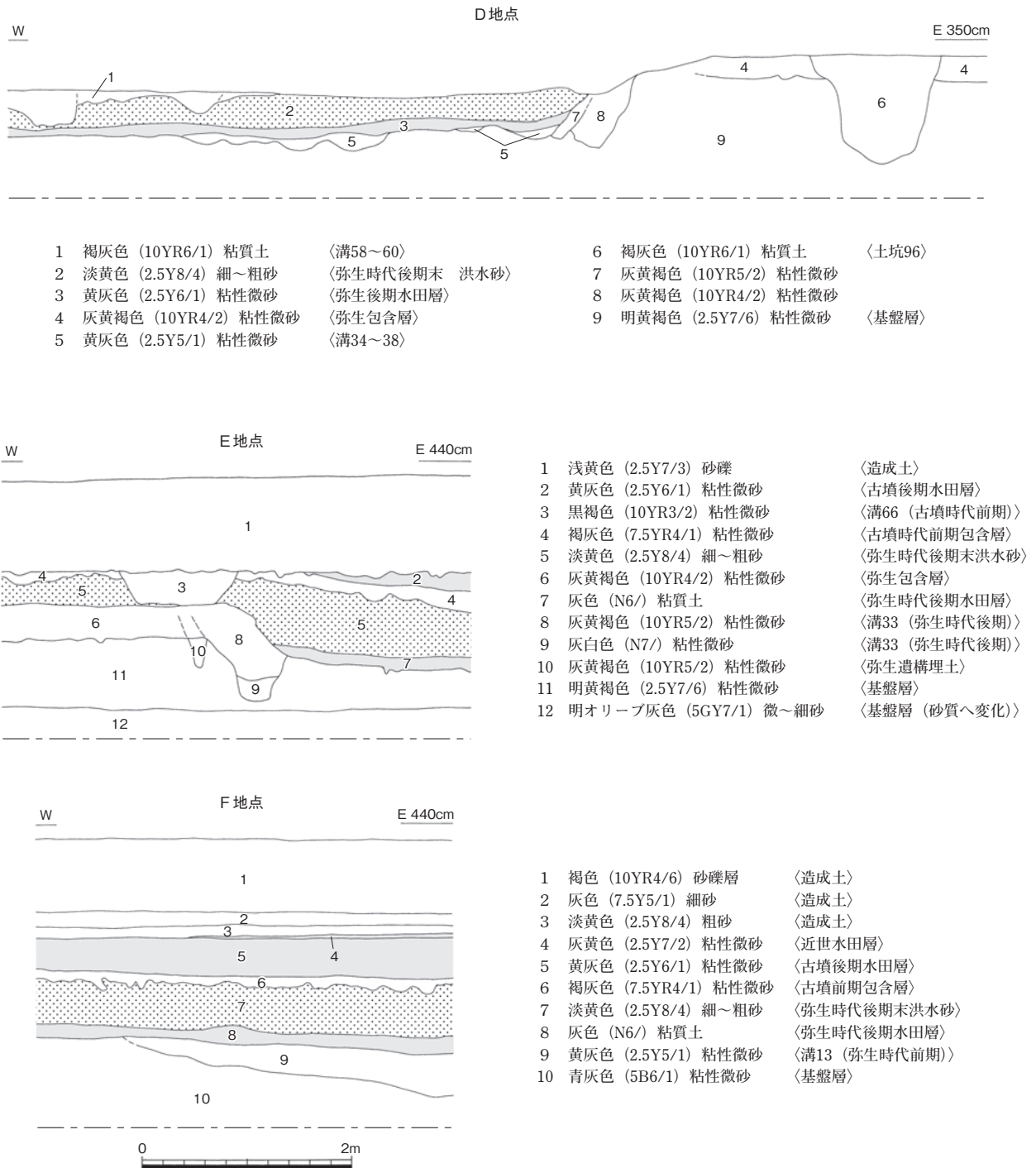


- 1 〈表土〉
- 2 〈造成土〉
- 3 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘性微砂 〈近世水田層〉
- 4 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘性微砂 〈中世水田層〉
- 5 灰白色 (2.5Y7/1) 土 〈溝67 (条里溝)〉
- 6 灰色 (5Y4/1) 土 〈溝67 (条里溝)〉
- 7 灰白色 (5Y7/1) 粘質土 〈古墳時代 土坑117〉
- 8 暗褐色 (10YR3/3) 粘性微砂 〈古墳時代前期 包含層〉
- 9 浅黄色 (2.5Y7/4) 細～粗砂 〈弥生時代後期末 洪水砂〉
- 10 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 〈弥生時代後期水田層〉
- 11 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 〈島状高まり2〉
- 12 灰黄褐色 (10YR6/2) 土 〈島状高まり2〉
- 13 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 土 〈島状高まり2〉
- 14 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 土 〈古墳時代前期 溝〉
- 15 褐色 (10YR4/4) 粘性微砂 〈基盤層〉



- 1 褐色 (7.5YR4/3) 土 〈造成土〉
- 2 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘性微砂 〈中世水田層か〉
- 3 灰色 (N5/) 粘性微砂
- 4 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘性微砂 〈古墳時代前期包含層〉
- 5 浅黄色 (2.5Y7/4) 細～粗砂 〈洪水砂〉
- 6 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 〈弥生時代後期水田層〉
- 7 灰色 (N5/) 粘質土 〈弥生時代後期水田層〉
- 8 灰色 (5Y6/1) シルト
- 9 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト
- 10 灰色 (5Y6/1) シルト
- 11 灰色 (7.5Y6/1) シルト 一部酸化鉄沈着
- 12 灰色 (7.5Y6/1) 細砂混じりシルト
- 13 灰色 (7.5Y4/1) シルト
- 14 灰色 (7.5Y3/1) シルト
- 15 灰色 (7.5Y4/1) シルト
- 16 灰色 (7.5Y4/1) シルト
- 17 灰色 (5Y5/1) 粘性微～細砂 〈杭列盛土〉
- 18 灰色 (N4/) シルト 〈杭列盛土〉
- 19 灰色 (7.5Y6/1) 粗～細砂 灰白色 (7.5Y8/1) 粗砂のラミナ 〈杭列盛土〉
- 20 暗灰色 (N3/) 粘質土 〈杭列盛土〉
- 21 灰色 (N4/) シルト 〈基盤層〉
- 22 灰色 (7.5Y4/1～5/1) シルト 〈基盤層〉
- 23 灰色 (7.5Y5/1) シルト 〈基盤層〉
- 24 灰色 (N6/) 細砂～粗砂 〈基盤層〉

第7図 基本層序① (1/60)



第8図 基本層序② (1/60)

下がりを確認しており、弥生時代後期末の洪水砂が微高地上にまで覆ったことがわかる。古墳時代の遺構は、この洪水砂の直上の古墳時代の前期包含層である、褐色粘性微砂 (A地点第2層・C地点第4層など) を基盤層としている。この層の下面は水平ではなく波打っており、これは洪水砂が覆った後に草などが生い茂った根などの痕跡と考えられるものである。土器型式からは、洪水砂上層に入る土器と古墳時代の遺構の中で古い時期のものは連続しているが、前期包含層が形成される程度の間を経て、新しく古墳時代前期の集落が営まれたことが理解できる。 (團)

第2節 弥生時代前期以前の遺構・遺物

1 概要

検出した遺構は、縄文時代晩期の土坑が1基、縄文時代～弥生時代中期の旧河道1条、弥生時代前期の土坑67基、焼土2か所、溝13条、水田1か所、土器溜まり1か所、下がり1か所、杭列2か所、他柱穴多数を検出している。

縄文時代の遺物は、晩期の土器が旧河道から少量出土しているものの他は、調査区内では出土していない。検出した土坑1は、この旧河道の右岸に接した、湿潤な環境に作られたドングリの貯蔵穴である。この遺構から、今まで想定できなかった旧河道右岸側に、縄文時代の人々の生活の場があったことが伺える。

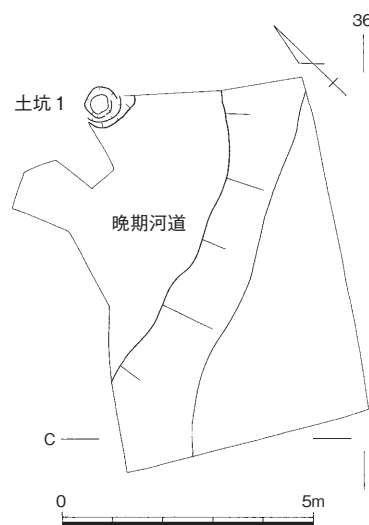
弥生時代前期は、百・前・Ⅲになって初めて遺構が検出される。低位部では調査区の西端に水田、多数の溝、微高地には土坑をはじめとして、多くの遺構・遺物が見つかった。このことから、低位部をはさんでおよそ100m東に位置する百間川沢田遺跡の百・前・Ⅱの環濠集落から、調査区の微高地に集落の移動があったと理解され、弥生時代前期における百間川原尾島遺跡東側～百間川沢田遺跡西側の変遷を考えるうえで、重要であるといえる。また、この微高地上で検出された土坑には、上屋をかけるための柱穴が底面に穿たれているものや、方形土坑、袋状土坑、いわゆる舟形土坑、井戸状の深く掘り下げた土坑などが検出され、微高地の東端には集落を区画するための溝が掘削されているなど、集落の構造を改めて考えるだけの資料が得られたといえよう。

旧河道では、杭列が2か所見つかり、その構造から井堰の可能性が考えられるものである。旧河道に対して斜めに杭列を設けたと考えられるもので、注目される。ここからは木製の容器が出土したほか、杭の基礎部に使用された筵状編み物などが出土し、またその他の遺物では、粘土帯土器や松菊里型土器を模倣した壺などの遺物が出土している。

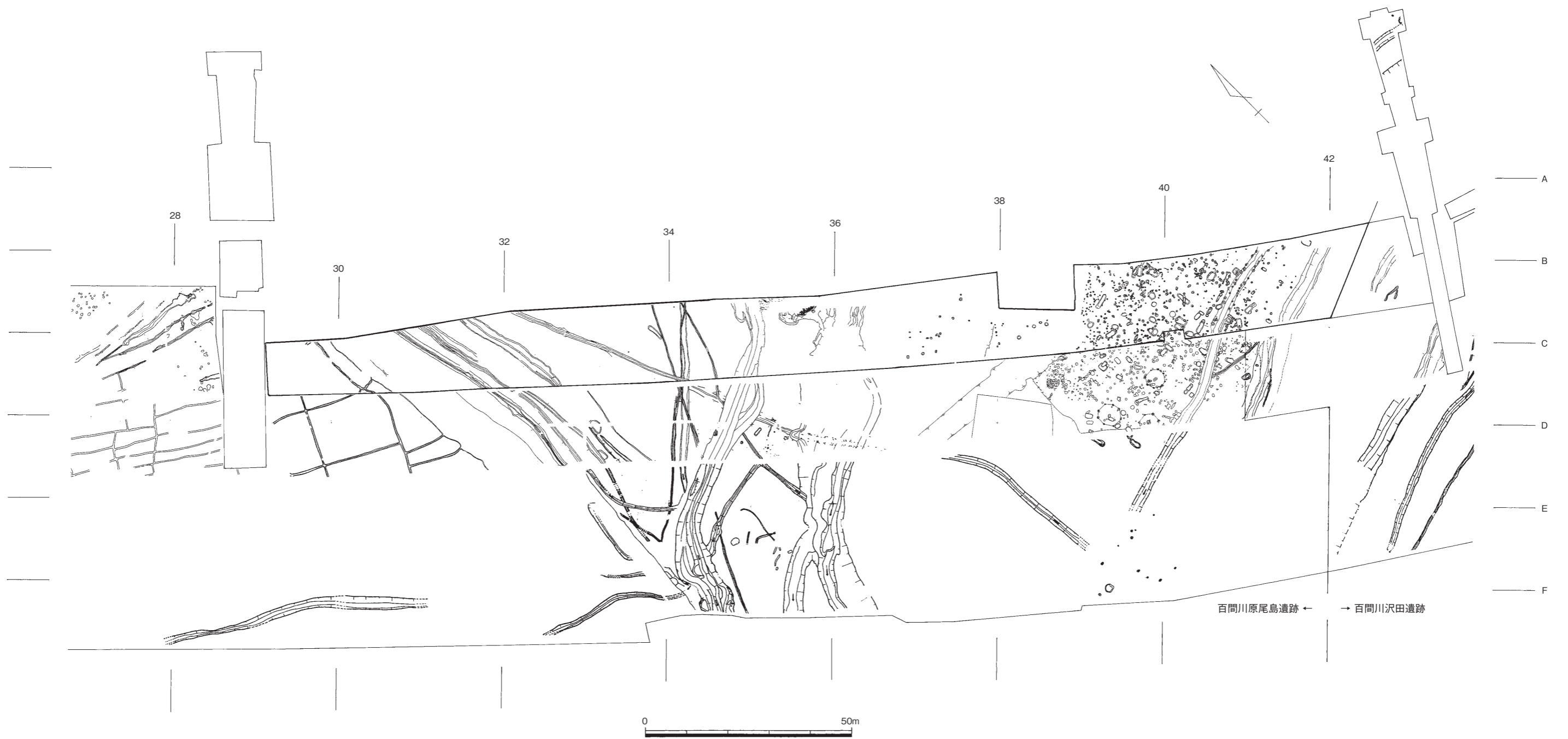
(團)



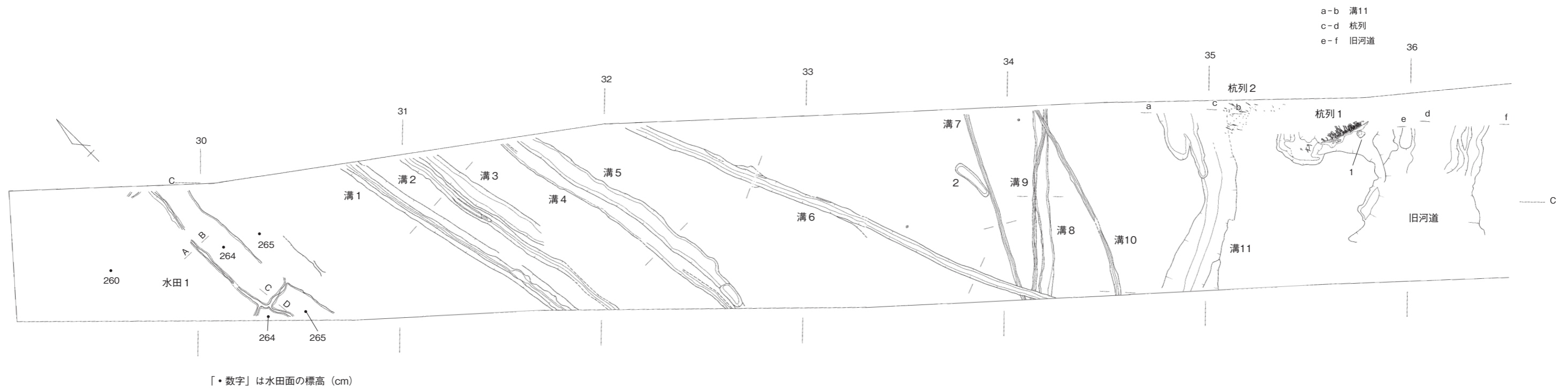
写真3 土坑1出土ドングリ



第9図 縄文晩期河道
・土坑1位置図 (1/150)



第10図 弥生時代前期遺構全体図 (1/1,000)



第11図 縄文時代晩期～弥生時代前期遺構配置図 (1/400)



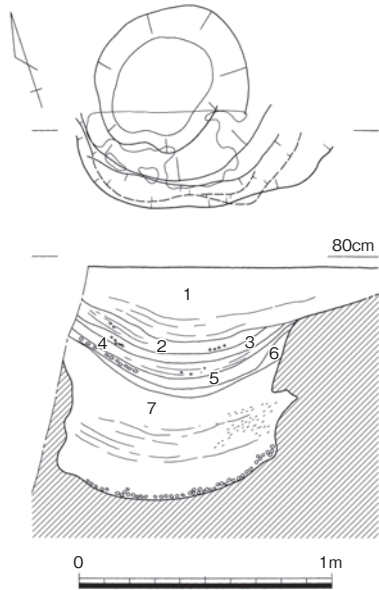
第12図 弥生時代前期微高地遺構配置図 (1/200)

0 20m

2 土 坑

土坑1 (第9・11・13図、写真3、巻頭図版1-1、図版1-1)

低位部となる35B区の、旧河道の右岸に位置する土坑である。弥生時代前期の杭列を確認するサブトレンチを掘り下げ中に検出した。平面形はほぼ円形になると思われ、断面形は袋状を呈している。規模は、長軸102cm、短軸の残存部で80cm、深さ92cmを測り、底面海拔高は-17cmである。検出面は標高75cmで、百・前・Ⅲの時期の杭列の検出面と比較して、20cm以上低い。埋土からはドングリが多く



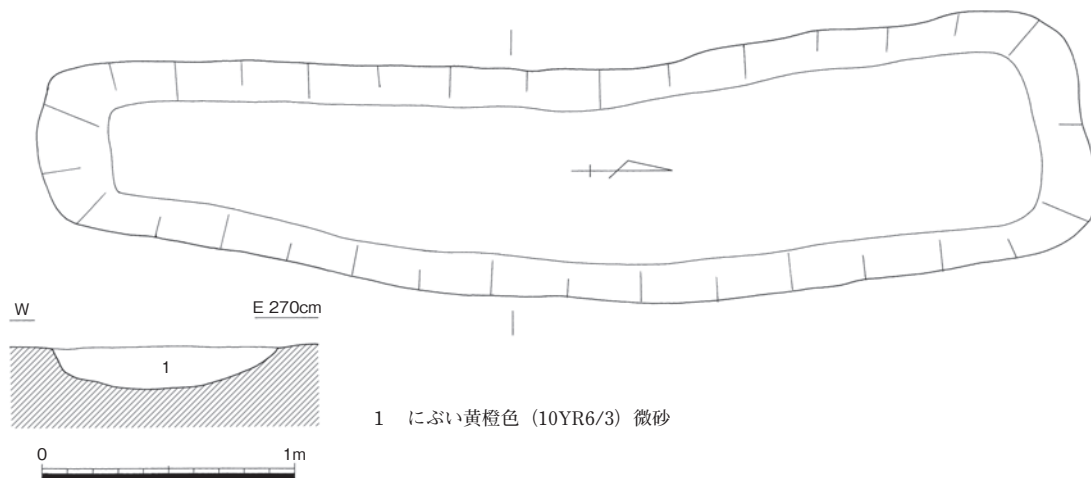
く出土したことと、検出面の標高や縄文時代の晩期の河道に接していることなどから、縄文時代晩期の貯蔵穴であると考えられる。ドングリは、鑑定でほぼ成熟したイチイガシの果実であるとの結果を得ている。埋土は、第1層の立ち上がりが見えないことから、河道の埋没と同時であったと考えられ、湿潤な環境にあったことが推測される。第7層の底面にドングリは多く出土しているが、壁面はところどころに挟れた箇所があり、ドングリが中層からも出土することから、この貯蔵穴は掘り直しがなされた可能性が考えられる。(團)

- 1 灰色 (10Y6/1) 粘性微砂 若干の有機物が層状に入る
- 2 灰オリーブ (7.5Y4/2) 粘性微砂 細い枝や葉などが多く入る
- 3 灰色 (5Y6/1) 粘性微砂 有機物は少ない
- 4 灰色 (7.5Y4/1) 粘性微砂 有機物を多く含む
- 5 灰色 (5Y6/1) 粘性微砂 有機物は少ないが、北側上層にドングリ多い
- 6 灰色 (7.5Y4/1) 粘性微砂 有機物は少ない
- 7 灰色 (5Y5/1) 粘性微砂 底部にドングリが多い

第13図 土坑1 (1/30)

土坑2 (第10・11・14図)

低位部にあたる33B区で溝7に接して検出された。規模は、長軸418cm、短軸100cm、深さ17cmを測る。検出時には土壌墓の可能性も考えたが出土遺物はなく、底面は凹んでいて浅いため、土坑とした。出土遺物は無いが、検出面や周辺の遺構の時期から、弥生時代前期の遺構と判断した。(團)

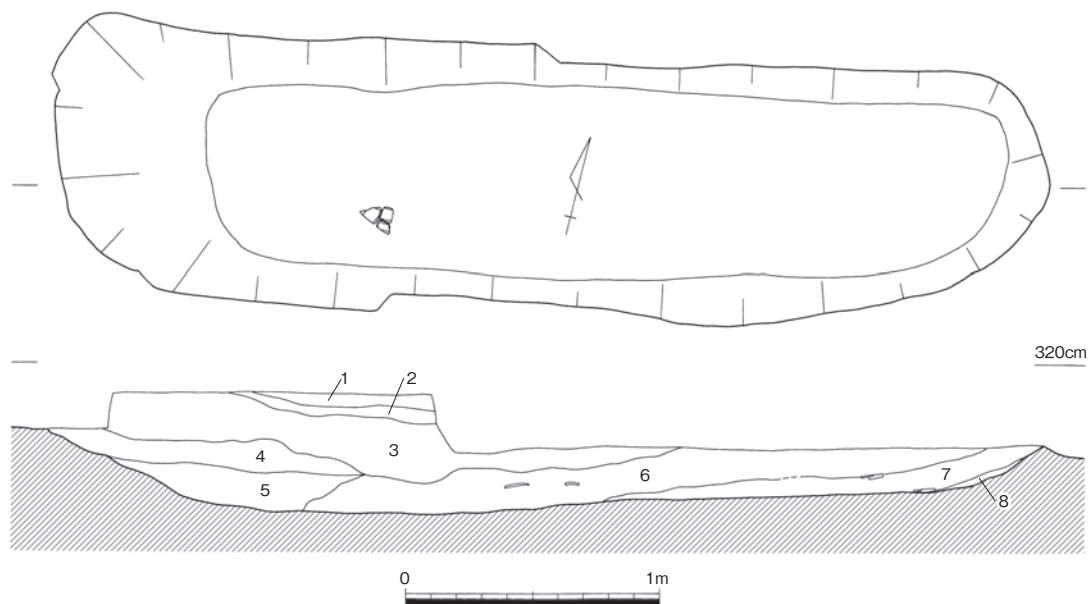


- 1 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 微砂

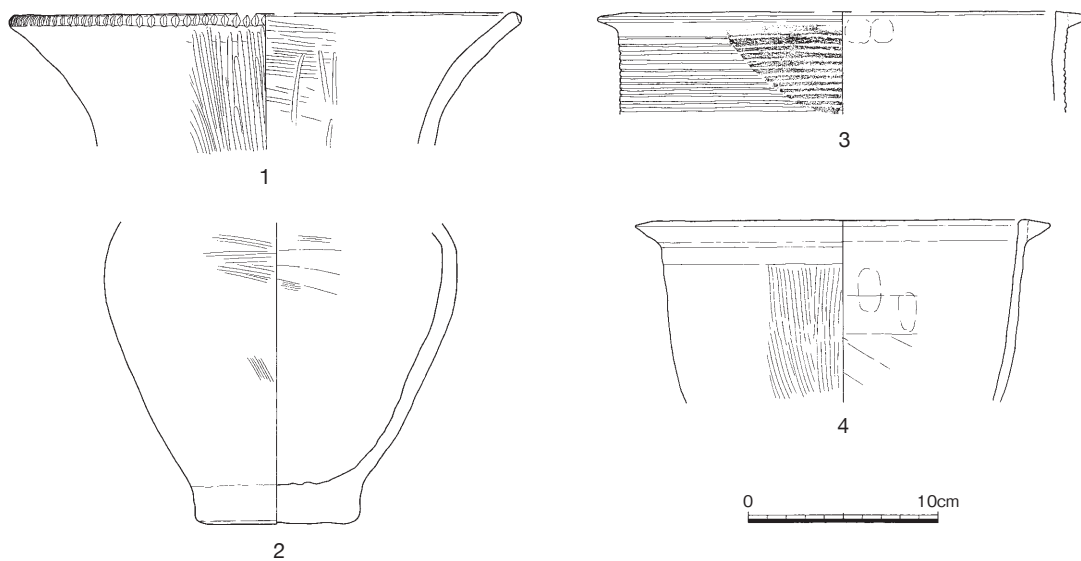
第14図 土坑2 (1/30)

土坑3 (第10~12・15図)

39B区の微高地に位置する土坑で、竪穴住居2の下層で検出している。長軸方向が短軸と比して細長く、隅が丸い形状から、一般に舟形土坑と呼ばれるもので、底面は平坦である。長軸396cm、短軸104cm、深さ48cmの規模を測る。埋土には焼土や炭片を比較的多く含んでいた。遺物は床面で若干の土器を検出したが、多くは埋土中で出土している。壺1・2、甕3・4などがあり、甕の口縁部の形状が三角形を呈し、貼り付けている。遺構の時期は百・前・Ⅲでも新段階のものであろう。(團)



- 1 黄褐色 (2.5Y5/4) 粘質土 粒径1~2cm大の焼土粒・木炭粒まばらに含む
- 2 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土 粒径1cm以下の焼土粒・木炭粒を多く含む
- 3 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質土 粒径1cm以下の焼土粒・木炭粒まばらに含む
- 4 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 黄色粘土塊・粒径1cm以下の焼土粒・木炭粒多く含む
- 5 褐灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土粒・黄色粘土粒を多く含む
- 6 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 1cm以下の木炭粒と焼土粒を多く含む
- 7 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土粒・黄色粘土粒を多く含む
- 8 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質土



第15図 土坑3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑4 (第10~12・16図、写真4)

40B区の微高地に位置する土坑で、土坑55に切られている。規模は、長軸359cm、短軸109cm、深さ30cmを測り、土坑3同様に舟形土坑と呼ばれる形状をしている。底面に近い埋土には、焼土や基盤層の土塊を多く含んでいる。出土遺物には、壺5、甕6、蓋7があり、蓋7は完形で床面の直上から出土している。時期は、百・前・Ⅲと考えられる。(團)

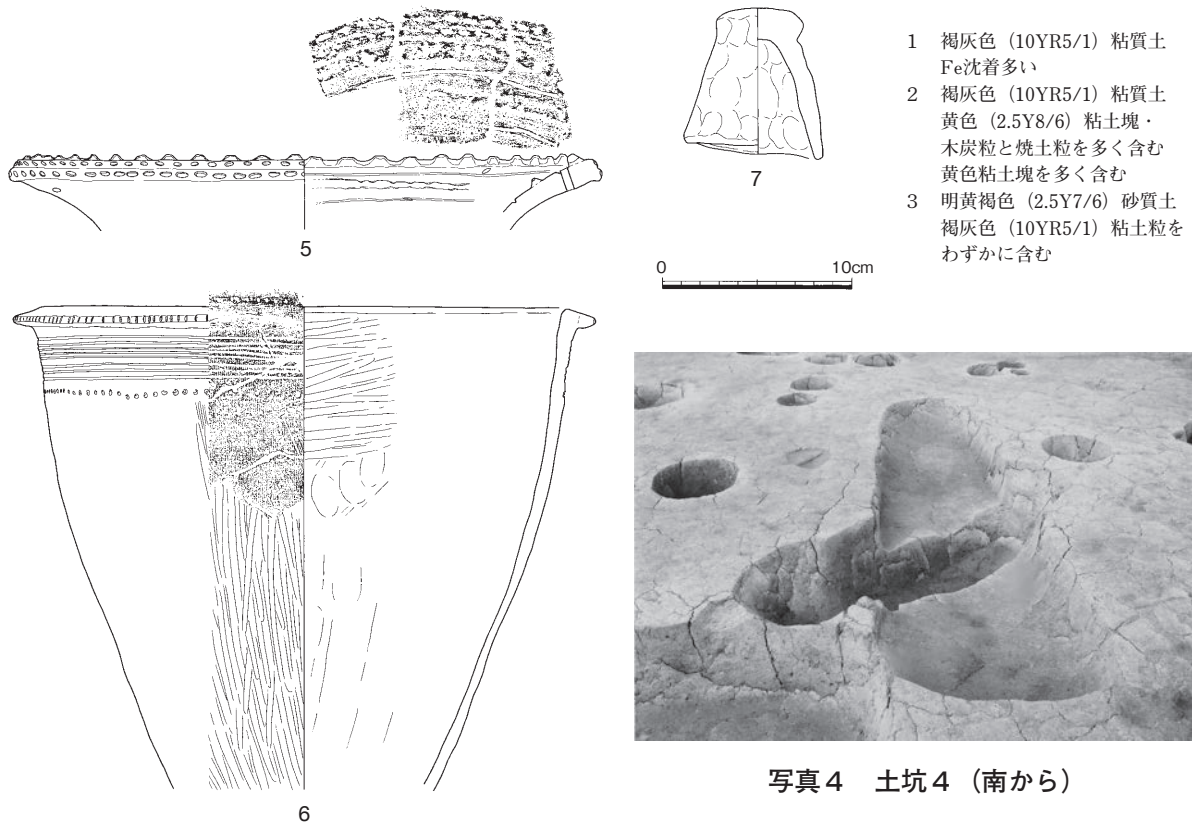
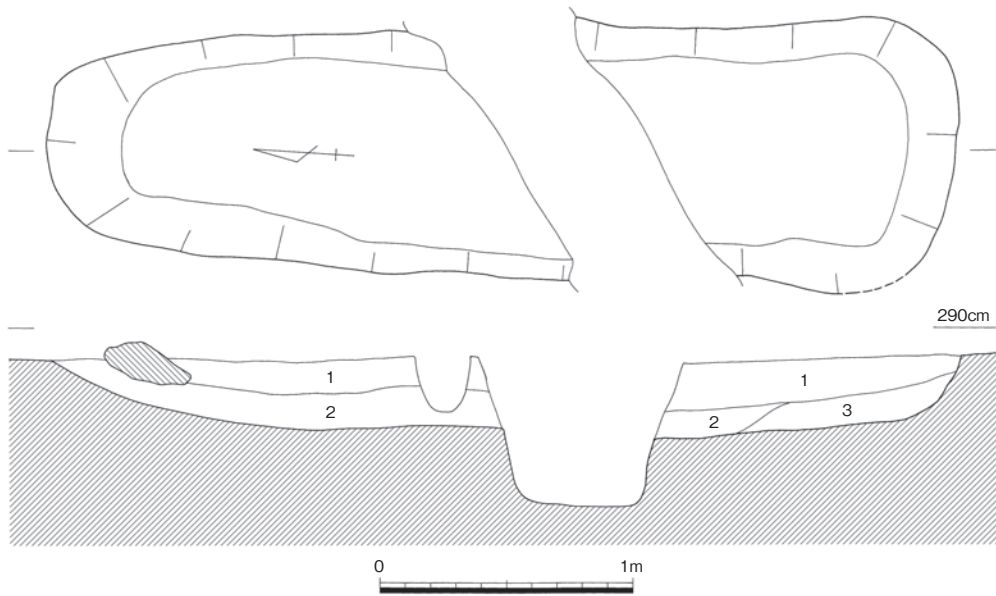
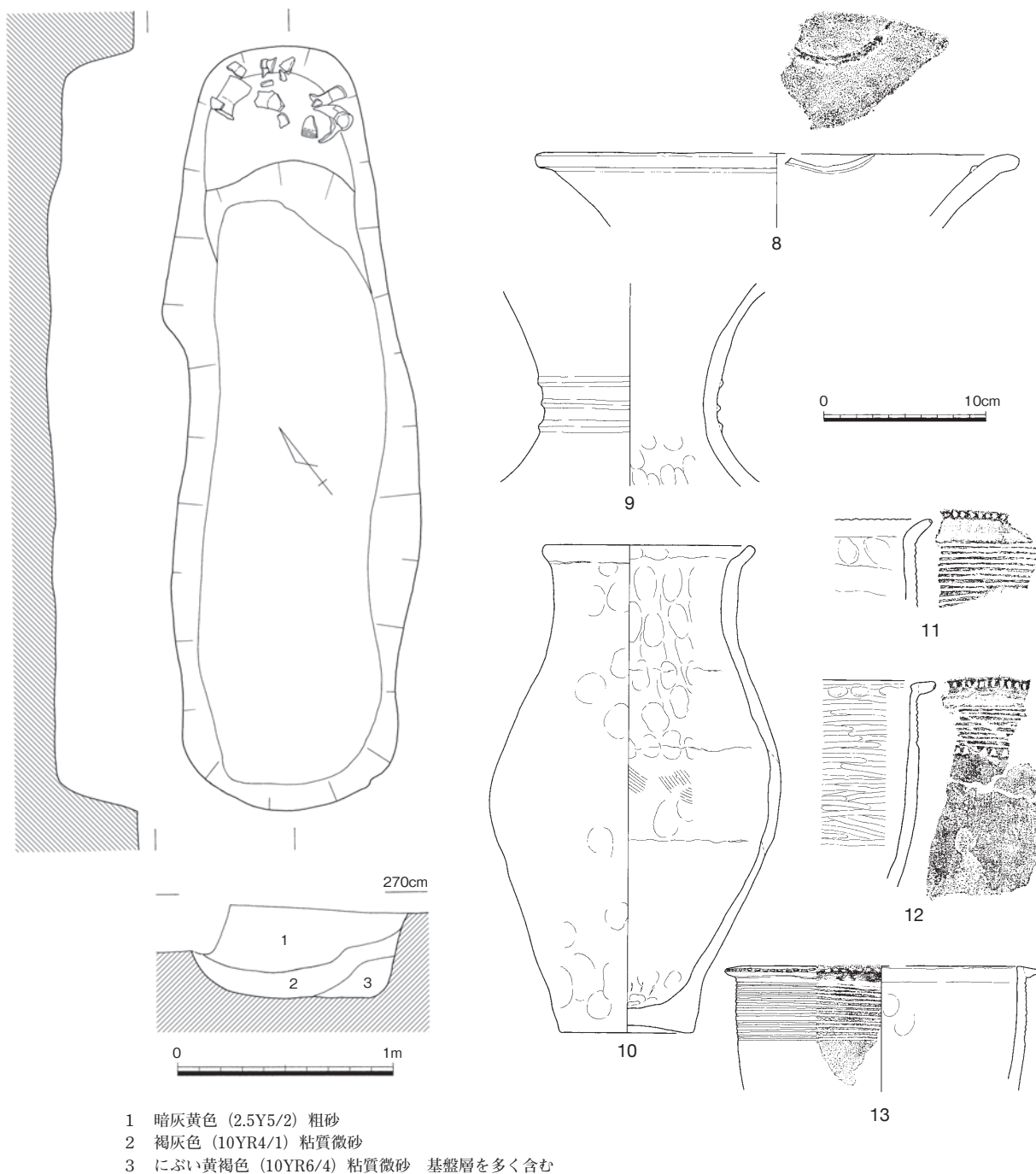


写真4 土坑4 (南から)

第16図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑5 (第10~12・17図、図版4-1・20)

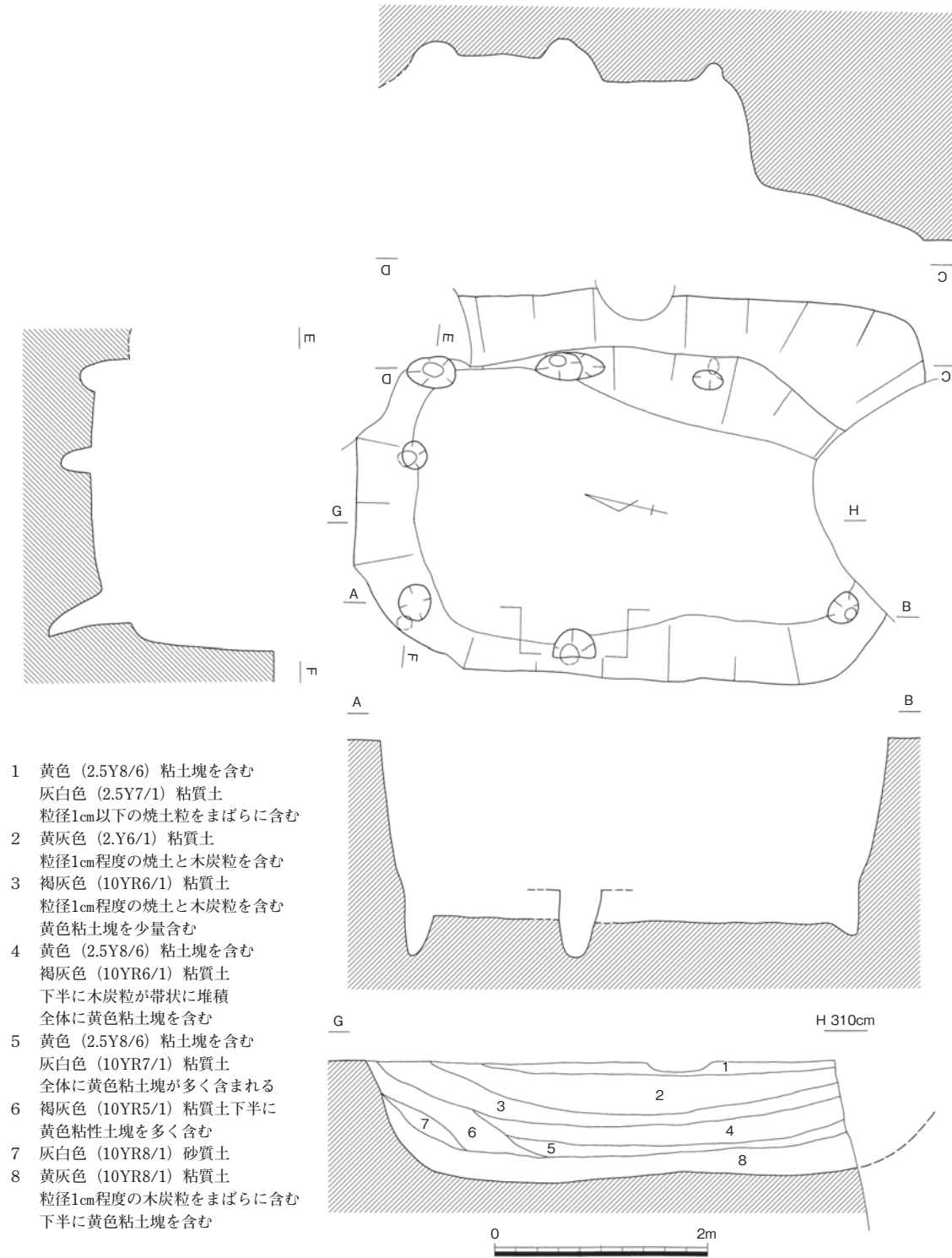
40B区の西側において検出した土坑で、土坑57~59とともに溝12の北側1~1.5mに並行するように位置する。上面の規模は、長軸356cm、短軸106cmで、平面形は舟形を呈していた。検出面からの深さ42cmで、標高225cmを測る底面は水平をなし、壁面は急峻に立ち上がる。南西側270cmほどは1段低く、北東側40cmほどはテラス状に1段高くなる。この高い部分にのみ土器が置いてあり、特に10はほぼ1個体分存在した。10は壺であるが、細長い形態をしており、「百沢田3土壙墓群」出土の土器に類似する。他の出土土器には、8・9壺、11~13甕などがあり、時期は、百・前・Ⅲである。この遺構は、形態や土器出土状況などから土坑墓になる可能性を考えている。(小林)



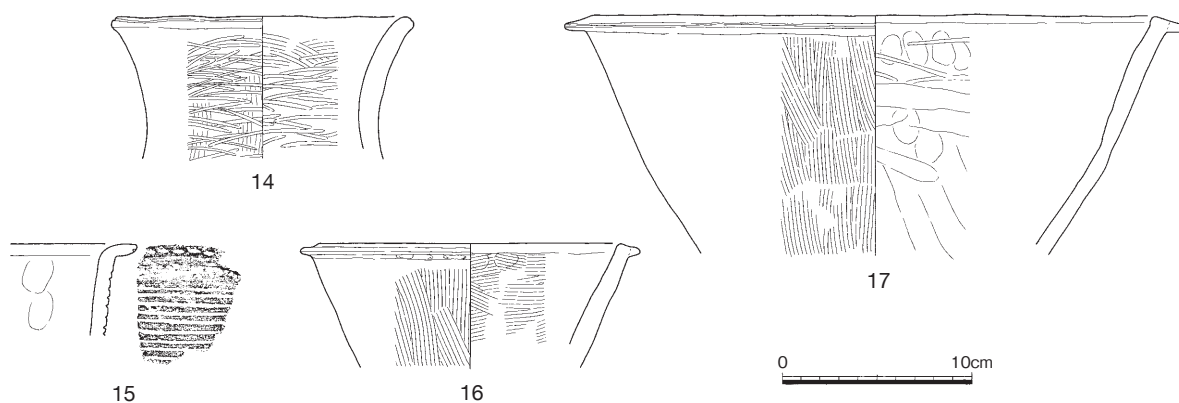
第17図 土坑5 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑6 (第10~12・18・19図、図版2-1)

40B区の微高地に位置している。規模は、長軸495cm、短軸366cm、深さ174cmの大型の土坑である。平面形は長方形を呈し、床面は平らで壁面の立ち上がりに角度を持つ。また、床面から壁面に立ち上がる部分で柱穴を7本検出している。この柱穴は直径12cm~20cmで壁面から斜めに据えられていることが特徴的である。これらの柱によって上屋が掛けられていたことが想定されることから、この土坑



第18図 土坑6 (1/60)

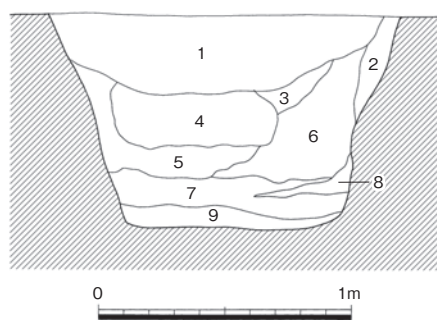
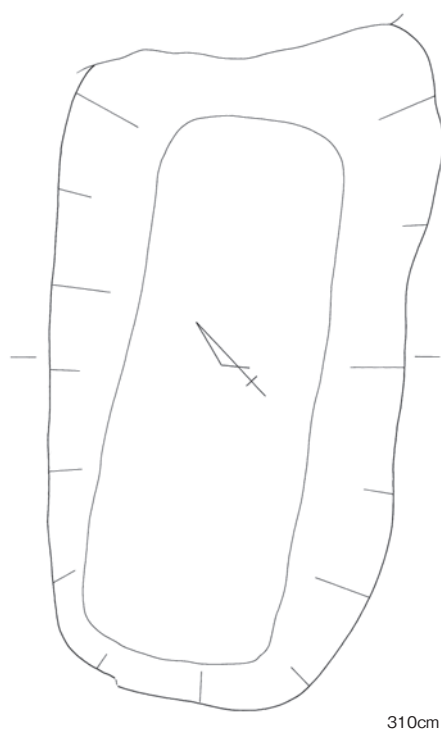


第19図 土坑6出土遺物 (1/4)

は貯蔵穴として利用されていたと想定している。このような底面に柱穴を持つ土坑は、同じ微高地上に百・中・I古段階の時期の土坑69・70がある。埋土には基盤層の土塊や焼土を多く含んでいて、人為的に埋め戻された可能性がある。出土遺物には、壺14、甕15、鉢16・17があり、壺14の口縁部は短く外反し、内外面にミガキが施される。甕15は、外面に多条のヘラ描き沈線文を施す。鉢16・17の口縁部は三角形の形状で貼り付けている。時期は、百・前・Ⅲと考えられる。(團)

土坑7 (第10~12・20・21図)

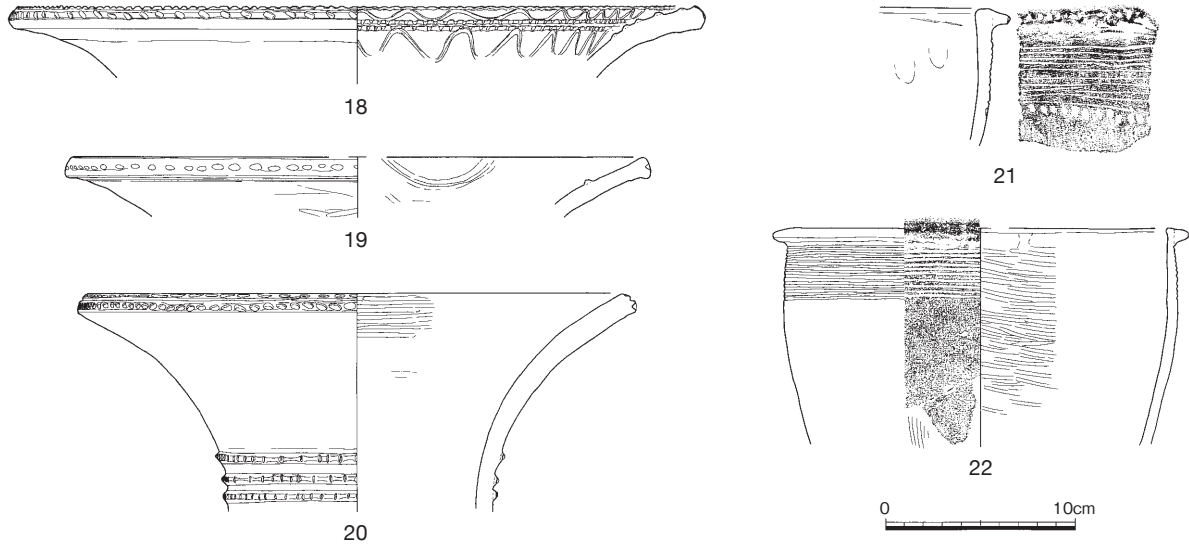
39B区の微高地上に位置し、土坑47~49の東に隣接する。切り合いからこれらの遺構より新しいと考えられる。平面形は長方形で、規模は長軸268cm、短軸140cm、深さ83cmを測る。底面は平らで、壁面の立ち上がりは角度を持つ。このような形状は、土坑6と比較すると、柱穴の有無以外に類似した点が多い。埋土に多くの基盤層の土塊を含む点も同様である。このような形状・埋土の土坑を、土坑7~24として報告する。出土遺物には、石錐S1、壺18~20、甕21・22がある。壺はいずれも広口壺であるが、口縁部の加飾が異なる。甕21のヘラ描き沈線文は細く、浅く施されている。遺構の時期は百・前・Ⅲであろう。(團)



- 1 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土 Mn・Feの沈着多い
粒径1cm以下の焼土粒・木炭粒まばらに含む
- 2 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を多く含む
- 3 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土を含む
- 4 明褐灰色 (7.5YR7/1) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土を含む
- 5 褐灰色 (7.5YR6/1) 粘質土 粒径1cm以下の木炭粒を多く含む
- 6 褐灰色 (7.5YR6/1) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土粒を含む
- 7 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘質土
- 8 褐灰色 (7.5YR6/1) 粘質土 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘土含む
- 9 灰白色 (2.5Y7/1) 粘質土 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘土含む



第20図 土坑7 (1/30)・出土遺物① (1/2)



第21図 土坑7出土遺物② (1/4)

土坑8 (第10~12・22図)

39B区の微高地上に位置している。平面形はやや丸みを帯びるが長方形を呈している。規模は長軸206cm、短軸155cm、深さ63cmを測る。埋土の第2~4層には基盤層の土塊が入ることから、およそ半分については人為的に埋め戻しがなされたと考えられる。

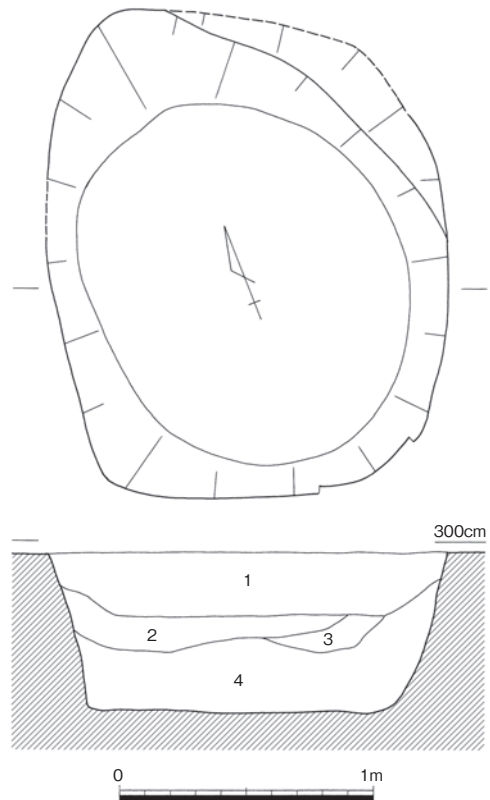
出土遺物には、甕23があるが、いずれも小片であった。これらの遺物から、百・前・Ⅲの時期であると考えられる。(圖)

土坑9 (第10~12・23図、写真5)

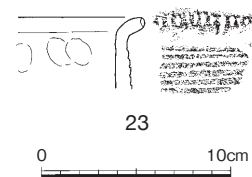
39B区の微高地上に位置している。平面形は整った長方形を呈し、断面の形状は箱状で壁面はほぼ垂直に立ち上がる。南東側は土坑25によって切られている。埋土には基盤層の土塊と炭を多く含んでいるため、人為的な埋め戻しの可能性がある。出土遺物には、甕24と蓋25がある。甕24は口縁部下にヘラ描き沈線文を12条施し、口縁部は三角形の突帯を貼り付けている。これらの遺物の特徴と土坑25に切られていることから、時期は、百・前・Ⅲのものであると考えられる。(圖)

土坑10 (第10~12・24・25図、写真6、図版20)

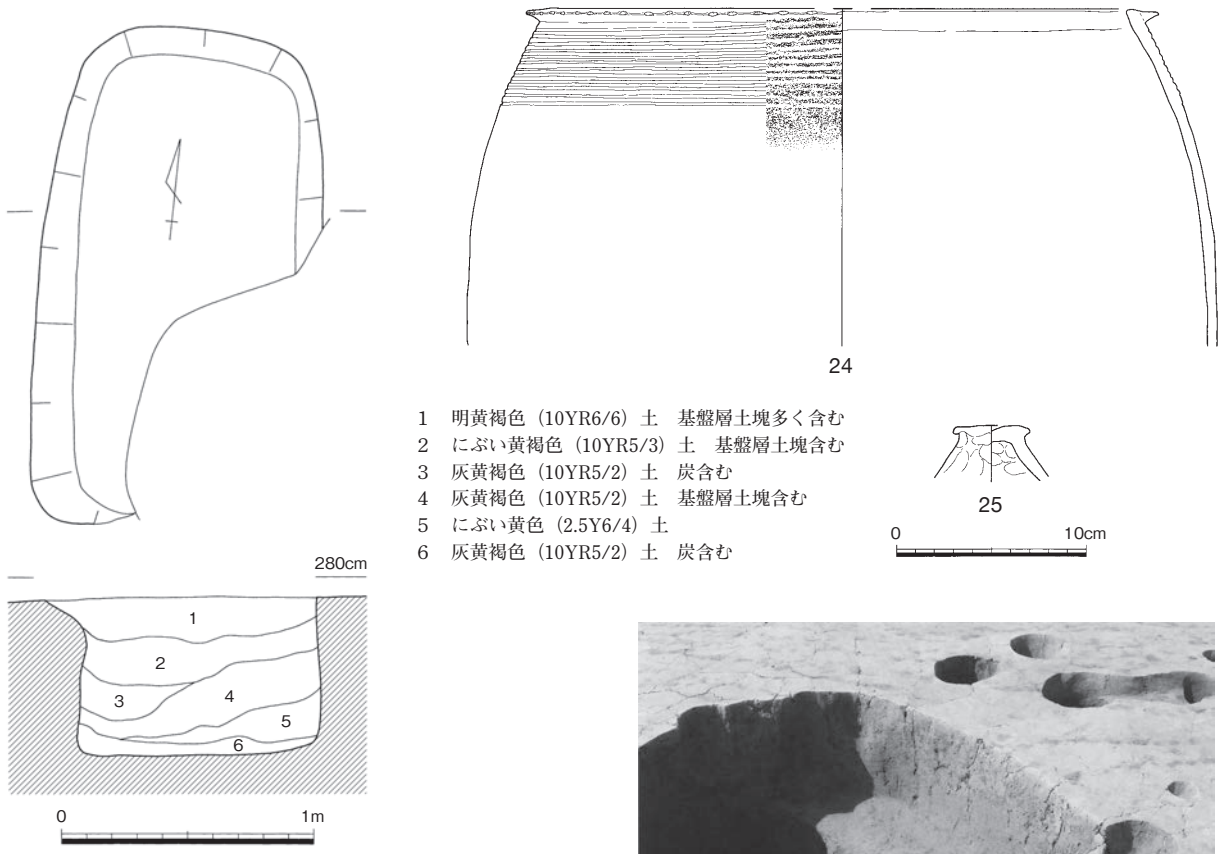
39B・40B区の微高地上に位置している。平面形は隅丸の長方形で、規模は長軸252cm、短軸169cm、深さ52cmを測る。埋土は4層からなる水平堆積が観察できたが、最下層の第4層には基盤層の土塊が多く、第3



- 1 褐灰色 (7.5YR4/2) 粘性微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂 基盤層土塊含む
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性微砂 基盤層土塊多く含む
- 4 にぶい黄褐色 (10YR7/4) 粘性微砂 基盤層土塊多く含む



第22図 土坑8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

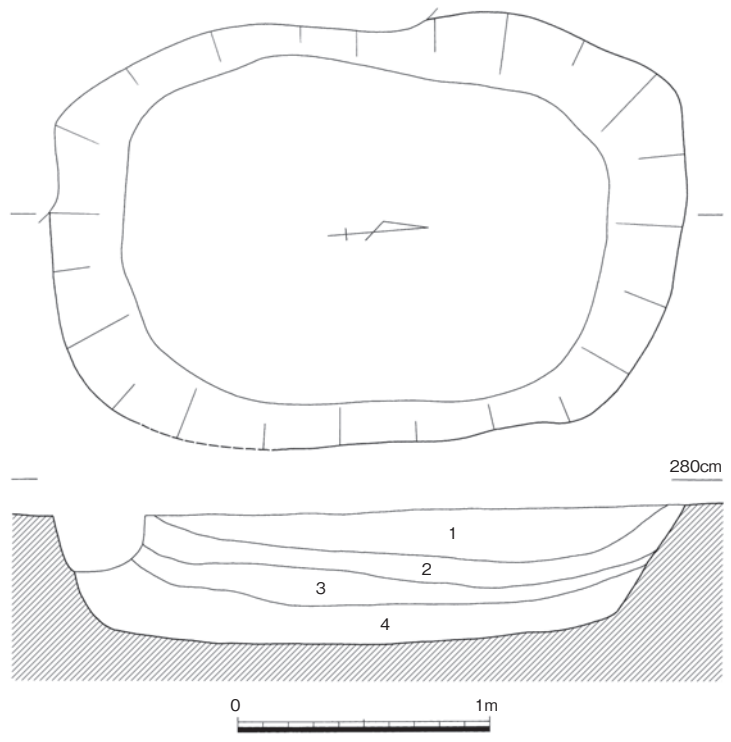


- 1 明黄褐色 (10YR6/6) 土 基盤層土塊多く含む
- 2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 基盤層土塊含む
- 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 炭含む
- 4 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 基盤層土塊含む
- 5 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 土
- 6 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 炭含む

第23図 土坑9 (1/30)・出土遺物 (1/4)



写真5 土坑9 (北西から)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
粒径1cm以下の焼土と木炭粒まばらに含む
- 2 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 3 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 粒径3~5cm大
の焼土粒と木炭粒多く含む 土器を多く含む
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊・黄色粘土塊
(粒径3~5cm大) 全体に多く含む

第24図 土坑10 (1/30)

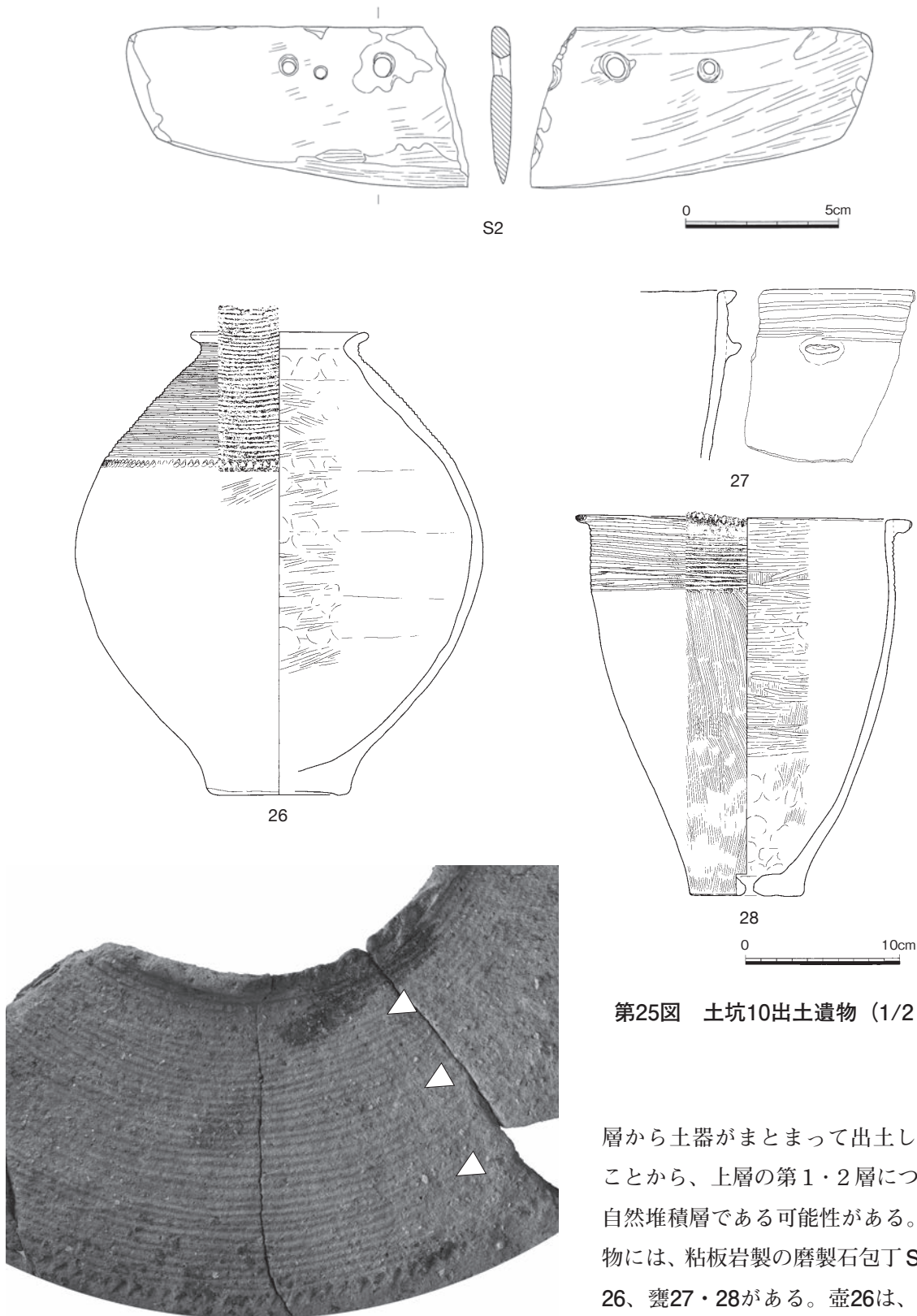
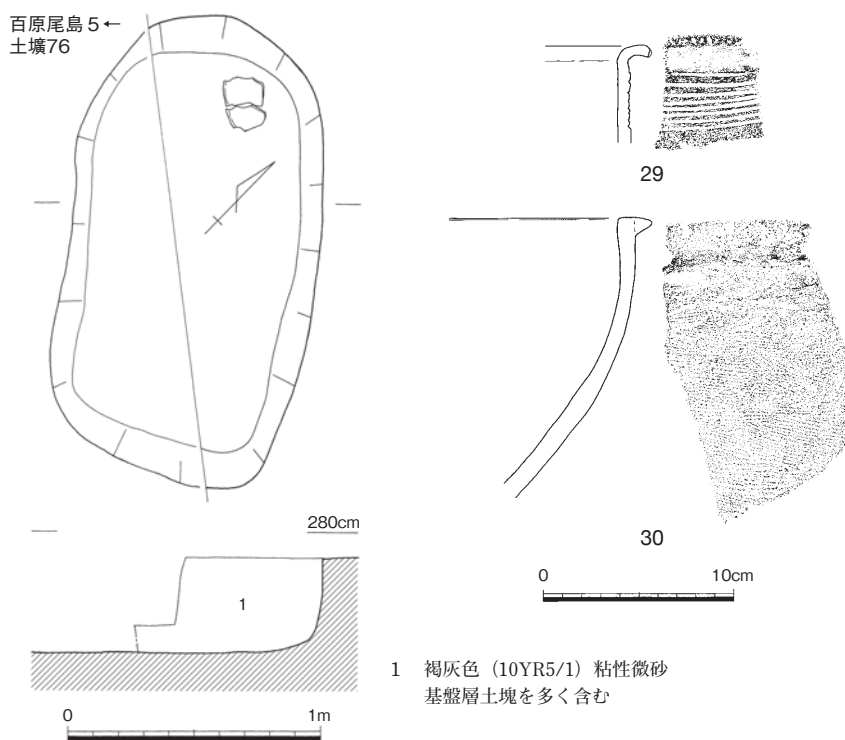


写真6 土坑10〈26〉

第25図 土坑10出土遺物 (1/2・1/4)

層から土器がまとまって出土していることから、上層の第1・2層については自然堆積層である可能性がある。出土遺物には、粘板岩製の磨製石包丁S2、壺26、甕27・28がある。壺26は、肩部に
 およそ38条の沈線が施されている。実測図の▽印にあたる部分で段差が観察されることから、およそ6条を単位として

沈線をまとめて施している可能性があるが、明確な工具の停止箇所が見られないため、ヘラ描き沈線文と考え、弥生時代前期の遺構として報告する。時期は百・前・Ⅲと考えた。(團)



第26図 土坑11 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑11 (第10～12・26図)

39C区の調査区南端で北側半分を検出した土坑である。過去に南側は調査されており、百原尾島5土壇76として報告されている。この調査成果を合わせたの規模は、長軸187cm、短軸100cm、深さ38cmを測る。平面形は、南東側では角を持っていることと、底面の形状が長方形であることから、もともとは長方形を呈すると考えられる。断面は箱状である。埋土には基盤層の土塊が多く含まれており、人為的に埋め戻したと考えられる。遺物は、

甕29・30である。これらの遺物は、百原尾島5土壇76の出土遺物の時期とも矛盾しない。遺構の時期は、百・前・Ⅲと考えられる。(團)

土坑12 (第10～12・27・28図、図版2-2)

40B区に位置する土坑で、土坑13に隣接している。平面形は長方形で、底面の平面形はやや歪ながら長方形を呈している。断面は逆台形を呈し、底面は平らである。埋土には基盤層の土塊や焼土を含んでいる。規模は長軸230cm、短軸152cm、深さ69cmを測る。当初、土坑12と土坑13を一緒に掘り下げたため、遺物のうち土器31～34、石器S3・S4はどちらに帰属するか不明である。甕35・36は土坑12から出土したもので、これらの土器から百・前・Ⅲの時期の遺構と考えられる。(團)

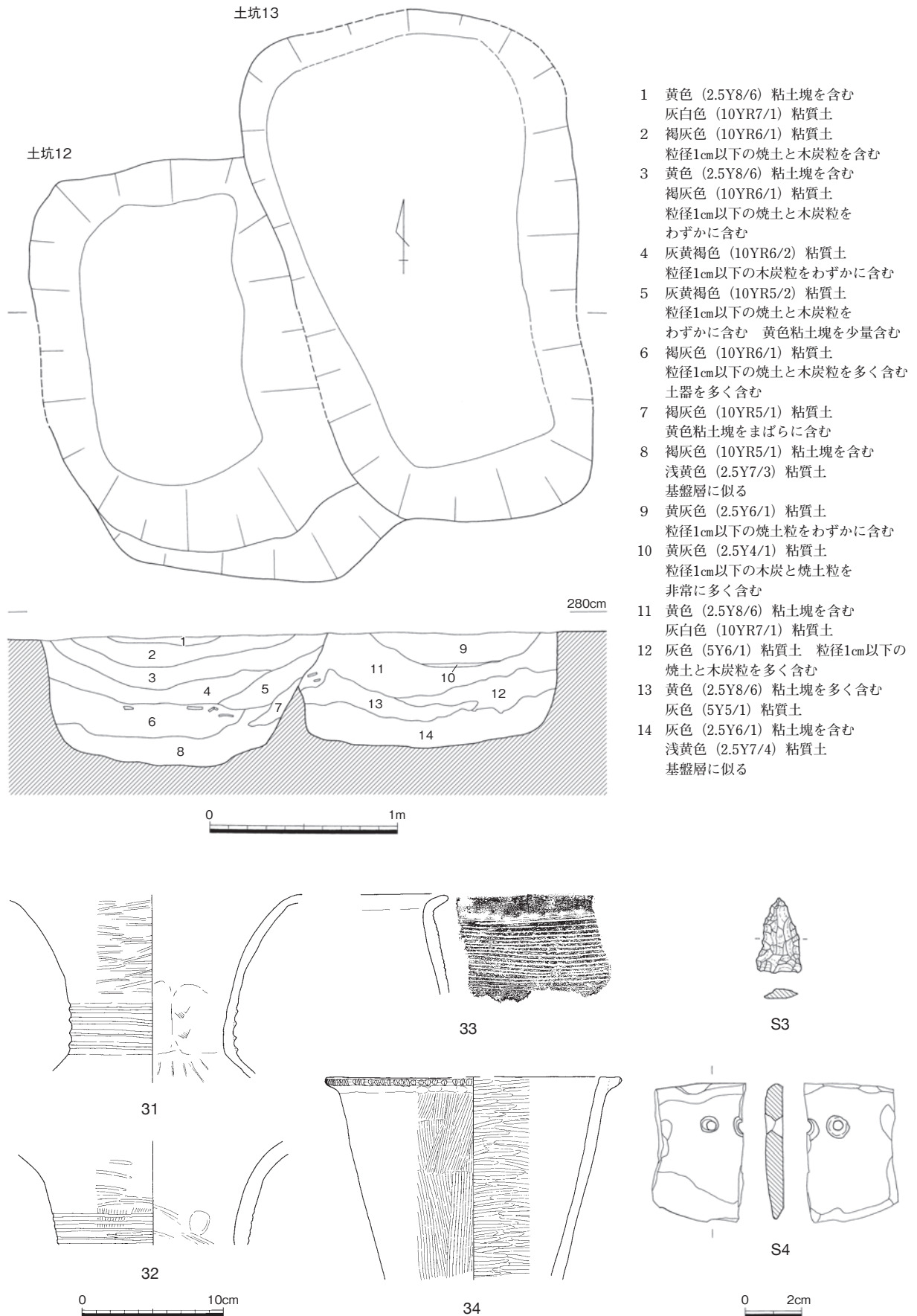
土坑13 (第10～12・27図、図版2-2)

40B区に位置する土坑で、土坑12に隣接し、土坑12に切られている。平面形は長方形を呈している。断面形は箱状で、底面は平らである。埋土には基盤層の土塊や焼土を多く含む。規模は長軸275cm、短軸173cm、深さ61cmを測る。出土遺物は土坑13から確実に出土したといえる遺物は無い。ただ、土坑13を切っている土坑12の出土遺物の時期が百・前・Ⅲであること、土坑12・13の帰属が不明の土器の特徴も同じであることから、この遺構の時期は、百・前・Ⅲであると考えられる。(團)

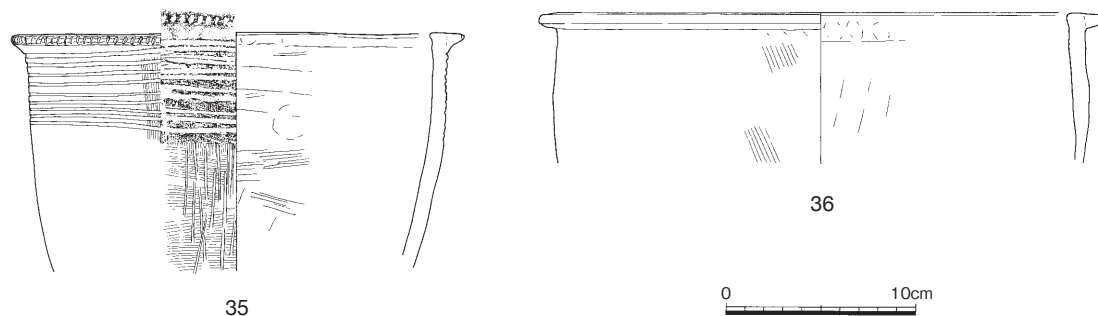
土坑14 (第10～12・29図)

40B区の西側において検出した土坑で、東側に近接して土坑15が位置する。上面の規模は長軸195cm以上、短軸103cmで、平面形は長方形を呈していた。検出面からの深さは37cmを測り、底面は標高240cm付近でほぼ水平をなし、壁面は直立気味に立ち上がる。

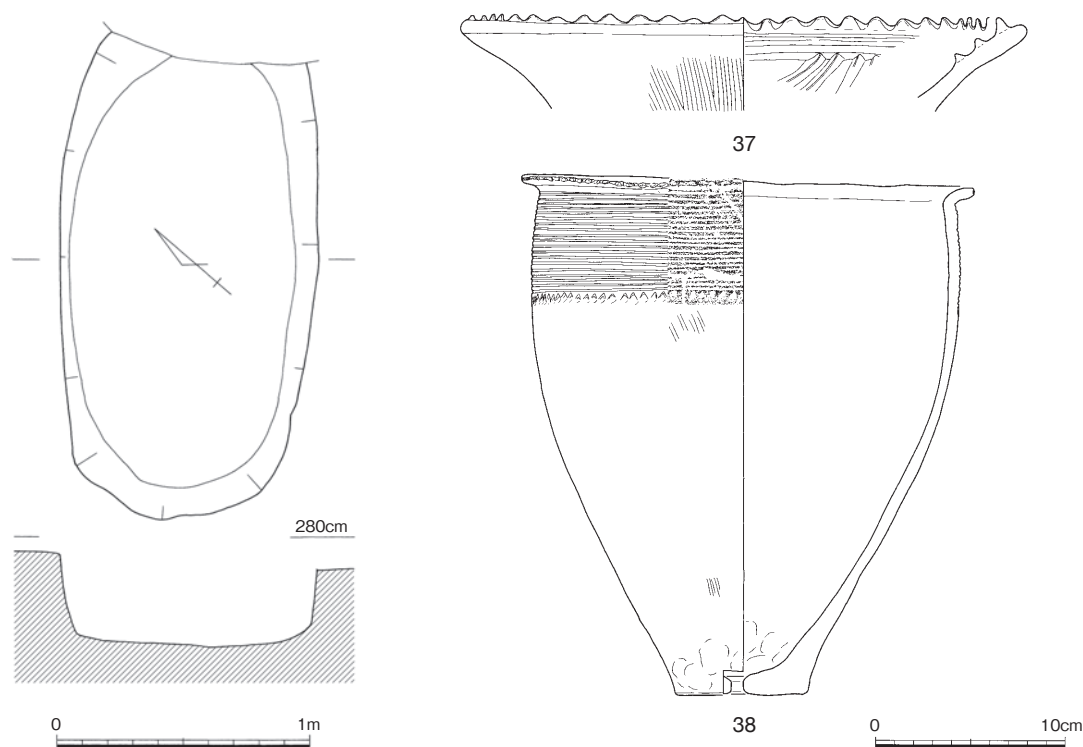
出土遺物には37・38がある。37は壺口縁部で、内側は貼り付け文で飾る。38は甕で、多状のヘラ描き沈線文である。時期は、百・前・Ⅲになる。(小林)



第27図 土坑12・13 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)



第28図 土坑12出土遺物 (1/4)



第29図 土坑14 (1/30)・出土遺物 (1/4)

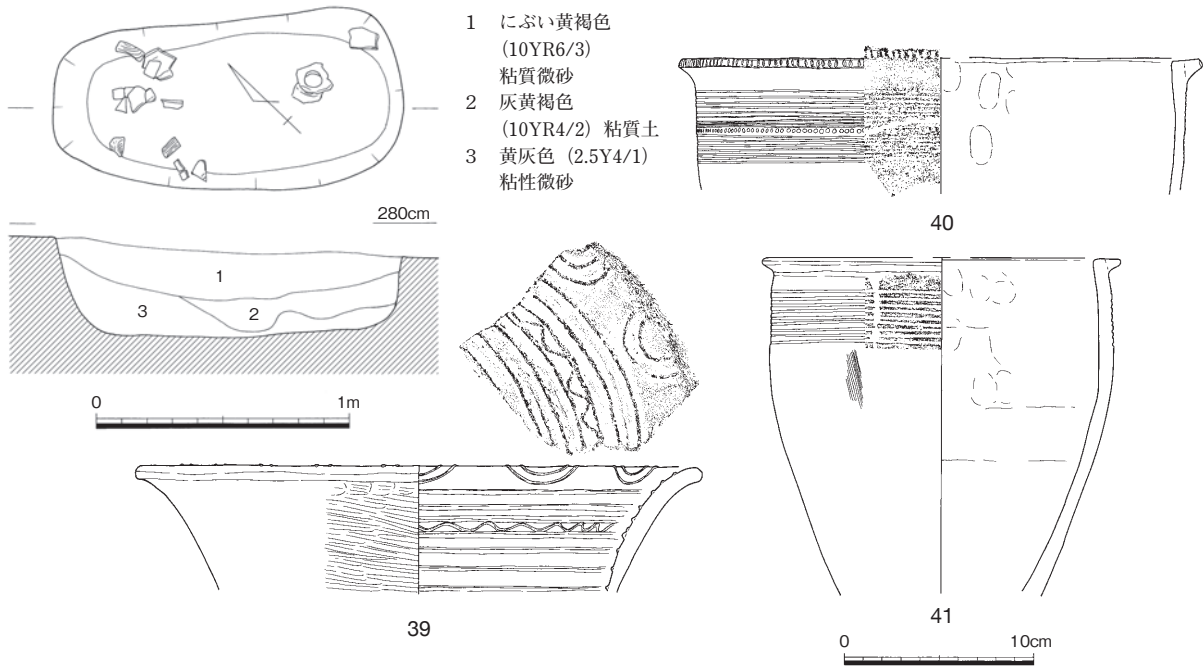
土坑15 (第10~12・30図、図版2-3)

40B区の西側において検出した土坑で、西側に近接して土坑14が位置する。上面の規模は、長軸137cm、短軸65cmで、平面形は長方形を呈していた。検出面からの深さは40cmで、標高235cmを測る底面は水平をなし、壁面は直立気味に立ち上がる。出土遺物には39~41があり、39壺、40・41甕である。時期は、百・前・Ⅲになる。(小林)

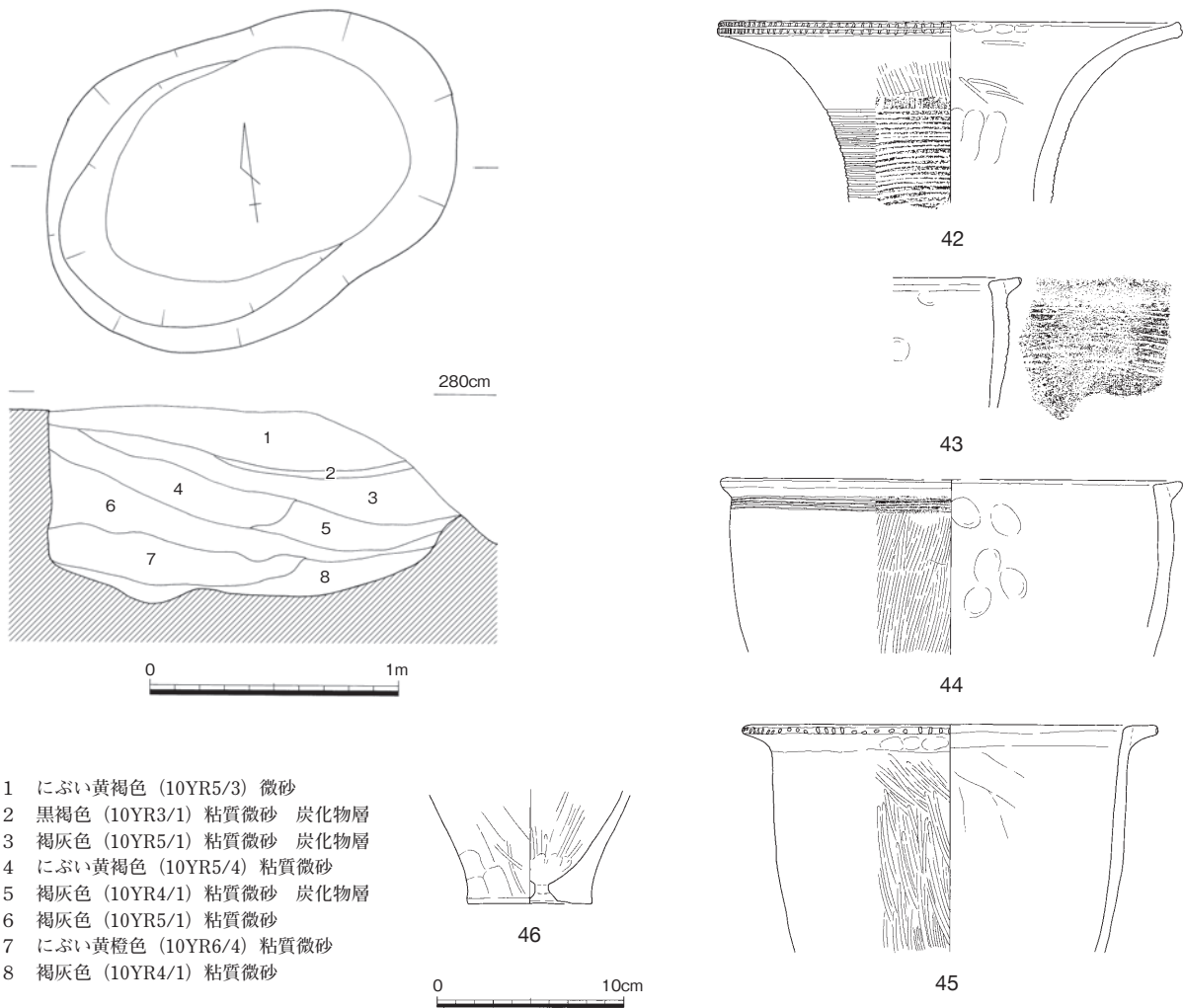
土坑16 (第10~12・31・32図)

40B区の南側において検出した土坑で、南側に近接して溝12が位置する。上面の規模は、長軸174cm、短軸122cmで、平面形は楕円形を呈していた。検出面からの深さは78cmで、標高200cmを測る底面には若干凹凸があり、壁面は直立気味に立ち上がる。

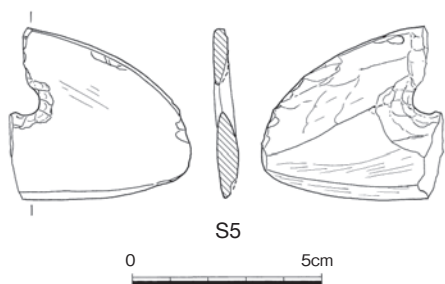
出土遺物には42~46がある。42が壺で、43~46は甕である。42は頸に細くへら描き沈線文がある。甕の内、43・44にはへら描き沈線文があるが、45には無い。時期は、百・前・Ⅲである。(小林)



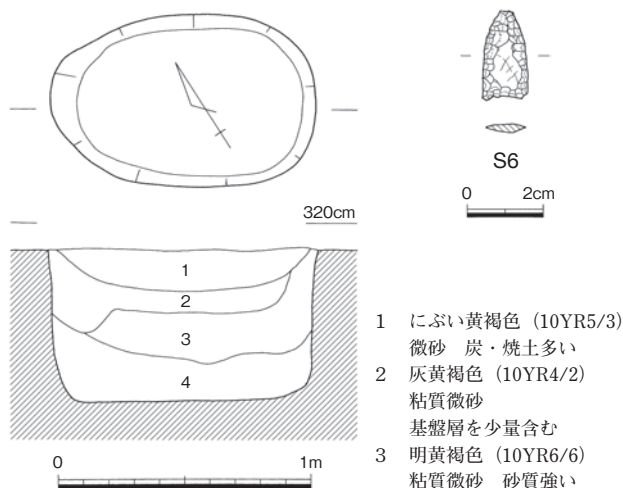
第30図 土坑15 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第31図 土坑16 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第32図 土坑16出土遺物② (1/2)



第33図 土坑17 (1/30)・出土遺物 (1/2)

- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 微砂 炭・焼土多い
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂 基盤層を少量含む
- 3 明黄褐色 (10YR6/6) 粘質微砂 砂質強い

土坑17 (第10～12・33図)

40B区において検出した土坑である。平面形は楕円形を、断面形は筒状を呈し、平面積のわりに深い規模は、長軸が102cm、短軸は68cmで、深さが60cmを測る。

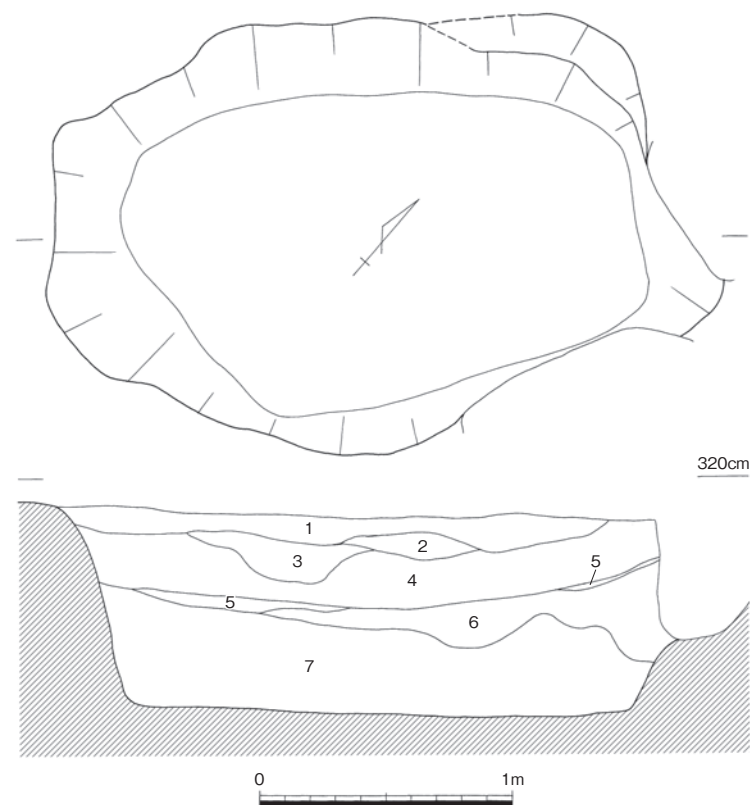
図示したのは、石鏃S6のみであるが、この土坑の時期は、百・前・Ⅲである。(弘田)

土坑18 (第10～12・34・35図)

40B区において検出した土坑である。この付近では柱穴が集中しており、それらとの切り合いが多いものの、平面形状は、長方形と考えられる。検出面での規模は、長軸が250cm、短軸は174cmで、深さが78cmである。壁面はほぼ垂直に近く、底面は平坦である。埋土は、炭層(第5層)を境に上下に分けられるが、第6層のように地山のブロックを含み、人為的に埋め戻された可能性が考えられる。

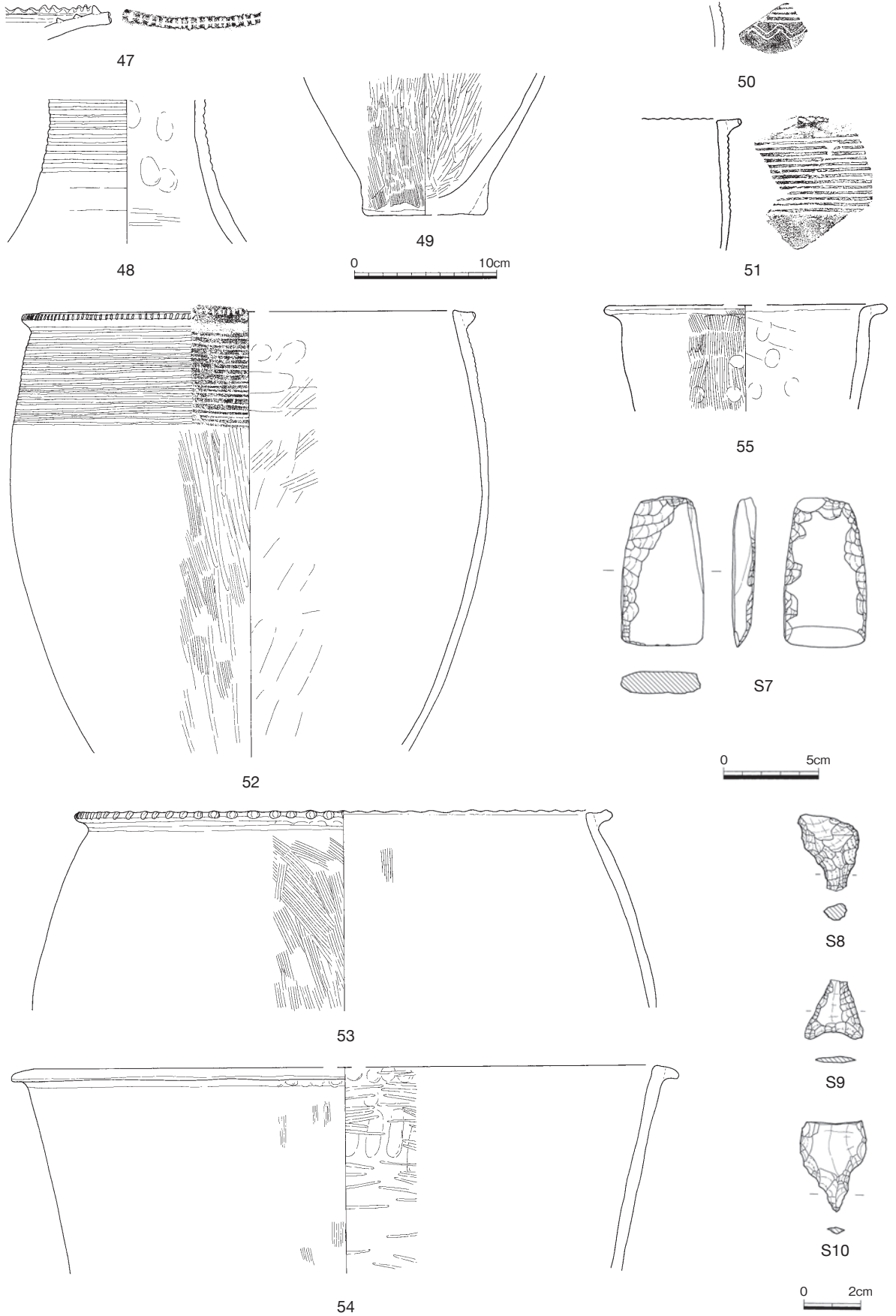
出土遺物としては、弥生土器の壺47～49、甕50～55や、石器として扁平方刃石斧S7、サヌ

カイト製の石鏃S9、石錐S8・10がみられる。このうち、47～49は頸部にヘラ描きの凹線を施す広口の壺である。51・52では、ヘラ状工具による沈線がみられるが55は無文となる。S7の石材は、粘板岩で地元産とみられる。この土坑の機能としては、貯蔵穴の可能性を指摘しておきたい。時期は、百・前・Ⅲである。(弘田)



第34図 土坑18 (1/30)

- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂
- 2 褐灰色 (7.5YR6/1) 粘質微砂 灰黄色 (2.5Y7/2) を含む
- 3 褐灰色 (7.5YR6/1) 粘質微砂
- 4 褐灰色 (7.5YR6/1) 粘質微砂 灰黄色 (2.5Y7/2) を含む
- 5 炭層
- 6 褐灰色 (5YR4/1) 粘質微砂 炭と基盤層土塊を含む
- 7 褐灰色 (5YR4/1) 粘質微砂

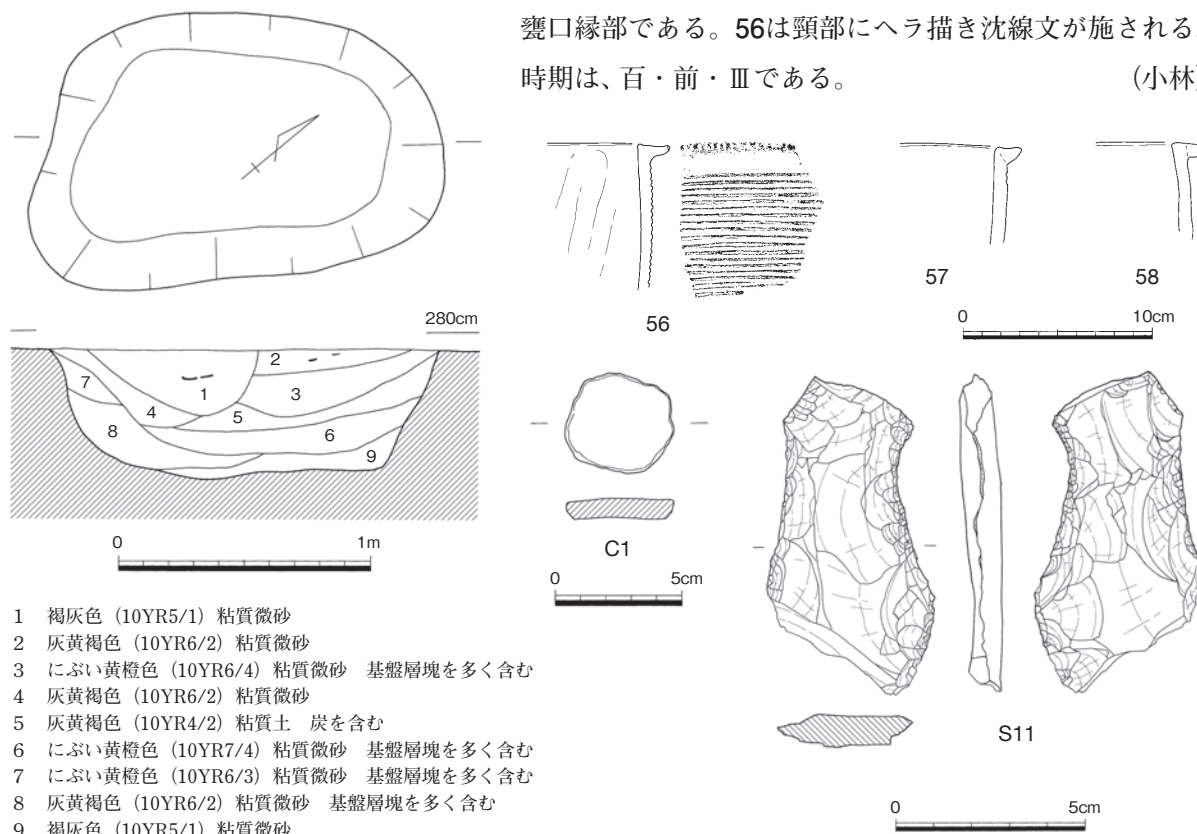


第35図 土坑18出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

土坑19 (第10~12・36図)

40B区の北側において検出した土坑で、溝12の北側に位置し、土坑20・60が近接する。上面の規模は、長軸153cm、短軸106cmで、平面形は不整楕円形を呈する。検出面からの深さは51cmで、標高226cmを測る底面は、若干の凹凸があるがほぼ平行であり、壁面は急峻に立ち上がる。遺物の出土は第1~

3層などの上層からが多い。出土土器には56~58があり、甕口縁部である。56は頸部にヘラ描き沈線文が施される。時期は、百・前・Ⅲである。 (小林)



- 1 褐灰色 (10YR5/1) 粘質微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂
- 3 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 粘質微砂 基盤層塊を多く含む
- 4 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 炭を含む
- 6 にぶい黄橙色 (10YR7/4) 粘質微砂 基盤層塊を多く含む
- 7 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘質微砂 基盤層塊を多く含む
- 8 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂 基盤層塊を多く含む
- 9 褐灰色 (10YR5/1) 粘質微砂

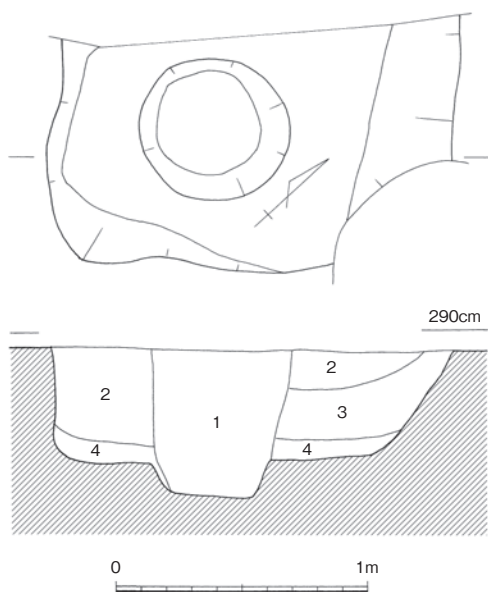
第36図 土坑19 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

土坑20 (第10~12・37・38図)

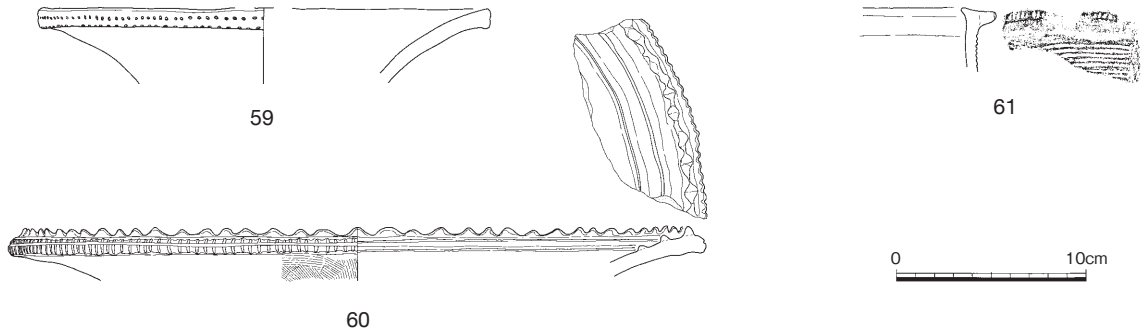
40B区の東側において検出した土坑で、溝12の北側に位置し、土坑19・60が近接する。上面の規模は、長軸156cm、短軸94cm以上で、平面形は方形を呈していた。検出面からの深さは42cmで、標高228cmを測る底面はほぼ水平をなし、壁面は東側が緩やかに、西側が直立気味に立ち上がる。

出土遺物には59~61があり、59・60は壺口縁部、61は甕口縁部である。百・前・Ⅲになる。 (小林)

- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土
- 3 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土



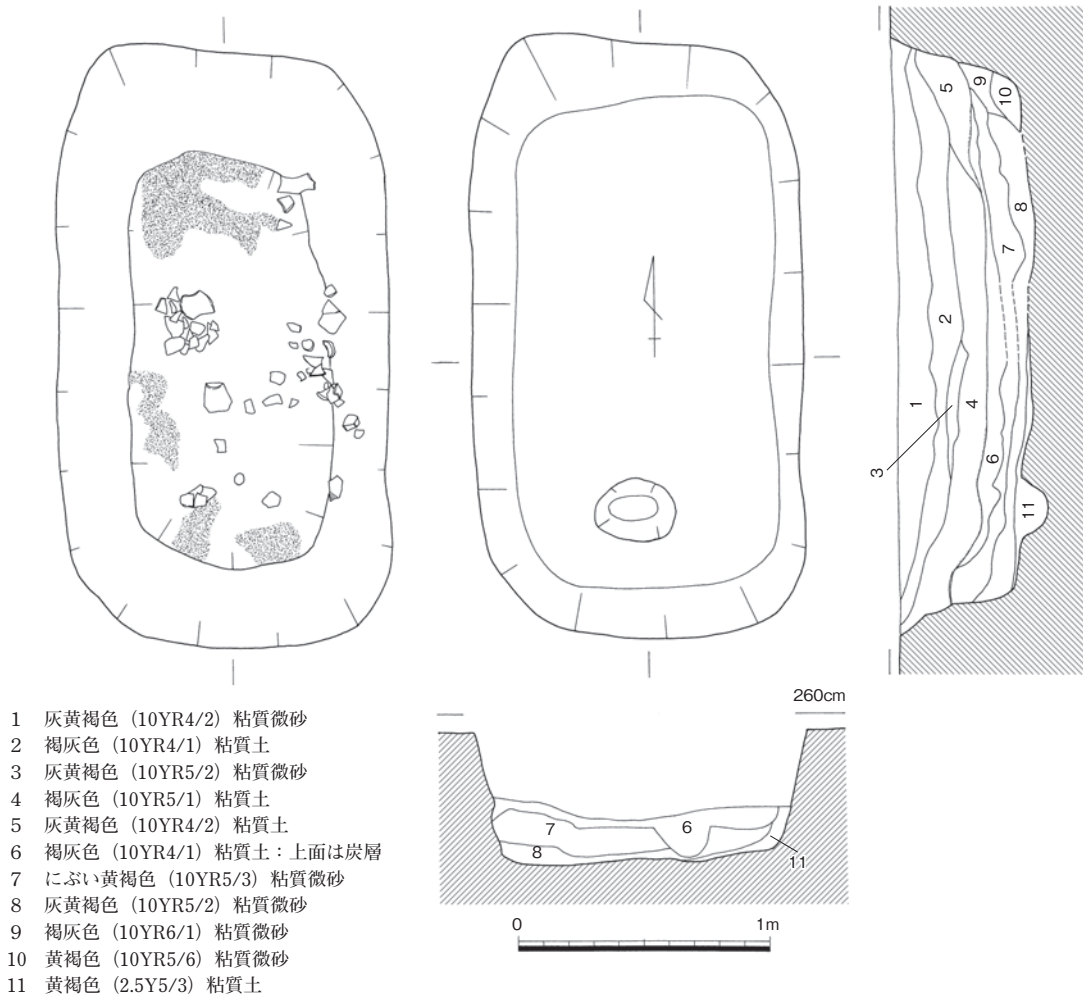
第37図 土坑20 (1/30)



第38図 土坑20出土遺物 (1/4)

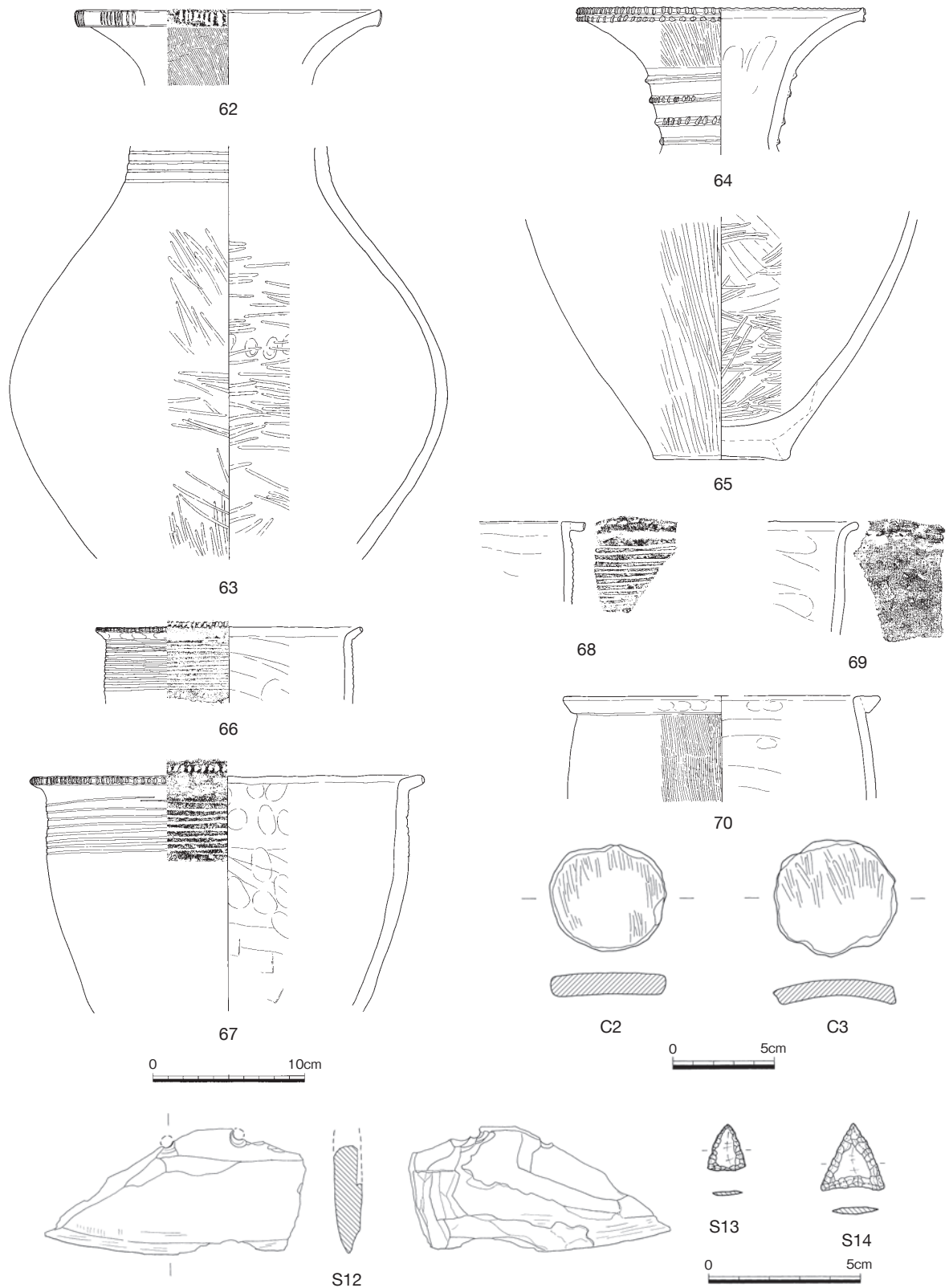
土坑21 (第10~12・39・40図)

40B区の南側において検出した土坑で、西側に近接して土坑63が位置する。上面の規模は、長軸236cm、短軸132cmで、平面形は長方形を呈していた。検出面からの深さは55cmで、標高195cmを測る底面は、ほぼ水平をなし、壁面は急峻に立ち上がる。埋土は上層(第1~5層)と下層(第6~11層)に大きく分かれ、その境には多量の炭層が存在した。遺物の大半は、炭層直上から上層にかけて出土したものである。62~65は壺で、頸部は63が沈線文であり、64は貼り付け文で飾る。また62・64の口縁端部は刻み目文で飾る。66~70は甕で、頸部がヘラ描き沈線文の66~68と、無文の69・70がある。



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土
- 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土
- 6 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土：上面は炭層
- 7 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂
- 8 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 9 褐灰色 (10YR6/1) 粘質微砂
- 10 黄褐色 (10YR5/6) 粘質微砂
- 11 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘質土

第39図 土坑21 (1/30)



第40図 土坑21出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

69は口縁を緩やかに外反させ、70は断面3角形の突帯を貼り付けるものがある。C2・C3は土器片を転用した土製円盤である。S12は粘板岩製の磨製石包丁の破片であり、S13・S14はサヌカイト製の石鏃である。この土坑は貯蔵穴の可能性が考えられ、時期は、百・前・Ⅲである。(小林)

土坑22 (第10~12・41図、写真7)

41B区の西側において検出した土坑で、東側に近接して土坑66が位置する。上面の規模は、長軸224cm、短軸125cmで、平面形は長方形を呈していた。検出面からの深さは59cmで、標高200cmを測る底面は、水平をなし、壁面は急峻に立ち上がる。

遺物の大半は、床面より浮いた状態で出土する。71は壺で、頸部を多状の貼り付け文で飾る。72・73は甕で、どちらも頸部にはへら描き沈線文を施す。S15は石包丁の破片である。これらの遺物の時期は、百・前・Ⅲであり、遺構の時期も同様である。 (小林)

土坑23 (第10~12・42図、図版20)

41B区の北側において検出した土坑で、溝12の南東側に位置する。上面の規模は、長軸136cm、短軸60cmで、平面形は楕円形を呈した。検出面からの深さは42cmで、標高223cmを測る底面は、水平をなすが、北側で一部凹みがあった。壁面は直立気味に立ち上がる。底面直上に75の半分が置かれていた。75の出土状況や底面の凹みから土坑墓になる可能性もあり、時期は、百・前・Ⅲになる。(小林)

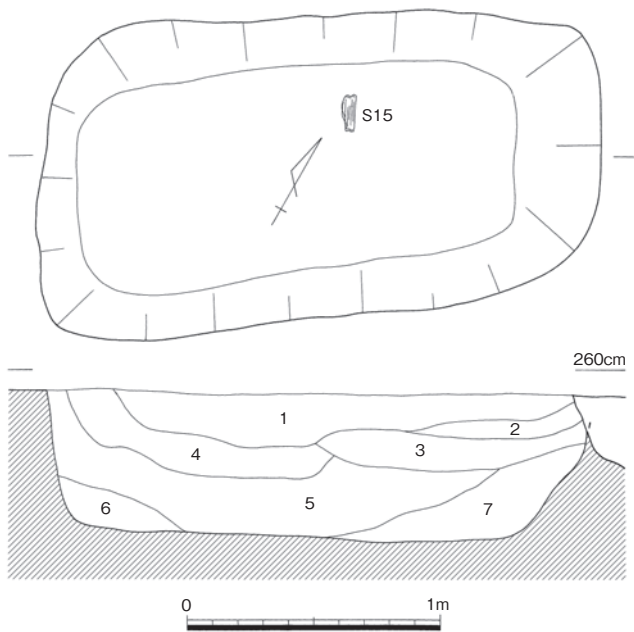
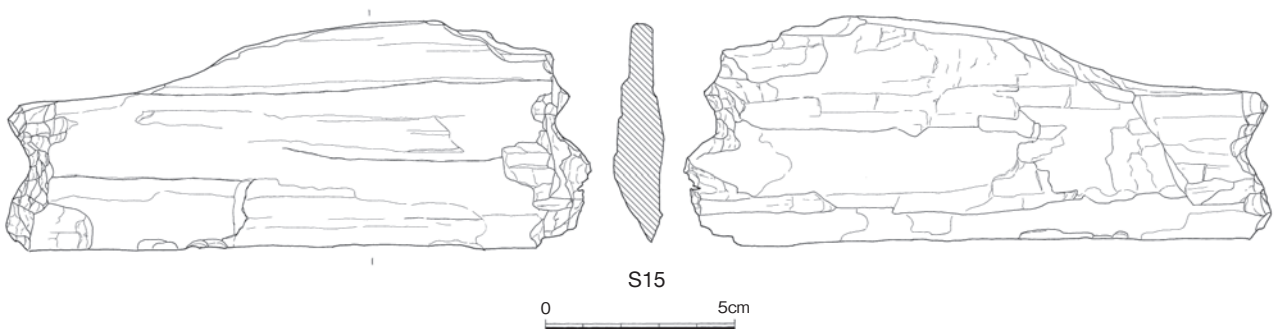
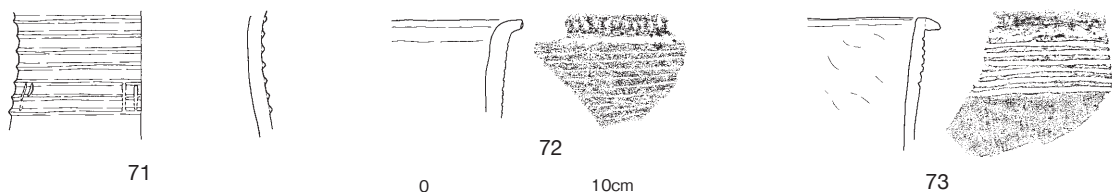
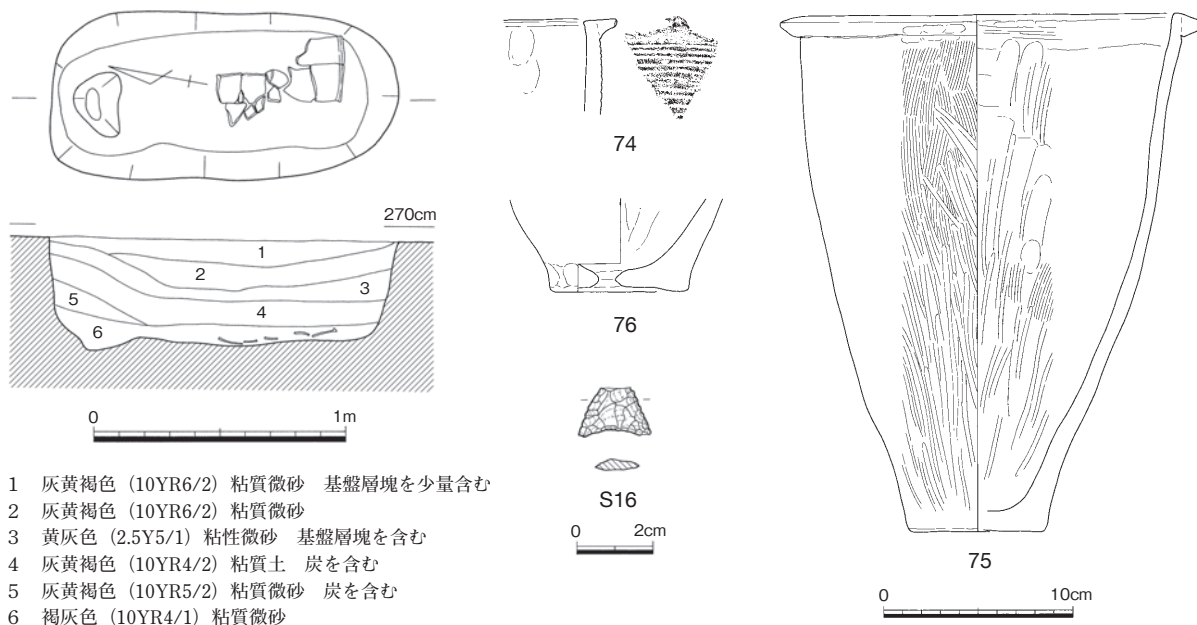


写真7 土坑22石包丁出土状況(南から)

- 1 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘性微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 4 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂
- 5 明黄褐色 (10YR7/6) 粘性微砂 基盤層塊を多く含む
- 6 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂
- 7 褐灰色 (10YR5/1) 粘質微砂



第41図 土坑22 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

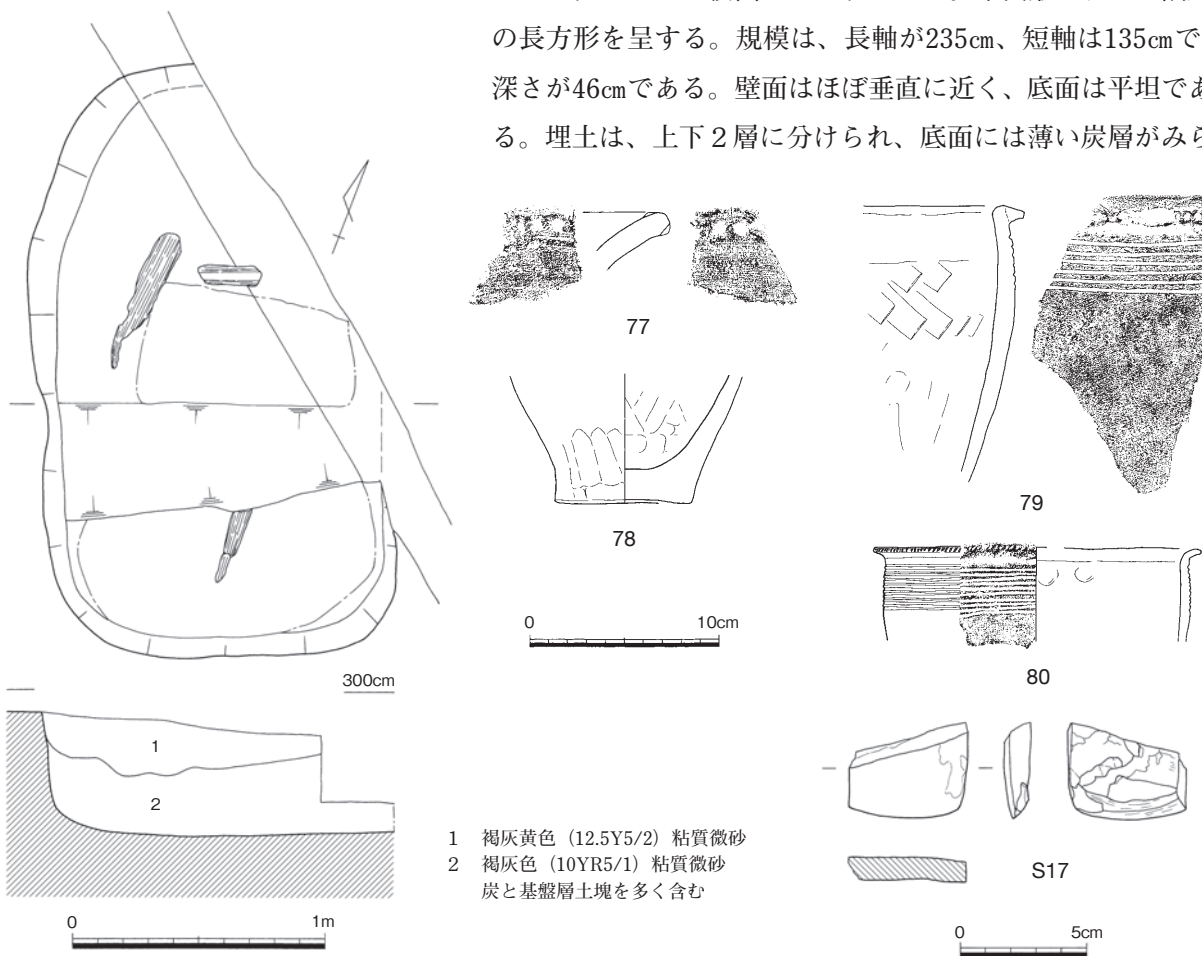


- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂 基盤層塊を少量含む
- 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂
- 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘性微砂 基盤層塊を含む
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 炭を含む
- 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂 炭を含む
- 6 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂

第42図 土坑23 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

土坑24 (第10~12・43図)

41A区において検出した土坑である。平面形は、やや隅丸の長方形を呈する。規模は、長軸が235cm、短軸は135cmで、深さが46cmである。壁面はほぼ垂直に近く、底面は平坦である。埋土は、上下2層に分けられ、底面には薄い炭層がみら



- 1 褐灰黄色 (12.5Y5/2) 粘質微砂
- 2 褐灰色 (10YR5/1) 粘質微砂 炭と基盤層土塊を多く含む

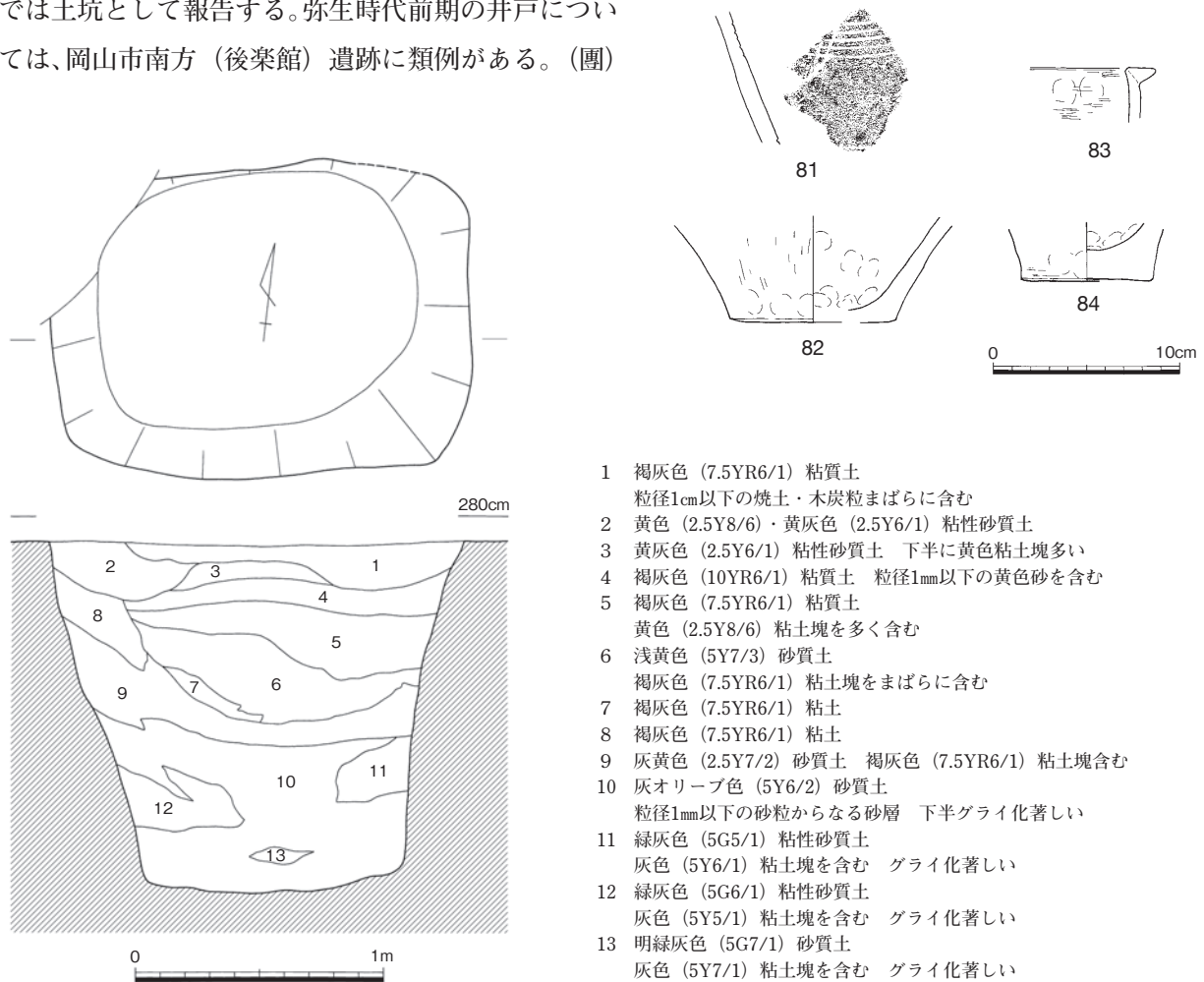
第43図 土坑24 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

れたほか、炭化材がわずかに残存していた。

出土遺物としては、弥生土器の壺口縁部片77、甕底部片78、甕の口縁部片79・80があり、石器としては粘板岩製の扁平方刃石斧片S17がみられる。79は貼り付けた口縁端部に刻み目を施し、直下にはヘラ描きの沈線文を施す。80では緩やかに外反させた口縁部の直下にヘラ状工具による沈線を施す。この土坑の機能としては、貯蔵穴の可能性を考えている。時期は、百・前・Ⅲである。 (弘田)

土坑25 (第10～12・44図、図版3-1)

39B区の微高地に位置する土坑である。規模は長軸168cm、短軸126cm、深さ140cmを測り、底面の標高は128cmである。平面形は長方形を呈し、断面形は逆台形である。底面は平らであった。この土坑の基盤層は下半から砂に変化するためか、埋土が第9層以下では砂質土に変化している。出土遺物は多くなく、図化したもの以外は、図化できない細片が少量である。壺81・82、甕83・84が出土している。いずれも小片での出土である。壺81は、5条のヘラ描き沈線文を施し、2単位以上が巡る。甕83は三角形の貼り付け帯の口縁部を持ち、外面はナデ調整のみが見られる。これらの遺物の特徴から、遺構の時期は百・前・Ⅲであると考えられる。この土坑の平面形や規模は、さほど他の長方形を呈する土坑と変わりはない。深さが140cm、底面の標高128cmは、後世の弥生時代後期や古墳時代の井戸はと比較してもそう変わりがなく、湧水していた可能性は十分に考えられる。ただ、一般的に井戸は弥生時代中期から出現するとされることから、ここでは土坑として報告する。弥生時代前期の井戸については、岡山市南方(後楽館)遺跡に類例がある。(團)



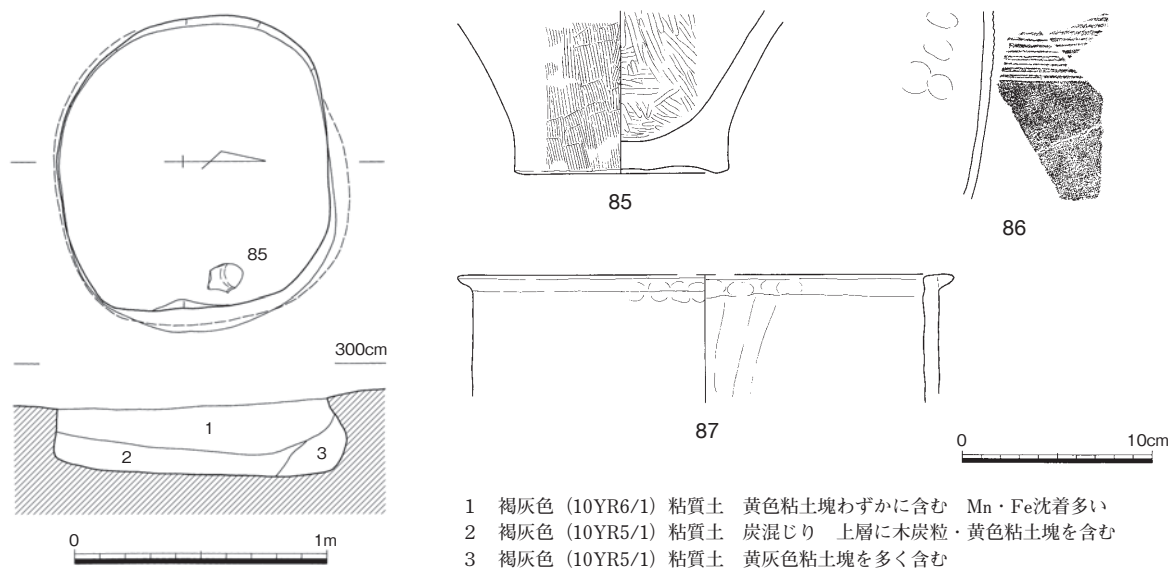
第44図 土坑25 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑26 (第10~12・45図、図版3-2)

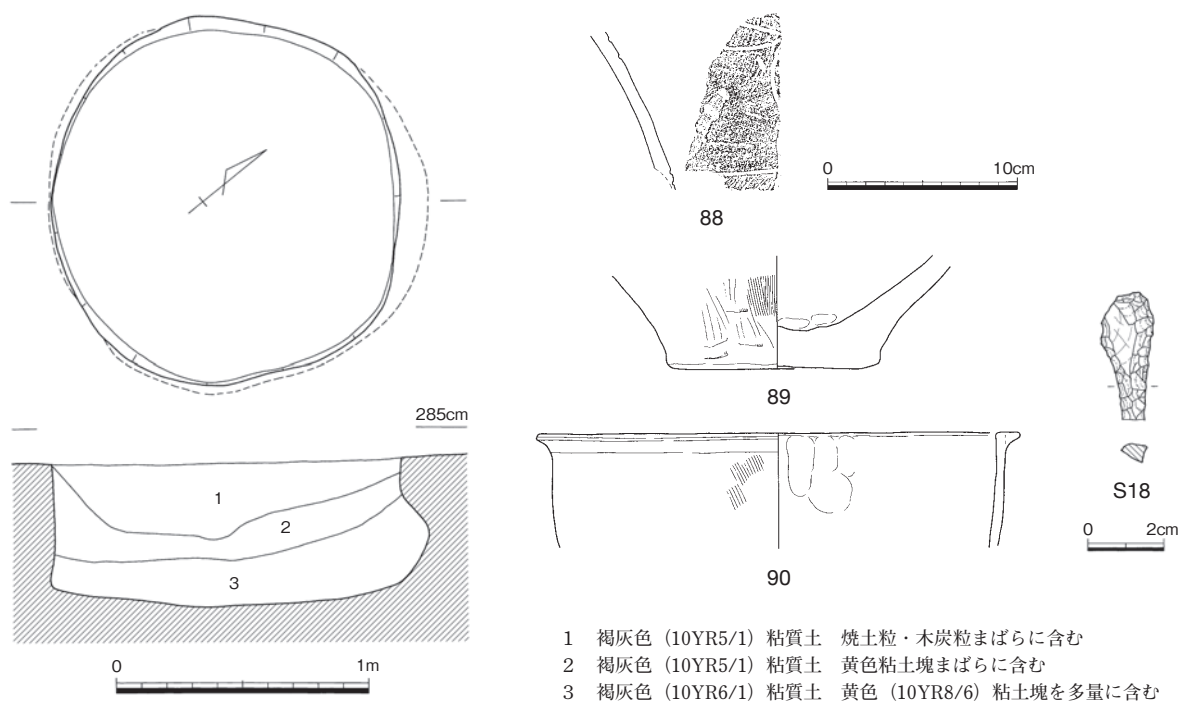
39B区の微高地に位置する土坑である。平面形は円形を呈しており、断面の形状は袋状で底面は平らである。いわゆる袋状土坑と呼ばれているもので、今回の調査で3基出土している。規模は長軸115cm、短軸107cm、深さ30cmである。出土遺物には、壺85、甕86・87がある。底面からは壺85が出土している。これらの遺物から、遺構の時期は百・前・Ⅲであると考えられる。(團)

土坑27 (第10~12・46図、図版3-3)

40B区の微高地に位置する土坑である。平面形は円形を呈しており、断面は内傾して袋状を呈しており、底面は平らである。規模は長軸145cm、短軸138cm、深さ56cmを測る。出土遺物には、壺88・89、



第45図 土坑26 (1/30)・出土遺物 (1/4)

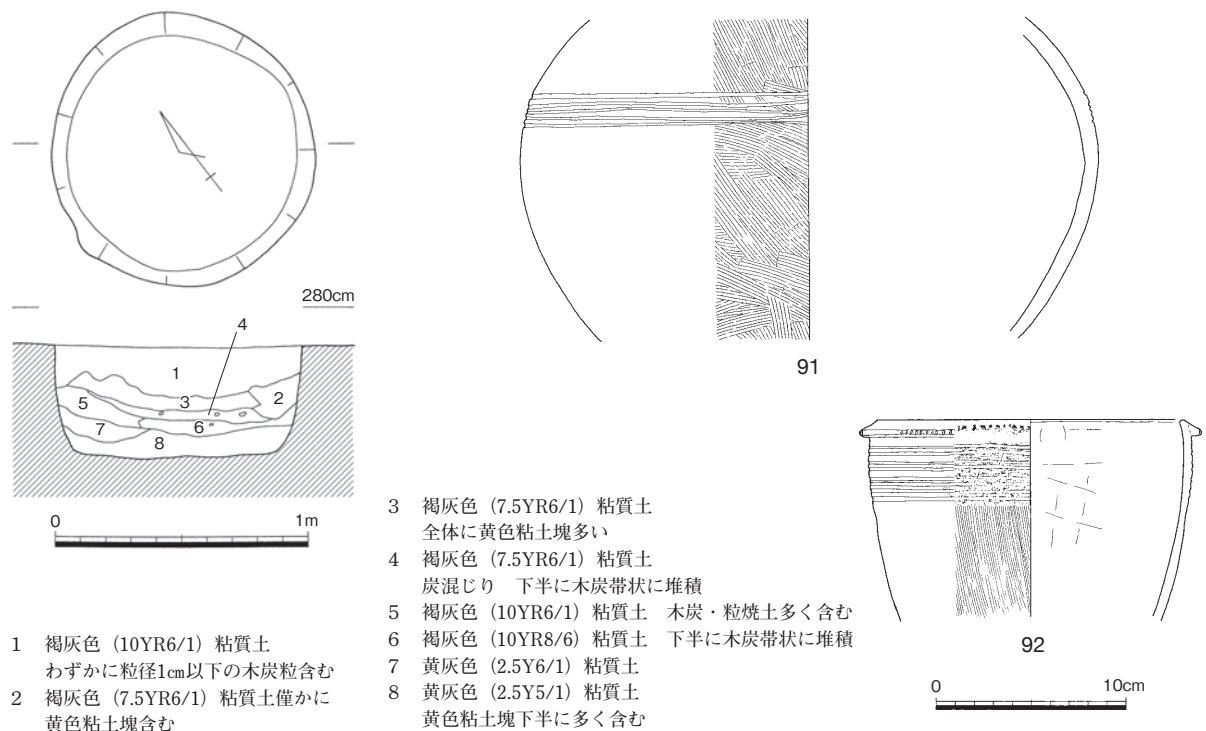


第46図 土坑27 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

甕90、石錐S 18がある。壺88の外面上には、木葉文と考えられる文様の一部が見られる。甕90は外面がハケとナデによる調整である。これらの遺物から遺構の時期は百・前・Ⅲと考えられる。(團)

土坑28 (第10～12・47図)

39・40B区の微高地に位置する土坑である。平面形は円形で、断面は箱状を呈しており、床面は平らであった。規模は長軸108cm、短軸98cm、深さ43cmを測る。埋土には炭・焼土を多く含んでいる。出土遺物には、壺91、甕92があり、どちらも外面にはヘラ描き沈線文を施している。甕92の口縁端部には刻み目がほどこされている。これらの遺物から、遺構の時期は百・前・Ⅲであろう。(團)



第47図 土坑28 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑29 (第10～12・48図)

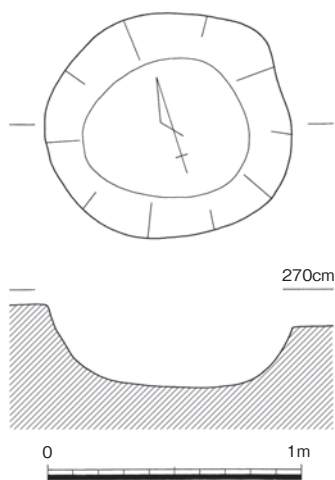
38B区の、微高地西端に位置する土坑である。平面形は円形を呈しており、断面形は椀状である。規模は、長軸97cm、短軸89cm、深さ28cmを測る。出土遺物はないものの、検出状況から、弥生時代前期の遺構であると判断した。(團)

土坑30 (第10～12・49図)

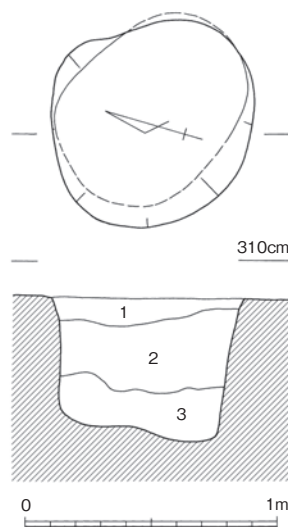
38B区の、微高地西端に位置する土坑である。平面形は楕円形を呈し、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。規模は長軸89cm、短軸81cm、深さ56cmを測る。出土遺物はないものの、検出状況から、弥生時代前期の遺構であると判断した。(團)

土坑31 (第10～12・50図)

38B区の、微高地西端に位置する土坑である。平面形は円形を呈しており、断面の形状は逆台形で底面は平らであった。規模は、長軸87cm、短軸86cm、深さ28cmを測る。出土遺物ないものの、検出状況から、弥生時代前期の遺構であると判断した。(團)

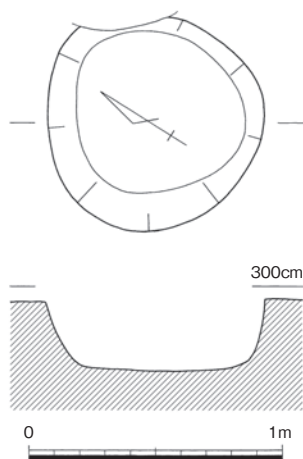


第48図 土坑29 (1/30)



- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土
黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊含む
わずかに1cm以下の焼土粒を含む
- 2 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土
黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を含む
- 3 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を
全体に多く含む

第49図 土坑30 (1/30)



第50図 土坑31 (1/30)

土坑32 (第10～12・51図)

39B区に位置する土坑で、平面はやや不整形な楕円形、断面は椀状を呈する。規模は長軸170cm、短軸145cm、深さ38cmを測る。埋土の第1～3層は特に焼土を多く含んでおり、平面の焼土はこの層を面的に検出したものである。土器は少量出土し、多条のヘラ描き沈線文を施した甕が出土し、百・前・Ⅲの時期と考えられる。(團)

土坑33 (第10～12・52図)

39B区に位置する土坑で、平面は長方形を、断面は皿状を呈している。規模は、長軸137cm、短軸67cm、深さ25cmを測る。出土遺物は無いものの、検出状況や周辺の遺構の状況から、弥生時代前期の遺構であると考えられる。(團)

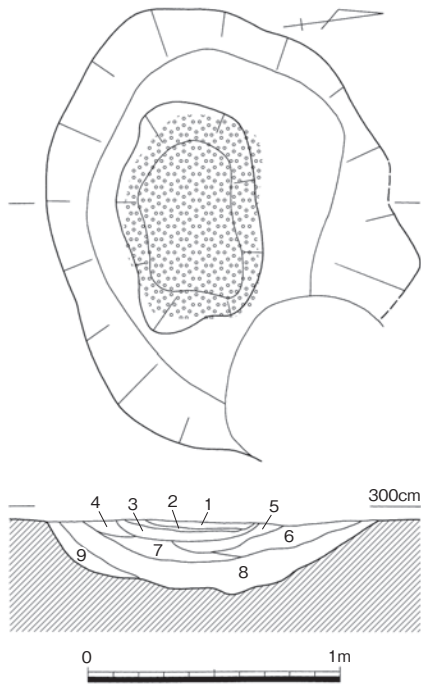
土坑34 (第10～12・53図)

39B区位置する土坑である。平面形は楕円形で、断面は台形を呈している。規模は長軸162cm、短軸127cm、深さ33cmを測る。埋土中には多くの焼土塊が入り、大きいものでは一辺が40cm程度もあった。これらは床面から浮いているものが多く、この土坑に伴うものではなく、廃棄された可能性がある。焼土塊以外の遺物は無いが、検出状況から弥生時代前期の遺構であると考えられる。(團)

土坑35 (第10～12・54図、巻頭図版4-2、図版20)

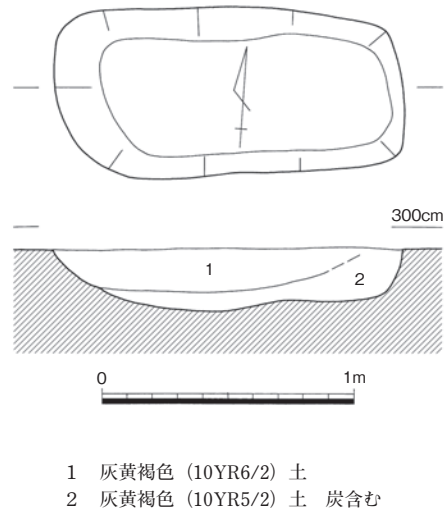
39B区の微高地に位置する土坑で、規模は長軸90cm、短軸59cm、深さ32cmを測る。平面は楕円形で底面の東側に柱穴状の落ち込みがみられる。出土遺物には、甕93～95、石鏃S19がある。甕93は、口縁の形状が円形を呈しており、いわゆる粘土帯土器と呼ばれるものである。小片で、約幅7cm、高さ5cmの大きさに出土している。復元した口径は11.7cmとなるが、口縁の残存は1/6以下となる。胎土には砂礫があまり含まず、色調は明黄褐色を呈している。内外面の調整はナデと押圧であり、小破片でありながら歪な形状で、器壁や口縁部の形状も一定していない。このことから回転台を使用して成形していないようである。しかし、口縁部上端に強いナデ行うことから朝鮮系無文土器との関連性は強

いものの、在地で作られた可能性の高い土器であるといえる。共伴している甕94・95から百・前・Ⅲの時期の遺構と考えられる。(團)



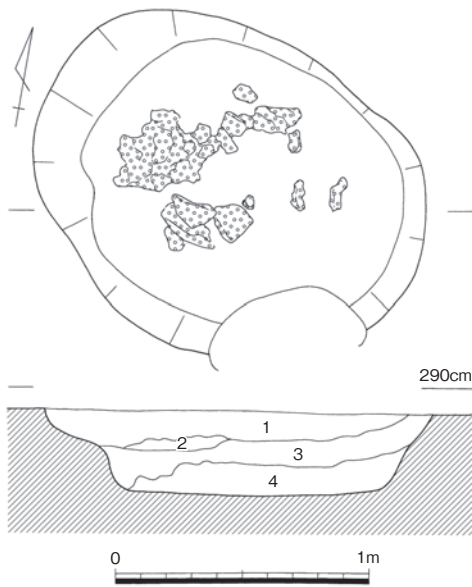
- 1 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 微砂
炭・焼土を含む
- 2 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘性微砂
炭・焼土を多く含む
- 3 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘性微砂
炭・焼土を含む
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2)
粘性微砂
- 5 にぶい黄褐色 (10YR4/3)
粘性微砂
- 6 明黄褐色 (10YR6/6)
粘性微砂で基盤層土塊を
多く含む
- 7 灰黄褐色 (10YR5/2)
粘性微砂
炭・焼土を含む
- 8 褐灰色 (10YR5/1)
粘性微砂
炭・焼土を多く含む
- 9 明黄褐色 (10YR6/6)
粘性微砂で基盤層土塊を
多く含む

第51図 土坑32 (1/30)



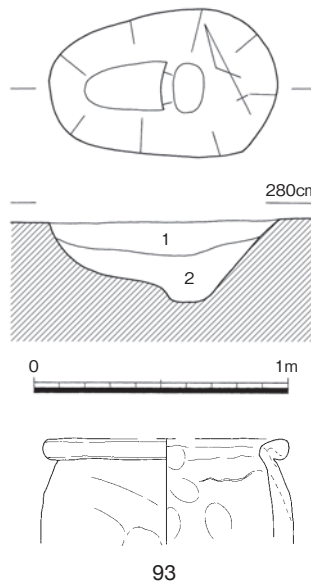
- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 土
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 炭含む

第52図 土坑33 (1/30)

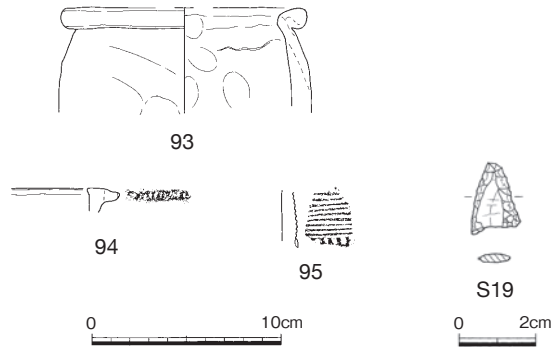


- 1 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土
粒径3~1cm大の木炭粒・焼土粒をまばらに含む
- 2 灰白色 (10YR7/1) 粘質土
粒径5~3cm大の焼土粒を多く含む
- 3 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 4 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土
粒径3~1cm大の焼土粒を多く含む

第53図 土坑34 (1/30)



- 1 黄灰色 (2.5Y4/1)
粘質土
- 2 にぶい黄色 (2.5Y6/3)
粘質土



第54図 土坑35 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

土坑36 (第10~12・55図)

39B区の微高地に位置する土坑で、不整形な土坑である。長軸140cm、短軸88cm、深さ10cmを測るが、底面には凹凸が目立つ。出土遺物は石鏃S20が1点ある。検出状況が、遺構の最終確認のために基盤層を15cm以上下げたため、弥生時代前期のものとした。(團)

土坑37 (第10~12・56図)

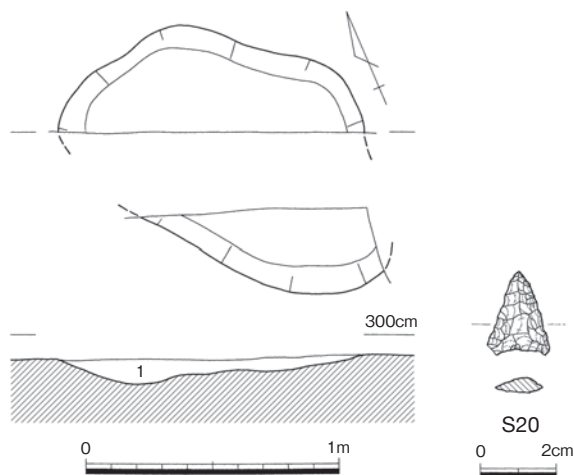
39B区の微高地に位置する土坑で、平面形はやや歪な楕円形を、断面は椀状を呈している。規模は長軸103cm、短軸62cm、深さ15cmを測る。隣接する土坑38を切っている。出土遺物には甕96があり、この遺物から弥生時代前期の遺構であると判断した。(團)

土坑38 (第10~12・56図)

39B区の微高地に位置する土坑で、平面形は不整形な円形を、断面は椀状を呈している。隣接している土坑37によって切られている。規模は長軸90cm、深さ17cmを測る。土坑37の切り合い関係から、弥生時代前期の遺構であると考えられる。(團)

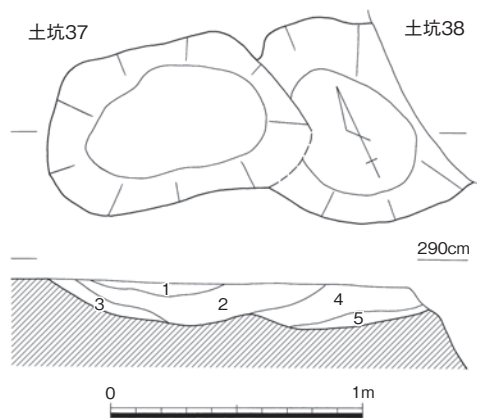
土坑39 (第10~12・57図)

39B区の微高地に位置する土坑である。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈している。規模は長軸92cm、短軸64cm、深さ11cmを測る。出土遺物には、甕97、石鏃S21がある。甕97は口縁部が如意状で、内外面の調整はナデによる。小片のために図化できなかったが、多条のへら描き沈線文を施している甕も出土している。これらの遺物から、遺構の時期は百・前・Ⅲであると考えられる。(團)

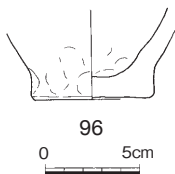


1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂

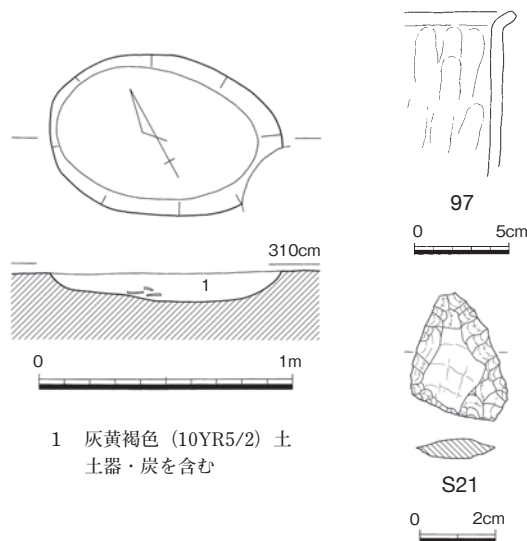
第55図 土坑36 (1/30)・出土遺物 (1/2)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂
- 3 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘性微砂
- 4 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性微砂
- 5 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘性微砂



第56図 土坑37・38 (1/30)
・土坑37出土遺物 (1/4)



1 灰黄褐色 (10YR5/2) 土器・炭を含む

第57図 土坑39 (1/30)
・出土遺物 (1/2・1/4)

土坑40 (第10~12・58図、巻頭図版4-3、図版20)

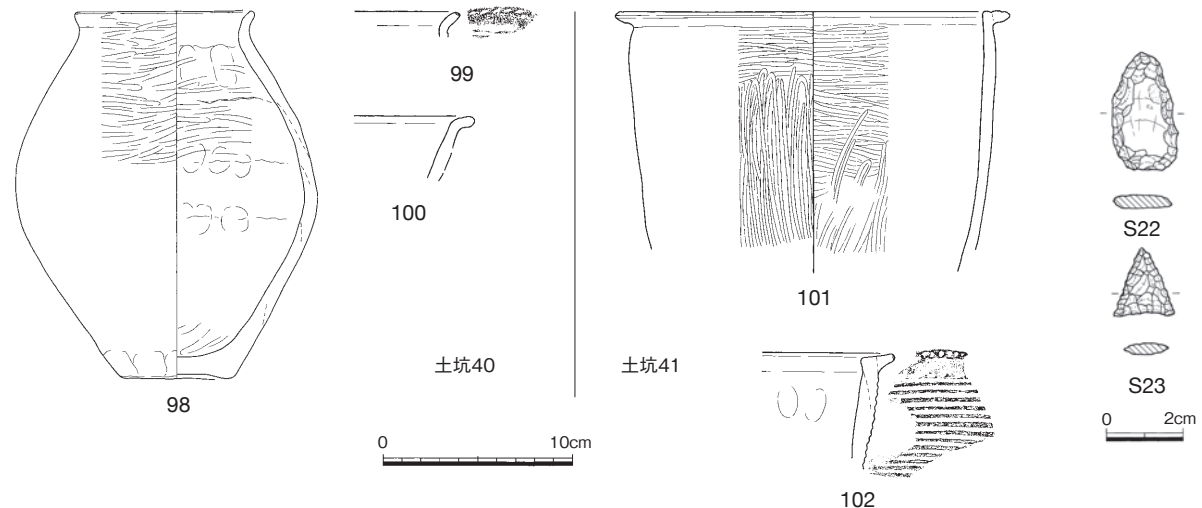
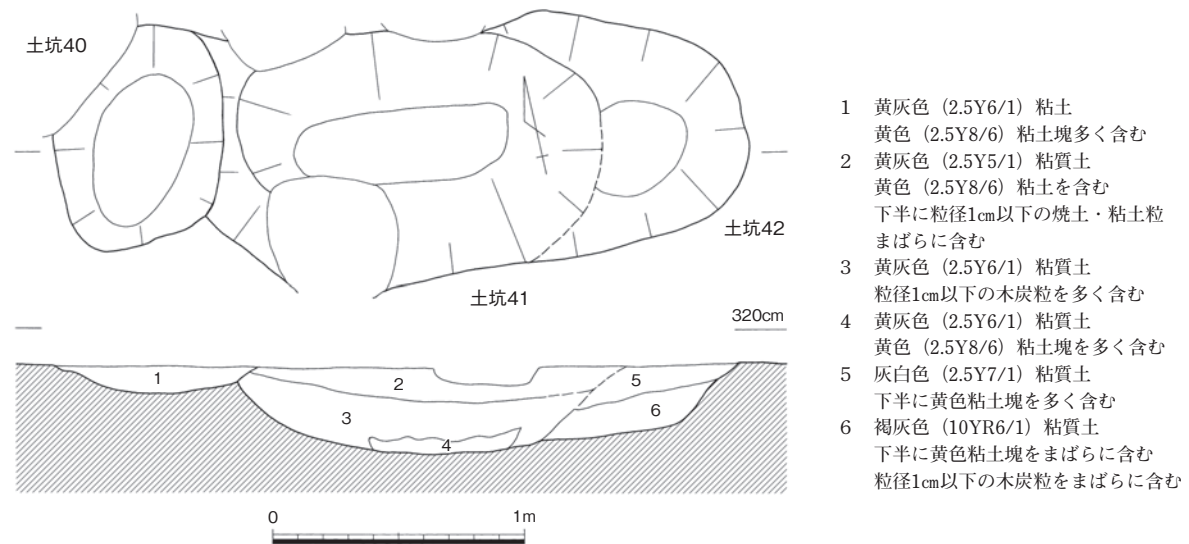
39B区の微高地に位置する土坑で、平面は楕円形、断面は皿状を呈する土坑である。規模は長軸93cm、短軸68cmを測り、深さは11cmと浅い。出土遺物には壺98、甕99、鉢100がある。壺98は短頸で、短く外反する口縁部を持ち、胴部最大径の場所は一定していない。底部外面には押圧が見られ、やや上げ底となる。胎土には砂礫を多く含む。調整は内外面にヘラミガキを施している。松菊里式土器を模倣して、在地で製作されたものであろう。時期は遺物の特徴から百・前・Ⅲと考えられる。(團)

土坑41・42 (第10~12・58図)

39B区の微高地に位置する土坑で、土坑40に切られている土坑である。土坑41と42は平面では1つの土坑として検出し、南側を半裁して、2つの土坑であると判断した。土坑41は長軸143cm、短軸100cm、深さ34cmを、土坑42は、長軸118cm、短軸92cm、深さ26cmを測る。土坑41からは甕101・102、石鏃S22・S23が出土しており、遺構の時期は百・前・Ⅲと考えられる。(團)

土坑43 (第10~12・59図、図版29)

39B区の微高地に位置する土坑で、平面形は円形、断面形は碗状を呈している。規模は長軸54cm、短軸44cm、深さ32cmを測る。出土遺物には、埋土の上層から土製の紡錘車C4が1点、出土している。



第58図 土坑40~42 (1/30)・土坑40・41出土遺物 (1/2・1/4)

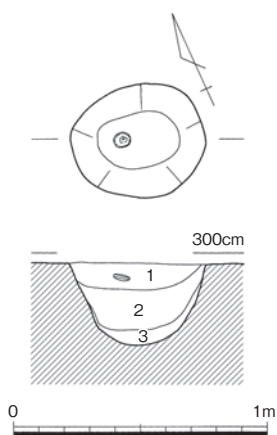
この遺物や遺構の検出状況などから、弥生時代前期の遺構であると考えられる。 (團)

土坑44 (第10~12・60図)

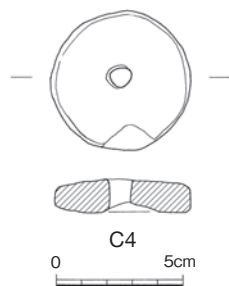
39B区の微高地に位置する土坑で、平面形はやや歪な楕円形を、断面は西側がやや凹む皿状を呈している。規模は、長軸81cm、短軸61cm、深さ17cmを測る。出土遺物はない。検出状況などから、弥生時代前期の遺構であると判断した。 (團)

土坑45 (第10~12・61図)

39B区の微高地に位置する土坑で、平面を規模は長軸の残存長が112cm、深さ20cmを測る。出土遺物は細片が少量で、多条のヘラ描沈線を施した甕がある。また百・中・Iの時期の遺物が出土している土坑73に切られていることから、百・前・Ⅲの遺構であると考えられる。 (團)



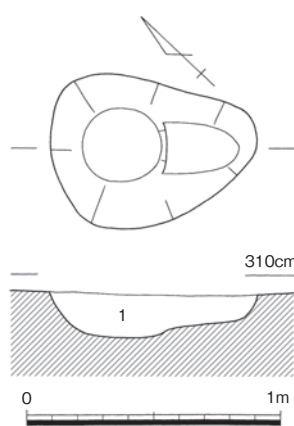
- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粘性微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂
- 3 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘性微砂



第59図 土坑43 (1/30)
・出土遺物 (1/3)

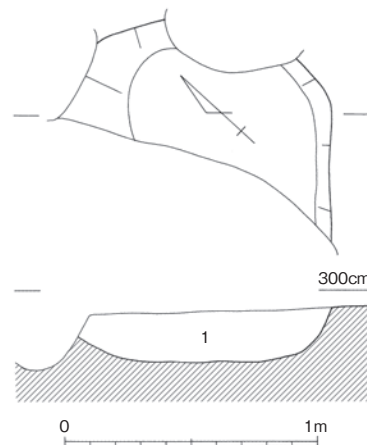
土坑46 (第10~12・62図)

39B区に位置する土坑で、平面形は楕円形、断面は椀状を呈している。規模は長軸113cm、短軸83cm、深さ37cmを測る。遺物の、うち甕104の口縁部上端には山形文が配される。遺構の時期は百・前・Ⅲである。 (團)



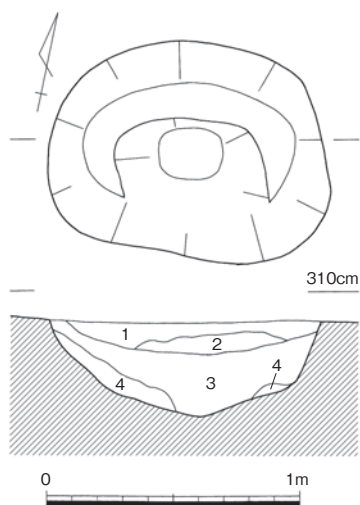
- 1 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 粘質土

第60図 土坑44 (1/30)



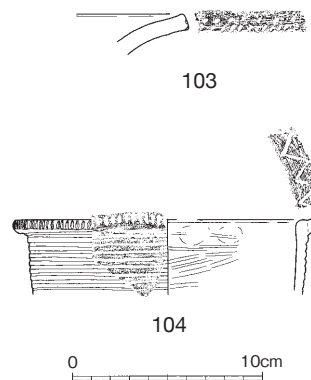
- 1 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘性微砂

第61図 土坑45 (1/30)



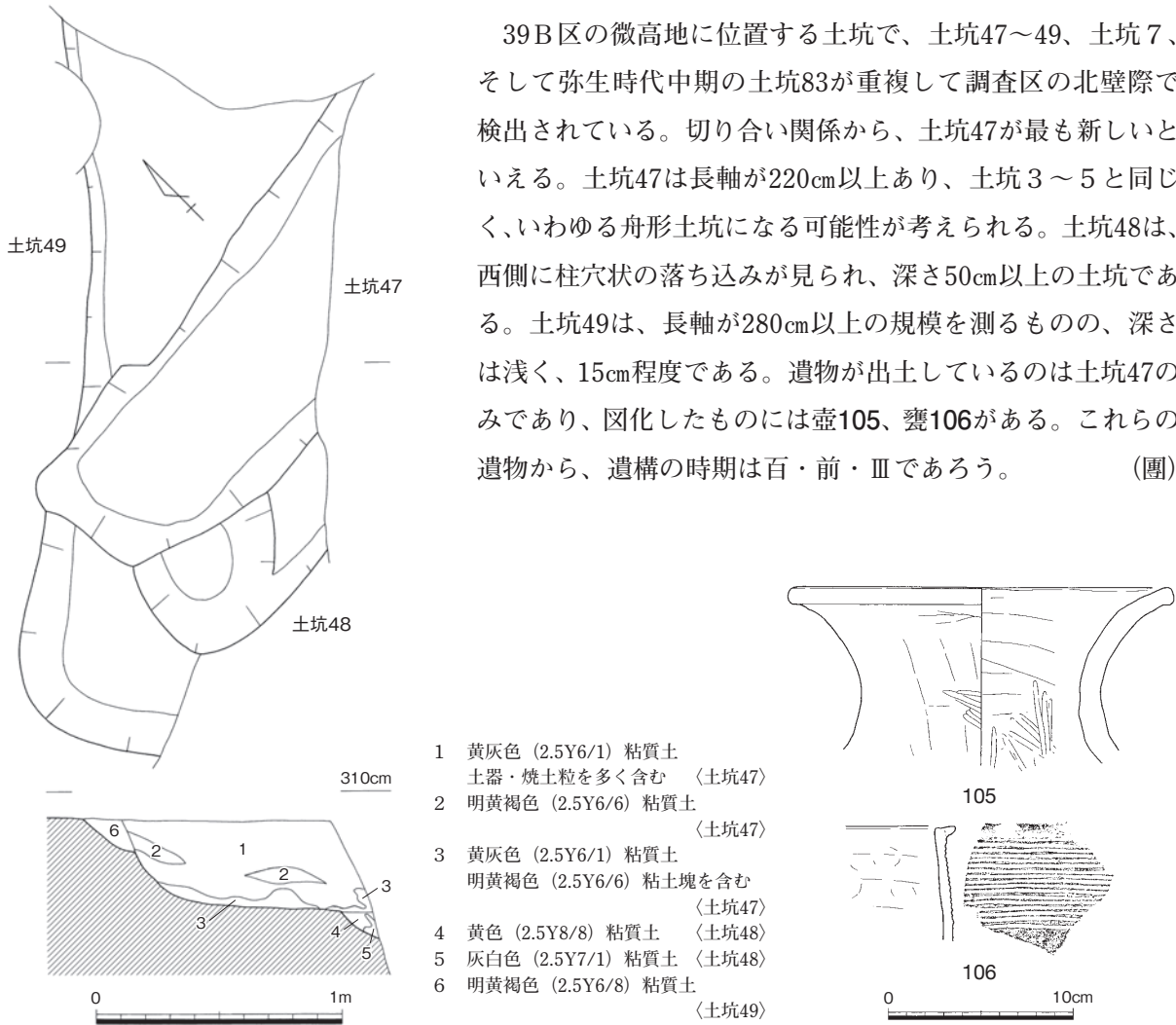
- 1 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土
焼土粒・木炭粒まばらに含む
- 2 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質土
黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を含む
- 3 褐灰色 (7.5YR6/1) 粘質土
焼土粒・木炭粒まばらに含む
- 4 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘質土
基盤層に似た土

第62図 土坑46 (1/30)・出土遺物 (1/4)



土坑47～土坑49 (第10～12・63図)

39B区の微高地に位置する土坑で、土坑47～49、土坑7、そして弥生時代中期の土坑83が重複して調査区の北壁際で検出されている。切り合い関係から、土坑47が最も新しいといえる。土坑47は長軸が220cm以上あり、土坑3～5と同じく、いわゆる舟形土坑になる可能性が考えられる。土坑48は、西側に柱穴状の落ち込みが見られ、深さ50cm以上の土坑である。土坑49は、長軸が280cm以上の規模を測るものの、深さは浅く、15cm程度である。遺物が出土しているのは土坑47のみであり、図化したものには壺105、甕106がある。これらの遺物から、遺構の時期は百・前・Ⅲであろう。(團)



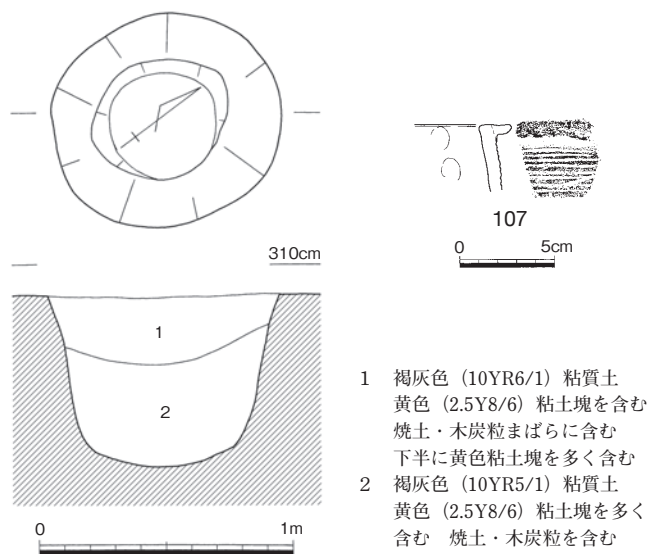
第63図 土坑47～49 (1/30)・土坑47出土遺物 (1/4)

土坑50 (第10～12・64図)

39B区の微高地に位置し、平面形は円形、断面は椀状を呈している。規模は長軸91cm、短軸84cm、深さ67cmを測る。埋土には基盤層を多く含んでいる。出土遺物には甕107があり、口縁部は倒Lの形状で貼り付け、多条のへら描き沈線文を施している。百・前・Ⅲの時期と考えられる。(團)

土坑51 (第10～12・65図)

39B区の微高地に位置している。平面形は楕円を呈し、断面は皿状を呈している。長軸183cm、短軸127cm、深さ19cmを呈している。出土遺物には、甕108、砥石S24、石

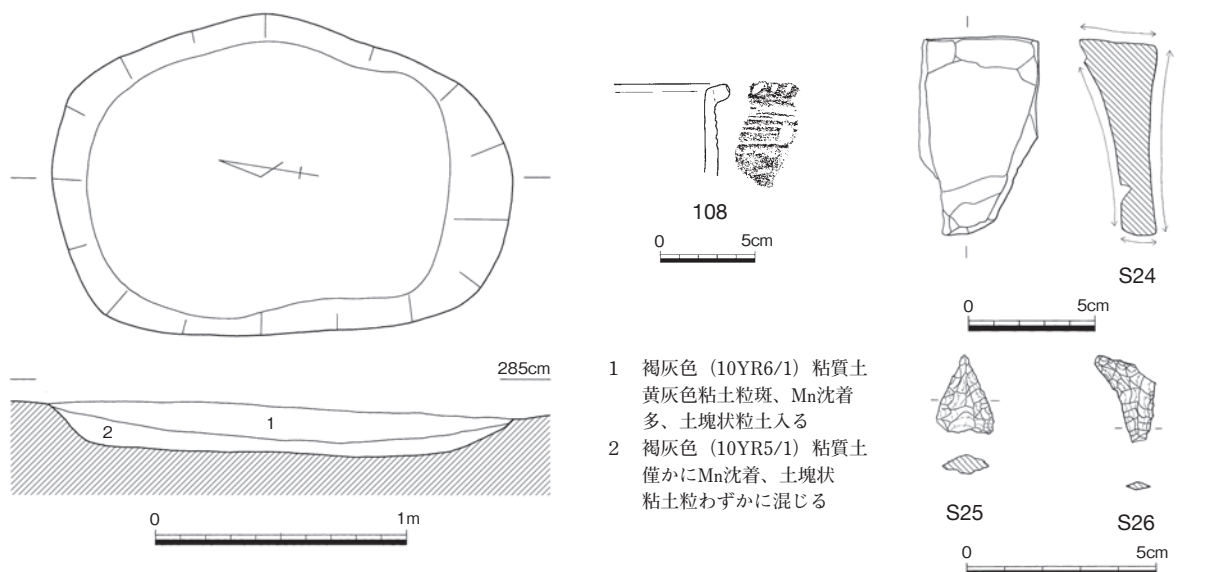


第64図 土坑50 (1/30)・出土遺物 (1/4)

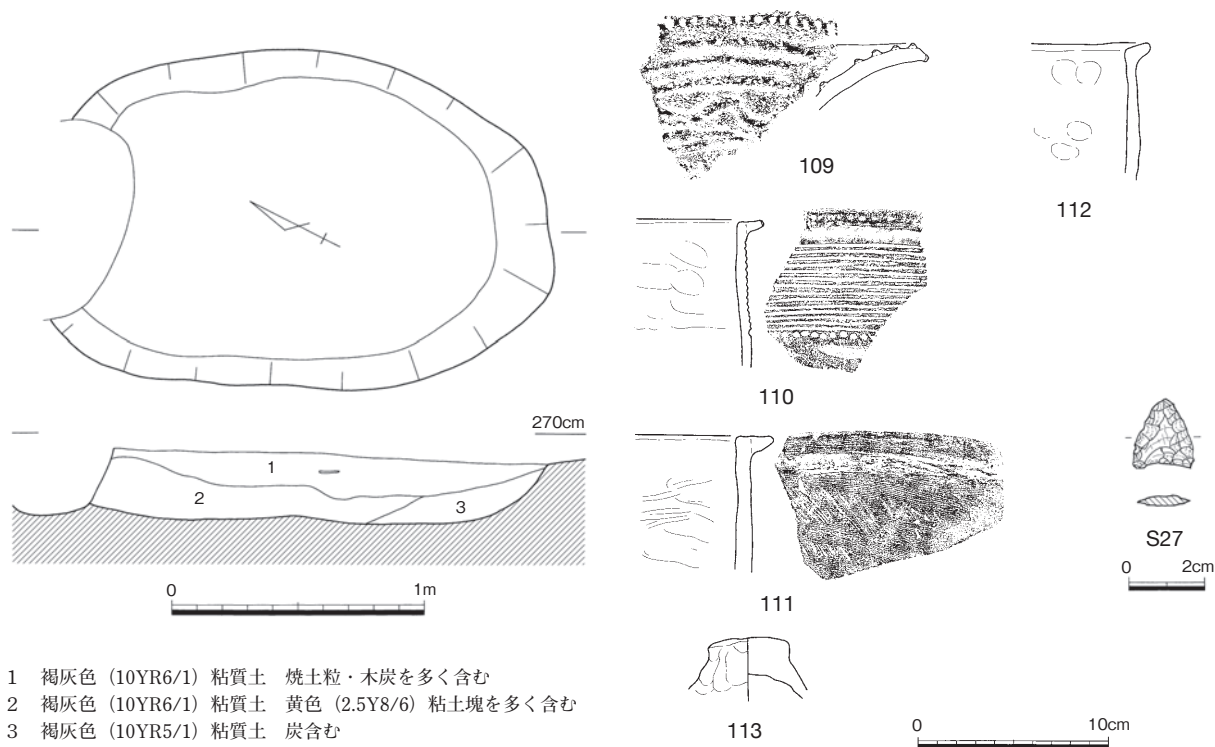
鍬S25、石錐S26がある。甕108の口縁端部には、刻み目が施される。遺構の時期は、これらの出土遺物から、百・前・Ⅲと考えられる。(團)

土坑52 (第10~12・66図)

40B区の微高地に位置し、平面形は楕円形、断面は皿状を呈する。長軸は残存の長軸200cm、短軸137cm、深さ27cmを測る。遺物には、壺109、甕110~112、蓋113、石鍬S27がある。壺109は広口壺で、内面に粘土紐を貼り付けた加飾を行う。甕の口縁部は倒Lを呈し、甕111のように外面の調整がハケとナデのみのものがある。甕112の外面調整は剥落のため不明。時期は百・前・Ⅲであろう。(團)



第65図 土坑51 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)



- 1 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土 焼土粒・木炭を多く含む
- 2 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を多く含む
- 3 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 炭含む

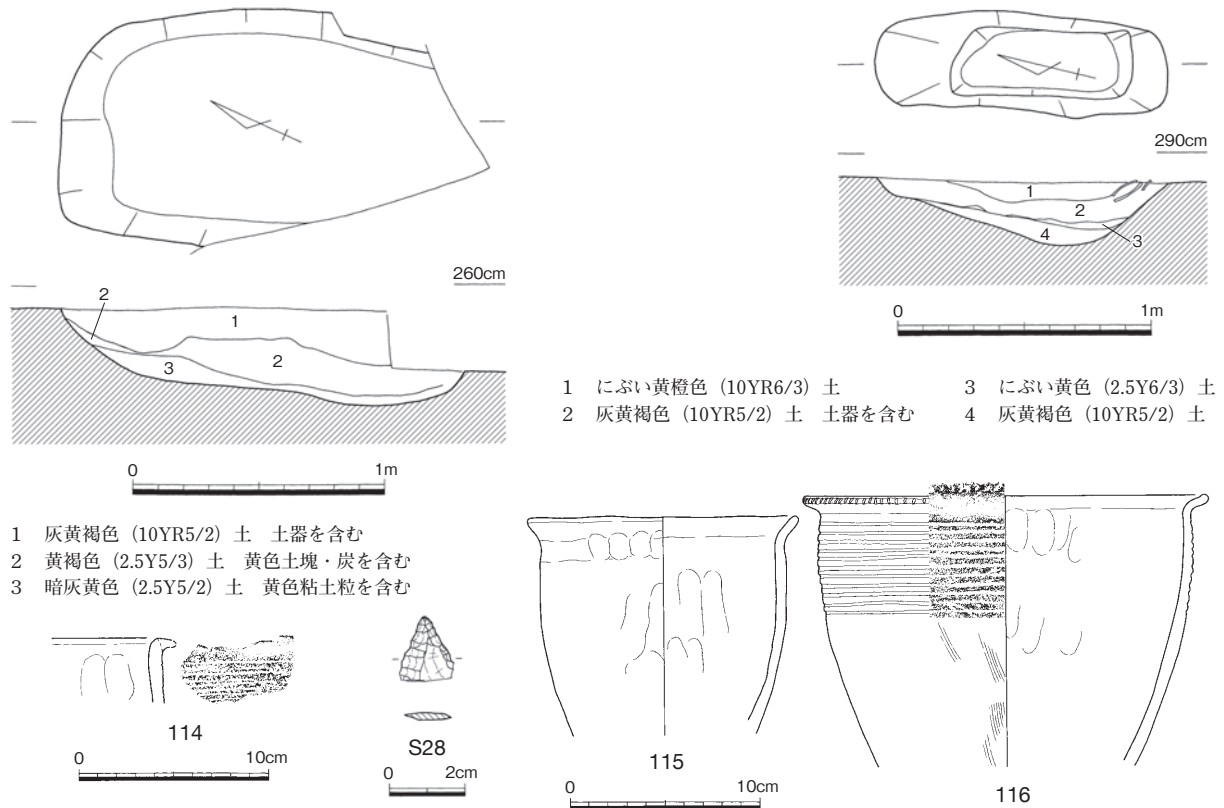
第66図 土坑52 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

土坑53 (第10~12・67図)

40B区の微高地に位置する土坑で、南側の一部はすでに調査が終わっている。推測される長軸はおよそ180cm程度である。短軸92cm、深さ32cmを測る。平面形は長方形を、断面は椀状を呈している。出土遺物には甕114、石鏃S28などがある。百・前・Ⅲの時期の遺構と考えられる。(團)

土坑54 (第10~12・68図)

40B区の微高地に位置する土坑である。平面形は長方形、断面は椀状の形状を呈している。規模は長軸116cm、短軸39cm、深さ25cmを測る。出土遺物には甕115・116などがある。どちらも如意状の口縁をもつ。甕115の外面の調整はナデによるものである。時期は百・前・Ⅲと考えられる。(團)

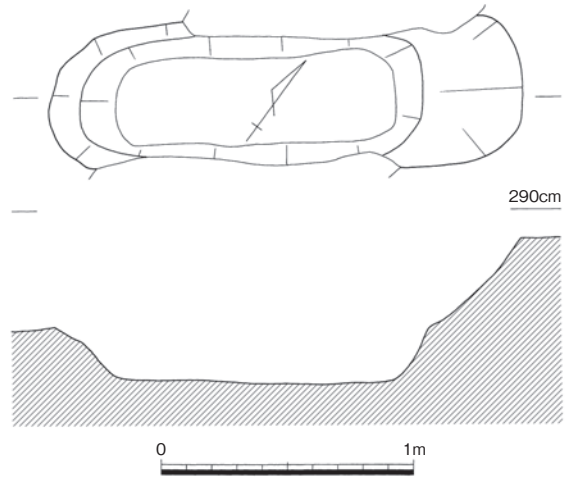


第67図 土坑53 (1/30)
・出土遺物 (1/2・1/4)

第68図 土坑54 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑55 (第10~12・69図)

40B区の微高地に位置する土坑である。規模は長軸187cm、短軸57cm、深さ57cmを測る。上端の平面形は細長い楕円形を呈しているが、底面の形状は長方形のため、元来は長方形を呈していたと考えられる。断面の形状は、長辺の側に屈曲点をもって大きく開き、この断面の形状は、弥生時代後期の土坑99・土坑100などに似るものの、出土遺物が無いために時期は不詳である。百・前・Ⅲの時期の土坑4を切っているが、弥生時代前期の土坑として報告する。(團)

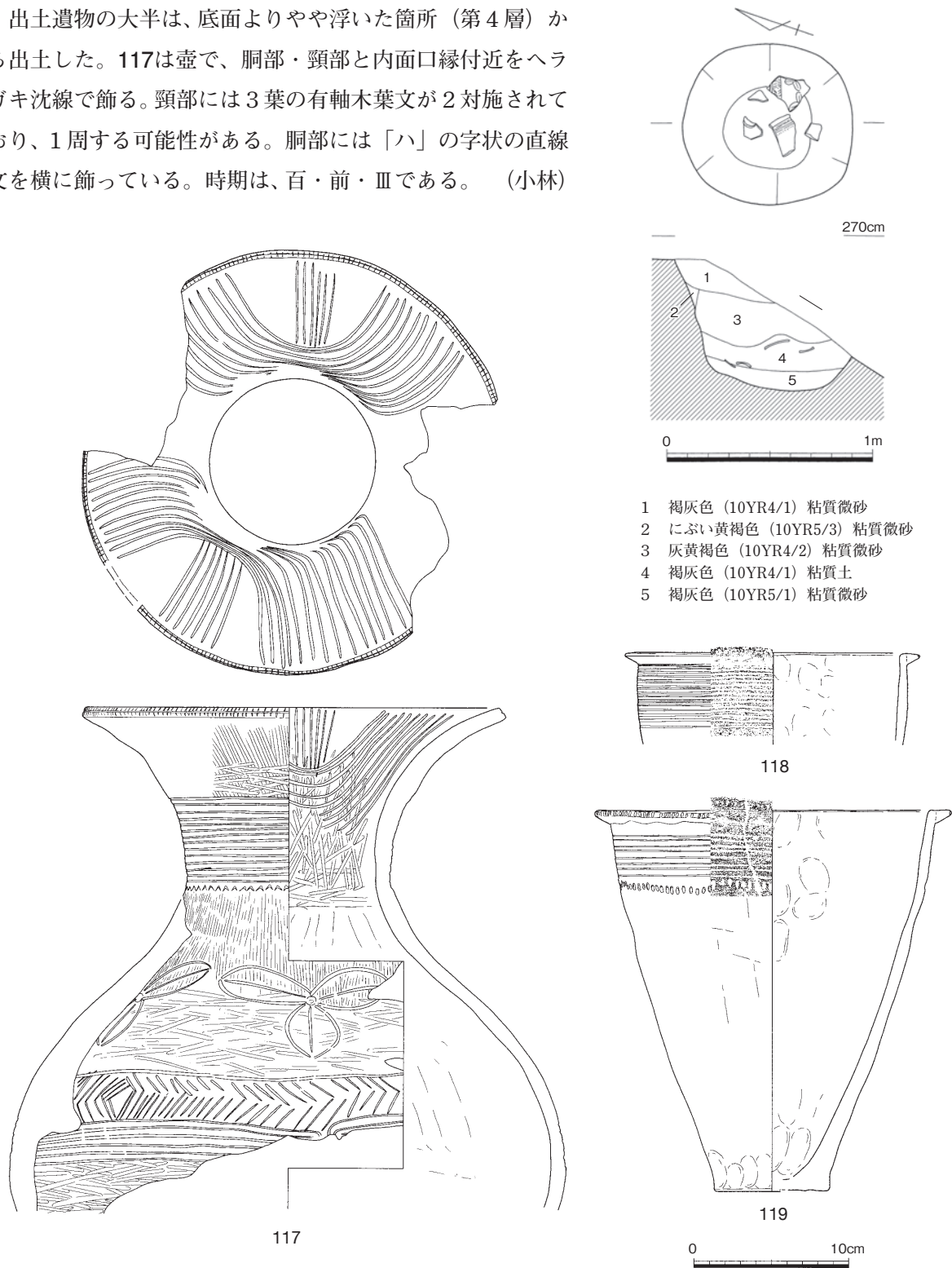


第69図 土坑55 (1/30)

土坑56 (第10~12・70図、図版21)

40B区の南側において検出した土坑で、溝12の北西側上面付近に位置し、これを切る。上面の規模は、長軸82cm、短軸76cmで、平面形は楕円形を呈していた。検出面からの深さは64cmで、標高196cmを測る底面は楕円形であり、壁面は急峻に立ち上がる。この土坑は、土坑61などととも溝12の肩部付近にある柱穴列状の遺構の一部をなしている。

出土遺物の大半は、底面よりやや浮いた箇所（第4層）から出土した。117は壺で、胴部・頸部と内面口縁付近をヘラガキ沈線で飾る。頸部には3葉の有軸木葉文が2対施されており、1周する可能性がある。胴部には「ハ」の字状の直線文を横に飾っている。時期は、百・前・Ⅲである。（小林）



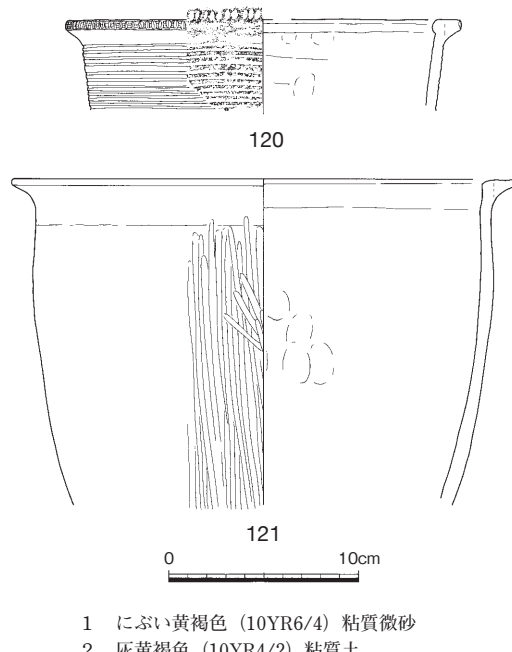
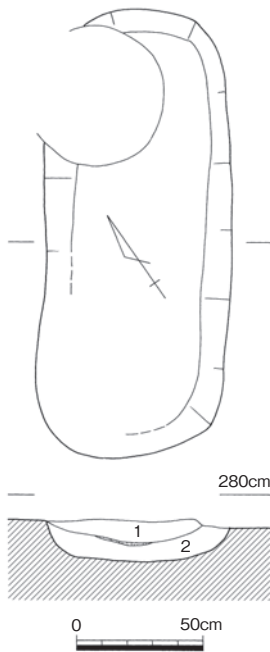
第70図 土坑56 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑57 (第10~12・71図)

40B区の南側において検出した土坑で、北西側に土坑15が、南東側に土坑16が位置する。上面の規模は、長軸177cm、短軸74cmで、平面形は長方形を呈していた。検出面からの深さは16cmで、標高254cmを測る底面はほぼ水平をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。出土遺物には120・121があり、百・前・Ⅲの甕である。 (小林)

土坑58 (第10~12・72図)

40B区において検出した土坑で、平面形が溝状を呈する。土坑5・57・59と共に溝12の西側1~1.5mを並行するように位置する。規模は、長軸が200cm、短軸は46cm、深さが11cmである。



1 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘質微砂
2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土

1 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質微砂
2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂

第71図 土坑57 (1/30)・出土遺物 (1/4)

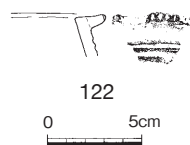
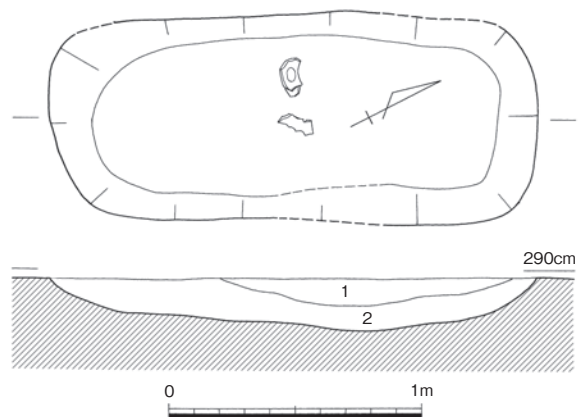
第72図 土坑58 (1/30)

遺物は小片が出土しており、それによると時期は、百・前・Ⅲである。 (弘田)

土坑59 (第10~12・73図)

40B区の東側において検出した土坑で、土坑5・57・58と共に溝12の北側1~1.5mを並行するように位置する。上面の規模は、長軸204cm、短軸81cmで、平面形は長方形を呈していた。検出面からの深さは20cmで、標高268cmを測る底面は、皿状であり壁面は緩やかに立ち上がる。

出土遺物には122があり、甕口縁部で百・前・Ⅲになる。 (小林)



1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
2 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘性微砂
基盤層土塊を多く含む

第73図 土坑59 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑60 (第10~12・74図)

40B区において検出しており、土坑19・20埋没後に掘られた土坑である。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は、長軸100cm、短軸は63cmで、深さが18cmである。

出土遺物は無いが遺構の切り合い関係などから、時期は百・前・Ⅲと考えている。 (弘田)

土坑61 (第10~12・75図)

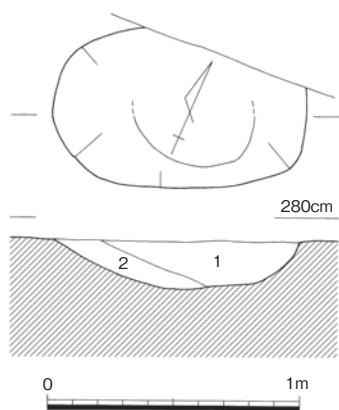
41A区の西側において検出した土坑で、溝12の北側上面付近に位置する。上面の規模は、長軸100cm、短軸58cm以上で、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは55cmで、標高219cmを測る底面は水平で、壁面は直立気味に立ち上がる。この土坑は、溝12肩部付近にある柱穴列状遺構の一部である。上層から123が出土し、百・前・Ⅲの甕である。 (小林)

土坑62 (第10~12・76図)

40B区の南側において検出した土坑で、溝12が北側に近接する。上面の規模は、長軸176cm、短軸105cm以上で、平面形は不整円形を呈していた。検出面からの深さは46cmで、標高225cmを測る底面は椀状で、壁面は緩やかに立ち上がり、北側は1段低くなる。時期は、百・前・Ⅲにある。 (小林)

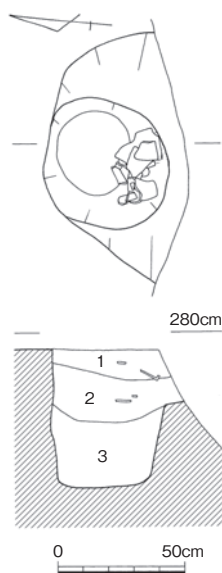
土坑63 (第10~12・77図)

40B区の南側において検出した土坑で、東側に近接して土坑21が位置する。上面の規模は、長軸が110cm以上、短軸は61cmで、平面形は不定形を呈していた。検出面からの深さは26cmで、標高213cmを測る底面は、東側が1段凹む。1段高い西側部分に焼土が分布していた。時期は、百・前・Ⅲである。 (小林)



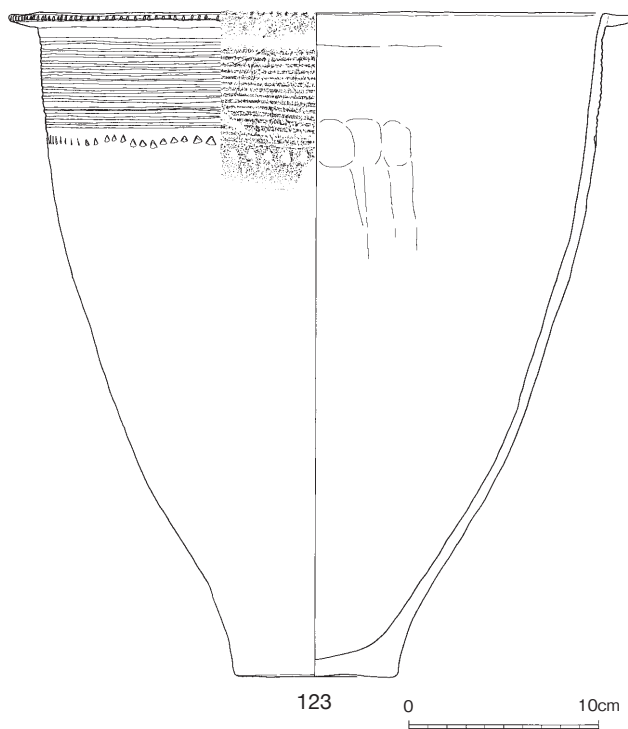
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
基盤層を多く含む

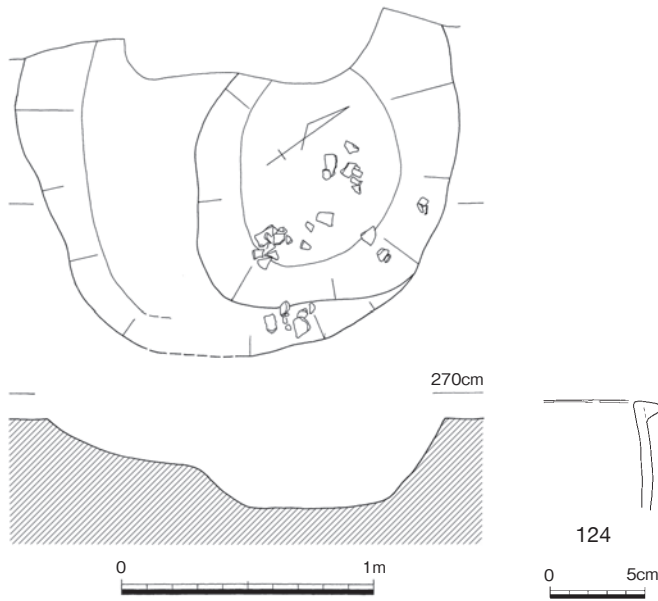
第74図 土坑60 (1/30)



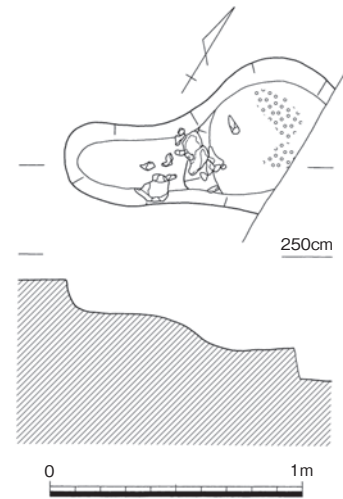
- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂
- 2 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂
- 3 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土

第75図 土坑61 (1/30)・出土遺物 (1/4)





第76図 土坑62 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第77図 土坑63 (1/30)

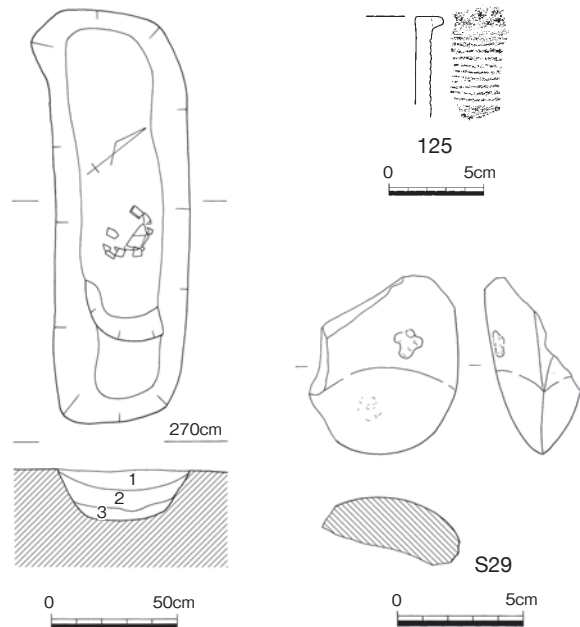
土坑64 (第10～12・78図)

40B区の南側において検出した土坑で、溝12の南側に位置し、西側に土坑62が近接する。規模は、長軸163cm、短軸53cmで、平面形は長方形を呈していた。深さは20cmで、標高239cmを測る底面は水平をなし、北西側が1段凹み、南東隅はテラス状になる。時期は、百・前・Ⅲである。(小林)

土坑65 (第10～12・79図、写真8)

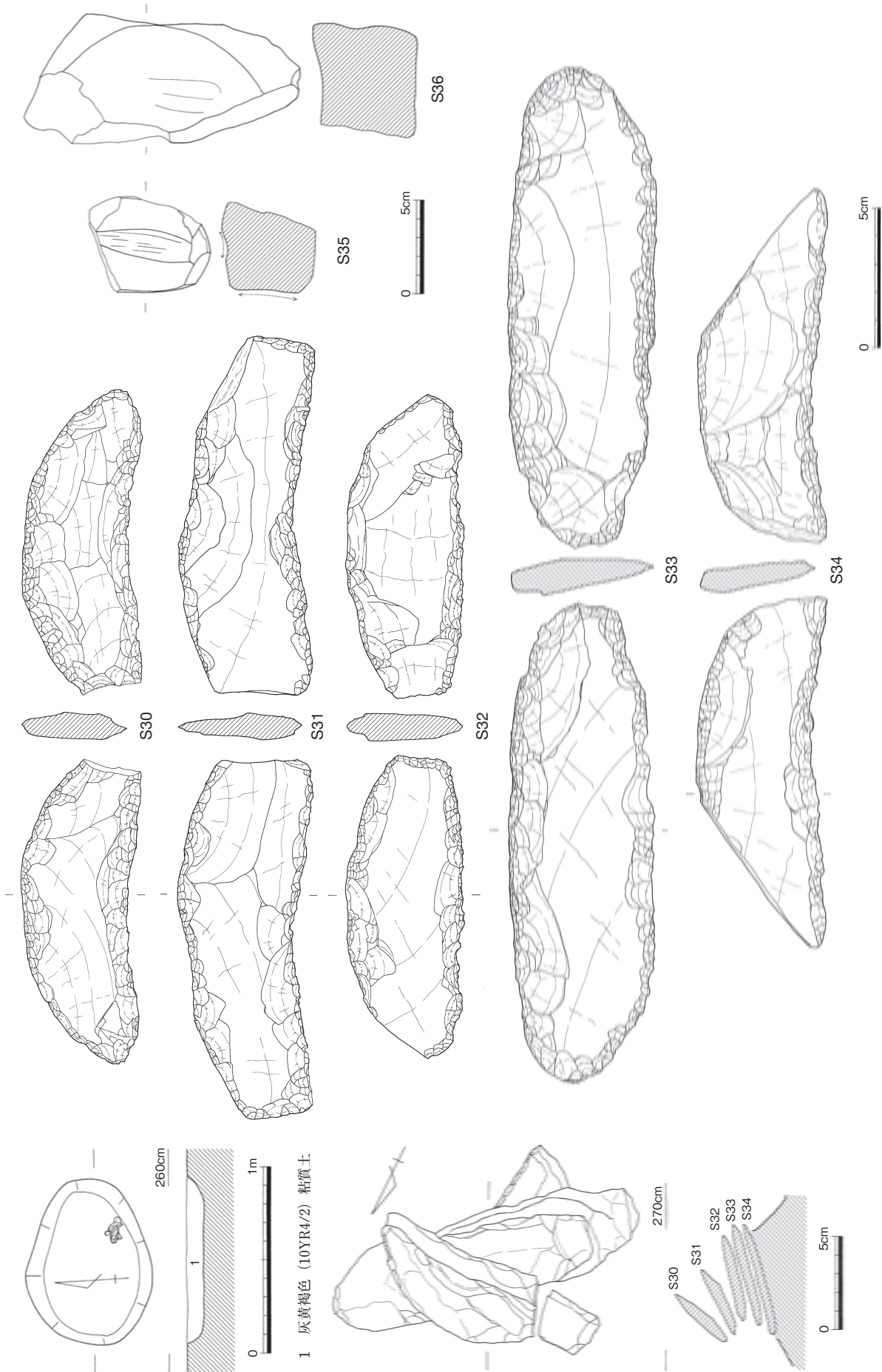
41B区で検出した土坑で、先述した土坑22を切って掘られていた。平面形が楕円形を呈し、規模は長軸が88cm、短軸は67cmで、深さが10cmである。図示したのはいずれも石器で、サヌカイト製の石鎌状石器S30～S34と砥石S35・S36である。

S30～S34は、上からS30・S31・S32・S33、S34の順に、歯を横向き(東向き)にして重ねて置かれていた。いずれも非常に良く使用されており、2次加工の稜線が摩滅している。非常に良く使用された部分はやや黒く変色しているが、ほぼ全体が使用されており、柄などの装着は想定しにくい。S35・S36は、ともに砂岩製で2～3面の使用が認められる。この土坑は、S30～S34の取り上げ後に検出しているが、いずれの石器も本来は土坑内に埋納されたと考えている。この土坑より西に16mの地点に同様の石器の出土状況を示す土坑(百原尾島5



- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂
- 3 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘質微砂

第78図 土坑64 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)



第79図 土坑65 (1/30)・石包丁出土状況 (1/3)・出土遺物 (1/2・1/3)

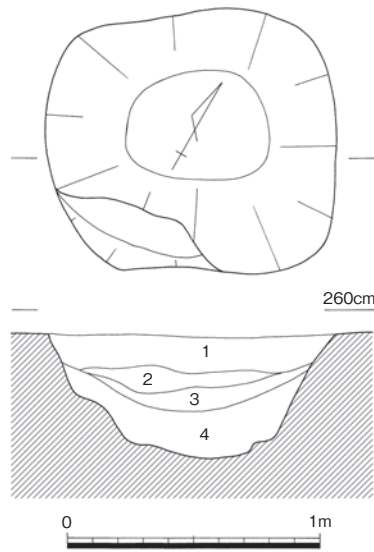
土壌89)が存在する。土器は小片がわずかに出土しているのみで詳しい時期は不明である。埋土や検出面、周辺の遺構の状況などから百・前・Ⅲと判断している。(弘田)
土坑66 (第10～12・80図)

41B区において検出した土坑で、先述した土坑22を切って造られた土坑である。平面形は方形、断面形は逆台形で、底面は中央付近がやや窪んでいた。規模は、長軸が115cm、短軸は105cm、深さが48cmである。出土遺物には、頸部に二条の刻み目突帯をもつ壺126、石鏃S37・S38がある。これからみて、時期は百・前・Ⅲと考える。(弘田)
土坑67 (第10～12・81図)

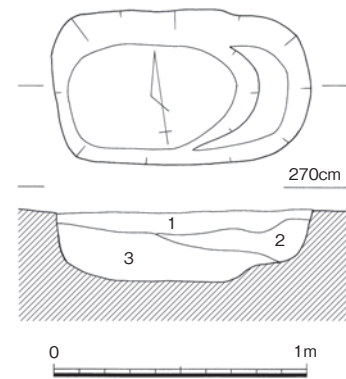
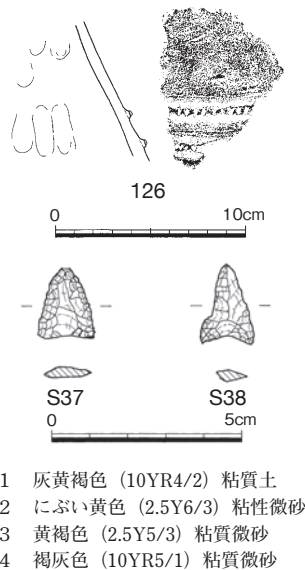
41B区において検出した土坑である。平面形は長方形、断面は箱形で、東側が一段高くテラス状を呈する。規模は、長軸が100cm、短軸は61cmで、深さが28cmである。
 図示しうるほどの遺物はみられないが、時期は百・前・Ⅲと考えている。(弘田)



写真8 土坑65石包丁出土状況(北東から)



第80図 土坑66 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

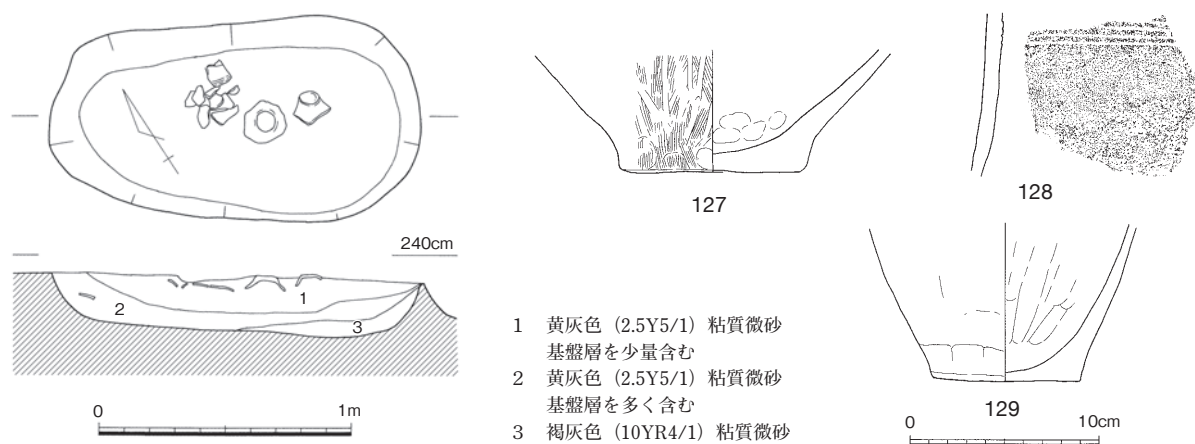


第81図 土坑67 (1/30)

土坑68 (第10～12・82図)

41B区の低位部部分において検出しており、後期水田や水田下層の溝群に切られた土坑である。平面形は楕円形、断面は逆台形を呈する。規模は、長軸が146cm、短軸は92cmで、深さが現存で23cmを測る。遺物は、土坑検出面においてまとまって出土しており、壺の底部127や口縁部下に4条のヘラ描き沈線文を施す壺の体部128や甕の底部129がある。

これらからみてこの土坑、時期は百・前・Ⅲと考えている。(弘田)

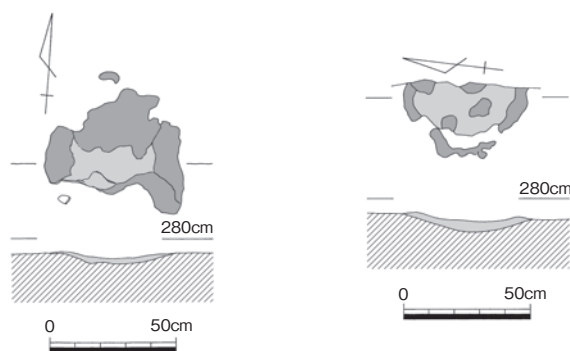


第82図 土坑68 (1/30)・出土遺物 (1/4)

3 焼土

焼土1 (第10~12・83図)

39B区の中央東寄りで検出した被熱痕跡である。黒褐色土層を掘り下げる過程で検出したもので、検出面の標高は278cmを測る。東西55cmの不整形を呈し、黄褐色に硬化した上面は浅くくぼむ。遺物を伴っていないため正確な時期は不明であるが、周辺遺構との関連から弥生時代前期に属するものと思われる。(亀山)



第83図 焼土1 (1/30)

第84図 焼土2 (1/30)

焼土2 (第10~12・84図)

焼土1の南西30cmに位置し、39B区の中央東寄りで検出した。黒褐色の包含層中で確認したもので、東側は溝40によって切られているが、径50cmほどの不整形円形に復元される。標高273cmを測る上面はわずかにくぼみ、被熱によって硬化した中央部は灰白色を呈する。遺物は出土していないが、焼土1と近似した時期を想定したい。(亀山)

4 溝

溝1 (第10・11・85図)

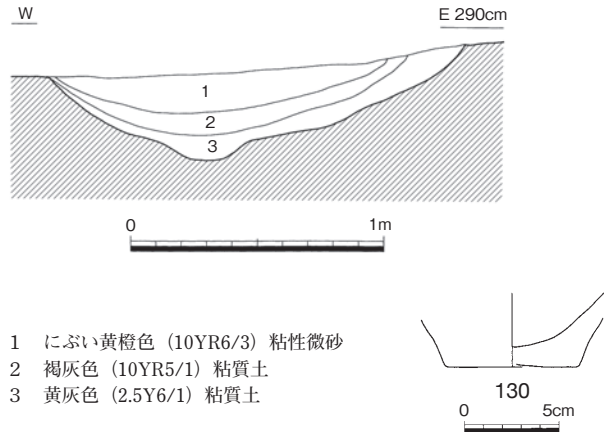
31ライン付近を南北に延び、百原尾島3溝53に続く溝である。上端幅は160~168cm、深さ34~44cmを測る。断面は腕状を呈している。出土遺物には甕130があり、検出状況からも、弥生時代前期の遺構であると考えられる。(團)

溝2 (第10・11・86図)

31~32ラインの間を、南北に延び、百原尾島3溝54に続く溝である。規模は、上端幅82~100cm、深さ36~41cmである。断面の形状は台形を呈している。出土遺物には甕131・132、石鏃S39がある。甕131は口縁部の下がった部分に突帯が巡るもので、混入であろう。(團)

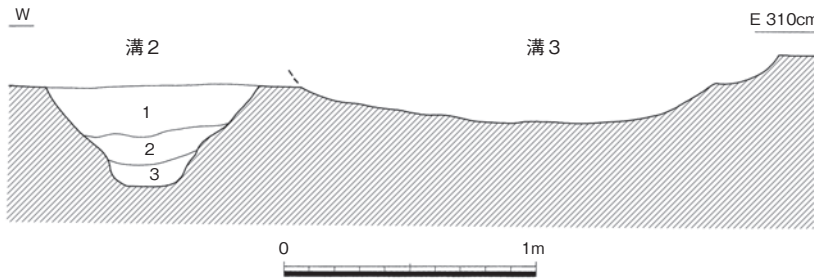
溝3 (第10・11・86図)

31～32ラインの間を、南北に延びる溝である。溝2に併走している。百原尾島3溝55に続く溝であるが、調査区内では南側の部分は後世の溝67による削平のために検出できていない。上端幅122～186cm、深さ14～18cmを測る。出土遺物には、細片が少量出土している。胎土には砂礫が多く、褐色を呈していることや、検出状況などから、この溝の時期は、弥生時代前期であると考えられる。(團)

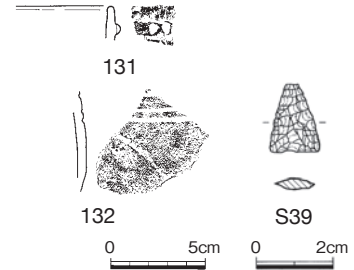


- 1 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘性微砂
- 2 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土

第85図 溝1 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 灰白色 (N7/) 微砂 基盤層を含む
- 2 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘性微砂
- 3 灰色 (N5/) 粘質土



第86図 溝2・3 (1/30)・溝2出土遺物 (1/2・1/4)

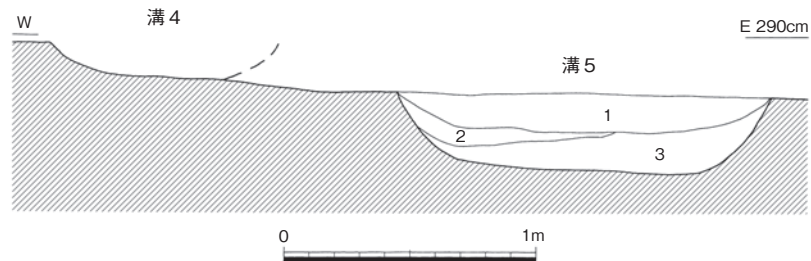
溝4 (第10・11・87図)

32ライン付近を南北に延びる溝である。溝の東側の立ち上がりは、一部しか検出できていない。規模は、残存している部分で上端幅55cm以上、深さ6～12cmを測る。溝5に併走している。出土遺物は少量の細片のみで、遺物からは時期は不明である。検出状況から弥生時代前期と判断した。(團)

溝5 (第10・11・87図)

32ライン付近を南北に延びる溝である。溝4と併走している。規模は上端幅150～180cm、深さ30cmを測る。断面の形状は皿状で、底面は平らである。埋土の下層にはラミナが観察できた。

出土遺物は、細片が少量あるが、図化できるものはなかった。この遺物の特徴や、検出状況などから、弥生時代前期の遺構であると考えられる。(團)

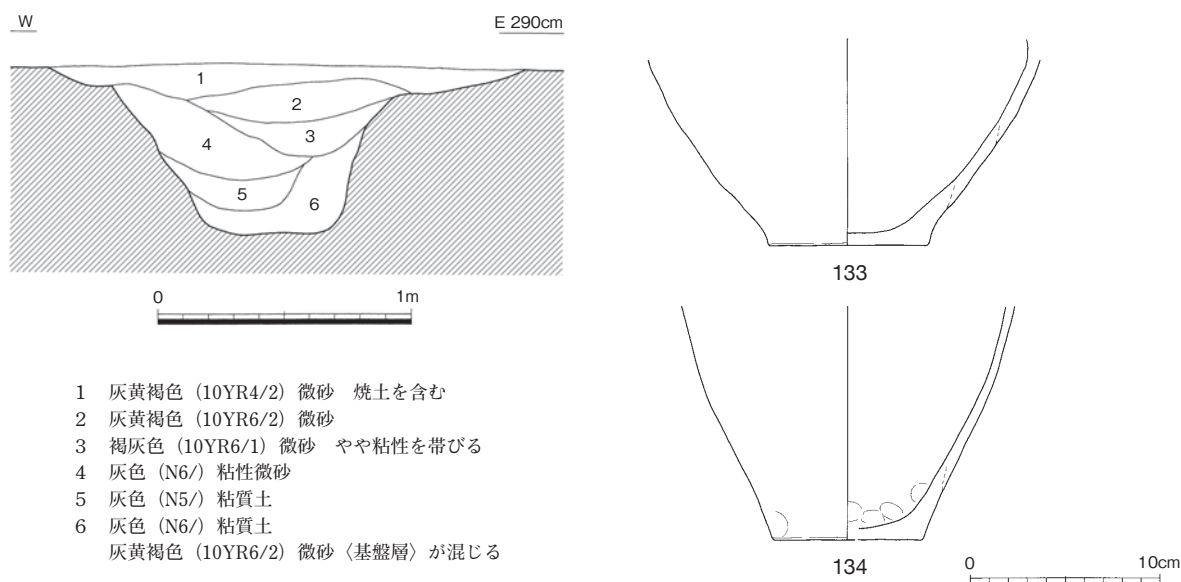


- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘性微砂
- 3 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘性微砂
褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 灰白色 (10YR8/1) 微砂のラミナ

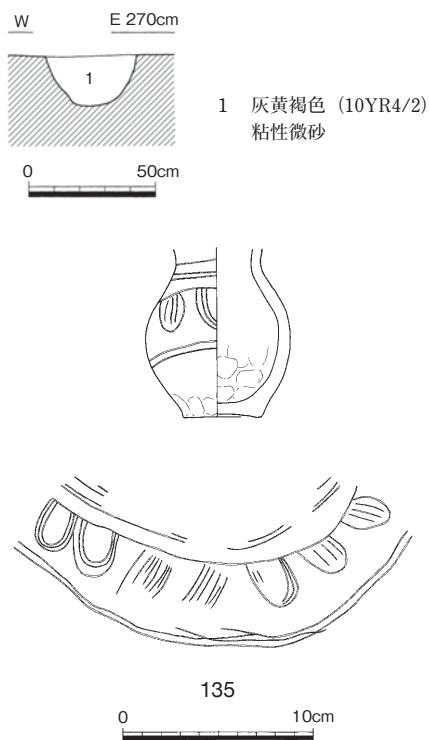
第87図 溝4・5 (1/30)

溝6 (第10・11・88図)

32～34ラインにかけて南北に延びる溝である。この溝は百原尾島4溝125に続き、旧河道を木樋によって渡している可能性が指摘されており、重要な水路であった可能性がある。土層断面の観察からも、2回の再掘削が行われたことが理解でき、このことを裏付ける。弥生時代後期水田の水田層の直下で検出している。規模は、上端幅90～184cm、深さ45～55cmを測り、出土遺物には壺133・134がある。出土遺物や検出状況から、百・前・Ⅲの時期の遺構であると考えられる。(團)



第88図 溝6 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第89図 溝7 (1/30)
・出土遺物 (1/4)

溝7 (第10・11・89図、図版20)

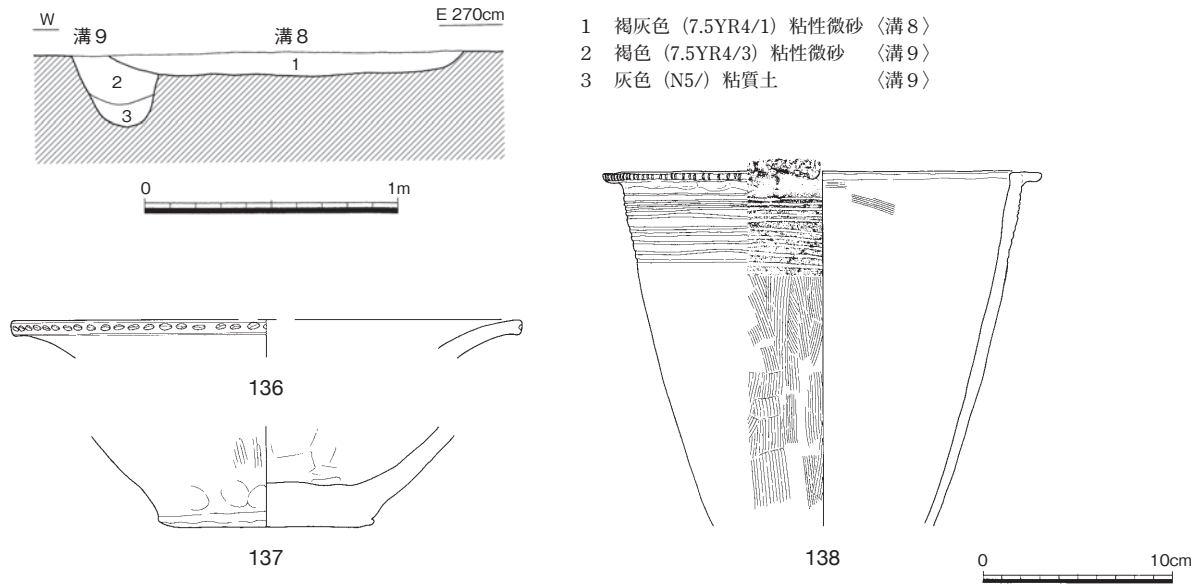
34ラインよりやや西側に位置する溝で、溝1～6とは流路の方向が異なり、北東-南西方向に延びる溝である。規模は、上端幅36～38cm、深さ13～18cmを測る。出土遺物には、少量の細片の土器の他には、口縁のみが欠損した壺135がある。遺構の時期は、百・前・Ⅲであろう。(團)

溝8 (第10・11・90図)

34ラインよりやや東に位置する溝で、溝6・9・10によって切られている。上端幅は102～124cm、深さ6～8cmを測る。底部は平らで、断面は皿状を呈する。出土遺物には、壺136・137、甕138などがある。これらの遺物から、遺構の時期は、百・前・Ⅲであると考えられる。(團)

溝9 (第10・11・90図)

34ラインよりやや東を、溝8にほぼ併走して延び、溝6・8・10に切られている溝である。規模は、上端幅30～32cm、深さ19～25cmを測る。出土遺物は細片が少量である。この遺物と検出状況から、弥生時代前期の遺構であろう。(團)

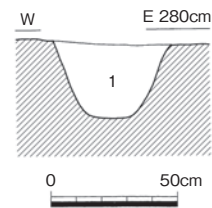


- 1 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘性微砂 (溝8)
- 2 褐色 (7.5YR4/3) 粘性微砂 (溝9)
- 3 灰色 (N5/) 粘質土 (溝9)

第90図 溝8・9 (1/30)・溝8出土遺物 (1/4)

溝10 (第10・11・91図)

34ラインより東側を南北に延びる溝で、百原尾島4溝126に続く溝である。規模は、30~50cm、深さ17~36cmを測る。埋土は黒褐色粘質土の単一層であった。溝8・9を、また過去の調査成果から、溝6も切っていることがわかっている。出土遺物は、細片が少量出土しているが、特徴から弥生時代前期の土器であると考えられる。また、他の溝との切り合い関係から、百・前・Ⅲの時期の遺構であると考えられる。(團)

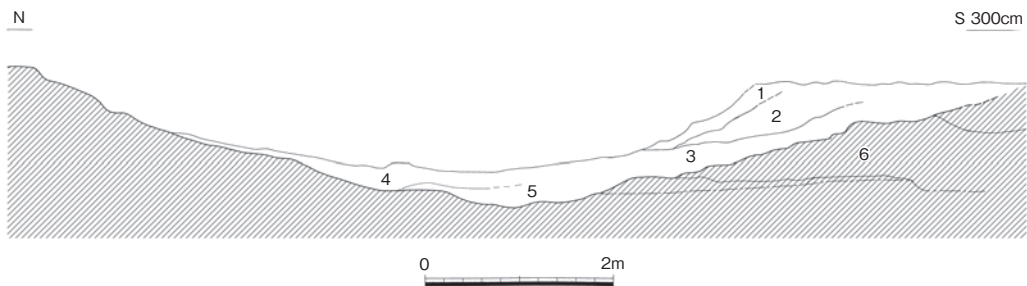


- 1 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土

第91図 溝10 (1/30)

溝11 (第10・11・92~94図、図版21・28・29)

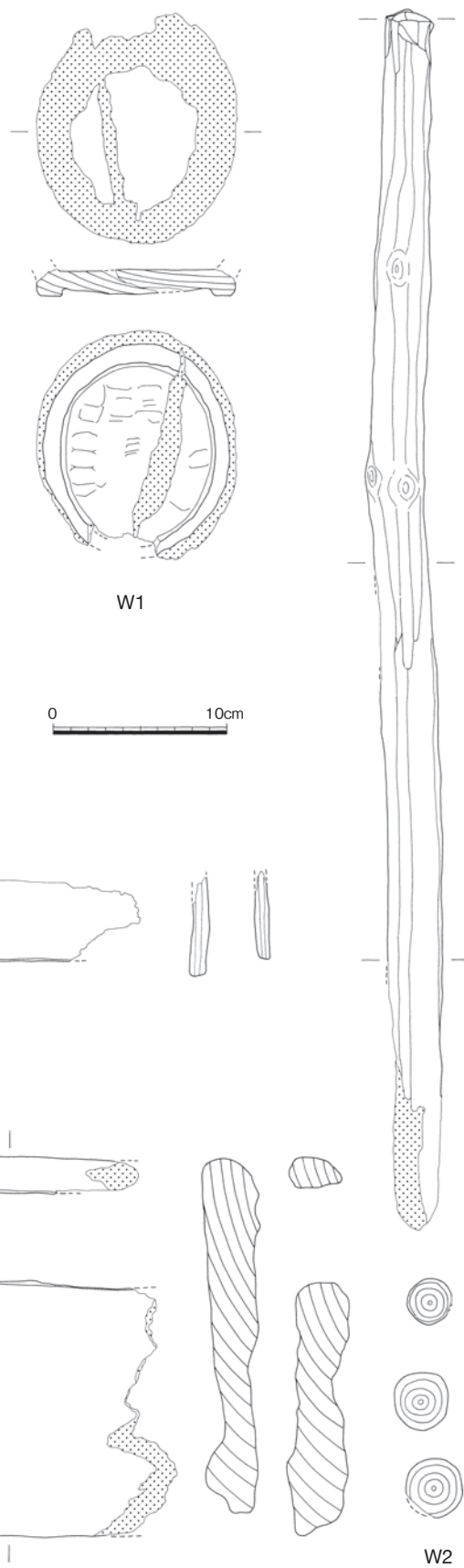
35ライン上に延びる上端幅は312~535cm、深さ41~109cmを測る大規模な溝で、出土遺物から弥生時代前期から中期にかけて、改修されながら長期間維持されたことがわかる。溝11は溝14と重複して検出しており、弥生時代前期の範疇に入る溝を溝11として報告し、弥生時代中期の範疇に入るものは溝14として後述している。調査区南側の調査成果から、低位部に多数延びる溝を切っていると考えられ、これら低位部の溝の中で一番新しいものであると考えられる。また、溝11の壁面周辺では、後述



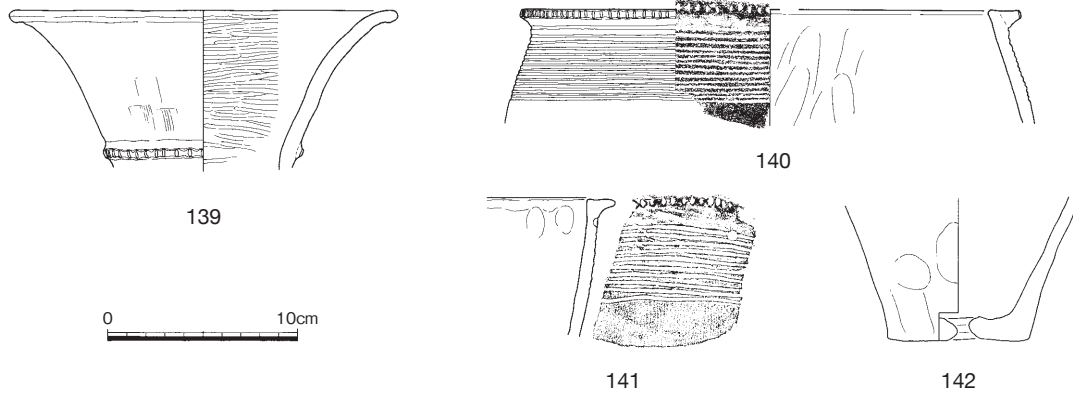
- 1 灰色 (N5/) 粘性微砂 粗砂を含む
- 2 灰色 (N6/) 粘質土と明緑灰色 (7.5GY7/1) 粘性微砂が交互に入る
- 3 灰色 (N6/) 微~細砂 オリーブ灰色 (2.5GY6/1) 粘質土が交互に入る
- 4 暗灰色 (N3/) 粘質土
- 5 明オリーブ灰色 (5GY7/1) 粘性微砂
- 6 (杭列2盛土)

第92図 溝11 (1/80)

する杭列の土盛りが検出され、この杭列と関連を持つと考えられる。出土遺物には、土器の他に木製品W1～W4も出土している。W1は容器の底の部分である。火を受けて炭化して一部しか残存していないが、直径およそ12cm、高さ1.2cmを削りだして成形した高台を持っていたことがわかる。W2は、先端と側面を丁寧に面取り加工した棒状の製品である。何らかの部材の一部と考えられる。W3は板状の製品の一部である。材質はスギ。W4は、厚さ2～3.5cmの板状の部材に長さ13cm以上、幅約5cmのほぞ孔がなされる。材質はコウヤマキで、部材の一部と考えられる。木製品はいずれも底面付近から出土していることから、弥生時代前期の溝11に掲載した。土器には壺139、甕140～142がある。壺139は広口壺で、頸部の突帯には刻み目を施す。甕140・141は多条のヘラ描き沈線文を施す。甕142の底部には穿孔がみられる。これらの遺物から、百・前・Ⅲに掘削された溝であろう。(團)



第93図 溝11出土遺物① (1/4)

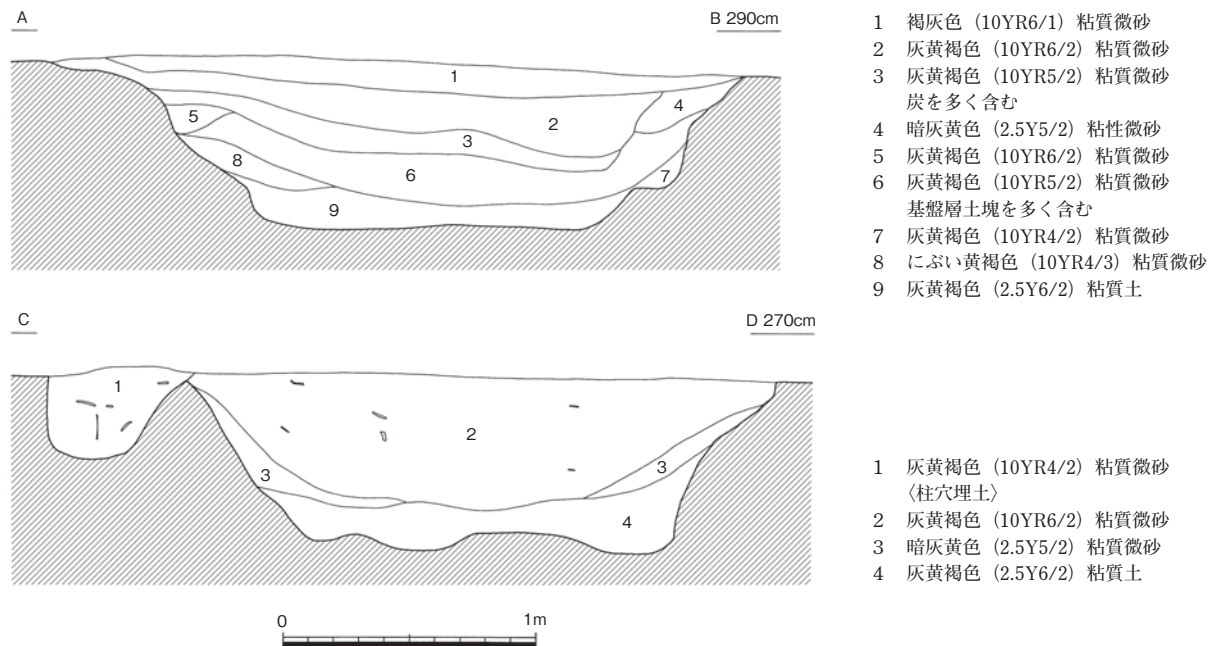


第94図 溝11出土遺物② (1/4)

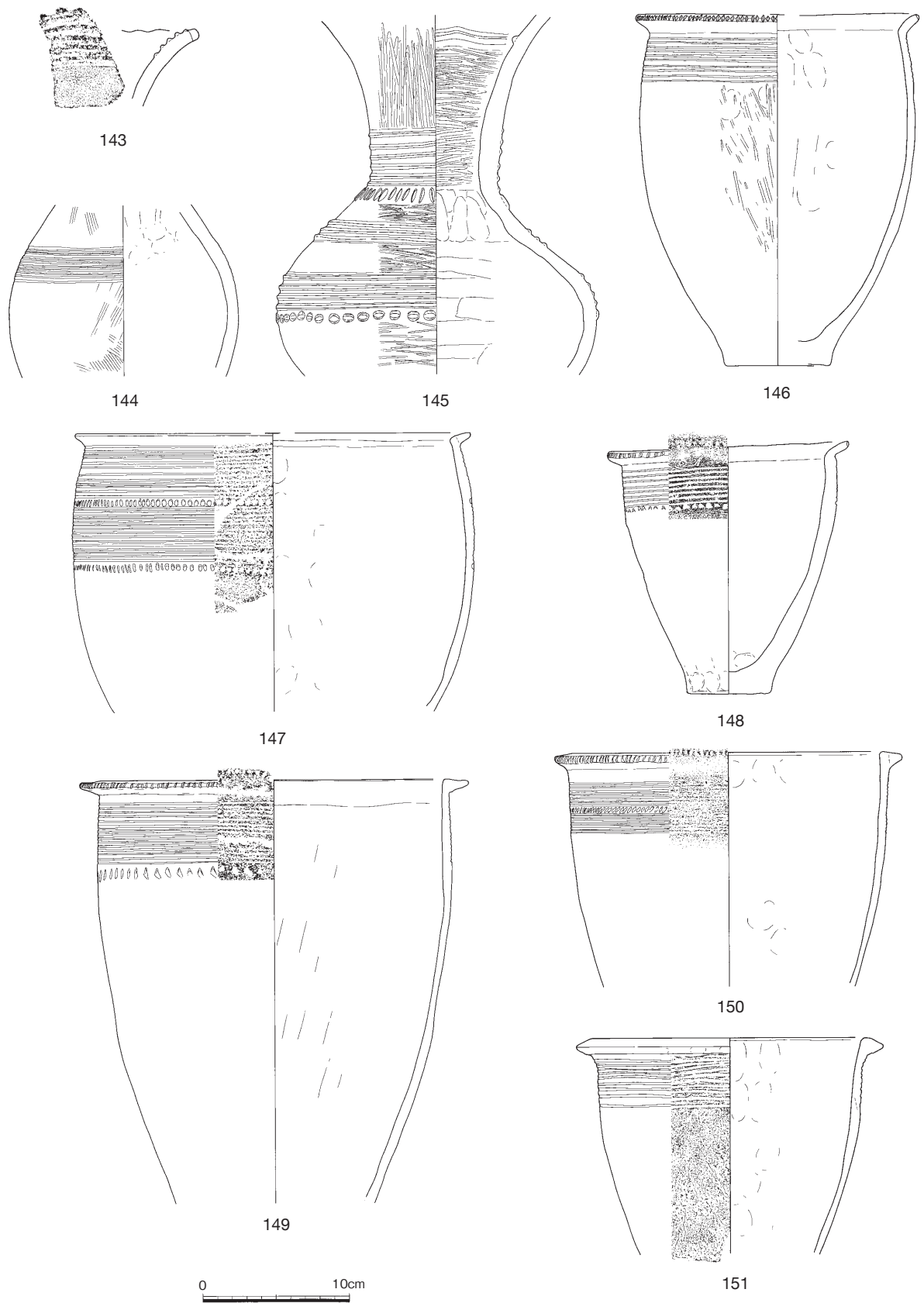
溝12 (第10～12・95～105図、巻頭図版1-2・4-1、図版4-2・4-3・21・22・29)

41A～40・41B区の微高地上において検出した溝である。北東から南西方向に若干弧状に流走しながら、南端では百原尾島5溝52とつながる。調査区外の北側では、幅・断面形状・出土遺物が類似することから、百沢田2溝1につながるものが想定される。その場合溝12は、環濠集落のあった百間川沢田遺跡微高地のさらに外側を、弧状に取り巻く微高地があり、その縁辺部に並行して走る位置に存在したことになる。

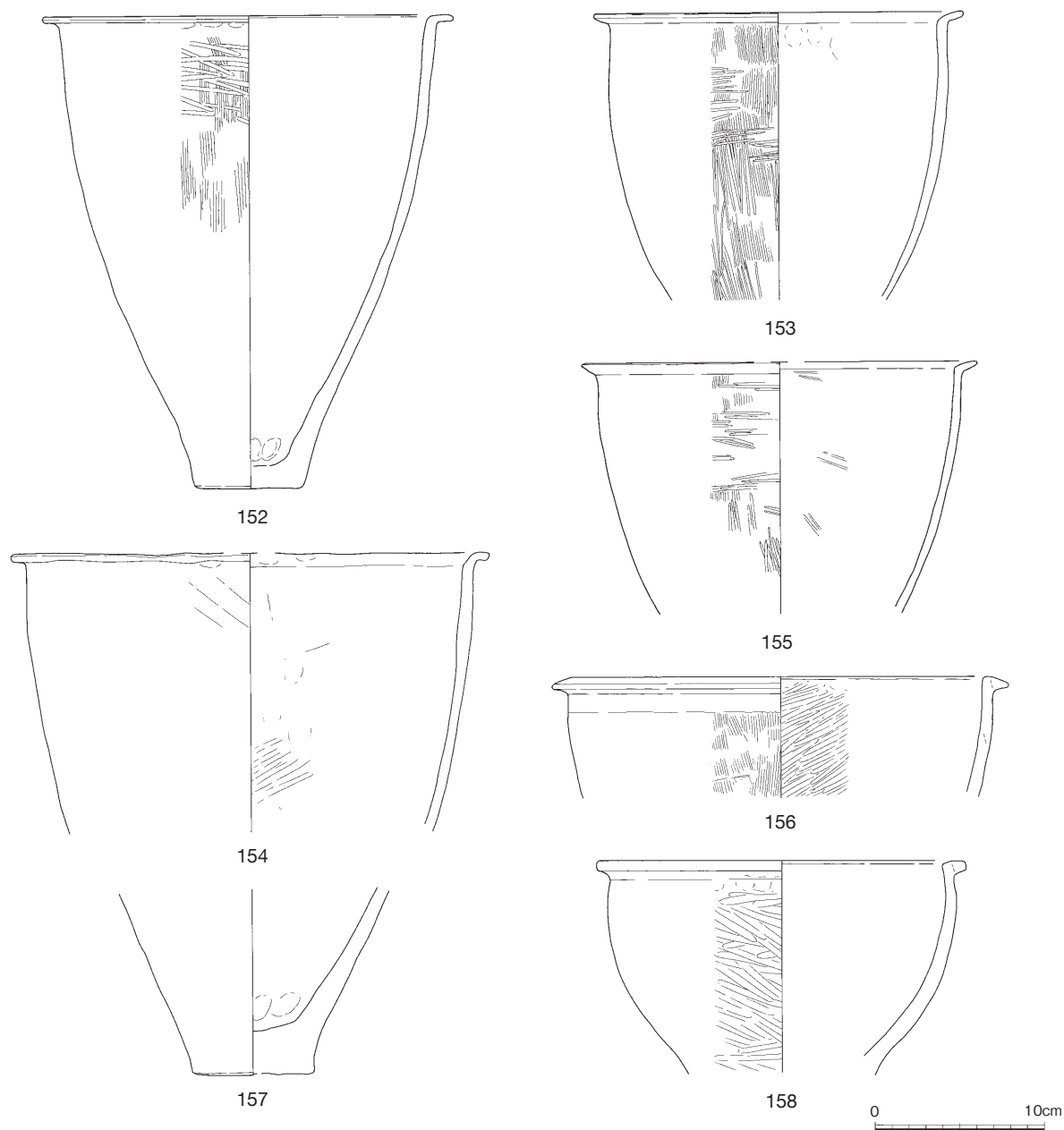
規模は、上面幅236～276cm、底面幅134～136cmで、検出面からの深さは67cmを測る。底面の幅は比較的広く、断面形状逆台形になる。これは百間川沢田遺跡の環濠がV字になるのと比較して、一線を画する形態である。また検出面は、微高地がある北側の方が、下がりに向かう南側より若干高くなっており、溝自体は微高地境付近に築かれている。標高189～210mを測る底面は、若干の凹凸はあるものの横方向には水平気味であり、南西に向かって徐々に深くになっていた。壁面は逆「ハ」の字状に



第95図 溝12 (1/30)



第96図 溝12上層出土遺物① (1/4)

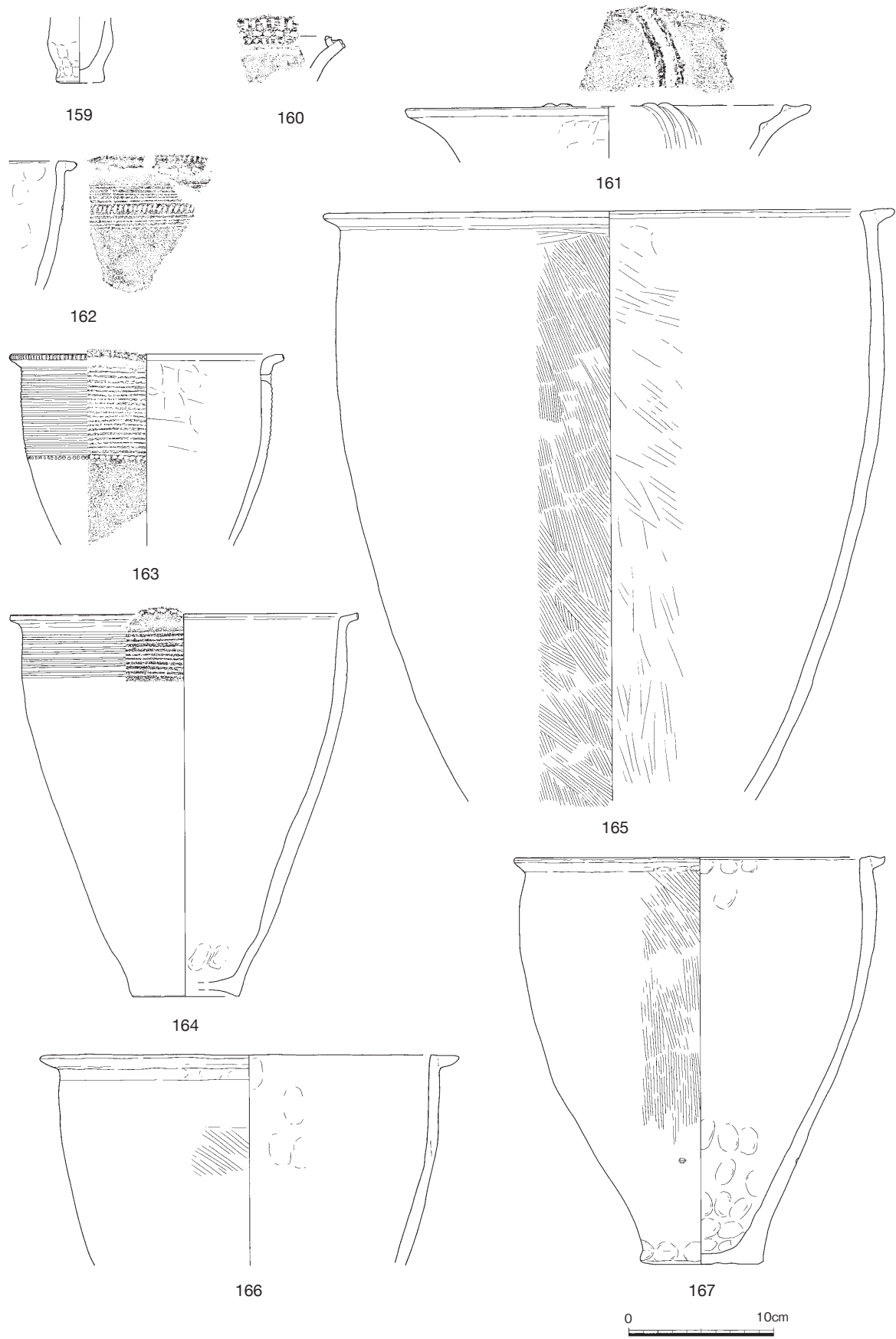


第97図 溝12上層出土遺物② (1/4)

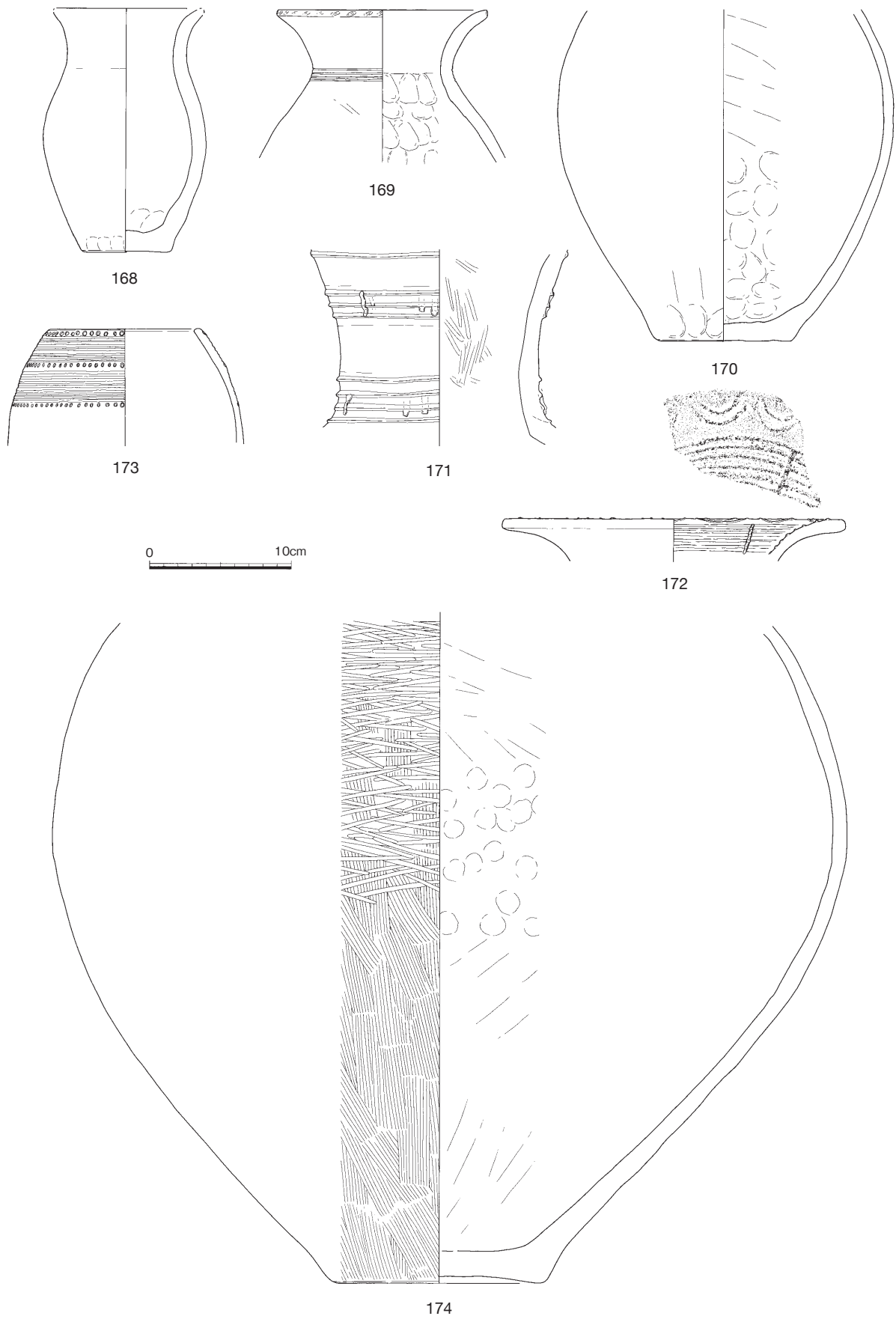
立ち上がっている。

埋土は、上層（第1～3層）、中層（第4～6層）、下層（第8～9層）に分かれる。このうち上層にあたる3層には、多量の炭層が分布する。このことから溝12の埋没の段階は、中・下層と上層の2回であったと推定する。炭層は、特にA-B断面の北側付近から調査区南側にかけて特に多く分布していた。今回出土した遺物は上・中・下層に分けているが、この中でも上層出土が圧倒的に多く、おそらく多量の炭層の堆積と同時に廃棄されたものと考えている。

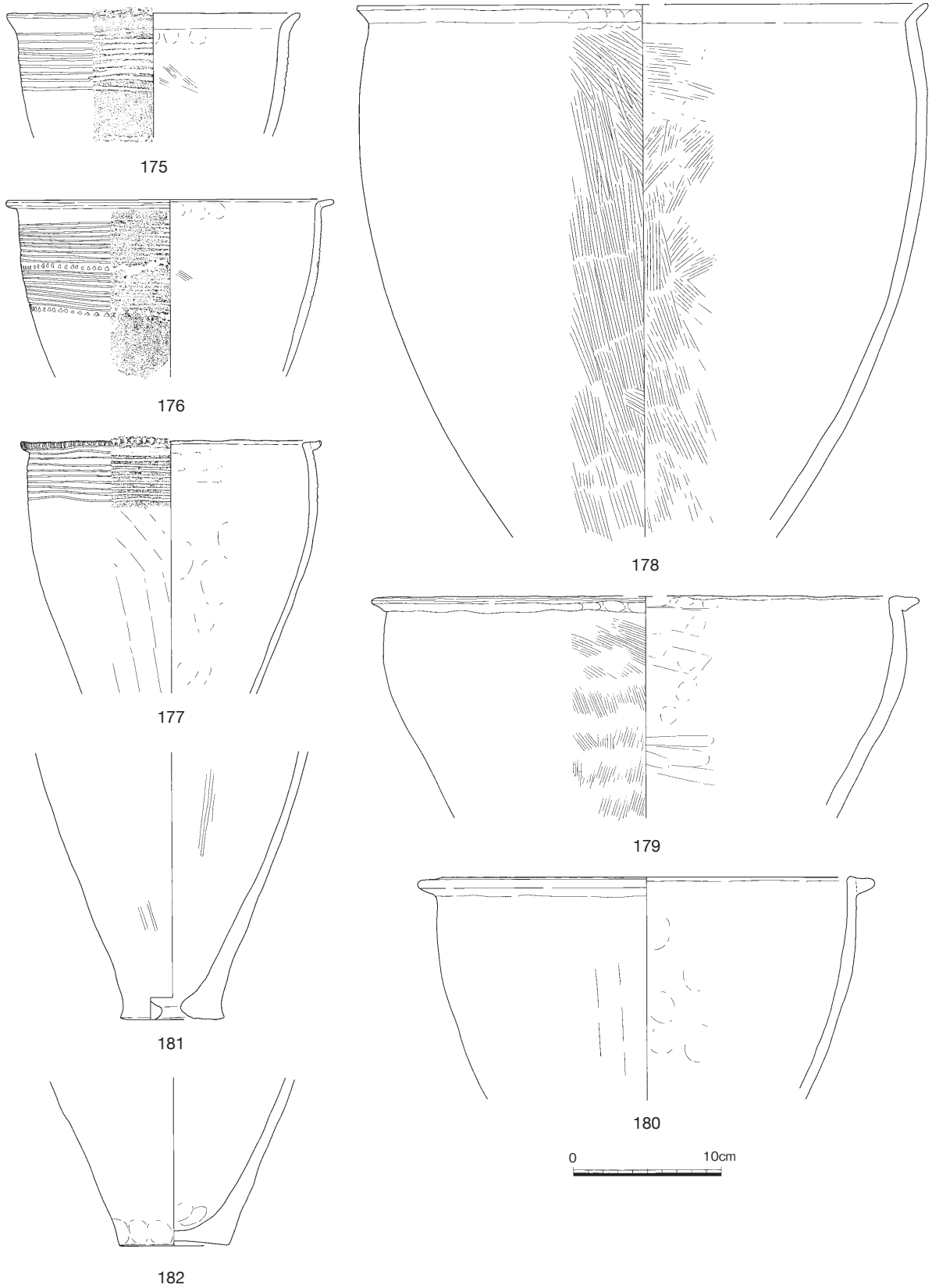
出土遺物には、多くの土器と石器がある。土器は基本的に壺と甕の二者で、ほかには鉢状を呈する229があるが高杯は確認できなかった。可能な限り上層143～158、中層159～167、下層168～182、最下層183～190に分けてとりあげているが、トレンチなどから出土した191～231もある。出土量としては、調査区内の遺構の中で最も多く、コンテナ合計34箱にのぼる。また、その中でも前述したとお



第98図 溝12中層出土遺物 (1/4)



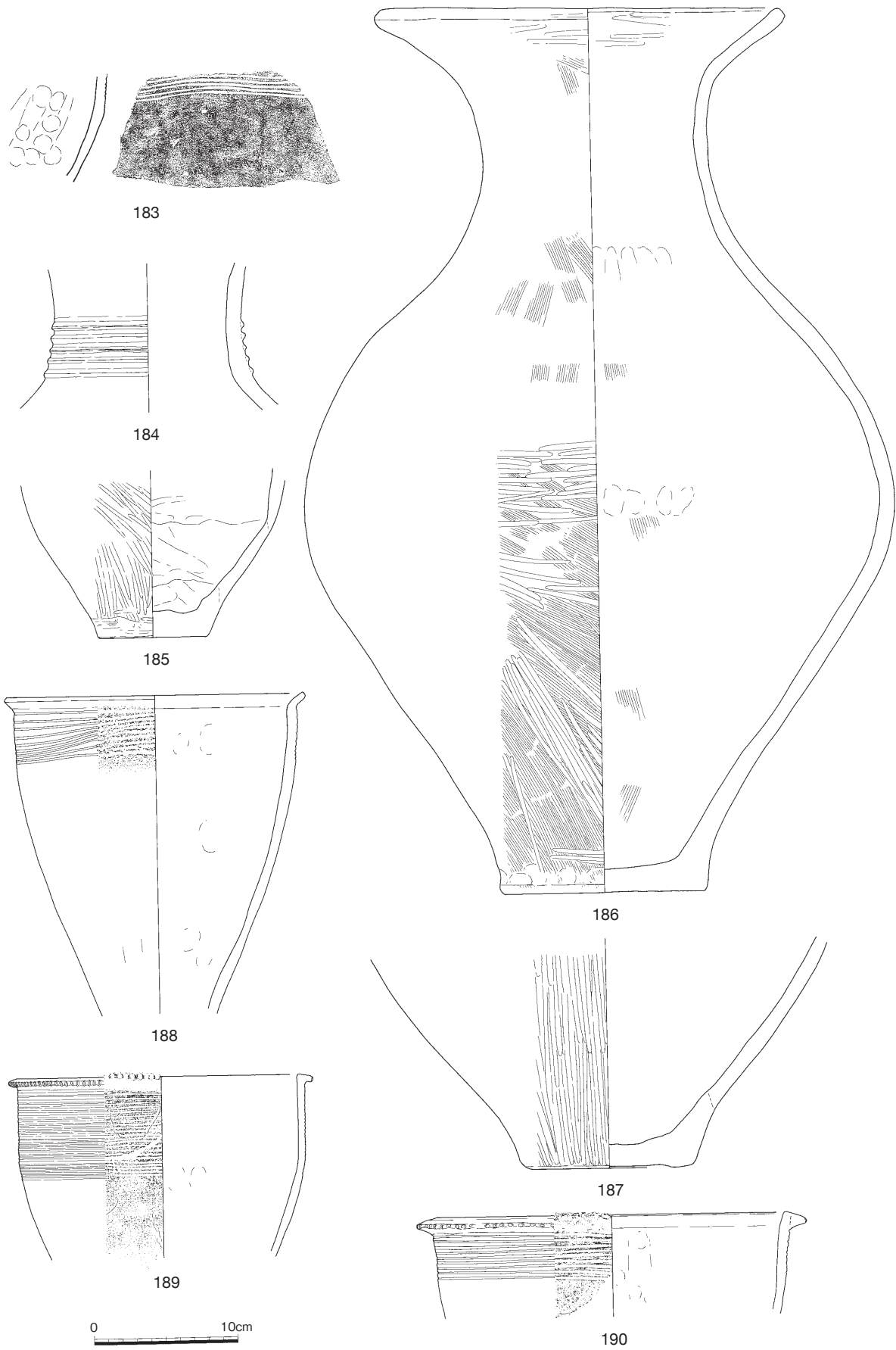
第99図 溝12下層出土遺物① (1/4)



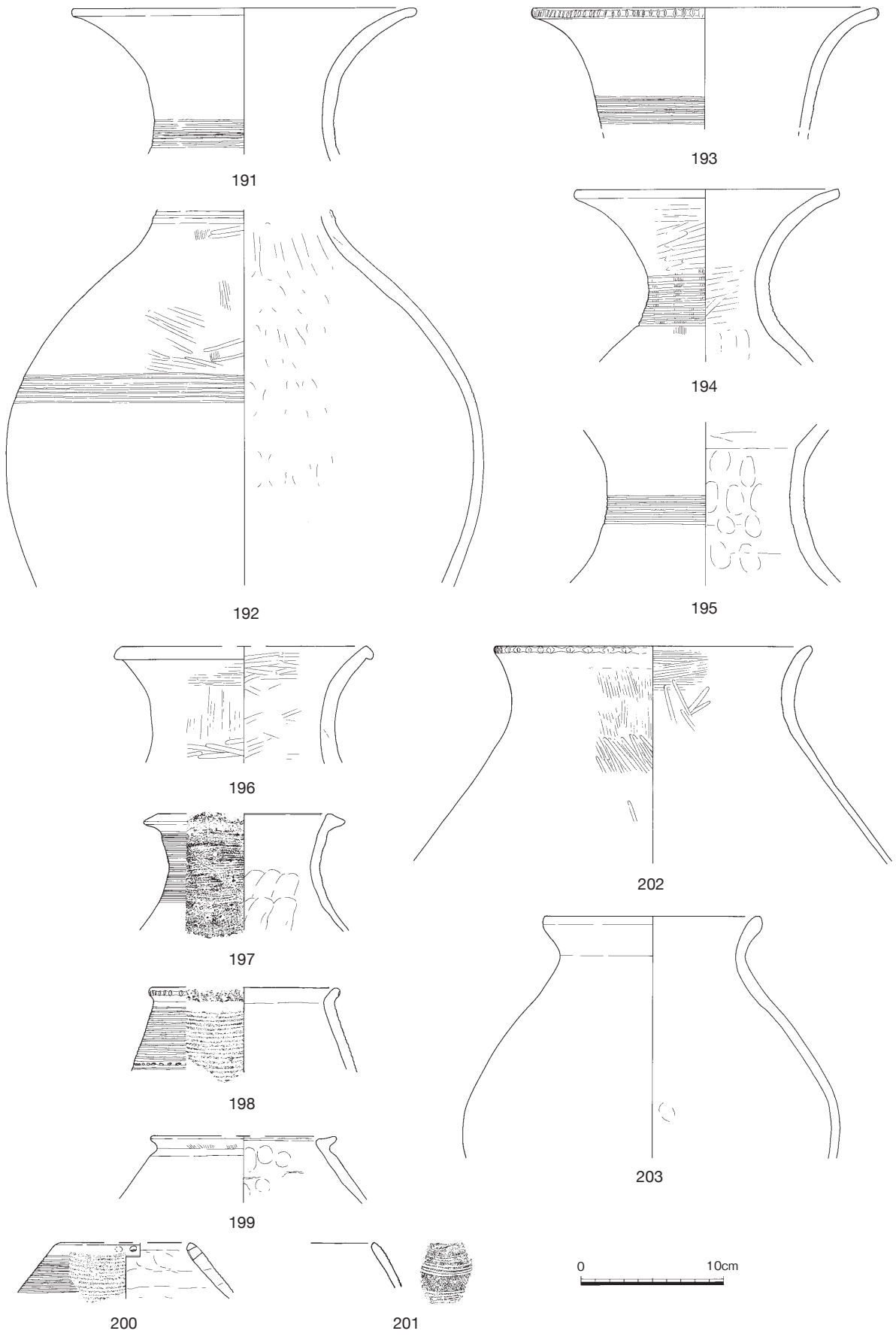
第100図 溝12下層出土遺物② (1/4)

り上層出土が圧倒的に多い。

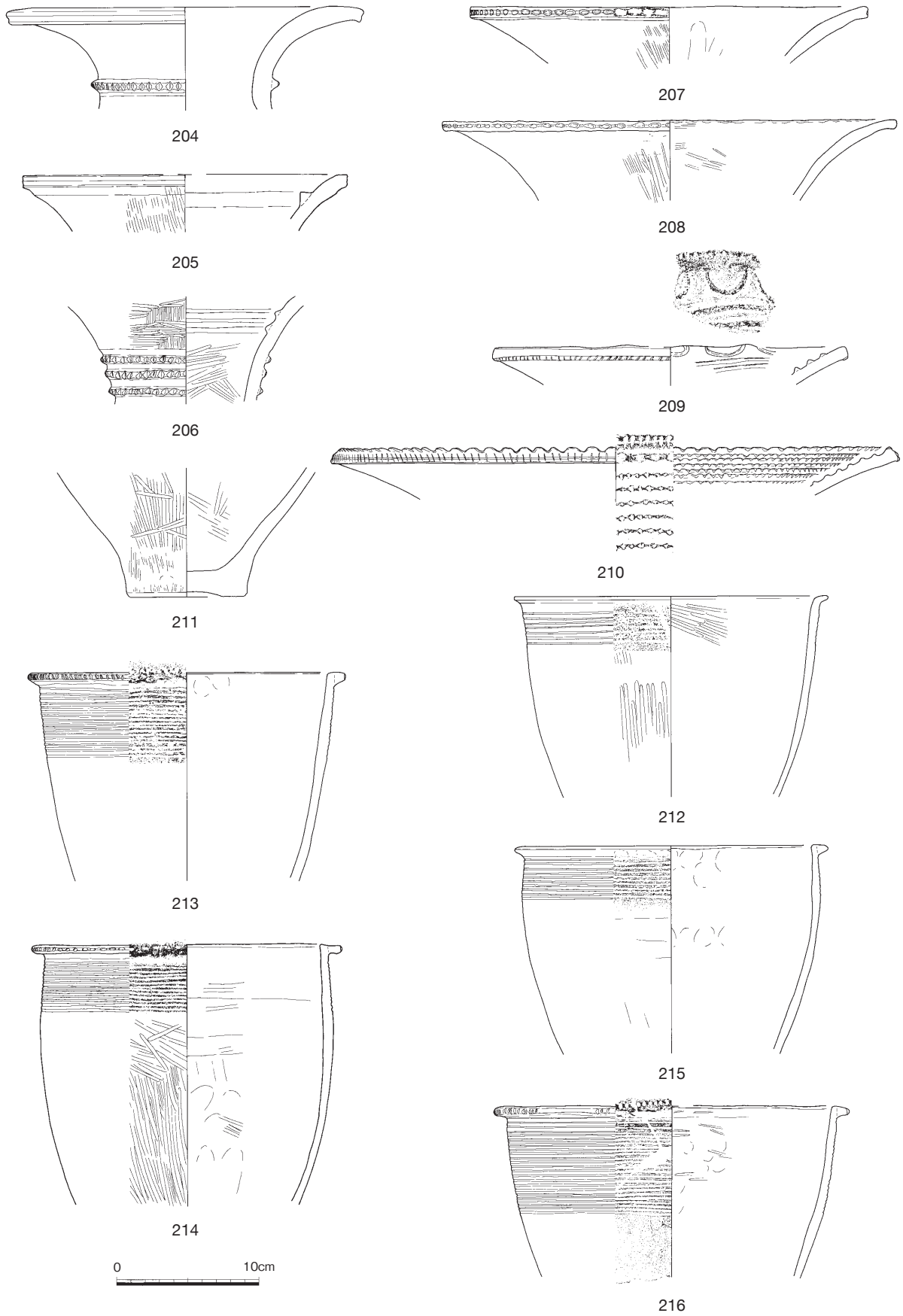
壺には、頸部が長く、ラップ状に開く口縁部を持つもの、短く外反する口縁部を持つもの、無頸壺



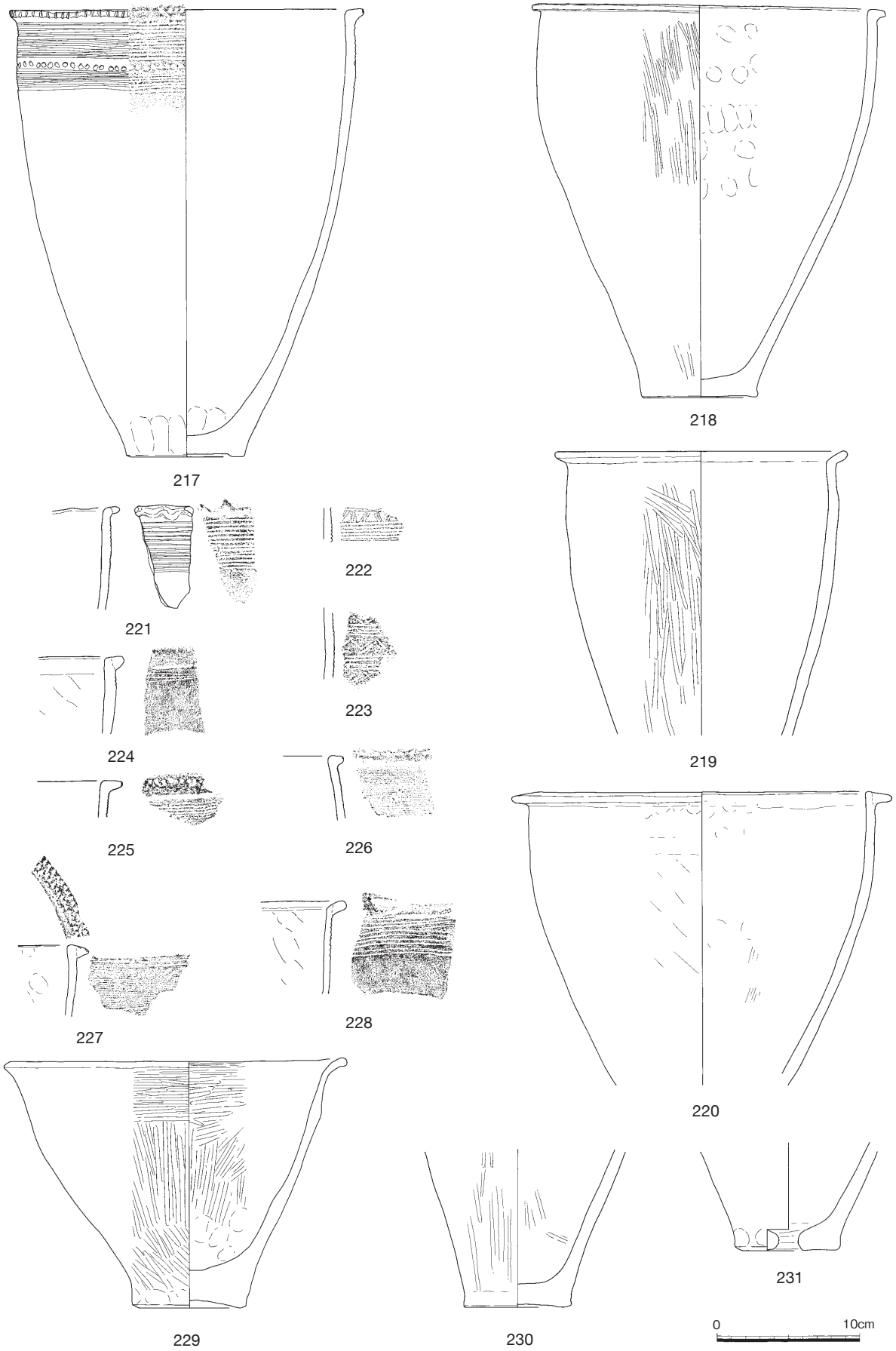
第101図 溝12最下層出土遺物 (1/4)



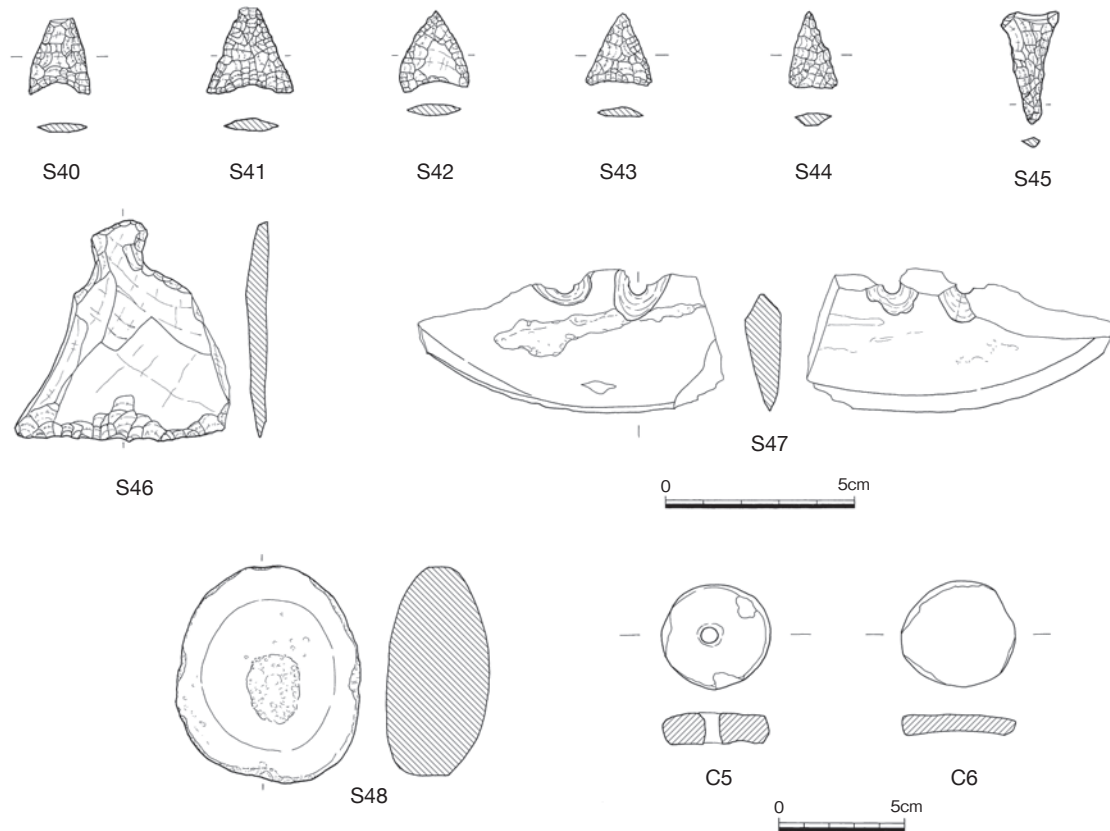
第102図 溝12出土遺物① (1/4)



第103図 溝12出土遺物② (1/4)



第104図 溝12出土遺物③ (1/4)



第105図 溝12出土遺物④ (1/2・1/3)

などがある。このうち溝底に接して出土した186の頸部は無文であるが、頸部に凹線を巡らせるもの、突帯を貼り付けるものがある。この突帯は口縁部内面にも施されており、刻みの有無でさらに二者に分けられる。

甕では、口縁部が「く」の字状に外反するものと逆「L」字状の突帯を貼り付けたものがある。また、口縁部下の施紋は、ヘラ描き沈線文、櫛描き沈線文、無文のものがある。櫛描きには典型的な多条化した櫛描き沈線文226・227と二本以上の施文単位が認められる櫛描き状の沈線228などに分けられるが、ヘラ描き沈線を含めて8条以上、最多で23条と多条化が進む。さらに口縁部に刻み目を入れるもの、入れないものや沈線文の下端に刺突文を施すも、二単位の沈線文様の間に刺突文や山形文を施す例がある。

これらの出土土器の特徴からみていくつかの類別に分けられるようであり、時間的な変化として理解することが可能であるが、四層に分けて取り上げた層位との対応関係は明快さを欠く。このことはこの溝の廃絶時に周辺の遺構群を削平し、意図的に埋め戻されたと考えることができるのでは無いだろうか。

石器では、石鏃S40～44、石錐S45、削器S46、磨製石包丁S47、石錘S48が、土製品には紡錘車C5、円盤状土製品C6がある。

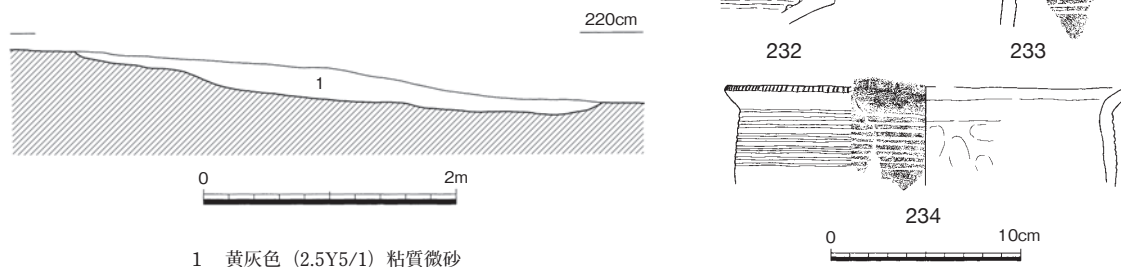
出土遺物からみたこの溝の時期は、百・前・Ⅲ～百・中・Ⅰである。さて、この溝は、百間川沢田遺跡環濠集落の廃絶後に位置づけられるが、百間川沢田遺跡からの集落の移動を想定しても良いであろう。この溝は、微高地西側の調査状況や断面の形状からみて環濠で無いことは明らかであるものの、集落の区画を意図した可能性は残る。(小林・弘田)

溝13 (第10~12・106図)

41A~41・42B区にかけて、中期水田の下層で検出した。北東から南西方向に流走する溝で、南側で「百沢田3溝2」につながっている。検出面での幅が358~449cm、深さは47~50cmで底面は西から東に傾斜をもつ。検出レベルは、微高地西側の水田1 (前期水田) と比べて50~60cm低い。

口縁部内面に刻み目突帯をもつ壺232、ヘラ描き沈線の甕233・234が出土しており、時期は、百・前・Ⅲである。

旧河道の埋没過程でできた溝と理解する。(弘田)



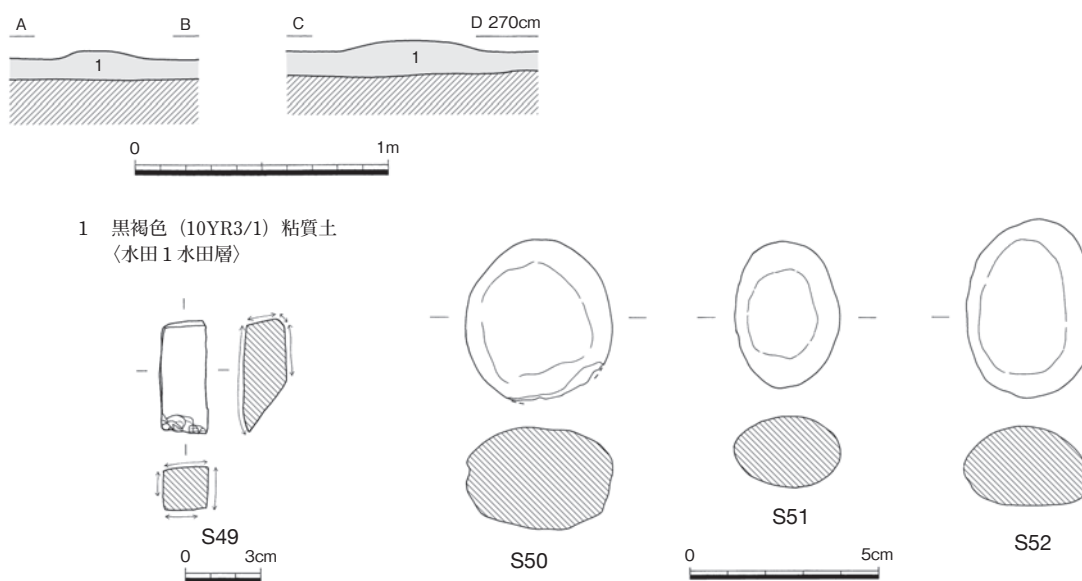
1 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質微砂

第106図 溝13 (1/60)・出土遺物 (1/4)

5 水田

水田1 (第10・11・107図、図版1-2)

29・30C区の、調査区西端で検出した水田である。南北に細長い区画を検出している。上層には中期水田 (水田2) の水田層との間には間層を挟まず、中期水田層を除去すると前期水田 (水田1) が検出できる。畦畔の高さは1~2cm程度と低く、過去の調査成果で畦畔が延びると想定される部分や水田端なども検出できていない。また、畦畔と水田層は分層できていない。水田面の標高は260~265cmで、東側の細長い区画の部分で標高が高くなっている。出土遺物には、砥石S49と、投弾と考えられる河原石S50~S52が出土している。(團)



1 黒褐色 (10YR3/1) 粘質土
(水田1水田層)

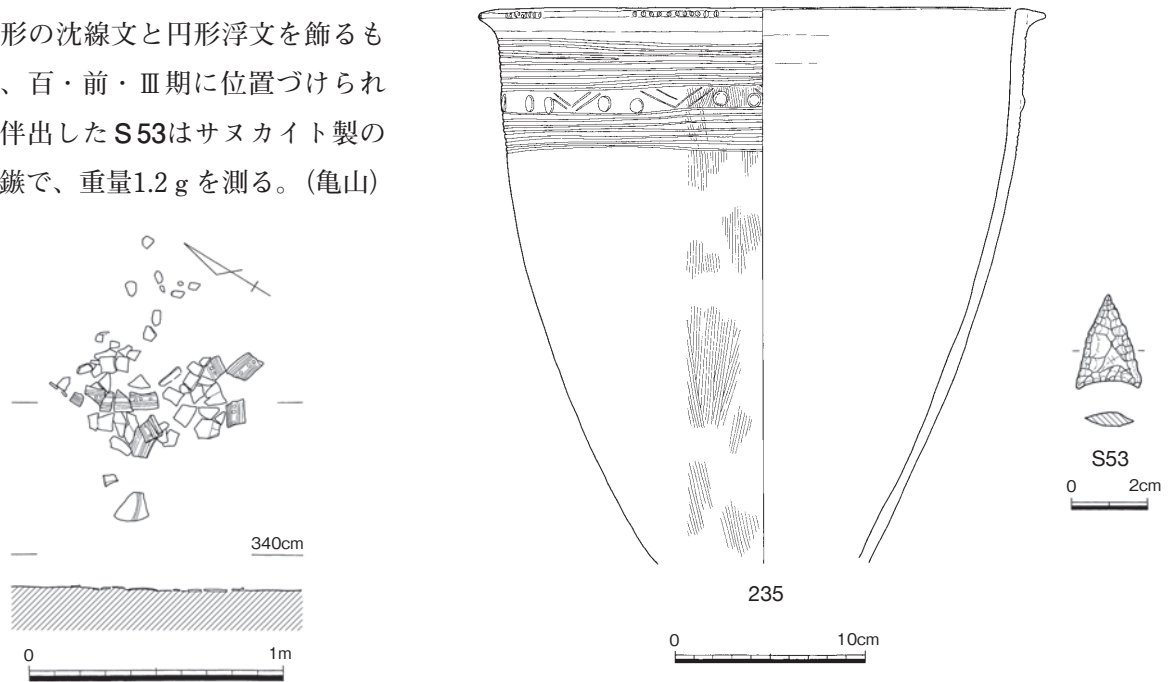
第107図 水田1 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3)

6 土器溜まり

土器溜まり1 (第10~12・108図、図版22)

土坑43の南東に接して検出したもので、39B区のほぼ中央に位置する。黒褐色土層を掘り下げる過程で検出したもので、甕235の破片が1 mほどの範囲に散布していた。その高度は標高327cmとほぼ一定で、掘り方は確認できなかった。

235は倒L字形の口縁部をもつ瀬戸内型の甕である。刻み目を施す口縁下にヘラ描きによる多条の沈線を上下に分けて施し、その間にV字形の沈線文と円形浮文を飾るもので、百・前・Ⅲ期に位置づけられる。伴出したS53はサヌカイト製の凹基鏃で、重量1.2 gを測る。(亀山)

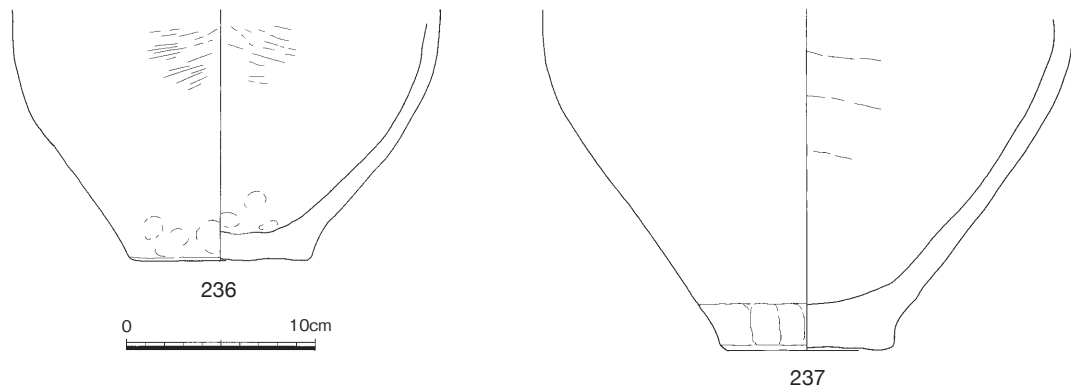


第108図 土器溜まり1 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

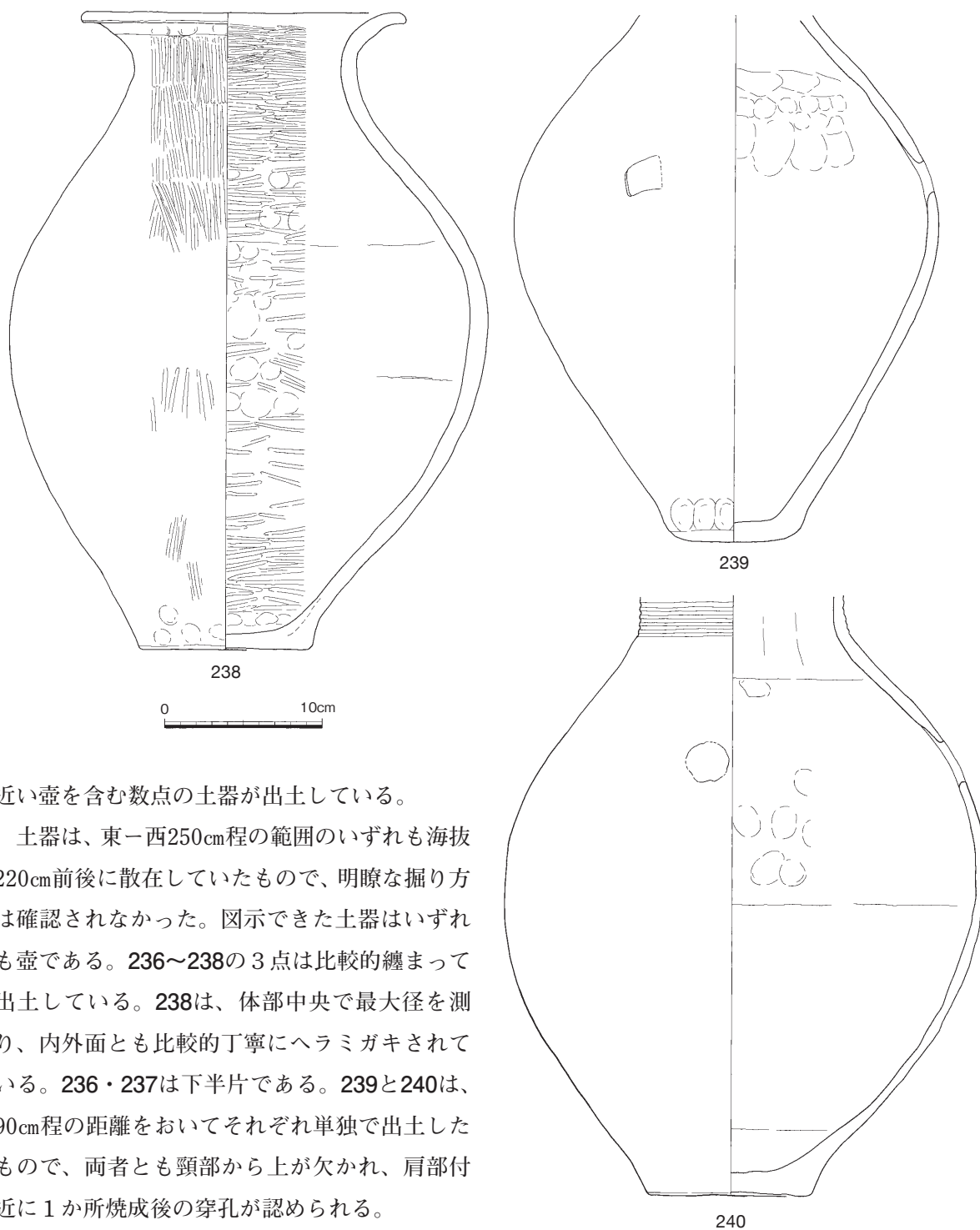
7 下がり

下がり1 (第10・11・109・110図)

37Bの南端付近、明黄褐色粘性微砂を基盤とする微高地が低位部に移行する北側の斜面上において検出された遺構である。微高地の下がりに堆積しているにぶい褐色粘性微砂の中からは、ほぼ完形に



第109図 下がり1 出土遺物① (1/4)



近い壺を含む数点の土器が出土している。

土器は、東-西250cm程の範囲のいずれも海拔220cm前後に散在していたもので、明瞭な掘り方は確認されなかった。図示できた土器はいずれも壺である。236~238の3点は比較的纏まって出土している。238は、体部中央で最大径を測り、内外面とも比較的丁寧にヘラミガキされている。236・237は下半片である。239と240は、90cm程の距離をおいてそれぞれ単独で出土したもので、両者とも頸部から上が欠かれ、肩部付近に1か所焼成後の穿孔が認められる。

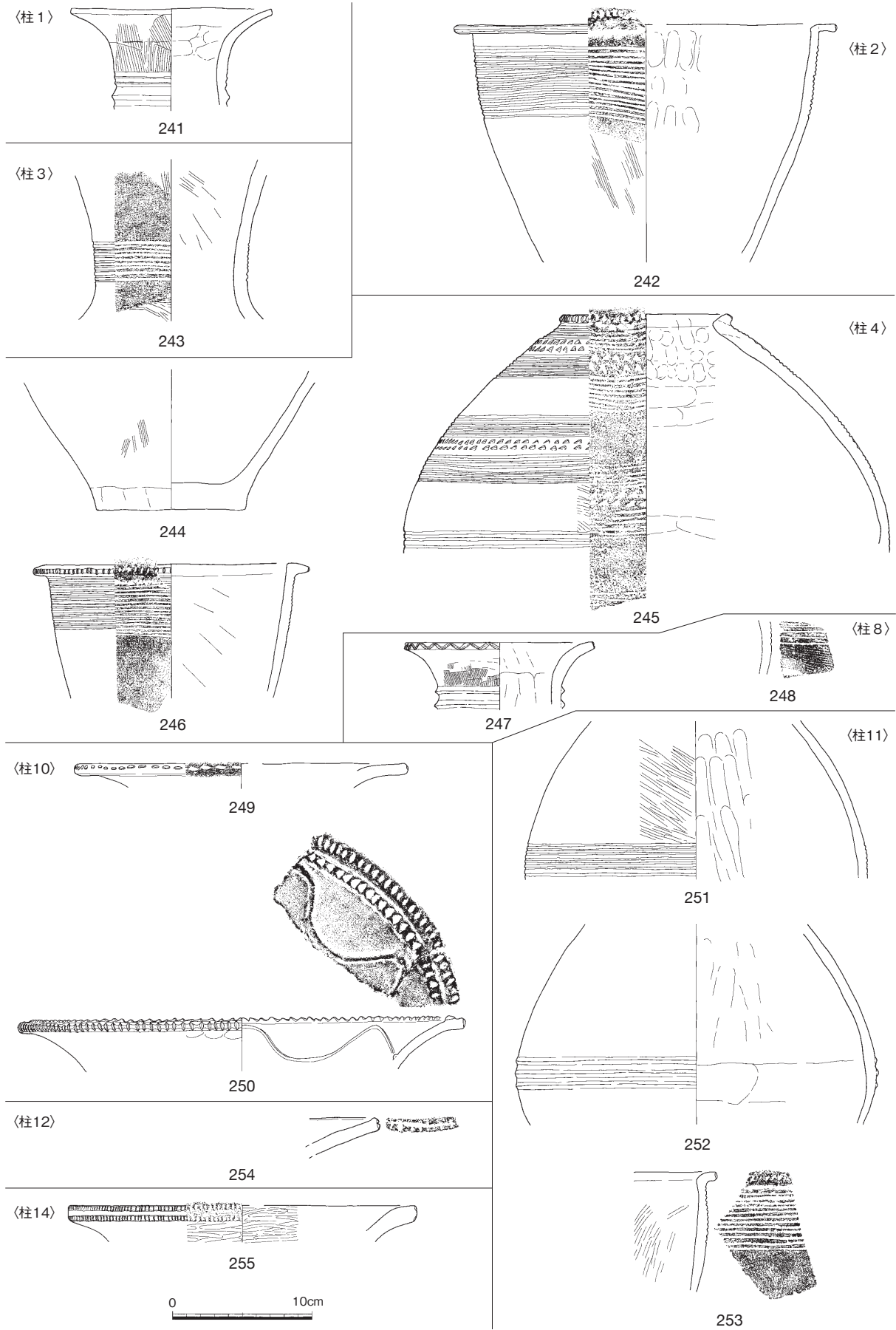
土器以外には遺物もなく、性格等は不明な遺構である。出土している土器時期は、いずれも百・前・Ⅲ頃と考えられる。(内藤)

第110図 下がり1出土遺物② (1/4)

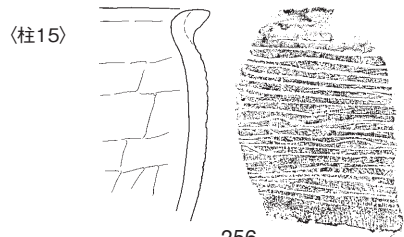
8 柱 穴

柱穴 (第10~12・111~113図、写真9・10)

個別の遺構図は掲載していないが、柱穴が多数出土している。遺物の出土していない柱穴を弥生時代前期の遺構として全体図に掲載しているために実際より数は多くなっている可能性があるが、遺物



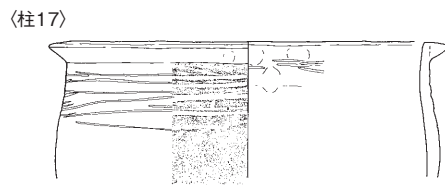
第111図 柱穴出土遺物① (1/4)



256



写真9 柱穴15 〈256〉



261

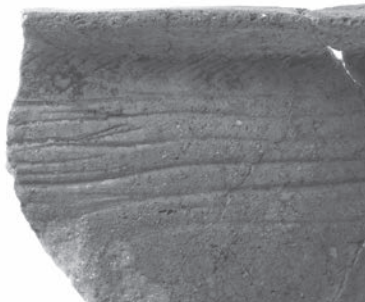
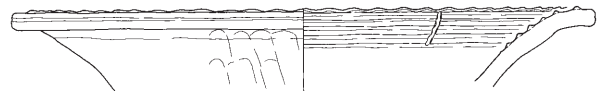
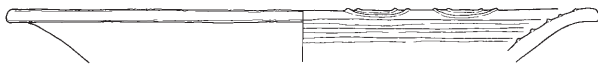


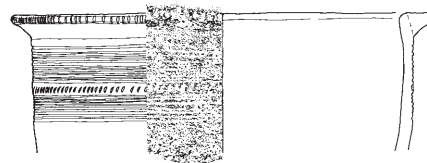
写真10 柱穴17 〈261〉



257



258



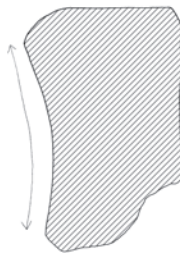
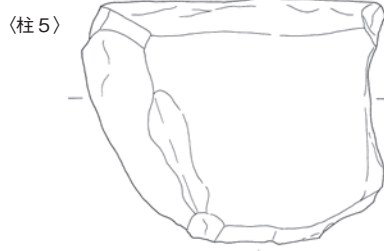
259



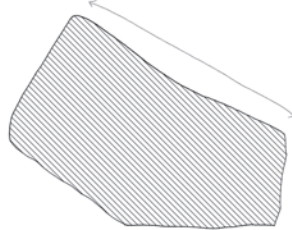
260



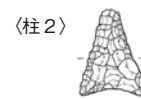
262



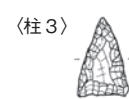
C7



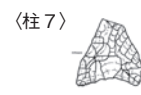
S54



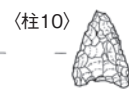
S55



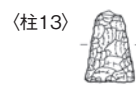
S56



S57



S58

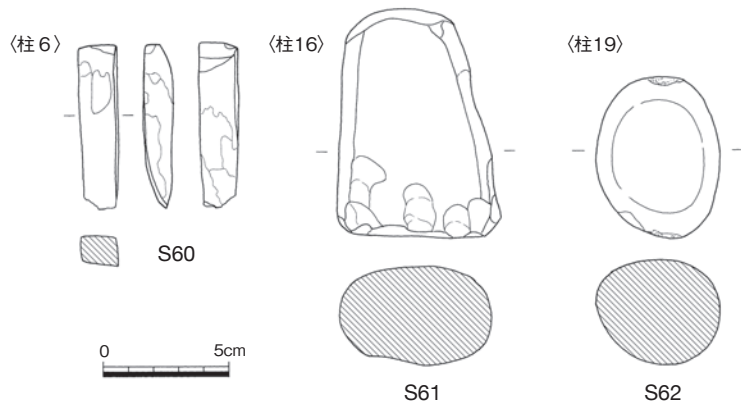


S59



第112図 柱穴出土遺物② (1/2・1/3・1/4)

が出土して時期のわかる柱穴の数も、他の時期のものと比較すると多い。特徴的な遺物が出土した柱穴について、遺物のみ掲載し、一部について説明を行う。柱穴4から出土している壺245は無頸壺で、口縁部に貼り付けの突帯を巡らし、三角形の刺突とヘラ描き沈線を配するもので、



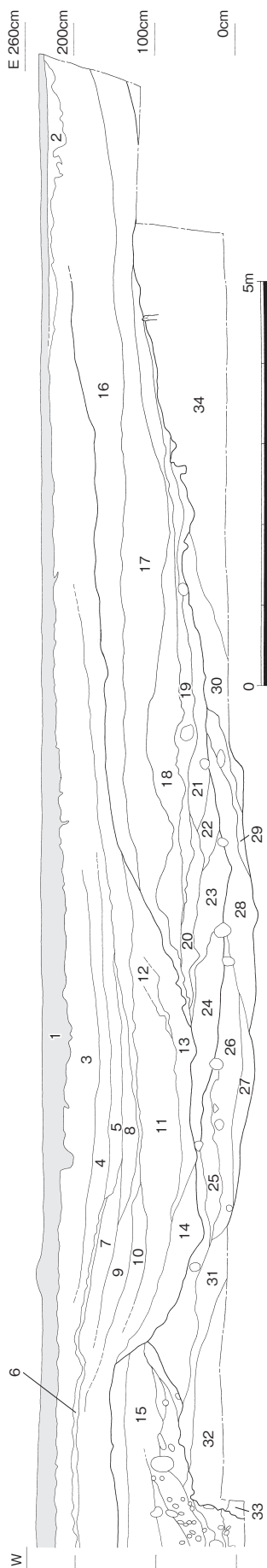
第113図 柱穴出土遺物③ (1/3)

あまり類例をみない。柱穴16から出土した甕256は、甕としては器壁が厚く、外面のヘラ描き沈線文に特徴がある。沈線は雑に施され、一部で交差している部分がある。また、線の太さや強弱にもバラツキがみられるなど、稚拙な作りである。柱穴18から出土している甕261の外面に見られるヘラ描き沈線文は7条であるが、雑にほどこされている。各柱穴から出土している広口壺は、口縁端部や内外面の調整に様々なものがみられる。柱穴から出土した石器は、S54～S62がある。いずれも百・前・Ⅲの土器が伴って出土している。S60のような、方柱状片刃石斧が出土している。(團)

9 旧河道

旧河道 (第10・11・114～116図、写真11、図版5-3・22・28)

36ライン上を延びる、旧河道である。過去の調査成果から、縄文時代～弥生時代中期にかけての旧河道であると確認されており、今回の調査でも北側の壁面部分にトレンチを設定して先行して掘り下げを行った。縄文時代の河道については、壁面でのみ確認をし、平面での掘り下げは弥生時代前期と縄文時代の河道の東側の一部のみを行い、調査区北側半分の掘り下げにとどまった。出土遺物と断面の観察から、およそ第8～10層が弥生時代中期中葉～後葉、第11～13層が中期前葉、第14層が前期、第16層以下が縄文時代の埋土であると考えられ、その川幅は10m以上あると考えられる。トレンチ内では縄文時代の河道の底を確認できていない。この河道の西岸でドングリを貯蔵した土坑1が検出されており、川辺の湿潤な環境を利用していた状況が理解できる。弥生時代前期の河道は、断面からは川幅約5m、底面の標高約40cmであったと考えられる。この河道の西側で杭列を2か所確認しており、「杭列」として後述するように、河道が弥生時代前期になって人の手が大幅に加えられていたことがわかった。この河道の南側では井堰が調査されており(百原尾島2井堰1)、同じく弥生時代前期の遺構である。弥生時代中期になると、中期前葉は川幅・深さも前期とほぼ同じ規模であったようである。この溝は中期中葉～後葉には、川幅4mであるが、底面の標高1m、深さ1m弱であるので、河道として機能していたかどうかは疑わしい。弥生時代後期の水田が作られる際には、完全に埋没していたようである。出土遺物には、土器は、縄文時代晩期～弥生時代中期にかけての土器が出土している。縄文時代の土器には、晩期の深鉢263～265、浅鉢267～269がある。弥生時代の土器には、前期の甕270・蓋271、中期の壺272などがある。土器の他に木製品があり、これらの木製品には、平鍬と考えられるW5、なんらかの部材の一部と考えられるW6、W7などがある。その他、図化していないものの杭が出土しており、後述する杭列と関連すると考えられる。(團)

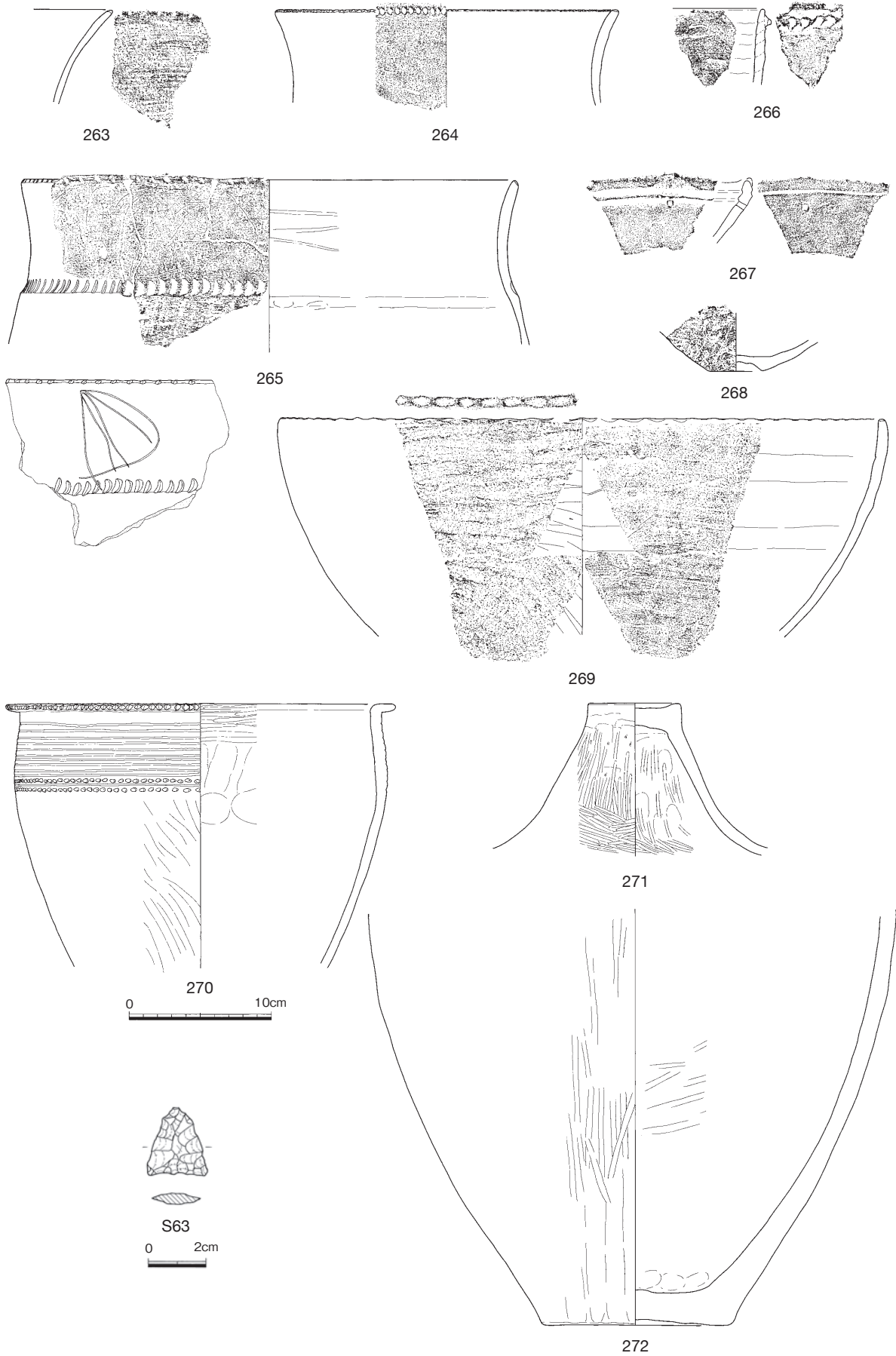


- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 土 (水田7水田層) (弥生時代後期)
- 2 灰色 (N4/) シルト
- 3 灰色 (5Y6/1) シルト
- 4 灰色 (7.5Y6/1) シルト
- 5 灰色 (7.5Y5/1) 細砂混じりシルト 炭少量含む
- 6 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト
- 7 灰色 (7.5Y6/1) シルト
- 8 オリーブ黒色 (7.5Y3/1) シルト (弥生時代中期中～後葉)
- 9 灰色 (7.5Y6/1) 細砂混じりシルト (弥生時代中期中～後葉)
- 10 灰色 (7.5Y4/1) 細砂混じりシルト (弥生時代中期中～後葉)
- 11 灰色 (7.5Y5/1) 細砂～粗砂 植物遺体含む (弥生時代中期前葉)
- 12 灰色 (7.5Y5/1) シルト (弥生時代中期前葉)
- 13 灰色 (7.5Y4/1) シルト 植物遺体含む (弥生時代中期前葉)
- 14 灰色 (7.5Y4/1) シルト・粗砂の互層 (弥生時代前期)
- 15 〈杭列1及び埋土〉 (弥生時代前期)
- 16 灰色 (7.5Y6/1) 細砂混じりシルト (第16～33層 縄文時代河道)
- 17 灰色 (5Y6/1) ～灰オリーブ色 (5Y6/2) 細砂
- 18 灰色 (7.5Y6/1～5/1) シルト・細砂の互層
- 19 灰色 (7.5Y5/1) シルト・細砂の互層
- 20 灰色 (7.5Y4/1) 粗砂混じりシルト
- 21 灰色 (5Y6/1) ～灰オリーブ色 (5Y6/2) 細砂 植物遺体含む
- 22 灰色 (7.5Y5/1) 粗砂・シルトの互層
- 23 灰色 (7.5Y5/1) 粗砂・シルトの互層
- 24 灰色 (7.5Y4/1) 粗砂・シルトの互層
- 25 灰色 (7.5Y5/1) 粗砂混じりシルト 有機物を含む
- 26 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂
- 27 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂
- 28 灰色 (7.5Y6/1) 粗砂
- 29 灰色 (7.5Y5/1) シルト 植物遺体含む
- 30 灰色 (7.5Y4/1) シルト
- 31 灰色 (5Y4/1) 微砂
- 32 黄灰色 (2.5Y4/1) 微砂 有機物を含む
- 33 黒褐色 (2.5Y3/2) 微砂
- 34 灰色 (7.5Y5/1～4/1) シルト

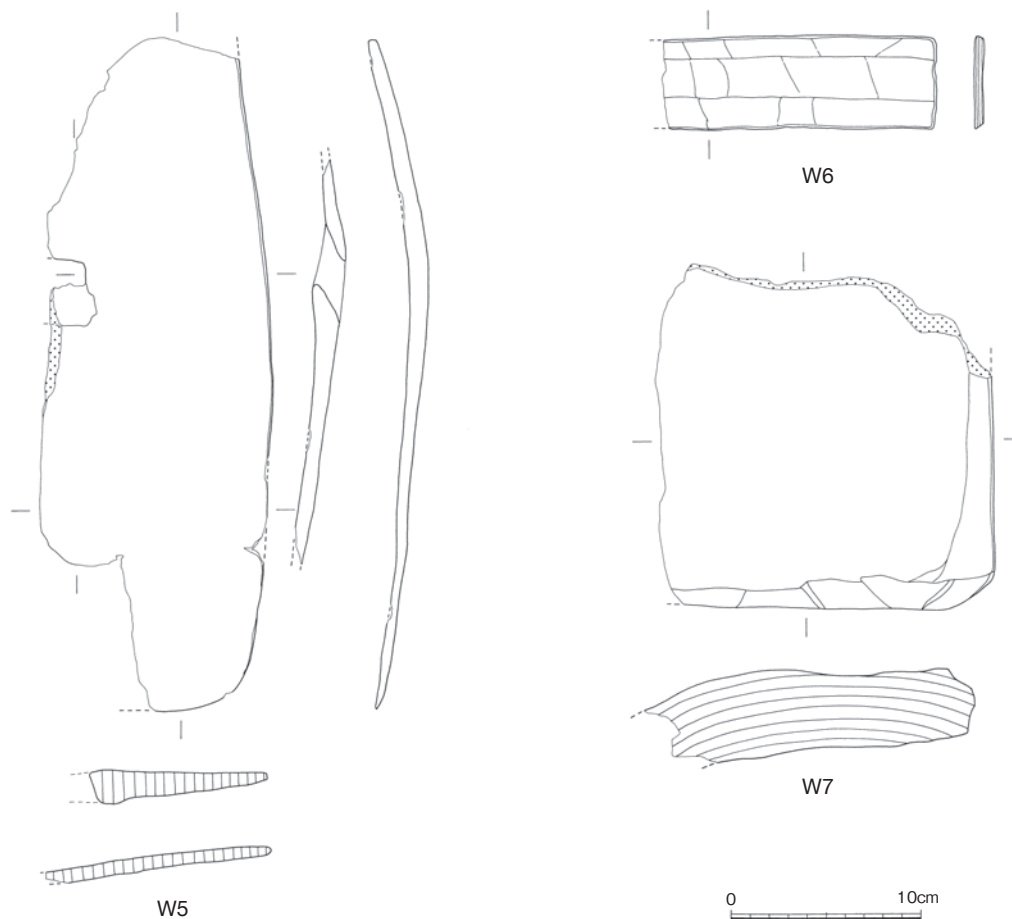


写真11 旧河道 (北東から)

第114図 旧河道 (1/80)



第115図 旧河道出土遺物① (1/2・1/4)



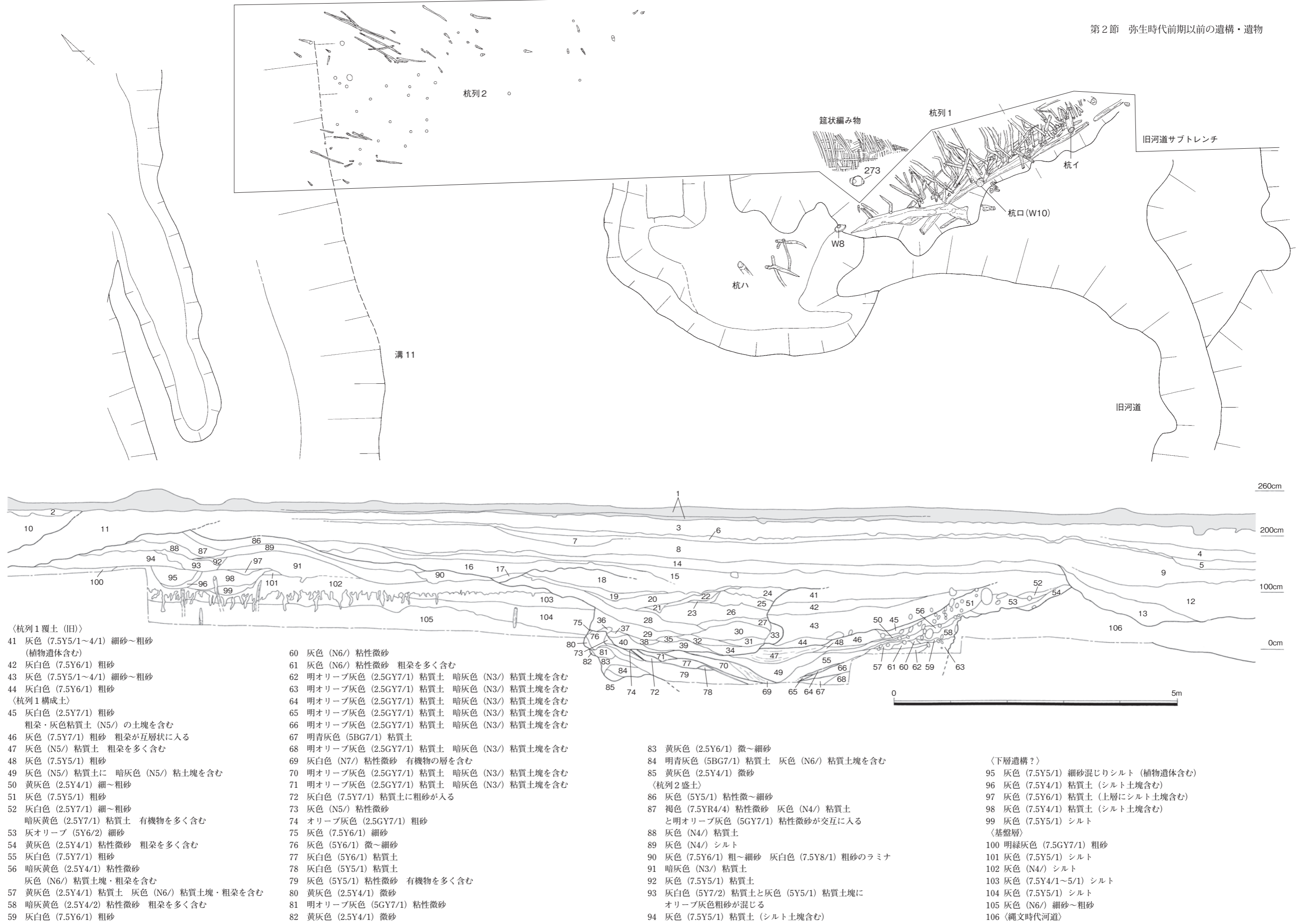
第116図 旧河道出土遺物② (1/4)

10 杭 列

杭列 (第10・11・117~125図、写真12~18、図版5-1・5-2・5-3・23・28・29)

旧河道を確認するために調査区北側の壁面に沿ってトレンチを掘り下げたところ、2か所において杭の集中箇所を検出した。旧河道の西岸部分 (以下「杭列1」) と、そこから10m程度離れた溝11の東側 (以下「杭列2」) の2地点である。杭列1は、旧河道の西側に位置している。規模がおよそ東西10m、南北5m、深さ2mの落ち込みの南側に接して、調査区の際から西に向かっておよそ3m、杭

- | | | |
|------------------------------------|--------------------------------------|---|
| 1 <水田6・7水田層> (弥生時代後期末) | <杭列1覆土 (新)> | 27 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 微砂 |
| 2 <溝21~28> (弥生時代後期) | 15 灰色 (7.5Y4/1) シルト | 28 灰色 (7.5Y4/1) シルト |
| 3 灰色 (5Y6/1) シルト | 16 灰色 (7.5Y3/1) シルト | 29 灰白色 (2.5Y7/1) 粗砂 |
| 4 灰色 (7.5Y6/1) シルト | 17 灰色 (7.5Y4/1) シルト | 木片を多く含む |
| 5 灰色 (7.5Y5/1) 細砂混じりシルト
(炭少量含む) | 18 灰色 (7.5Y4/1) 細砂混じりシルト
(植物遺体含む) | 30 灰色 (N6/) 粘質土 |
| 6 黄灰色 (2.5Y5/1) シルト | 19 灰色 (7.5Y3/1) シルト | 31 灰色 (7.5Y5/1) 細砂混じりシルト |
| 7 灰色 (5Y6/1) シルト | 20 灰色 (7.5Y4/1) シルト混じり粗砂 | 32 灰色 (N5/) 粘質土 |
| 8 灰色 (7.5Y6/1) シルト
(一部酸化鉄沈着) | 21 灰色 (7.5Y4/1) シルト 土塊状 | 33 灰白色 (7.5Y6/1) 粗砂 |
| 9 <旧河道> (弥生時代中期中~後葉) | 22 灰色 (7.5Y4/1) シルト | 34 灰色 (N6/) 粘質土 |
| 10 <溝14> (弥生時代中期) | 23 灰色 (7.5Y3/1) シルト | 35 灰白色 (7.5Y6/1) 粗砂 |
| 11 <溝11> (弥生時代前期) | 24 灰色 (7.5Y5/1) シルト (土塊状) | 36 灰色 (N6/) 粘質土 |
| 12 <旧河道> (弥生時代中期前葉) | 25 灰色 (7.5Y5/1) 細砂混じりシルト
(土塊状) | 37 灰白色 (7.5Y7/1) 粗砂
灰色 (N6/) 粘質土塊を含む |
| 13 <旧河道> (弥生時代前期) | 26 灰色 (7.5Y6/1~5/1) シルト
(土塊状) | 38 灰色 (N5/) 粘質土 |
| 14 灰色 (7.5Y6/1) 細砂混じりシルト | | 39 灰色 (N6/) 粘質土 灰白色粗砂のラミナ |
| | | 40 灰白色 (N7/) 粘質土 |



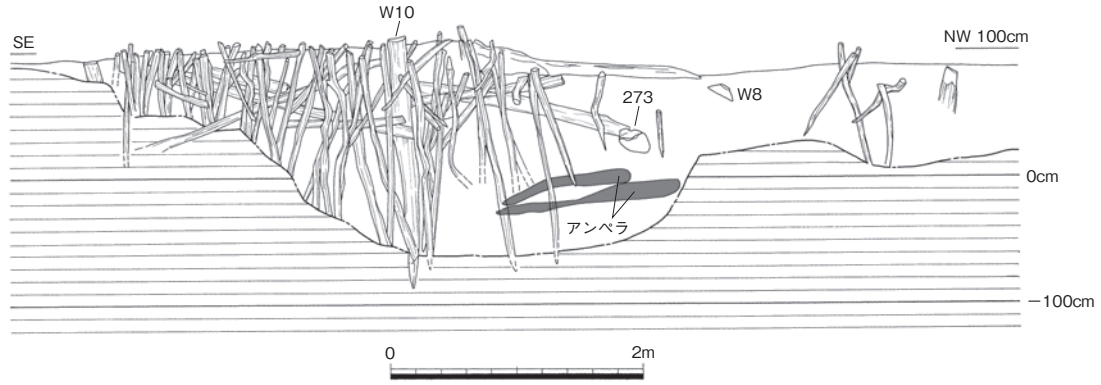
- 41 灰色 (7.5Y5/1~4/1) 細砂~粗砂 (植物遺体含む)
- 42 灰白色 (7.5Y6/1) 粗砂
- 43 灰色 (7.5Y5/1~4/1) 細砂~粗砂
- 44 灰白色 (7.5Y6/1) 粗砂
- 〈杭列1構成土〉
- 45 灰白色 (2.5Y7/1) 粗砂 粗朶・灰色粘質土 (N5/) の土塊を含む
- 46 灰色 (7.5Y7/1) 粗砂 粗朶が互層状に入る
- 47 灰色 (N5/) 粘質土 粗朶を多く含む
- 48 灰色 (7.5Y5/1) 粗砂
- 49 灰色 (N5/) 粘質土に 暗灰色 (N5/) 粘土塊を含む
- 50 黄灰色 (2.5Y4/1) 細~粗砂
- 51 灰色 (7.5Y5/1) 粗砂
- 52 灰白色 (2.5Y7/1) 細~粗砂 暗灰黄色 (2.5Y7/1) 粘質土 有機物を多く含む
- 53 灰オリーブ (5Y6/2) 細砂
- 54 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂 粗朶を多く含む
- 55 灰白色 (7.5Y7/1) 粗砂
- 56 暗灰黄色 (2.5Y4/1) 粘性微砂 灰色 (N6/) 粘質土塊・粗朶を含む
- 57 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土 灰色 (N6/) 粘質土塊・粗朶を含む
- 58 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘性微砂 粗朶を多く含む
- 59 灰白色 (7.5Y6/1) 粗砂

- 60 灰色 (N6/) 粘性微砂
- 61 灰色 (N6/) 粘性微砂 粗朶を多く含む
- 62 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粘質土 暗灰色 (N3/) 粘質土塊を含む
- 63 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粘質土 暗灰色 (N3/) 粘質土塊を含む
- 64 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粘質土 暗灰色 (N3/) 粘質土塊を含む
- 65 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粘質土 暗灰色 (N3/) 粘質土塊を含む
- 66 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粘質土 暗灰色 (N3/) 粘質土塊を含む
- 67 明青灰色 (5BG7/1) 粘質土
- 68 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粘質土 暗灰色 (N3/) 粘質土塊を含む
- 69 灰白色 (N7/) 粘性微砂 有機物の層を含む
- 70 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粘質土 暗灰色 (N3/) 粘質土塊を含む
- 71 明オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粘質土 暗灰色 (N3/) 粘質土塊を含む
- 72 灰白色 (7.5Y7/1) 粘質土に粗砂が入る
- 73 灰色 (N5/) 粘性微砂
- 74 オリーブ灰色 (2.5GY7/1) 粗砂
- 75 灰色 (7.5Y6/1) 細砂
- 76 灰色 (5Y6/1) 微~細砂
- 77 灰白色 (5Y6/1) 粘質土
- 78 灰白色 (5Y5/1) 粘質土
- 79 灰色 (5Y5/1) 粘性微砂 有機物を多く含む
- 80 黄灰色 (2.5Y4/1) 微砂
- 81 明オリーブ灰色 (5GY7/1) 粘性微砂
- 82 黄灰色 (2.5Y4/1) 微砂

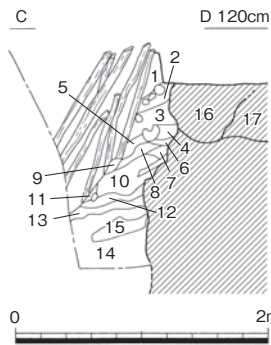
- 83 黄灰色 (2.5Y6/1) 微~細砂
- 84 明青灰色 (5BG7/1) 粘質土 灰色 (N6/) 粘質土塊を含む
- 85 黄灰色 (2.5Y4/1) 微砂
- 〈杭列2盛土〉
- 86 灰色 (5Y5/1) 粘性微~細砂
- 87 褐色 (7.5YR4/4) 粘性微砂 灰色 (N4/) 粘質土 と明オリーブ灰色 (5GY7/1) 粘性微砂が交互に入る
- 88 灰色 (N4/) 粘質土
- 89 灰色 (N4/) シルト
- 90 灰色 (7.5Y6/1) 粗~細砂 灰白色 (7.5Y8/1) 粗砂のラミナ
- 91 暗灰色 (N3/) 粘質土
- 92 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土
- 93 灰白色 (5Y7/2) 粘質土と灰色 (5Y5/1) 粘質土塊に オリーブ灰色粗砂が混じる
- 94 灰色 (7.5Y5/1) 粘質土 (シルト土塊含む)

- 〈下層遺構?〉
- 95 灰色 (7.5Y5/1) 細砂混じりシルト (植物遺体含む)
- 96 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土 (シルト土塊含む)
- 97 灰色 (7.5Y6/1) 粘質土 (上層にシルト土塊含む)
- 98 灰色 (7.5Y4/1) 粘質土 (シルト土塊含む)
- 99 灰色 (7.5Y5/1) シルト
- 〈基盤層〉
- 100 明緑灰色 (7.5GY7/1) 粗砂
- 101 灰色 (7.5Y5/1) シルト
- 102 灰色 (N4/) シルト
- 103 灰色 (7.5Y4/1~5/1) シルト
- 104 灰色 (7.5Y5/1) シルト
- 105 灰色 (N6/) 細砂~粗砂
- 106 縄文時代河道

第117図 杭列 (1/60)



第118図 杭列1立面 (1/60)



- | | |
|---|--|
| 1 黄灰色 (10YR4/1) 粘性微砂 有機物を含む | 10 黄灰色 (2.5Y5/1) 砂礫
直径1~2cm大の礫を多く含む |
| 2 灰白色 (2.5Y7/1) 粗砂 | 11 灰色 (N4/) 粘質土
灰白色 (2.5Y7/1) 粗砂を少量含む |
| 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
灰白色 (2.5Y7/1) 粗~細砂が混じる | 12 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 粗朶を含む |
| 4 灰色 (7.5Y4/1) 粘性微砂
直径5mm~1cmの礫が混じる | 13 灰色 (N4/) 粘質土 |
| 5 灰色 (N5/) 粘質土 | 14 灰色 (N4/) 粗~粗砂 直径5mm大の礫を含む |
| 6 灰色 (5Y4/1) 粘性微砂で細~粗砂混じり | 15 明緑灰色 (10G7/1) 粘質土 |
| 7 黄灰色 (2.5Y5/1) 微砂
灰白色 (2.5Y7/1) 微砂を含む | 16 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂
有機物を多く含む (土坑1) |
| 8 灰白色 (2.5Y7/1) 粗砂 | 17 灰色 (N6/) 粘性微砂 (縄文河道) |
| 9 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質土
粗砂・直径5mm程度の礫が混じる | |

第119図 杭列1南北方向断面 (1/60)



写真12 杭列1 (北から)

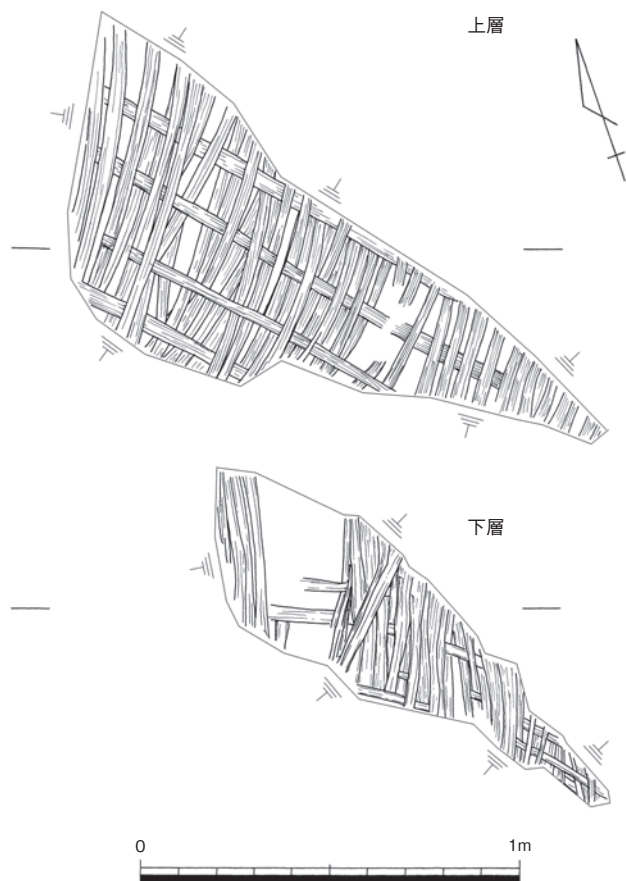


写真13 杭列1南北方向断面 (西から)

の頭が40本程度、2~3列に並んで検出された。杭列1に接するこの落ち込みを当初、溜め池状の遺構と考え、杭列1を溜め池状の遺構の護岸のための施設と考えたが、旧河道に接していること、埋土が旧河道と類似することから、旧河道の流れによって一部が抉れてできた落ち込み状のもので、元来は旧河道の一部であると考えられる。このため、杭列1は旧河道に伴うものであると推測される。

杭列1は、縦方向に打ち込まれた杭と、その背後や杭と杭の間に置かれた横木の50本で構成されている。調査区際のために、取り上げのできた杭は1本(W10)であり、先端までを確認できたのも3本にとどまるが、これらから杭はおよそ2mの長さであったことがわかった。これらの杭は、ほとん

どが直径5cm程度の芯持ち丸木が用いられており、ミカン割材が1点、板材が1点あった。先端の10cm程度を何回かにわけて削ることで尖らせている。樹皮は付いたままであるが、枝葉は払われている。中にはまっすぐでなく、鍵状に曲がった木を使用しているなど、必要最小限の加工が行われていることがわかる。杭列1の先端は、直径が1cm程度の砂礫層の基盤に10cm程度打ちこまれ、この打設された杭と杭、または横木の間には、第119図の南北方



第120図 杭列1 筵状編み物検出状況 (1/20)



写真14 筵状編み物検出状況 (北から)



写真15 筵状編み物断面状況 (南から)

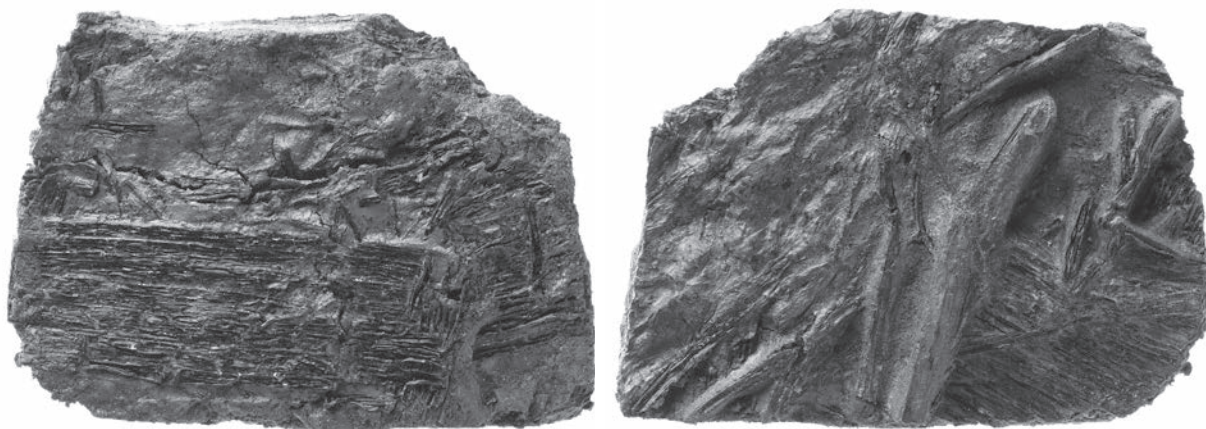


写真16 筵状編み物部分、保存処理後 (表裏)

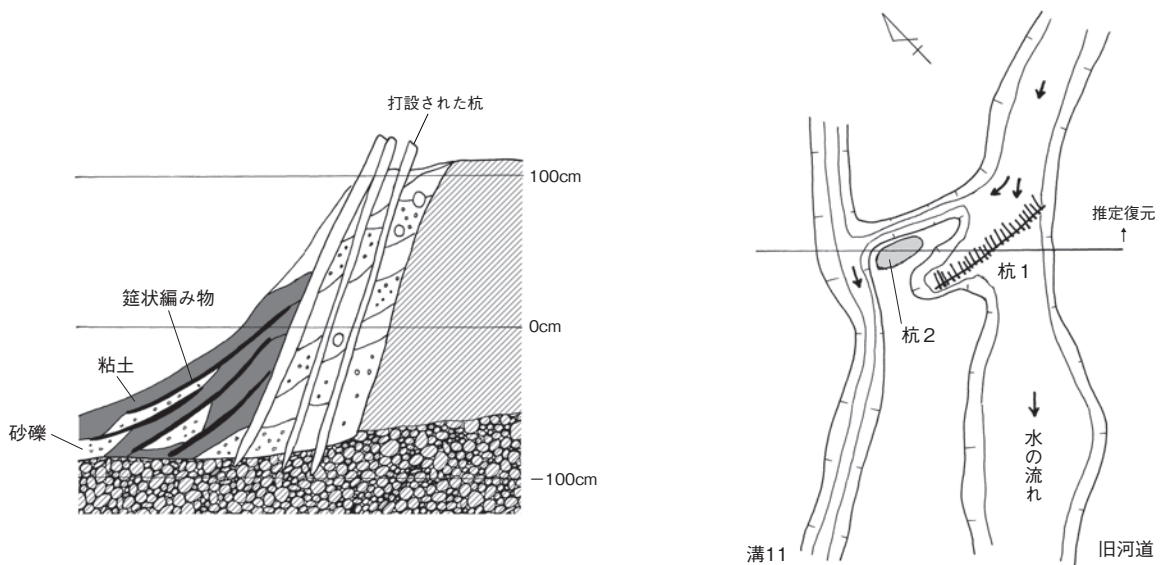


写真17 杭列1埋土（西から）

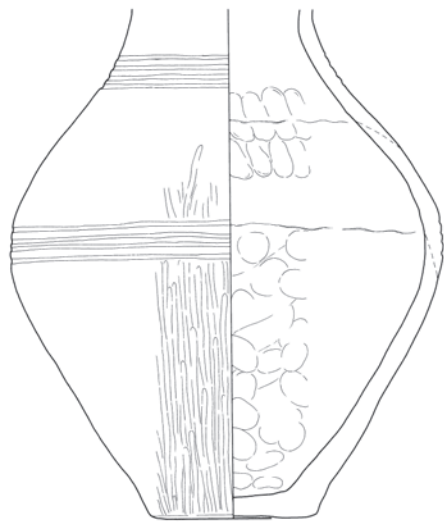


写真18 杭列2基礎部（南から）

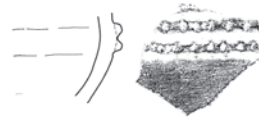
向断面でみるように、粘質土と粗砂、砂礫、粗朶を含む層などの土質の異なる土を互層に盛ることで固定している。また、杭列1の前面の一部で、植物の茎を利用して作ったと思われる筵状編み物を検出している（第120図）。これはタケ亜科やヨシ属と考えられると同定されたもので、南北方向を密に、東西方向を粗にして編まれており、杭とこれらの筵状編み物同士の間は粗朶や粘土塊によって埋められて固定される。これは平面では上下2枚を確認したが、壁面からは5枚程度の重なりを確認している。これは、旧河道の水流から杭列1の前面を強固に保護するものであろう。検出した杭のなかの、W10を含む3本は上部での直径が15cmを越える大きな丸木を使用しており、これらの3本（杭イ～ハ）が杭列1を作る際の基準の杭であった可能性がある。また、これらの杭列1を構築した土層は、第117図の第45～85層である。旧河道の挟れ部分の堆積は第41～44層と第15～40層の大きく2つに分層できる。第15～40層は杭列1及び基礎構造を壊していることが観察でき、洪水などの強い水流によって後世に杭列1ごと挟られたものと考えられる。杭列1の構築は、まず基準の太い杭イ～ハが基盤層下層の砂利層に打設される。（杭口と杭ハの間隔が4mと開いているのは後に破壊されている部分にもう1本の基準杭があったと想定でき、2mほどの間隔で基準の杭が打たれたものか。）基準の杭の間を埋めるように他の杭の先端のみを打設し、杭と落ち込みとの隙間を粘質土や砂礫などを互層に埋め、1m程度杭が埋まった時点で横木を入れながら、補強していく。上面まで杭を固定した後に杭



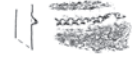
第121図 杭列1断面模式図および杭列1・2推定復元図



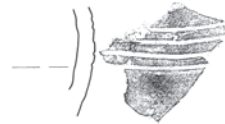
273



274



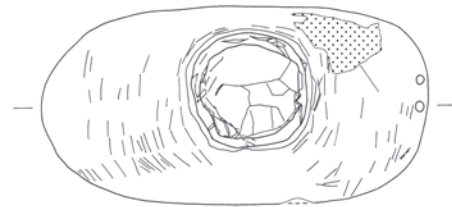
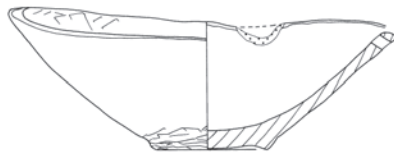
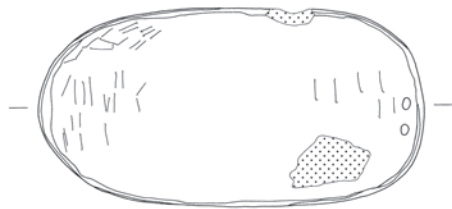
276



275



277



W8

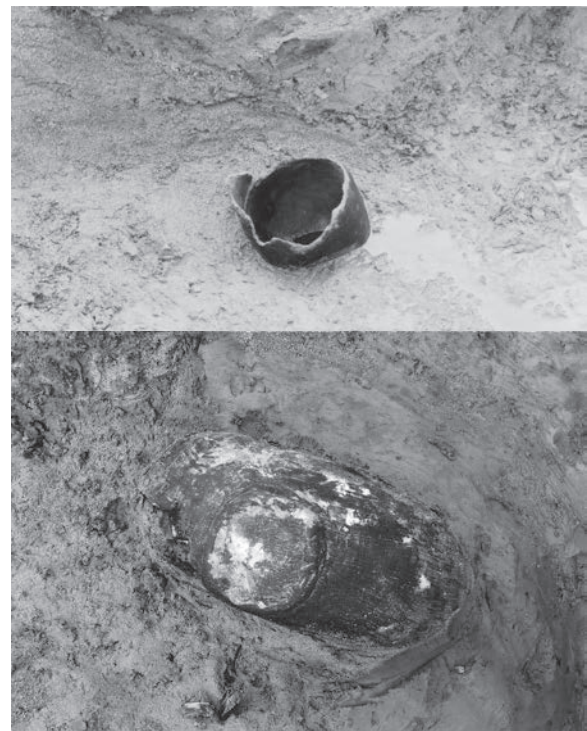
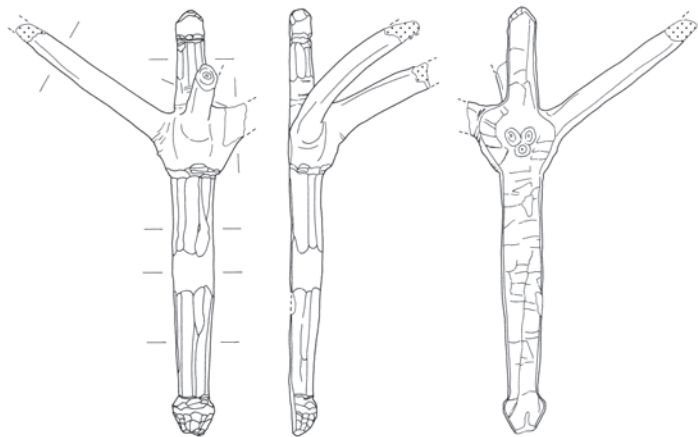


写真19 杭列1 遺物出土状況 (北から)



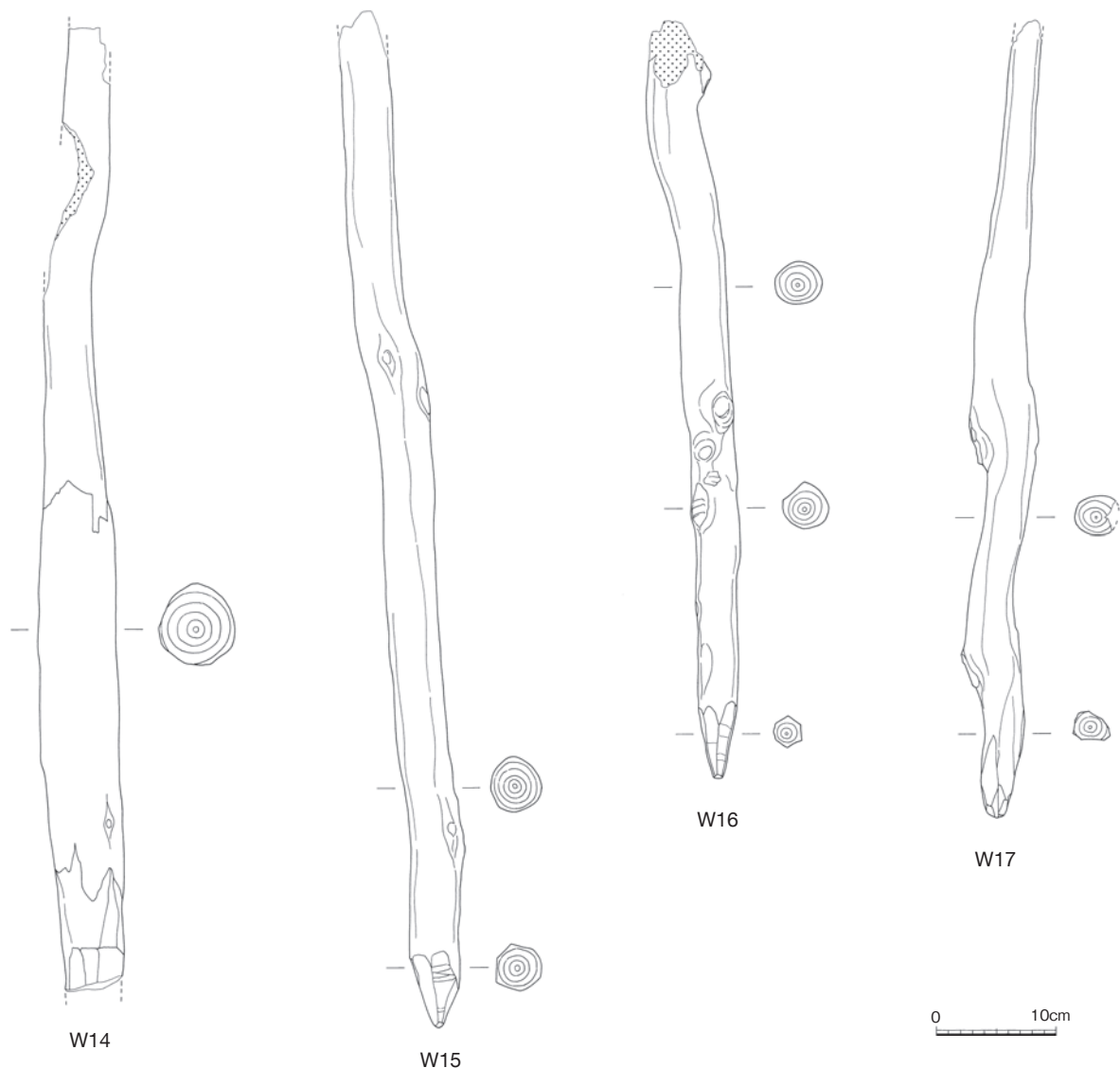
W9



第122図 杭列1 出土遺物 (1/4)



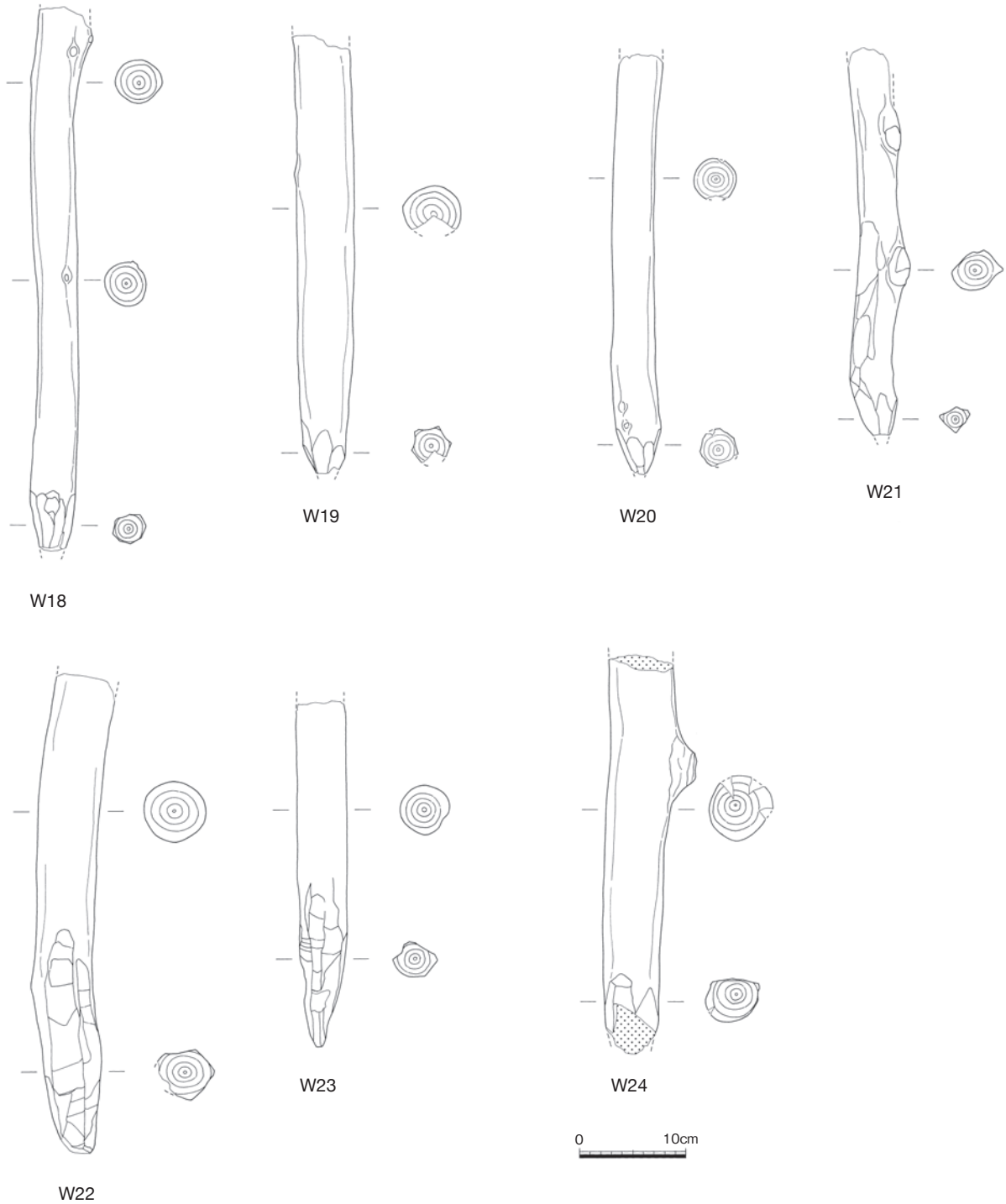
第123図 杭列1・2出土遺物 (1/6)



第124図 杭列2出土遺物① (1/6)

の前面の下半分については筵状編み物と粘土や粗朶などを用いて覆ったものと考えられる。杭列1の性格は、落ち込みが旧河道の流れによる抉れであり、かつ杭列1が北へ延びるとするならば、井堰となる可能性が高い。時期は、出土遺物から百・前・Ⅲであろう。河道を斜めに横断する井堰は、弥生時代末～古墳時代初頭と時期は異なるものの、兵庫県の長越遺跡（『播磨・長越遺跡』兵庫県教育委員会 1978年）の例に類似している。

杭列2は、およそ55本の杭と、20本の横木からなる。平面では検出できていないが、壁面観察から盛土（第117図第86～94層、標高1～2mの約1mの高さ）があったことが理解でき、横木の検出した高さが標高およそ102～130cmであることから、盛土内に入れられていたと推測される。杭は、先端の10～15cm程度を加工して尖らせており、一部は基盤層深くにまで打ちこまれている。杭の上端の標高は、高いものでは126cmを測る。土層断面から、溝11の東岸の一部は盛土によるもので、溝11と密接な関係が考えられる。この杭列1・杭列2の関連は、調査範囲が限定的であったために推測の部分が大きいですが、第121図の模式図に示したように、杭列1が旧河道に斜交して構築された井堰であった可



第125図 杭列2出土遺物② (1/6)

能性が考えられることから、取水した水を流すための水路は、近接している溝11である可能性が高い。この溝11の東岸の一部を補強するために盛土に杭を打って護岸したものが杭列2である可能性と、杭列2が東西方向に幅広く検出されていることから、第121図の模式図で示したように、調査区外に旧河道と溝11を結ぶ東西方向の溝の存在があると想定するならば、その溝と溝11の合流部を補強するために杭を打ち込んだ盛土が構築されたと考えられるのではないだろうか。溝11は弥生時代前期末～中期中葉にかけての幹線水路であり、この水路への取水口の一つとして、この杭列1で構築された井堰と杭列2で護岸された水路が用いられたと考えられる。(團)

第3節 弥生時代中期の遺構・遺物

1 概要

検出した遺構は、竪穴住居1軒、土坑22基、溝2条、水田2か所、他柱穴多数である。38～42ラインの間は微高地で、それより西側と東側は低位部となる。微高地では百・中・I～IIの古段階にかけての時期の遺構が検出され、この時期に集落が営まれていたことがわかる。

百・中・Iの時期とした遺構の多くは、百・前・IIIの土器が共伴しており、弥生時代前期から中期にかけての過渡期の様相の一旦を伺うことができる。このように百・前・III～百・中・Iの時期区分が明瞭にはできないことは、この時期の集落の実態をあらわしていると考えられる。また、出土している土器の外面の沈線の施文について、明瞭に観察できる資料が出土していることから、この時期の施文の変化を追うことのできる資料が得られたといえる。弥生時代前期から中期へかけての過渡期の遺構・遺物については、岡山県内でも検出例はさほど多くはなく、調査区の周辺で過去に行われた調査成果に負う部分が多かった。このため、この過去の調査成果を補強し得たことは、大きい意味をもつ。この時期の集落や遺物について考えるうえでも、重要な調査成果があったと考えられる。また、旧河道からは百・中・IIIの遺物も出土していることから、旧河道の上流にあたる部分に、この時期の集落の存在が想定できる。

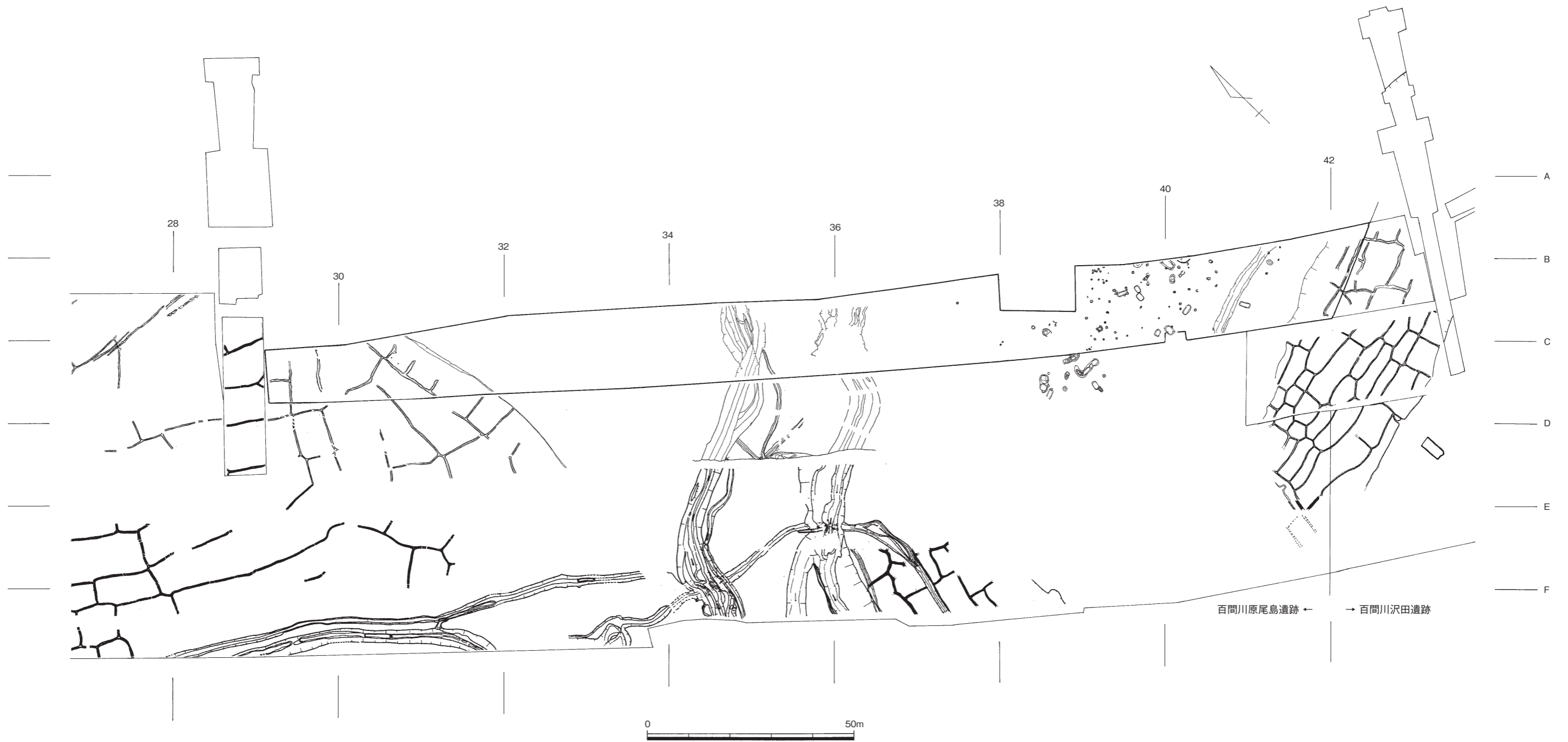
低位部では、低位部のなかでもさらに調査区の西端と東端にあたる部分において、水田を検出している。これらの水田は、過去の調査で検出している続きにあたる部分で、調査できた面積は大きくはない。しかし、この弥生時代中期の水田への水の供給について、旧河道で弥生時代前期の井堰と考えられる杭列が新たに見つかったことと、過去の調査において旧河道の下流で弥生時代中期の井堰が見つかることなどから、弥生時代前期から中期にかけて、灌漑のための土木工事が継続的に行われていたことがわかった。旧河道の東西両方向の水田に灌漑が行われていることなどから、旧河道や低位部によって分断されている集落の連携が伺われ、改めて水田の開田と灌漑工事、またそれを行った人々の集落について、改めて考察する資料が得られたといえるであろう。 (團)



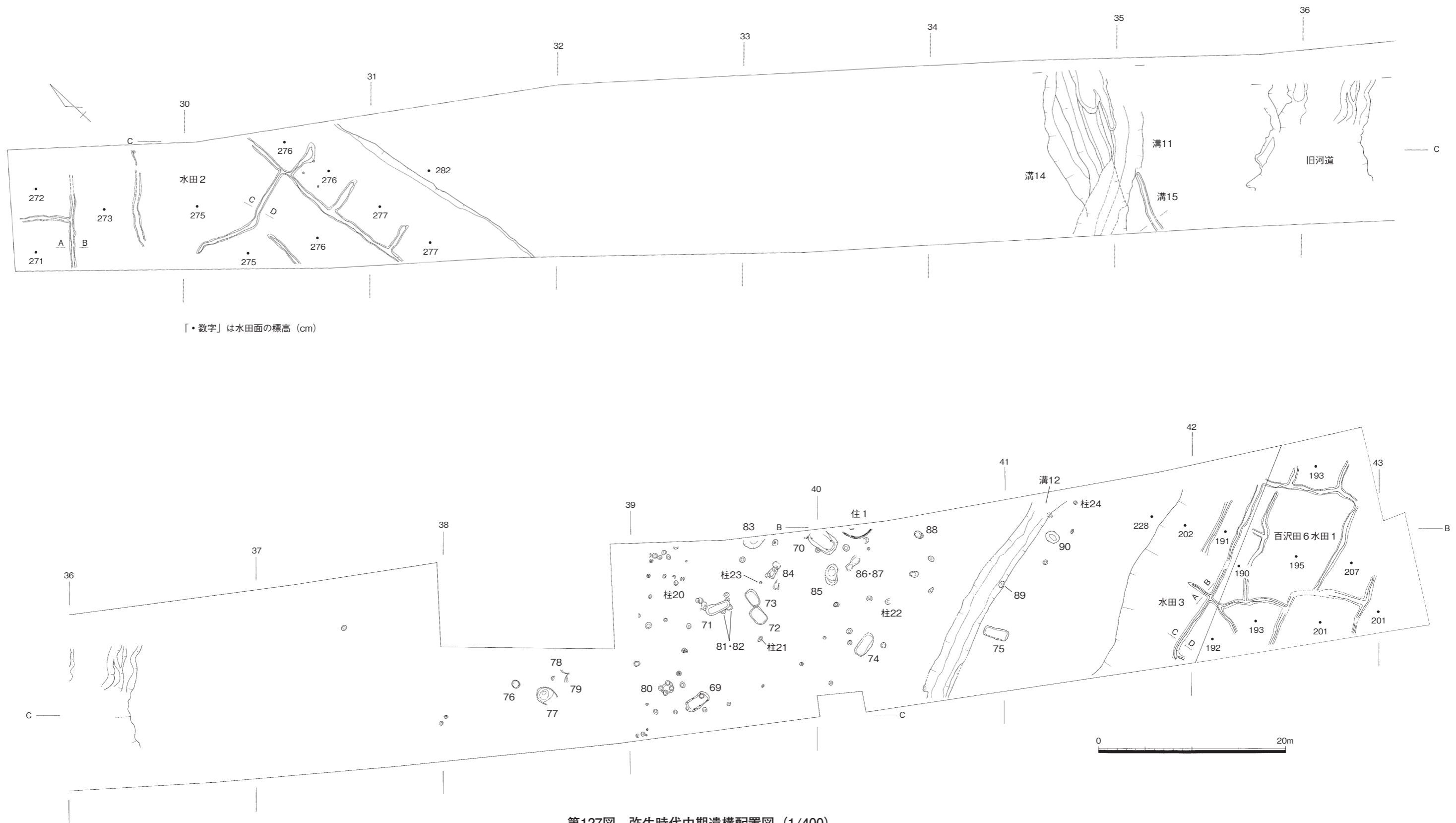
写真20 弥生時代前期～中期遺構面（南から）



写真21 溝11・14（南西から）



第126図 弥生時代中期遺構全体図 (1/1,000)



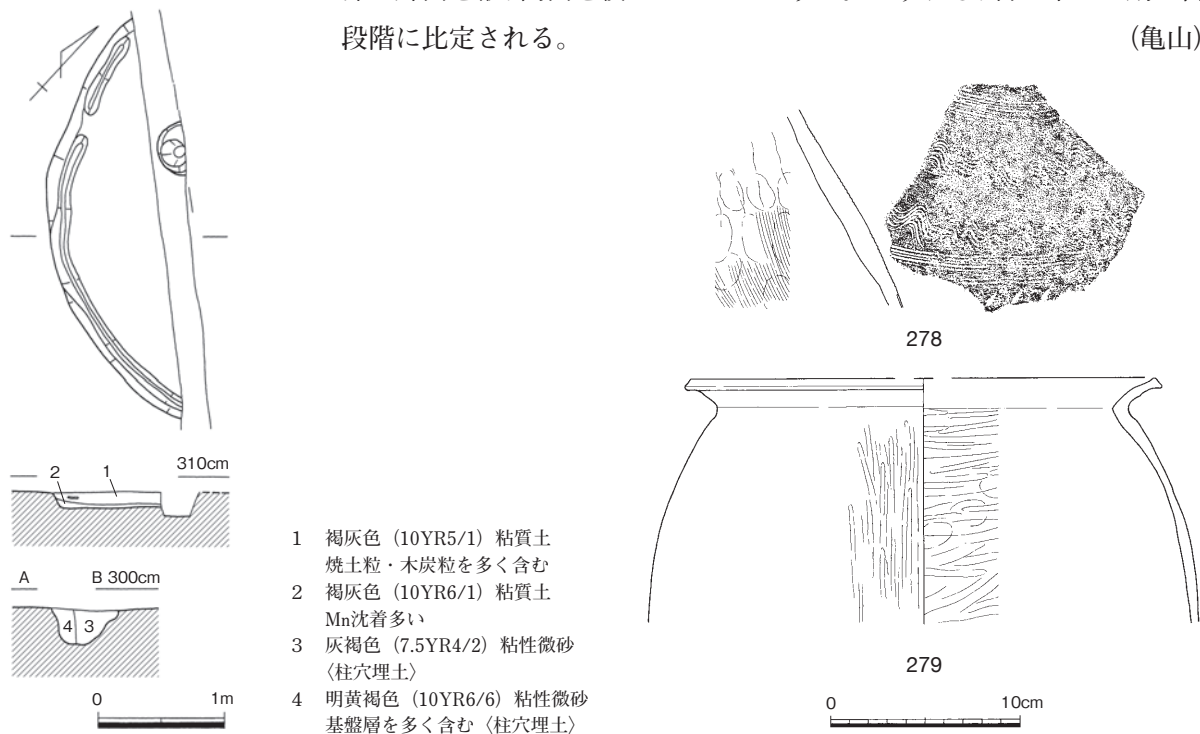
第127図 弥生時代中期遺構配置図 (1/400)

2 竪穴住居

竪穴住居 1 (第126~128図、図版7-1)

40B区の南東2.5mに位置する住居で、調査区境にかかって検出した。南西側の壁面を3mほど検出したにすぎないが、径4mほどの円形をなすものと推定される。深さ12cmにある床面は標高286cmを測り、壁面に沿って幅10cm、深さ3cmの溝がめぐる。壁体から70cm離れた位置で、径43cmの柱穴1基を確認したが、調査区外に広がるため全掘できなかった。床面上から278・279が出土している。

278は壺の肩部で、櫛描きの平行沈線文の間に波状文をめぐらす。279は口縁部が外反する甕で、体部の外面を縦、内面を横にヘラミガキする。いずれも、百・中・Ⅱ期の古段階に比定される。(亀山)



第128図 竪穴住居 1 (1/60)・出土遺物 (1/4)

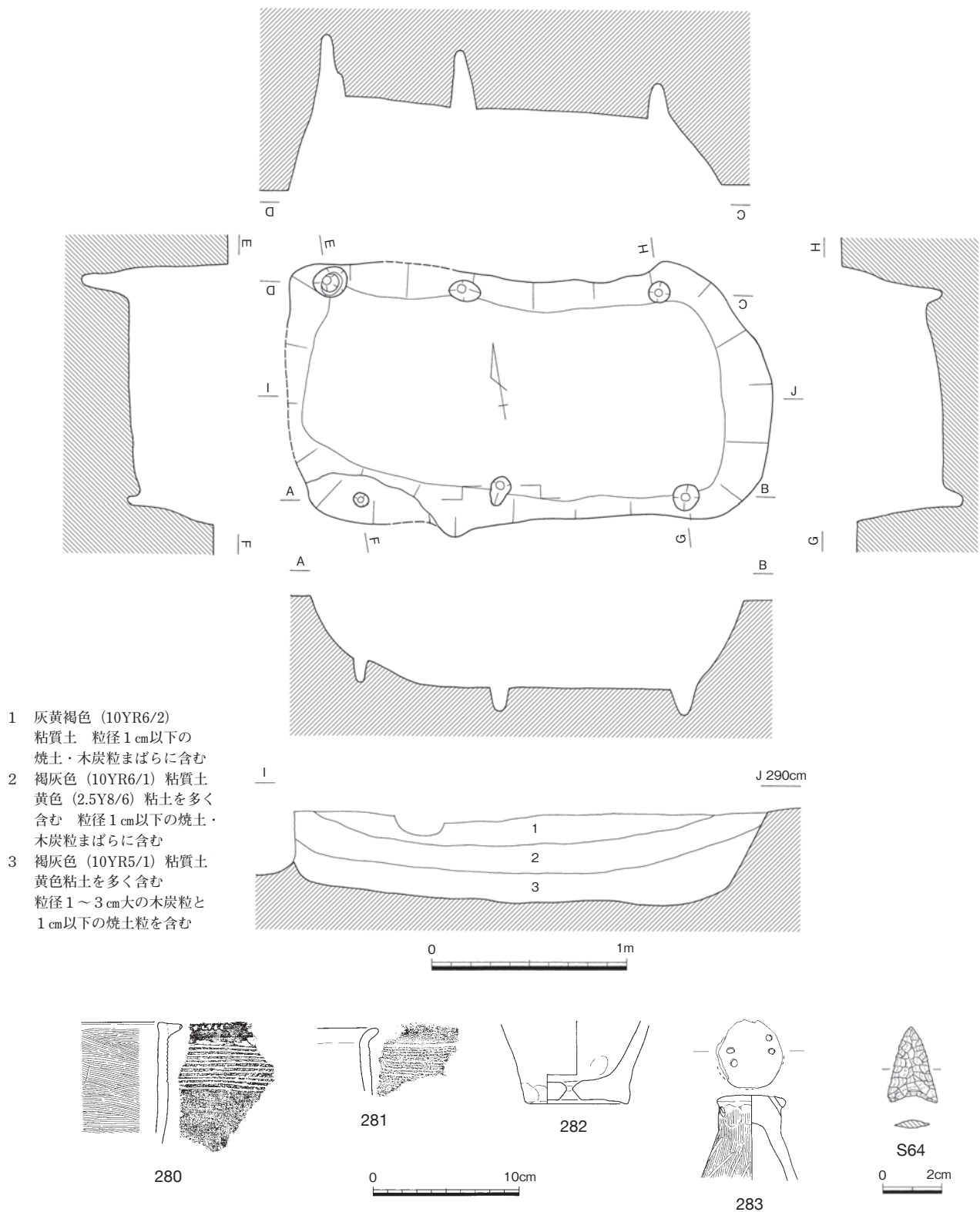
3 土坑

土坑69 (第126・127・129図、図版7-2)

39B区の微高地に位置する土坑である。規模は、長軸248cm、短軸136cm、深さ47cmを測る。平面形および下端の形状も長方形を呈しており、底面は平らである。この底面の際に、6本の柱穴を検出している。土坑に上屋をかけるためのものと考えられることから、この土坑の性格は貯蔵穴であるといえる。埋土には基盤層の土塊を多く含んでいるため、人為的に埋め戻された可能性が示唆される。出土遺物には、甕280~282、蓋283、石鏃S64がある。甕280と281のように、多条のヘラ描き沈線文と櫛描き沈線文を施すものが共伴して出土している。時期は百・中・Ⅰと考えられる (團)

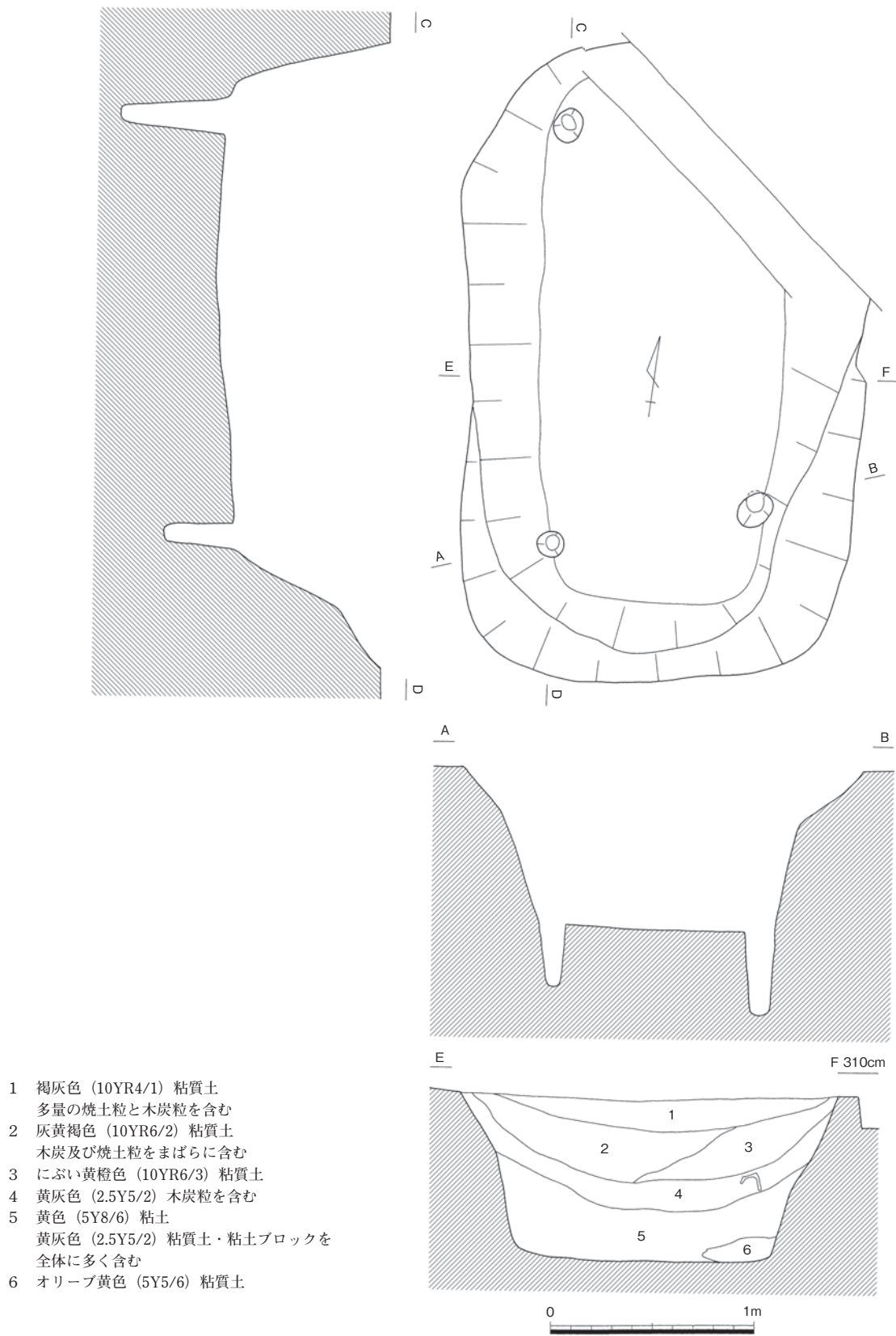
土坑70 (第126・127・130~133図、写真22~24、巻頭図版2-1、図版29)

39・40B区の微高地に位置している土坑で、規模は長軸309cm、短軸194、深さ80cmを測る。平面形および床面の形状も長方形を、断面は逆台形を呈している。床面は平らで、3本の柱を検出している

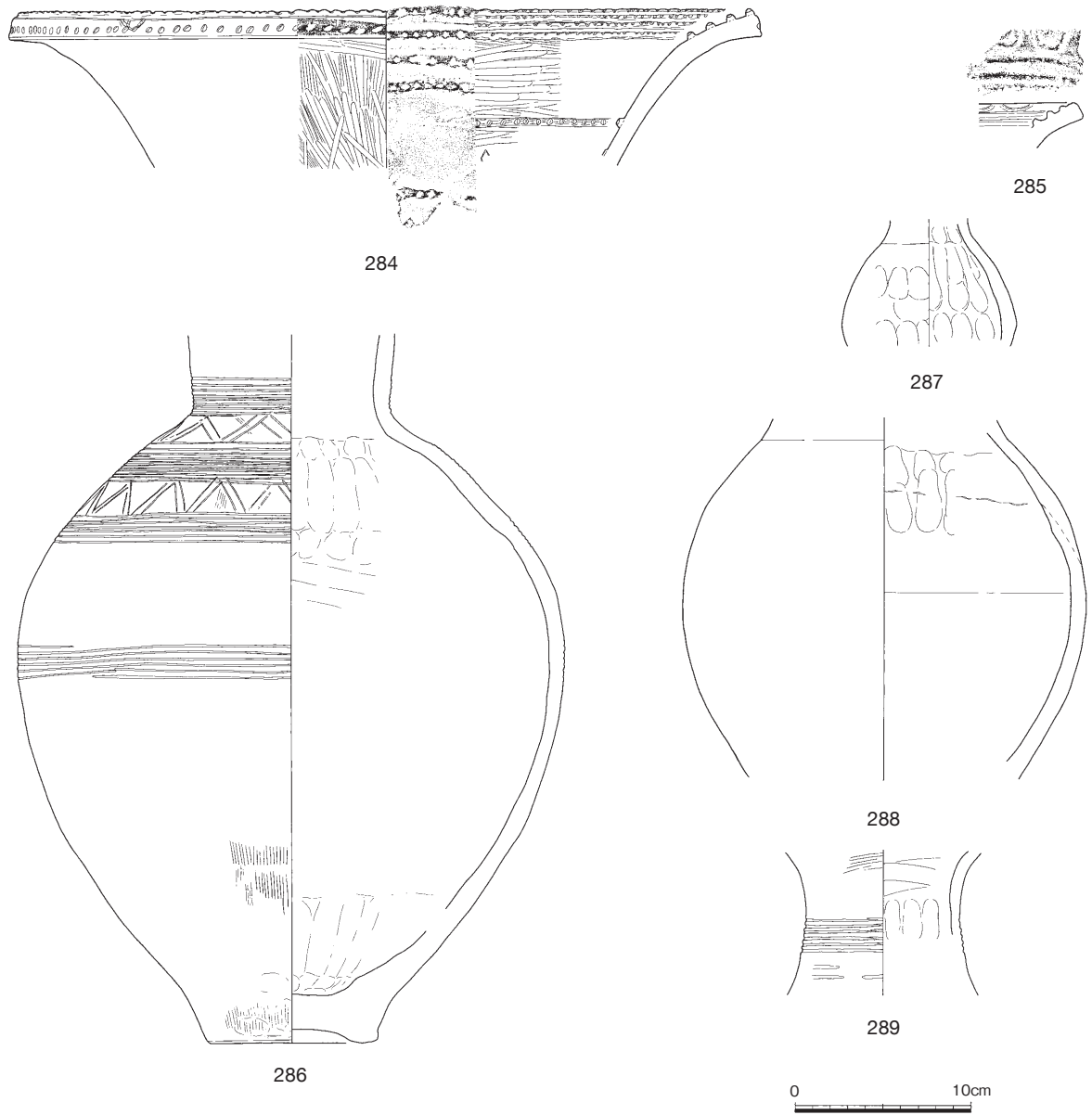


第129図 土坑69 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

が、元来は北東隅にも存在し、4本の柱が存在したと考えられる。土坑69と同様に貯蔵穴という性格を持つものであろう。埋土には、多くの炭・焼土、基盤層の土塊を含み、人為的な埋め戻しがなされたようである。出土遺物は多く、壺284~294、甕295~304、鉢305、蓋306、円盤状土製品C 8、台石S65などがある。甕・壺の外面に施されている沈線には、ヘラ描き沈線文を施すものと櫛描き沈線



第130図 土坑70 (1/30)



第131図 土坑70出土遺物① (1/4)

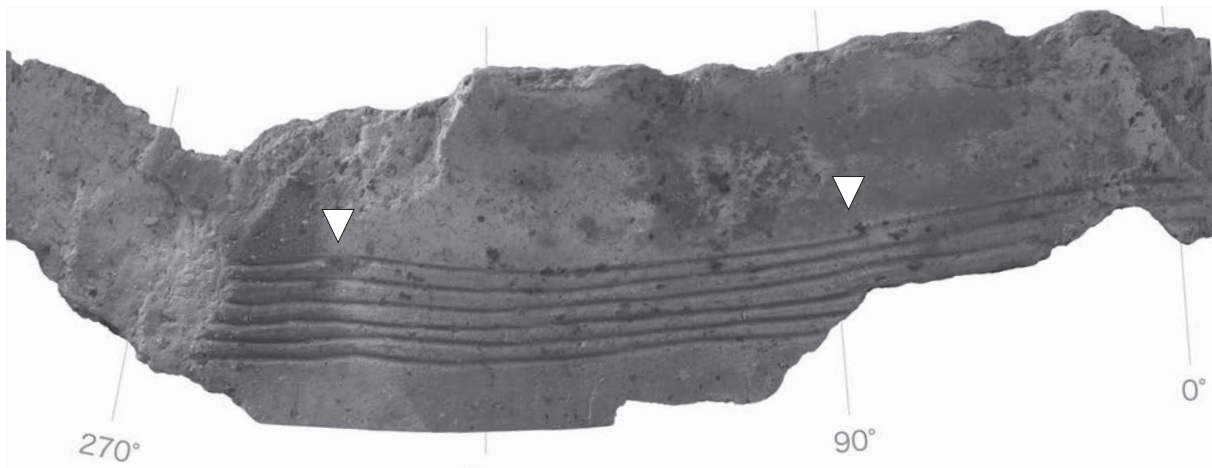


写真22 土坑70 <289>

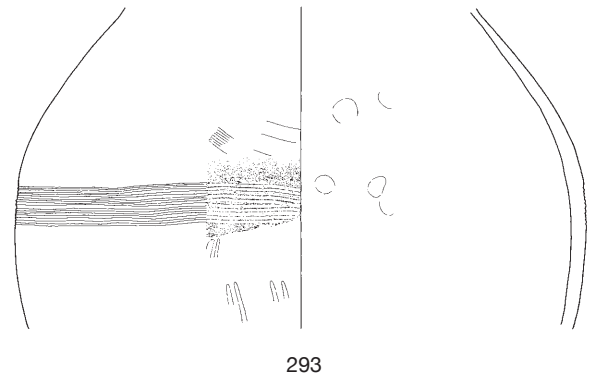
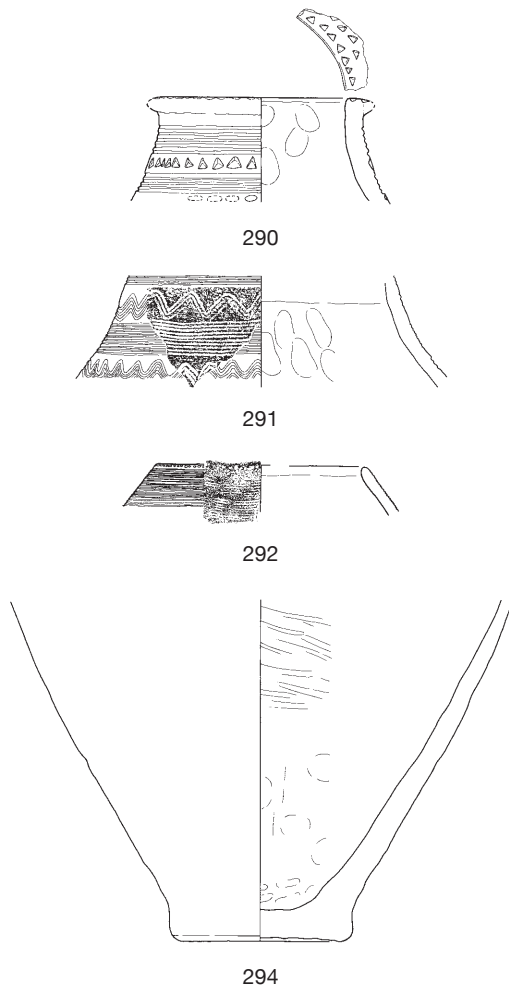


写真23 土坑70〈293〉

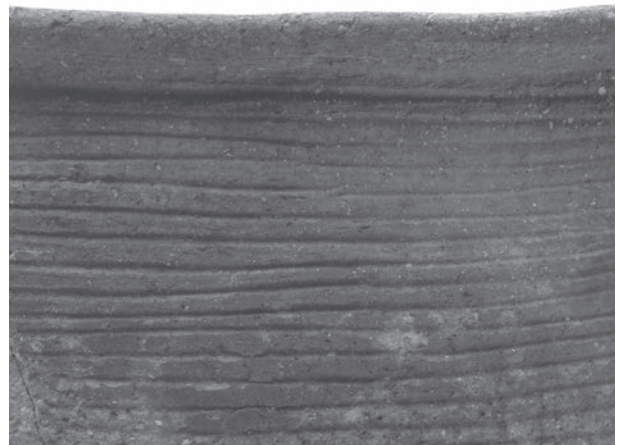
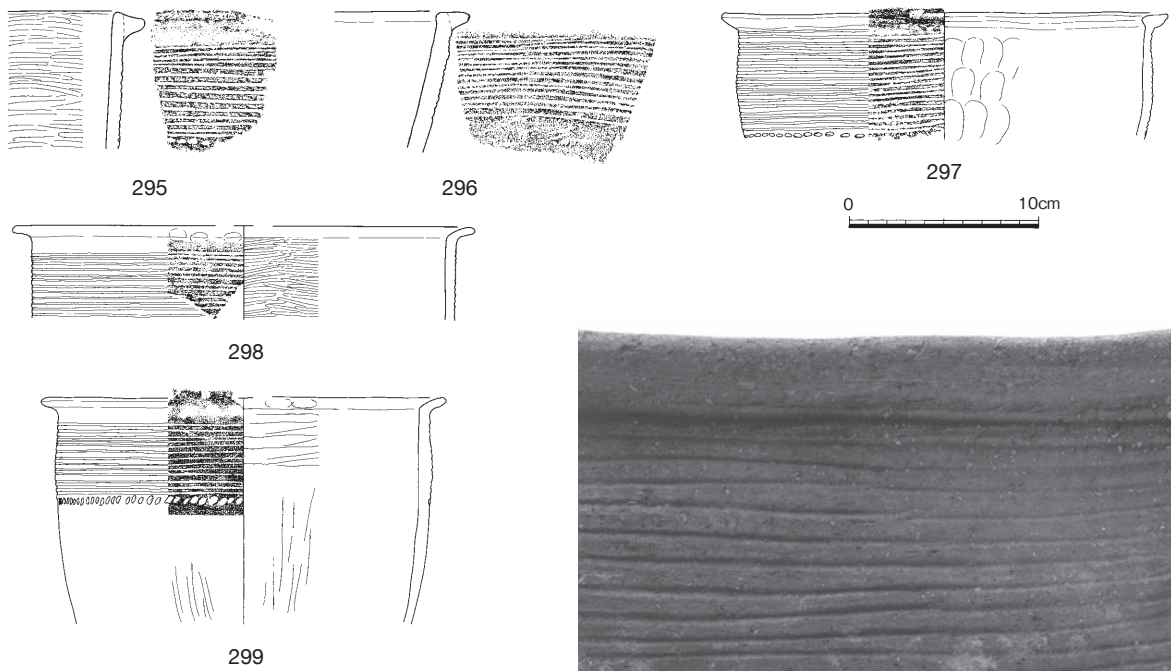
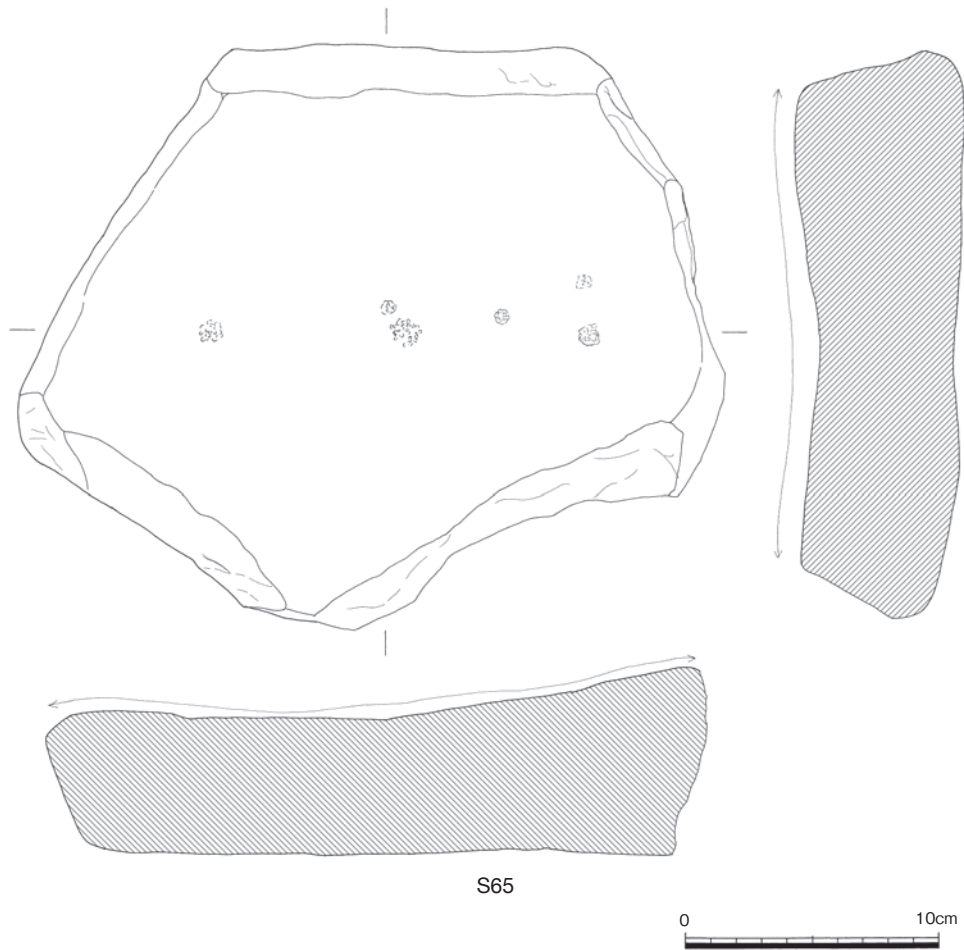
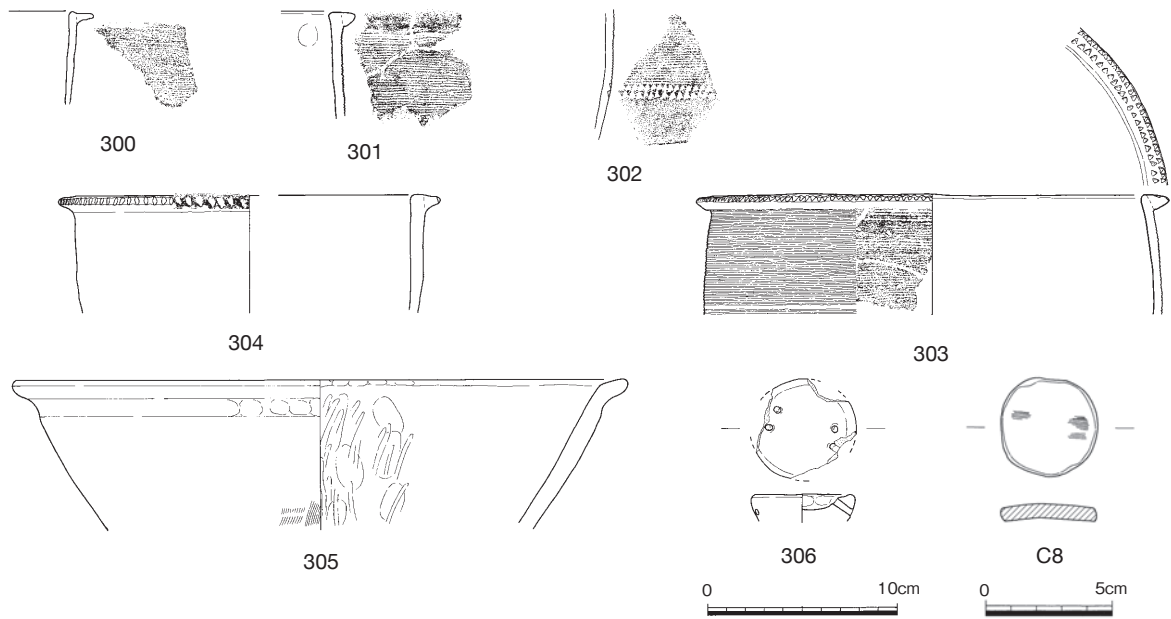


写真24 土坑70〈297〉

第132図 土坑70出土遺物② (1/4)



第133図 土坑70出土遺物③ (1/3・1/4)

文のものがあり、共伴して出土している。これらの遺物のなかで、へら描き沈線文から、典型的な板状工具による櫛描き沈線文への過渡的とも考えられる資料がある。壺289の頸部に巡る沈線は6条であるが、写真22の▽印の2箇所の部分で施文工具の継ぎ目が確認され、6条を1単位とした工具で、

2回に分けて沈線を施したことが良好に観察できる。壺は、広口壺284・285、無頸壺290～292などがある。甕の口縁部の形状は、断面が三角形で貼り付けたものと如意状口縁を呈するものがある。口縁を貼り付けているもののうち、甕295～297はへら描き沈線文、甕300・301・303・304が櫛描き沈線文を施している。如意状口縁のものは、へら描き沈線文を施す。これらの出土遺物から、遺構の時期は百・中・Iでも古段階であると考えられる。(團)

土坑71 (第126・127・134～136図、写真25～27)

39B区の微高地に位置する土坑で、規模は長軸273cm、短軸110cm、深さ62cmを測る。平面形はやや細長い楕円形を呈しているものの、底面の形状が長方形のため、もともとの平面形も長方形であった

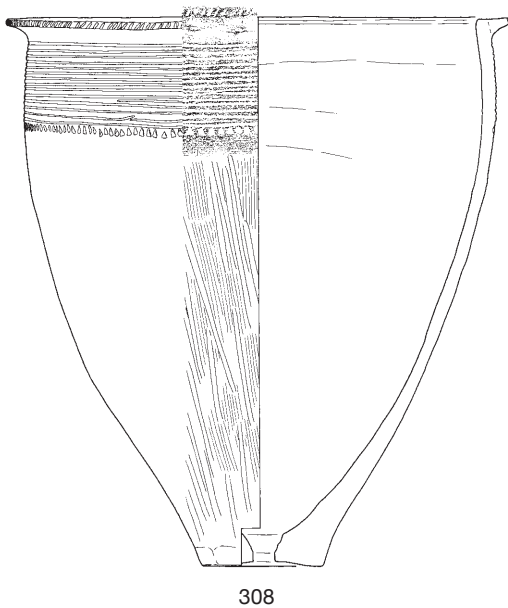
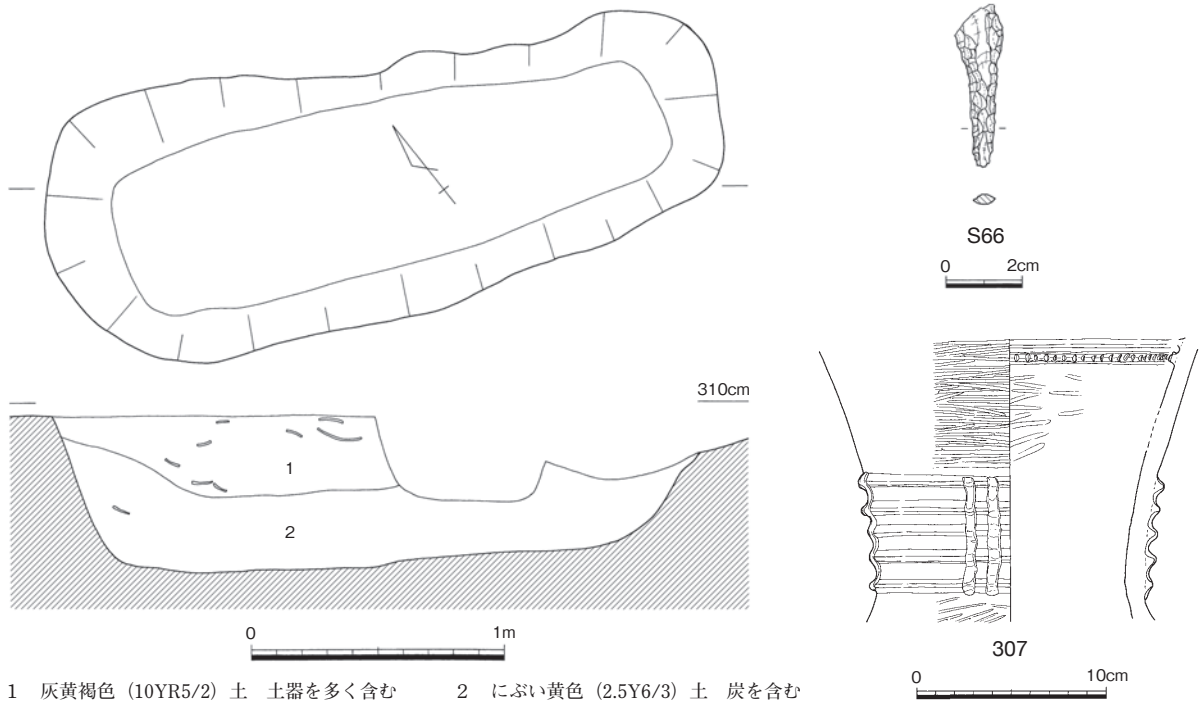
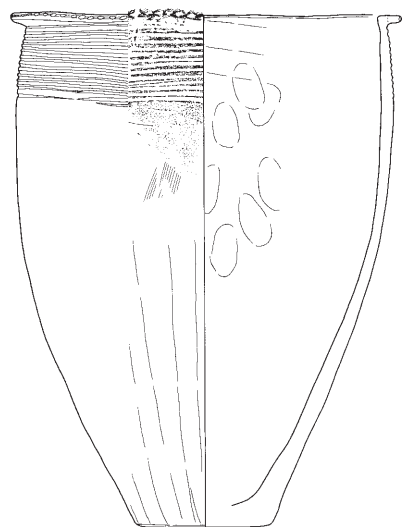


写真25 土坑71 (308)

第134図 土坑71 (1/30)・出土遺物① (1/2・1/4)



309

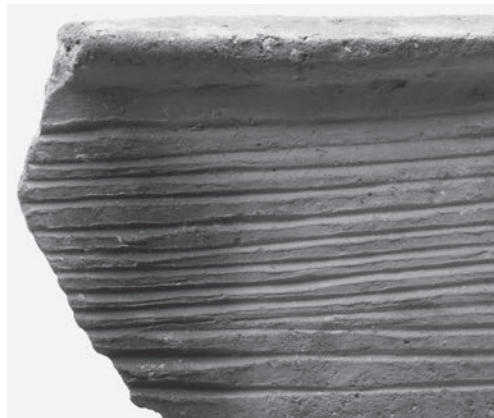
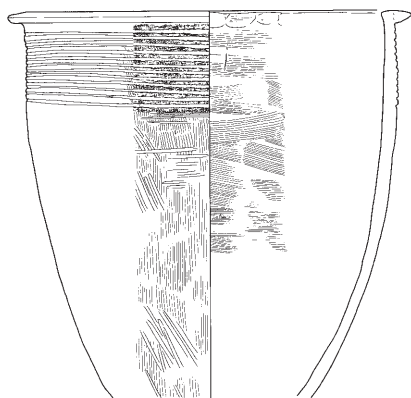
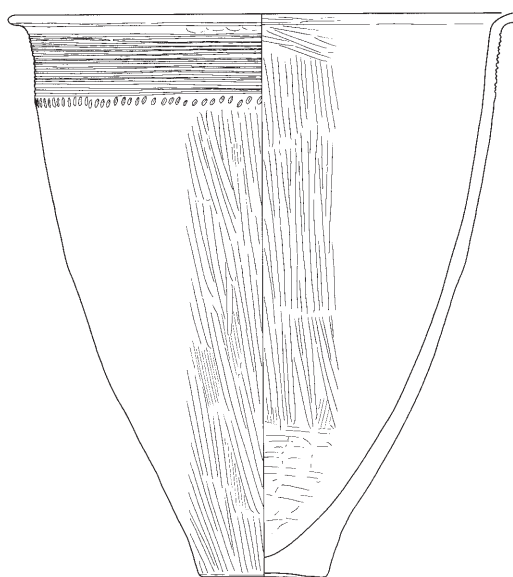


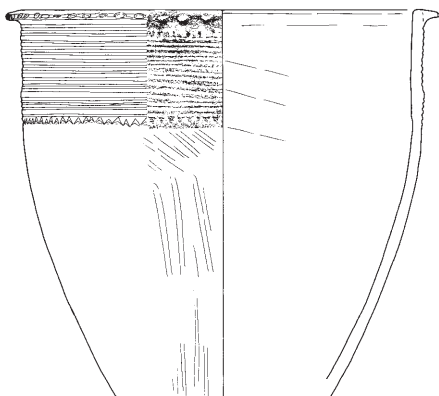
写真26 土坑71〈309〉



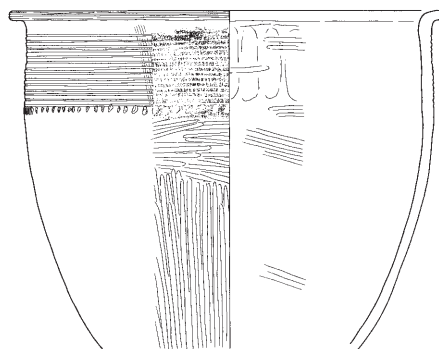
310



312



311

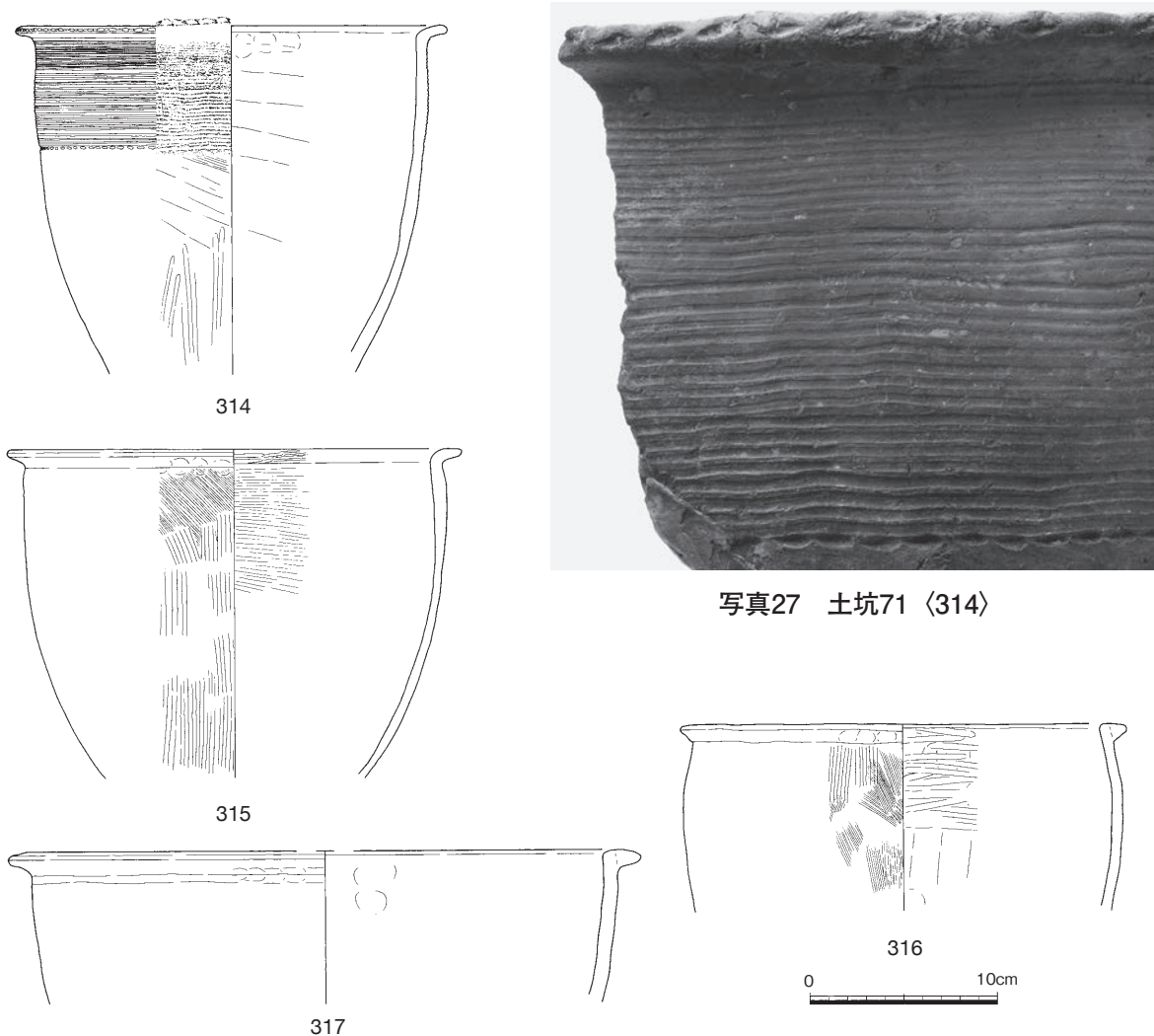


313



第135図 土坑71出土遺物② (1/4)

と考えられる。床面は平らで、断面の形状は逆台形を呈している。上層の第1層からは土器が多く出土し、残存状況も良好なものが多い。南東の一部を百・中・Ⅱの時期の土坑81・82によって切られている。出土遺物には、壺307、甕308～316、石錐S66などがある。甕が多く出土していることが特徴的である。これらの出土遺物の甕の外面に施された沈線を観察すると、どのように施されているかが

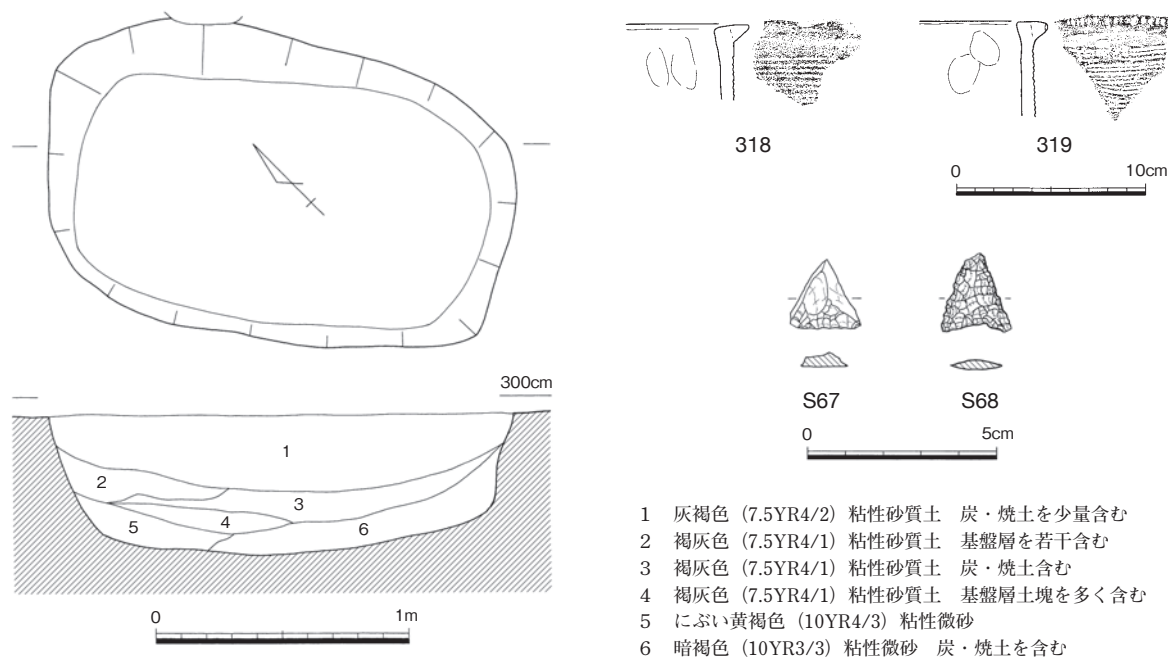


第136図 土坑71出土遺物③ (1/4)

明瞭に観察できるものがあつた。甕308は、所々で沈線がとぎれていることがよくわかる資料であり、このことから、沈線を1条ずつ引いていたことが理解できる。甕309は、4条の沈線が同じ位置で施文を終えていることが観察できることから、4条1単位で引かれた沈線であることがわかる。甕314は、複数の沈線の動きが同じであるために、板状工具によって施された櫛描き沈線文であることがわかる。そして、1条あたりの沈線の幅が、下部のものと口縁部直下のものとは異なる。このことから、同じ土器に沈線を施す際に、違う工具を用いた可能性もある。これらの出土遺物から、遺構の時期を百・中・Iであると判断した。(團)

土坑72 (第126・127・137図)

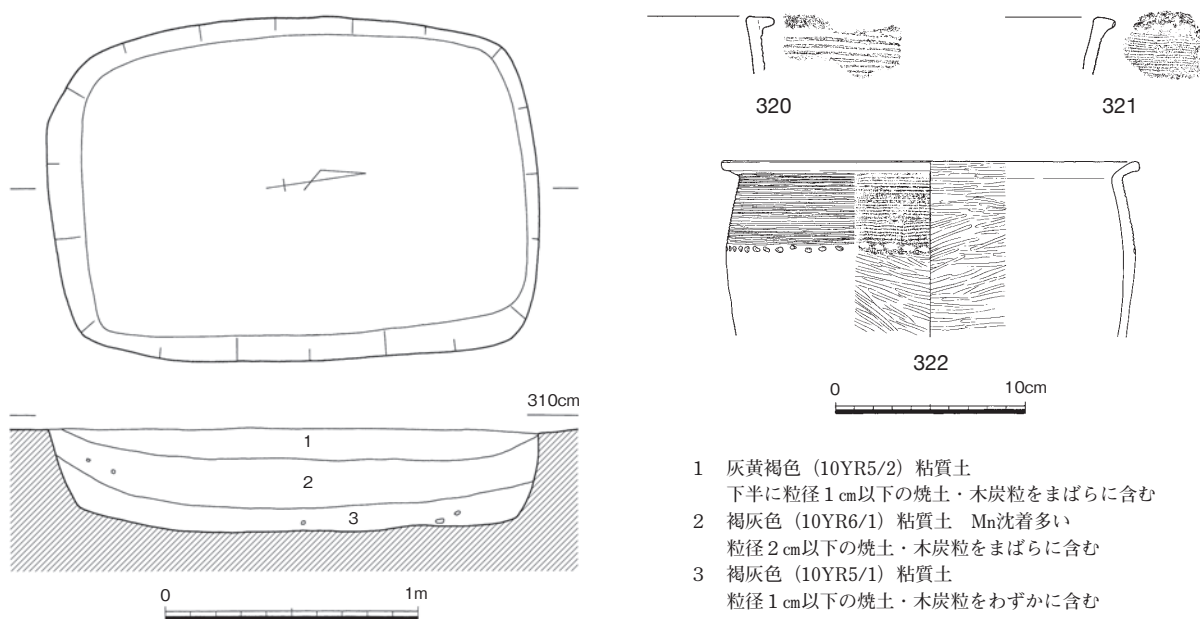
39B区の微高地に位置する土坑で、土坑73に隣接している。平面形と床面の形状はともに長方形を呈しており、断面の形状は逆台形で、底面はほぼ平らである。規模は長軸186cm、短軸122cm、深さ55cmを測る。埋土には炭・焼土・基盤層の土塊を含んでおり、人為的な埋め戻しが行われたと考えられる。出土遺物には、甕318・319、石鏃S67・S68などがある。甕318の外面には多条のヘラ描き沈線文が、甕319の外面には櫛描き沈線文が施されており、どちらも小片ではあるが、共伴して出土している。ことから、この遺構の時期は、百・中・Iでも古段階であると判断した。(團)



第137図 土坑72 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

土坑73 (第126・127・138図)

39B区の微高地に位置する土坑で、土坑72に隣接している。規模は、長軸200cm、短軸136cm、深さ41cmを測る。平面形と床面の形状は整った長方形を呈しており、壁面は直線的に立ち上がり、床面は平らである。埋土には炭を少量含む。出土遺物には、甕320～322がある。甕320は多条のヘラ描き沈線文を施し、甕311・322は櫛描き沈線文を施しており、共伴して出土している。甕322は口縁部が如意状を呈していて、器形も口縁部直下から胴部上半にかけて張りが見られることから、次への器形の過渡的な形態であると考えられる。これらの遺物から、遺構の時期を百・中・Iと判断した。(團)

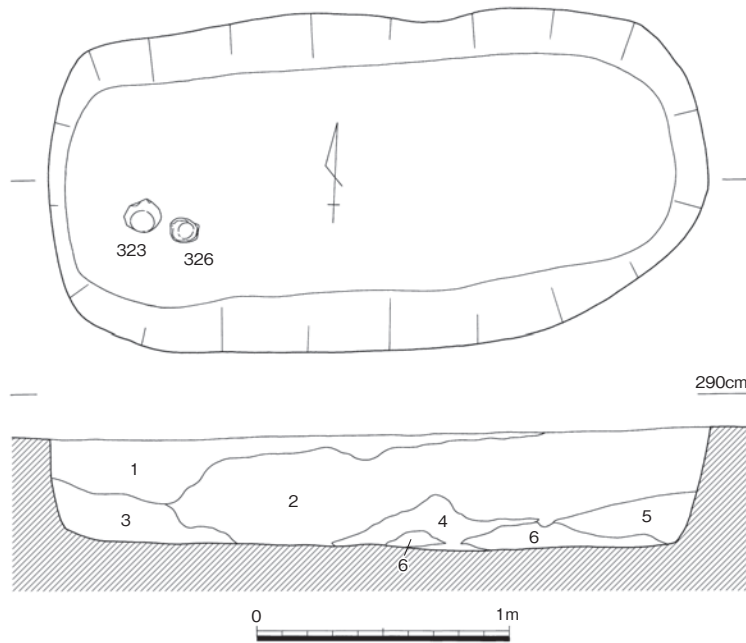


第138図 土坑73 (1/30)・出土遺物 (1/4)

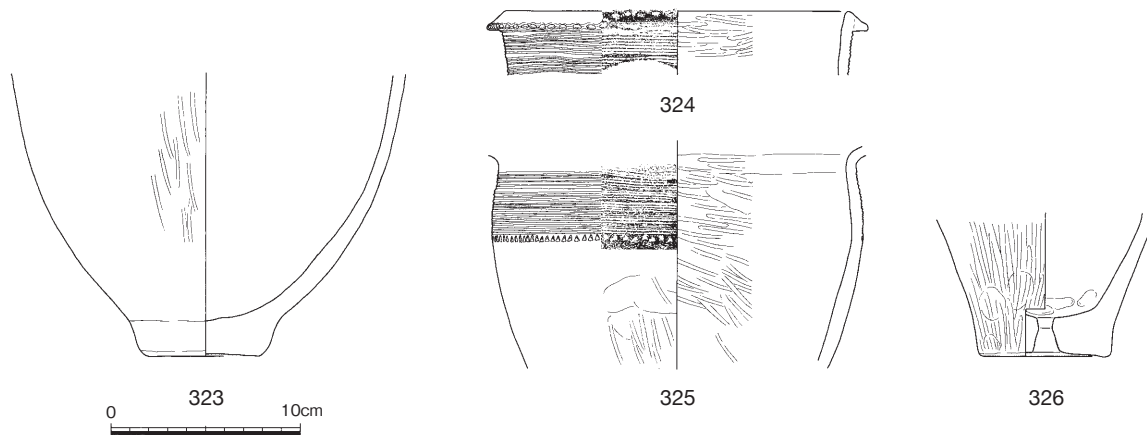
土坑74 (第126・127・139図)

40B区の微高地に位置する土坑で、規模は長軸261cm、短軸134cm、深さ46cmを測る。平面形および床面の形状は、長方形で、壁面は直線的に角度を持って立ち上がる。埋土には基盤層の土塊が多く含まれており、人為的に埋め戻されたものか。遺物は床面直上から壺323と甕326が出土している。

甕324・325の外表面には櫛描き沈線文が施されており、甕326の底部には穿孔が見られる。これらの遺物から、遺構の時期は百・中・Iであると考えられる。(團)



- 1 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
Fe・Mn沈着多い 木炭粒をわずかに含む
- 2 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を多量に含む
- 3 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土
黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を多く含む
Mn沈着が多い
- 4 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
Fe沈着わずかに認められる
- 5 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
黄色 (2.5Y8/6) 粘土を含む
- 6 にぶい黄色 (2.5Y6/4) 粘質土
下半に焼土粒多く含む

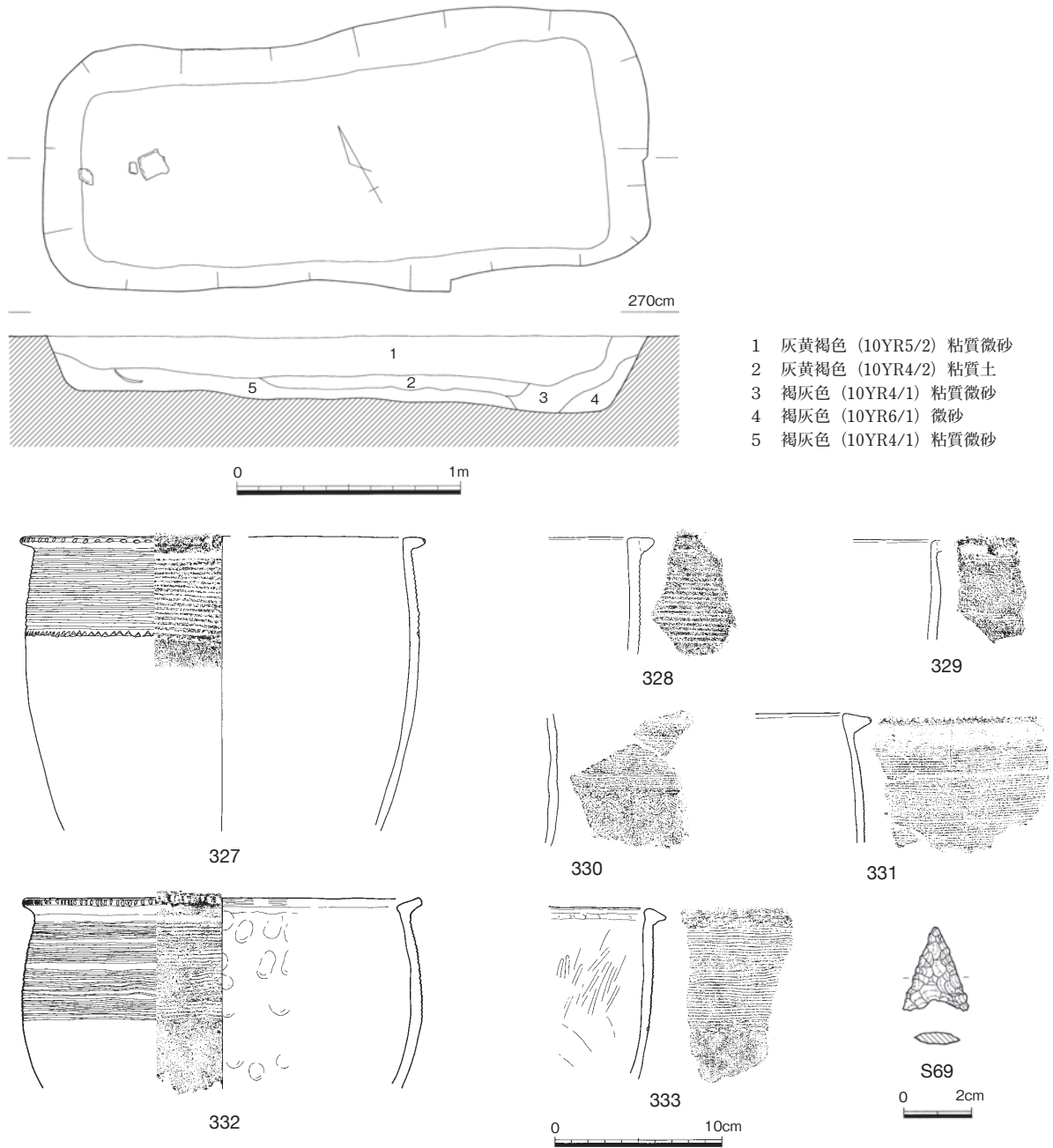


第139図 土坑74 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑75 (第126・127・140図、写真28、図版7-3)

40・41B区において検出した土坑で、溝12の南側に位置する。上面の規模は、長軸270cm、短軸121cmで、平面形は長方形を呈していた。検出面からの深さは34cmで、標高230cmを測る底面はほぼ水平をなし、壁面は急峻に立ち上がる。埋土は上層(第1層)と下層(第2～5層)に大きく分かれ、遺物は主に下層から出土するが、底面直上のものはない。

出土遺物には327～333・S69がある。327～333はすべて甕で、327・328は頸部にヘラ描き沈線文があり、329～333は櫛描き沈線文がある。どちらのタイプも口縁端部は貼り付けている。S69は石鏃である。時期は、百・中・Iになる。(小林)



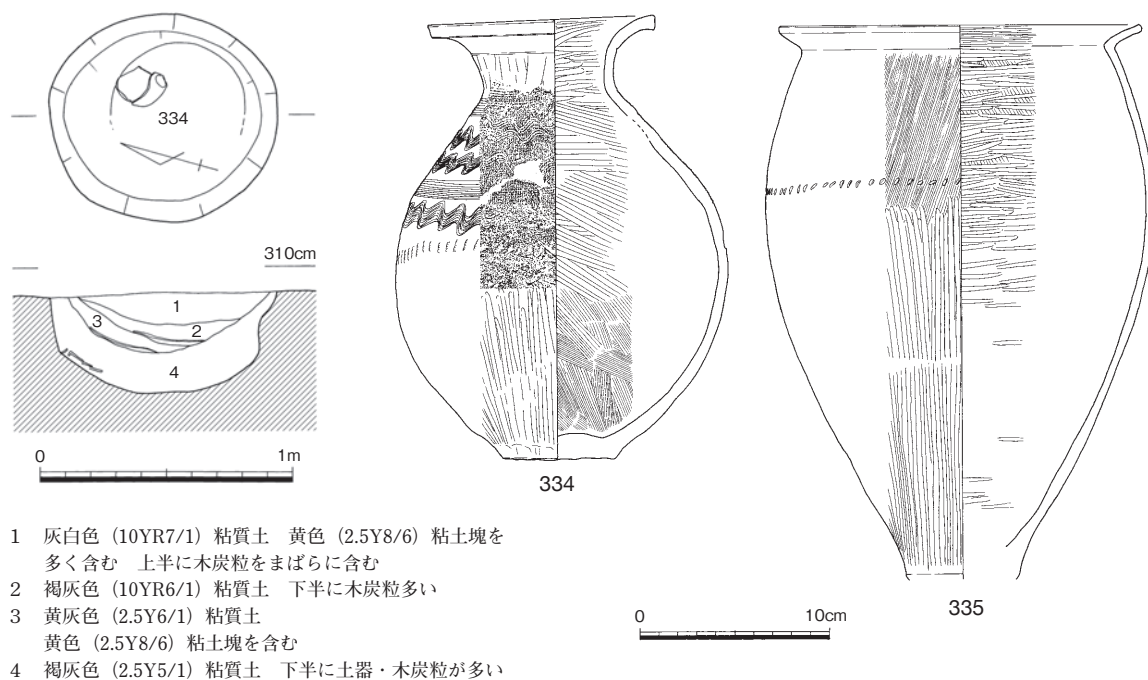
第140図 土坑75 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)



写真28 土坑75 〈左から：331・332・333〉

土坑76 (第126・127・141図、写真29、図版23)

38B区の微高地の西端で検出した土坑である。平面形は円形で、断面形は椀状を呈している。規模は、長軸89cm、短軸82cm、深さ40cmを測る。埋土には、第2・3層の底面に炭を多く含んだ層が堆積する。出土遺物には、壺334と甕335がある。これらの出土遺物から、この遺構の時期は、百・中・Ⅱの古段階であると考えられる。(團)



- 1 灰白色 (10YR7/1) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を多く含む 上半に木炭粒をまばらに含む
- 2 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土 下半に木炭粒多い
- 3 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を含む
- 4 褐灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 下半に土器・木炭粒が多い

第141図 土坑76 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑77 (第126・127・142図、写真30)

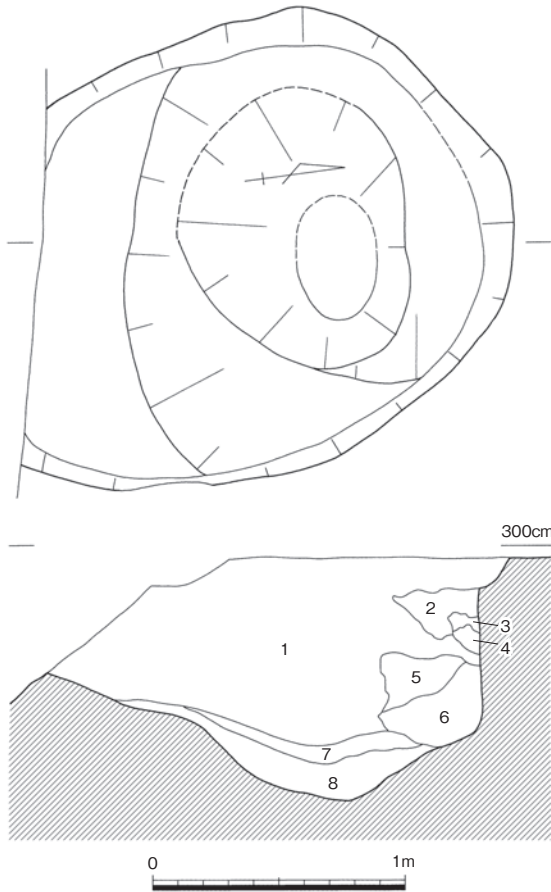
38B区の微高地の西端で検出した土坑である。平面形は楕円を呈すると考えられ、北側の壁面はほぼ垂直であるが、南側は大きく開き、すり鉢状に凹む底面を呈している。長軸の残存長190cm、短軸176cm、深さ96cmの規模を測る。埋土下層には、薄く層状に堆積した炭がみられる。また、上層には基盤層の土塊が多く入り、人為的な埋め戻しが示唆される。出土遺物には、壺336、甕337、高杯338、太型蛤刃石斧を転用した叩石S70などがある。これらの出土遺物から、百・中・Ⅱ古段階の遺構と考えられる。(團)



写真29 土坑76 (西から)

土坑78 (第126・127・143図)

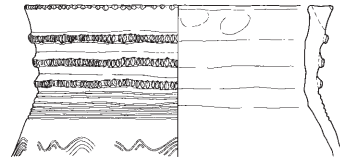
38B区の微高地西側に位置する土坑で、北側を調査区端に、東側を攪乱によって切られている。残存している規模は、長軸100cm、短軸40cm、深さ41cmである。遺物は、細片の土器のみの出土であるが、弥生時代中期の範疇に入る時期の遺構であると考えられる。(團)



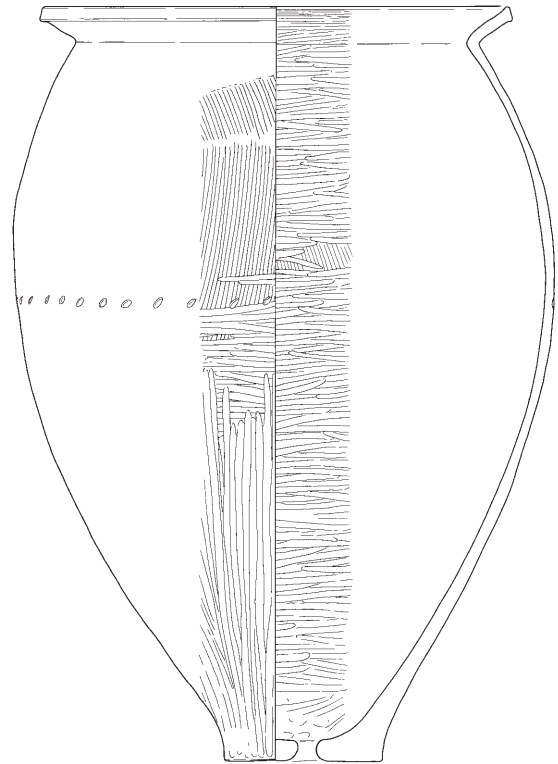
- 1 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土 下層に土器多い
- 2 にぶい黄橙色 (10YR7/2) 粘質土
- 3 灰白色 (10YR7/1) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を含む
- 4 にぶい黄橙色 (10YR7/3) 粘質土 まばらに黄色粘土塊を含む
- 5 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘質土
- 6 灰黄色 (2.5Y7/2) 粘質土 下半に木炭粒が带状に堆積
- 7 灰色 (5Y6/1) 粘性砂質土 下半に木炭粒が带状に堆積
- 8 灰白色粘性砂質土 下半に木炭粒が带状に堆積



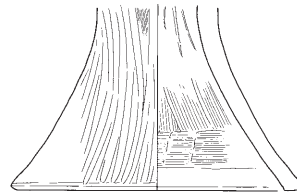
写真30 土坑77 (西から)



336

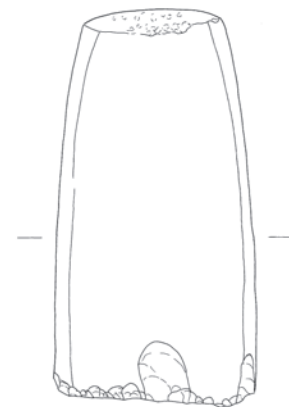


337



338

0 10cm



S70

0 5cm

第142図 土坑77 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

土坑79 (第126・127・144図)

38B区の微高地西側に位置する土坑で、南側のほとんどを攪乱によって切られている。残存する規模は、長軸115cm、短軸45cm、深さ51cmで、元来は規模の大きい土坑であったと考えられる。出土遺物には、壺339、甕340、石錐S71がある。壺339の外表面には波状文と直線文が施される。これらの遺物から、遺構の時期は、百・中・Ⅱの古段階であると考えられる。(團)

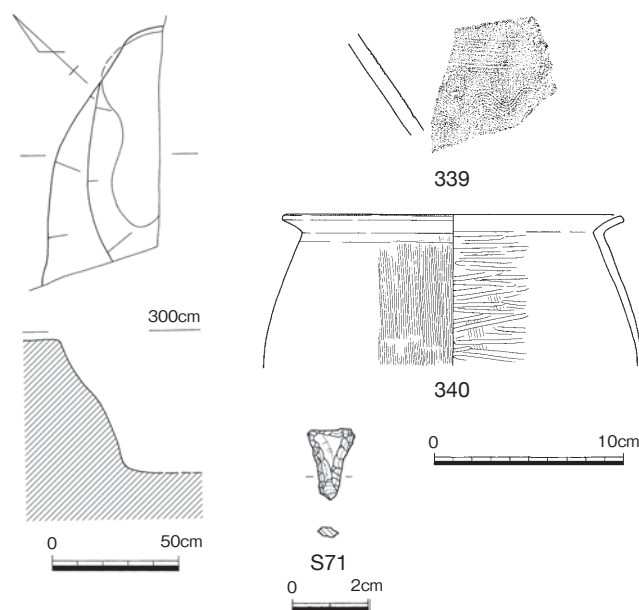
土坑80 (第126・127・145図)

39B区の微高地で検出した土坑である。平面形は楕円形で、断面は皿状を呈しているが、後世の柱穴によって多くの部分を切られている。埋土には焼土を少量含んでいた。規模は、長軸144cm、短軸118cm、深さ17cmを測る。遺物は細片の土器が少量出土しており、これらの遺物から弥生時代中期の遺構であると判断した。(團)

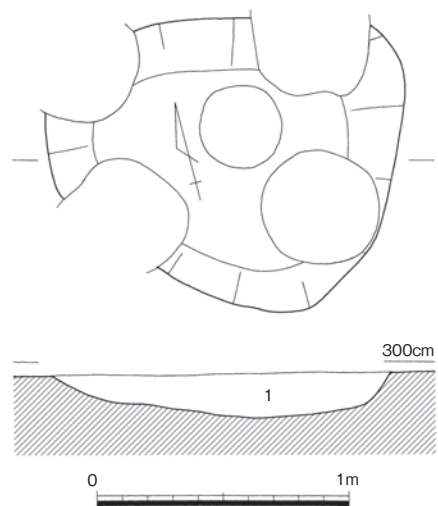


1 攪乱
2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土

第143図 土坑78 (1/30)



第144図 土坑79 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)



1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 焼土含む

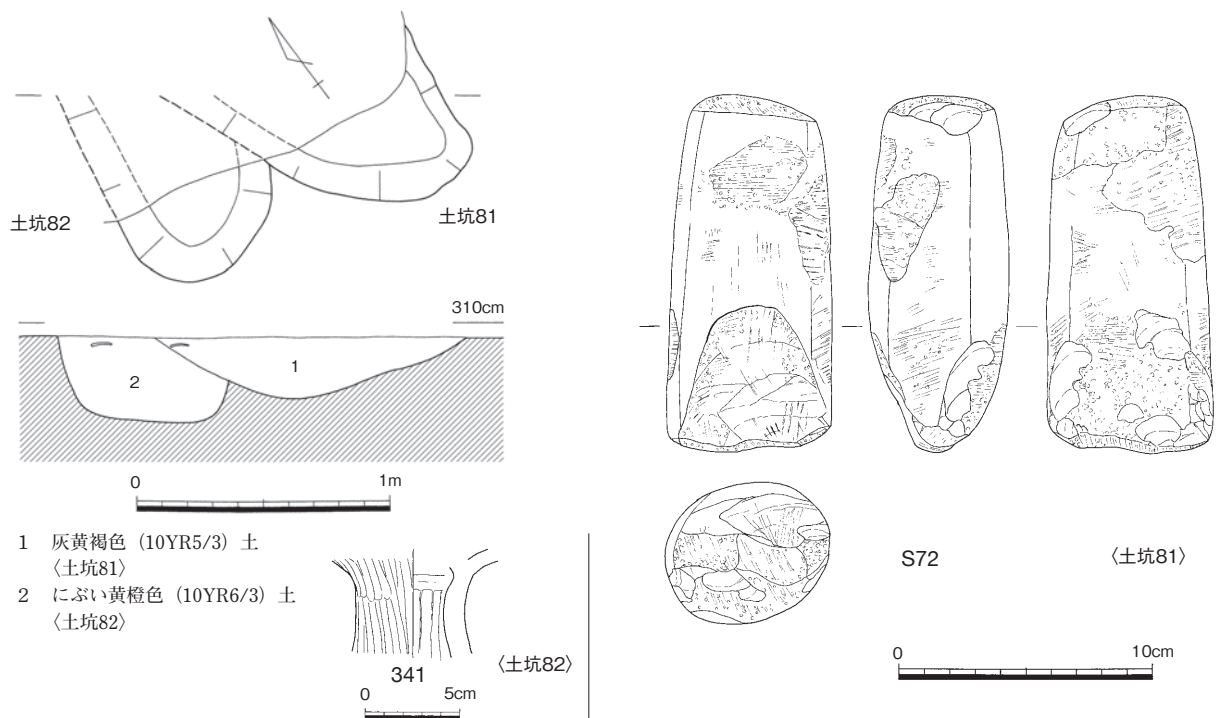
第145図 土坑80 (1/30)

土坑81 (第126・127・146図)

39B区の微高地で検出した土坑で、土坑71の上層および土坑82を切っている。規模は残存している部分の長軸80cm、短軸69cm、深さ24cmを測る。出土遺物には大型蛤刃石斧を転用した叩石S72が出土している。遺構の切り合いなどから、弥生時代中期の遺構であると判断した。(團)

土坑82 (第126・127・146図)

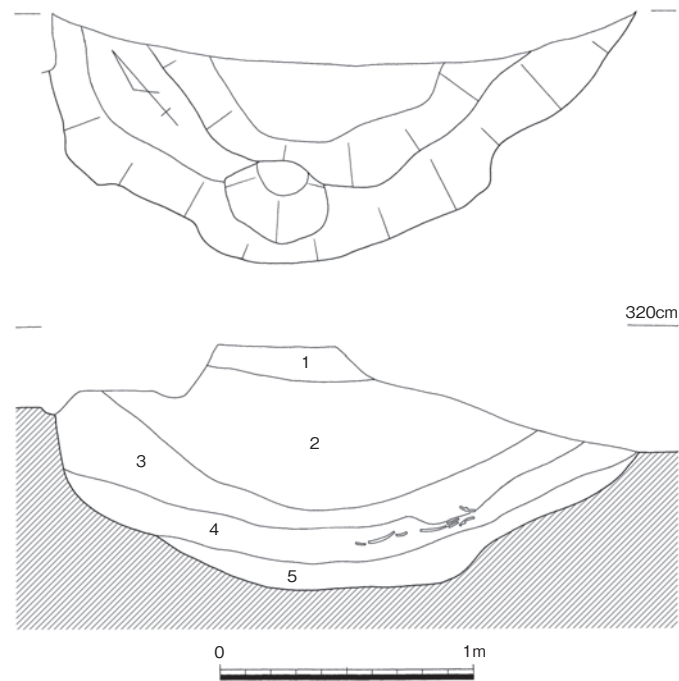
39B区の微高地で検出した土坑で、土坑71の上層を切っている、規模は、残存している部分の長軸70cm、短軸63cm、深さ33cmを測る。出土遺物には、高杯341が1点出土しており、この遺物と遺構の切り合いなどから弥生時代中期の遺構であると考えられる。(團)



第146図 土坑81・82 (1/30)・土坑81・82出土遺物 (1/3・1/4)

土坑83 (第126・127・147・148図、図版8-1)

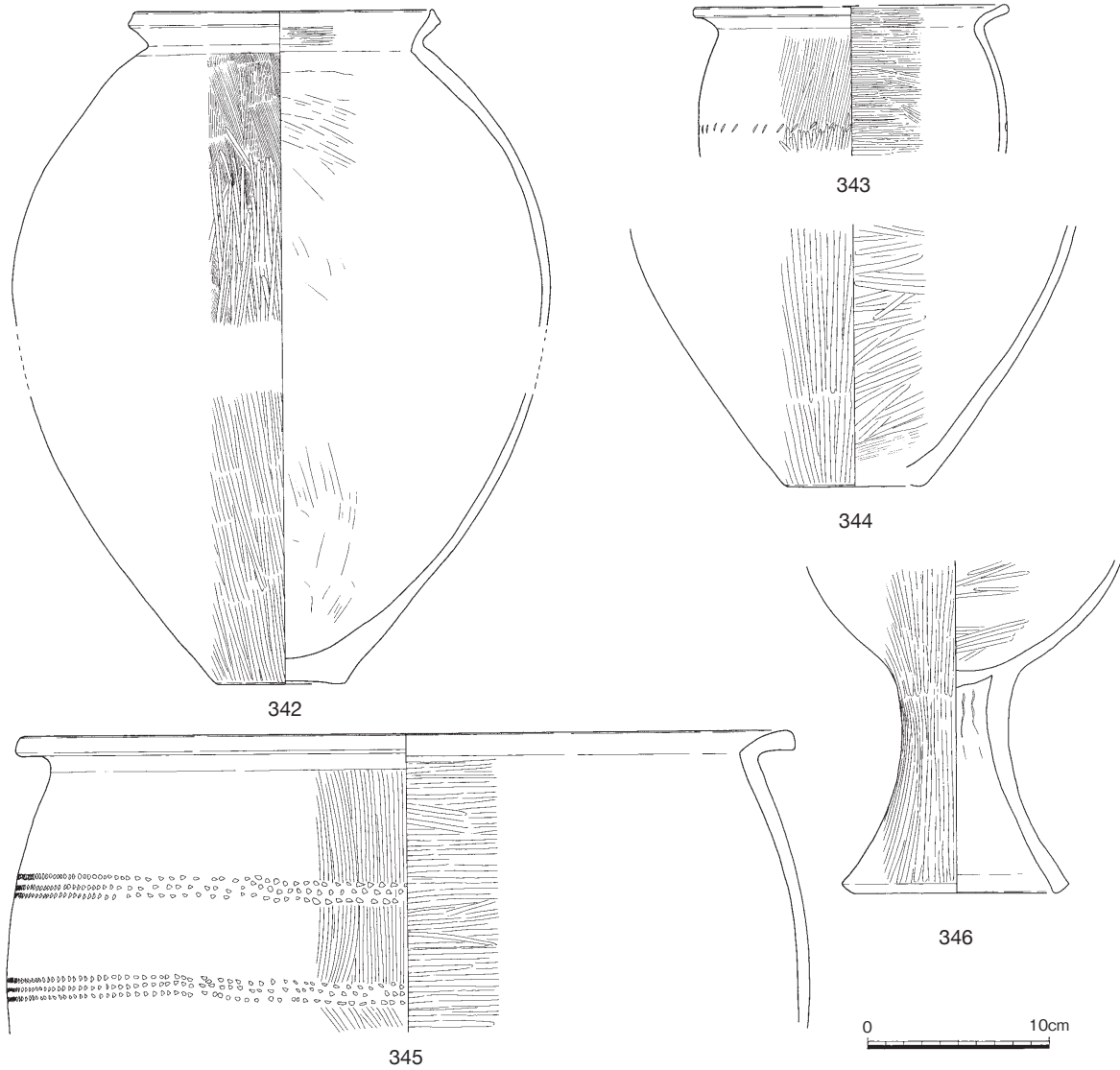
39B区の微高地に位置する土坑で、北側を調査区端に切られている。また、南側は弥生時代前期の土坑7などを切っている。規模は、残存部分での長軸233cm、短軸82cm、深さ96cmを測り、大型の土坑であるといえる。底面の一部は平らで、壁面は大きく開いている。埋土には下層の第3～5層に基盤層の土塊を多く含んでいて、第4層には多くの土器が出土していることから、土坑の半分程度を埋め戻した可能性が考えられる。



遺物には、壺342、甕343～345、高杯346などが出土している。甕342は口縁端部が拡張し、胴部最大形が胴部中位にある。甕343は体部上半に刺突が巡る。甕345は口径が40cmを越える大型のもので、3つ1単位の刺突文を2条施す。高杯346は、杯部の形状が椀状を呈すため、水平の口縁部を持つものであろうか。遺構の時期は、百・中・Ⅱでも古段階であると考えられる。(團)

- 1 褐灰色 (10YR5/1) 土
- 2 にぶい黄褐色 (10YR5/2) 土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/2) 土 基盤層土塊含む
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 土 炭・基盤層土塊含む
- 5 褐灰色粘質土 (10YR5/1) 基盤層土塊含む

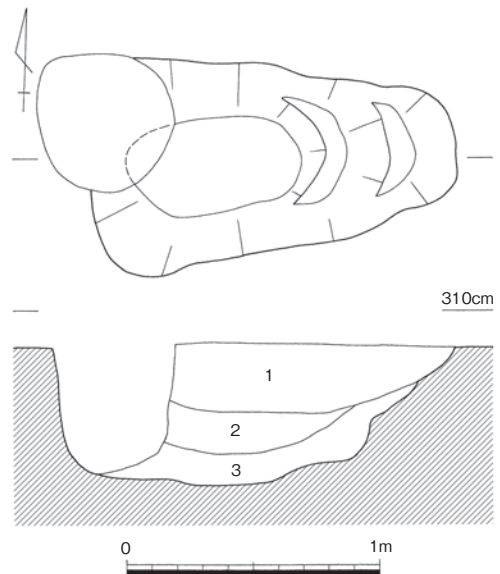
第147図 土坑83 (1/30)



第148図 土坑83出土遺物 (1/4)

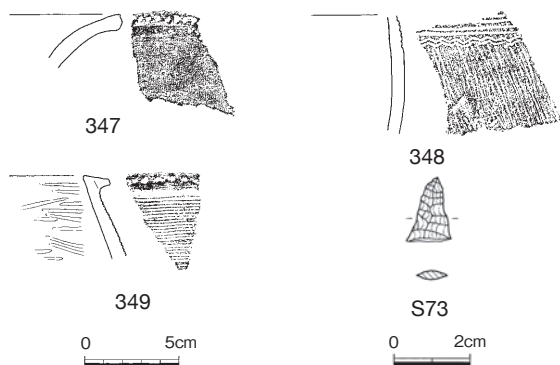
土坑84 (第126・127・149・150図、写真31)

39B区の微高地に位置する土坑で、規模は長軸144cm、短軸86cm、深さ56cmを測る。平面形は不整形な長方形を呈しており、断面形は東側に2段のテラスを持つ。埋土には炭・焼土・基盤層の土塊を含んでいる。出土遺物には壺347、甕348・349、石鏃S73がある。甕348の外面の波状文は半裁竹管によるものか。遺構の時期は、甕349に櫛描き沈線文が施されていることから、百・中・Iと考えられる。(團)



- 1 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘性微砂 炭・焼土含む
- 2 黒褐色 (7.5YR3/1) 粘性微砂 炭・焼土含む
- 3 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘性微砂 基盤層土塊を含む

第149図 土坑84 (1/30)



第150図 土坑84出土遺物 (1/2・1/4)

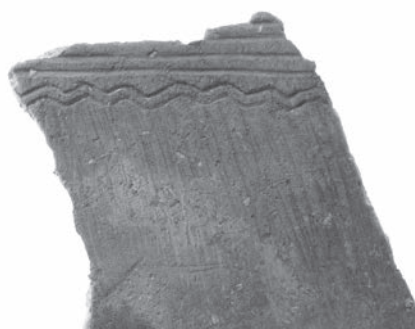


写真31 土坑84〈348〉

土坑85 (第126・127・151・152図、写真32、図版8-2・23)

40B区の微高地に位置する土坑で、規模は長軸232cm、短軸128cm、深さ98cmを測る。平面形は楕円形で上面を弥生時代後期の土坑100によって切られている。断面の形状は中段にテラスを持つが、おおむね椀状を呈している。埋土には全体に炭・焼土を多く含んでおり、第3～7層の底面に部分に薄く炭が堆積している状況が観察でき、土・焼土と炭の互層の堆積からなる。

遺物には、壺350～353、甕354～357、高杯358・359などがある。壺353は壺352と同一個体である可能性が高い。高杯359は水平に延びる口縁をもち、2個1対の穿孔が施される。これらの遺物から、遺構の時期は百・中・IIであると判断した。(團)

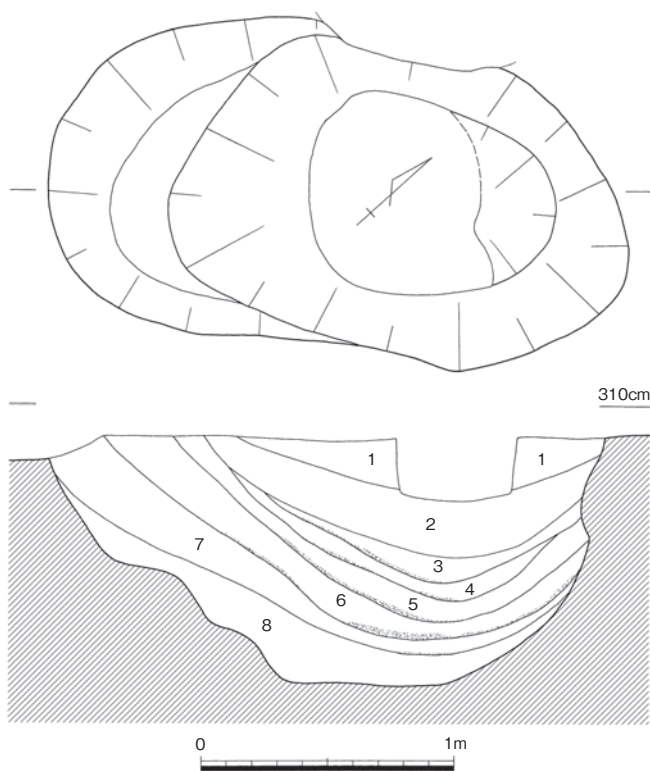
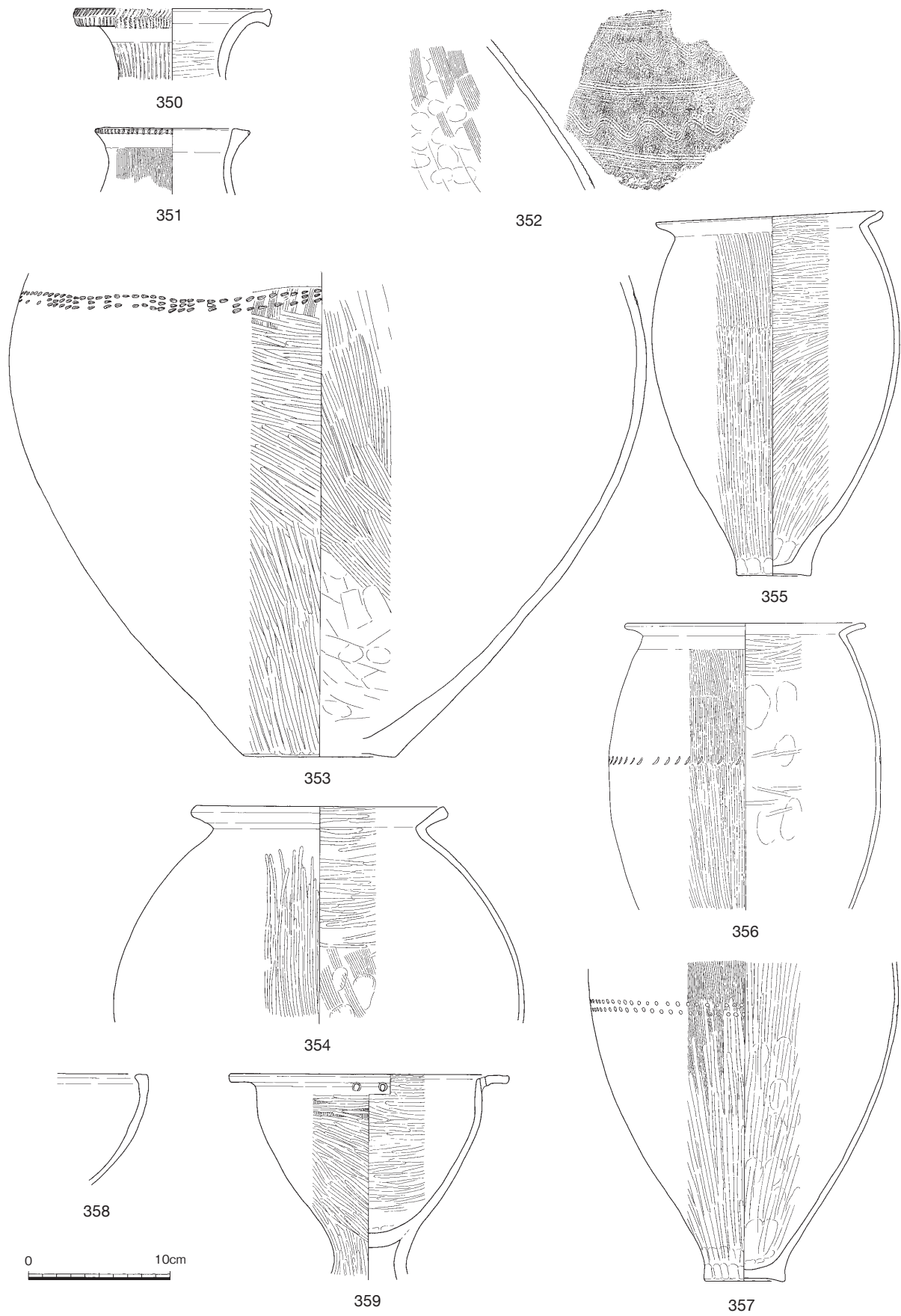


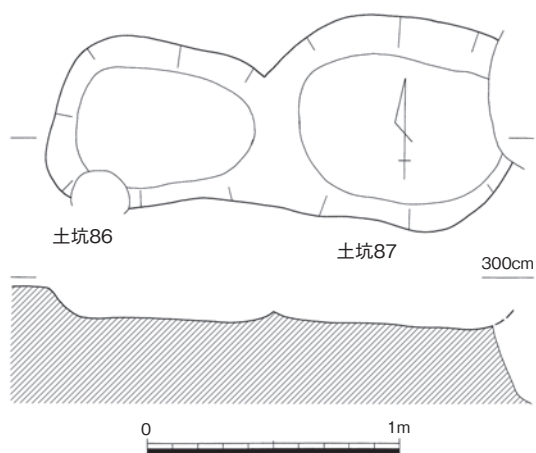
写真32 土坑85 (南東から)

- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土 焼土・木炭粒を含む Fe・Mn沈着多い
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 焼土・木炭粒と黄褐色 (10YR7/6) 粘土粒をまばらに含む
- 3 炭混じり灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土 多量の木炭粒と焼土を含む
- 4 炭混じり灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質土 多量の木炭粒と焼土を含む
- 5 炭混じりにぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土 多量の木炭粒と焼土を含む わずかに黄色粘土塊含む
- 6 炭混じりにぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質土 多量の木炭粒と焼土を含む 上半に黄色粘土塊多い
- 7 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘質土 下半に焼土・木炭粒多い
- 8 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 下半に焼土・木炭粒多い 黄色粘土塊を上半に多く含む

第151図 土坑85 (1/30)



第152図 土坑85出土遺物 (1/4)



第153図 土坑86・87 (1/30)

土坑86 (第126・127・153図)

40B区に位置する土坑で、規模は長軸87cm、短軸66cm、深さ7cmを測る。平面形は楕円形で、断面は皿状の形状を呈している。遺物は細片の土器が少量のみであったが、この遺物と検出状況から、弥生時代中期の遺構であると判断した。(團)

土坑87 (第126・127・153図)

40B区に位置する土坑で、規模は長軸95cm、短軸84cm、深さ11cmを測る。土坑87と隣接しているが、切り合いは確認できなかった。遺物は細片の土器が少量出土している。遺構の時期は、検出状況などから、弥生時代中期の範疇か。(團)

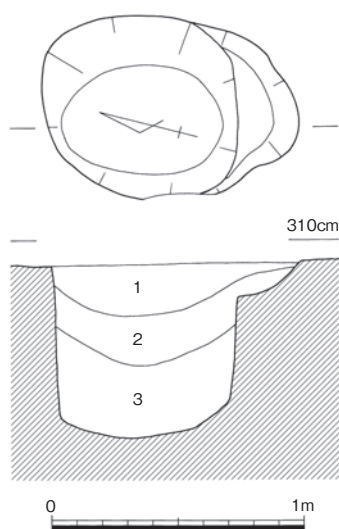
土坑88 (第126・127・154図)

40B区の東側において検出した土坑である。上面の規模は、長軸101cm、短軸72cmで、平面形は楕円形を呈していた。検出面からの深さは68cmで、標高233cmを測る底面は腕状をなし、壁面は直立気味に立ち上がる。時期は、百・中・Iになる。(小林)

土坑89 (第126・127・155・156図、写真33)

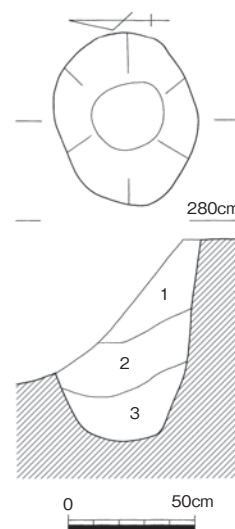
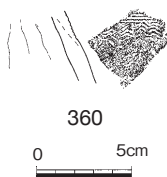
40B区の東側において検出した土坑で、溝12南側肩付近に位置する。上面の規模は、長軸70cm、短軸56cmで、平面形は楕円形を呈していた。検出面からの深さは79cmで、標高194cmを測る底面は腕状をなし、壁面は直立気味に立ち上がる。

出土遺物には361・362があり、甕である。どちらもヘラ状工具で沈線を施すが、362などは7～8単位をまとめて櫛描き状に施文する状況が読み取れる。遺構の時期は、百・中・Iになると考えている。(小林)



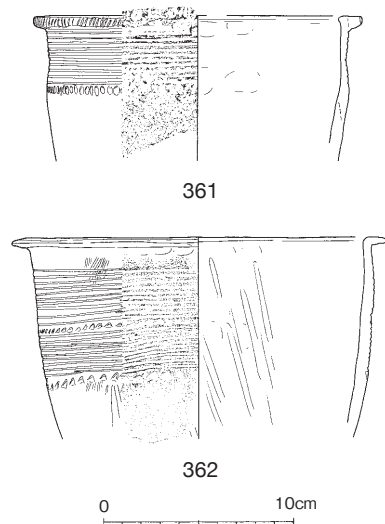
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 明黄褐色 (10YR6/6) 粘性土塊が入る
- 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂

第154図 土坑88 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘性微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂
- 3 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土

第155図 土坑89 (1/30)



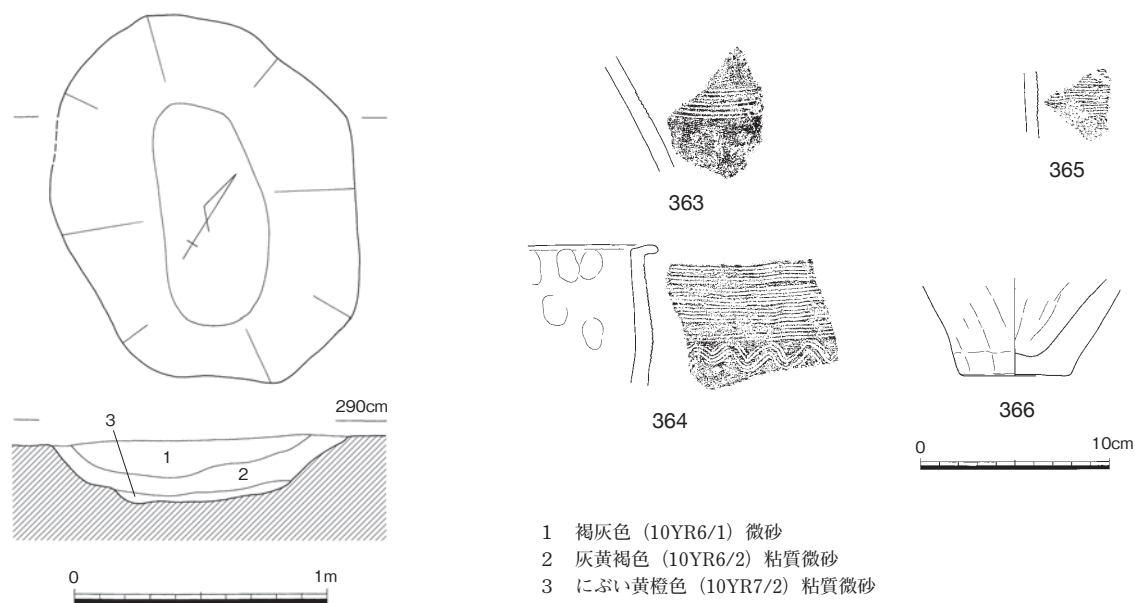
第156図 土坑89出土遺物 (1/4)



写真33 土坑89〈362〉

土坑90 (第126・127・157図)

41B区において検出した平面がやや歪な長方形を呈する土坑である。規模は、長軸が151cm、短軸は120cmで、深さが24cmを測る。出土した遺物には、弥生土器の壺363、甕364・365、甕底部片366がある。甕364では、口縁部直下に櫛歯状工具による5条1単位の直線文と波状文がみられ、365にも櫛描き文が施されている。時期は、百・中・Iである。(弘田)



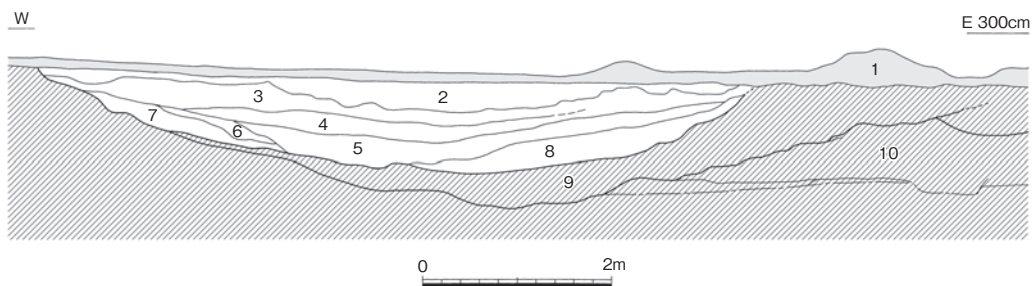
- 1 褐灰色 (10YR6/1) 微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂
- 3 にぶい黄橙色 (10YR7/2) 粘質微砂

第157図 土坑90 (1/30)・出土遺物 (1/4)

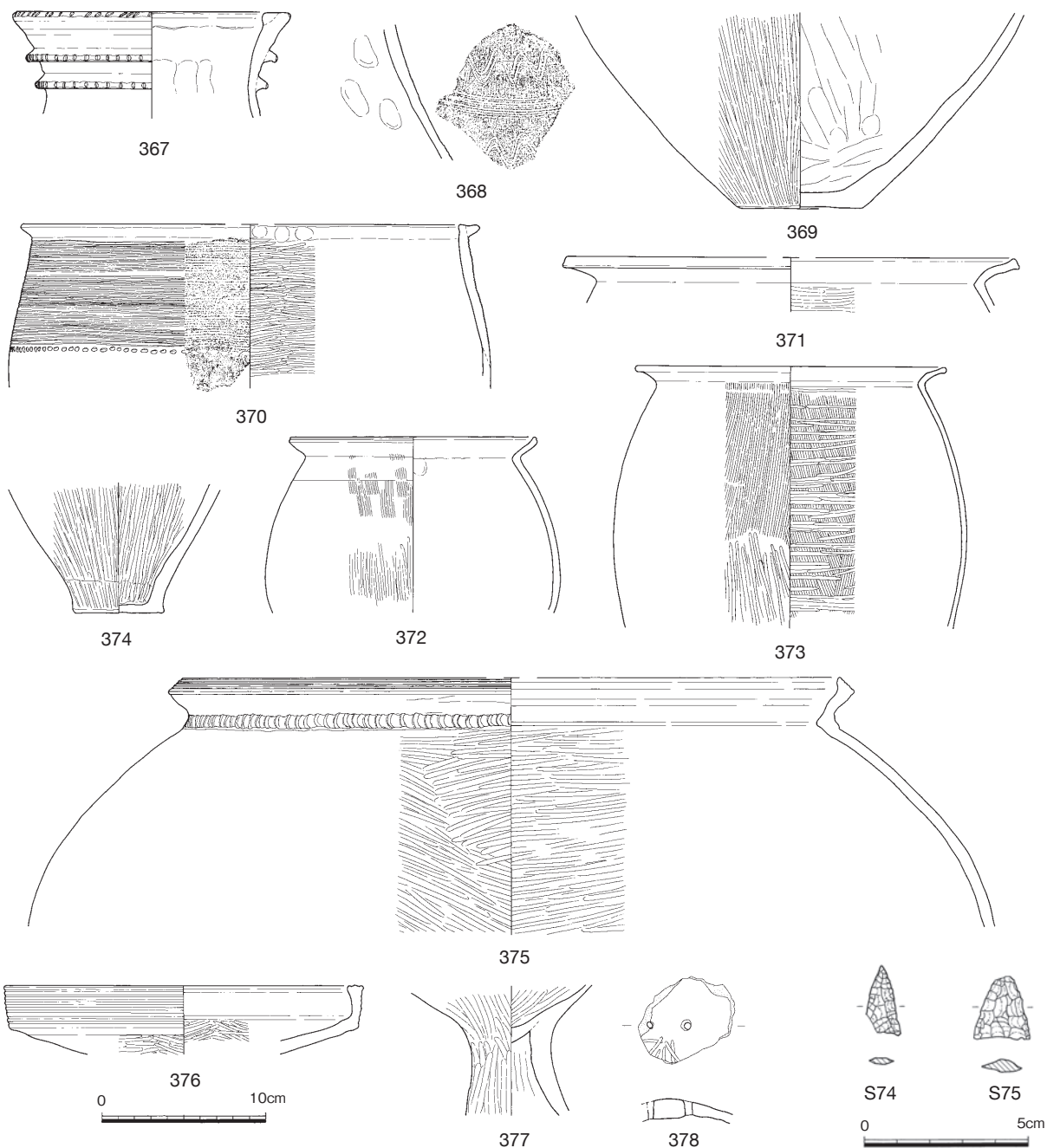
4 溝

溝14 (第126・127・158図、図版8-3)

34B・C区に位置する溝である。弥生時代前期の溝11が改修され、西へ少し場所を移動して再掘削された溝である。上端幅は512~608cm、深さ90~99cm、底面海拔高は157~166cmである。土層断面図



- | | |
|--------------------------------------|------------------------|
| 1 〈水田6〉(弥生時代後期末水田) | 6 灰色(5Y5/1)粘性微砂 |
| 2 〈溝21~28〉 | 7 オリーブ灰色(2/5GY6/1)粘性微砂 |
| 3 灰色(5Y6/1)粘性微砂 粗砂のラミナ | 8 灰色(N4/)粘性微砂 |
| 4 灰色(5Y6/)粘性微砂 灰黄色(2.5Y7/2)粗砂を含む | 9 〈溝11〉 |
| 5 灰色(N4/)粘性微砂 灰白色粗砂のラミナ 特に底面付近に粗砂が多い | 10 〈杭列2盛土〉 |

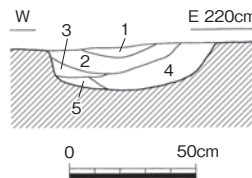


第158図 溝14 (1/80)・出土遺物 (1/2・1/4)

では、3～8層にあたる部分が溝14の埋土であると考えている。第3～5層は粗砂を多く含み、ラミナ層も観察できることから、多くの水が流れることによって埋まった層であろう。このことと、層の切り合い関係から、第8層→第6・7層→第3～5層の3回の改修がなされたことが伺える。東側に流れる旧河道と併走して掘削された溝で、旧河道に設けられた井堰から溝14へ水を供給していることが下流側の調査で判明している。(百原尾島2井堰3)溝14の改修前にあたる弥生時代前期の溝11に水を供給するための井堰と考えられる杭列1が、今回の調査区内で見つかったため、溝14へ水を供給するための弥生時代中期の井堰が調査区内より上流側の旧河道に存在する可能性が考えられる。出土遺物には、百・中・Ⅰ～百・中・Ⅲの、時期幅を持った遺物が出土している。百・中・Ⅲの遺構は周辺では確認されていないことから、溝の北側にこの時期の集落が存在する可能性が考えられる。遺物には、壺367～369、甕370～375、高杯376・377、蓋378、石鏃S74・S75などがある。(團)

溝15 (第126・127・159図)

35C区に位置し、百原尾島4溝131に続く溝である。上端幅50～72cm、深さ4～11cmを測るが、元々は60cm程度の深さがあったことが、過去の調査でわかっている。断面は椀状を呈し、埋土にラミナ層が観察できる。遺物は無いが、検出状況と過去の調査成果から、弥生時代中期の範疇の遺構であろう。(團)



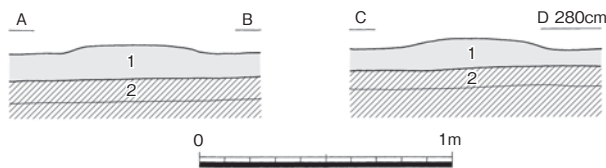
- 1 灰褐色 (5YR4/2) 粘性微砂に
灰色 (N5/) 粘性微砂が混じる
- 2 灰色 (N5/) 粘性微砂
灰白色 (N7/) 細砂のラミナ
- 3 灰色 (N4/) 粘質土
- 4 灰色 (N4/) 粘性微砂
灰白色 (N7/) 細砂のラミナ
- 5 灰色 (N5/) 粘性微砂 灰黄色
(2.5Y6/2) 微砂 (基盤層) を含む

第159図 溝15 (1/30)

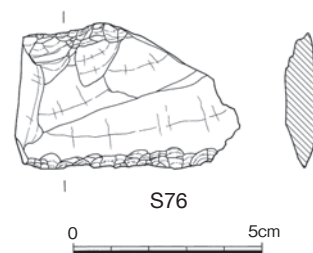
5 水田

水田2 (第126・127・160・161図、図版6-1)

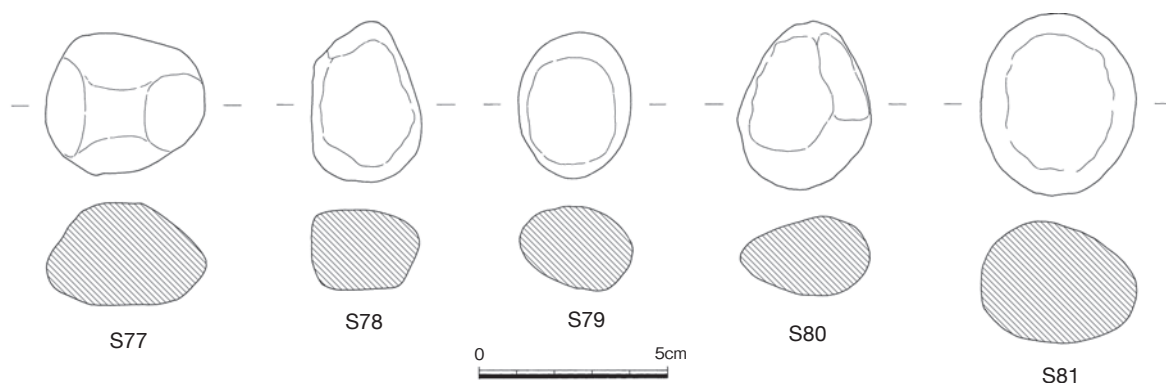
調査区の西端、29～31C区に位置する水田である。第7図にあるように、弥生時代前期の水田1の直上で、この水田2の水田層を検出している。厚さ約5cmの、灰白色を呈する粘質土が水田層にあたる。また、水田2の上層には、厚さ約5cmの細～粗砂が堆積しており、これは洪水によって堆積した土砂の層であると考えられるものである。これは、洪水の規模こそ違え、後述する弥生時代後期水田と同様である。水田の区画は、31～32ライン上の水田端に沿ったところでは、正方形を呈すると考えられる整った形状であるが、それより西側では、不整形で区画の大きなものとなる。ただ、水田2の畦畔の高まりは高いところでも2cm程度、一部では痕跡として検出している部分もあり、全体的に低いものであったことから、さらに小さい区画であった可能性も考えられる。



- 1 黄灰色粘質 (2.5Y6/1) 土 (水田2水田層)
- 2 黒褐色粘質 (10YR3/1) 土 (水田1水田層)



第160図 水田2 (1/30)・出土遺物① (1/2)



第161図 水田2出土遺物② (1/2)

出土遺物には、石包丁 S76、投弾と考えられる川原石 S77～S81が出土している。これらの遺物は、中期水田層を掘り下げ中に出土している。川原石は、計11点出土しているが、同じ時期の他の遺構から出土していないこと、大きさが4～5 cm程度、重量が45～92 gで、手のひらに入る大きさであること、また、水田層からは石鏃5点出土していることを確認していることなどから、水田に来る小動物を追い払う、又は捕らえるためのものと判断したため、投弾として報告する。このような投弾の例は、岡山市北区の津島遺跡の弥生時代前期水田（岡山県埋蔵文化財報告173津島遺跡4）でもみられる。また、石鏃も出土しているものの、収納作業の過程で前期・後期の水田層から出土した石鏃の一部に混入したため、掲載できていない。 (團)

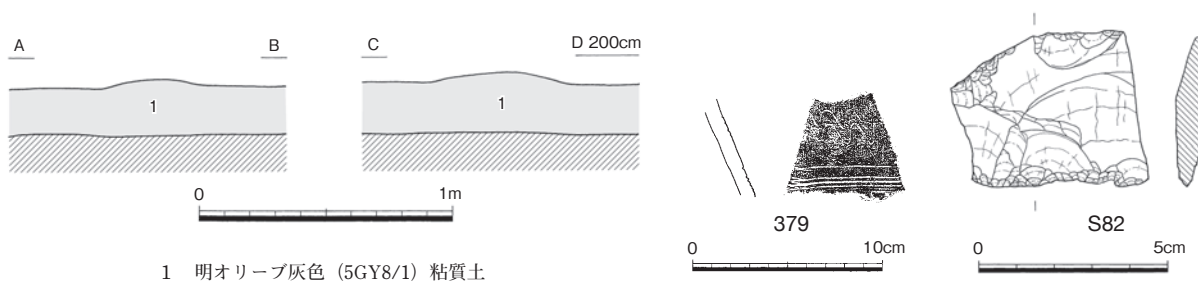
水田3 (第126・127・162図、図版6-2)

沢田遺跡の微高地との境をなす低位部において、旧河道上のたわみを利用して造られた水田である。本報告書では、原尾島遺跡と沢田遺跡との境界をこの低位部においたため、この水田の東側約2/3は百沢田6水田1として次章に掲載する。原尾島遺跡分では、旧河道の流走方向に並行する2条の畦とそれに直行する畦2条を確認した。なお、この南側は百沢田3水田につながっている。

田面は、幅15～25cm、高さ1～6 cm程度の畦によって区画され、形状を呈する。田面の標高は海拔190～200cm前後で、水田層は厚さは20cm程である。

後期水田層との間には、厚さ10cm程の青灰色粘質土とその上下に厚さ2～4 cmの黒色土（暗灰色粘質土）が堆積するが、いずれの層も畦畔はともなわない。中期中～後葉にかけての集落の消長と共に植物が繁茂した状態であったのだろうか。

遺物には、弥生土器379、サヌカイト製打製石包丁 S82がある。水田の時期については、百沢田3水田の項に報告したとおり百・中・I 考えている。 (弘田)



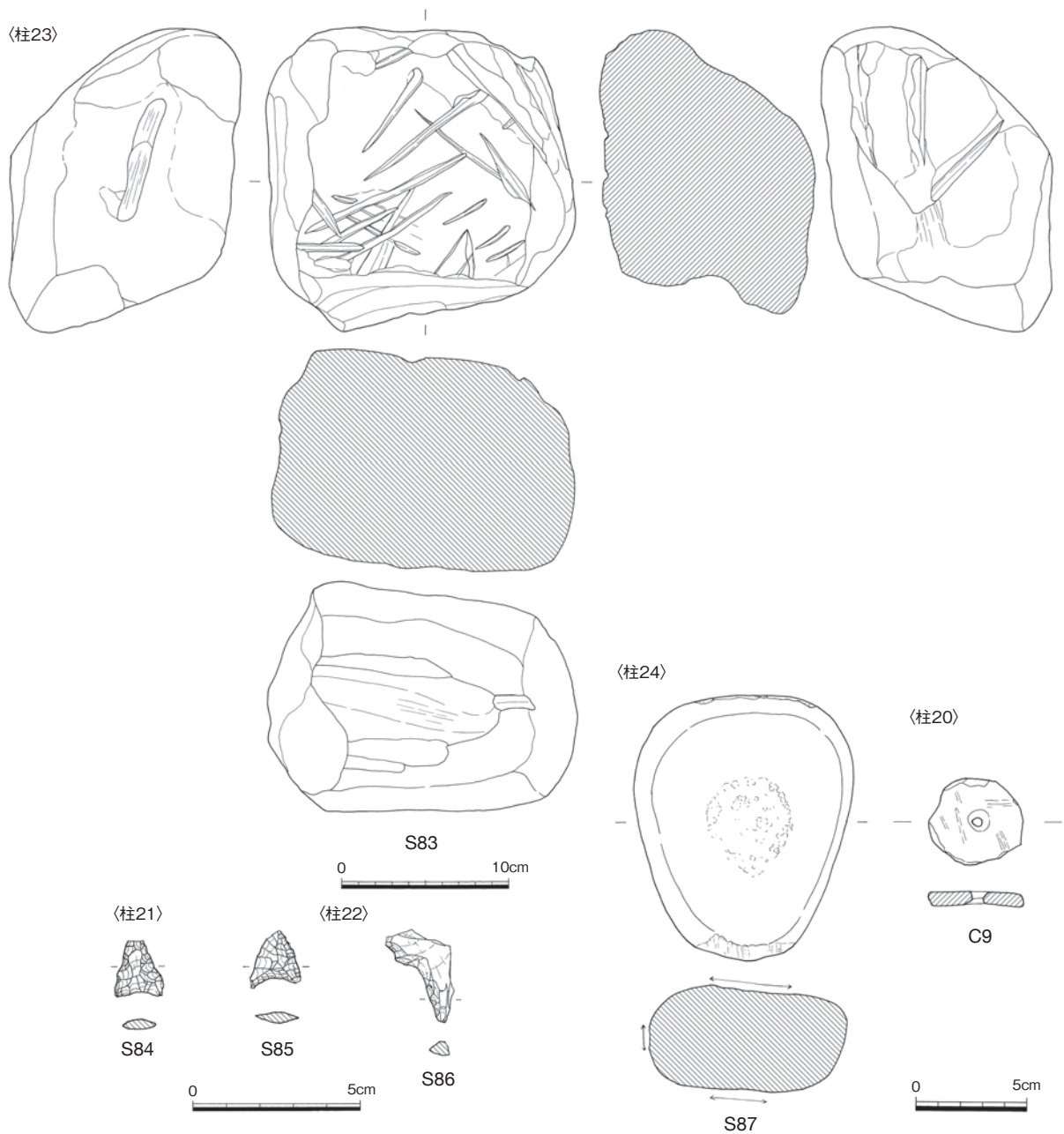
1 明オリーブ灰色 (5GY8/1) 粘質土

第162図 水田3 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

6 柱 穴

柱穴出土遺物 (第163図)

柱穴から出土した遺物のうち、特徴的な石器・土製品について掲載することとする。時期の決定については、共伴している土器によるが、細片のものが多いために、土器については掲載を見送った。**S83**は砥石で、砂岩で作られているものである。この柱穴については、遺構の切り合い関係から中期と判断している。すべての面が使用されており、溝状に幾条も磨いだ痕跡が残っている。何を磨いだものかは不明である。隣接している調査区でも、同様の砥石が出土している。**S84・S85**は石鏃、**S86**は石錐である。**S87**は叩石で、花崗岩製である。土製品**C9**は紡錘車で、土器を転用しているため、内外面にヘラミガキが認められ、このことから弥生時代中期の甕を転用したと考えられる。(團)



第163図 柱穴出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

第4節 弥生時代後期の遺構・遺物

1 概要

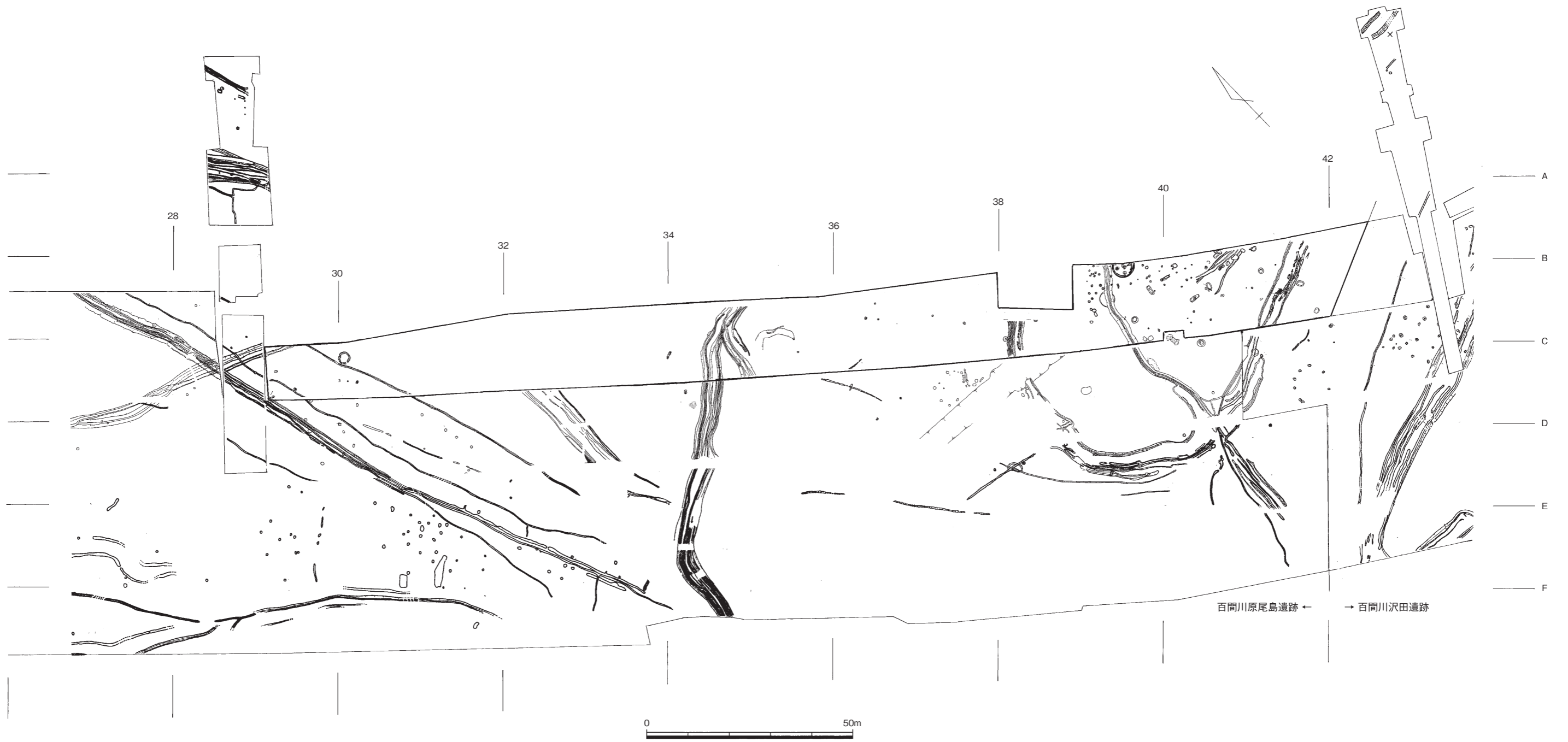
検出した遺構は、竪穴住居2軒、土器棺1基、井戸2基、土坑24基、溝27条、製塩炉2基、また水田関連遺構として、水田、島状高まり、水路3条などを検出している。これらの遺構は、およそ38ラインより西側と42ラインより東側の低位部では、水田関連遺構のほか、溝や少数の土坑を検出している。弥生時代後期末に付近一帯を襲った洪水によって運ばれた洪水砂によって、弥生時代後期末の遺構は完全に埋没してしまう。このため、洪水砂を除去して現れる遺構が洪水直前の状況を示す。調査区内では、低位部全域で水田経営がなされ、微高地上には水路が1本流れるのみで、竪穴住居などは確認していない。水田は、島状高まりと大畦畔によって大きく区画され、区画ごとに水田面の標高に高低差を設けて、水の供給を行う工夫がなされていることがわかった。また、水路に関しては、洪水砂に埋没した水路の下層で検出した溝の出土遺物や層位などから、水路の補修などを考える資料が見つかったといえる。また、水田面からは、洪水砂が詰まった5～10cm程度の楕円形の穴が多数見つかった。これは昭和56年の調査で稲株痕跡と報告されたものであるが、稲株痕跡であるかどうかの確認するために、プラントオパールや花粉分析などの理化学分析を実施することができた。微高地では、主に百・後・Ⅱの時期の遺構が多く確認されており、後期水田の開田の時期が今までの調査からこの時期と考えられていることから、水田の開田・経営に携わった人々の集落であったと考えられる。井戸1、土坑113・114などのように、低位部で遺構を検出しているが、これは元々微高地上に位置していたものを、水田の拡大に伴って微高地が開削されたためであろう。このことから、微高地を10m程度、開削していたことがわかった。また特筆されるものとして、製塩炉2基が見つかった。過去の調査で、約3m東側で製塩炉が1基確認されており、計3基の製塩炉がまとまって作られていたようで、この集落の特殊性を伺わせる。竪穴住居の床面からは粘土塊がまとまって出土し、胎土分析から住居内で出土している土器と同じ胎土であったことから、住居内で土器を製作する粘土の保管を行っているといった状況が想定できる事例となった。(團)



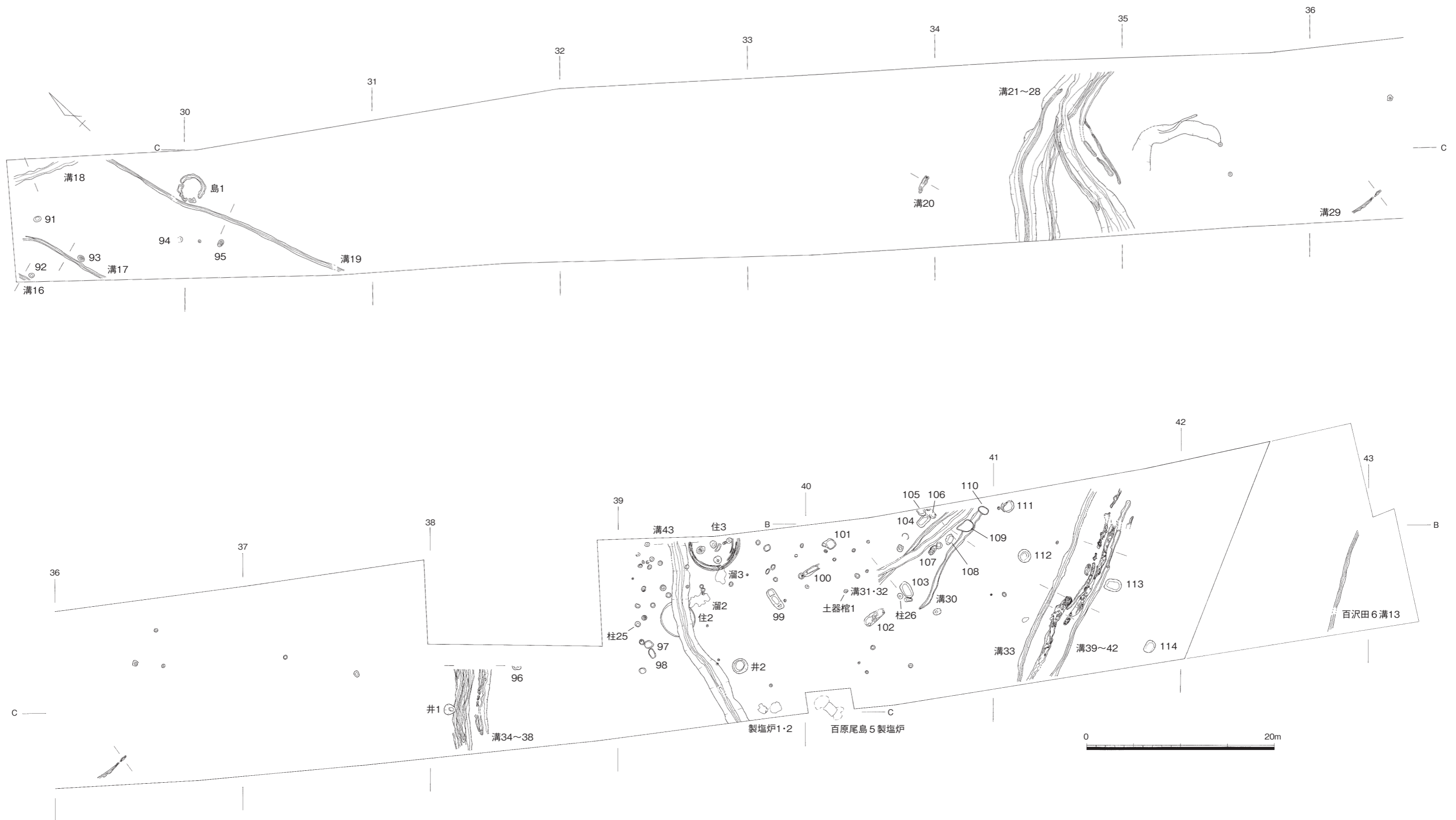
写真34 溝21～28 (南西から)



写真35 弥生時代後期水田 (水田7) (東から)



第164図 弥生時代後期遺構全体図 (1/1,000)



第165図 弥生時代後期遺構配置図 (1/400)

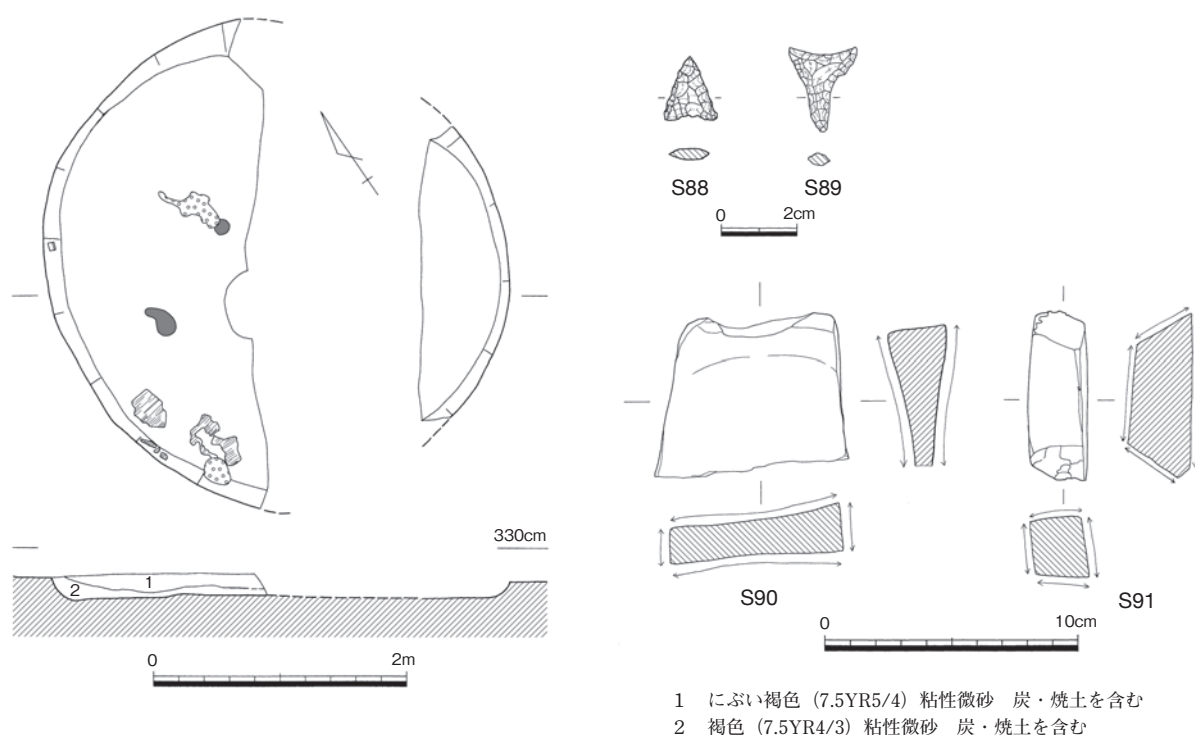
2 竪穴住居

竪穴住居2 (第164~166図、図版12-1)

39B区の中央北西寄りに位置する竪穴住居で、東側を溝43によって壊されているが、南北3.72m、東西3.54mの円形に復元される。検出面からの深さは24cmあり、標高289cmを測る床面では柱穴や壁体溝を検出できなかった。西の壁際では内側に向かって倒れこむ炭化材、中央北寄りでは焼土や粘土塊を検出しており、焼失住居の可能性はある。

出土遺物は少なく、サヌカイト製の石鏃S88・石錐S89、流紋岩製の砥石S90・S91があるのみである。このため詳細な時期は不明であるが、検出状況から百・後・Ⅱ期に属するものと思われる。

(亀山)

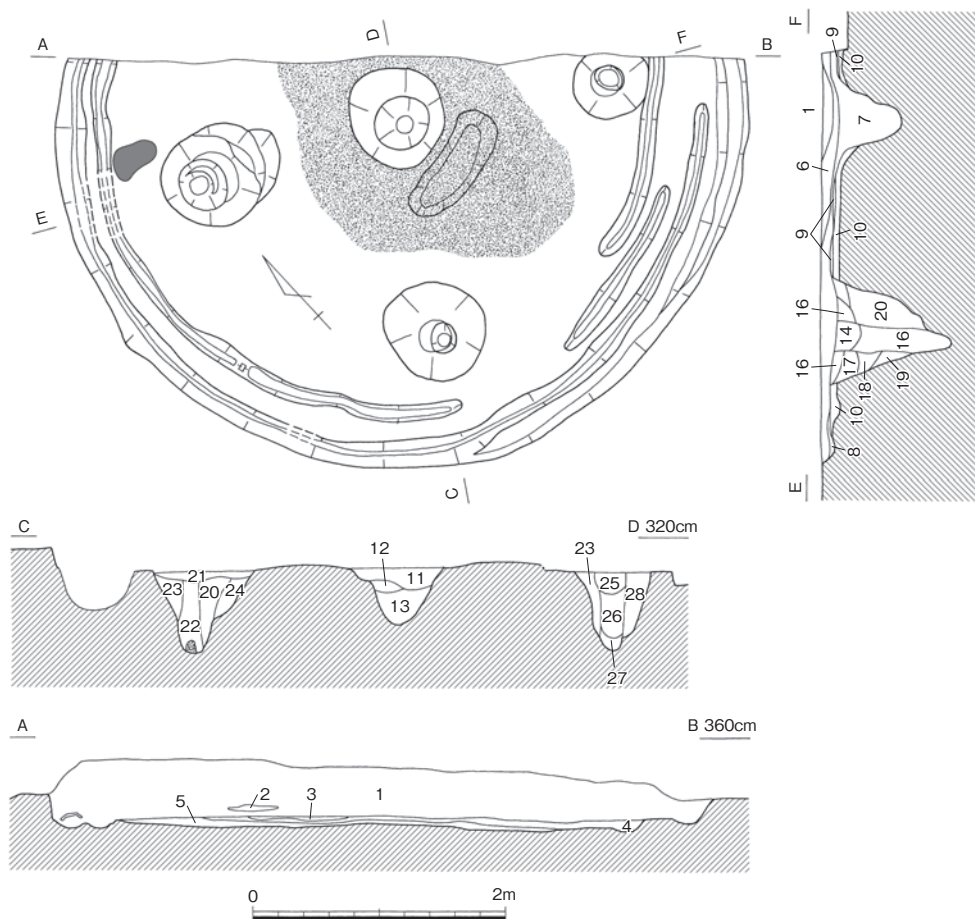


第166図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/3)

竪穴住居3 (第164・165・167図、写真35・36、図版12-2・23・29)

39B区の北東側中央で検出した4本柱の円形住居で、竪穴住居2の北東4.3mに位置する。新段階の住居は径525cmの円形をなすものと推定される。壁体から41~63cmの位置にある柱穴は径61~82cm、深さ65~90cmを測る。径20cmほどの柱痕跡が残り、柱間距離は東西246cm、南北229cmを測る。標高300cmを測る床面の中央には径81cm、深さ49cmの土坑が穿たれ、その周囲には炭化物の分布が認められた。厚さ2~5cmの貼り床の下から検出した古段階の住居は、新段階より30~40cmほど内側に壁体溝をめぐるせており、その規模は径448cmに復元される。中央穴は新段階と重複しているが、その南に接して長さ97cm、幅34cmの長楕円形を呈する浅い土坑を検出した。床面や埋土下層からは、百・後・Ⅱ期の壺380、甕381~384、鉢385~387、製塩土器388~390のほか、鉄鏃M1、石鏃S92、ガラス小玉G1・G2が出土している。

(亀山)



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂
- 2 にぶい橙色 (7.5YR6/4) 土
- 3 浅黄色 (2.5Y7/4) 粘性微砂
- 4 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性微砂
- 5 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘性微砂 基盤層を多く含む
- 6 灰黄褐色 (10YR5/2) 土 焼土・黄色土塊を含む
- 7 褐灰色 (10YR5/1) 土 炭を含む
- 8 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 基盤層を含む
- 9 炭層
- 10 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性微砂
- 11 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 炭・焼土を少量含む
- 12 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 基盤層土塊を少量含む
- 13 黒褐色 (2.5Y3/1) 粘性微砂 基盤層土塊と炭を含む
- 14 褐灰色 (10YR4/1) 粘性微砂
灰色 (N6/) 粘性微砂がレンズ状に入る
- 15 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土
- 16 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂
- 17 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂 基盤層土塊を多く含む
- 18 灰黄褐色 (10YR4/1) 粘性微砂 基盤層を少量含む
炭を多く含む
- 19 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘性微砂 少量の炭を含む
- 20 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂 基盤層土塊と炭を多く含む
- 21 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 炭を少量含む
- 22 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土 炭を少量含む
- 23 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂 基盤層土塊を少量含む
- 24 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂 基盤層土塊を多く含む
- 25 褐灰色 (10YR4/1) 粘性微砂
灰色 (N6/) 粘性微砂がレンズ状に入る
- 26 褐灰色 (10YR4/1) 粘性微砂 基盤層を少量含む
- 27 黒褐色 (2.5Y3/2) 粘質土
- 28 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性微砂

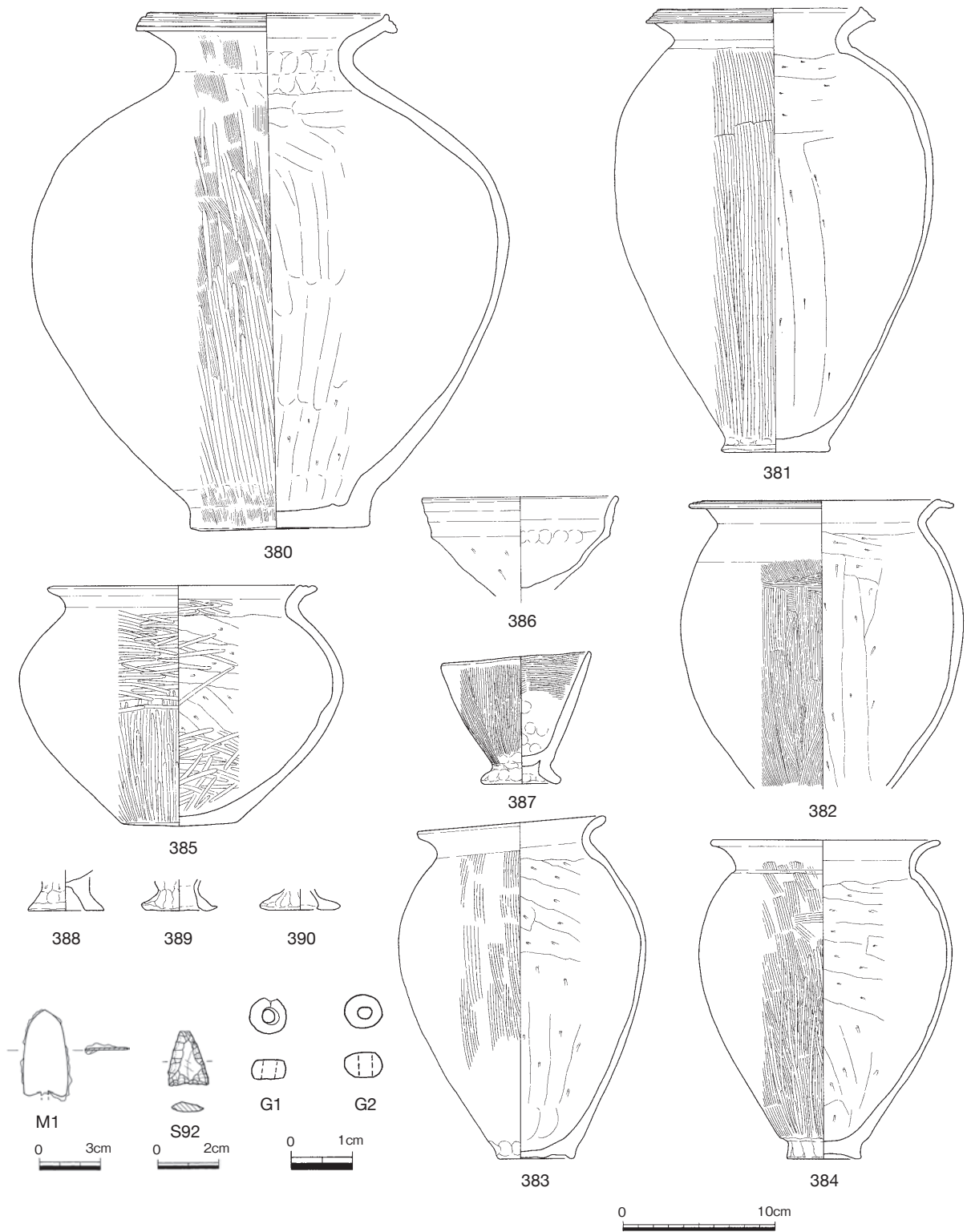


写真36 豎穴住居3 (南から)



写真37 豎穴住居3 (北東から)

第167図 豎穴住居3 (1/60)



第168図 竪穴住居3出土遺物 (1/1・1/2・1/3・1/4)

3 井戸

井戸1 (第164・165・169図、図版13-1)

38C区の南東1.4mに位置する素掘りの井戸で、微高地の裾をめぐる溝34と重複して検出した。長径

40cmほどの筒状をなす下部から上方へ向けて大きく広がる漏斗状をなしており、不整円形を呈する上面は長径125cm、短径112cm、深さ90cmにある底面は標高168cmを測る。

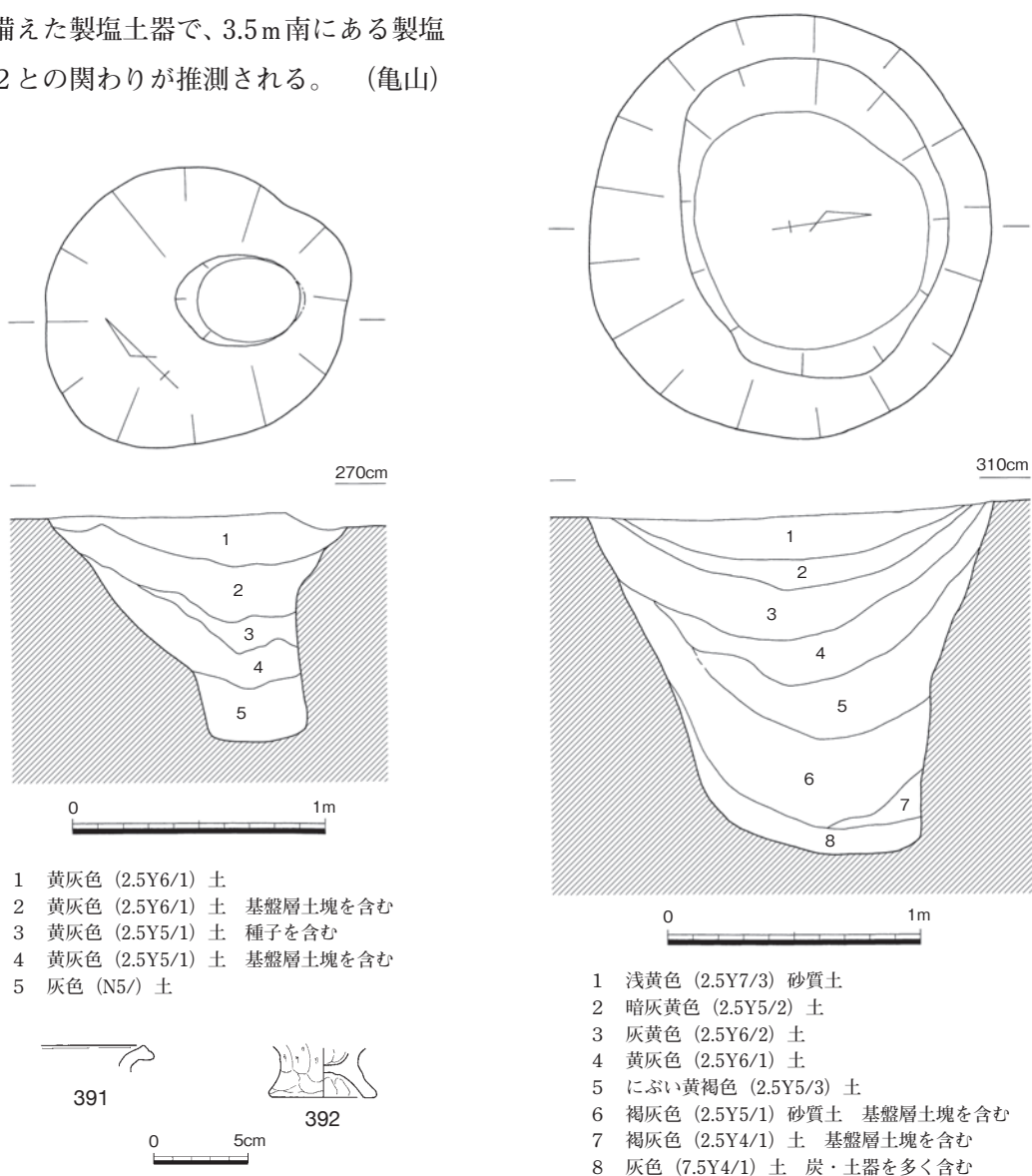
黄色土塊を含む埋土からは、口縁端部を斜め下方に引き出す百・後・Ⅱ期の壺391や製塩土器の脚台部392のほか、ヒョウタン類の種子がまとまって出土した。 (亀山)

井戸2 (第164・165・170・171図、図版13-2)

39B区の中央南寄りで見出した素掘りの井戸で、竪穴住居2の南5.4mに位置する。

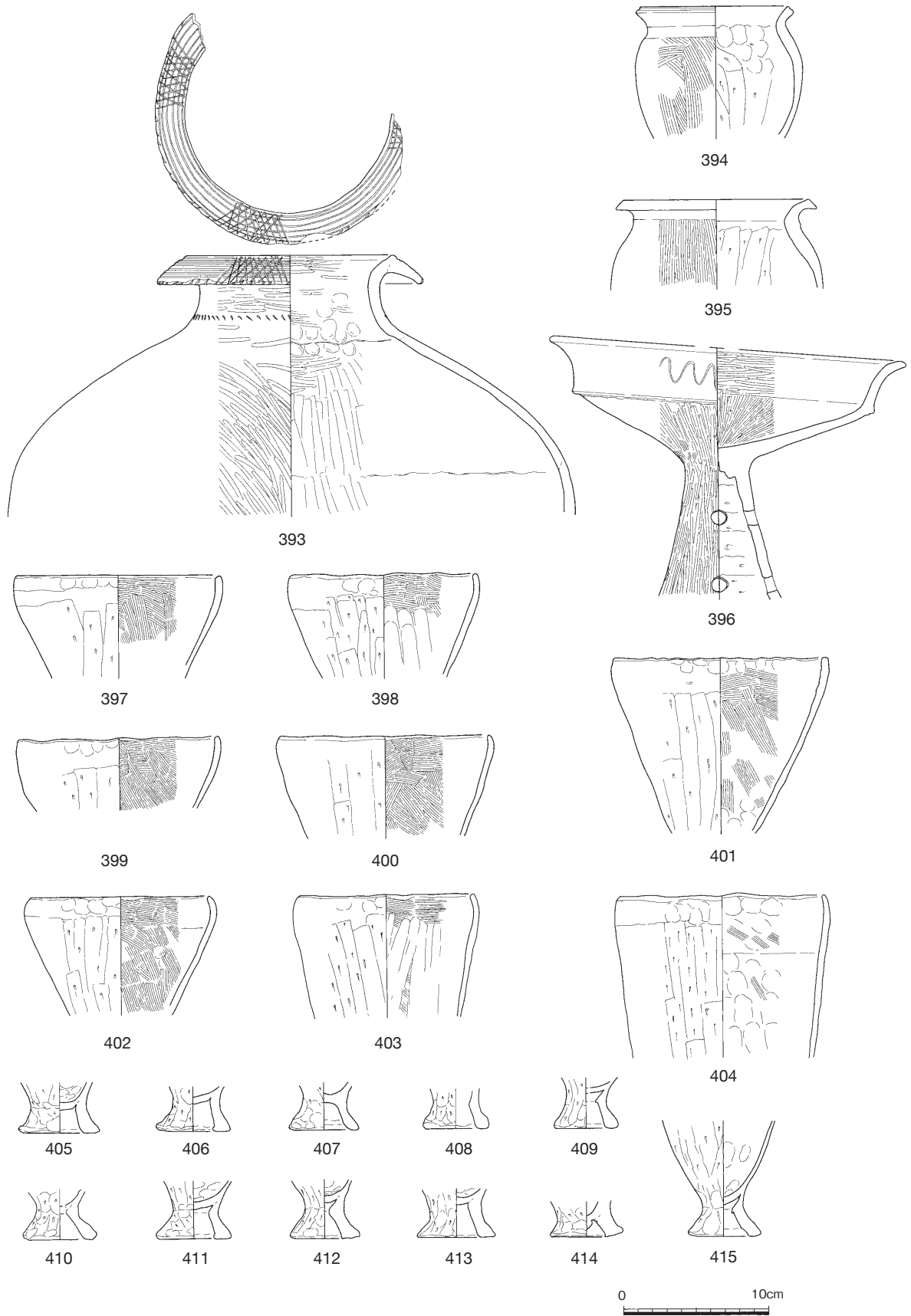
上面は長径168cm、短径158cm、底面は長径93cm、短径89cmの円形を呈する。検出面から135cmの深さにある底面の標高161cmを測り、その断面は逆台形をなす。埋土の最下層には南側から投棄されたように百・後・Ⅱ期の土器が堆積し、これを覆う褐灰色土層には黄色の地山土塊を含むことから埋め戻された可能性がある。393は口径10.2cm、胴径39cmを測る壺である。口縁の下端を斜め下方に拡張し、多条にめぐらせた沈線文に斜格子文を加える。短い頸部と肩の張る体部の境界には列点文をめぐらす。高杯396は浅い杯部から外反して開く口縁部をもち、中空の脚柱部には円孔を上下2段に穿つ。

397~415は、上方へ直線的に開く鉢に小さな脚台を備えた製塩土器で、3.5m南にある製塩炉1・2との関わりが推測される。 (亀山)



第169図 井戸1 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第170図 井戸2 (1/30)

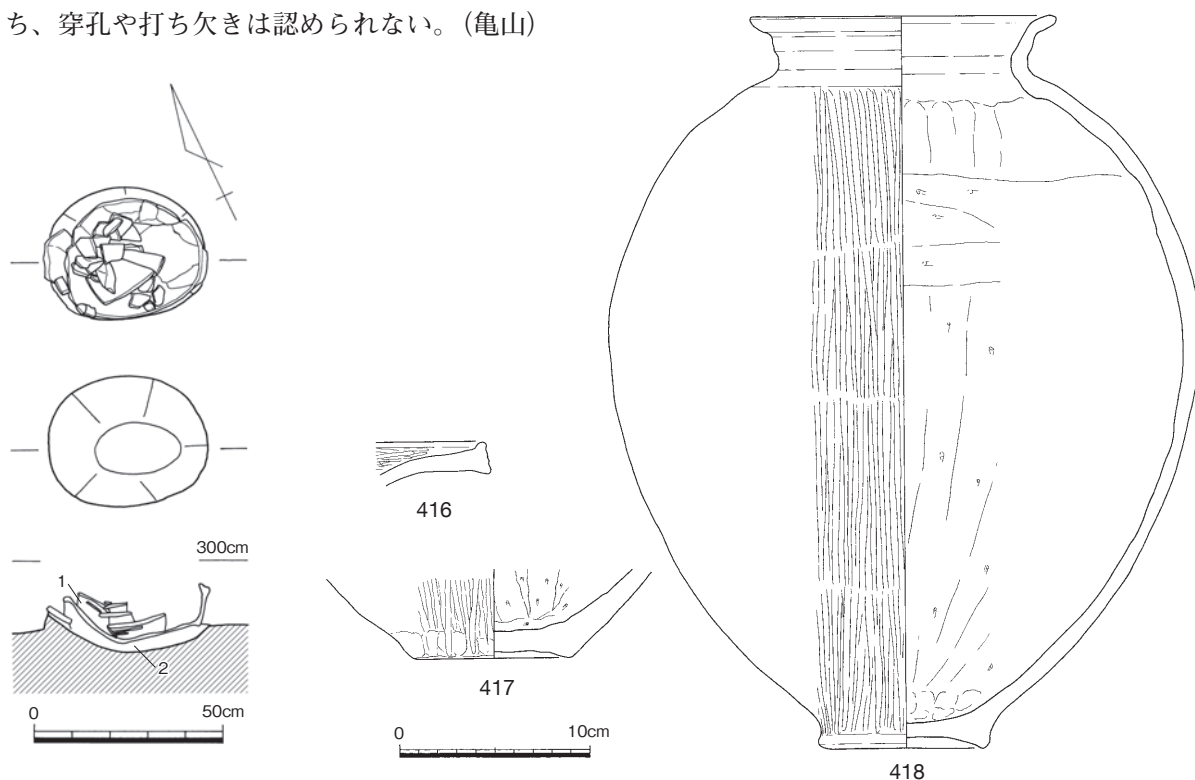


第171図 井戸2出土遺物 (1/4)

4 土器棺

土器棺 1 (第164・165・172図、図版12-3)

微高地が斜面部へと移り変わる場所で検出したもので、40B区の中央北西寄りに位置する。黒褐色の包含層を掘り下げる際、口頸部を北西に向けて横転する百・後・Ⅱ期の壺418を確認したため精査したところ、掘り方が認められたうえ口頸部を覆うように置かれた壺の底部片417が見つかったことから土器棺と判断した。長径42cm、幅34cmの楕円形なす掘り方に収められた棺身は、口径15.4cm、器高38.8cmを測る。短く外反する口頸部はヨコナデで調整し、卵形の体部は外面をヘラミガキ、内面をヘラケズリで仕上げる。径8.8cmの凹み底をもち、穿孔や打ち欠きは認められない。(亀山)



- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土
2 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 (土器棺の掘り方埋土)

第172図 土器棺 1 (1/20)・出土遺物 (1/4)

5 土 坑

土坑91 (第164・165・173図)

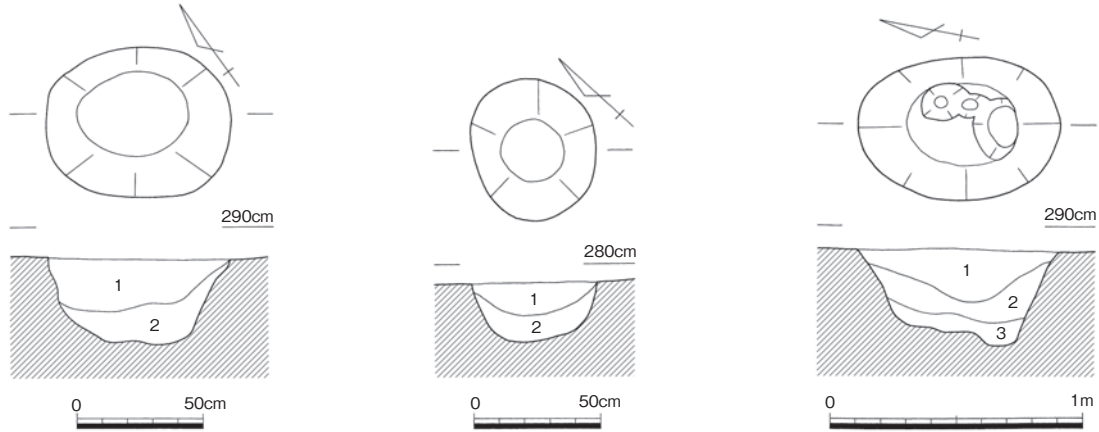
29C区の中央北寄り、溝17の北東1.5mにおいて検出された土坑である。73cm×59cm程の楕円形を呈し、深さは33cmを測る。遺物はなく性格等は不明である。埋土は、上層に褐灰色粘性微砂が、下層に黄灰色粘質土が堆積している。時期は、検出状況などから弥生時代後期頃と考えられる。(内藤)

土坑92 (第164・165・174図)

29C区の西部、溝16のすぐ東において検出された土坑である。56cm×49cm程の円形を呈し、平坦な底面まで24cmを測る。遺物はなく性格等は不明である。埋土は、上層に褐灰色粘性微砂が、下層に褐灰色粘質土が堆積している。時期は、検出状況などから弥生時代後期頃と考えられる。(内藤)

土坑93 (第164・165・175図)

29C区の中央西寄り、溝17のすぐ東で検出された土坑である。検出面で80cm×57cmの楕円形を呈し、底面は凸凹があり、南側が深くなっている。遺物はなく性格等は不明である。埋土は、褐灰色土で間層にはにぶい黄橙色が混じる。時期は、検出状況などから弥生時代後期頃と考えられる。(内藤)



- 1 褐灰色 (10YR6/1) 粘性微砂
にぶい黄橙色 (10YR7/2) 粘質土塊を含む
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土

- 1 褐灰色 (10YR6/1) 粘性微砂
にぶい黄橙色 (10YR7/2) 粘質土塊を含む
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土

- 1 褐灰色 (10YR6/1) 粘性微砂
- 2 にぶい黄橙色 (10YR7/2) 粘質土
褐灰色 (10YR6/1) 粘性微砂を含む
- 3 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土

第173図 土坑91 (1/30)

第174図 土坑92 (1/30)

第175図 土坑93 (1/30)

土坑94 (第164・165・176図)

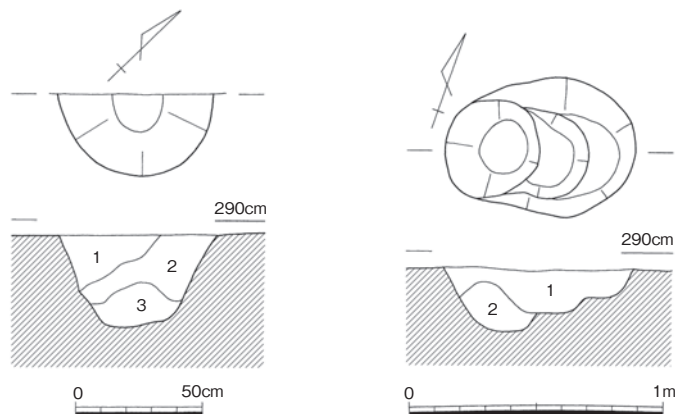
29C区の南東端、溝19の西3.5mにおいて検出された遺構で、北西半を側溝により掘削したが、検出面で径66cm程の円形を呈する土坑である。深さは38cmを測る。埋土は、黄灰色粘質土で、遺物はなく性格等は不明である。時期は、検出状況などから弥生時代後期頃と考えられる。(内藤)

土坑95 (第164・165・177図)

30C区の北西部、土坑94の南東3mに位置する土坑である。検出面で75cm×55cm程の楕円の平面形を呈し、深さは25cmを測る。埋土は、上層に灰色粘性微砂、下層に黄灰色粘質土が堆積し、遺物は認められなかった。性格等は不明で、時期は、検出状況などから弥生時代後期頃と考えられる。(内藤)

土坑96 (第164・165・178図)

38B区の南西部、調査区境で遺構の南西半部が検出された遺構である。平面形は長軸86cm程の楕円が想定される。海拔335cmの検出面から一段低い底面の中央部までは102cmを測る少し深い土坑である。

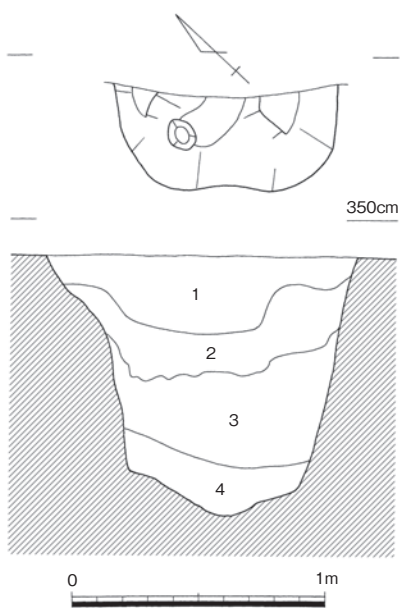


- 1 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
- 2 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘質土
- 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
(灰黄色土塊混じる)

- 1 灰色 (2.5Y7/1) 粘性微砂
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
灰色 (2.5Y7/1) 粘性微砂の土塊を含む

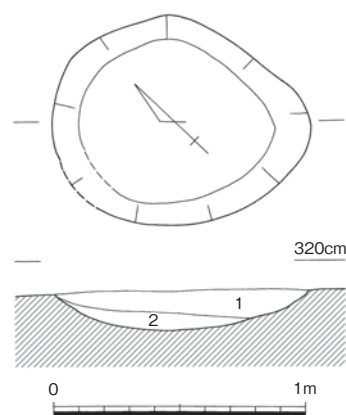
第176図 土坑94 (1/30)

第177図 土坑95 (1/30)



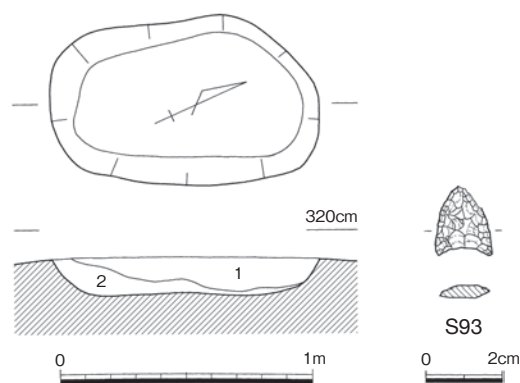
- 1 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土
炭混じり 粒径1cm以下の
焼土・木炭粒をまばらに含む
- 2 灰白色 (10YR7/1) 粘質土
黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を
多く含む
- 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
黄色粘土塊をまばらに含む
- 4 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土
黄色 (2.5Y8/6) 粘土塊を
含む

第178図 土坑96 (1/30)



- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 土 焼土を含む
- 2 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 土

第179図 土坑97 (1/30)



- 1 灰褐色 (7.5YR5/2) 土
- 2 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 土 黄色土塊を含む

第180図 土坑98 (1/30)・出土遺物 (1/2)

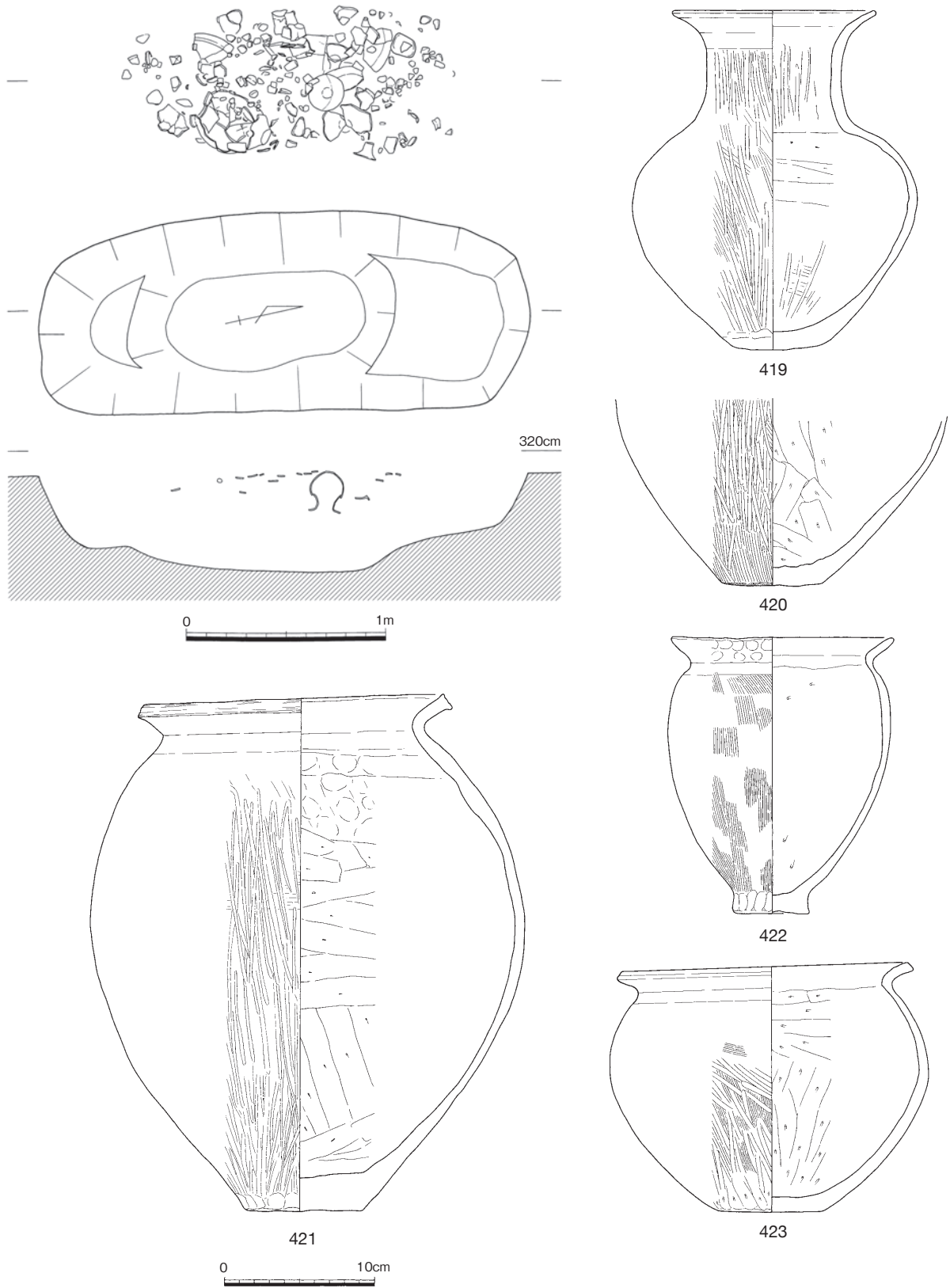
土坑98 (第164・165・180図)

39B区の西部、土坑97の南で検出された南北方向に長い楕円形を呈する土坑である。規模は106×67cmを測り、平らな底面までの深さは15cmである。埋土は上層に灰褐色土が堆積している。出土遺物としては土器の細片とともにS93のサヌカイト製の石鏃がある。完形で重さ0.79gを量る。

時期は、出土遺物などから弥生時代後期頃と考えられる。(内藤)

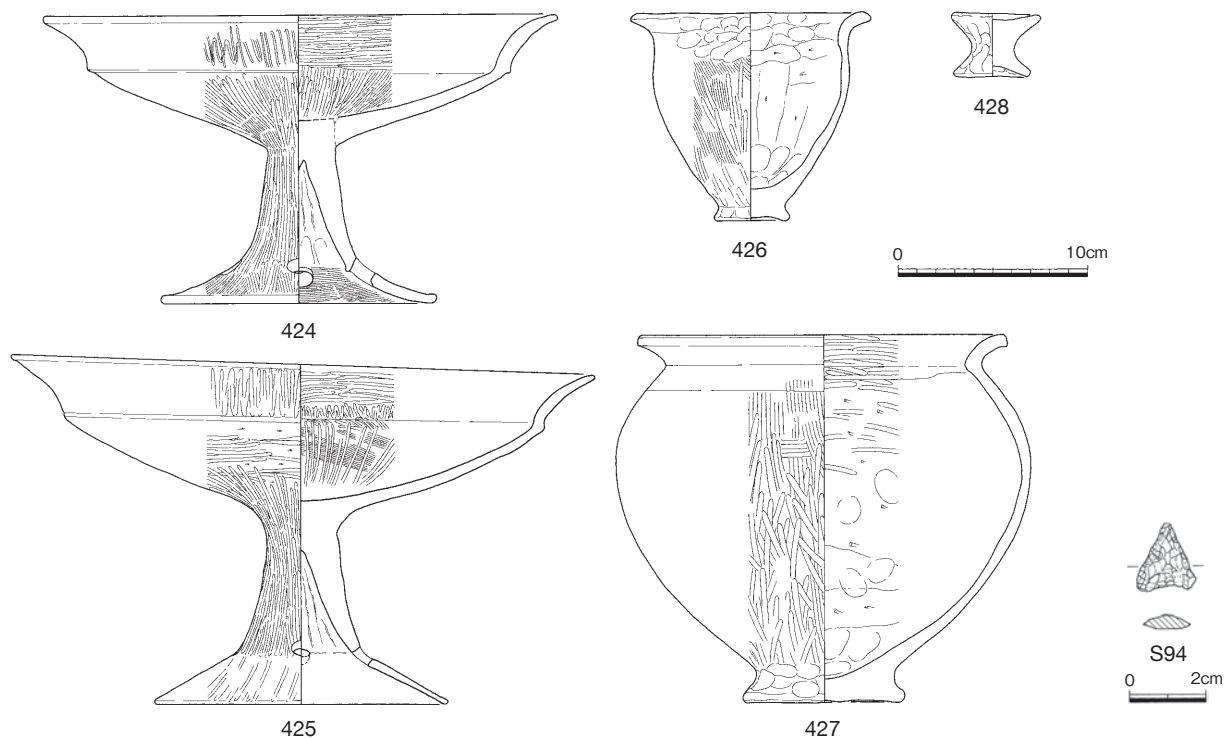
土坑99 (第164・165・181・182図、図版13-3・24)

39B区の東部、竪穴住居3から5m程南で検出された南-北方向に長い長方形の土坑である。検出面での規模は、長さ245cm、幅99cm、深さは一段低い中央部の底面まで50cmを測る。なお、遺構中央部の上層、180cm×80cm程の長方形の範囲には、完形の壺や甕、ほぼ完形の高杯などを含む多くの土器が集中して出土している。419は上方に立ち上がった口縁端部が「ハ」の字に開く、421は内傾して立ち上がる体部が「く」の字のに外反して口縁部をつくる壺である。422は「く」の字に外反した口縁端部外面に指頭圧痕の残る甕、424・425はいずれも杯部から立ち上がる口縁部が外反して開く高杯



第181図 土坑99 (1/30)・出土遺物① (1/4)

で、杯部内外面が丁寧にヘラミガキされている。428は手捏ねのミニチュア器台、S94は重さ0.85gを量るサヌカイト製の石鏃である。時期は、出土遺物などから百・後・Ⅱと考えられる。(内藤)

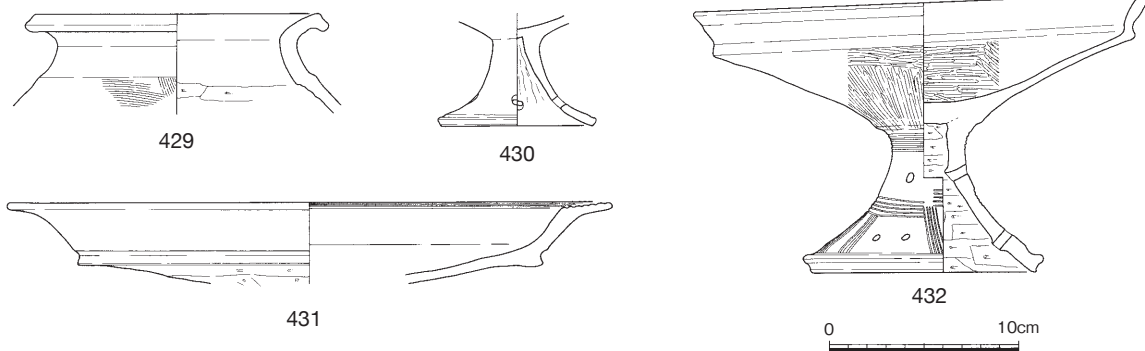
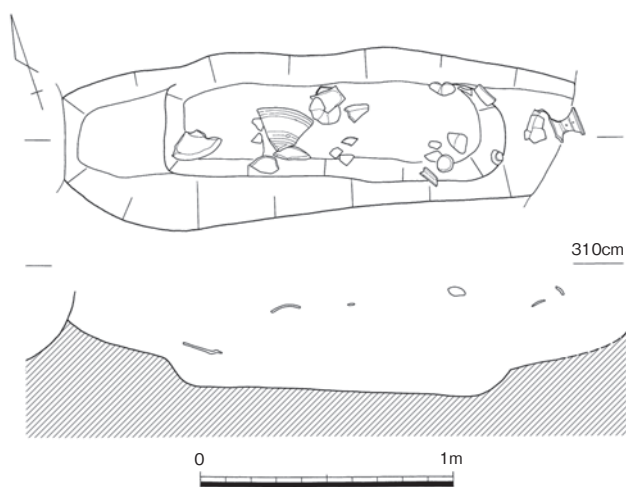


第182図 土坑99出土遺物② (1/2・1/4)

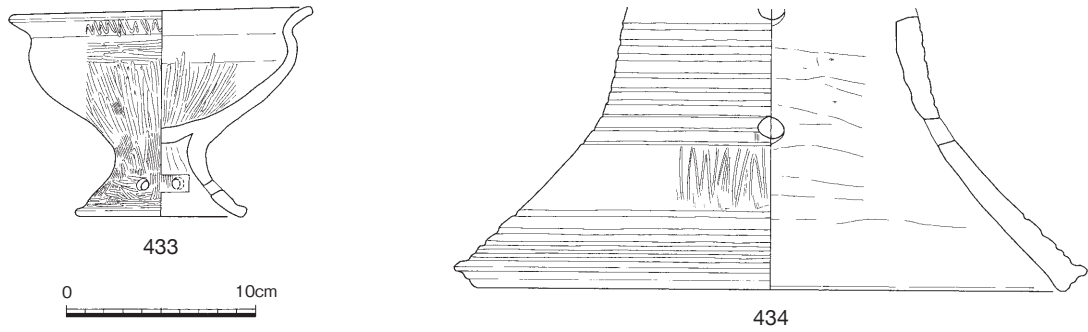
土坑100

(第164・165・183・184図、図版14-1・24)

40B区の北西部で検出された、東西方向に長い土坑で、幅68cm、長さは200cm以上を測る。検出面から平らな床面まで深さ42cmを測り、形状などから土坑墓とも考えられる遺構である。埋土の上層からは、土器が出土している。429は口縁端部を「く」の字に外反した口縁端部下方に拡張した甕である。431は杯部の肥厚した口縁端面に凹線を巡らせている、432は立ちった口縁の端部が肥厚した高杯である。時期は、百・後・Ⅱと考えられる。(内藤)



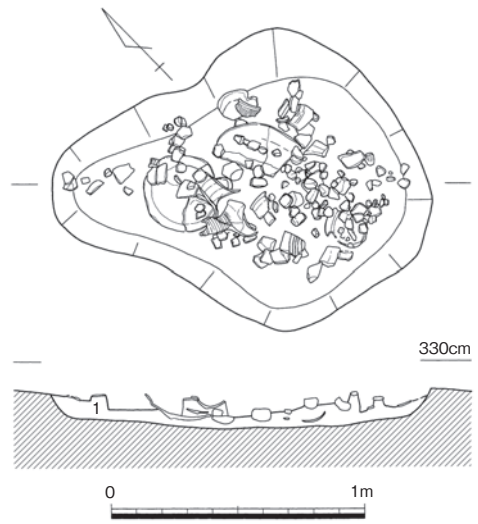
第183図 土坑100 (1/30)・出土遺物① (1/4)



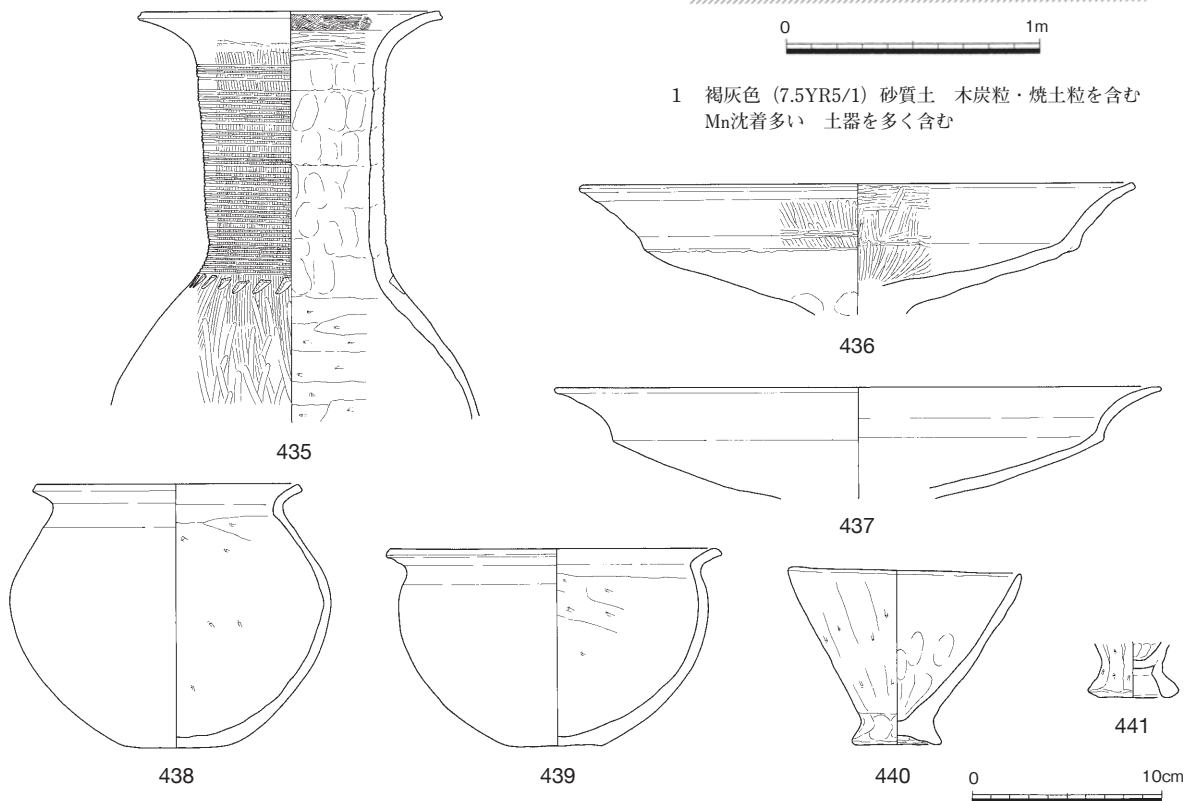
第184図 土坑100出土遺物② (1/4)

土坑101 (第164・165・185図)

40B区の北部で検出された土坑である。長径150cm、短径111cm程の規模で不整形を呈する。底面は平坦で、褐灰色砂質土の埋土中から土器片が出土している。435は長い頸部が立ち上がり口縁部が外反して開く壺、436・437は内外面を丁寧にヘラミガキした杯部の口縁部が外反して開く高杯、438・439は口縁端部が「く」の字に外反する甕、鉢である。また、440・441は内面を指押え、外面を粗くヘラケズリしただけの製塩土器である。時期は、出土遺物などから百・後・Ⅱである。(内藤)



1 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂質土 木炭粒・焼土粒を含む Mn沈着多い 土器を多く含む



第185図 土坑101 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑102 (第164・165・186図)

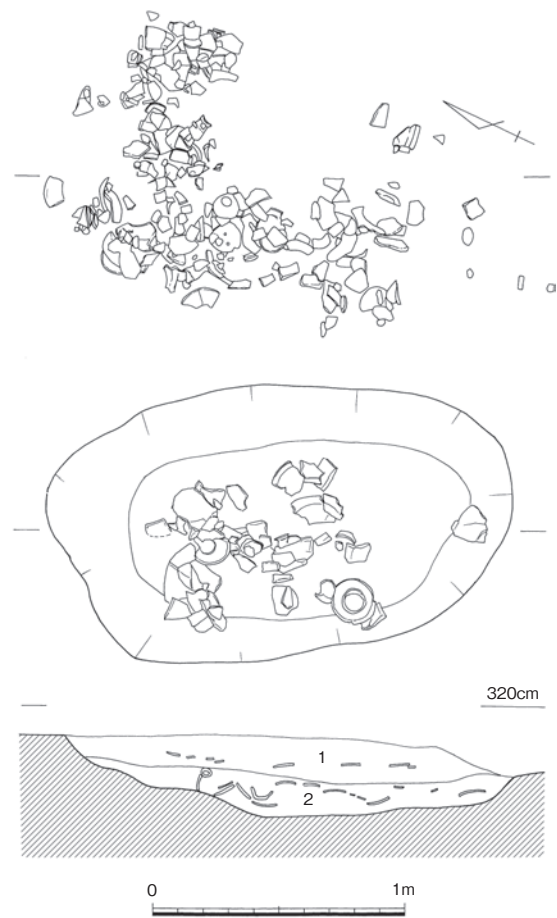
40B区の中央部で検出された、東一西に長い楕円形を呈する土坑である。規模は東西243cm、南北103cm、深さ10cm程を測り、床面は平坦であるが所々に穴状の凹みのある性格不明の遺構である。

埋土は、地山の土を含む褐灰粘質土の1層である。時期は弥生時代後期と考えられる。(内藤)



1 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土 黄色 (2.5Y8/6) 粘土土塊を含む
木炭粒をわずかに含む

第186図 土坑102 (1/30)



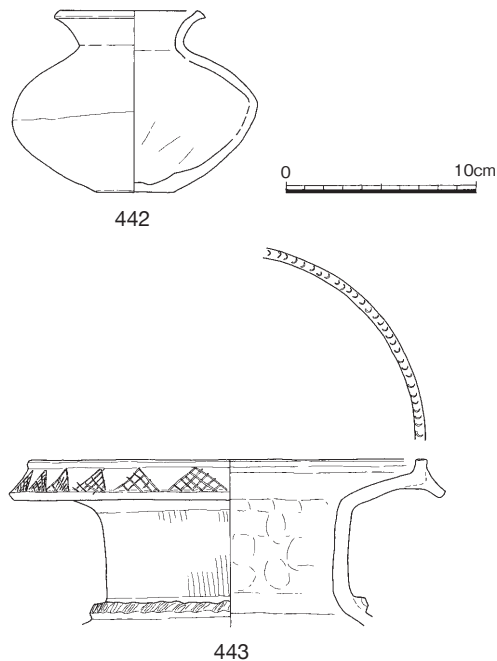
1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂 炭・焼土を含む

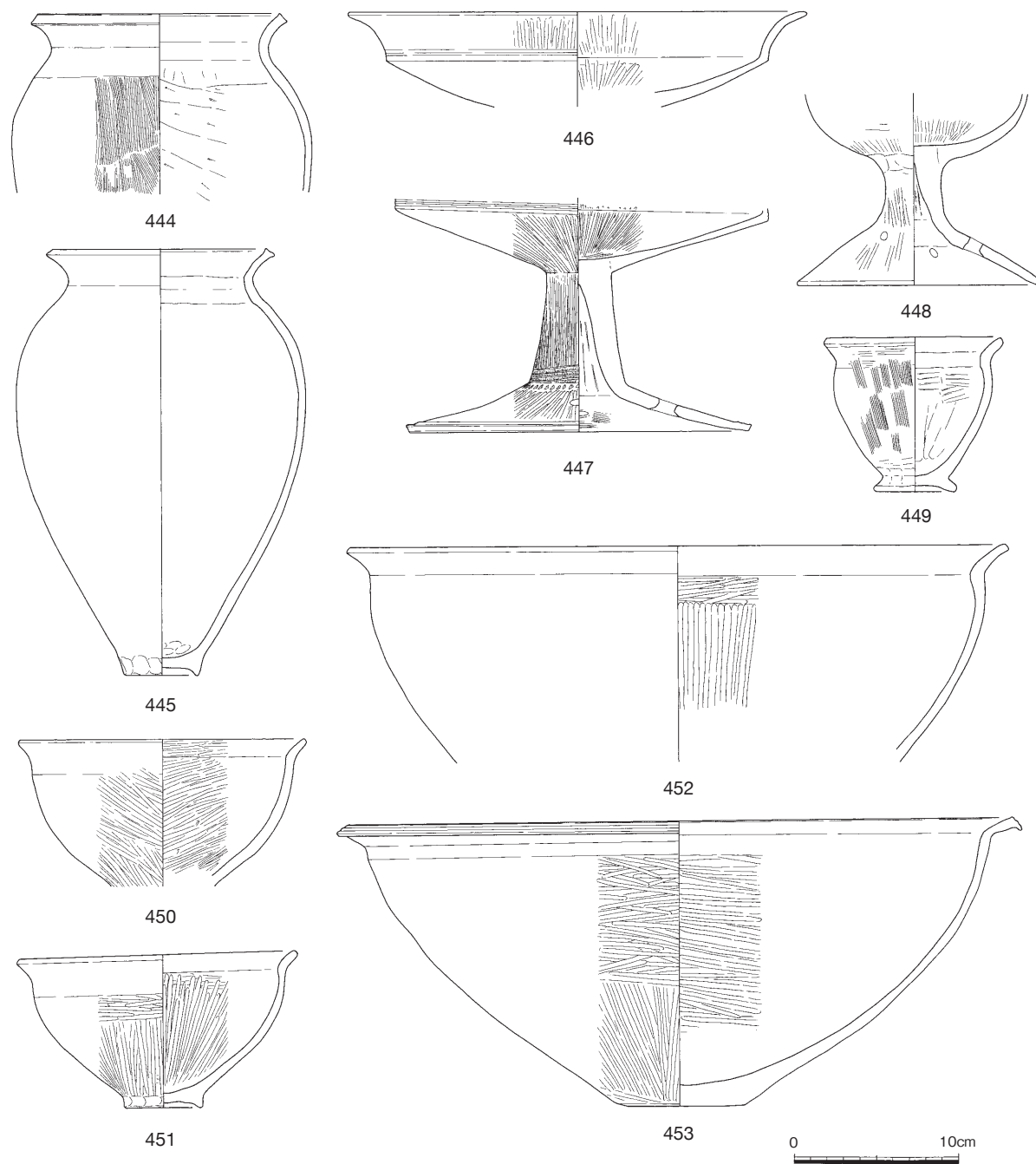
第187図 土坑103 (1/30)・出土遺物① (1/4)

土坑103 (第164・165・187・

188図、図版14-2)

40B区において検出した土坑で、溝30と溝31・32の間に位置する。上面の規模は、長軸185cm、短軸110cmで、平面形は楕円形を呈していた。検出面からの深さは33cmで、標高275cmを測る。底面は皿状で、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土全体から多量の弥生土器が出土するが、特に上層では、一部の土器は土坑内からはみ出て出土した。下層にいたっても土器は多量に出土しており、底面直上に置かれた可能性もある。

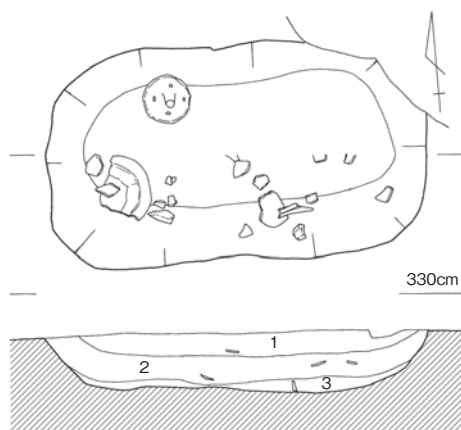




第188図 土坑103出土遺物② (1/4)

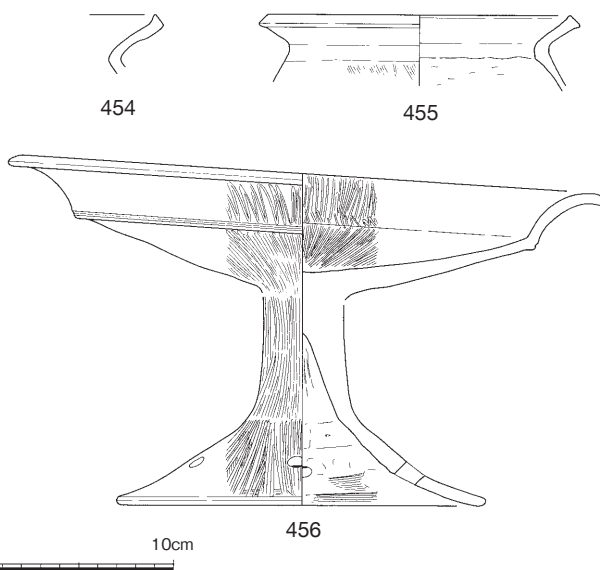
出土遺物には442～453がある。442・443は壺で、442は小型であり、443は口縁外面に格子状の鋸歯文、上面に半竹管文が施される。444・445は甕であり、445は底部が上げ底である。446～448は高杯で、脚部を受け部に差し込んでいる。口縁部は446が逆「ハ」の字に広がり、447は直上し、448は丸く収まる。449～453は鉢で、452・453は大型になる。453の口縁端部には、擬凹線が施される。これら土器の時期は、大半が百・後・Ⅱになる。遺構の時期も同様の時期になると考えている。(小林) 土坑104 (第164・165・189図)

40A区とB区の間において検出した土坑で、溝31・32の北側に位置し、東側に土坑105・106が近接する。上面の規模は、長軸152cm、短軸86cmで、平面形は長方形を呈する。検出面からの深さは24



- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘質微砂

第189図 土坑104 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

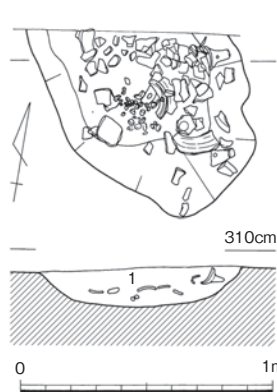
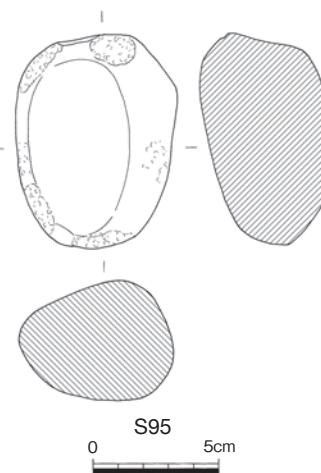


cmで、標高291cmを測る底面は水平をなし、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土全体から弥生土器が出土するが、底面直上ではない。出土遺物には454～456、S95があり、特に456はほぼ完形で出土した。454・455は甕である。456は高杯であり、口縁部は外方に反り返る。これら出土土器の時期は、百・後・Ⅱになり、遺構の時期も同様になると考えている。(小林)

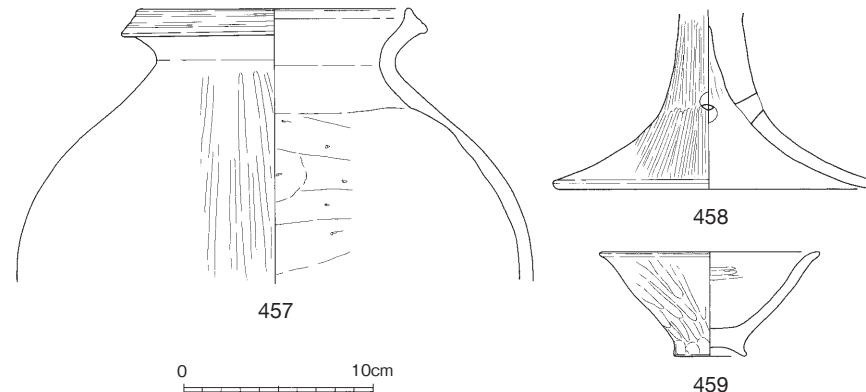
土坑105 (第164・165・190図)

40A区の南側において検出した土坑で、溝31・32の北側に位置し、土坑104・106が近接する。上面の規模は、長軸75cm以上、短軸73cmで、平面形は楕円形を呈していた。検出面からの深さは15cmで、標高287cmを測る底面は皿状を呈し、壁面は緩やかに立ち上がる。埋土全体から多量の弥生土器が出土するが、底面直上のものはない。

出土遺物は457～459で、457は壺、458は高杯、459は鉢である。時期は、百・後・Ⅱになると考えている。(小林)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂 炭・焼土を含む



第190図 土坑105 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑106 (第164・165・191図)

微高地上の40A区の調査区北壁沿いで検出した土坑である。平面形は円形を呈し、規模は、長軸は62cm、短軸が60cmで、深さは50cmと小規模で柱穴に近い。

図示しうるほどの出土遺物はないが、時期は弥生時代後期と考えている。(弘田)

土坑107 (第164・165・192図)

微高地上の40B区において検出した土坑である。平面形はやや歪な楕円形を呈し、規模は、長軸が114cm、短軸は58cmを測るが、深さは浅くて12cm程であった。

遺物は土器の小片が出土しており、時期は弥生時代後期と考えている。(弘田)

土坑108 (第164・165・193図)

40B区において、基盤層上で検出した土坑で、遺構が集中する微高地の頂部より低位部へと緩やかに下る斜面部に位置していた。平面形は不定形を呈し、規模は長軸が116cm、短軸が68cmで、深さは14cmを測る。

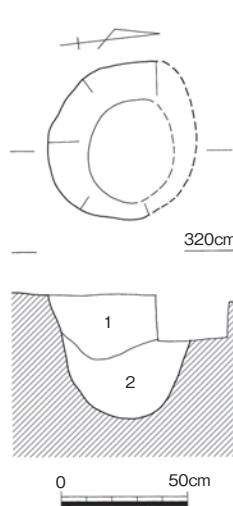
弥生土器の高杯口縁部460が出土しており、土坑の時期は百・後・Ⅲと考えている。(弘田)

土坑109

(第164・165・194・195図)

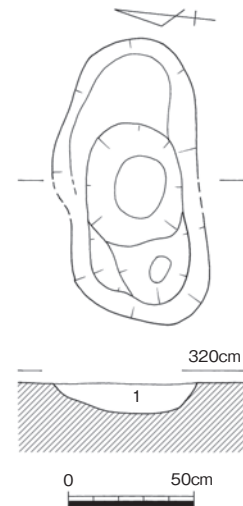
40B区において、弥生時代の包含層を掘り下げた後に基盤層上で検出した土坑である。この箇所は集落の中心から少し離れており、基盤層も北から南の低位部へと緩やかに下っていた。平面形は、不定形で「いちじく形」をなしている。規模は長軸が182cm、短軸は127cm、検出面からの深さは10cm平面積に比べて浅い。

弥生土器の細片が数多く出土しているが、復元・図化できたものには壺461、甕462～465、高杯466、鉢467・468がある。人為的な土坑というよりも微高地縁辺部の凹みに形成された土器溜まりであろうか。遺物からみた土坑の時期は、百・後・Ⅱである。(弘田)



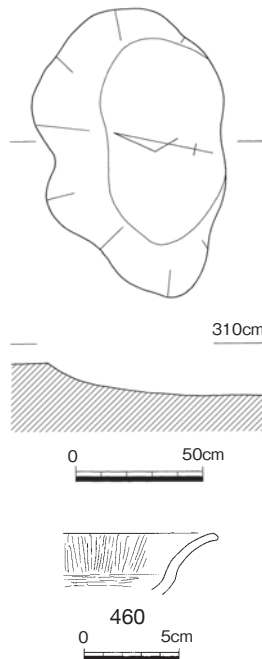
- 1 にぶい黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂

第191図 土坑106 (1/30)

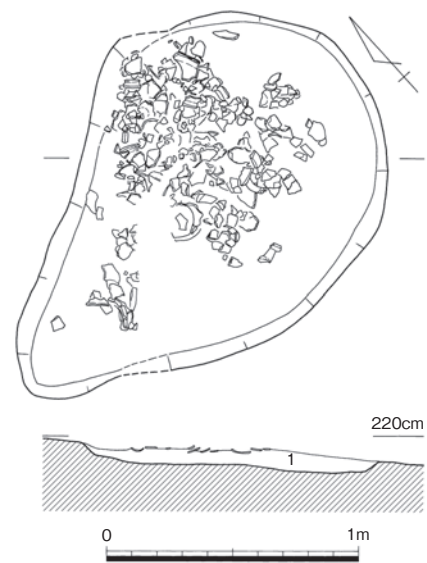


- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
基盤層・炭・焼土を少量含む

第192図 土坑107 (1/30)

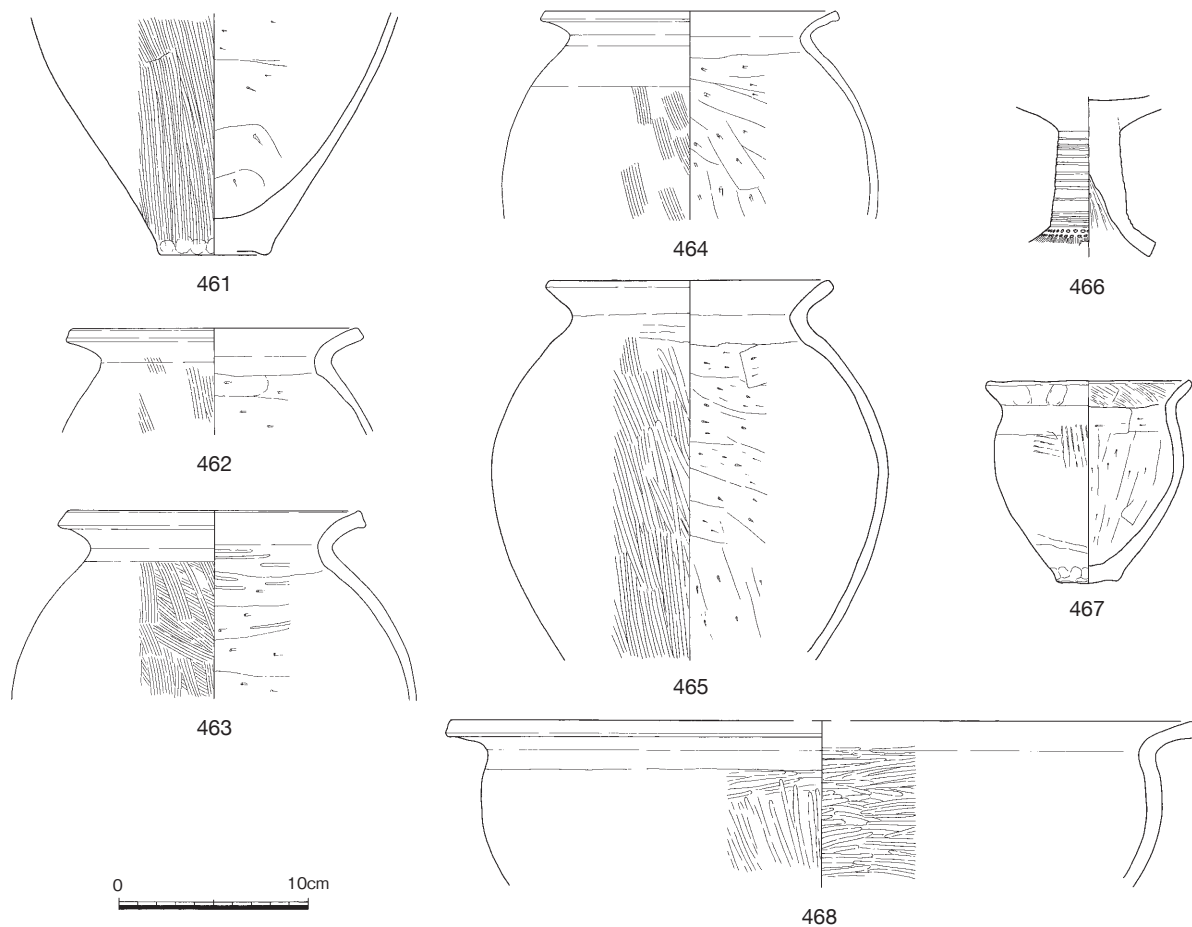


第193図 土坑108 (1/30)
・出土遺物 (1/4)



- 1 褐灰色 (7.5YR5/1) 砂質土

第194図 土坑109 (1/30)

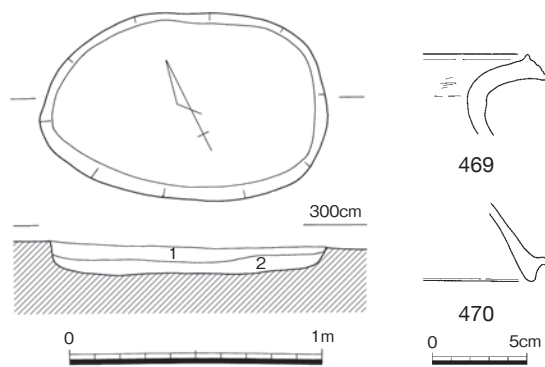


第195図 土坑109出土遺物 (1/4)

土坑110 (第164・165・196図)

40A区でも微高地の縁辺に近く先に述べた溝12のすぐ西において検出した土坑である。平面形が楕円形を呈し、規模は長軸が114cm、短軸は73cmで、深さは12cmである。

弥生土器壺の口縁部469、高杯の脚部470が出土しており、時期は、百・後・Ⅱである。 (弘田)



- 1 青灰色 (2.5Y5/1) 粘質微砂
- 2 灰白色 (2.5Y7/1) 粘質微砂

第196図 土坑110 (1/30)・出土遺物 (1/4)

土坑111 (第164・165・197図、写真38)

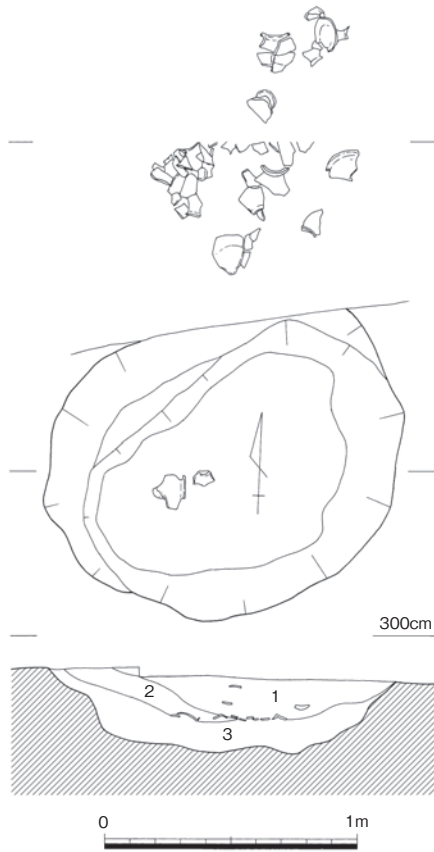
41A区の調査区北壁沿いで弥生時代の包含層を除去後の基盤層上において検出した土坑である。平面形は検出面ではやや歪な隅丸方形に近く、それより10cm下方では不定形となる。規模は長軸が143cm、短軸は114cmである。断面形は逆台形に近いが、底はやや凹凸があり、深さは34cmを測る。

堆積層は上下2層に分けられるが、このうちの上層(第1・2層)からは、炭や焼土と共に弥生土器片が数多く出土している。

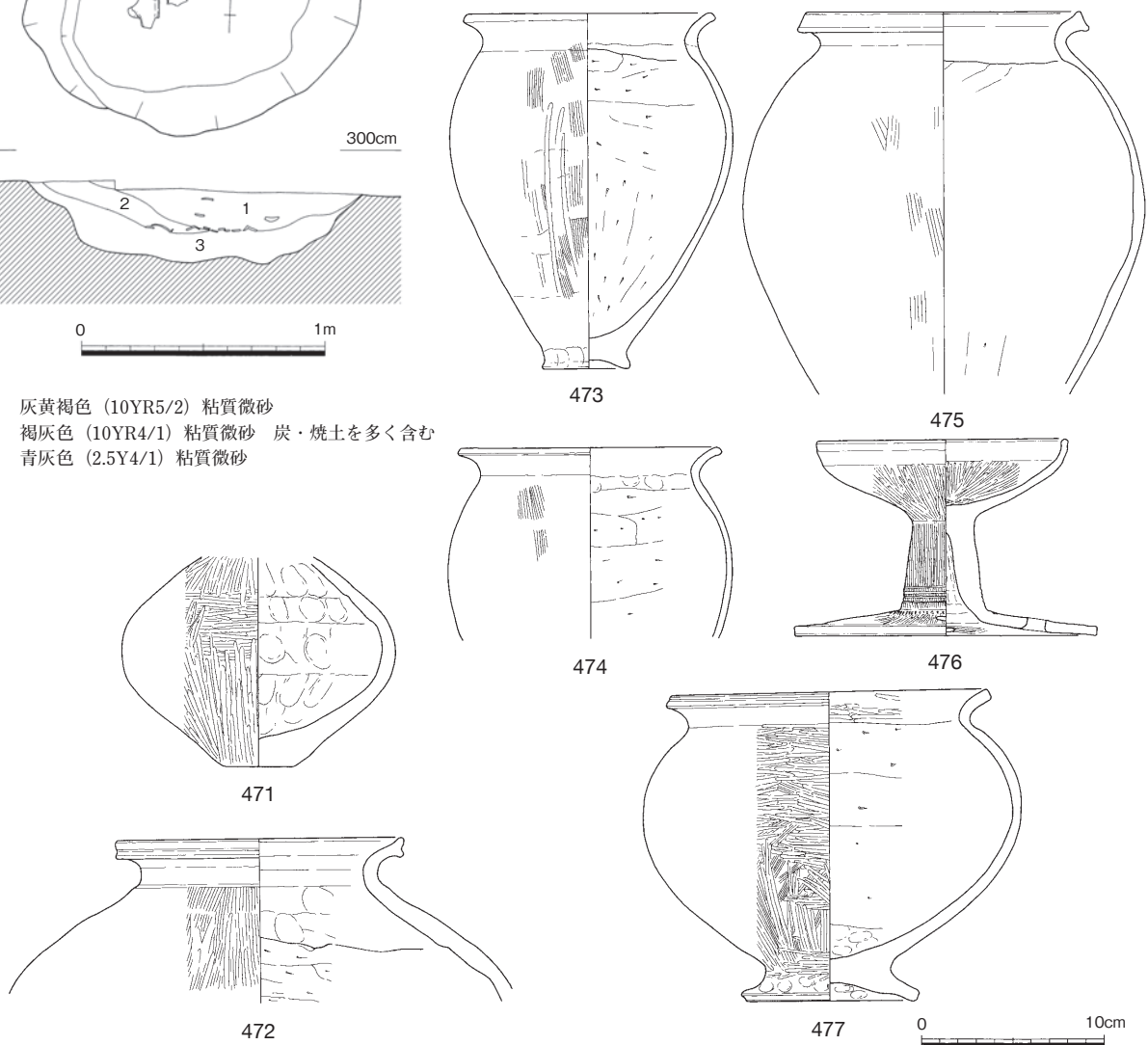
出土した遺物のうち、壺471・472、甕473～



写真38 土坑111（南から）



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂 炭・焼土を多く含む
- 3 青灰色 (2.5Y4/1) 粘質微砂



第197図 土坑111 (1/30)・出土遺物 (1/4)

475、高杯476、台付き鉢477を図示するが、このうち球形の体部を持つ広口壺の471は、弥生時代中期に位置づけられ、他と比べると明らかに古層を示すことから、この土坑への混入品と考えられる。また、甕473、高杯476、台付き鉢477は、ほぼ完形に近く復元できた。

出土遺物からみたこの土坑の時期は、百・後・Ⅱである。

(弘田)

土坑112 (第164・165・198図)

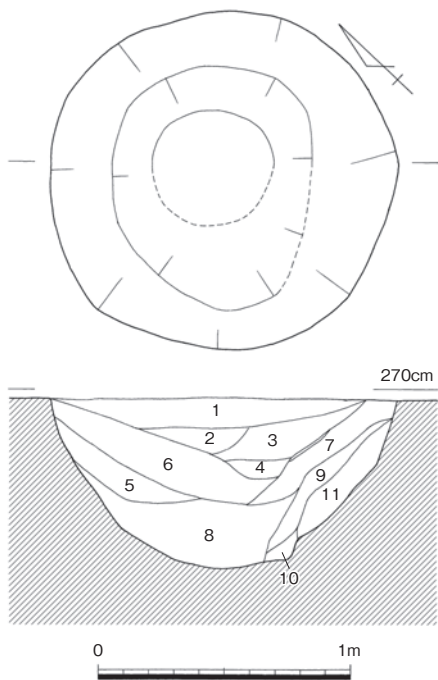
41B区の微高地上において検出した土坑である。平面形は円形を、断面は碗状を呈し、底面は平坦面をなさない。規模は長軸が136cm、短軸は132cmで、深さが74cmを測る。埋土は、ブロック状の堆積をなし、人為的に埋め戻されたと考えられる。

土器小片が出土しており、弥生時代後期の土坑と考えている。 (弘田)

土坑113 (第164・165・199・200図、写真39、図版24)

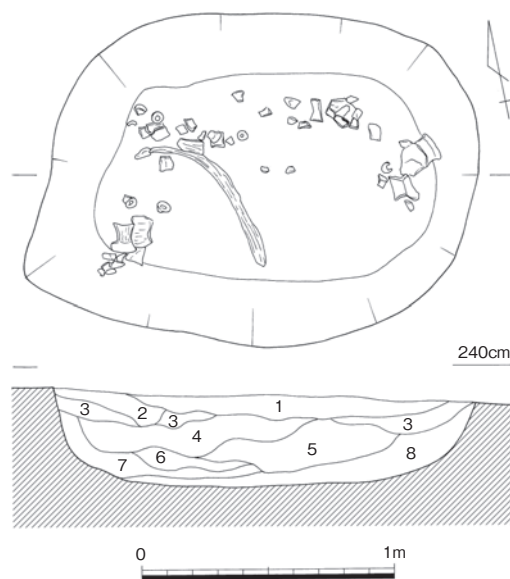
41B区において検出した土坑で、上部は後期水田層によって削平を受ける。平面形はやや隅丸の長方形を呈し、規模は長軸が170cm、短軸は130cmで、深さが37cmを測る。埋土は、ブロック状の堆積をなし、人為的に埋め戻されたと考えられる。旧微高地端を示すと考えている溝39～42より外側に位置することから、もともと低位部に位置していた可能性がある。

土坑底より、弥生土器の長頸壺478・479、台付き壺480、製塩土器481～486及び炭化材1点が出土している。これらの時期は百・後・Ⅱであり、後述する製塩炉1・2の時期を比定するうえで有力な手がかりとなる。 (弘田)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 2 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 3 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂
- 4 にぶい黄褐色 (10YR6/4) 粘質微砂
- 5 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 上層に焼土
- 6 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂
- 7 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 8 灰色 (N5/) 粘質土
- 9 褐灰色 (10YR6/1) 微砂
- 10 灰色 (N5/) 粘質土
- 11 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂

第198図 土坑112 (1/30)

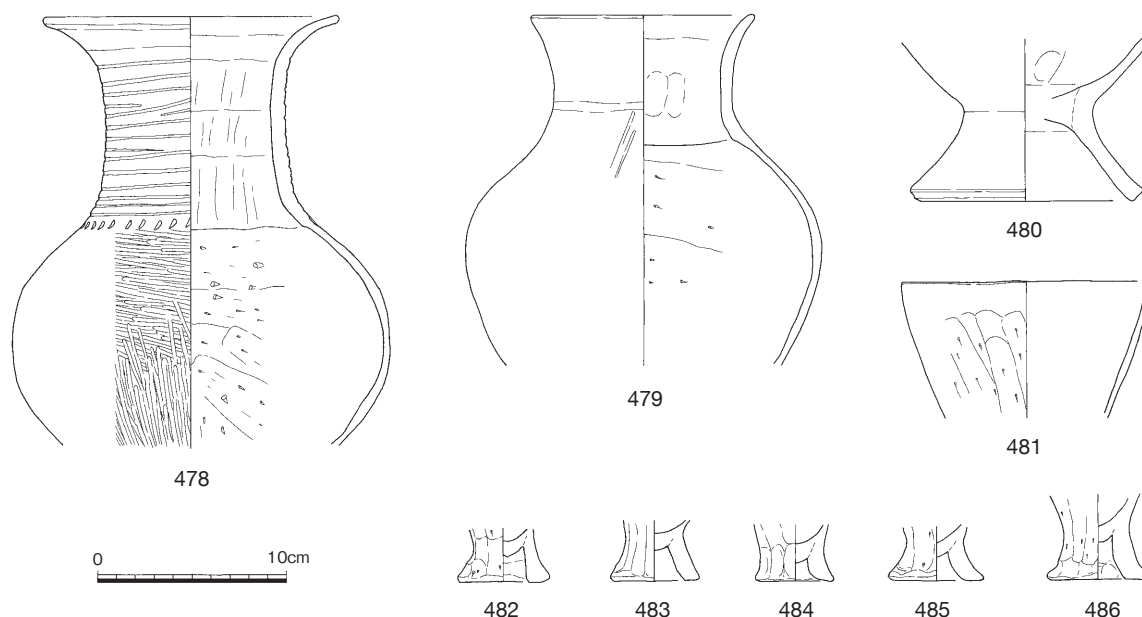


- 1 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂
- 4 褐灰色 (10YR4/1) 粘質土
- 5 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂
- 6 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
- 7 灰色 (N5/) 粘質土
- 8 灰色 (N4/) 粘質土

第199図 土坑113 (1/30)



写真39 土坑113 (南から)



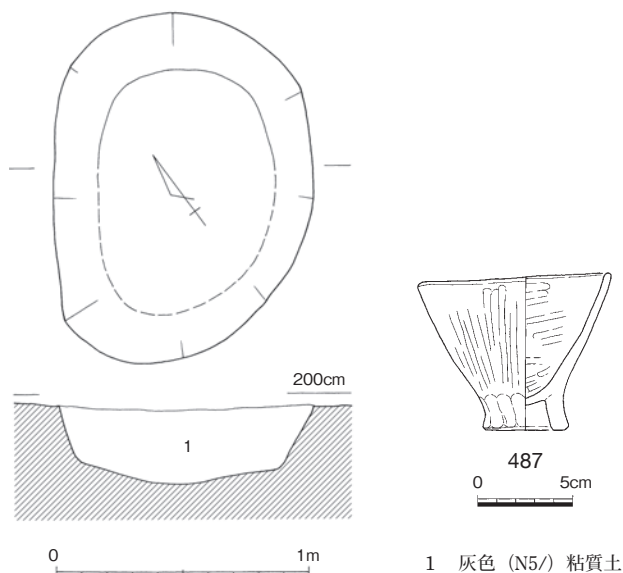
第200図 土坑113出土遺物 (1/4)

土坑114 (第164・165・201図)

41B区の中で微高地端部から東に12m離れた低位部において検出した土坑である。

平面形は、隅丸長方形を、断面形は逆台形を呈し、規模は長軸が138cm、短軸は102cmで、深さが29cmを測る。後期水田層下での検出であり、後述する微高地開墾に関わる溝群よりも外側に位置していた。ただ、水田に関わる土坑と考えるより水田開田以前の微高地上に位置し、水田開墾の時期に近いものと考えておきたい。

土坑内からは、小形の脚付き鉢487が一点のみ出土している。これからみて土坑の時期は、百・後・Ⅱに比定しておく。(弘田)



第201図 土坑114 (1/30)・出土遺物 (1/4)

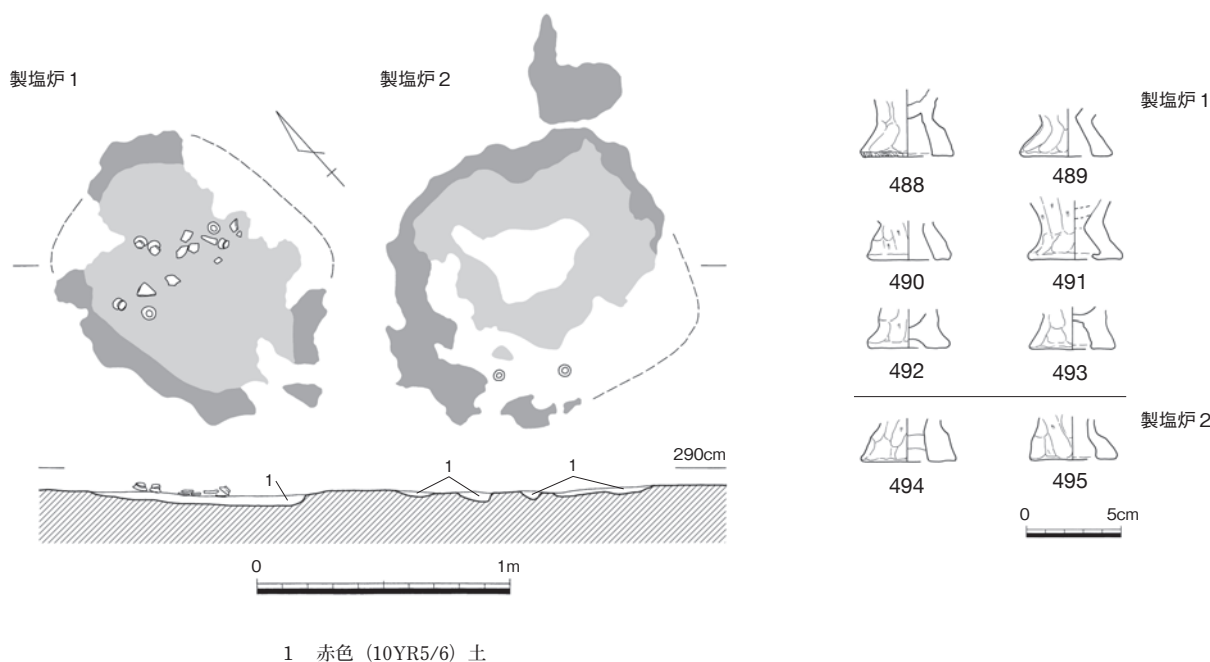
6 製塩炉

製塩炉1・製塩炉2 (第164・165・202図、巻頭図版2-2、図版24)

40C区の北西2.5mで検出したもので、微高地から南へ緩やかに下る斜面部にあたる。百原尾島5の製塩炉の北西4.2mの位置にあり、検出面の標高は280cmを測る。

保存状態は必ずしもよくないが、製塩炉1は南北119cm、東西97cm、製塩炉2は東西121cm、南北108cmの隅丸方形に復元される。いずれも、被熱面は地山が直接熱せられたもののように、橙色を呈する中央から赤色をなす周縁へと漸移的に変化する。

出土した製塩土器は百・後・Ⅱ期とされる百原尾島5の製塩炉のものと同様に、ほぼ同時期に機能



1 赤色 (10YR5/6) 土

第202図 製塩炉1・製塩炉2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

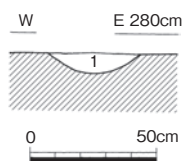
したものと思われる。

(亀山)

7 溝

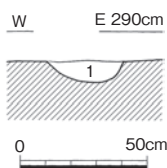
溝16 (第164・165・203図)

29B区の調査区西角の低位部に位置する溝である。弥生時代後期末となる水田4の水田層の直下で検出している。上端幅は30~42cmで、深さ3cmの溝であった。南北方向に延びる溝で、百原尾島6溝71や百原尾島3溝72などに続く溝となる。出土遺物は無いが、弥生時代後期の遺構であろう。(團)



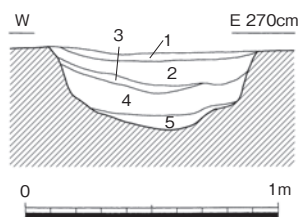
1 褐灰色 (10YR6/1) 粘性微砂

第203図 溝16 (1/30)



1 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂

第204図 溝17 (1/30)



- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘性微砂
- 2 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘性微砂にふい黄褐色 (10YR5/3) 土塊を含む
- 3 灰白色 (N7/) 粘性微砂
- 4 灰色 (N5/) 粘性微砂のラミナ
- 5 灰色 (N5/) 粘性微砂
- 灰白色 (N7/) 粘性微砂のラミナ

第205図 溝18 (1/30)

溝17 (第164・165・204図)

29C区の調査区西端の低位部に位置する溝で、溝16同様に水田4の水田層直下で検出している。上端幅30~56cm、深さ8~11cmを測る。溝16に平行する南北方向に延びる溝である。百原尾島6溝69や百原尾島3溝74などに続くものと思われる。出土遺物は無いが、検出状況などから弥生時代後期の遺構であろう。(團)

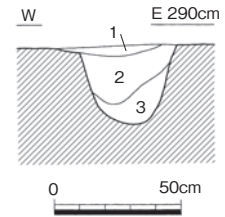
溝18 (第164・165・205図)

29C区の調査区北西角の低位部に位置する溝である。東西方向に延びる溝で、百原尾島6溝73や百原尾島3溝66に続く溝である。断面形が逆台形を呈し、上端幅60

～86cm、深さ32cmを測る。弥生時代後期末の水田層直下で検出し、中期水田を切るのので、弥生時代後期の遺構と考えられる。(團)

溝19 (第164・165・206図、図版10-3)

29・30C区の、調査区西端の低位部に位置する溝である。弥生時代後期末の水田層直下で検出している。規模は、上端幅32～43cm、深さ28cmを測る。溝16・17に平行し、南北方向に延びており、百原尾島3溝76に続く溝である。出土遺物は無いが、検出状況から弥生時代後期の溝であると考えられる。(團)



- 1 灰色 (5Y6/1) 粘質土
- 2 灰色 (5Y5/1) 粘質土
- 3 灰オリーブ色 (5Y6/2) 粘質土

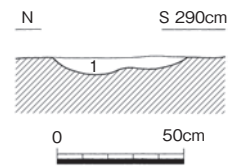
第206図 溝19 (1/30)

溝20 (第164・165・207図)

33C区の低位部に位置している。不整形な溝状の遺構であるが、溝として報告する。規模は、上端幅38～42cm、深さ3～5cmを測る。弥生時代後期末の水田層直下で検出していることから、出土遺物はないものの、弥生時代後期の遺構であると考えられる。(團)

溝21・溝22 (第164・165・208・209図、写真34、図版10-1)

34B・C、35C区の低位部に位置している。島状高まり3の上面および、東側の低位部については弥生時代後期末の水田の水田層の直下で検出している溝である。溝21の出土遺物として、甕496・497、高杯498がある。甕496は、内面はナデを施し、指頭圧痕が明瞭に見られる。胎土は褐色で、口縁部の形状からも、讃岐地域の土器が搬入されたものであると考えられる。これらの出土遺物から、溝21は百・後・IVの時期のものであると考えられる。洪水砂によって埋没していないこと、また、低位部に延びる部分については、弥生時代後期末の水田層直下で検出していることから百・後・IVの時期にも水田層や水路を改修していたことが理解できる。これらは近接する他の溝23～28についても同様の性格を持つのではないだろうか。溝21～28の溝群の中では、溝21が切り合いから一番新しい溝であることが理解できる。(團)



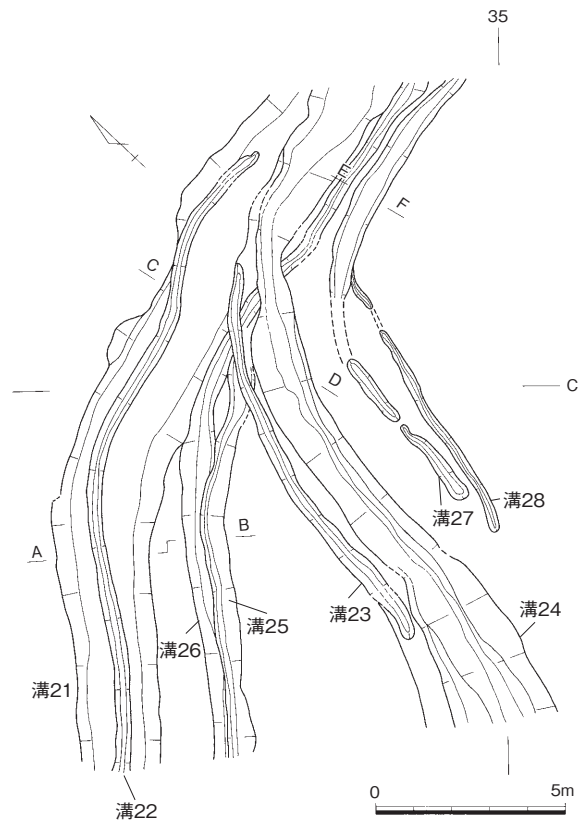
- 1 灰色 (5Y5/1) 粘性微砂

第207図 溝20 (1/30)

溝23・溝24

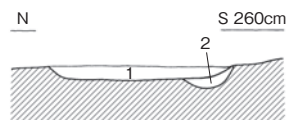
(第164・165・208・209図、写真34、図版10-1)

34B・C、35C区の低位部に位置している。弥生時代後期の水田層直下で検出している溝で、溝23が溝24を切っている。溝23は溝21によって切られているため上端幅38～54cmの規模の検出にとどまった。溝24からは、高杯の口縁部499が出土しており、弥生時代後期後半の遺構であると考えられ、溝23も弥生時代後期の範疇の遺構であろう。(團)

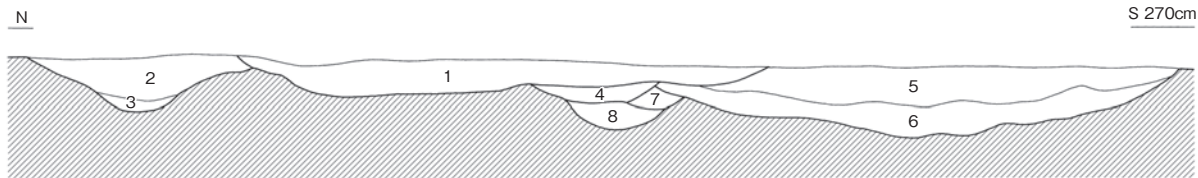


第208図 溝21～溝28位置図 (1/200)

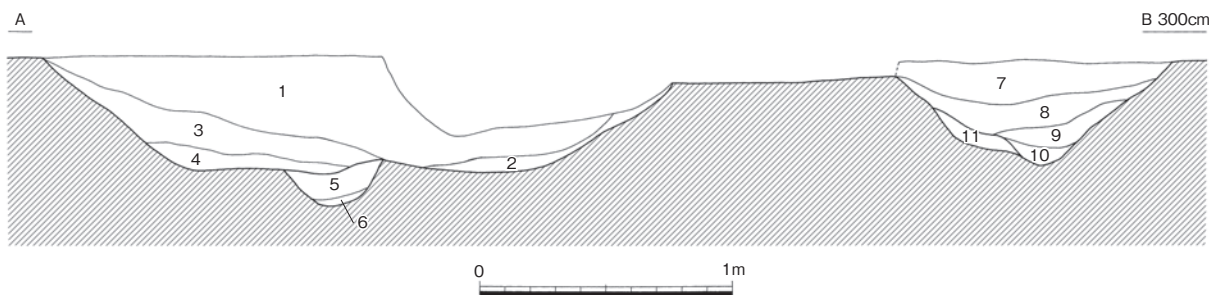
第3章 百間川原尾島遺跡



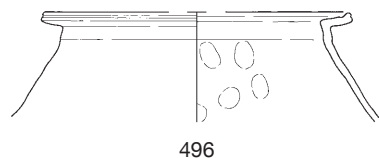
- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土 洪水砂を多く含む (溝27)
- 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土 洪水砂を含む (溝28)



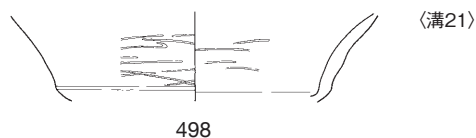
- 1 褐灰色 (10YR6/1) 粘性微砂 (溝21)
- 2 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 (溝22)
- 3 灰色 (N5/) 粘質土 (溝22)
- 4 灰色 (N4/) 粘質土 (溝23)
- 5 灰褐色 (7.5YR5/2) 微~細砂 (溝24)
- 6 灰色 (N5/) 粘質土 (溝24)
- 7 灰黄色 (2.5Y6/2) 粘性微砂 (溝25)
- 8 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘性微砂 (溝25)



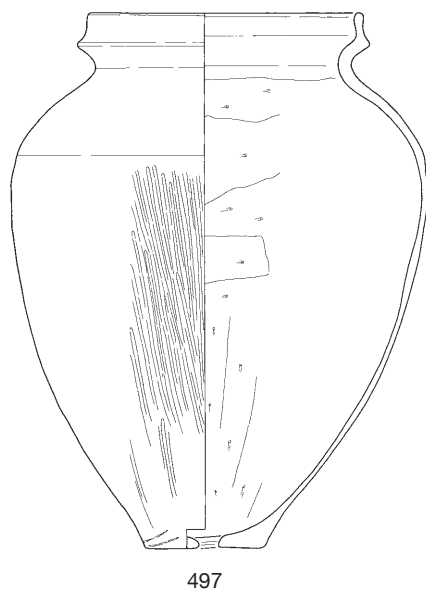
- 1 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 微砂~細砂一部ラミナ層がみられる (溝21)
- 2 明褐色 (7.5YR5/6) 粘性微砂 (溝21)
- 3 黄褐色 (10YR5/6) 粘性微砂 (溝21)
- 4 褐灰色 (10YR6/1) 粘質土 (溝21)
- 5 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土 (溝22)
- 6 褐色 (10YR4/4) 粘質土 基盤層を含む (溝22)
- 7 褐灰色 (10YR4/1) 微砂~粗砂でしまっている (溝25)
- 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 (溝25)
- 9 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘性微砂 (溝25)
- 10 灰色 (N4/) 粘質土 (溝25)
- 11 灰色 (5Y5/1) 粘性微砂 (溝26)



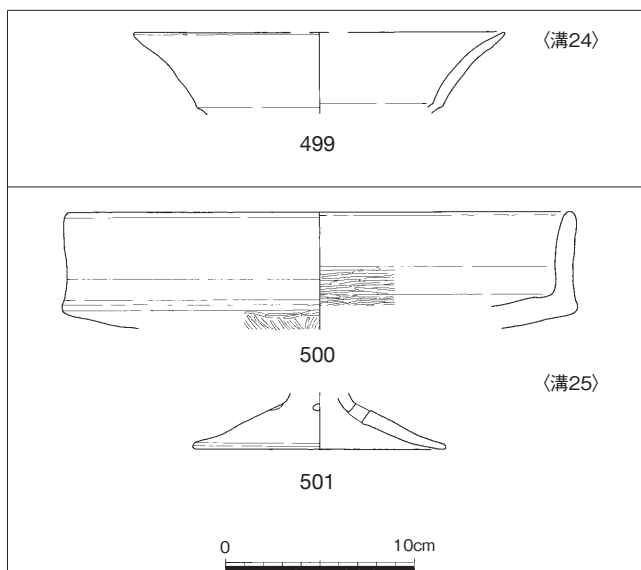
496



498



497



499

500

501



第209図 溝21~溝28 (1/30)・溝21・24・25出土遺物 (1/4)

溝25 (第164・165・208・209図、写真34、図版10-1)

34B・C、35C区の島状高まり3の上面から、東側の低位部については弥生時代後期末の水田の水田層の直下で検出している溝である。溝26を切っている。遺物は、壺500・高杯501などが出土しており、百・後・IVの時期と考えられる。(團)

溝26 (第164・165・208・209図、写真34、図版10-1)

34B・C、35C区の島状高まり3の上面から、東側の低位部については弥生時代後期末の水田の水田層の直下で検出している溝である。断面の観察から、溝23~25によって切られていることがわかる。出土遺物は無いが、検出状況から、弥生時代後期の遺構と考えられる。(團)

溝27・28 (第164・165・208・209図、写真34、図版10-1)

34B・C、35C区の低位部で、溝21~28の溝群のなかで、もっとも東に位置している。弥生時代後期末の水田層を掘り下げた直後に検出している遺構で、出土遺物はないものの、溝21~26同様に弥生時代後期の範疇に入る溝であろう。(團)

溝29 (第164・165・210図)

36C区の低位部で検出している溝である。東西方向に延びる溝で、不整形な溝状遺構である。上端幅は20~25cm、深さ3~5cmである。出土遺物はないが、弥生時代後期末の水田7の水田層を除去後に検出したことから、弥生時代後期の遺構であると考えられる。(團)

溝30 (第164・165・211図)

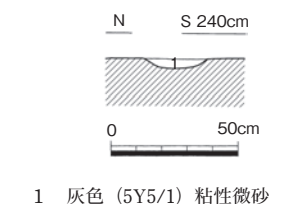
微高地上の40B区で検出した溝で、幅が26~58cm、深さは4~7cmを測る。この溝の東側の微高地の形状に並行するように南西から北東方向にかけて流走する。

土坑109・110に切られており、遺物からも百・後・IIと考えている。(弘田)

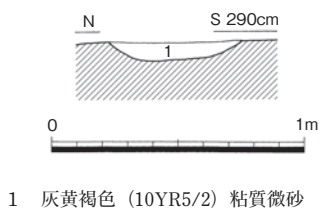
溝31 (第164・165・212図、図版14-3)

微高地上の40B区で検出した溝で、幅が37~49cm、深さは7~13cmを測る。溝32と並行するように南西から北東方向にかけて流走するが、切り合いから溝32よりは新しい。検出地点より西側で途切れるのは、微高地の高所が後世の削平を受けたためとみられる。

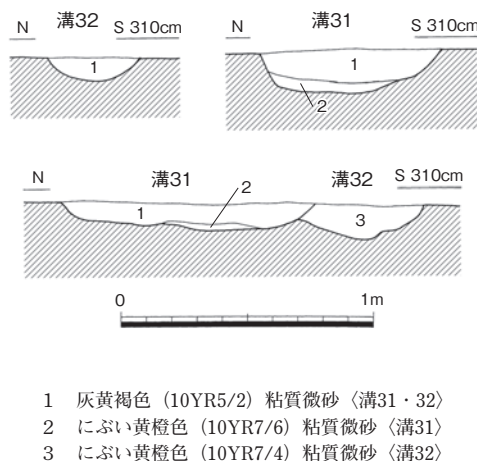
出土遺物はないが、時期は百・後・IIと考えている。(弘田)



第210図 溝29 (1/30)



第211図 溝30 (1/30)



第212図 溝31・32 (1/30)

溝32 (第164・165・212図、図版14-3)

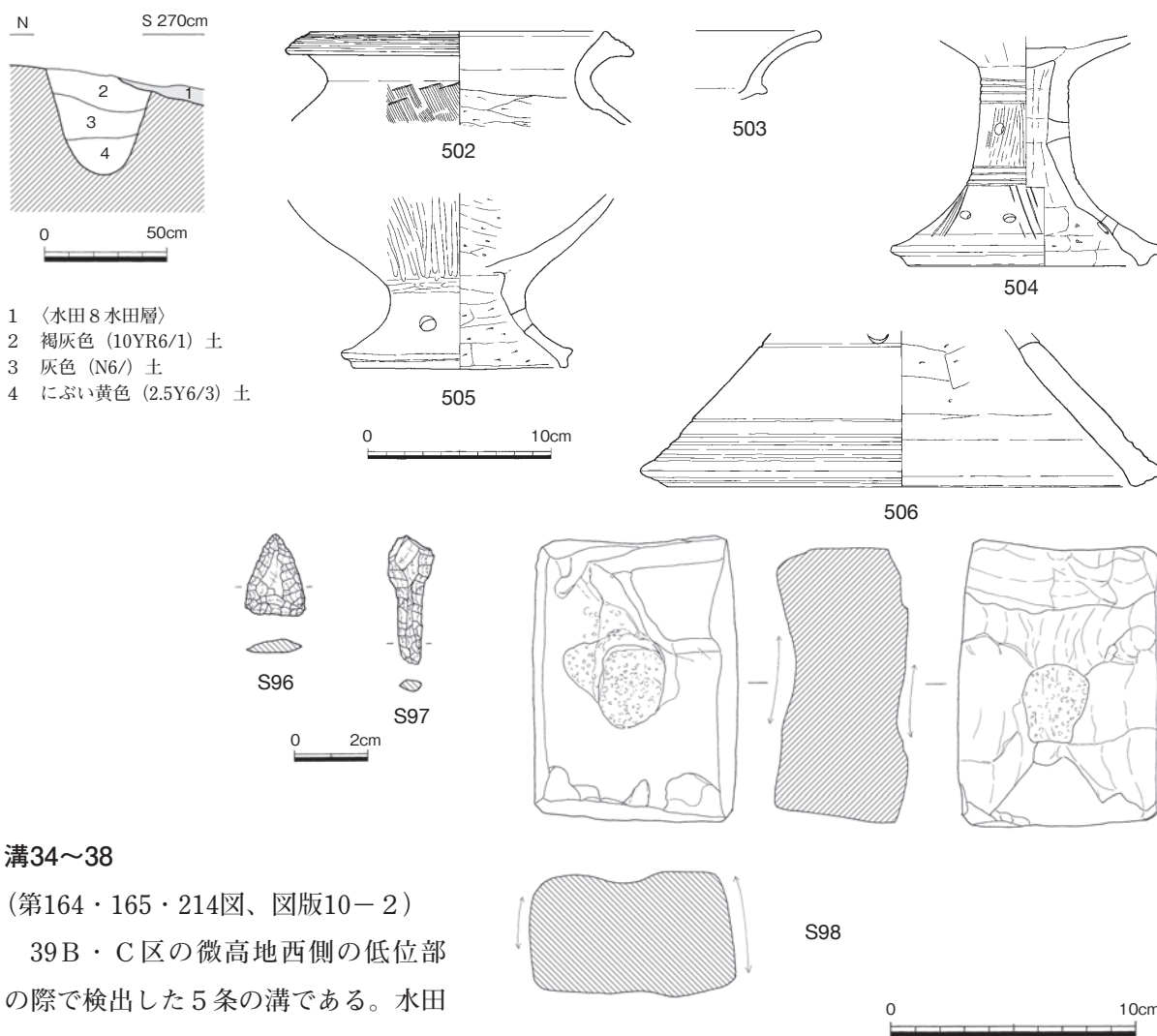
微高地上の40B区で検出した溝で、幅が72~100cm、深さは8~17cmを測る。南西から北東方向にかけて流走するが、溝31と同様西側は削平を受ける。

出土遺物から、時期は百・後・IIと考えている。 (弘田)

溝33 (第164・165・213図)

微高地縁辺部の41A~B区を地形に併行して走り、後期水田層下で検出した溝である。

出土遺物には、弥生土器502~506のほか、石鏃S96・石錐S97・凹石S98があり、この溝の時期は百・後・IIと考えられる。 (弘田)



溝34~38

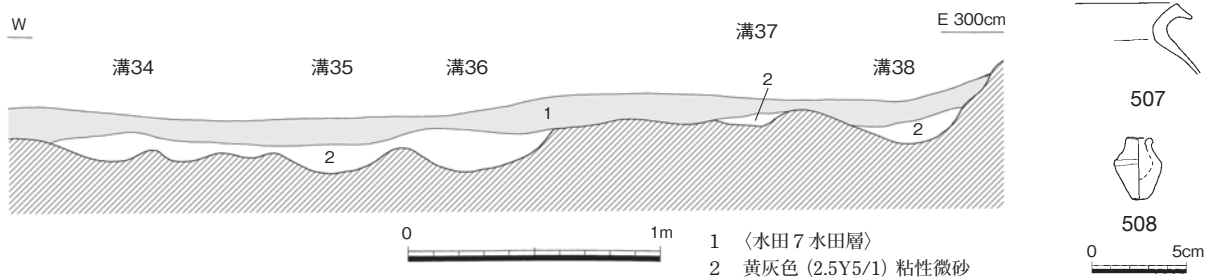
(第164・165・214図、図版10-2)

39B・C区の微高地西側の低位部の際で検出した5条の溝である。水田7の水田層を除去した後に検出している。溝の底面には凹凸が見られ、溝34~36は、壁面の土層観察から一連のものと考えられる。このように微高地に沿って低位部に巡る底面に凹凸のある溝は、微高地を水田として開削する際の痕跡と考えられているものである。遺物は、一番西側の溝34から出土している。甕507とミニチュア壺508がある。時期は、これらの遺物からも百・後・IIであるとされる。

第213図 溝33 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

溝39~42 (第164・165・215図)

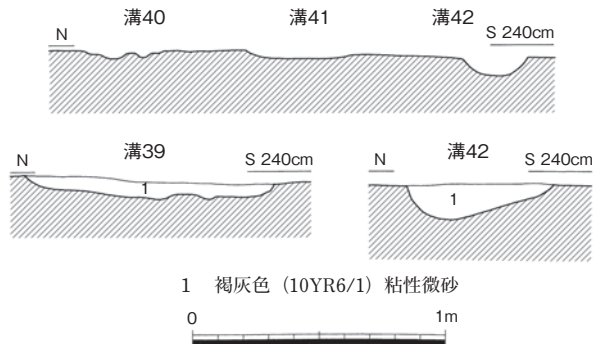
41A~B区において後期水田層直下で検出した溝群であり、微高地縁辺部の地形に併行して走る。



第214図 溝34～38 (1/30)・溝34出土遺物 (1/4)

溝39～41は、平・断面形とも不定形で、20～30cm程の凹みが連続したような状況を呈している。一方、溝42は断面「U」字形の明瞭な掘り込みをなす。

溝39～41については、微高地端部において水田を開墾した際に使用した鋤など工具の痕跡と考えている。溝42については、溝33と供に排水や区画を意図したものであろうか。(弘田)

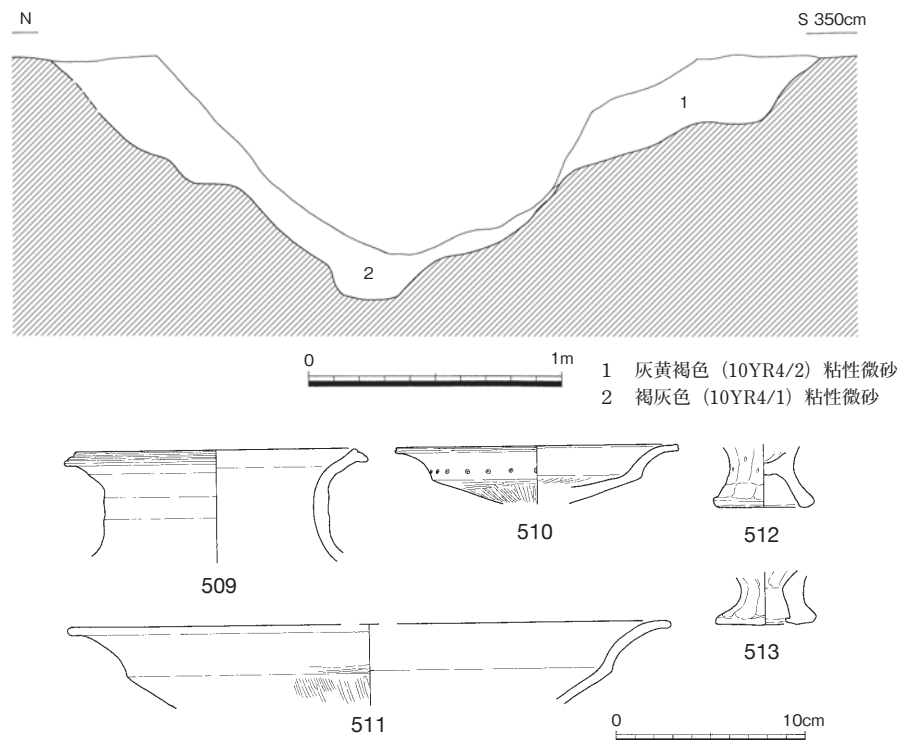


第215図 溝39～溝42 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝43 (第164・165・216図)

39B・C区の微高地上で検出した、百原尾島5溝61・62に続く溝で、上層は洪水砂で埋没している水路3 (第238図) である。上層の水路との関係から、微高地の南側の水田へ水を供給するための水路の機能をもつものであるが、後期末の水田の畦畔が埋没後の上面に作られることが確認されている

ため、溝として報告する。水田や水路の維持管理の実態をしるうえで、重要な遺構といえる。本来なら2条の溝であるが、1条として調査している。北側のテラス面となっている部分が百原尾島5溝61に続くものである。出土遺物には、壺509、高杯510・511、製塩土器512・513などがある。時期は、出土遺物から百・後・Ⅱと考えられる。



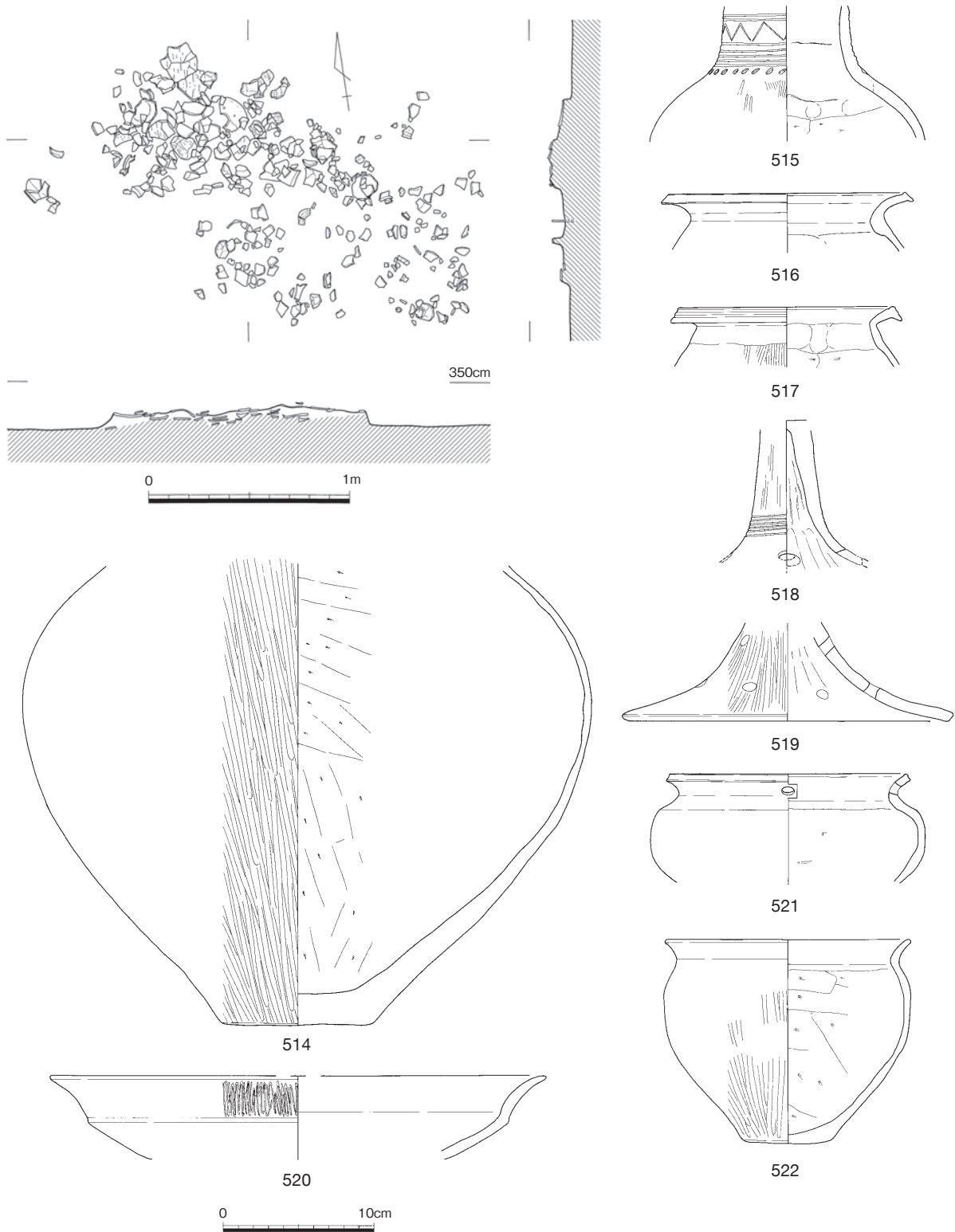
第216図 溝43 (1/30)・出土遺物 (1/4)

(團)

8 土器溜まり

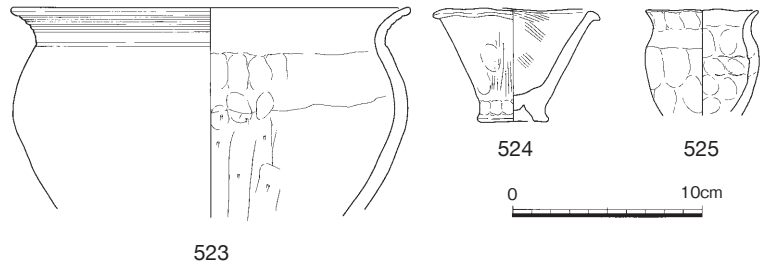
土器溜まり2 (第164・165・217・218図)

微高地の39B区に位置する土器溜まりで、およそ、2×1.5mの範囲でまとまって土器が出土している。特に北西部で多くの土器が検出できた。検出したレベルはおよそ335cmで、当時の生活面より標高



第217図 土器溜まり2 (1/30)・出土遺物① (1/4)

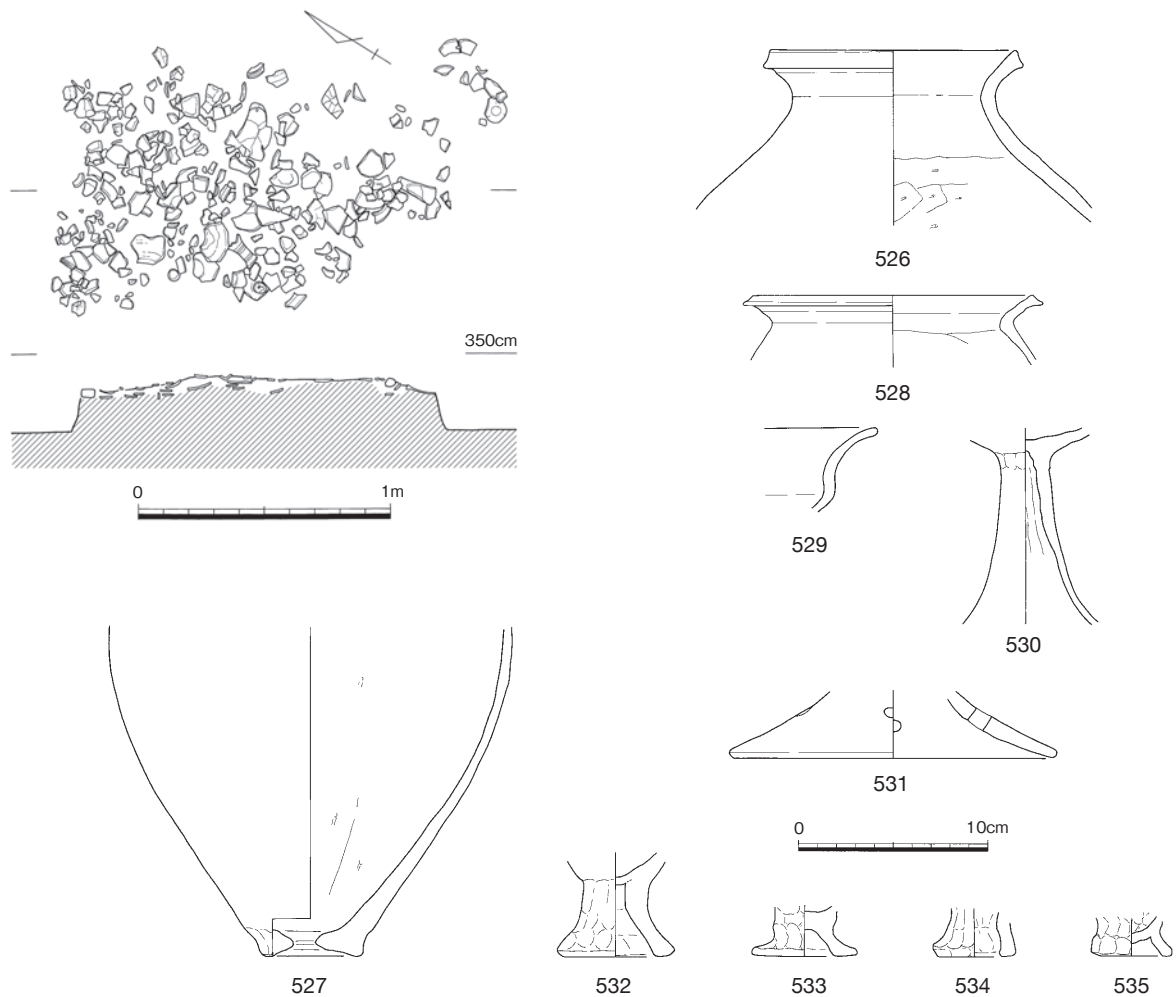
が低いところで検出しているため、本来はたわみや浅い土坑などに廃棄されていた可能性がある。土器の出土量は、整理箱におよそ5箱だが、完形で出土したものや、復元できたものはなかった。図示できた土



第218図 土器溜まり2出土遺物② (1/4)

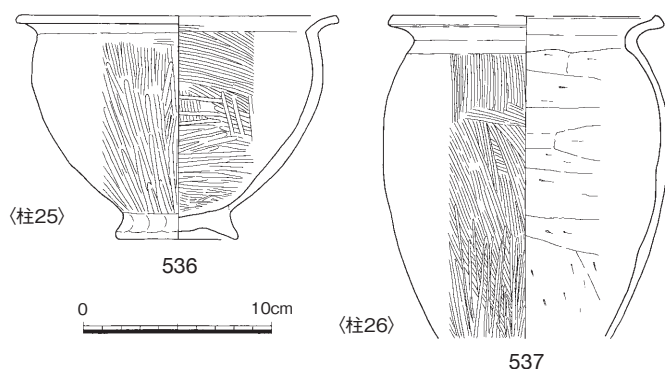
器は、壺514・515、甕516・517、高杯518～520、鉢521～524、ミニチュア甕525がある。ミニチュア甕525は、内外面の調整はなく、指頭圧痕が明瞭に観察できるが、比較的丁寧に作られている。遺構の時期は、周辺の遺構の時期や検出状況、遺物の特徴から百・後・Ⅱであると考えられる。(團) 土器溜まり3 (第164・165・219図)

微高地の39B区に位置する土器溜まりで、土器溜まり2の東側に位置している。2×1mの範囲で土器がまとまって出土した。検出した標高は土器溜まり2とほぼ同じである。竪穴住居3の南端の一部を切っている。出土遺物には、壺526、甕527・528、高杯529～531、製塩土器532～535がある。532は、他のものと比べ脚部が長い。遺構の時期は、百・後・Ⅱと考えられる。(團)



第219図 土器溜まり3 (1/30)・出土遺物 (1/4)

9 柱 穴

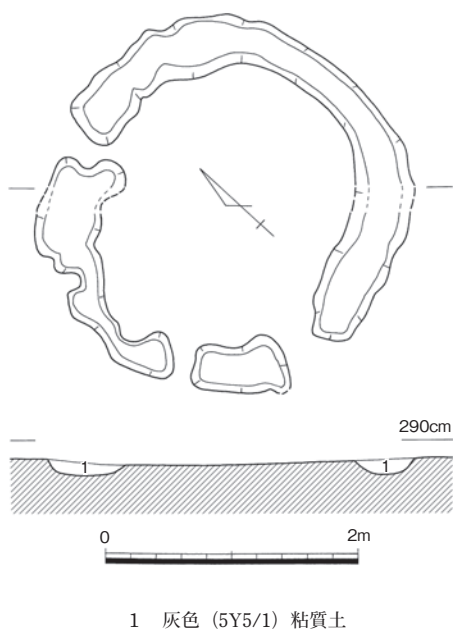


第220図 柱穴出土遺物 (1/4)

柱穴出土遺物 (第220図)

弥生時代後期のものと考えられる柱穴の数は50本程度である。微高地に散在しているが、一部は低位部にも見られる。低位部の柱穴は主に検出面から、微高地のものは出土遺物から時期を決定している。このうち残存状況のよかった柱穴20・21の土器を図示しているが、多くの柱穴の遺物は、細片・少量での出土であった。(團)

10 島状高まり



第221図 島状高まり 1 (1/60)

島状高まり 1 (第164・165・221図)

洪水砂で埋もれた水田の耕作土層直下、海拔275cmで検出した環状にめぐる溝で、30C区の南西2.6mに位置する。

幅18~52cm、深さ6cmを測る溝の側縁には出入りが見られ、その底面も凹凸が著しい。また、溝の間は所どころ盛り上がり、不連続となっている。こうしたことから、区画等の意図をもって掘削されたものとは考えにくく、開田に際して削り残された島状高まりの周囲に残る掘削痕跡と思われる。

これにより想定される島状高まりの規模は東西2.4m、南北1.7mとすこぶる小さく、それゆえに次の段階では完全に削平され水田化されたのかもしれない。

出土遺物がないため正確な時期を知りえないが、層位関係からみて溝17・19と近似した時期を想定したい。

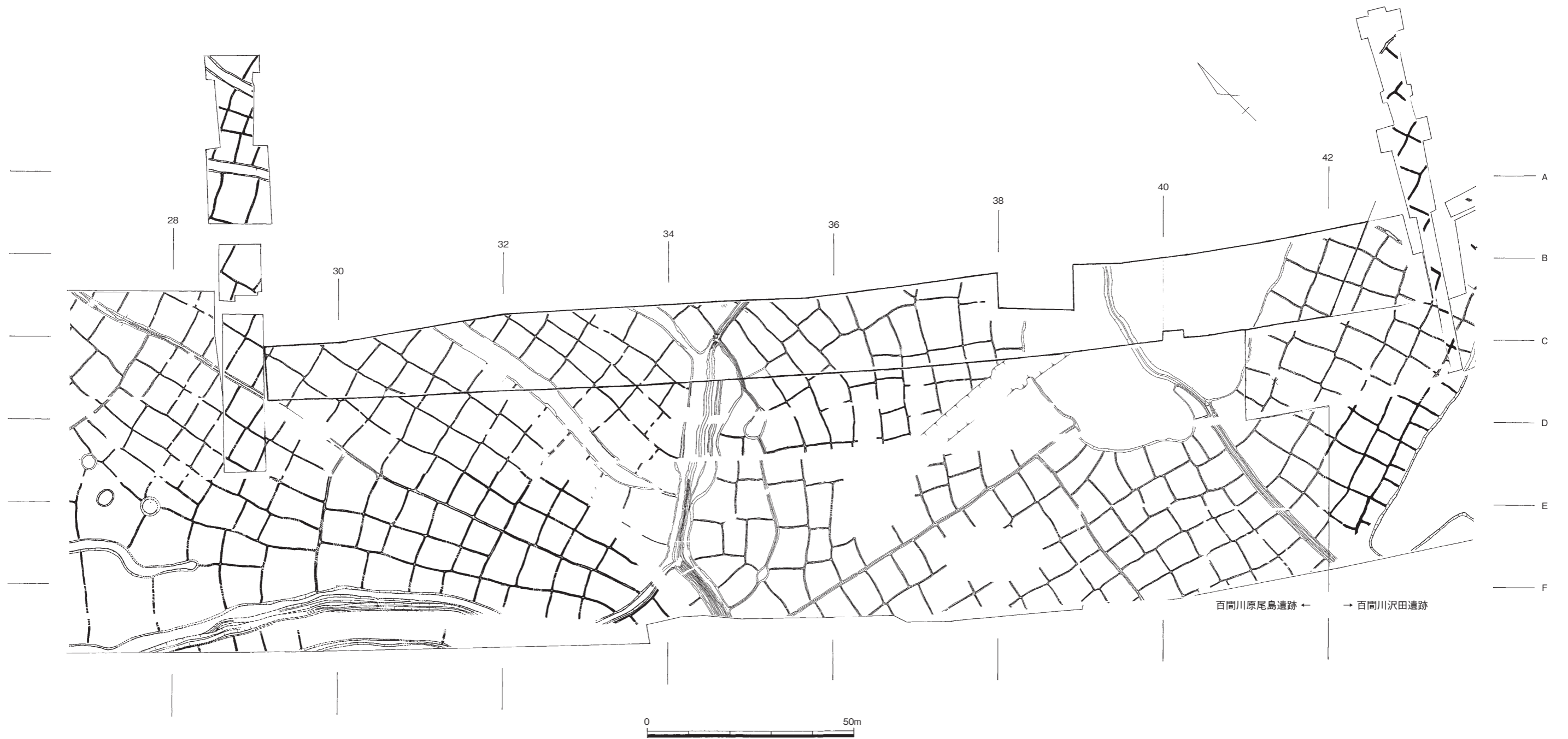
(亀山)

11 洪水砂埋没遺構

(1) 微高地西側の水田関連遺構

水田 4 (第223・224図、図版9-1)

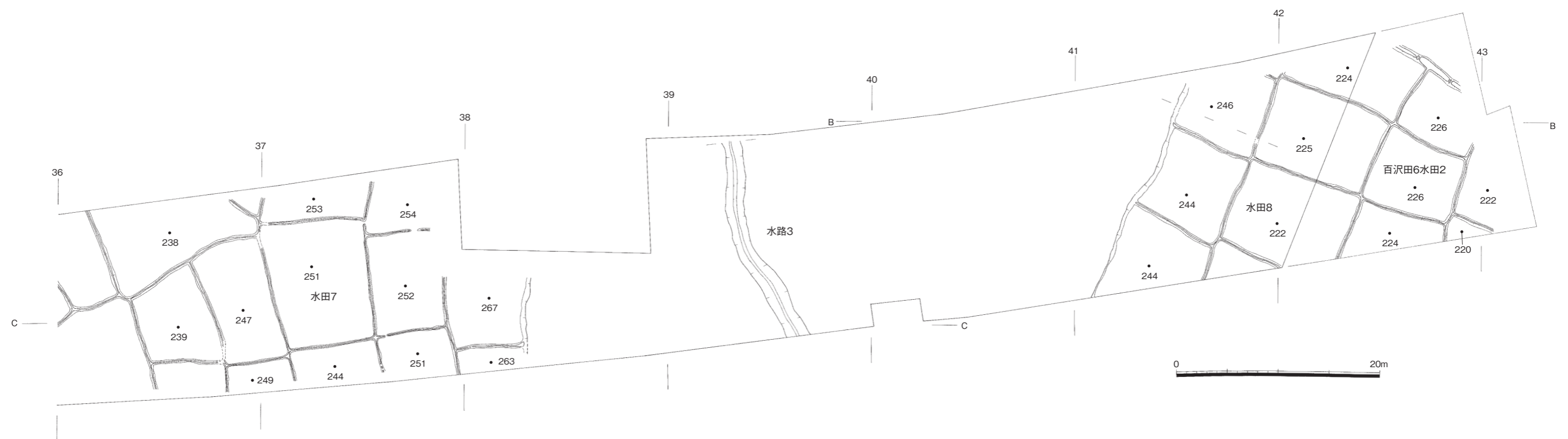
調査区の西、31ラインの島状高まり2より西で検出した水田である。調査区内の低位部全域に水田は広がっていることから、島状高まりを境として、水田4~7と分けて説明する。水田4は、過去の調査成果を合わせて見ると、東を島状高まり2、西を調査区外に南北に延びる大畦畔(百原尾島2大



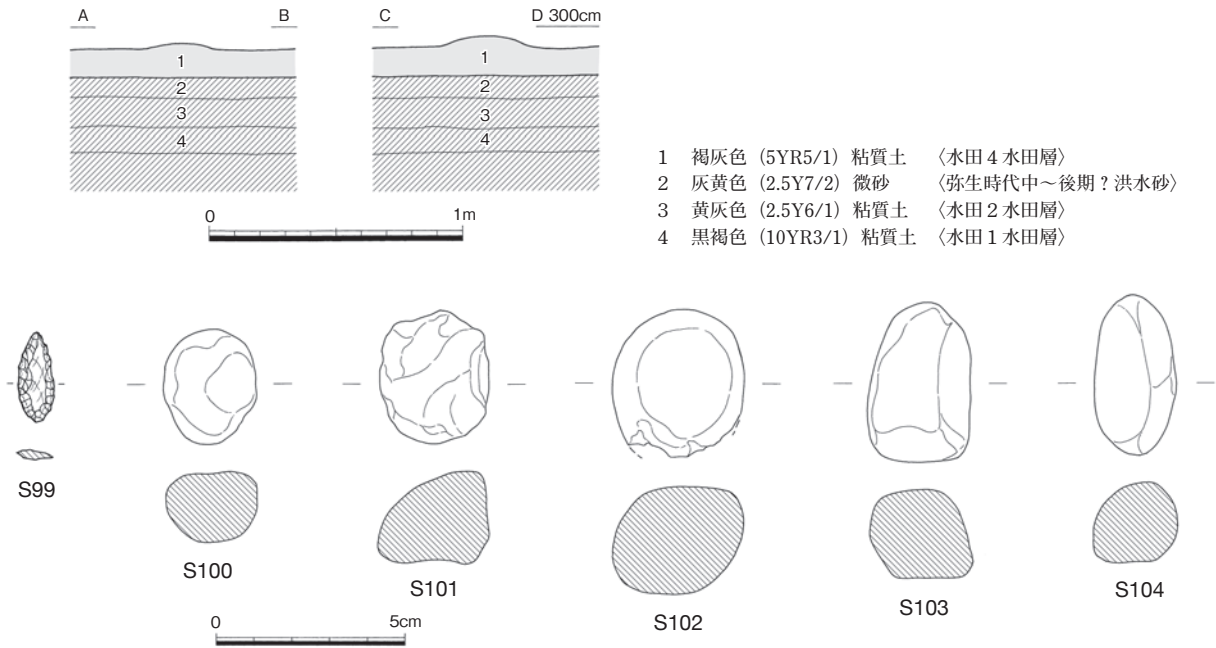
第222図 洪水砂埋没遺構全体図 (1/1,000)



〔・数字〕は水田面の標高 (cm)



第223図 洪水砂埋没遺構配置図 (1/400)

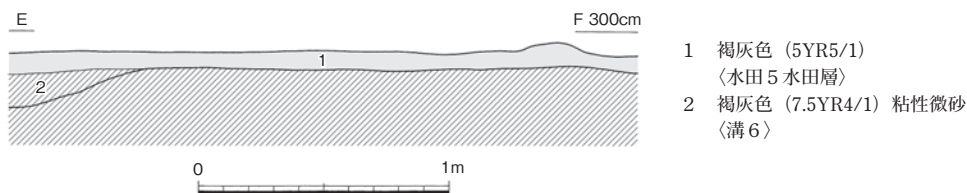


第224図 水田4 (1/30)・出土遺物 (1/2)

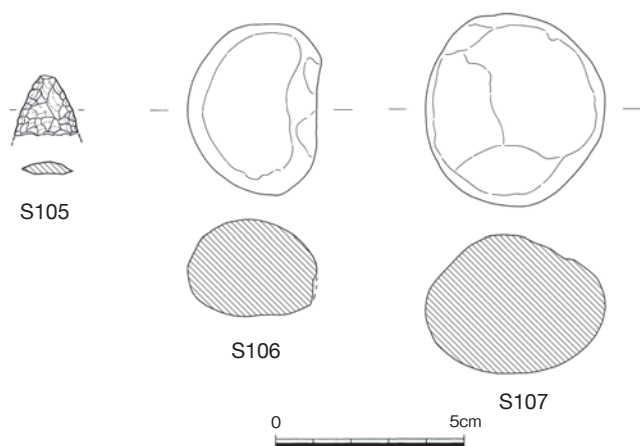
畦畔2・4)に、南を大畦畔(百原尾島2大畦畔5)に、大きく区画された水田の一部であることがわかる。調査区内の水田面の標高は、西端が291~293cmであり、差はあまりみられない。南側の調査区(百原尾島3川内調査区)でも289~292cmであることから、この区画内の田面の高低差はあまりなかったと考えられる。調査区内および周辺からは水の取り入れる部分がないため、調査対象外の北側から、水が供給されると考えられる。おそらく土層断面の観察では、水田層は褐灰色粘質土の単一層としか観察できなかった。水田の区画は、1辺が約7~10m、面積約49~85㎡となり、比較的正方形の整った形状のものが多い。(團)

水田5 (第223・225・226図、巻頭図版3-1、図版9-1)

調査区の32ラインから34ライン付近の水田である。島状高まり2と島状高まり3の間を水田5として報告する。この2つの島状高まりは、南側で合流(百原尾島2三ノ坪調査区)しており、島状高まりによって南北に、細長く大きく区画された水田であることがわかる。水田の区画は、1辺が約4.5~10m、面積38.5~75.2㎡となり、大区画が細長い形状であることに規制されているために、1つの区画あたりの形状は、正方形や長方形などといったばらつきが見られる点が特徴的である。田面の標高は290~295cmで北側の田面が高く、南側に低い。島状高まり2が島状高まりと合流する部分で水口が開いている(百原尾島2三ノ坪調査区)ため、調査対象外になる北側のどこかの地点から水を取り



第225図 水田5 (1/30)



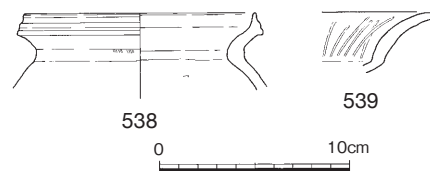
第226図 水田5出土遺物 (1/2)

面のみの検出にとどまっている。水田6の水田面の標高は270～275cmである。大畦畔と島状高まりの接点の部分に水口が開口している。水田6の余分な水を、水路1または水路2へ排水していたと考えられる。水田層からは、甕538、高杯539が出土しており、これらの遺物は百・後・Ⅱの特徴を示している。水田6の水田層を除去して検出した溝21～28から出土している土器は百・後・Ⅳの時期であるため、水田層から出土した土器は、混入したものであると考えられる。水田6は南側を大畦畔によって区画されているが、この大畦畔は第228図の第5～7層の3層に分類でき、幅約90cm、高さ32cmの、断面をカマボコ状に盛り上げて成形されている。断面の観察からは、この大畦畔を作った後に水田7の小畦畔が第228図の第3・4層を盛り上げて成形していることがわかり、計画的にこの2つの畦畔と水路がつくられていることが理解できる。(團)

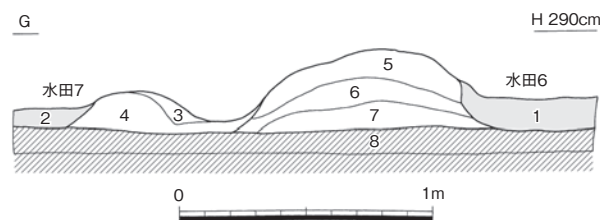
入れ、余った水を南端の水口から島状高まりの南側の区画へ排水しているものと考えられる。土層断面の観察からは、小畦畔と水田層の分層はできなかった。弥生時代前期～後期にかけての遺構の基盤層直上に、水田層がみられる。遺物は、水田層からは、石鏃S105と投弾S106・S107などが出土している。(團)

水田6 (第223・227・228図、巻頭図版3-1)

調査区の34ライン、調査区の北側に位置する水田で、島状高まり3と大畦畔によって区画されているものを水田6とする。わずか4

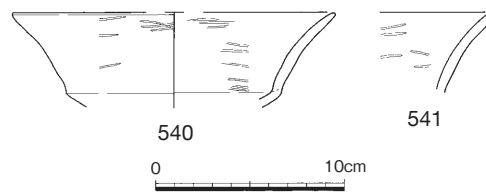


第227図 水田6出土遺物 (1/4)



- | | |
|---|-------------------------------|
| 1 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 <水田6 水田層> | 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 |
| 2 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 <水田7 水田層> | 6 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性微砂 |
| 3 褐灰色 (10YR4/1) 粘性微砂 | 7 にぶい黄褐色 (10YR5/4) 粘性微砂 土器を含む |
| 4 褐色 (10YR4/4) 粘性微砂 黄灰色粘性微砂 (2.5Y6/1) の土塊含む | 8 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘性微砂 <基盤層> |

第228図 水田6・7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

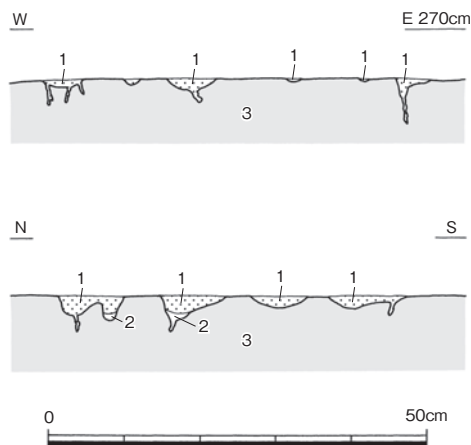


水田7 (第223・228～232図、写真40、巻頭図版3-1・3、図版11-3)

35ラインから38ライン付近の水田で、西側を島状高まり3と大畦畔、東側を微高地によって区画される水田を水田7として報告する。この水田は、大きく見ると西側を大畦畔(百原尾島2大畦畔9、百原尾島4川内・三ノ坪調査区大畦畔)に、東側を微高地に、南側を大畦畔(百原尾島2大畦畔10・



第229図 水田7稲株痕跡 (1/80)



- 1 浅黄橙色 (7.5YR8/3) 微～細砂 〈洪水砂〉
- 2 褐灰色 (7.5YR6/1) 粘性微砂 洪水砂を多く含む
- 3 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘性微砂 〈水田7水田層〉

第230図 水田7稲株痕跡断面 (1/10)

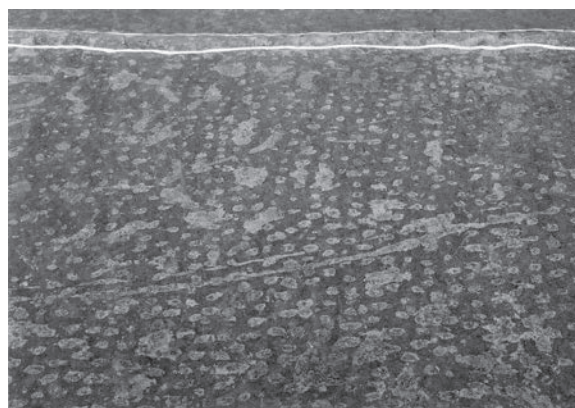
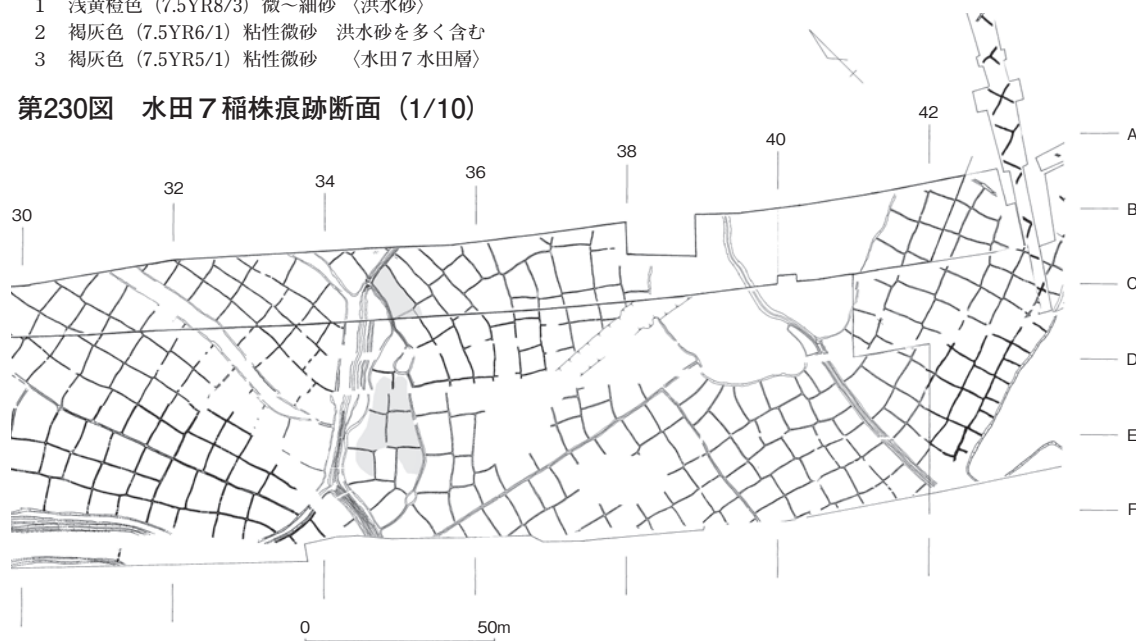


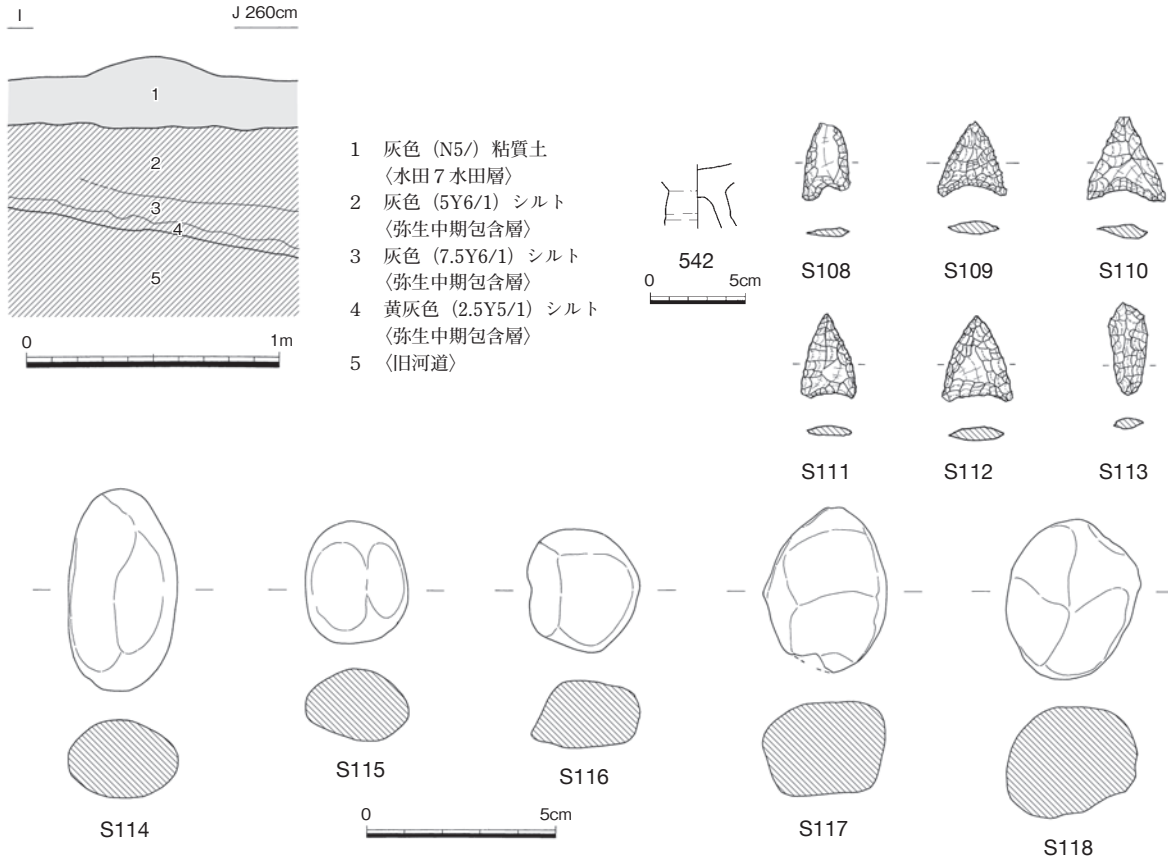
写真40 稲株痕跡検出状況 (東から)



第231図 稲株痕跡集中検出場所 (1/2,000)

12) によって区画されている。検出された部分で一辺が90mを越える大きな区画の北側を調査したことになる。水田の区画は、他と比べると、あまり整った形状ではない。また、水田面の標高は267～235cmと、30cm以上の高低差がある。これについては、水田7の下層には旧河道が走っていることに起因する。旧河道の堆積土が土圧によって沈むことで、地形にたわみが生じたために、区画の形状に影響を与えたと考えられる。36ライン上の区画が方形でなく、多角形を呈している部分が旧河道の直上にあたり、水田が作られた時点でも地形がたわんでいた可能性があり、また標高も一番低い。標高に関しては、後世にさらに土圧によって沈んだことが考えられる。

水田7の西端の1区画からは、洪水砂が詰まった長軸10cm、短軸5cm程度の楕円形の穴が検出された。この穴は、南北方向に長軸を揃えて、東西方向に5～7個が一直線に並んでいる。このような穴は、昭和56年の調査で初めて検出されて以降、弥生時代後期水田の所々で見つかったが、集中して見つかったのが、今回の水田7とその南側に位置する水田である。これらは稲株痕跡と考えられており、整然と並んでいる状況から田植えがすでに行われていたとされている。また、同じく洪水



第232図 水田7 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

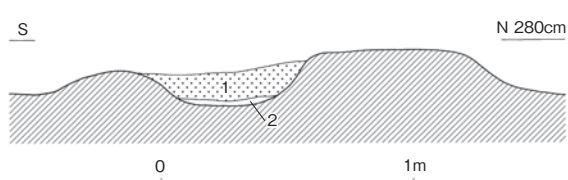
砂が詰まった南北方向に伸びる2条の幅1～5cm、深さ1～3cmの溝があり、何らかの農耕具の、東側の畦畔に沿って南北に伸びる長軸が20～25cmの大型のものは、人の足跡の痕跡である可能性が考えられる。(團)

水路1 (第223・233図、写真41、図版11-1)

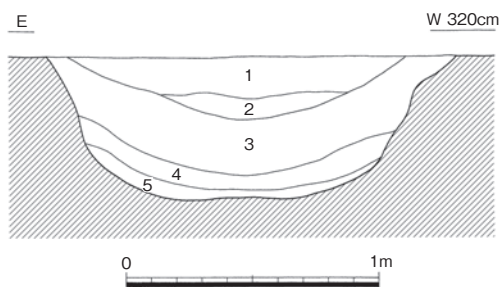
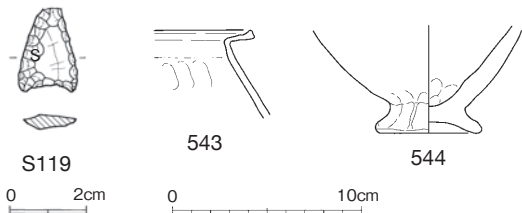
低位部から微高地上に伸びる水路である。弥生時代後期の溝25・26を踏襲していると考えられる。微高地部分では、上端幅115～184cm、深さ35～59cm、低位部では、掘削してつくられた水路ではなく、大畦畔と小畦畔で挟まれた間を水路として利用しているもので、幅62～90cm、深さは小畦畔の上面からで、9～12cmを測る。低位部の部分では大半を洪水砂で埋没している。微高地部分は、洪水砂で埋没していないが、百原尾島2・4などの報告書に水田関連遺構として掲載されていることと、水路の方向性から微高地部分の水路との関連性が強いと判断して、水路1として報告するものである。出土遺物には、甕543と鉢544、石鏃S119が出土している。このうち、甕543は、胎土が褐色を呈しており、形状からも讃岐系の甕である。時期は百・後・IVであろう。(團)

水路2 (第223・234図、写真41、図版11-1)

34C区に位置する溝で、水路1が低位部から微高地部分へさしかかる部分から南に分岐している水路を水路2として報告する。水路2は、西側を島状高まり3、東側を小畦畔によって挟まれた部分を利用して作られているもので、上端幅62～80cm、深さ4～12cmを測る。埋土は洪水砂の単一層である。出土遺物は無い。洪水砂のみで埋まっていることと、下層に百・後・IVの時期の溝43があることなどから、百・後・IVになって作られた可能性が考えられる。(團)

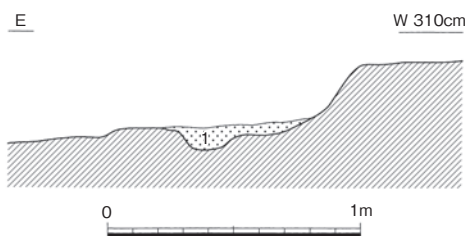


- 1 浅黄色 (2.5Y7/4) 細～粗砂 (洪水砂)
- 2 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質土



- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘性微砂
- 2 褐灰色 (7.5YR6/1) 微砂
- 3 灰色 (N7/1) 粘性微～細砂と浅黄橙色 (10YR8/3) 微砂のラミナ層で中央下部に灰色粘性微砂がたまる
- 4 灰色 (N7/) 粘性微～細砂と浅黄橙色 (10YR8/3) 微砂のラミナ層で中央部分に灰色粘性微砂が多くたまる
- 5 灰色 (N7/) 粘性微～細砂と浅黄橙色 (10YR8/3) 微砂のラミナ層

第233図 水路1 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)



- 1 浅黄色 (2.5Y7/4) 細～粗砂 (洪水砂)

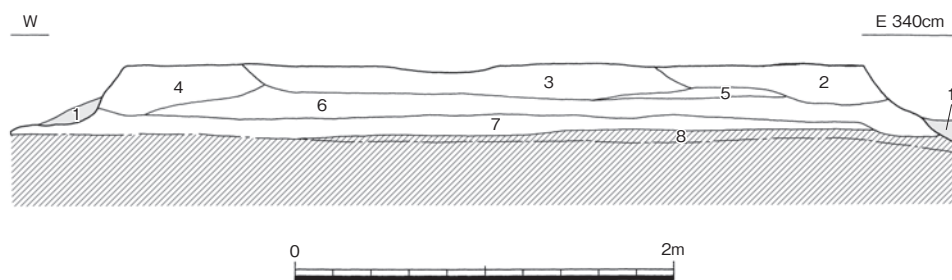
第234図 水路2 (1/30)



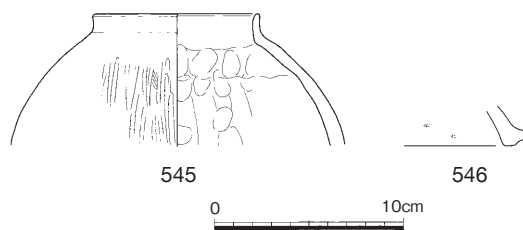
写真41 水路1・2 (南西から)

島状高まり2 (第223・235図、図版11-2)

31ラインから33ラインにかけて延びる島状高まりで、百原尾島3川内調査区島状高まり・百原尾島



- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) ～褐灰色 (10YR6/1) 土 (水田4・5水田層)
- 2 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 土
- 3 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 土 マンガン粒含む
- 4 黄褐色 (2.5Y5/3) 土
- 5 灰黄褐色 (10YR6/2) 土
- 6 灰黄褐色 (10YR5/2) 土
- 7 にぶい黄橙色 (10YR6/4) 土
- 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 土 マンガン粒含む

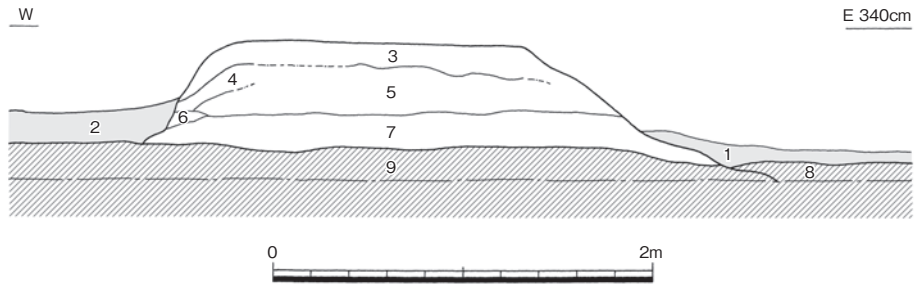


第235図 島状高まり2 (1/40)・出土遺物 (1/4)

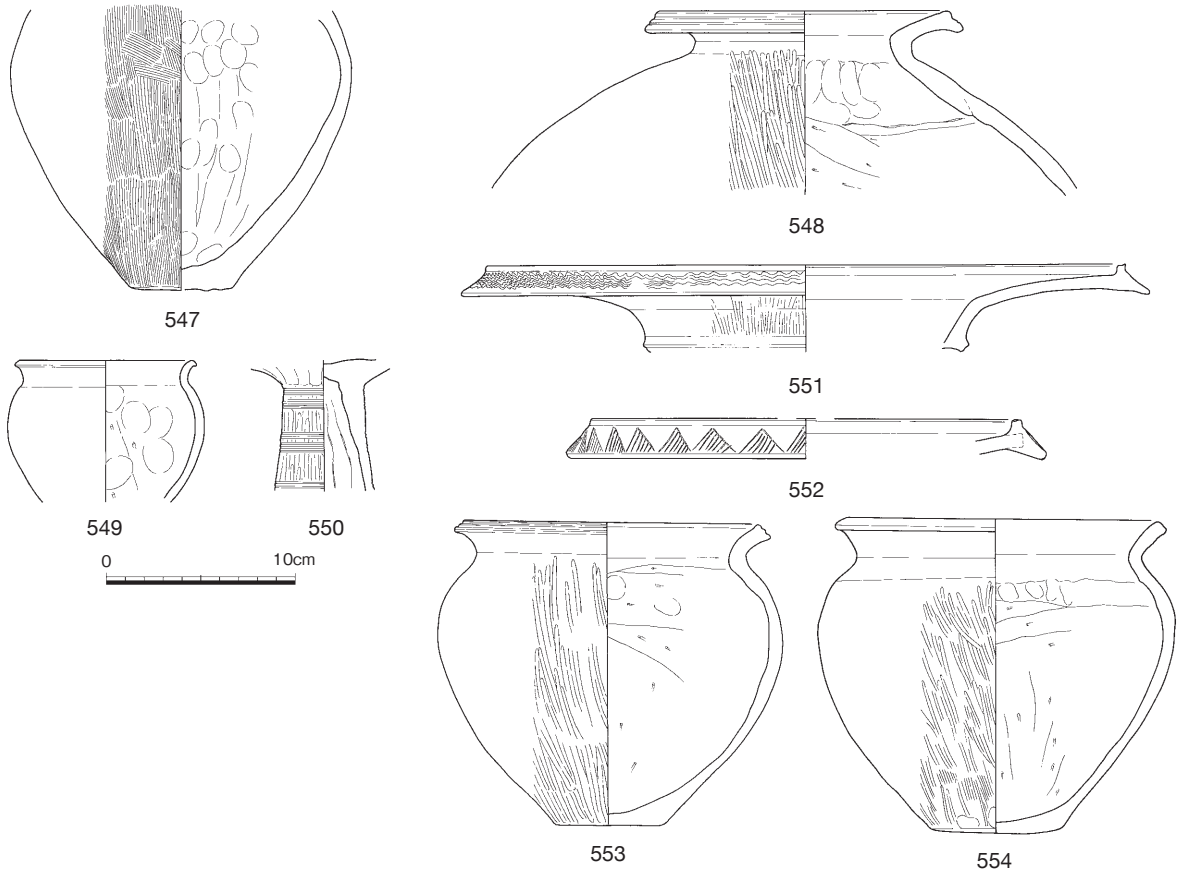
4島4に続いている。この高まりは、南北に直線的に伸びており、上端幅2.8~4.2m、水田面からの高さ30~45cmを測るが、一部については後世の遺構によって削平を受けている。土層断面の観察から、おおむね水平の堆積が観察できる。百原尾島3の溝78は、この島状高まりの上で検出されているため、第2~4層のうち、どれかがこの溝の続きになる可能性は考えられ、出土遺物には壺545、高杯546があり、これらが島状高まり2の上面で検出できていない遺構に伴う可能性も考えられる。遺物は弥生時代後期の範疇に入るものと考えられる。(團)

島状高まり3 (第164・165・236・237図、図版25)

34~35ライン付近にかけて検出した高まりである。南北方向に延びる幅約1.8~3m、のもの、調査区南端の舌状に張り出す幅約10mの部分からなる。この舌状に張り出した部分には、水路3が延び



- | | |
|--|-----------------------------|
| 1 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 (水田5水田層) | 6 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 盛土した部分か |
| 2 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 (水田6水田層) | 7 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘性微砂 |
| 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂 砂質が強く4層との境が不明瞭な部分もある | 8 褐灰色 (10YR4/1) 粘性微砂 (溝8) |
| 4 5層に褐灰色 (10YR6/1) 粘性微砂の土塊を含む | 9 褐色 (7.5YR4/4) 粘性微砂 |
| 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 | |

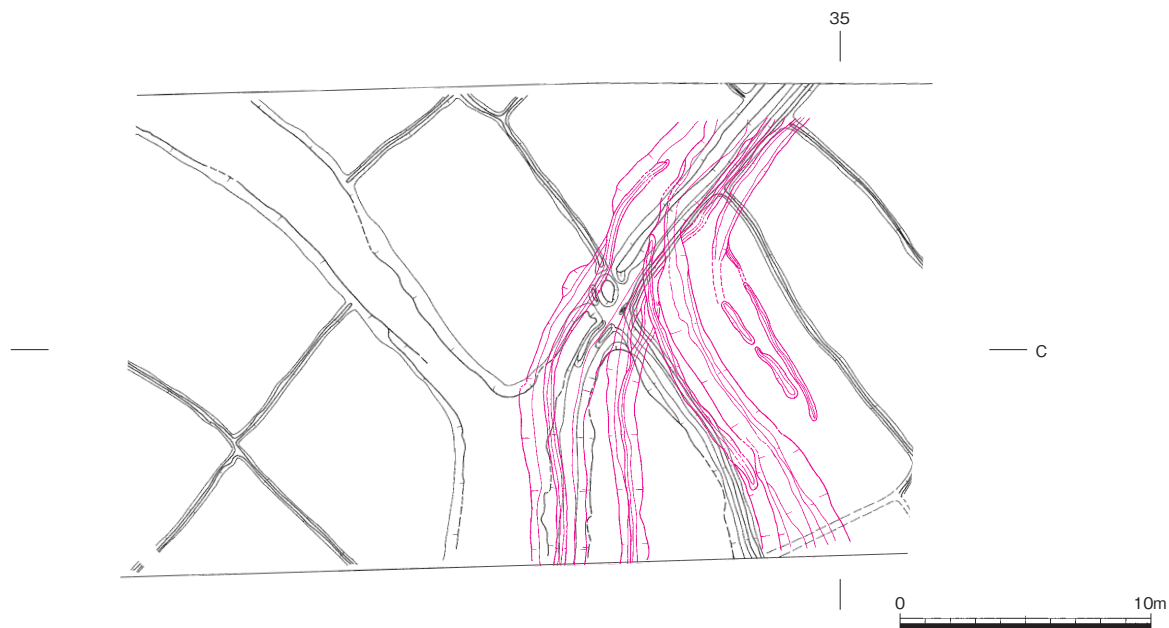


第236図 島状高まり3 (1/40)・出土遺物 (1/4)

ている。水田面からの高さは、水田5とは40cm、水田6・7からは55cmとなる。つまり、この島状高まり3を境に、水田5以西と水田6・7以東で水田の高さは、およそ15cmの高低差をもつことになる。このことから、島状高まり3は、水路と水田の区画の2つの役割を持つものであると考えられ、原尾島遺跡の水田の中でもっとも大規模な水路を持つものである。この島状高まりの堆積の状況はほぼ水平であり、従来から考えられているように、微高地を削り残しているのであろう。第4・6層については盛土であると考えられ、必要に応じて成形している様子がうかがえる。この島状高まりからは土器が出土しており、壺547・548、甕549、高杯550～552、鉢553・554がある。これらの土器は百・後・Ⅱの時期と考えられ、島状高まり3上で検出できていない遺構に伴う可能性もある。 (團)

水路と畦畔

弥生時代後期水田は、百・後・Ⅱに開田したものであると考えられているものの、どの時期に低位部全域が水田になったかは不明であるといえる。今回の調査では、水田6・7の水田層下層から溝（溝21～28）を検出しており、そこから出土した遺物の時期は、百・後・Ⅳを示すもの（土器496～501）であった。また、水田を区画する小畦畔や大畦畔を断ち割った断面から出土した土器の時期も同じく百・後・Ⅳを示すものであった。水田6・7が作られた時期が百・後・Ⅳであるか、または、水田6・7は百・後・Ⅱに作られ、その後百・後・Ⅳに水田層とともに水路や畦畔が補修や作り替えを行った、という2つの可能性が考えられる。 (團)



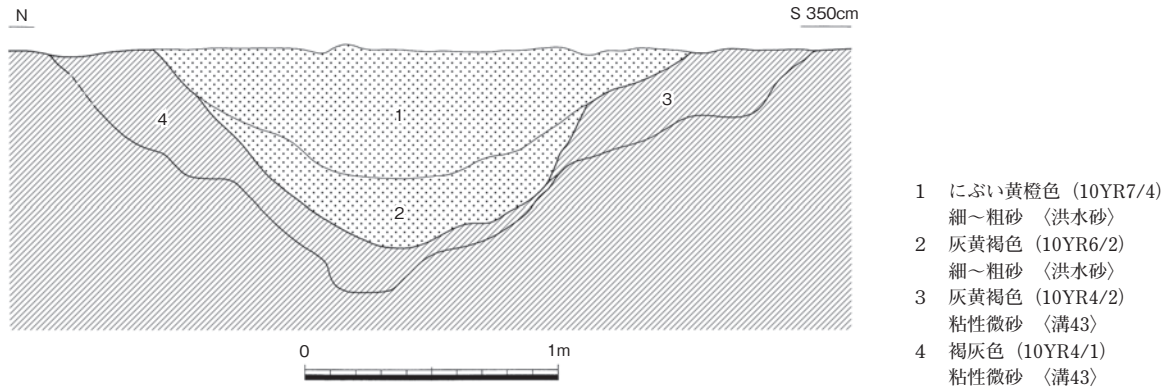
第237図 島状高まり3と下層溝 (1/300)

(2) 微高地上の水田関連遺構

水路3 (第223・238図)

調査区内の微高地上で、唯一洪水砂に埋没した遺構である。規模は、上端幅190cm～215cm、深さ約80cmを測る。百原尾島5水路4に続く水路で、微高地上に開削されたものである。出土遺物は無いものの、洪水の時期が百・後・Ⅳであると考えられていることから、この時期に埋没した遺構であろう。微高地上の遺構では、百・後・Ⅳの時期のものではなく、包含層の掘り下げ中からもこの時期の遺物は

出土していない。このことから、調査区内の微高地は、水路が延びるのみで、居住域としての利用はなかったと考えられる。(團)



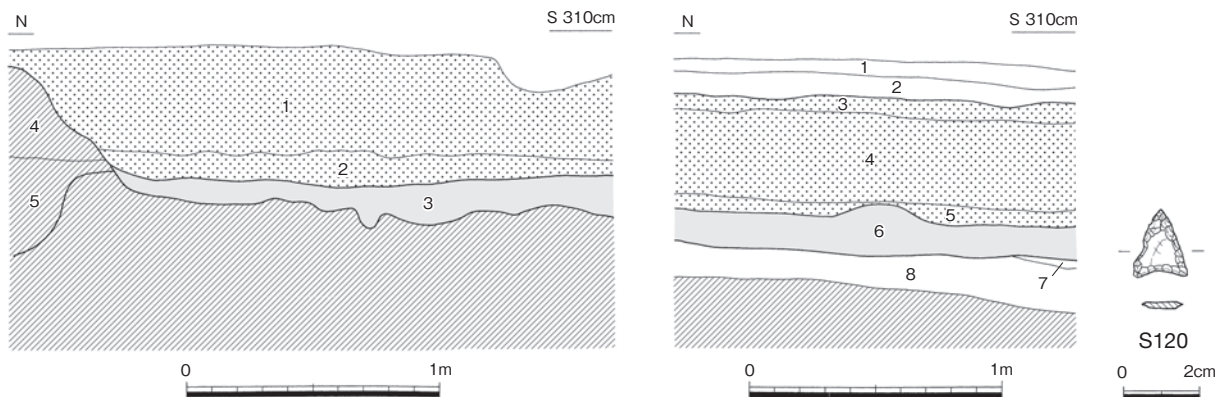
第238図 水路3 (1/30)

(3) 微高地東側の水田関連遺構

水田8 (第223・239図、図版9-2)

百間川沢田遺跡の中心となる微高地との境をなす低位部にあり、縄文時代の旧河道上の水田である。この水田が広がる2つの微高地間の幅は50mを測るが、そのうちの西側約1/3を百間川原尾島遺跡として扱う。水田面は、海拔220～250cm付近にある。その上をパックする弥生時代後期末の洪水砂は50～60cmもあり、3層に分層が可能であった。このうち、水田層直上の層は、他の2層と比べて強く粘性を帯びており、水田の耕作土であった可能性もある。

本調査区では、石鏃S120が出土するものの、洪水砂や水田層の時期を検討しうるだけの遺物はみられなかった。(弘田)



第239図 水田8 (1/30)・出土遺物 (1/2)

第5節 古墳時代の遺構・遺物

1 概要

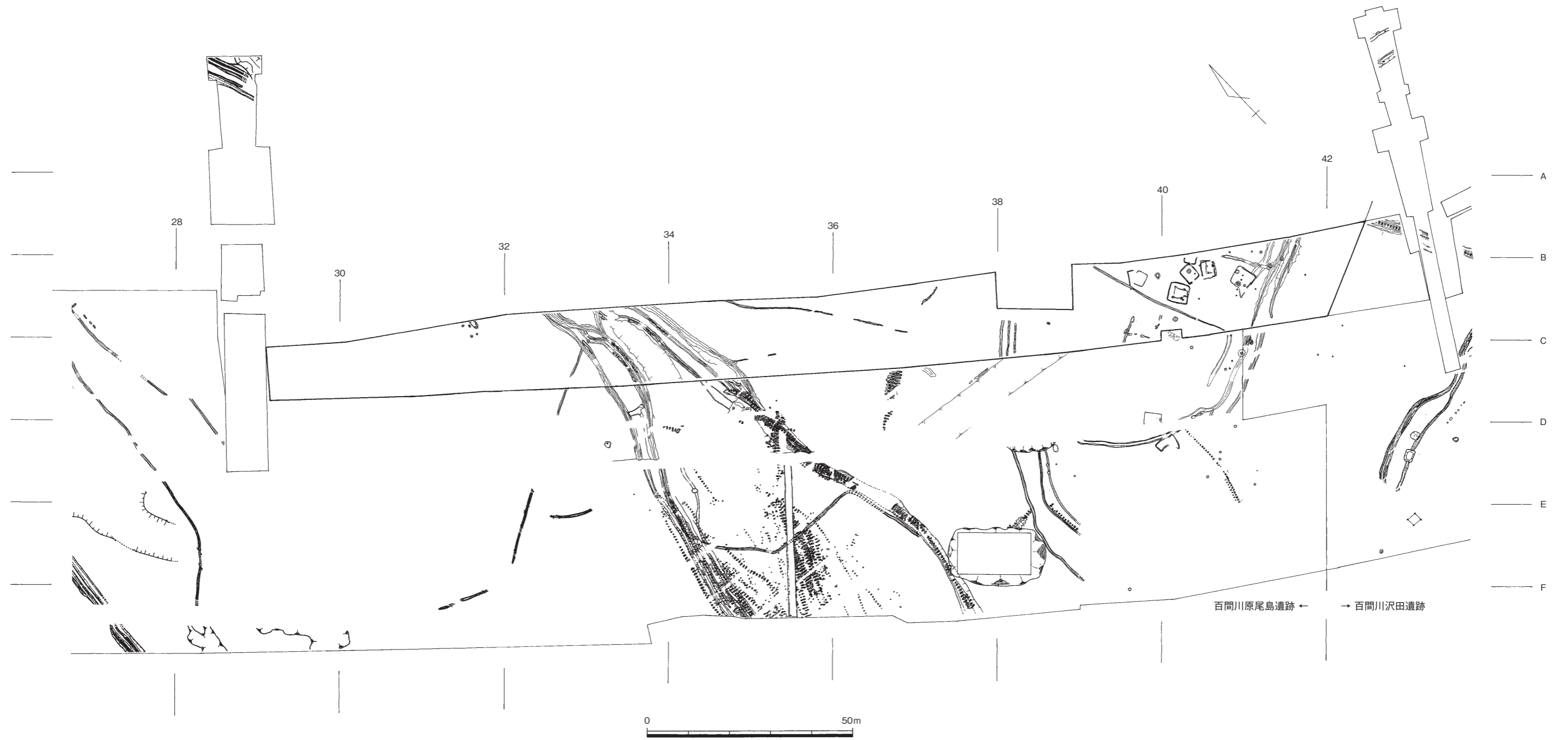
古墳時代の遺構は、弥生時代後期末の洪水によって微高地をも覆った洪水砂の上で検出している。この洪水砂は、微高地上では薄い堆積に留まるものの、低位部では厚さ40～50cm程度もあり、洪水が大規模なものであったことを伺わせる。洪水砂で覆われたことによって、元来50cm程度あった微高地と低位部の高低差は解消された。しかし、遺構の立地のあり方は、居住域は旧来と変わらず弥生時代以前の微高地上に位置し、以前の低位部には用水路が延びるという、弥生時代と同様の土地利用を行っていることが理解できる。ただし微高地と低位部との差が明瞭ではなくなったためか、微高地の縁辺部に溝（溝58～60・65・66）を廻らせることによって区画を明瞭にしている点が特徴的である。検出した遺構は、竪穴住居7軒・井戸7基・溝23条、土坑8基、下がり2か所、柱穴などである。これらの遺構の時期は、古墳時代前期と後期の、おもに二時期にわけられる。このうち古墳時代前期のものは、ほぼ百・古・Iに、後期のものは6世紀末～7世紀半ばのものに限定される。包含層からの出土遺物もこの時期のものが多い。また、古墳時代後期の遺構は、溝や下がり限定され、38ラインより西の旧来の低位部に立地しているもののみである。このことから、百・古・I以降の居住域については、他の場所へ移動していることが理解される。土層断面の観察からは、古墳時代後期のものと考えられる灰色の粘質土が堆積しており、畦畔などを検出していないものの、水田層である可能性が考えられることから、周辺は生産域へと変化した可能性がある。38ラインより東の、旧来の微高地上では、百・古・Iの竪穴住居7軒と井戸7基を確認しているが、調査区の南側で竪穴住居1軒（百原尾島5住居24）と井戸8基（百原尾島5井戸13・14、百原尾島2井戸31～36）が検出されており、竪穴住居7軒に対し、井戸が15基と多い。また、竪穴住居は、出土遺物からは大きな時期差は認められないものの、竪穴住居4と5は重複関係に、竪穴住居7と8は近接、竪穴住居9は建替えが確認されていることから、二時期以上があると考えられ、同時期に存在した竪穴住居は数棟であった可能性が考えられる。このことから考えても、井戸の比率はとても高い。（團）



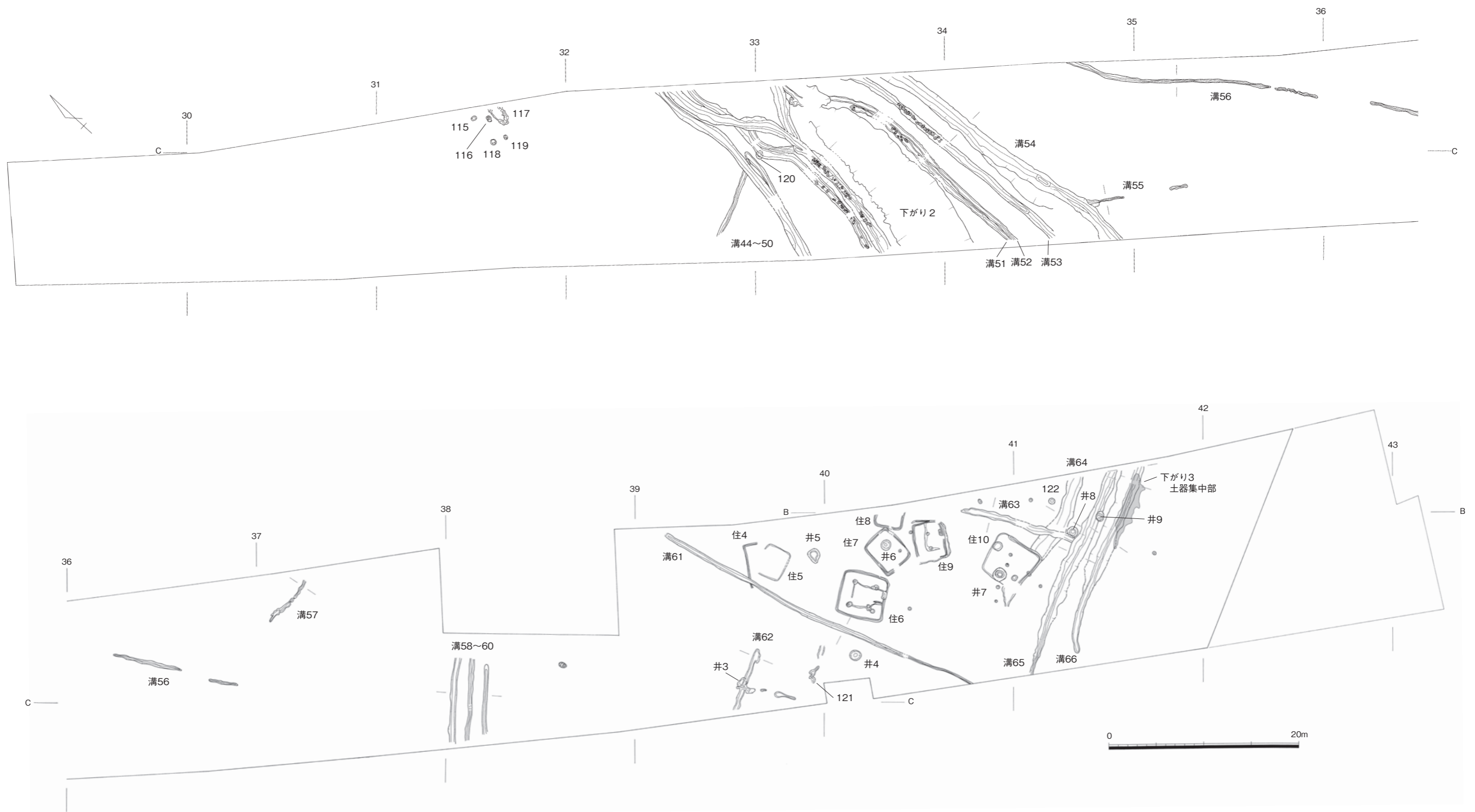
写真42 竪穴住居6周辺検出状況（北西から）



写真43 竪穴住居6内石敷（北西から）



第240図 古墳時代全体図 (1/1,000)



第241図 古墳時代遺構配置図 (1/400)

2 竪穴住居

竪穴住居4 (第240~242図)

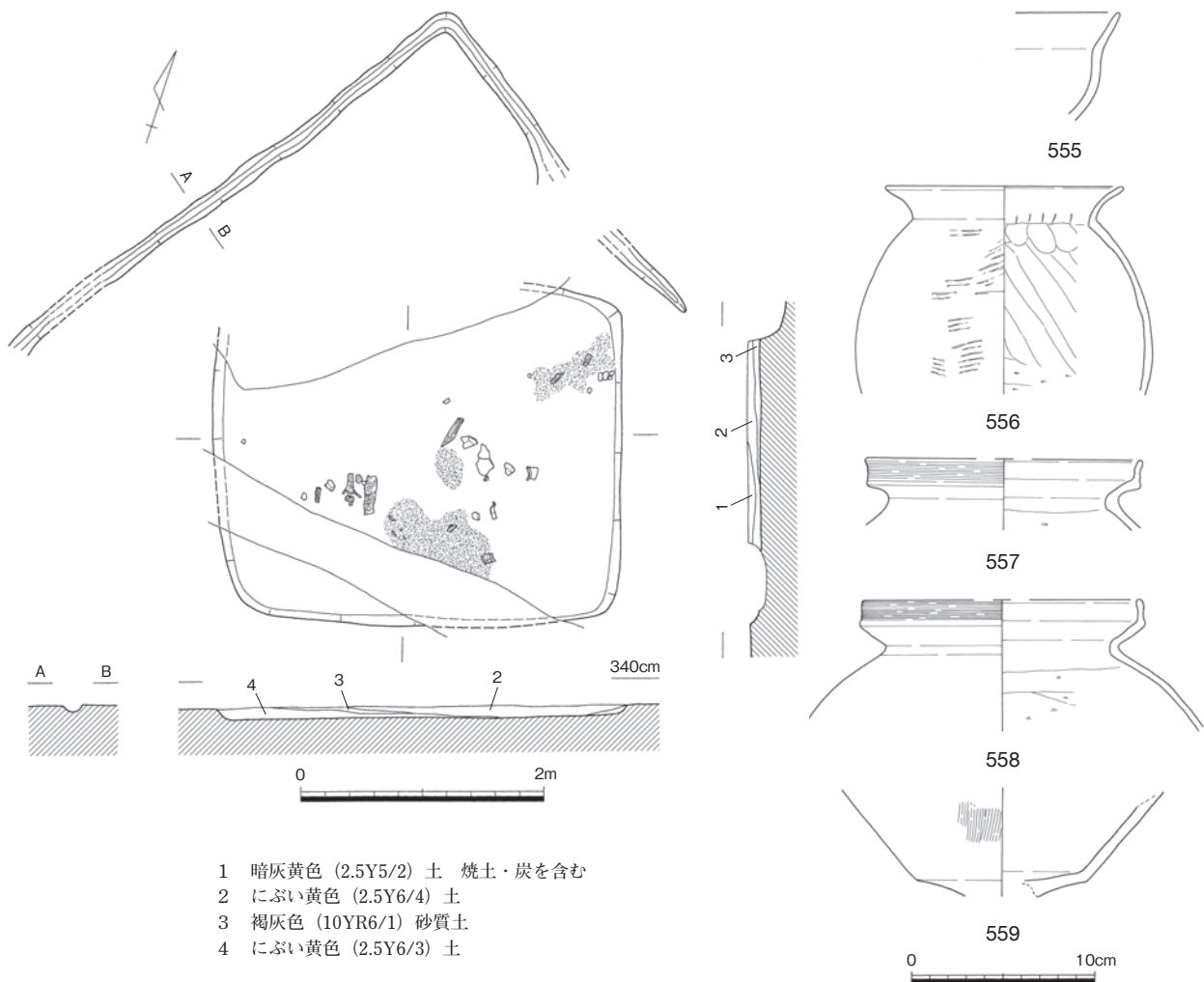
39B区の東側に位置する方形住居である。竪穴住居5の検出中に確認したもので、これより後出する可能性が高い。幅10cm、深さ5cmの溝が鍵形にめぐり、検出長は北西辺で458cm、北東辺で317cmを測る。海拔高323cmの床面は中央に攪乱を受けており、柱穴や付属施設は確認できなかった。

高杯559はこの住居に伴う可能性が高く、百・古・Ⅲ期まで下るものと思われる。(亀山)

竪穴住居5 (第240~242図)

竪穴住居4と重複して検出したもので、39B区の東側に位置する。溝40や攪乱によって壊されているが、長さ336cm、幅272cmの長方形に復元される。深さ10cmにある床面は海拔310cmを測り、面積は8.3㎡ある。壁体溝や中央穴等は認められない。埋土には炭化材や焼土を含み、焼失住居の可能性はある。

出土遺物には外反する口縁部とタタキ目を残す体部をもつ甕556や、短く直立する口縁部に櫛描き沈線を飾る甕557・558、鉢555などがあり、百・古・Ⅰ期に比定される。(亀山)

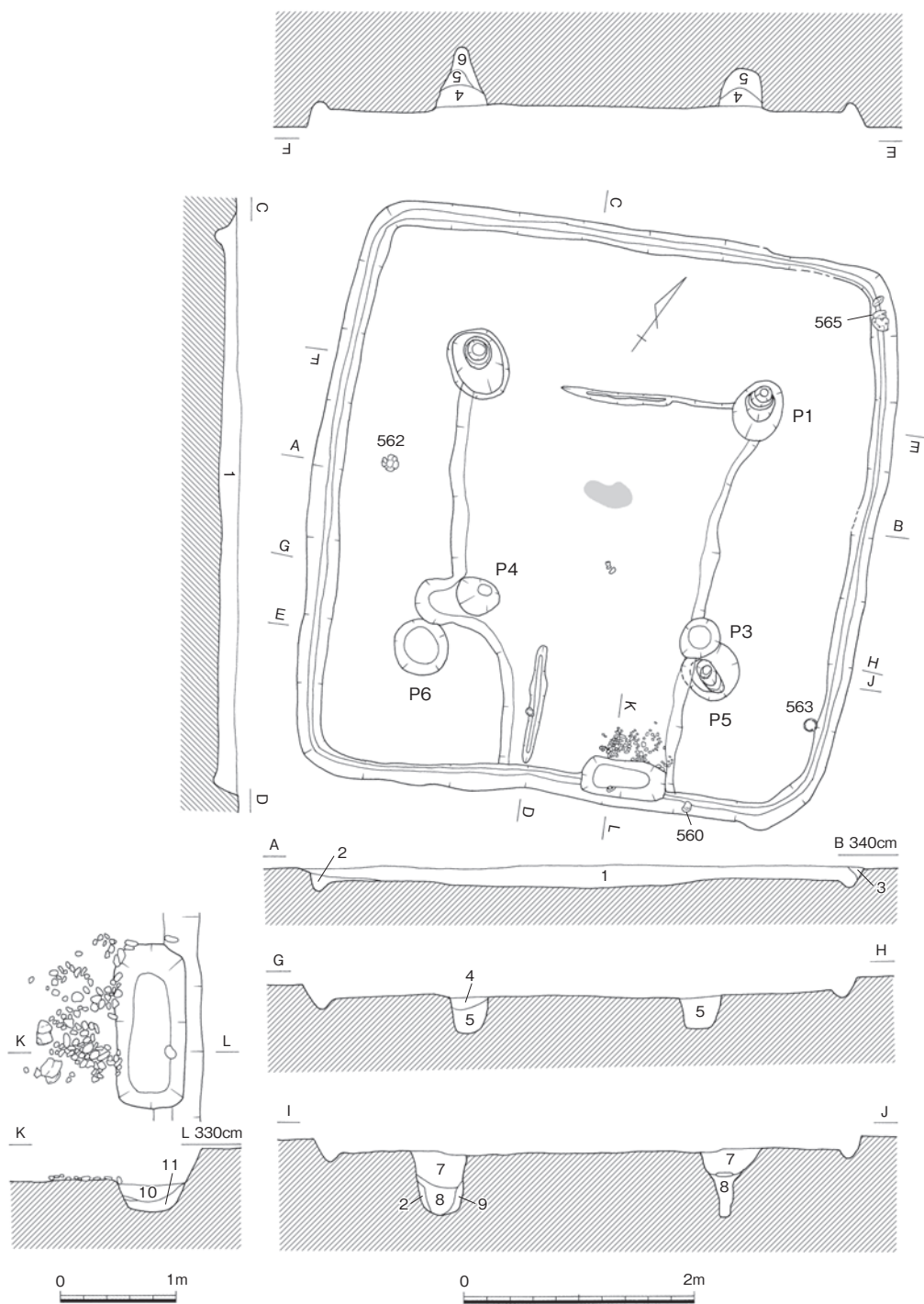


第242図 竪穴住居4・5 (1/60)・出土遺物 (1/4)

竪穴住居6 (第240・241・243・244図、写真42・43、図版15-2・25)

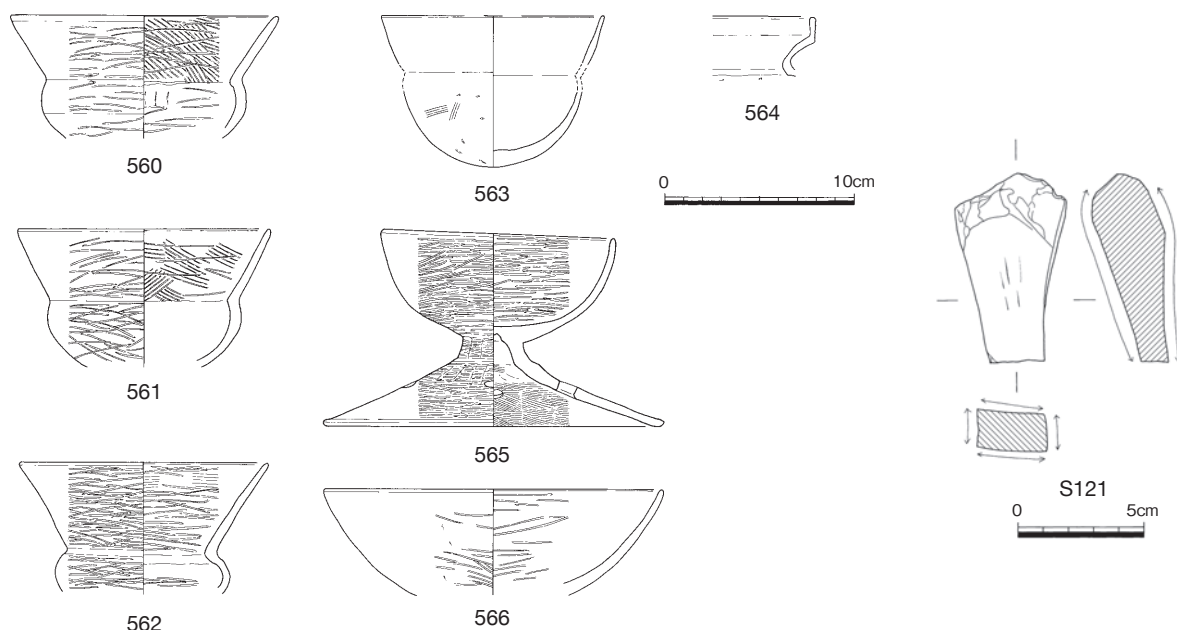
40B区の北西で検出した4本柱の住居で、竪穴住居5の南6mに位置する。

洪水砂層から掘り込まれた竪穴は南北495cm、東西490cmの方形をなし、黒褐色土層の上面に揃えた



- | | | |
|---------------------------|--------------------------------|-------|
| 1 にぶい褐色 (7.5YR6/3) 砂質土 | 5 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘質細砂 (柱穴埋土) | 10 不明 |
| 2 灰褐色 (5YR6/2) 砂質土 | 6 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土 | 11 不明 |
| 3 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土 炭を含む | 7 灰黄褐色 (10YR6/2) 砂質土 炭を含む | |
| 4 にぶい黄褐色 (10YR7/3) 砂質土 | 8 灰色 (5Y5/1) 粘性微砂 | |
| | 9 灰褐色 (7.5Y6/2) シルト質微砂 | |

第243図 竪穴住居6 (1/30・1/60)



第244図 竪穴住居6出土遺物 (1/3・1/4)

床の標高は312cmを測る。21.8㎡ある床面の周囲には幅16cm、深さ8cmほどの溝がめぐり、東の壁際に設けられた土坑に接続する。この土坑は長さ71cm、幅30cm、深さ14cmの長方形を呈し、その北側には64×42cmの範囲に円礫の敷設が認められた。東辺を除く3辺に沿って、黄褐色土の貼り床を施した幅109～132cm、高さ5cmの高床部を設けており、その内縁の一部には幅10cm、深さ3cmの溝が残る。壁体から81～108cm離れた位置にある柱穴は径42～62cm、深さ51～60cmあり、その柱間距離は南北246～261cm、東西246～252cmを測る。黒褐色土層を掘り込んでいたためか中央穴は確認できなかったが、床面の中央西寄りに被熱痕跡が見られた。

壁体溝や高床部などから小形丸底壺560・562・563や小形の高杯565が出土しており、百・古・I期でも新相に位置づけられる。(亀山)

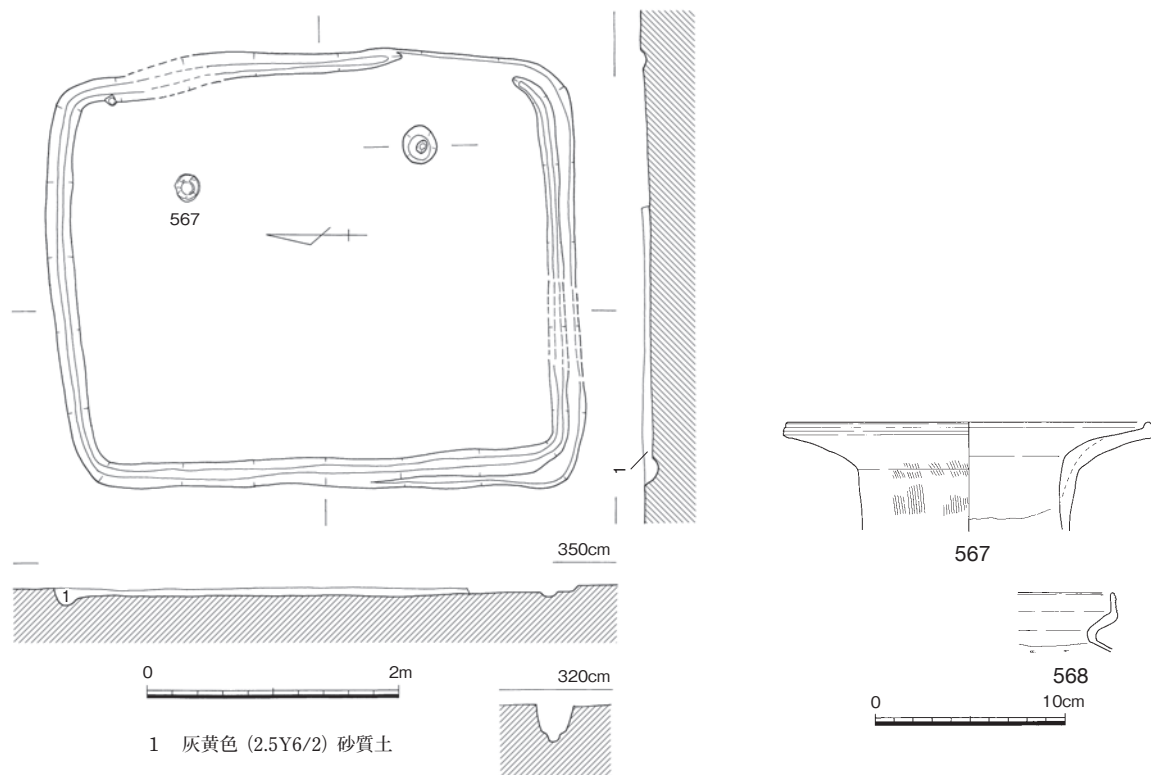
竪穴住居7 (第240・241・245図、写真44、図版15-1)

40B区の北側において検出した住居で、北東側に竪穴住居8、南東側に竪穴住居9が近接する。方形を呈する住居で、主柱穴は1本しか確認できず、本来何本柱の住居であったか不明である。検出面からの深さは8cmを測り、床面は地山まで掘り込まれた後に敷かれていた。床面の標高は330cmで、上面の規模は、長軸長418cm、短軸長342cmである。主軸はN-8°-Wで、床面積は11㎡を測る。床の周りには10～20cmの壁体溝が巡る。主柱穴は30cm前後で、検出面からの深さは28cmで、標高は280cmになる。

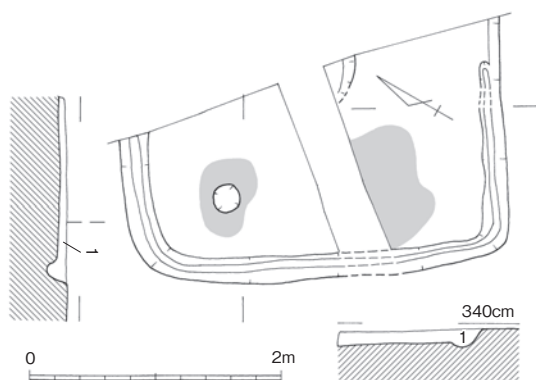
遺物には567・568があり、567は床面直上出土である。567は壺口縁部、568は甕口縁部になる。時期は、百・古・Iになると考えている。(小林)

竪穴住居8 (第240・241・246図、写真44、図版15-1)

40B区の北側において検出した住居で、南西側に竪穴住居7、南側に竪穴住居9が近接する。方形を呈する住居であるが、北側半分は調査区外になる。また主柱穴は明確に出来なかった。検出面からの深さは10cmを測り、床面は地山まで掘り込まれた後に敷かれていた。床面の標高は324mで、上面の規模は長軸305cm、短軸207cmである。時期は、百・古・Iである。(小林)



第245図 竪穴住居7 (1/60)・出土遺物 (1/4)



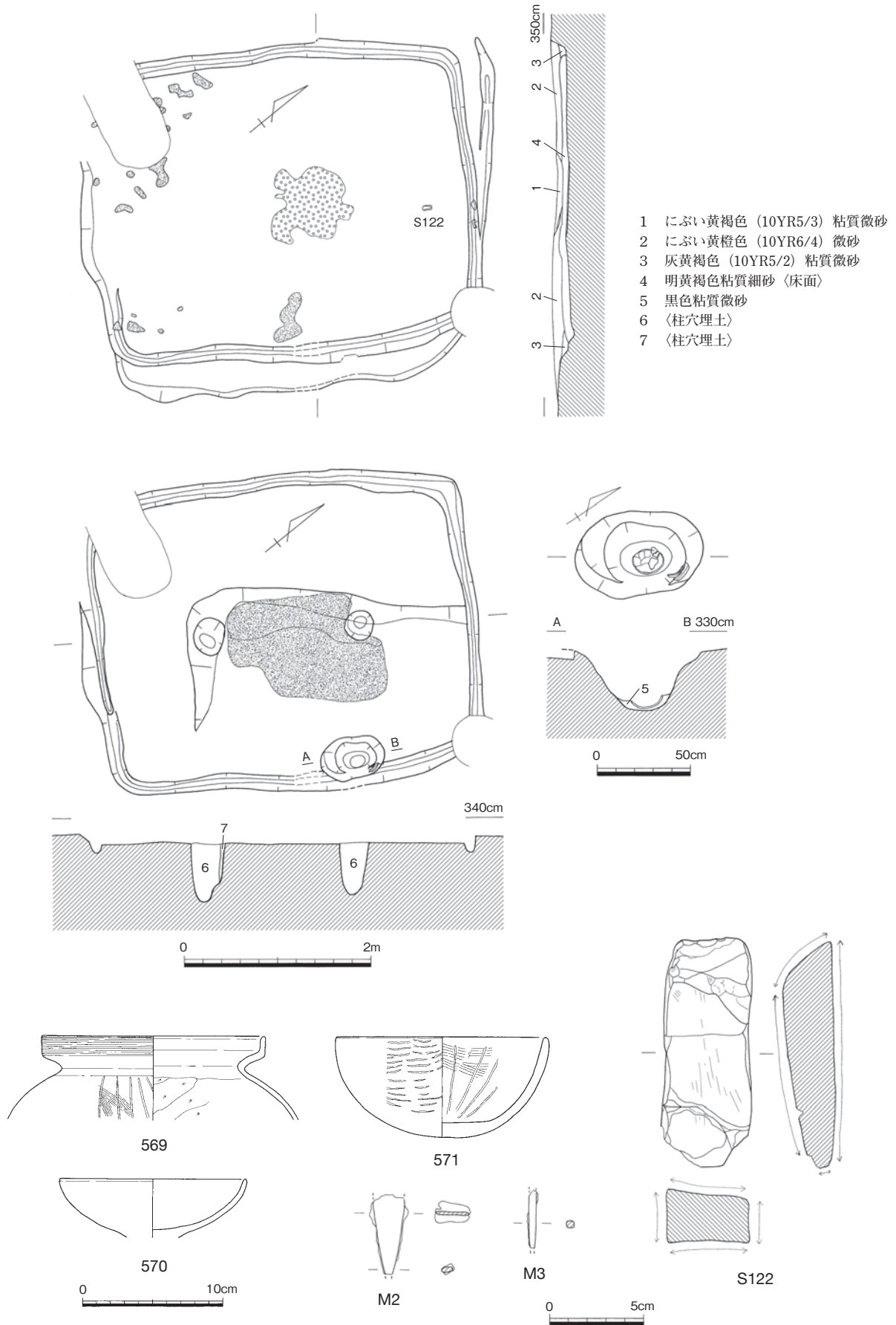
第246図 竪穴住居8 (1/60)



写真44 竪穴住居7・8 (南西から)

竪穴住居9 (第240・241・247図、図版15-1・16-1・25)

40B区の北側において検出した住居で、北側に竪穴住居8、北西側に竪穴住居7が近接する。長方形を呈する2本柱の住居で、検出面からの深さは8cmと18cmの2面の床面があり、下層の床面は地山まで掘り込まれた後に敷かれていた。床面の標高は、上層で334cm、下層で324cmを測る。上面の規模は長軸423cm、短軸325cmである。主軸はN-23°-Eで、床面積は11㎡を測る。床の周りには15~20cmの壁体溝が巡る。壁体から95~100cmの位置にある2基の主柱穴は、径30~40cmの不整円形を呈する。深さは56~62cmを測り、柱穴間は165cmの距離があった。明確な中央穴はないが、幅約70cmを測る凹みがあり、炭化物の分布が見られる。東側の壁面付近にある楕円形の土坑は、上面の規模79×45cmで、



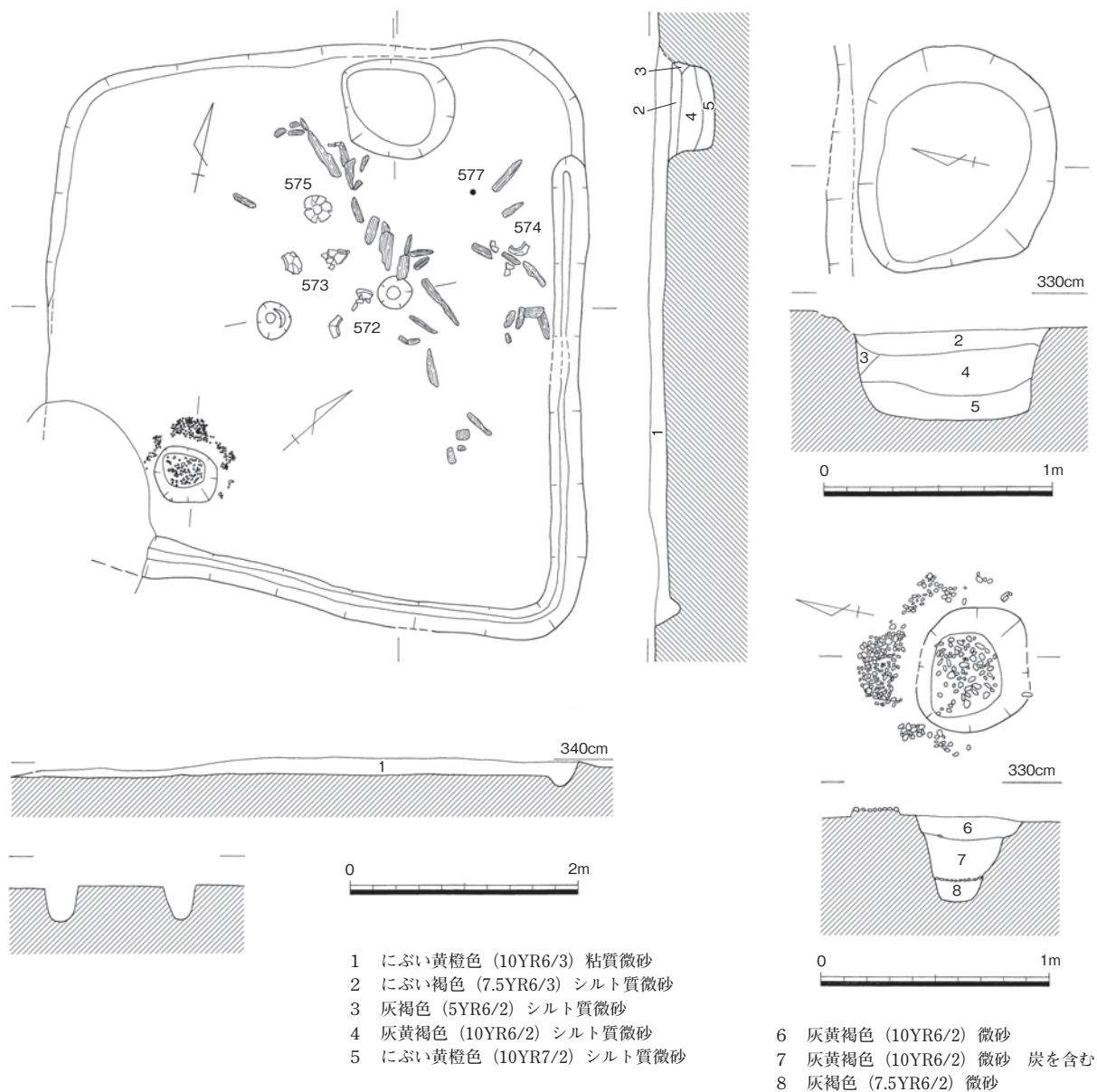
第247図 竪穴住居9 (1/30・1/60)・出土遺物 (1/3・1/4)

底面から土師器が出土した。

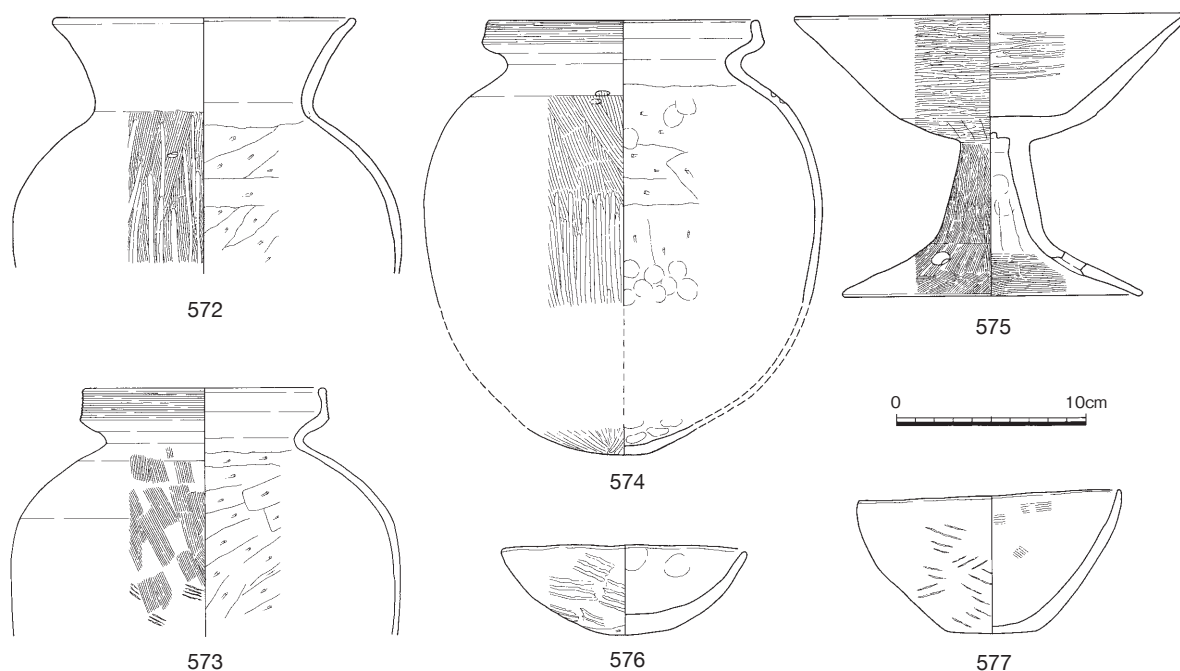
遺物は569～571、M2・M3、S122で、大半が床面直上出土である。569は甕口縁部で、570は高杯である。口縁部は丸く収まるタイプである。571は丸底の鉢である。M2・3は鉄鏝で、S122は砥石になる。時期は、百・古・Iである。 (小林)

竪穴住居10 (第240・241・248・249図、図版15-1・16-2・25)

40・41B区において検出した竪穴住居である。規模は、長軸が523cm、短軸が471cmを測り、平面形はやや歪な方形を呈する。床面上では、北西辺の壁沿いに貯蔵穴とみられる土坑が1基、南東辺の壁近くに石敷きを伴う土坑1基が、さらに床面直上には土器片や建築部材とみられる炭化材の一部が存在していた。やや歪な平面形から建て替えを考えるが、図示した以外に壁帯溝が確認できなかった。石敷き土坑は、平面形が長方形を呈し、規模は長軸が100cm、短軸は75cm、深さが40cmである。石敷



第248図 竪穴住居10 (1/30・1/60)



第249図 竪穴住居10出土遺物 (1/4)

きは、2～4cmの円礫を用い、住居東壁面側を除いて土坑の周囲を「コ」の字に囲むほか、土坑内においても底より10cm上に同様な円礫のまとまりがみられた。この土坑に木蓋のようなものを想定すれば、その上に敷かれた円礫が落ち込んだとも考えられる。石敷き土坑は、竪穴住居の入り口部分を想定しており、類例が百間川原尾島遺跡や百間川沢田遺跡に数基があるものの、土坑内においても底円礫が集積するような状況は他に例をみない。

出土遺物はいずれも床面上にあり、土師器の壺572、甕573・574、高杯575、鉢576・577がある。これらの遺物が示す住居の時期は、百・古・Iである。(弘田)

3 井戸

井戸3 (第240・241・250図、図版16-3・25)

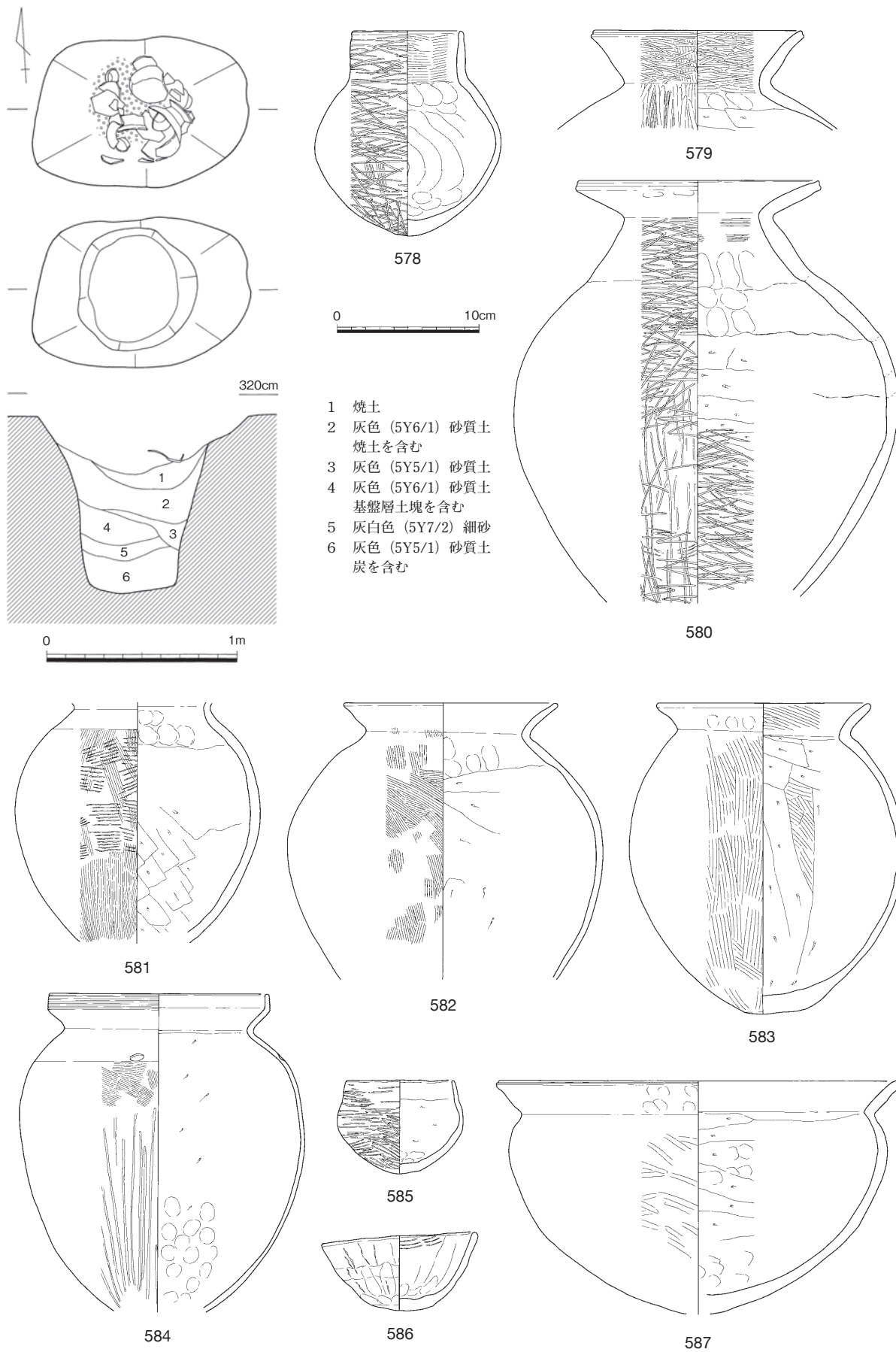
39B区の南西中央に位置する素掘りの井戸で、弥生時代後期の溝43を掘り下げる過程で検出した。

上面は長さ113cm、幅78cmの不整楕円形を呈し、その中央から百・古・I期の土器がまとまって出土した。これを取り上げると焼土の厚い堆積が認められたが、被熱の痕跡とは考えにくく、一括して投棄されたものと思われる。長径55cm、短径46cmの楕円形をなす底面の標高は216cmとやや高いが、埋伏した溝43の底面より深くなっていることから、その水を集めていた可能性がある。上層から出土した土器には、上方へすぼまる頸部から口縁部が屈折して開く讃岐系の壺580のほか、外反する口縁部をもつ甕582・583や外面にタタキ目を残す甕581などがあり、非在地的な要素が目立つ。(亀山)

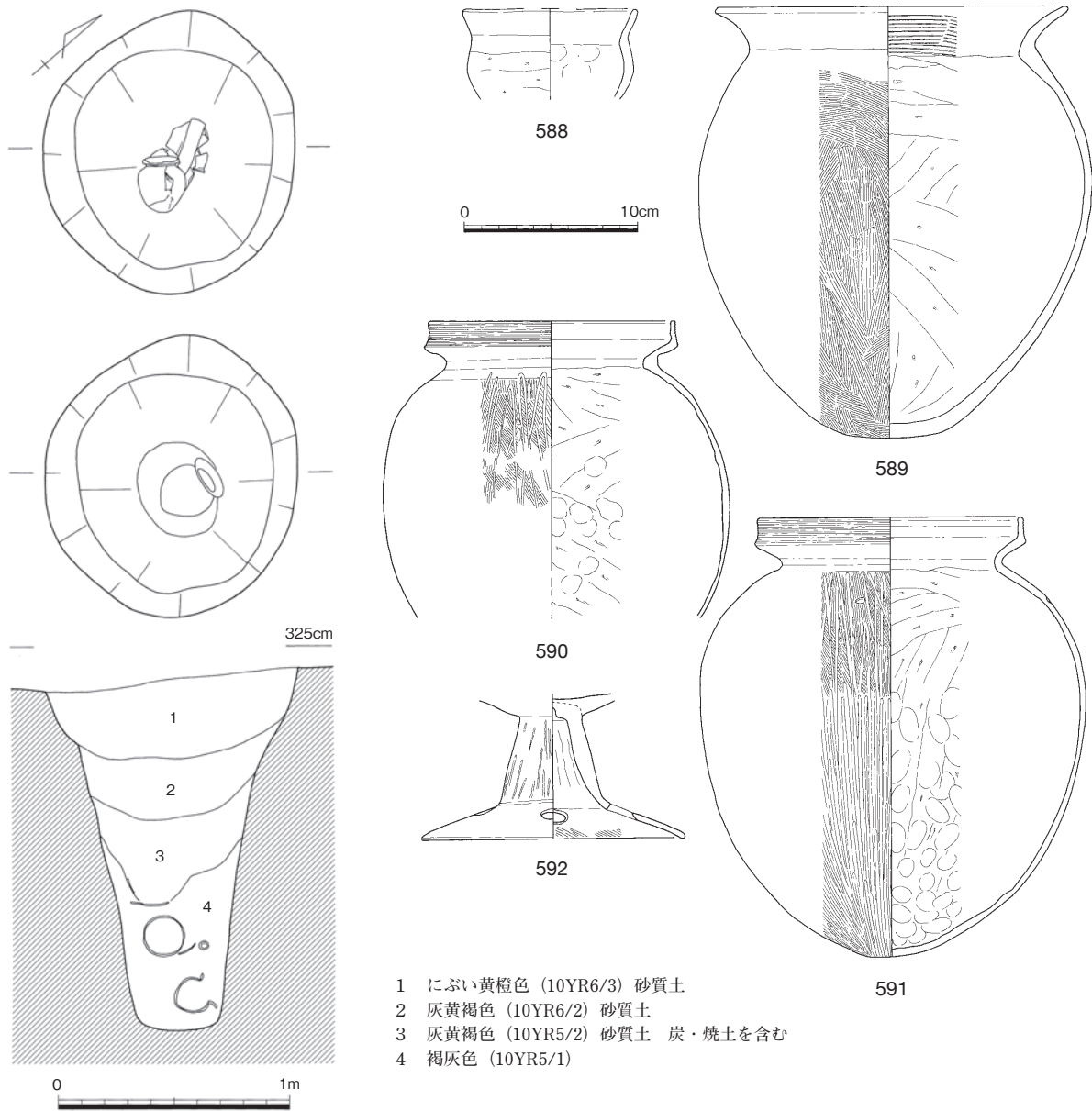
井戸4 (第240・241・251図、図版17-1)

井戸3の南東11mで検出した素掘りの井戸で、40B区の西に位置する。

洪水砂層の上から掘り込まれており、上面は長径121cm、短径110cmの不整円形を呈する。検出面からの深さは151cmを測り、その断面は逆台形をなす。標高160cmにある底面は平坦で、長径41cm、短径35cmの楕円形を呈する。



第250図 井戸3 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第251図 井戸4 (1/30)・出土遺物 (1/4)

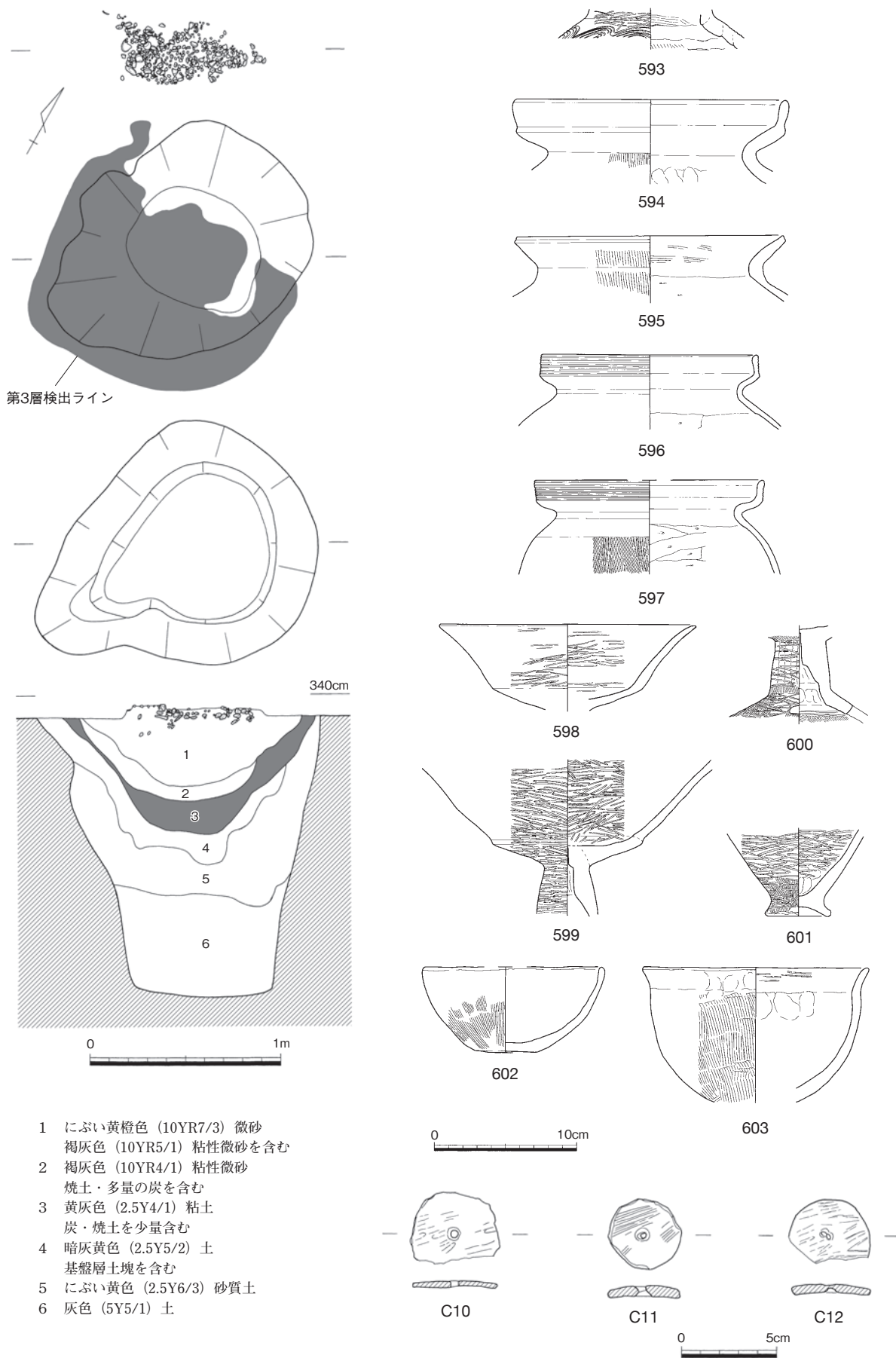
埋土は上層と下層に大別されるが、とくに褐灰色をなす下層からは完形の甕589・591のほか、破損した小形の鉢588や高杯592など、百・古・I期の土器が出土した。(亀山)

井戸5 (第240・241・252図、図版17-3・17-4・29)

39B区の東で検出した素掘りの井戸で、井戸4の北東9.8mに位置する。上面は長径155cm、短径127cmの南西が張り出した滴形をなす。深さ147cmの断面は逆台形を呈し、平坦な底面の標高は180cmを測る。

埋土の上部に黄色の粘土を貼って長径133cm、短径112cm、深さ49cmのくぼみをつくりだしており、その内部には土器片の混じった細礫の堆積が見られたが、具体的な機能については明らかでない。

出土遺物には、百・古・I期の壺594、甕596・597、高杯598~600、鉢601~603のほか土器片を加工した有孔円盤C10~C12がある。(亀山)

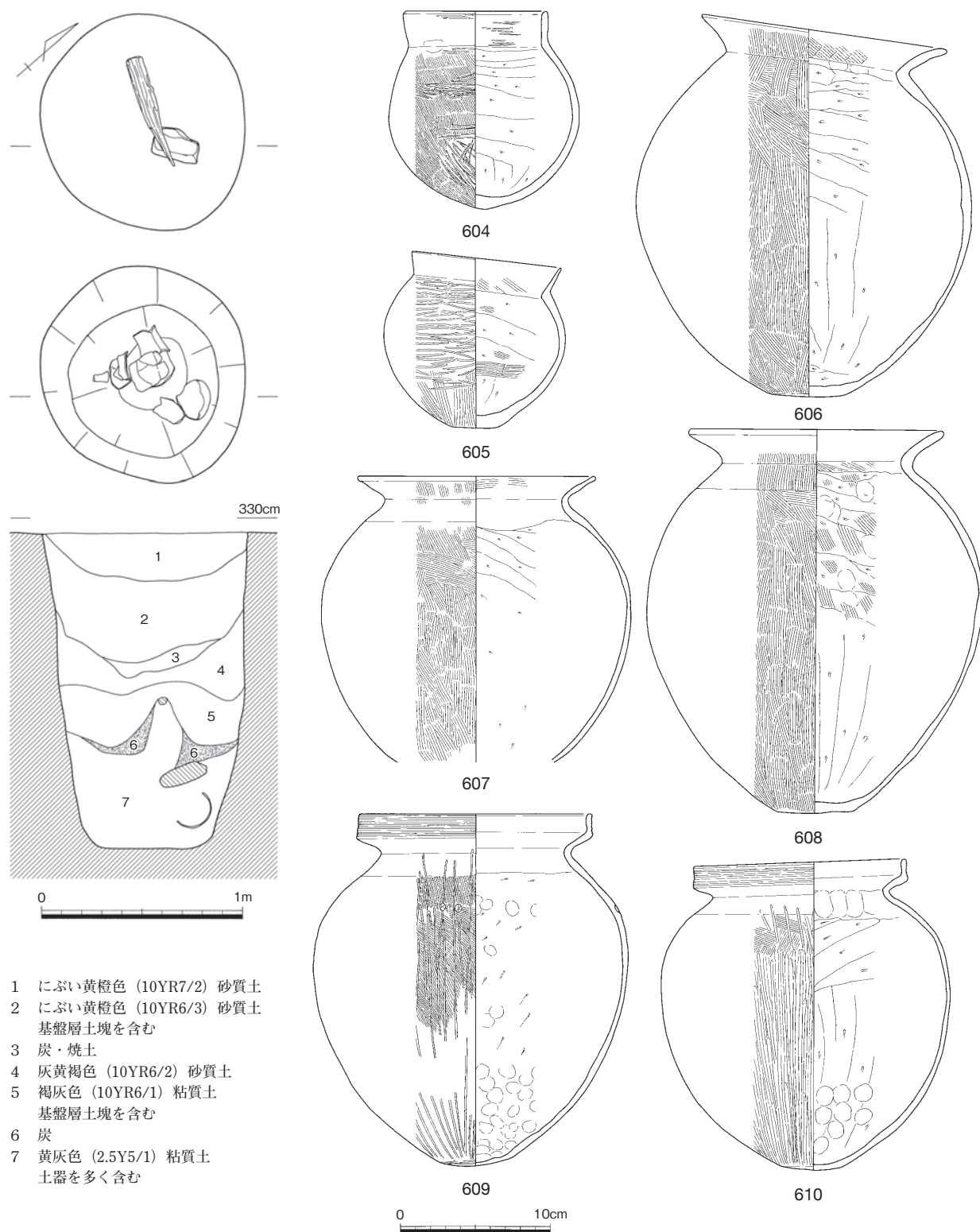


- 1 にぶい黄橙色 (10YR7/3) 微砂
褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂を含む
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 粘性微砂
焼土・多量の炭を含む
- 3 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘土
炭・焼土を少量含む
- 4 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 土
基盤層土塊を含む
- 5 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 砂質土
- 6 灰色 (5Y5/1) 土

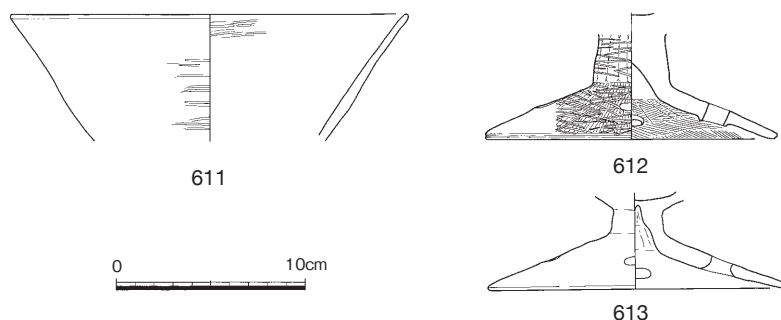
第252図 井戸5 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

井戸6 (第240・241・253・254図、図版26)

竪穴住居7の中央に掘り込まれた素掘りの井戸で、40B区の北側に位置する。上面は長径106cm、短径103cmの円形を呈する。壁面は垂直気味に掘り込まれ、深さ156cmにある平坦な底面は標高165cmを測る。内部からは、南東の壁に立てかけるように長さ1mほどの木材が出土したが、加工の痕跡は認め



第253図 井戸6 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第254図 井戸6出土遺物② (1/4)

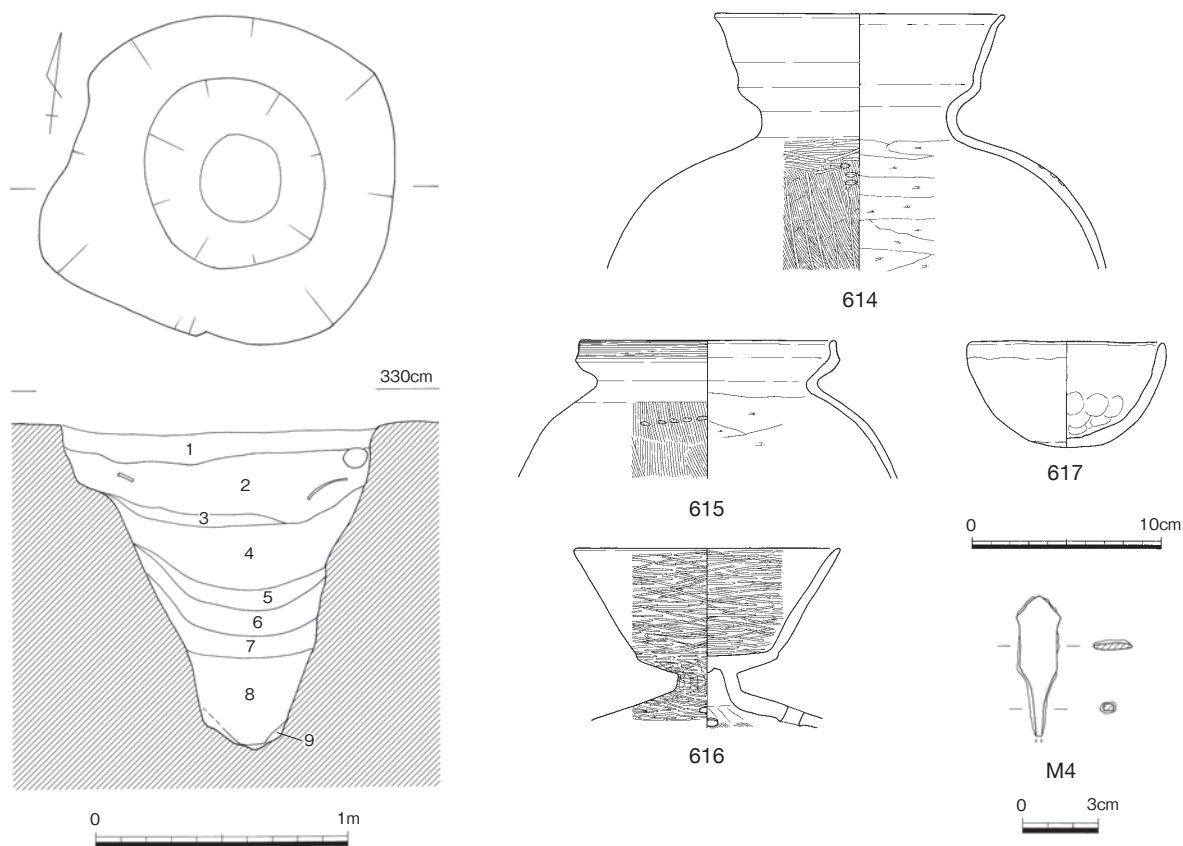
められなかった。また、下層から百・古・I期の土器がまとまって出土した。

出土遺物には、直立する口縁部をもつ小形の604・605、口縁部が外反する606～608、短く直立する口縁部に櫛描き沈線を飾る609・610、中実気味の短い脚部をもつ高杯612・613などがある。(亀山)

井戸7 (第240・241・255図、図版17-2・29)

40B区において、竪穴住居10の床面掘り下げ中に検出した井戸である。検出面での平面形状は、隅丸方形に近いが、それより20cm程下方では、ほぼ円形を呈する。規模は、検出面で長軸が150cm、短軸は135cmで、深さが125cmである。壁面は井戸底に向けて緩やかに下がり、底面付近では直径30cmほどとなる。また、堆積土はおおむね水平堆積となる。

出土遺物には、土師器の壺614、甕615、高杯616、椀617、尖根の鉄鏃M4がある。いずれも1・2層からの出土である。これらの遺物のうちでは、高杯616がやや古層を示すものの、井戸の時期は百・古・Iと考える。(弘田)



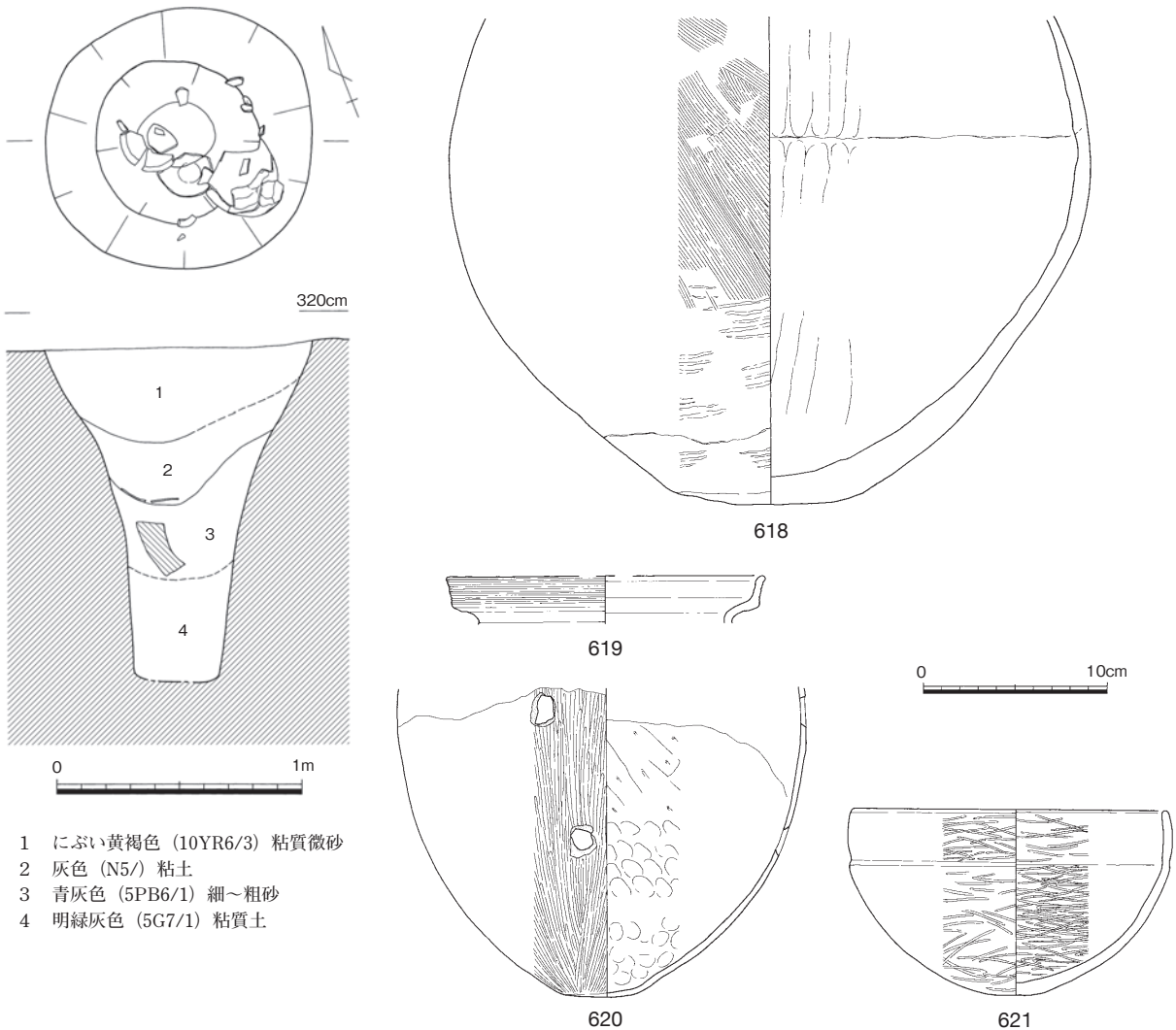
- | | | |
|-----------------------|-------------------------|-------------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 微砂 | 4 にぶい黄橙色 (10YR6/3) 粘質微砂 | 7 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘質微砂 |
| 2 にぶい黄褐色 (10YR5/3) 微砂 | 5 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質土 | 8 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂 |
| 3 にぶい褐色 (7.5YR6/3) 微砂 | 6 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂 | 9 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土 |

第255図 井戸7 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

井戸8 (第240・241・256図、図版26)

41B区の北側において検出した遺構で、溝63が近接し、溝64と溝65の間に位置する。上面の規模は、長軸108cm、短軸106cmで、平面形は円形である。検出面からの深さは136cmで、標高は168cmを測る。砂層まで掘り込こまれた底面から、壁面は急峻に立ち上がりを見せた。埋土は、粘質の上層(第1～2層)と砂質の下層(第3～4層)に分かれ、遺物は主に上層から出土した。また下層には25cmほどの石が置いてあった。

出土遺物には618～621がある。618は壺で、口縁部以外はほぼ完形である。底部の稜線がわずかに残る。619・620は甕で、620の胴部には2つの穿孔がある。621は鉢でほぼ完形である。これらの土器の時期は、百・古・Iであり、遺構の時期も同様になる。(小林)

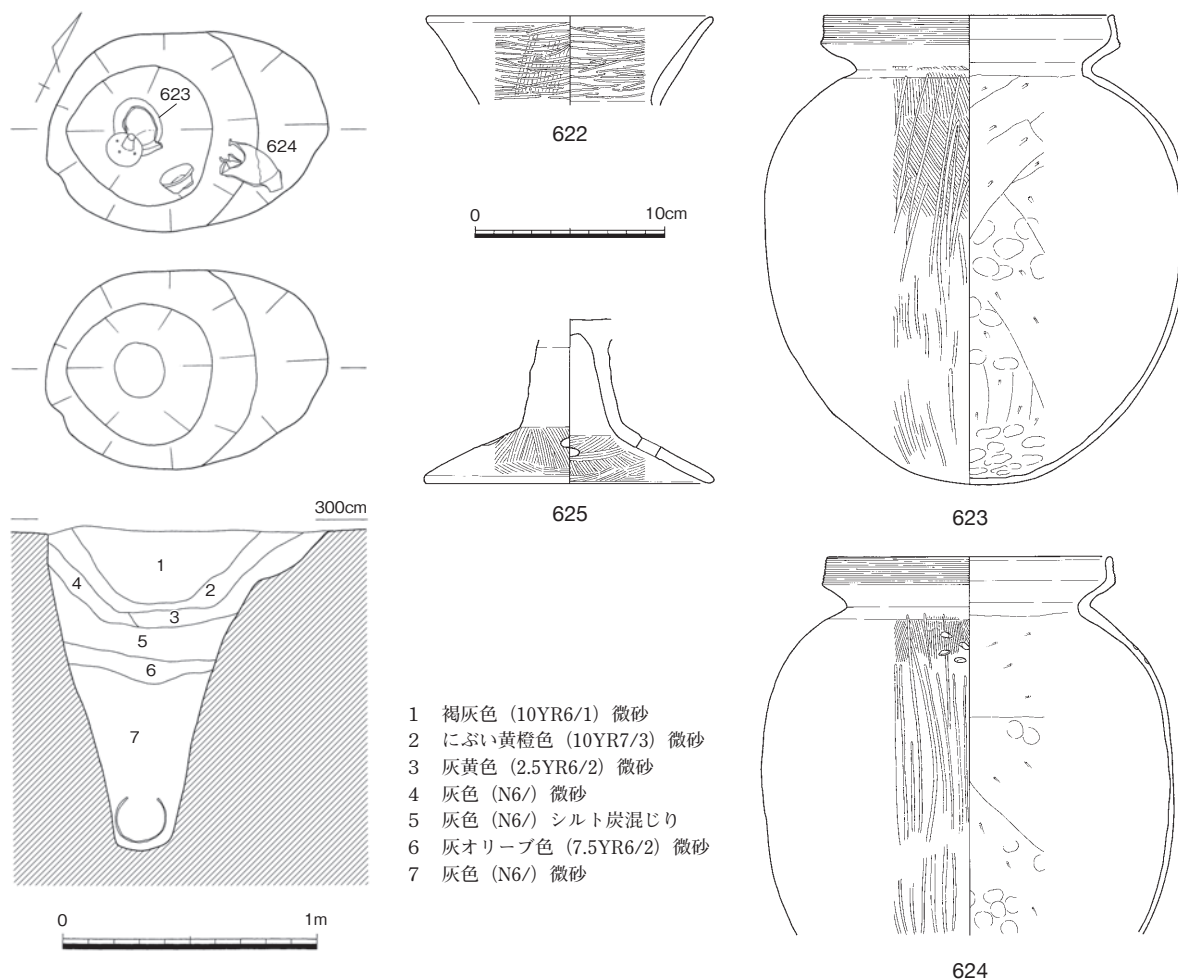


- 1 にぶい黄褐色 (10YR6/3) 粘質微砂
- 2 灰色 (N5/) 粘土
- 3 青灰色 (5PB6/1) 細～粗砂
- 4 明緑灰色 (5G7/1) 粘質土

第256図 井戸8 (1/30)・出土遺物 (1/4)

井戸9 (第240・241・257図、図版26)

41B区において、溝65を調査後の下層掘り下げにおいて検出した井戸である。検出面での規模は、長軸が110cm、短軸は78cmで、深さ126cmである。検出面から深さ20cmまでの上層は、断面が緩やかな椀状を呈し、堆積土の第1～4層もレンズ状の堆積状況を示す。一方、それより下層では、断面形状も筒状に近くなり、底面付近ではわずかに直径20cm余りときわめて狭くなる。また、第5層以下の堆



第257図 井戸9 (1/30)・出土遺物 (1/4)

積土は水平堆積となる。

出土遺物には、土師器の高杯622・625、甕623・624がある。このうち623は、井戸底からの出土したことから、「つるべ」として使用されたものか、井戸廃絶時の祭祀に用いられたものと考えられる。これらの遺物からみて、この井戸の時期は、百・古・Iである。(弘田)

4 土坑

土坑115 (第240・241・258図)

31B区の南西部、土坑17から2m程西で検出された遺構で、直径50cm前後の円形の平面形を呈し、平坦な底面までの深さは17cm程を測る。埋土は灰白色粘質土が1層で、土器などの遺物がなく、性格等は不明な土坑である。時期は、検出状況などから古墳時代と考えられる。(内藤)

土坑116 (第240・241・259図)

31B区の南西部、土坑17のすぐ西で検出された、70×42cm程の規模の不整形な遺構である。検出面から9cm程の底面は凸凹で、遺物はなく性格等は不明である。埋土は灰白色粘質土が1層であるが、複数の穴が合わさった遺構とも想定される。時期は、検出状況から古墳時代頃と考えられる。(内藤)

土坑117 (第240・241・260図)

31B区南西部の調査区境で検出された不整形の土坑で、北東側は調査区外に及んでいる。規模は、

東西62cmで南北は100cm以上を測る。埋土は、灰白色粘質土が1層であるが、複数の穴の集まりなのか底面は凸凹で、性格は不明である。時期は、検出状況から古墳時代頃と考えられる。(内藤)

土坑118 (第240・241・261図)

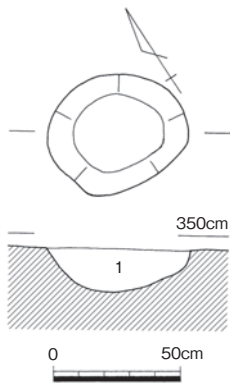
31B区の南部、土坑17の南西2mで検出された遺構である。規模は南北65cm、東西47cm程の歪んだ楕円形を呈し、深さは一段低い南端で12cmを測る。埋土は淡黄色粘質土が1層で、土器などの遺物は認められなかった。性格等は不明であるが、検出状況などから古墳時代頃と考えられる。(内藤)

土坑119 (第240・241・262図)

31B区の南部、土坑17の南西1mで検出された遺構で、規模は南北49cm、東西31cmを測る。やや歪んだ楕円形を呈し、深さは少し深い北側でも5cmを測るのみのごく浅い土坑である。底面は平坦で、埋土の灰白色粘質土から土器の細片が若干出土している。時期は古墳時代と考えられる。(内藤)

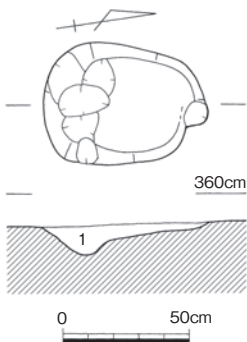
土坑120 (第240・241・263図)

33C区の北端、溝48の西肩部に位置する土坑である。規模は84×66cmのやや歪んだ楕円形を呈する。深さは10cm程と浅く、底面は平坦である。埋土は、黄灰色微砂で下層には洪水砂が混じる。時期は、検出状況などから古墳時代と考えられる。(内藤)



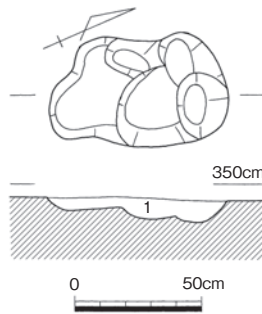
1 灰白色 (5Y7/1) 粘質土

第258図 土坑115 (1/30)



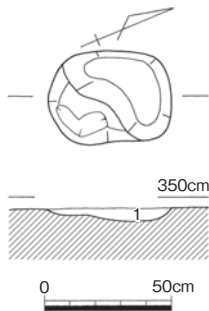
1 淡黄色 (2.5Y8/3) 粘質土

第261図 土坑118 (1/30)



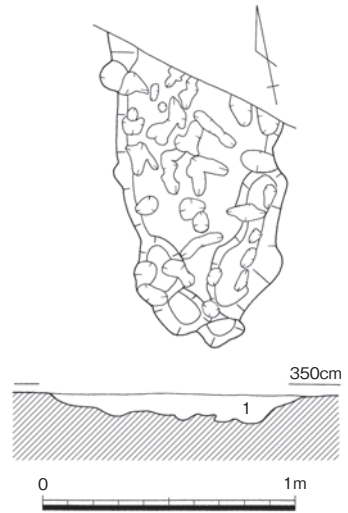
1 灰白色 (5Y7/1) 粘質土

第259図 土坑116 (1/30)



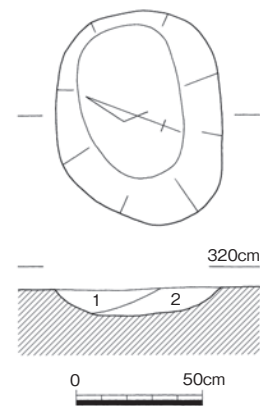
1 灰白色 (7.5Y7/1) 粘質土

第262図 土坑119 (1/30)



1 灰白色 (5Y7/1) 粘質土

第260図 土坑117 (1/30)



1 黄灰色 (2.5Y5/1) 微砂
2 黄灰色 (2.5Y5/1) 微砂 浅黄色 (2.5Y7/3) 粗砂 (洪水砂) が多く混じる

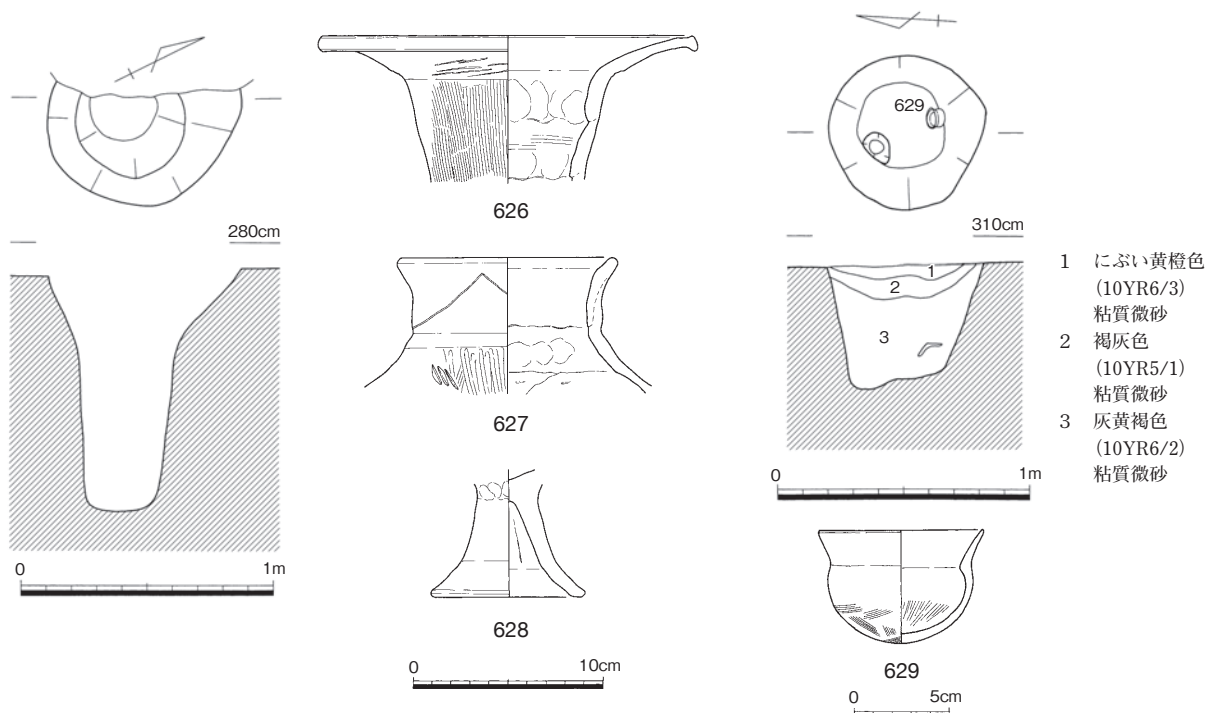
第263図 土坑120 (1/30)

土坑121 (第240・241・264図)

39B区の南端近く、井戸4の西4m程で検出された、西半部が大きく削平された遺構である。直径75cm程の円形の掘り方が想定され、深さは95cmを測る。底の高さは海拔176cmで、やや小形なものの井戸が考えられる。出土遺物のうち626は口唇部が「ハ」の字に開く、627は上方に立ち上がる口縁が僅かに開く壺、628は高杯の脚部片である。時期は出土遺物などから百・古・Iと考えられる。(内藤)

土坑122 (第240・241・265図、図版26)

41A区の西側において検出した遺構で、溝34の北側に位置する。上面の規模は、長軸63cm、短軸60cmで、平面形は円形を呈していた。検出面からの深さは50cmで、標高253cmを測る底面は一部に凹凸があり、壁面は急峻に立ち上がる。629は小型の鉢で、時期は、百・古・Iである。(小林)



第264図 土坑121 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第265図 土坑122 (1/30)
・出土遺物 (1/4)

5 溝

溝44 (第240・241・266・267図)

32B・C、33B・C区で検出した、百原尾島3溝81、百原尾島2溝156に続く溝である。溝45に切られている。埋土は単一層で、遺物は出土していない。検出面と溝45との切り合い関係などから、古墳時代の遺構と考えられるが、詳細な時期については不明である。(團)

溝45 (第240・241・266・268図)

32B・C、33B・C区で検出した、百原尾島4溝141に続く溝である。北端での底面海拔高が302cmであり、百原尾島溝141の南端が287cmであることから、ゆるやかに南流する溝であることがわかる。時期は、出土した杯身630から7世紀前半と考えられる。(團)

溝46 (第240・241・266・269図)

32B・C、33B・C区で検出した溝で、溝45によって切られている。埋土は黄灰色微砂の単一層で、

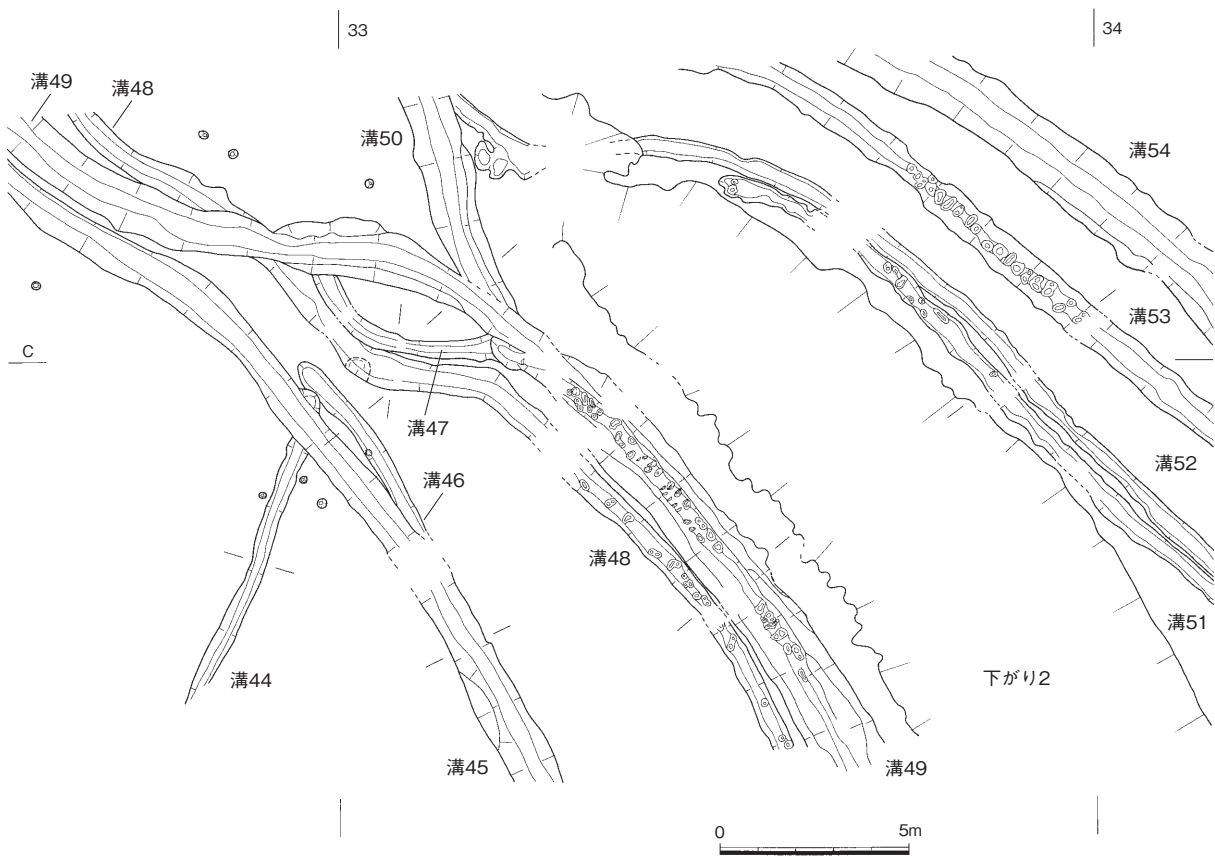
深さが約4cmと浅い溝であった。遺物は出土していないが、検出面や溝45との切り合い関係から、古墳時代の溝と考えられる。詳細な時期については不明。(團)

溝47 (第240・241・266・270図)

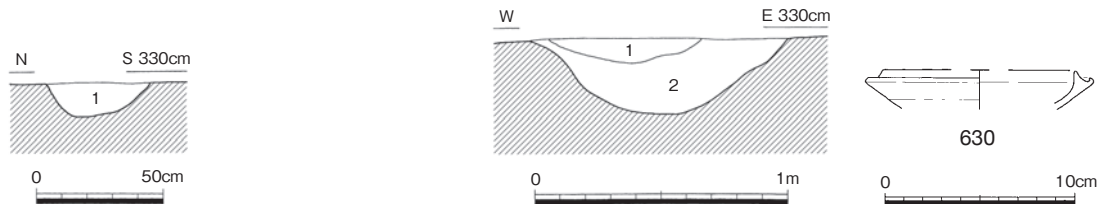
32B・C、33B・C区で検出した溝で、北端と南端がともに溝49によって切られている。埋土は溝46と同様の黄灰色微砂の単一層で、深さも6～8cmと浅い。出土遺物はないが、検出面や溝49との切り合いなどから、古墳時代後期の溝と考えられる。(團)

溝48 (第240・241・266・270図)

32B・C、33B・C区で検出した溝で、一部が溝49に切られているが、併走する溝である。溝の底面には凹凸の見られる箇所があり、溝を掘削した際の工具の痕跡である可能性がある。出土遺物はないが、溝49に切られていることと検出面から古墳時代後期の溝と考えられる。(團)



第266図 溝44～54位置図 (1/200)



1 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘性微砂
洪水砂を少量含む

第267図 溝44 (1/30)

1 にぶい黄色 (2.5Y6/3) 微砂 灰白色 (2.5Y8/1) 微砂のラミナ
2 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂

第268図 溝45 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝49 (第240・241・266・271図)

32B・C、33B・C区で検出した溝で、溝47・48・50を切っている。百原尾島4溝142に続く溝である。溝48と併走し、溝50の上層に延びる溝である。出土遺物には須恵器杯身631があり、この遺物から古墳時代後期の遺構であることがわかる。(團)

溝50 (第240・241・266・271図)

32B・C、33B・C区で検出した溝で、百原尾島4溝143に続く溝である。底面には凹凸が見られ、これらは溝48同様に工具の痕跡の可能性が考えられる。出土遺物は無いが、溝49に切られていることなどから、古墳時代後期の遺構と考えられる。(團)

溝51 (第240・241・266・272図)

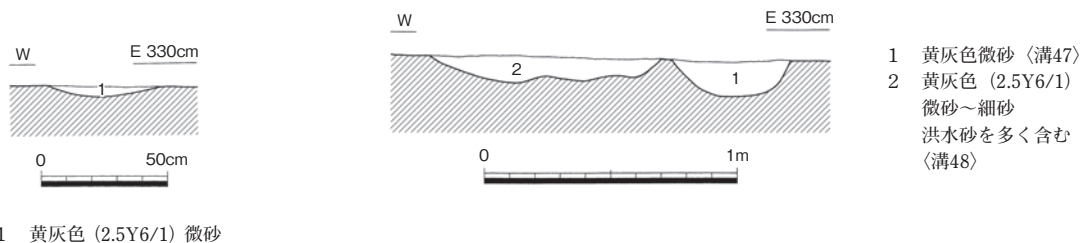
33B・C、34C区で検出した溝で、百原尾島4では溝52とともに溝144として報告されているものである。底面には若干の凹凸が見られる。下がり2の下で検出していることと、出土している杯身632から、古墳時代後期の溝と考えられる。(團)

溝52 (第240・241・266・272図)

33B・C、34C区で検出した溝で、前述した溝51といっしょに百原尾島4溝144として報告されているものである。北端部分で溝50と下がり2に切られている。出土遺物はないが、検出状況などから古墳時代後期の溝であると考えられる。(團)

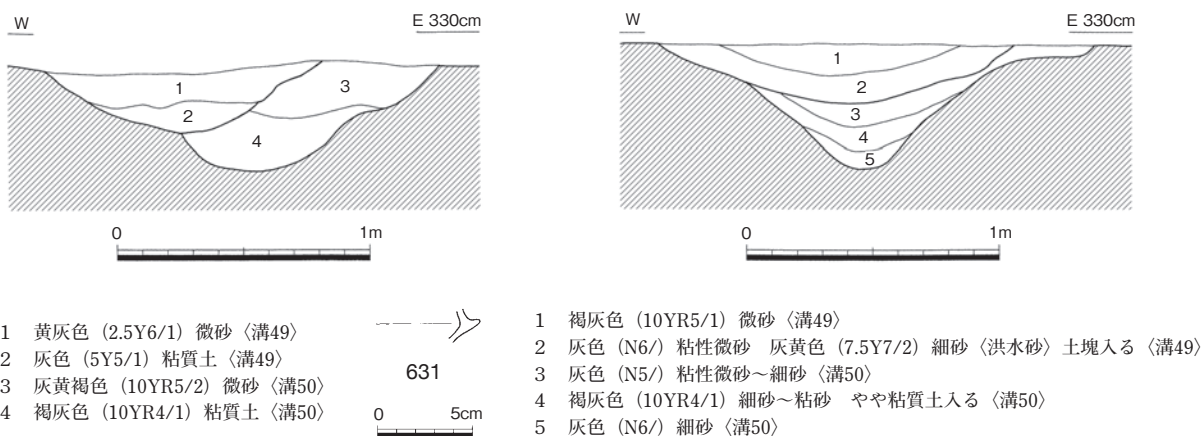
溝53 (第240・241・266・272図)

33B・C、34C区で検出した溝で、百原尾島4溝145・百原尾島2溝218に続く溝である。規模は上端幅62~94cm、深さ16~24cmを測る。底面の一部には凹凸が見られる。出土遺物はないが、検出状況



第269図 溝46 (1/30)

第270図 溝47・48 (1/30)

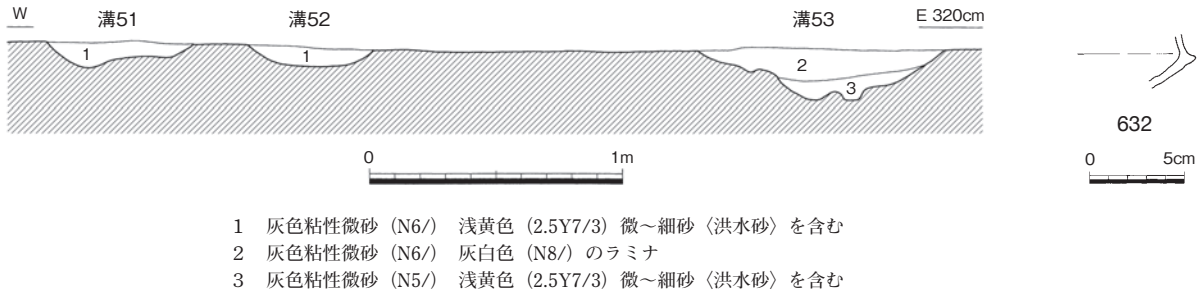


第271図 溝49・50 (1/30)・溝49出土遺物 (1/4)

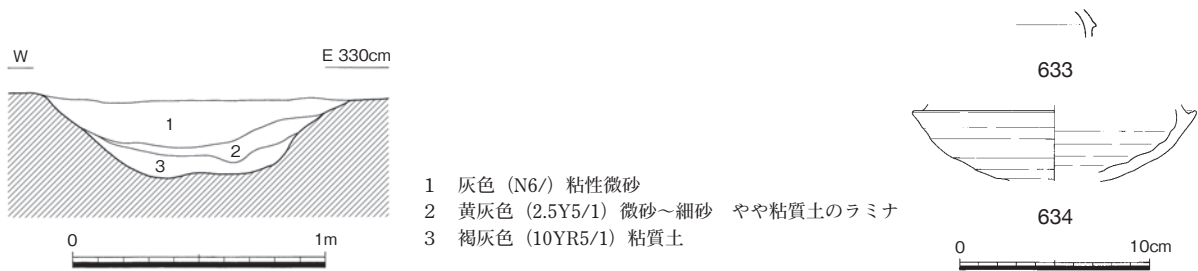
などから古墳時代後期の遺構であると考えられる。(團)

溝54 (第240・241・266・273図)

33・B・C、34C区で検出した溝で、百原尾島4溝147に続く溝である。溝55を切っている。規模は上端幅132～153cm、深さ35～40cmを測り、断面形は逆台形を呈している。出土遺物には、須恵器の杯蓋633、杯身634が出土している。遺物の年代からは6世紀後半の遺構と考えられるが、溝55を切っていることから、6世紀末～7世紀初頭の時期の遺構であろう。(團)



第272図 溝51～53 (1/30)・溝51出土遺物 (1/4)



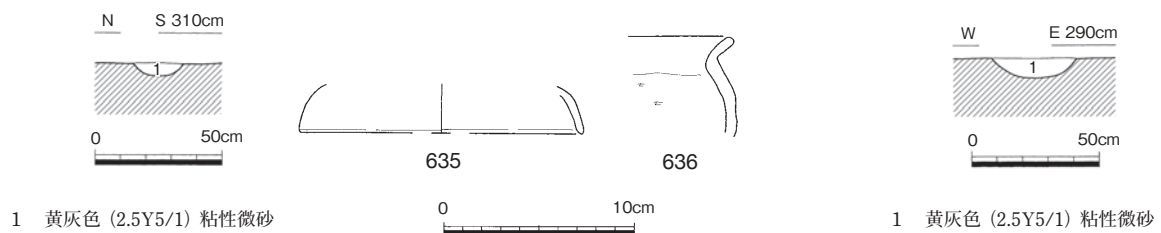
第273図 溝54 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝55 (第240・241・274図)

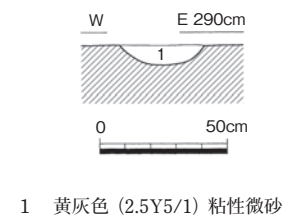
34・35C区で検出した溝で、溝54にきられている。全長約10m程度の検出にとどまった。上端幅18～50cm、深さ2～7cmを測る溝である。出土遺物には、須恵器杯蓋635や土師器甕636がある。これらの遺物と切り合い関係から、6世紀末～7世紀初頭の時期の遺構と考えられる。(團)

溝56 (第240・241・275図)

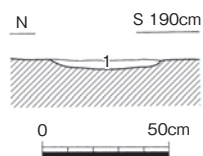
34～36C区の低位部を北西－南東方向に伸びる溝である。埋土は黄灰色微砂の単一層であり、深さ2～7cmと浅い。出土遺物はないものの、検出状況から古墳時代の遺構であると判断した。古墳時代後期の溝55と埋土が似ているため、古墳時代後期の溝の可能性はある。(團)



第274図 溝55 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第275図 溝56 (1/30)



1 灰黄褐色 (10YR4/2) 微～細砂

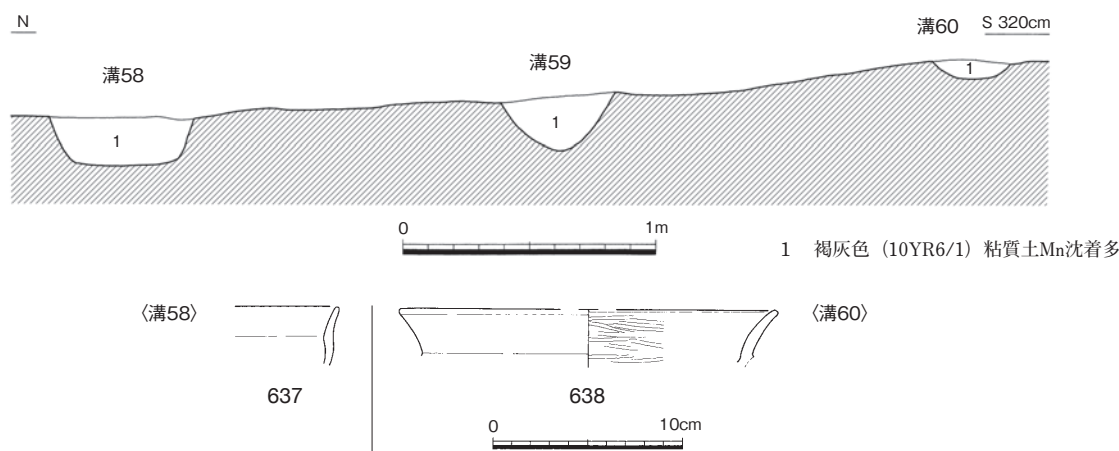
第276図 溝57 (1/30)

溝57 (第240・241・276図)

37B区の低位部を東西方向に延びる溝であるが不整形な溝状を呈している。全長3m程度の部分的な検出に留まった。出土遺物は無いが、検出状況から古墳時代の溝であると考えられる。(團)

溝58～60 (第240・241・277図)

38B・C区に位置する、北東―南西方向に延びる、3条が平行して延びる溝である。この場所は弥生時代以前には低位部と微高地の境にあたる場所の、低位部側に位置しているため、基盤層は洪水砂となる。旧来の微高地と低位部の境の目安とする意図があると考えられるが、西端の溝58と溝60では、底面の標高差が33cmあり、溝の規模には拘泥していないようである。溝58から鉢637の小片が、溝60から壺の口縁部638が出土している。これらの遺物から、時期は百・古・Iであると考えられる。(團)



第277図 溝58～60 (1/30)・溝58・60出土遺物 (1/4)

溝61 (第240・241・278図)

39・40B区の竪穴住居群の西側を南北に延びる溝である。出土遺物には甕の口縁部分の639などがあるが、いずれも細片で少量であった。竪穴住居4の壁体溝を切っていることから、竪穴住居4よりは新しい時期の遺構であるが、遺物から百・古・Iの範疇の遺構と考えられる。(團)

溝62 (第240・241・279図)

39B・C区の溝で、東西方向に延びる溝である。深さ1～3cmと浅く、不整形な溝状の遺構である。百・古・Iの井戸3を切っていることから、出土遺物はないものの、検出状況から古墳時代のものと考えられる。(團)

溝63 (第240・241・280図)

微高地上の40・41B区で検出した溝で、幅が48～75cm、深さは4～8cmを測る。北西から東南方向にかけて流走し、微高地縁辺に並行して走る溝64～66とは直交する。集落の排水ないしは区画のための溝であろうか。時期は古墳時代前期と考えている。(弘田)

溝64 (第240・241・281図)

微高地上の41A・B区で検出した溝で、微高地縁辺にほぼ並行するように東西方向に走る。規模は、幅が30～173cm、深さは3～10cmである。

竪穴住居10や溝63よりは古く、時期は古墳時代前期と考えている。(弘田)

溝65 (第240・241・282図、図版18-2)

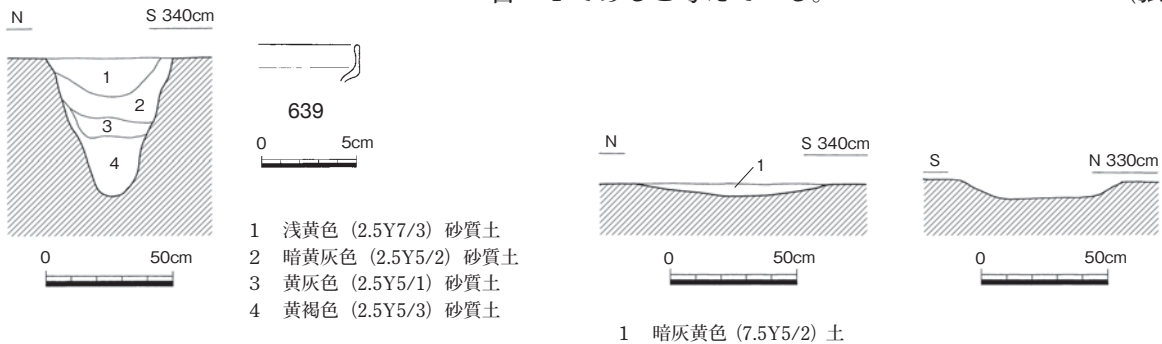
微高地上の41A・B区で検出した溝で、微高地縁辺に並行して東西方向に走る。規模は、幅が45～192cm、深さは11～45cmである。機能としては、集落を区画する溝であろうか。

上層より6世紀代の須恵器片も出土しているが、上層の包含層のものと判断している。土師器甕の口縁部640からみて、時期は古墳時代前期と考えている。(弘田)

溝66 (第240・241・283図、図版18-2・26)

微高地上の41A・B区で検出した溝で、規模は、幅が70～255cm、深さは8～36cmである。溝65と同様に微高地縁辺に並行して東西方向に走り、集落を区画する溝の可能性を考える。

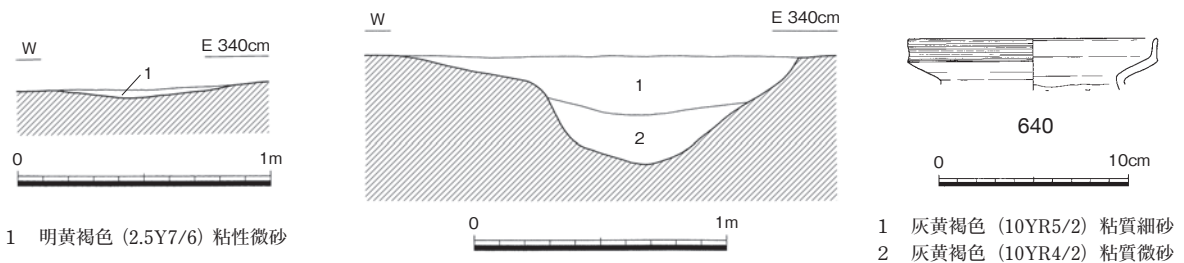
出土遺物として土師器641～643を図示している。弥生時代後期末の土器も含むが、溝の時期は百・古・I であると考えている。(弘田)



第278図 溝61 (1/30)・出土遺物 (1/4)

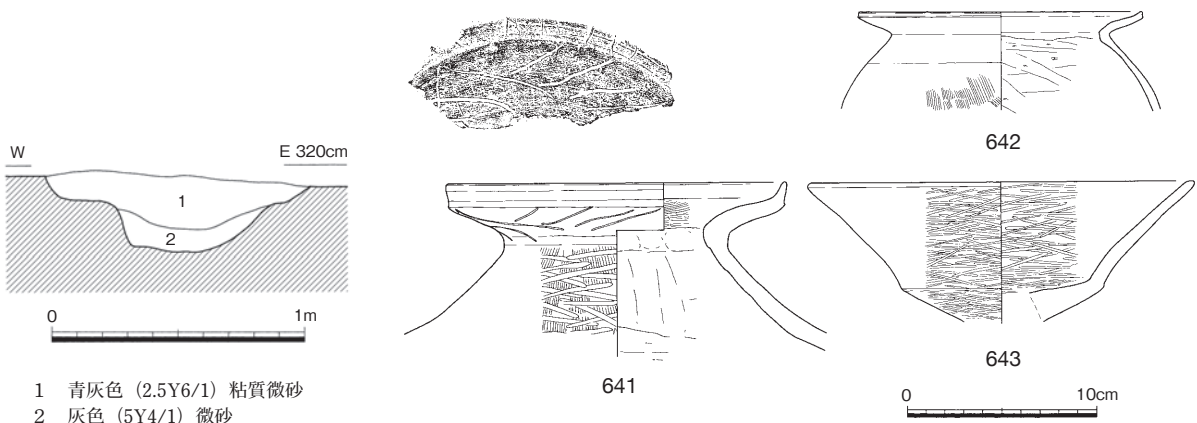
第279図 溝62 (1/30)

第280図 溝63 (1/30)



第281図 溝64 (1/30)

第282図 溝65 (1/30)・出土遺物 (1/4)

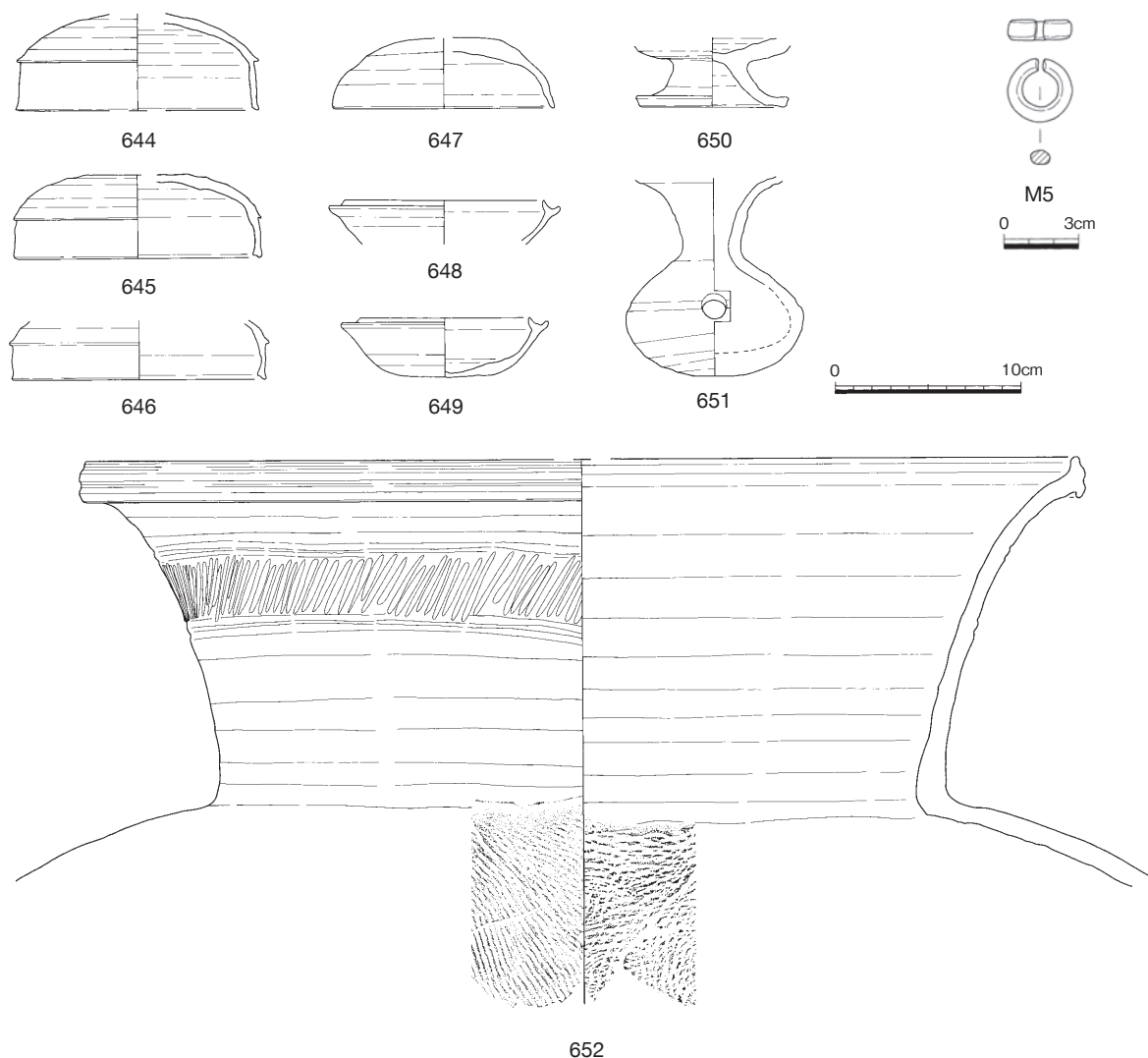


第283図 溝66 (1/30)・出土遺物 (1/4)

6 下がり

下がり2 (第240・241・284図、図版26・29)

33C区の、溝49と溝51の間で検出した、深さ15cm程度の浅いたわみ状の遺構である。壁面の観察から、周辺の溝がこの下がりの下層で検出されていることが理解でき、これらの溝群が、下がり2よりも古い時期の遺構であることがわかる。遺物には、土器644~652、耳環M5がある。このなかで最も新しいと考えられる遺物は壺651で、7世紀半ば頃の年代が考えられる。このことから、下がり2は7世紀半ばに埋没したと考えられる。 (團)



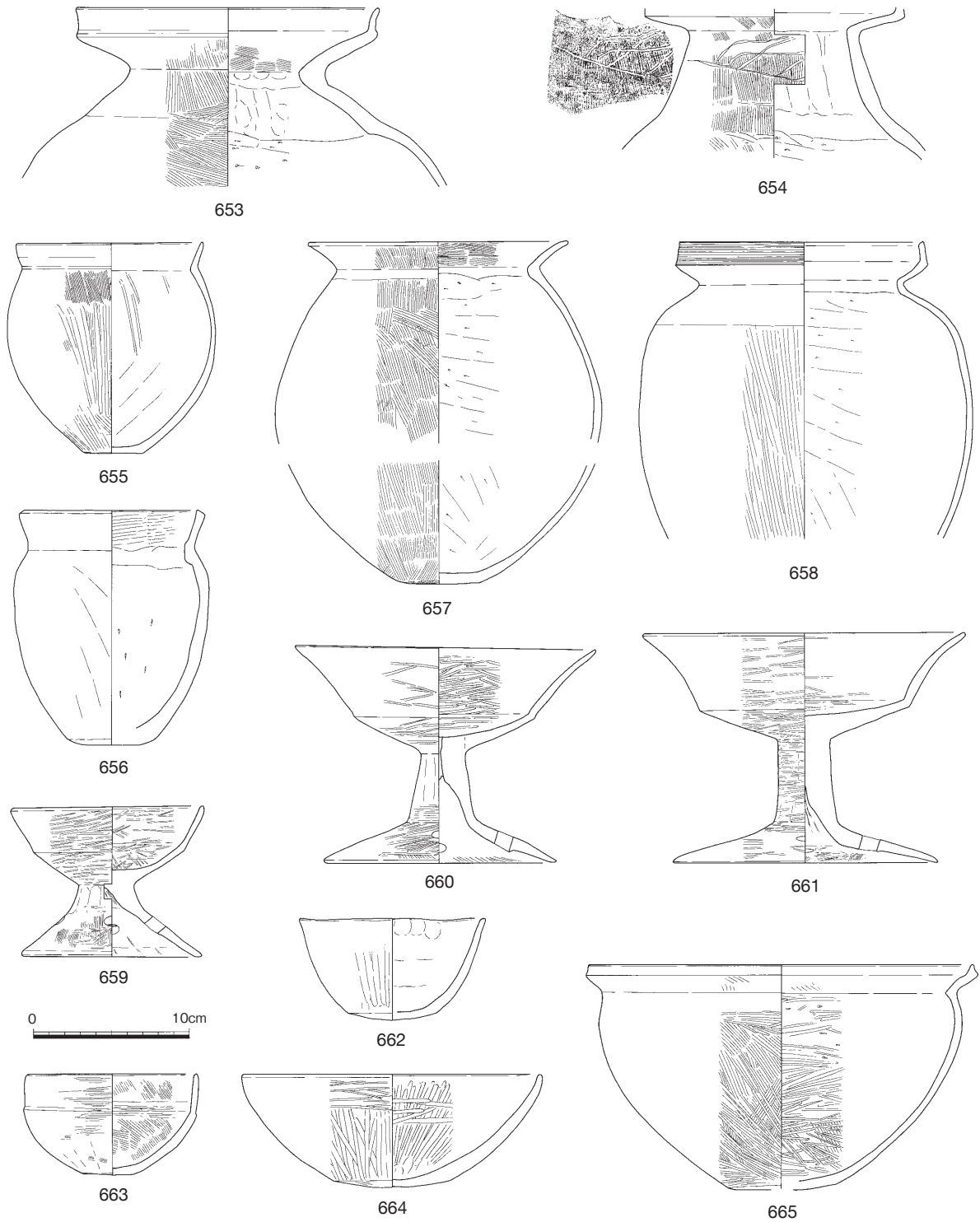
第284図 下がり2出土遺物 (1/3・1/4)

下がり3 (第240・241・285図、図版26)

41A区の南側から41B区東側の溝66の両脇において、長さ約8mの範囲内に土器集中か所が6~7箇所存在した。これらの土器の大半は、1個体分がその場で割れた状態で出土した。調査区東側壁面にまだ多量の土器が混在するため、調査区外に伸びていた可能性が残る。この土器集中出土は、弥生後期水田の上層にある洪水砂上層付近に分布していた。土器量が多いことから、何らの遺構に伴う可

能性を考えて調査したが、遺構は検出出来ず、洪水砂層中もしくは上層に含まれることが判明した。

弥生時代後期水田に向かう微高地の下がり、溝66付近の標高300cm付近から40cmほど下り水田にいたるが、下がり3はまさにこの付近の上層にあたる。出土した土器が微高地から廃棄されたものか、洪水砂に含まれたものが微高地際付近で堆積したものは不明であるが、図示した以外にも多くの土器が出土しており、いずれも百・後・IV～百・古・Iの範疇にある。(小林)

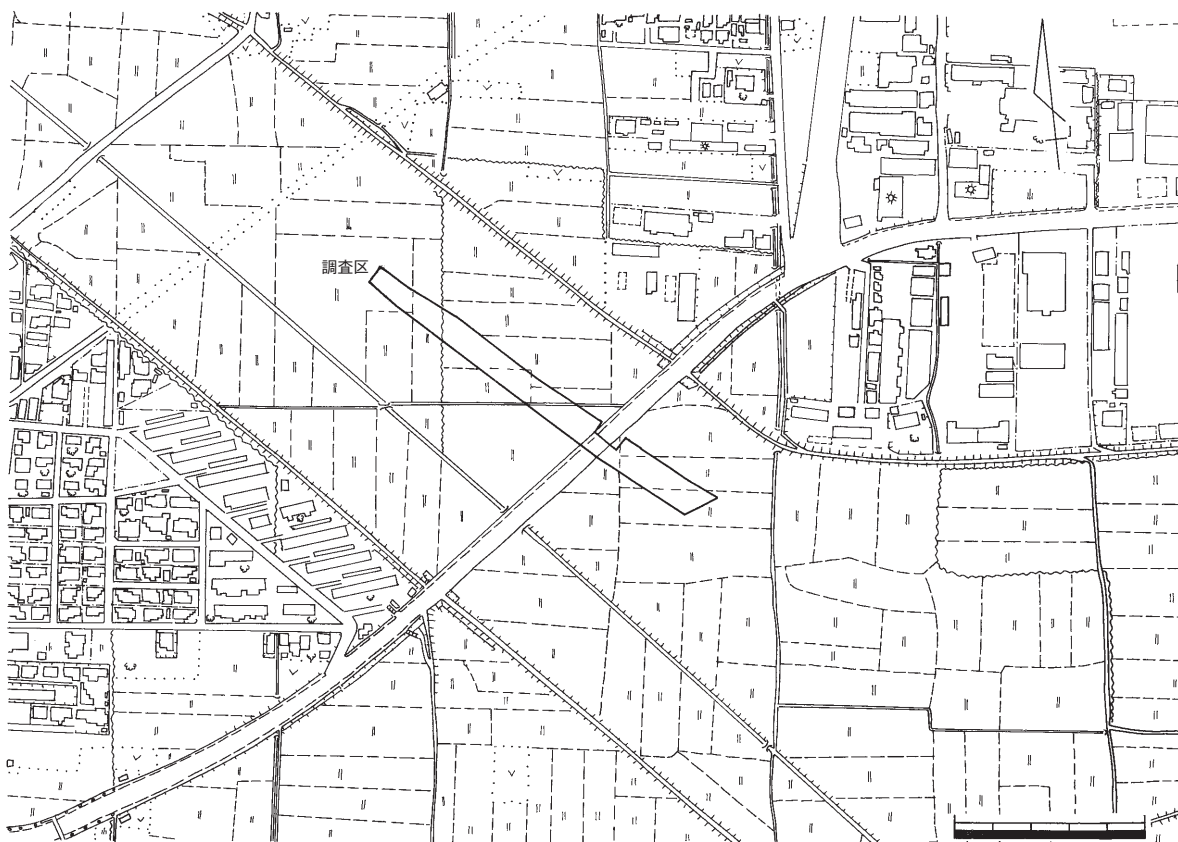


第285図 下がり3出土遺物 (1/4)

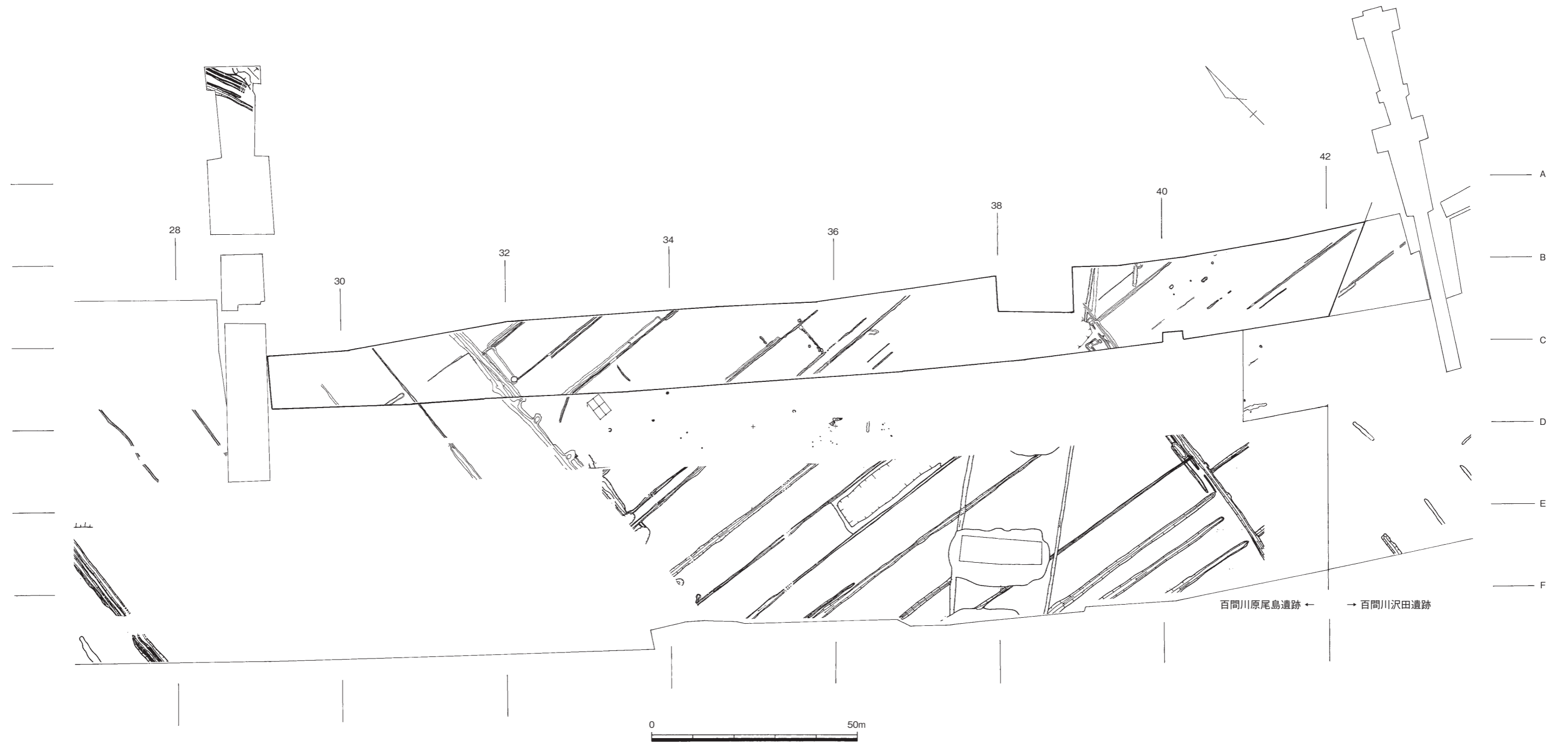
第6節 中世以降の遺構・遺物

1 概要

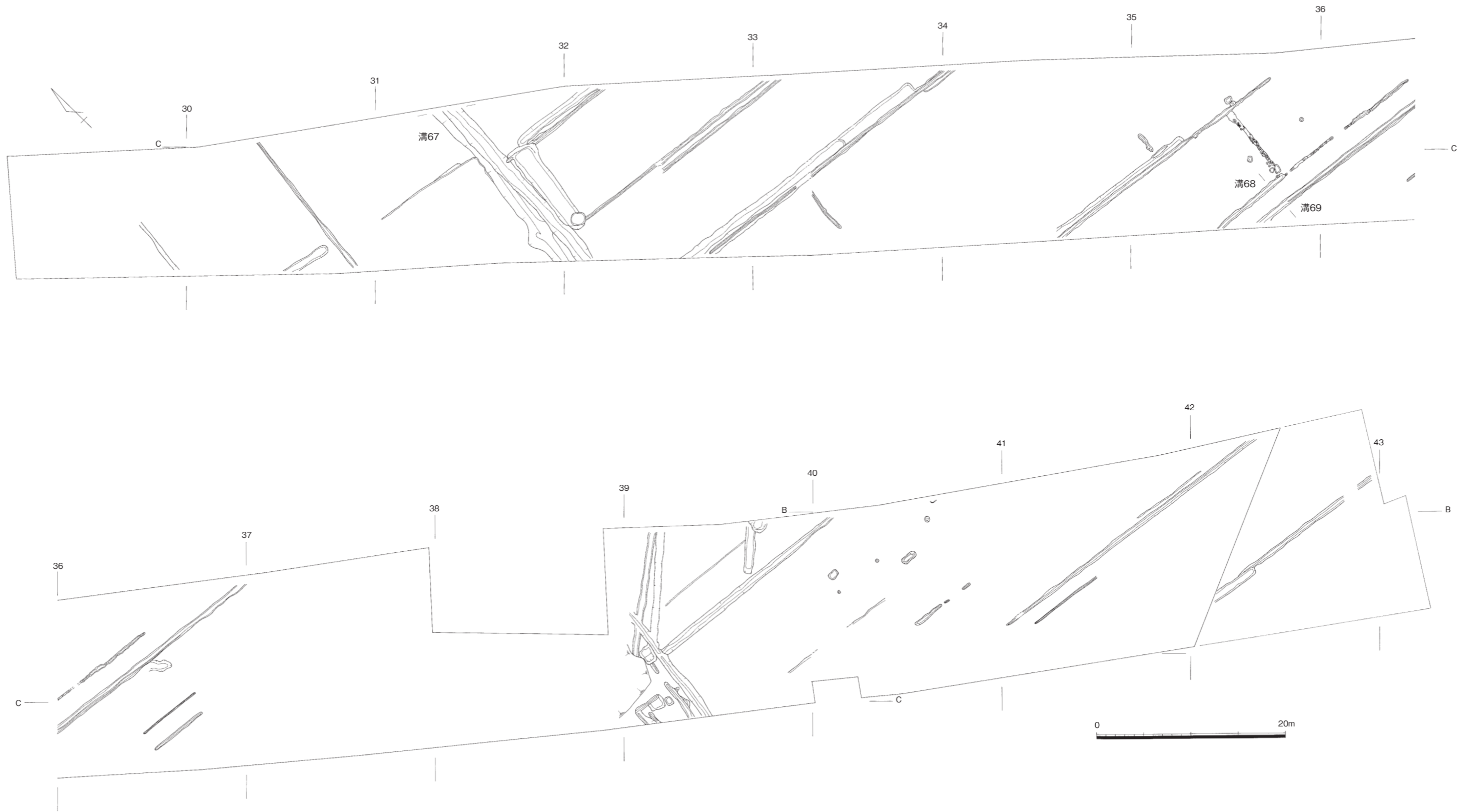
個別の遺構として掲載したのは、溝67～69の3条の溝のみである。これら3条の溝は、百間川の改修工事が行われる以前に周辺に残存していた条里地割のうち、坪境の溝と合致するものである。条里地割に伴う溝は、南北方向の溝67については改修直前まで場所を踏襲しながら改修されて使用されていたことがわかった。この溝からは小片ではあるが土師器碗の高台が出土するなど、中世まで遡る可能性が考えられる。東西方向の溝68・69については、浅い2条の溝でもって区画している点が南北方向のものとは異なる。この東西方向の坪境に関しては、調査区の壁面の観察からは、中世の段階ではどのような溝であったかは不明である。全体図にのみ掲載している溝は、近世以降、改修工事前まで使用されていた水田の区画にともなうものと考えられ、多数検出している。特に改修直前まで使われていた溝は、埋土が造成土やこぶし大の礫を充填した暗渠である。これらは第286図の地図に残る水田の区画の方向と合致している。調査区の南側では、中世と考えられる掘立柱建物（百原尾島4建物13）や土坑（百原尾島4土坑92）が検出されているため、この時期の集落が北側へ広がることも想定されたが、調査の結果、包含層からの中世の遺物の出土も限られていたことなどからも、中世の遺構としては条里に伴う溝のみであったと考えざるを得ない。 (團)



第286図 昭和52年に残存した条里地割と調査区 (1/2,000)



第287図 中世以降遺構全体図 (1/1,000)

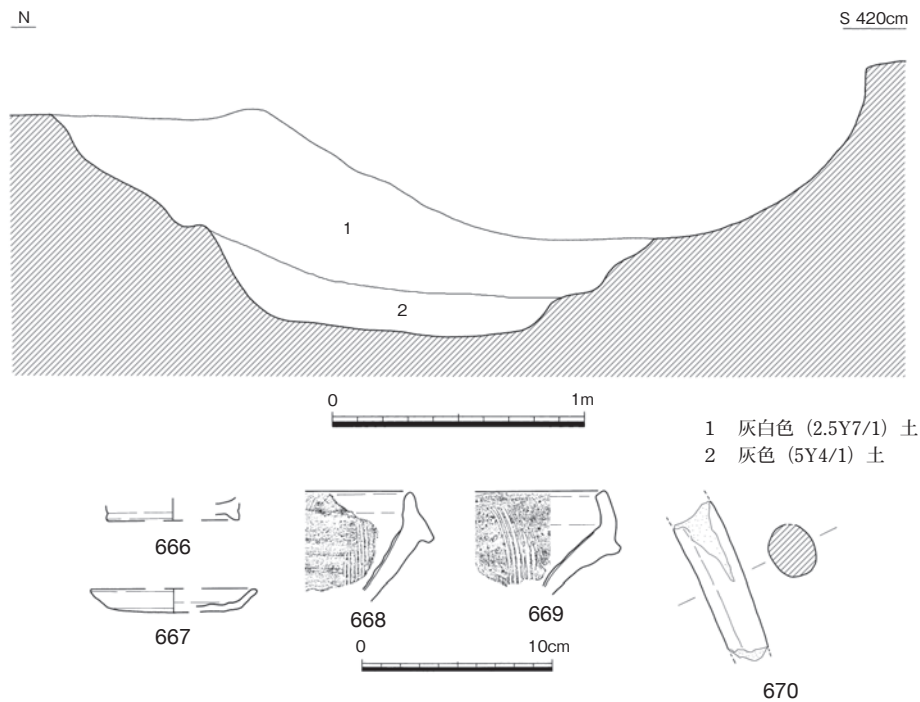


第288図 中世以降遺構配置図 (1/400)

2 溝

溝67 (第287～289図、図版19-2)

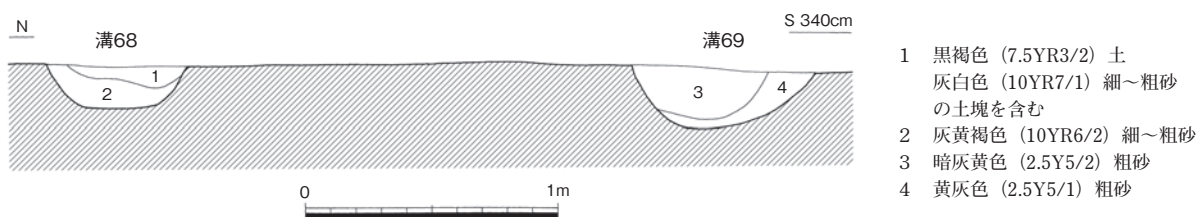
B31区の南西からC32区の南西へ向けて走る溝で、百原尾島2溝227、百原尾島3溝82に接続する。南北の坪境をなし、舟屋樋門が現状に改修されるまで機能していた。上幅2.2m、深さ89cmを測り、2度の掘り返しが認められる。東側には長さ10.7m、幅3.2m、深さ0.5mの長楕円形をなす土坑が付設されている。埋土から土師器の碗666、皿667、鍋670、備前焼の播鉢668・669が出土しており、14～15世紀までさかのぼる可能性がある。(亀山)



第289図 溝67 (1/30)・出土遺物 (1/4)

溝68・69 (第287・288・290・292図、図版19-3)

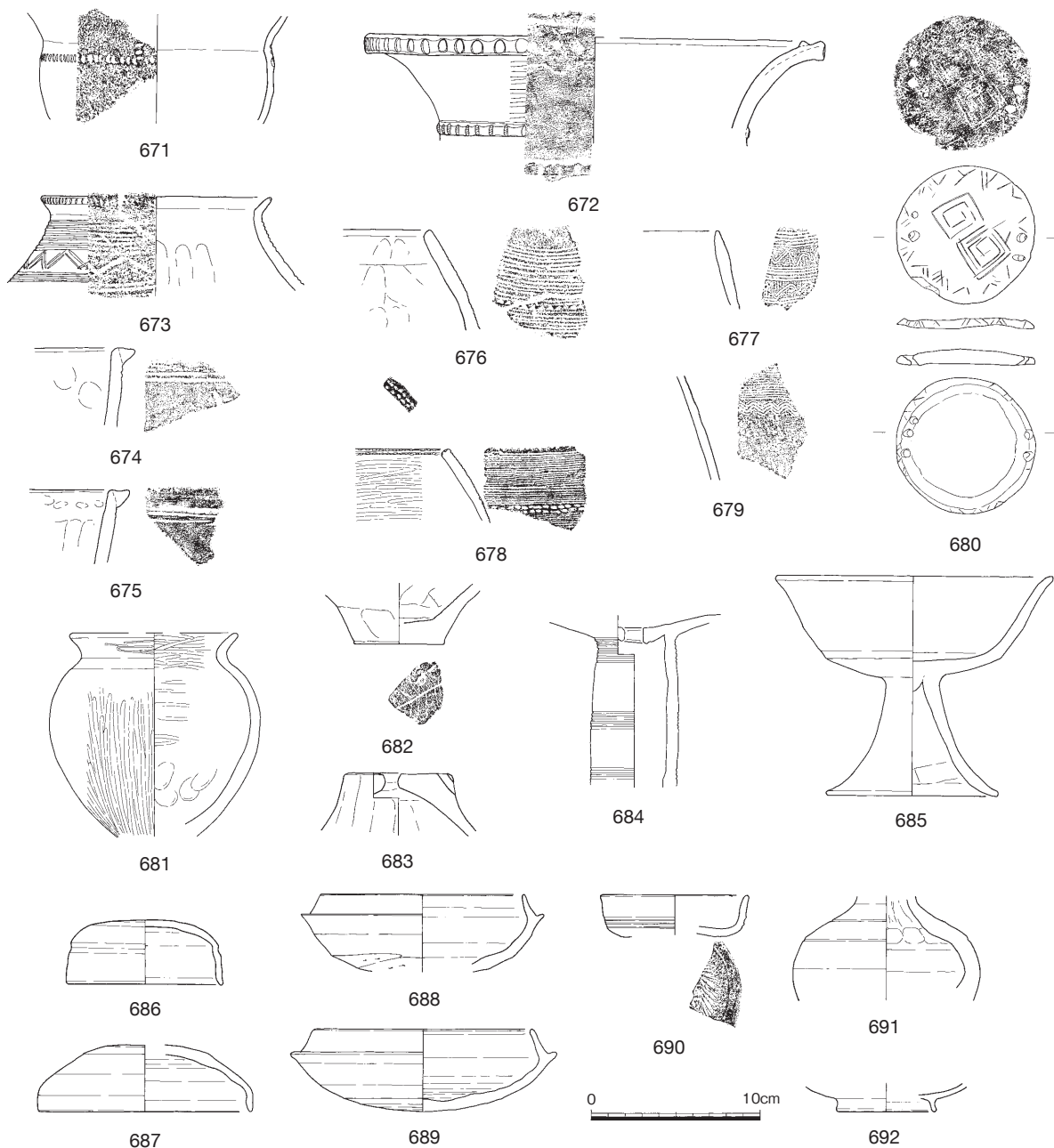
35C区の東から36B区の東へ向けて、約1.8mの間隔を保ちながら東西の坪境を併走する溝で、百原尾島2溝228・229に接続する。幅75cm、深さ17cmを測る溝68と、幅53cm、深さ24cmを測る溝69の検出面には14cmほどの比高が認められるが、調査区の壁面を観察するとその間に高さ18cmの盛り土が観察された。これは、第286図に見える国道と左岸堤防を東西に結ぶ道路に相当し、2つの溝はその側溝として機能したものと思われるが、その年代がどこまでさかのぼるかは明らかでない。(亀山)



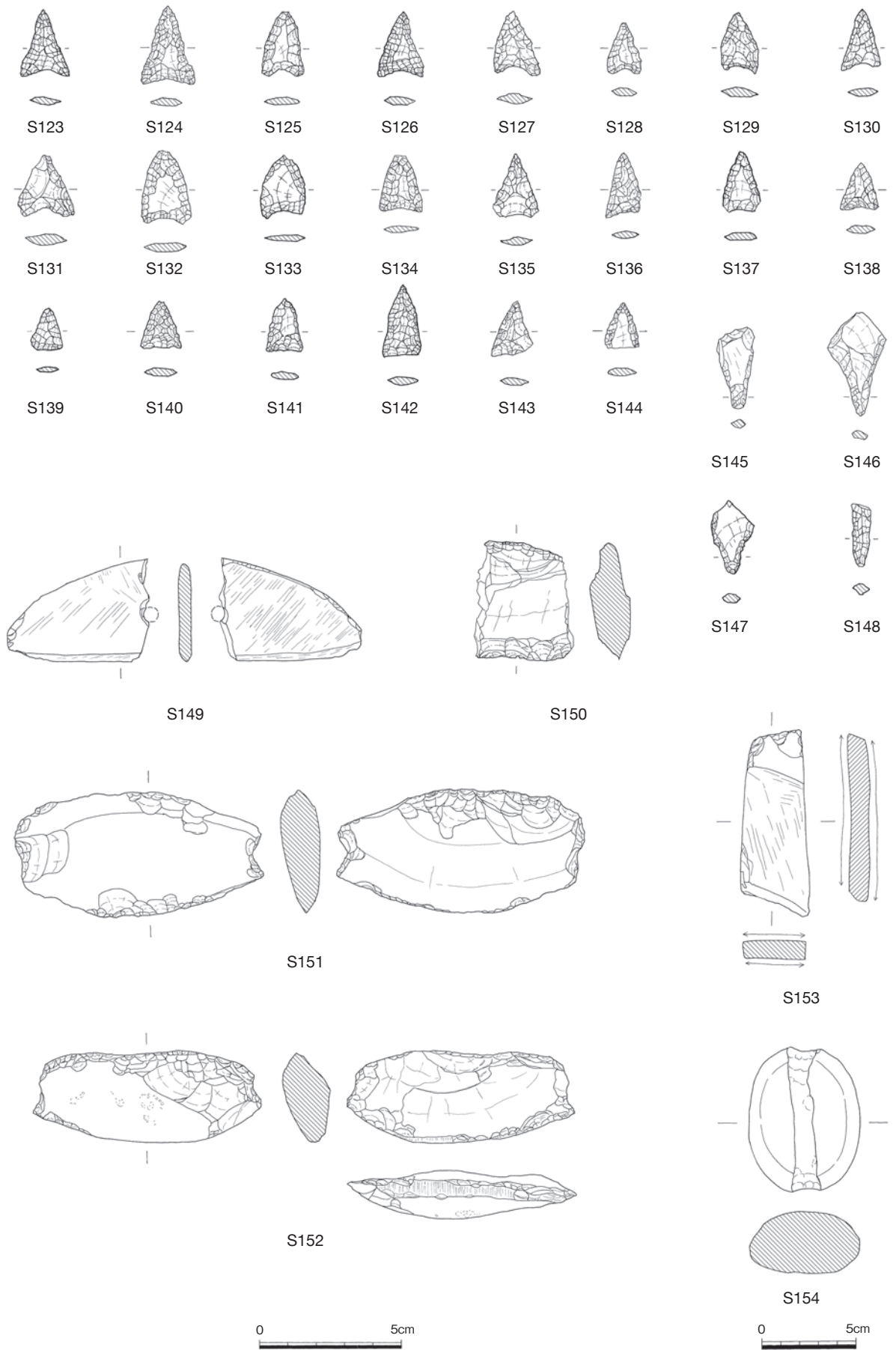
第290図 溝68・69 (1/30)

第7節 包含層の遺物

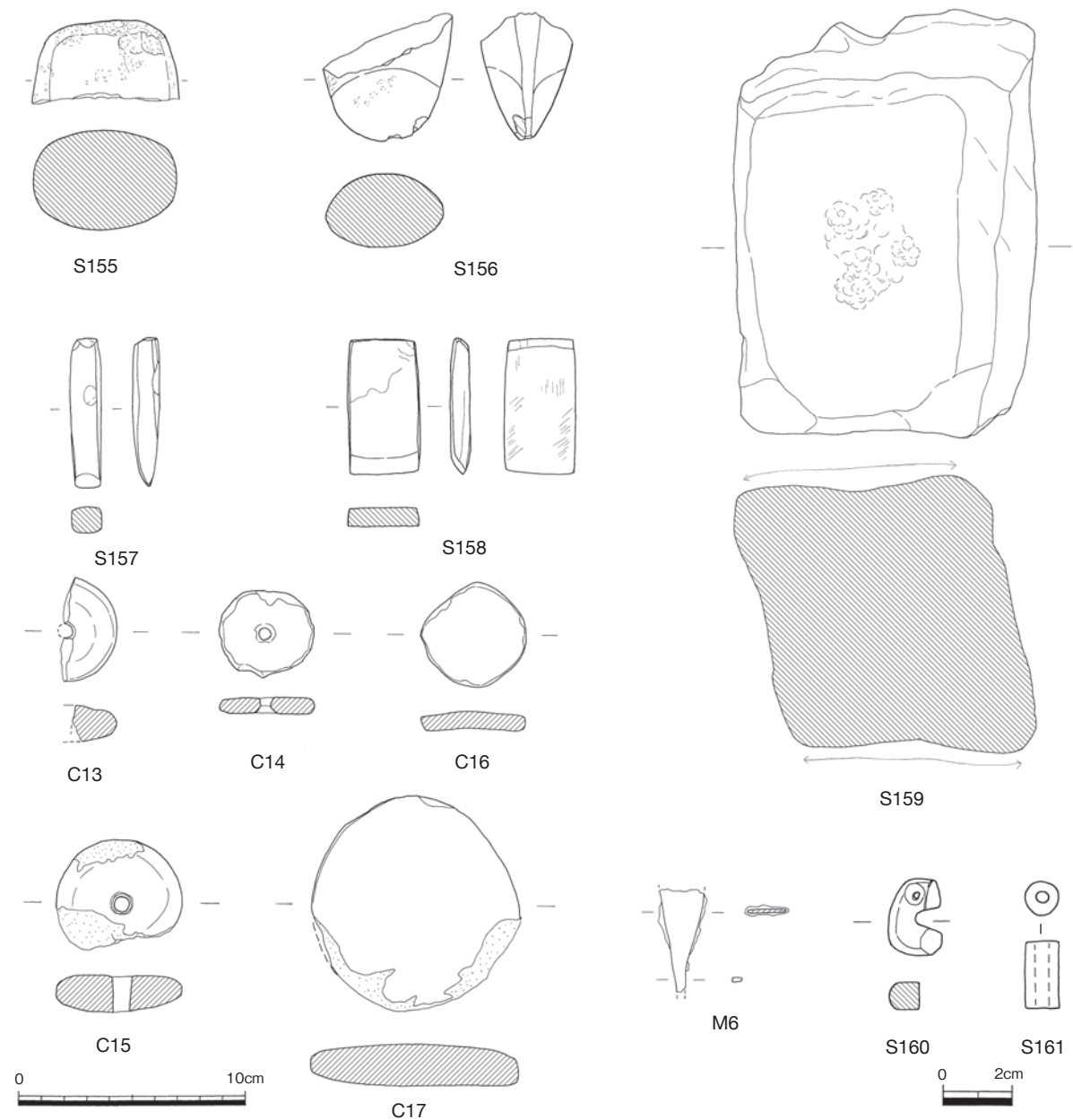
包含層掘り下げ中、もしくは時期の異なる遺構に混入して出土した遺物のうち、特徴的なものについて掲載する。縄文時代の土器は深鉢671がある。谷尻式で、旧河道からこの時期のものが出土している。弥生時代前期の土器として、672~675がある。この甕は、口縁部の形状から前期末の時期と考えられるが、多条でなく数条の沈線を施しているものが、少量ではあるが出土している。弥生時代中期の土器は、676~679がある。壺679の波状文は、2条を1単位としている。蓋680は、表面と側面に線刻を施している。表面には方形を2つ重ねた、雷文帯のような文様構成が見られる。弥生時代前期



第291図 包含層出土遺物① (1/4)



第292図 包含層出土遺物② (1/4)



第293図 包含層出土遺物③ (1/2・1/3)

～中期の範疇のものか。弥生時代後期の土器は、681～684があり、甕682には底部に葉の葉脈が圧痕として残っていた。古墳時代の土器は、6世紀代前半の須恵器杯身が出土しているが、遺構は確認できていない。また、土師器碗692のように、少量の中世の範疇に入る土器が出土している。石鏃S123～S144・石錐S145～148は包含層中の掘り下げで出土したものが多い。石包丁は、S149が粘板岩製の磨製石包丁である、S150～S152は打製の石包丁で、S151・S152は粗いサヌカイトであり、形状からも弥生時代後期のものと考えられる。太型蛤刃石斧S155・S156、方柱状方刃石斧S157、扁平片刃石斧S158が出土している。勾玉S160は翡翠で、管玉S161は緑色凝灰岩で作られている。土製品は紡錘車と土製円盤が出土している。紡錘車には、土器を転用して作られたものC14と、もともと紡錘車として作られたものC13・C15がある。土製円盤は、C16が土器を打ち欠いたものである。土製円盤は遺構からも多く出土している。(團)

第4章 百間川沢田遺跡

第1節 遺跡の概要と調査区

百間川沢田遺跡とは、岡山市中区沢田の百間川河川敷内にかかる遺跡部分をさし、集落の中心となる3つの微高地とその周辺に広がる低位部の水田域からなる。百間川沢田遺跡（以下、沢田遺跡と略す）とその上流に位置する百間川原尾島遺跡（以下、原尾島遺跡と略す）や下流に位置する百間川今谷・兼基遺跡とは、弥生時代後期には低位部の水田域において連続することから、これらの境界については、これまで現在の字境をもって遺跡の境界としてきた。本報告では、原尾島遺跡との境界について、字境を踏襲しながらも同一遺構が両遺跡に分離しないように、また過去の調査や遺跡の境界を踏襲し設定したものである（第294図）。これによって沢田遺跡の範囲は、上流側が国道250号（旧国道2号）の百間川橋から下流への約70mの地点から始まり、それより約1,200m下流の地点で百間川兼基遺跡と接するまでの間をさしている。このうち今回の調査区は、百間川の左岸側低水路掘削箇所に対応する。そしてその範囲は、上流側では原尾島遺跡との境界に始まり、下流側では鑓田樋門導入水路までの長さ約170m、幅約20mに及ぶ。今回の発掘調査によって、旭川改修に係る沢田遺跡の発掘調査は完了となった。

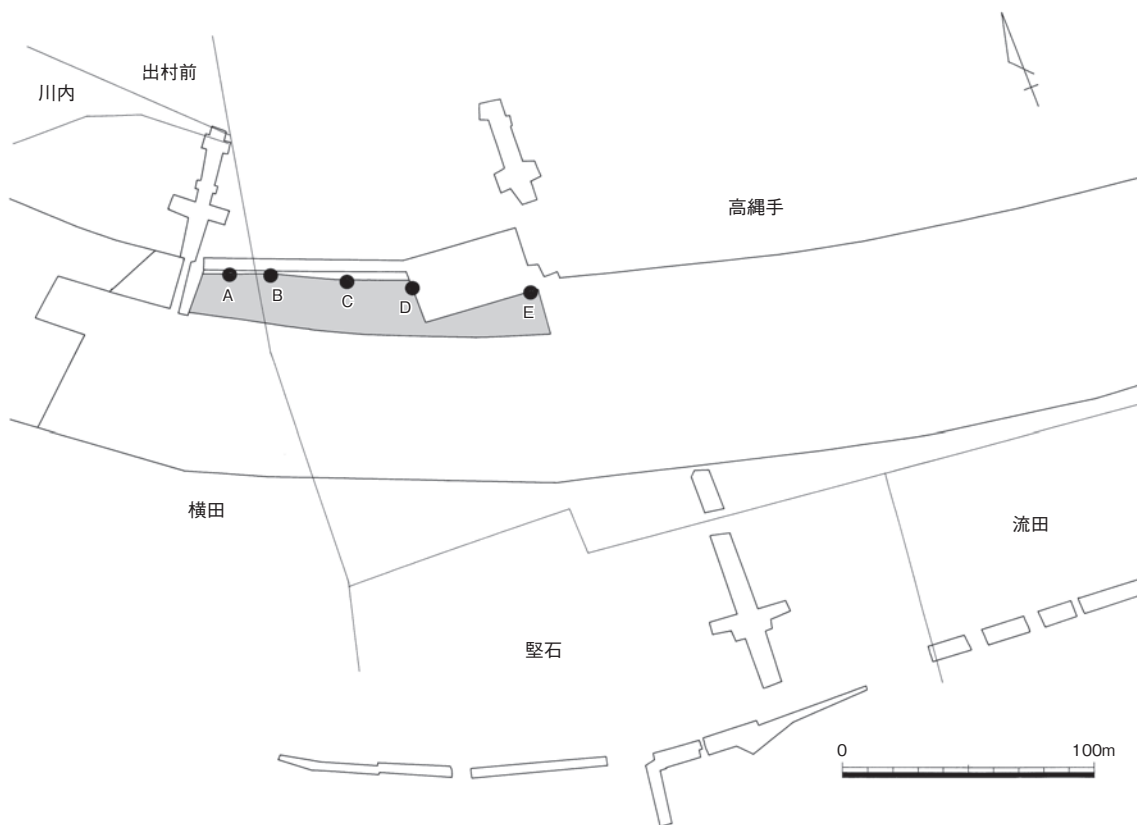
これまでの調査は、昭和52（1977）年度以降、断続的に平成15（2003）年度まで実施している。その成果は「百間川沢田遺跡」全5冊の報告書としてまとめており、本書は6冊目となる。調査の概要としては、微高地上では縄文時代晩期から近世にかけての遺構を検出しており、とりわけ弥生時代前期の環濠集落や弥生時代中期初頭に位置づけられる2基の円形周溝墓の存在及び数多くの井戸を検出した古墳時代初頭の集落が注目されている。また、微高地縁辺から低位部の広い範囲では洪水砂によって埋没した弥生時代後期の水田を検出しており、さらにその下層の一部では弥生時代前・中期の水田を検出している。本書においても、弥生時代前期、古墳時代前期を中心とした多岐にわたる時代の遺構と遺物を報告する。

また、既報告では調査区を小字によって横田（本来は大字原尾島に含まれる）、高縄手（A・B）、竪石、流田・開ノ山下、足洗、四元の各調査区に細別しており、これまでの調査区と今回調査区的位置関係を第294図に示した。これによると本報告箇所は高縄手A調査区に該当するものの、本書では特に調査区名を付さずに記述する。なお、本報告の原尾島遺跡（同遺跡の3つの微高地のうち最も南の微高地にあたる）は、既報告（「百間川原尾島遺跡2・3」）に従い原尾島遺跡とするが、岡山市教育委員会が昭和62年度に調査を実施した百間川沢田（市道）遺跡（百間川の堤防外の市道建設に伴う発掘調査）と一連の微高地である可能性が高く、遺跡の歴史的評価を加えるに当たっては沢田遺跡に含めることが適当とも考えられる。

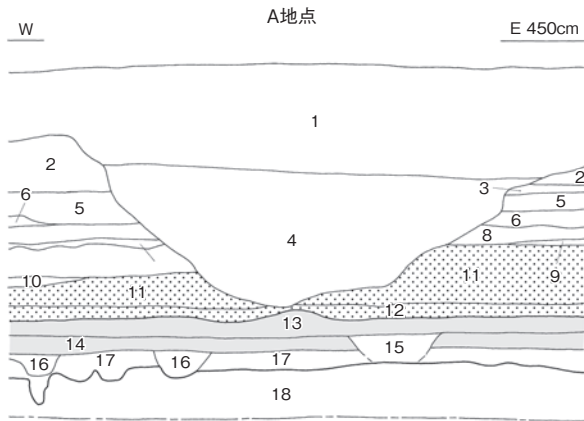
第295図に調査区の各地点における土層断面を示している。A地点は微高地西側の低位部にあたる。4層は少なくとも中世にさかのぼる条里溝であるが、幾度か掘り直しが行われていた。この溝は現代まで用水路として使われており、大字原尾島と大字沢田を隔てる字境の溝でもある。古墳時代以降近世

にかけての第5～8層は、概ね水平堆積を示していることからおそらく水田層であろう。第10～12層は、弥生時代後期の水田を覆っている洪水砂で、大きく3層に分けられ下層ほど粘性が強い。全体での厚さは、60cm余りもある。なお、第11層では明瞭なラミナが観察できた。第13層は、小畦畔によって区画された後期の水田層である。その下層には水田層は確認できず、第17層は前期の遺物を含む包含層である。第18層は、弥生時代の基盤層であるが、さらに下層に縄文時代の河道が存在する。B地点は、微高地西側の端部から低位部にかけての土層の堆積状況である。第6層は集落が最も発達した古墳時代前期の包含層で、下面に凹凸が著しいように大洪水後も何らかの低位部の利用が図られたことを示す。C地点は、微高地部分にあたる。第2～5層までが中近世の水田層で、第6層は古墳時代前期の包含層、第8～15層は古墳時代前期の竪穴住居3の埋土で、第17層は弥生時代の包含層である。この包含層の分層は困難で、弥生後期の遺構も前期の遺構同様包含層除去後の検出となった。D地点には、弥生時代前期の環濠がかかり、第4～9層は、弥生時代前期の環濠埋土である。第10層は、弥生時代遺構の基盤層と考えられ、その上面で多くの土坑を検出している。第11層は、縄文後期末葉以前に形成された微高地基盤層とみられ、縄文土器の出土レベルもこの層の上面までとみられる。この地点の北側には旧河道が東西方向に走ることから、自然堤防状の高まりが形成されていたと考えられ、第10層も断面図の地点より南に少し高くなっていたようであり、縄文後～晩期の土器とともに炭や焼土を含んでいた。ただし、調査時点ではこの箇所の断面での確認に留まり、縄文時代の遺構については十分に平面的な発掘を行うことができなかった。E地点は、B地点の反対側で沢田遺跡微高地の東側の落ちである。古墳時代の水田層より上層の攪乱が著しいが堆積状況は本来、A～C地点と同様であったと考えられる。

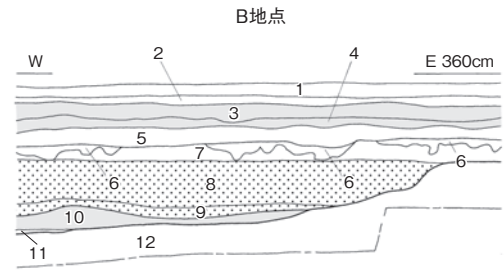
(弘田)



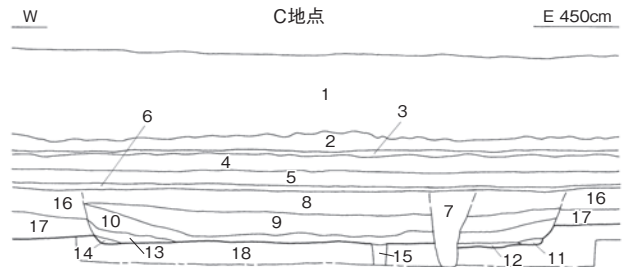
第294図 調査区位置図 (1/3,000)



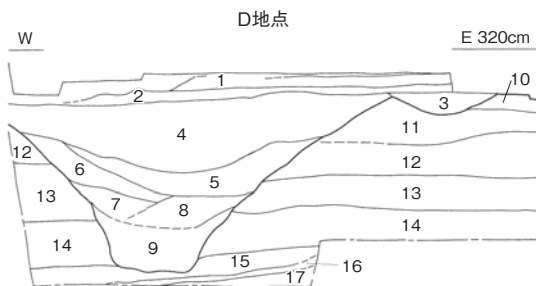
- 1～3 造成土 4 条里溝 5 現代水田土
- 6 灰白色 (10YR7/1) 粘質微砂〈近世水田層〉
- 7 灰黄褐色 (10YR6/6) 粘質微砂〈中世水田層〉
- 8 褐灰色 (10YR5/1) 粘質微砂〈古墳後期水田〉
- 9 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質微砂〈古墳前期包含層〉
- 10 鈍黄橙色 (10YR7/4) 粗砂〈洪水砂①〉
- 11 洪水砂② ①と③の互層ラミナ層
- 12 灰黄褐色粗砂 (粘性帯びる)〈洪水砂③〉
- 13 青灰色 (5PB6/1) 粘質土〈後期水田層〉
- 14 青灰色 (5PB4/1) 粘質土〈後期水田層②〉
- 15 暗青灰色 (5PB4/1) 粘質土〈後期遺構〉
- 16 青灰色 (10BG6/1) 粘質土〈前期遺構〉
- 17 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂〈前期包含層〉
- 18 灰オリーブ (5Y6/2) 粘質微砂〈基盤層〉



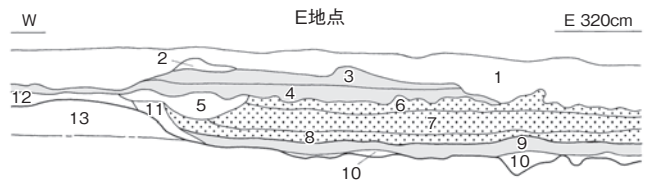
- 1 造成土 2 現代水田土
- 3 灰白色 (10YR7/1) 粘質微砂〈近世水田層〉
- 4 灰黄褐色 (10YR6/6) 粘質微砂〈中世水田層〉
- 5 褐灰色 (10YR5/1) 粘質微砂〈古墳～古代包含層〉
- 6 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘質微砂〈古墳前期包含層〉
- 7 鈍黄橙色 (10YR7/4) 粗砂〈洪水砂①〉
- 8 洪水砂② ①と③の互層ラミナ層
- 9 灰黄褐色 (5PB6/1) 粗砂 (粘性帯びる)〈洪水砂③〉
- 10 青灰色粘質土〈後期水田層〉
- 11 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂〈前期包含層①〉
- 12 灰オリーブ (5Y6/2) 粘質微砂〈基盤層〉



- 1 造成土 3 暗灰黄色 (2.5Y4/2) 粘質細砂
- 4 オリーブ褐色 (2.5Y4/3) 粘質土
- 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質土
- 6 褐色 (10YR4/6) 粘質微砂
- 7 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂〈弥生後期溝埋土〉
- 8～15 古墳前期住居址埋土
- 16 褐色 (10YR4/1) 粘質微砂
- 17 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂〈弥生包含層〉
- 18 褐色 (10YR4/6) 粘質微砂〈弥生基盤層〉



- 1 造成土 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 3 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂
- 4～9 弥生時代前期環濠埋土
- 10 黄褐色 (10YR5/6) 粘質微砂〈弥生時代基盤層〉
- 11 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質細砂〈縄文晩期基盤層?〉
- 12 鈍黄褐色 (10YR5/4) 砂質土
- 13 鈍黄褐色 (10YR5/3) 砂質土
- 14 鈍黄橙色 (10YR6/4) 砂質土
- 15 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 砂質土
- 16 暗オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粘質細砂
- 17 オリーブ灰色 (2.5GY5/1) 粗砂



- 1 造成土 2 灰黄褐色粘質細砂 (10YR5/2)〈古墳ピット〉
- 3 灰黄褐色粘質微砂 (10YR5/2)〈古墳水田層〉
- 4 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)〈古墳水田層〉
- 5 黄褐色粘質細砂 (10YR5/6)〈溝34〉
- 6 褐色粘質細砂 (10YR6/1)〈洪水砂〉
- 7 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2)〈洪水砂〉
- 8 褐灰色粘質細砂 (10YR5/1)〈洪水砂〉
- 9 褐色粘質細砂 (10YR5/1)〈弥生後期水田〉
- 10 灰黄褐色粘質土 (10YR5/2)〈水田耕作痕〉
- 11 褐色粘質微砂 (10YR4/4)
- 12 灰黄褐色粘質微砂 (10YR4/2)〈弥生包含層〉
- 13 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR5/4)〈弥生基盤層〉

第295図 基本層序 (1/60)

第2節 縄文時代の遺構・遺物

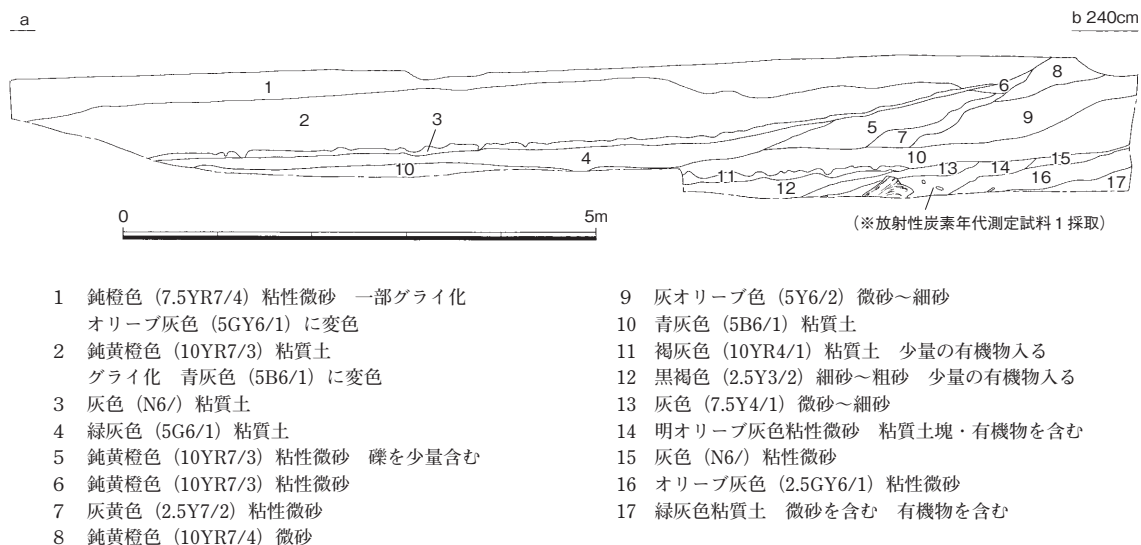
1 概要

今回調査を行った微高地は、百間川沢田遺跡の中では最大のものである。この微高地上では、縄文時代から弥生時代前期の遺構や遺物が数多くみられた。このうち、縄文時代については後期末葉から晩期末葉にかけての土器と、遺構としては炉1基、土杭20基、旧河道1条を検出した。これらは、弥生時代前期の遺構を検出するために任意のレベルによる掘り下げ中に検出したものであり、縄文時代の包含層を認識したうえで掘り下げを行ったわけではない。なかには弥生時代前期遺構との明瞭な埋土の違いや検出レベルの差もあまり認められないものもあった。

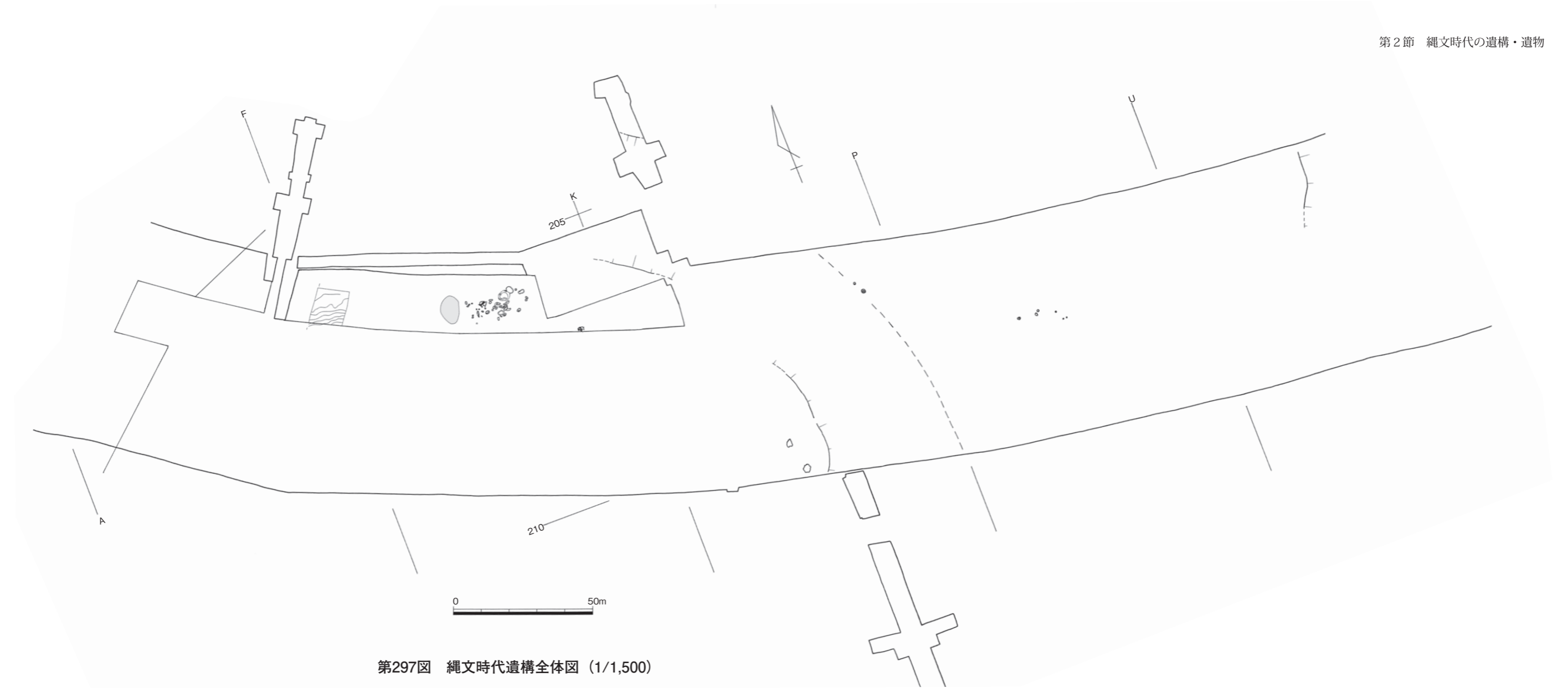
土器の分布は、土坑群の東側に集中する。高さをみると標高271～303cmに分布し、なかでも270～280cmの間が最も多く、280～290cmの間でも一定量の出土をみた。このことから層位的な認識は困難であったが、後期末葉から晩期末葉にかけて遺物包含層が形成されていたことがうかがえる。これは、南接する高縄手A調査区北壁（「百間川沢田遺跡2」）の所見とも一致をみる。

土坑は、規模に大小はあるが、平断面ともに不定形なくぼみ状を呈するものが多い。ただし、炭や焼土ブロックを多く含むものや大形の土器片を含む土坑もみられ、何らかの人為的な行為に伴うと考えられる。時期が判断できる土坑は、全て晩期に属する。土坑の検出レベルは前期基盤層に近い（第294図D地点断面）ものの、土坑集中箇所が旧河道によってできた自然堤防上の高所にあたることから、縄文土器のみが出土したものは縄文時代の遺構として認識し、掲載している。

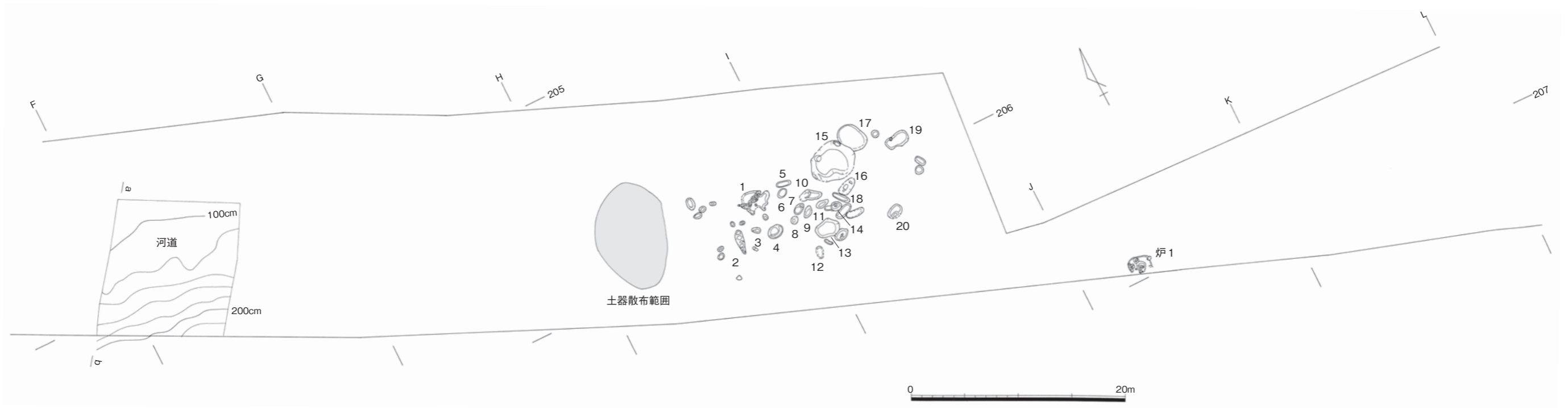
旧河道は、肩のラインが南西―北東方向と推定される。トレンチ断面（第296図）の上面は、弥生時代後期末の水田層を除去した面である。堆積は、微高地側である南西から北東に向かって傾斜するが、第3層のように上面が凹み状を呈するものがある。また、第4層は、黒色化しており、一定期間地表面であったことをうかがわせる。なお、この旧河道からの遺物の出土は皆無であった。（弘田）



第296図 低位部トレンチ断面 (1/80)



第297図 縄文時代遺構全体図 (1/1,500)

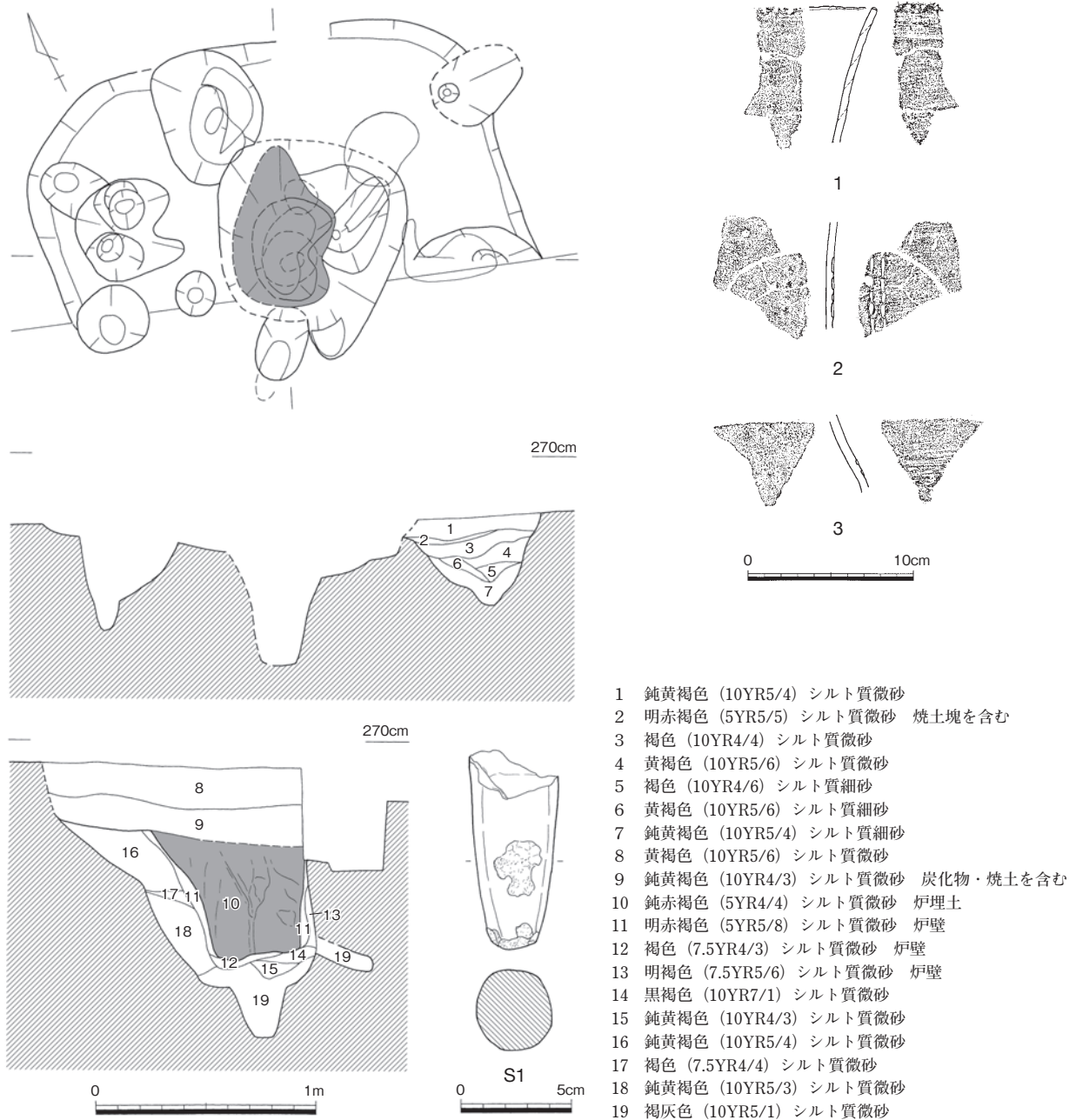


第298図 縄文時代遺構配置図 (1/400)

2 炉

炉1 (第297~299図、図版30-1・38・46)

206 J区南側中央よりやや西において検出した遺構であり、南側半分は調査区外になる。付近には同時期の遺構が存在しない。上面の規模は、長さ210cm、平面形状は隅丸方形を呈する。深さは70cmを測り、底面の標高は135cmである。断面は不整形を呈し、凹凸が著しく、部分的に柱穴状の落ち込みが見られる。このうち中央と南東側のものに焼土塊と炭化物の分布が見られた。特に幅60cm、深さ50cmほどの中央のものは、壁面が強い被熱しており炉として機能したと推定する。この中央部上層から、1~3縄文土器深鉢と、S1乳棒状石器が出土した。時期は縄文時代晩期である。(小林)



第299図 炉1 (1/30)・出土遺物 (1/3・1/4)

3 土 坑

土坑1 (第297・298・300・301図、写真45、図版30-2・38)

205H区の南東側において検出した遺構で、東側80cmに土坑5が、南側1.2mに土坑3が存在する。上面の規模は、長さ310cm、幅205cmで、平面形状は不整形を呈する。検出面からの深さは45cmで、標高234cmを測る底面は凹凸が著しく、断面形状は不整形である。中央付近に110×80cm前後の範囲で焼土塊の分布が見られる。また南側に70×25cmの、西側に110×90cmの範囲で炭化物の分布が見られる。中央の焼土塊は底面付近に集中していたが、底面自体には被熱した痕跡は見られなかった。このため焼土塊が竈状施設などの残骸かどうかを判断することは出来ない。また、不定形を呈する平面形状が、掘り返しなどに伴うものかどうかの判断も出来なかった。

4が北西隅にまとまって出土した。土器の上部には炭化物が広く分布していた。4は縄文土器の深鉢で、晩期になる。

同様の遺構が、「百間川沢田遺跡2」に報告されている。本遺構から南東側に約125mほどの場所にある土坑25～28である。微高地の東側縁辺部に集中していた。やはり平面は不定形で、底面の凹凸が著しく、焼土塊や炭化物の分布が見られた。報告では、これらの遺構も性格は不明とされており、本遺構も人的な遺構かどうか判然としない。(小林)

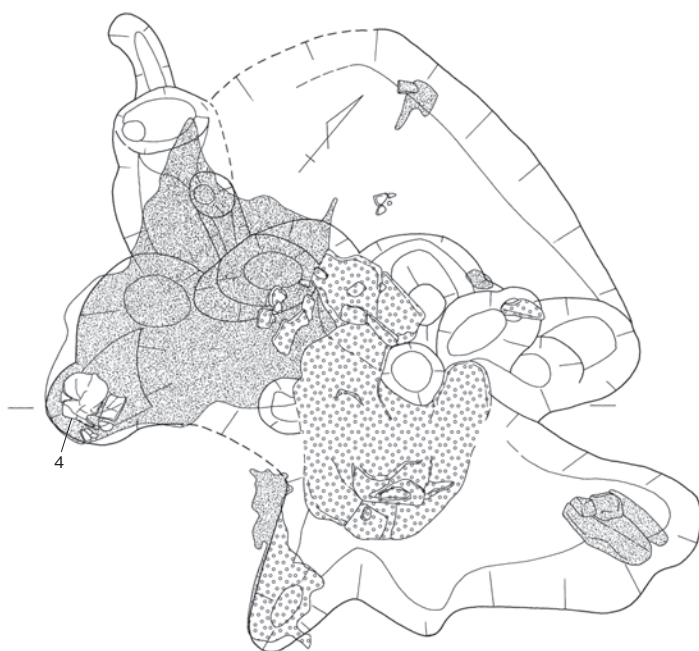
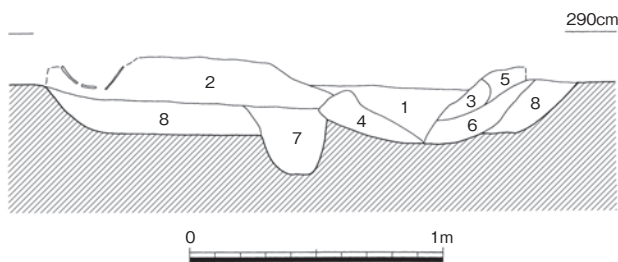


写真45 土坑1炭・焼土
出土状況(南から)



- 1 鈍赤褐色 (5YR4/4) 粘質微砂
- 2 明赤褐色 (3.5YR5/8) 粘質微砂
- 3 黒褐色 (7.5YR3/2) 粘質土
- 4 暗褐色 (7.5YR3/4) 粘質微砂
- 5 黒色 (10YR7/1) 層炭化物層
- 6 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質細砂
- 7 鈍黄褐色 (10YR5/5) 粘質細砂
- 8 鈍黄褐色 (10YR5/4) シルト質細砂

第300図 土坑1 (1/30)

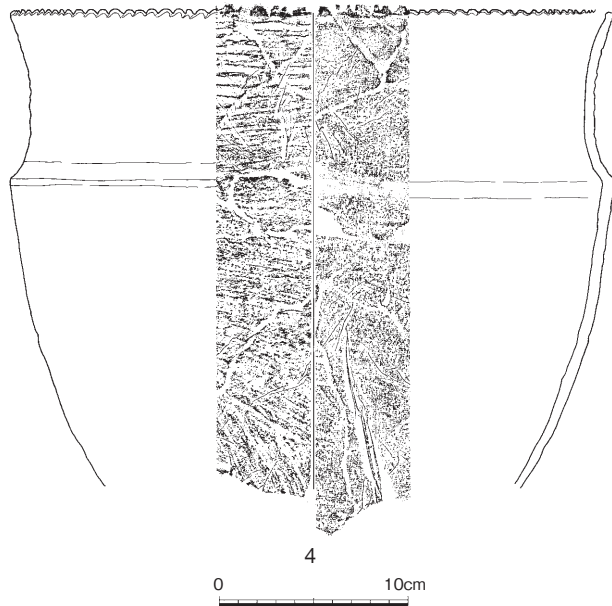
土坑2 (第297・298・302図)

205・206H間区の中央よりやや東側において検出した土坑で、東側1mに土坑3が位置する。上面の規模は、長さ233cm、幅75cmである。平面形状は不整形円で、断面は不整形を呈していた。

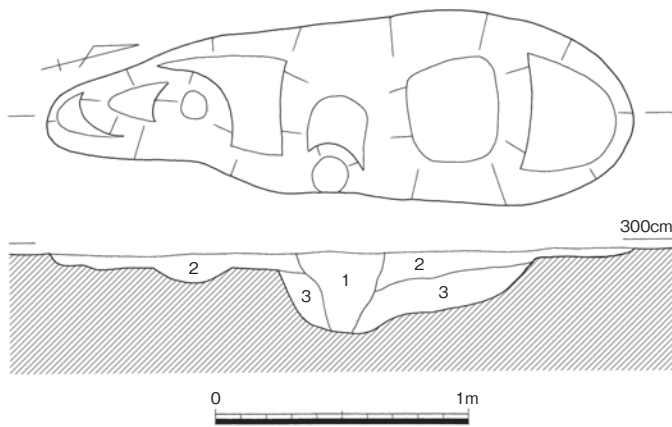
検出面からの深さは32cmで、標高264cmを測る底面は凹凸が著しい。時期は縄文時代晩期と推定した。(小林)

土坑3 (第297・298・303図)

205H区の南東側において検出した土坑で、西側1mに土坑2が、東側80cmに土坑4が位置する。上面の規模は、長さ85cm、幅55cmで、楕円形を呈するが、北東側壁面付近は1段凹んでいた。検出面からの深さは34cmで、底面の標高は261cmを測り、断面は楕円形である。土器細片が数点出土しており、時期は、縄文時代晩期と考えられる。(小林)

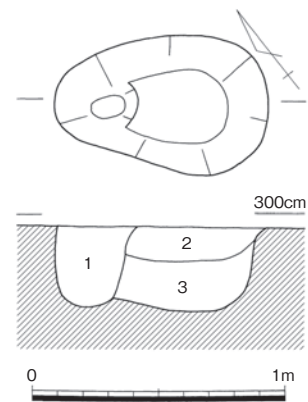


第301図 土坑1 出土遺物 (1/4)



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂
- 3 鈍黄橙色 (10YR6/3) 粘質微砂

第302図 土坑2 (1/30)



- 1 鈍黄橙色 (10YR6/3) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂
- 3 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂

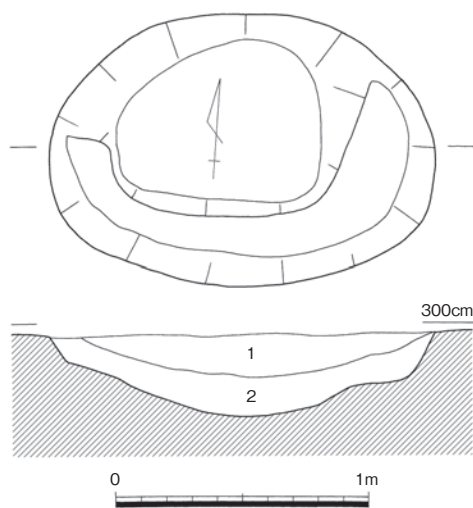
第303図 土坑3 (1/30)

土坑4 (第297・298・304図)

206H区の北東側で検出し、西側80cmに土坑3が、東側80cmに土坑8が位置する。規模は、長さ153cm、幅109cmで、楕円形を呈し、北側が1段凹む。検出面からの深さは32cmで、底面の標高は263cmを測り、断面は楕円形である。埋土からS2石鏃が出土する。縄文時代晩期と推定した。(小林)

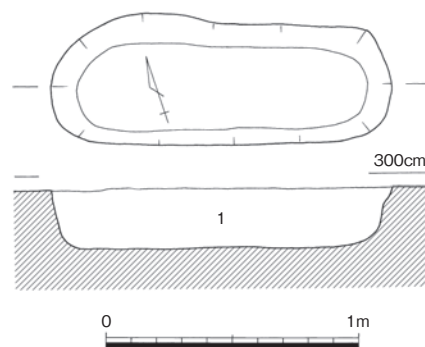
土坑5 (第297・298・305図)

205H区の南東側において検出した土坑で、南側に近接して土坑6が位置する。上面の規模は、長さ135cm、幅53cmである。平面形状は隅丸方形で、断面は箱形を呈していた。検出面からの深さは24



- 1 鈍黄褐色 (10YR6/3) シルト質微砂
- 2 鈍黄橙色 (10YR7/4) シルト質微砂

第304図 土坑4 (1/30)・出土遺物 (1/2)



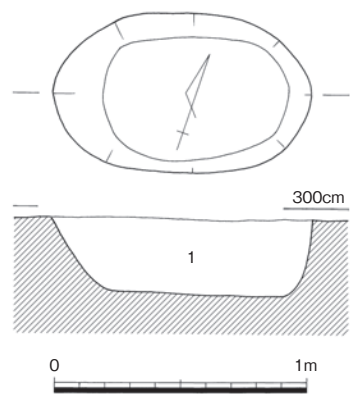
- 1 鈍黄褐色 (10YR6/4) 粘質微砂

第305図 土坑5 (1/30)

cmで、標高271cmを測る底面は平坦である。時期は縄文時代晩期と推定した。(小林)

土坑6 (第297・298・306図)

205H区の南東側において検出した土坑である。上面の規模は、長さ103cm、幅64cmである。平面形状は楕円形で、断面は逆台形を呈する。深さは30cmで、標高265cmを測る。S3石鏃が出土し、時期は、縄文時代晩期と推定した。(小林)

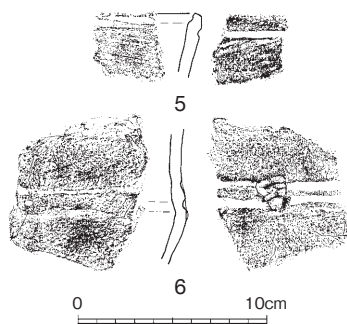
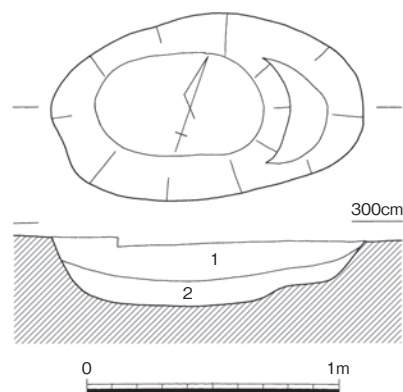


- 1 鈍黄褐色 (10YR6/4) 粘質微砂

第306図 土坑6 (1/30)・出土遺物 (1/2)

土坑7 (第297・298・307図、図版38)

205・206H・I区の間で検出し、南東側20cmに土坑9、南西側20cmに土坑8が位置する。上面の規模は、長さ123cm、幅73cmで、平面形は楕円形を呈する。断面形は逆台形で、西側が1段凹む。深さは27cmで、底面の標高は266cmを測る。出土遺物には、縄文土器の深鉢5・6がある。5は、口縁部の内外面に巻き貝による凹線を巡らせるが、凹線の中はナデ



- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第307図 土坑7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

て仕上げている。また、内外面の調整はともに2枚貝条痕の後ナデである。6は頸部の破片で、2条の凹線と巻き貝の扇状圧痕を施す。内外面の調整は遺物の時期は、条痕の後ナデで仕上げる。遺物の時期は縄文時代後期後葉であるが、遺構の検出レベルから晩期の可能性もある。

(小林)

土坑8 (第297・298・308図、図版38)

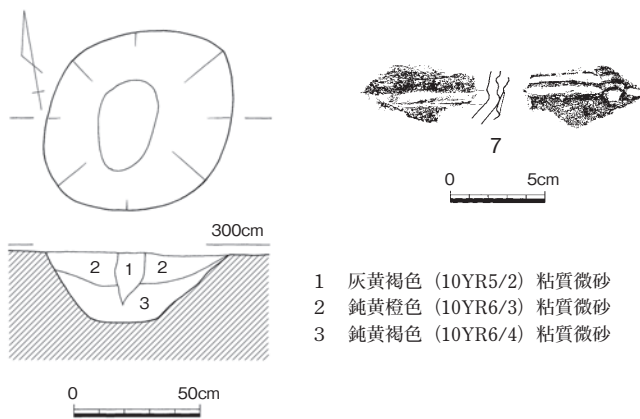
206H区の北東側において検出した土坑で、北東側20cmに土坑7、西側80cmに土坑4が位置する。規模は、長さが73cm、幅は70cmで、平面形が隅丸方形を呈していた。検出面からの深さは28cmで、底面の標高は269cmで、断面は逆台形である。埋土から浅鉢7が出土しており、時期は縄文時代晩期である。(小林)

土坑9 (第297・298・309図)

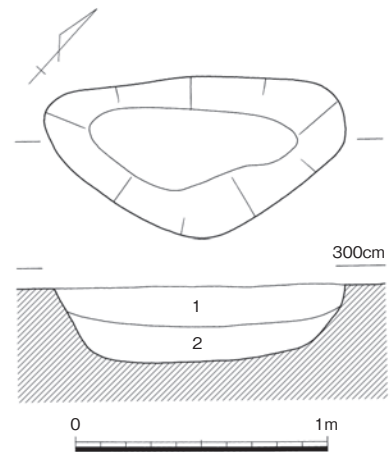
206I区の北西側において検出した土坑である。上面の規模は、長さ120cm、幅64cmで、平面形は、不整形を呈していた。検出面からの深さは30cmで、底面の標高は262cmを測り、断面は逆台形である。この土坑の時期は、出土した小片の土器から、縄文時代晩期と推定した。(小林)

土坑10 (第297・298・310図)

205I区の南西側で検出した土坑で、南側30cmに土坑11、南西側30cmに土坑7が位置する。上面の規模は、長さ195cm、幅97cmで、不整形を呈していた。底面の標高は256cmを測り、断面は不整形で北東側が1段凹むが、複数の土坑が切り合っていることも考えられる。その境に焼土塊が分布する。検出面からの深さは37cmである。遺物は、図示した粗製深鉢の口縁部8以外にも細片数十点が出土して

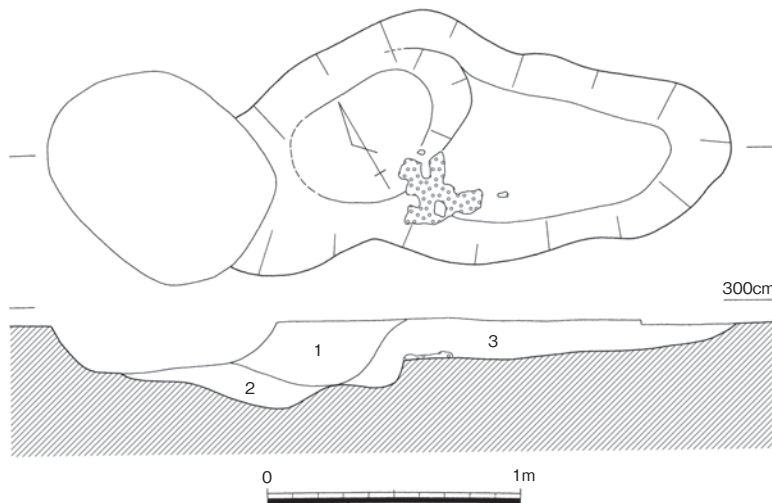


第308図 土坑8 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

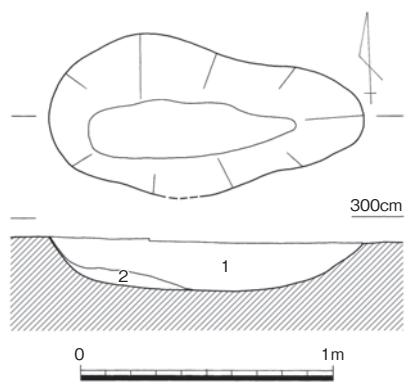
第309図 土坑9 (1/30)



第310図 土坑10 (1/30)・出土遺物 (1/4)

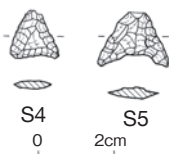
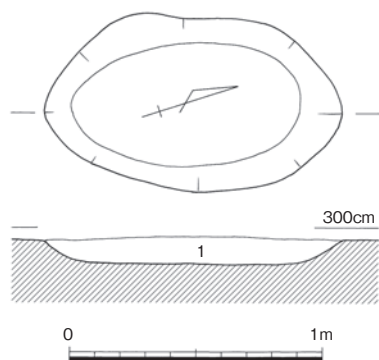


1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
2 暗赤褐色 (5YR5/8) 粘質微砂
3 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂



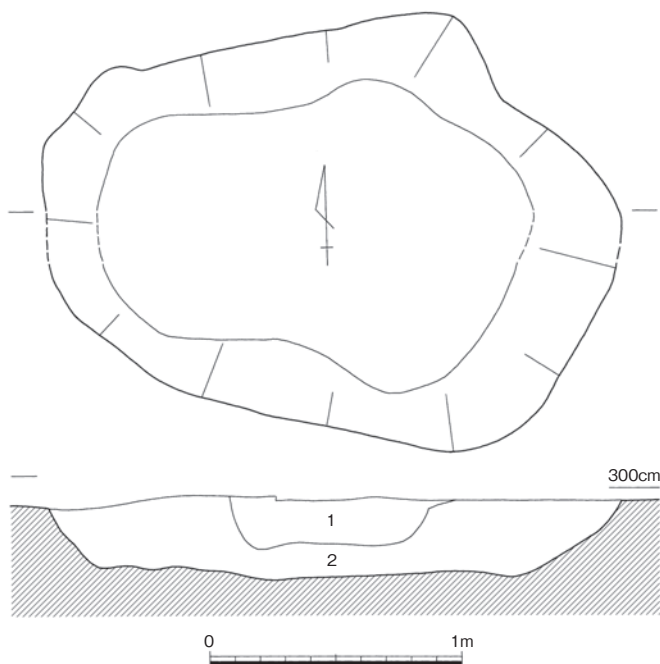
- 1 褐色 (10YR4/6) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂

第311図 土坑11 (1/30)



- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂

第312図 土坑12 (1/30)・出土遺物 (1/2)



- 1 褐色 (10YR4/6) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第313図 土坑13 (1/30)

いる。8は、内外面とも2枚貝のよる条痕を施した後、ナデで仕上げる。これらの土器からみて、この土坑の時期は、縄文時代晩期である。(小林)

土坑11 (第297・298・311図)

206 I 区の北西側で検出した土坑で、北側30cmに土坑10、南東側40cmに土坑14、西側50cmに土坑9が位置する。規模は、長さ125cm、幅65cmで、平面形は不整形円形を呈していた。検出面からの深さは20cmで、底面の標高は271cmを測り、断面は碗形を呈する。図示し得ていないが、埋土中より縄文後期の浅鉢など数点の小破片が出土しており、時期は縄文時代後期と推定した。(小林)

土坑12 (第297・298・312図、図版46)

206 H 区の北東側で検出した土坑で、北東80cmに土坑13が位置する。上面の規模は、長さ118cm、幅69cmで、平面形状は不整形円形で、断面形は逆台形を呈していた。検出面からの深さは11cm、底面の標高285cmで、底面は平坦であった。埋土中からは、縄文時代晩期とみられる土器片数点及びS4・S5サヌカイトの打製石鏃が出土している。検出レベルや遺物から判断した土坑の時期は、縄文時代晩期と考えている。(小林)

土坑13 (第297・298・313図、図版38)

206 I 区の北東側で検出した。規模は、長さが232cm、幅は173cmで、平面形は長方形に近いがやや歪である。検出面からの深さは33cmで、底面は平坦でその標高は259cmを測り、断面形は逆台形状を呈している。土坑としては、先述した土坑1と同様大形の部類になるが、この土坑内では炭や焼土塊はみられなかった。弥生時代前期の遺構群とは検出レベルが近く埋土そのものも明瞭な差は無いが、出土遺物として縄文時代後期後葉とみられる深鉢などの小片数点がある。これらから判断した土坑の時期は、縄文時代後期と考えている。(小林)

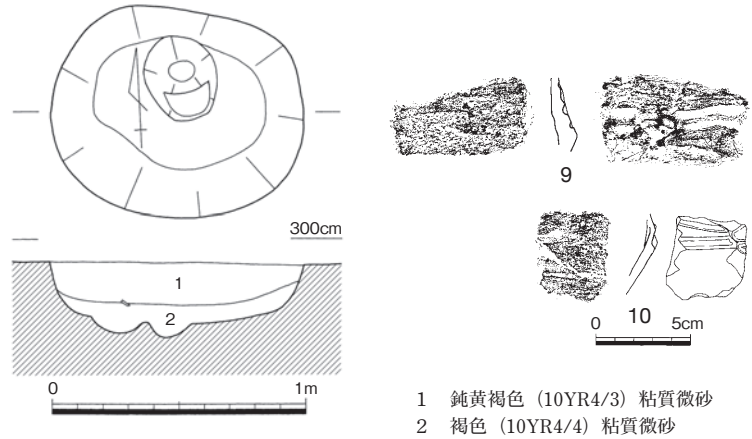
土坑14 (第297・298・314図)

206 I 区の北西側で検出した土坑で、北東側に近接して土坑18、北西側40cmに土坑11が位置する。上面の規模は、長さ98cm、幅82cmで、隅丸方形を呈した。検出面からの深さは30cmで、底面の標高は261cmを測る。断面は椀形だが、底面は凹凸が著しい。頸部に扇状圧痕のある浅鉢片9・10が出土している。遺物からみた土坑の時期は、縄文時代後期後半である。(小林)

土坑15 (第297・298・315図、写真46、図版30-3)

205 I 区の南西側で検出した。規模は、長さ436cm、幅364cmと最大規模の土坑で、平面形状は不整形、断面は逆台形を呈している。

深さは72cmで、標高248cmを測る底面は平坦である。埋土の中央付近からは焼土塊が多量に出土している。大半が底面より浮いた状態であり、この焼土塊が周辺から投棄されたものか、本来遺構に伴うものかは明らかにできなかった。また、底面や壁面自体にも被熱痕跡は認められなかった。焼土塊は、平面的には円状に散布したが、焼土

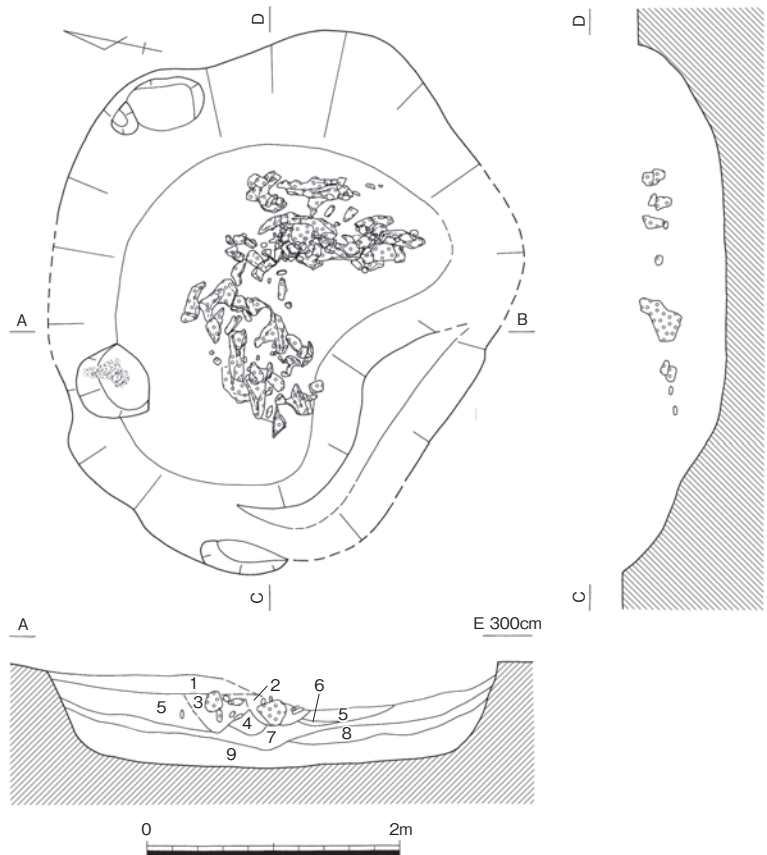


第314図 土坑14 (1/30)・出土遺物 (1/4)



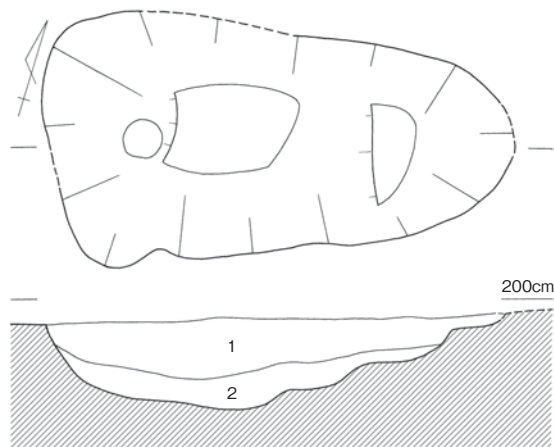
写真46 土坑15焼土
出土状況 (西から)

- 1 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂
- 2 褐色 (7.5YR4/4) 粘質微砂
- 3 褐色 (7.5YR5/3) 粘質微砂
焼土塊・炭化物を含む
- 4 褐色 (7.5YR4/6) 粘質微砂
- 5 褐色 (7.5YR4/6) 粘質微砂
焼土塊・炭化物を含む
- 6 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂 焼土を含む
- 7 褐色 (7.5YR5/3) 粘質微砂
- 8 黄褐色 (10YR5/6) 粘質微砂
- 9 褐色 (7.5YR5/3) 粘質微砂 炭化物を含む



第315図 土坑15 (1/60)

塊同士で接合はせず、また、すさなどの混入物もみられなかった。このため焼土塊が竈状施設などの残骸かどうかを判断することは出来なかった。竪穴住居にも匹敵する規模であるが、遺構の性格は不明である。土器などの出土が無いため、時期の決め手を欠くものの、縄文時代晩期の土坑と考えている。(小林)



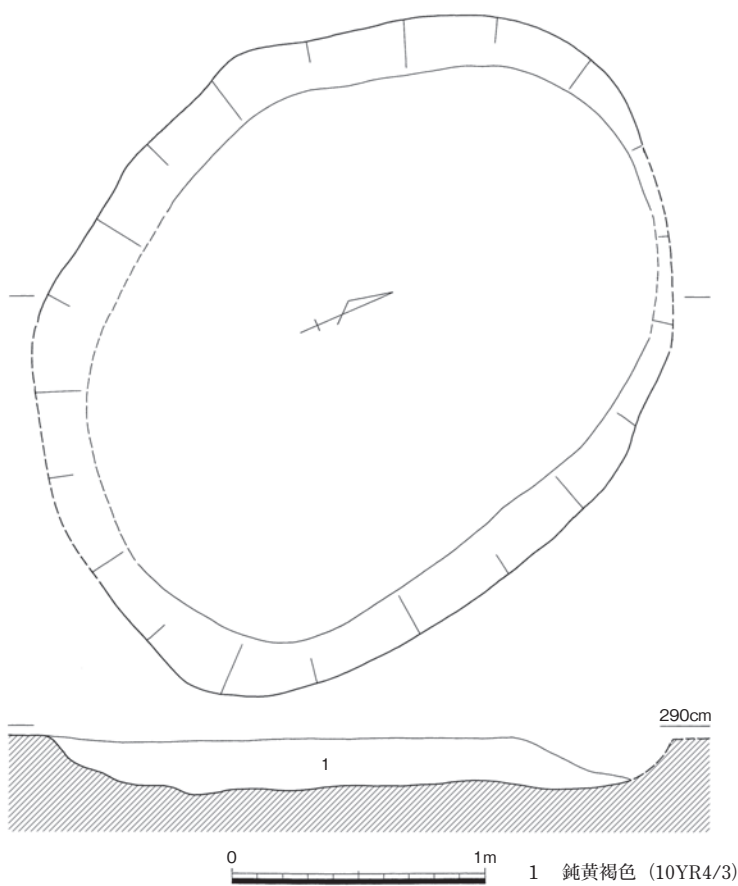
- 1 鈍黄褐色 (10YR6/3) 粘質微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂

第316図 土坑16 (1/30)

土坑16 (第297・298・316図)

205・206 I 区間の中央より西側において検出した土坑で、南西側に近接して後述する土坑18が位置していた。検出面での規模は、長さが187cmで、幅は100cmを測る。平面形状は、やや歪な隅丸方形を呈していた。検出面からの深さは36cmで、底面の標高は256cmを測る。断面形状は不整形であり、土坑の東側から底部中央に向かって4段のテラス状をなして下がっていた。なお、この土坑からは、遺物の出土はみられなかった。この土坑の時期は、弥生時代前期の遺構との位置関係などから判断して、縄文時代晩期と推定している。(小林)

土坑17 (第297・298・317・318図、図版38)



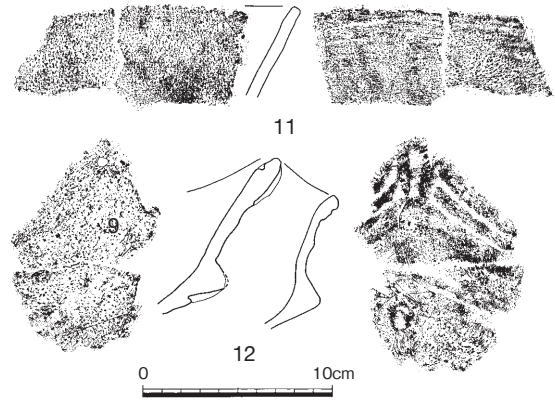
- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第317図 土坑17 (1/30)

205 I 区の南西側において検出した土坑で、南西側に近接して土坑15が位置する。上面の規模は、長さが279cmで、幅は223cmを測る。平面形状は不整形で、断面形は腕形を呈していた。土坑1や15とともに大形の土坑であり、竪穴住居でもおかしくはないが、焼土面などは確認できていない。検出面からの深さは20cmで、標高263cmを測る底面は平坦な面をなす。近接する土坑15と比べると、規模の上では一回り小さく、また深さも浅くなる。埋土からは、深鉢11・12が出土しているが、土坑15のような焼土塊は出土していない。12は舟形口縁の頂部と口縁部下端に巻き貝による扇状圧痕がみられるほか、口縁内面にも巻き貝による刺突を施す。この土坑の時期は縄文時代後から晩期と考えている。(小林)

土坑18 (第297・298・319図)

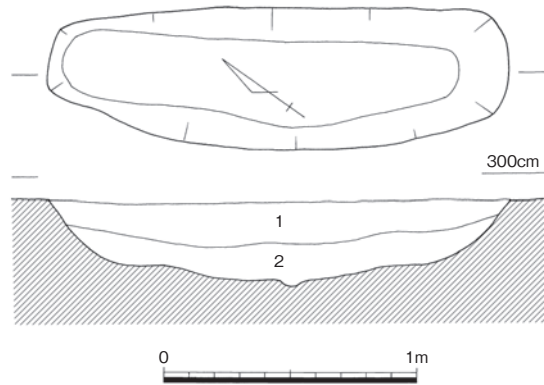
205・206 I 区のやや西側において検出した土坑で、北東側に近接して土坑16が、南西側に近接して土坑14が位置する。上面の規模は、長さが182cm、幅は57cmで、平面形は長円形を呈していた。深さは32cm、底面の標高は256cmである。土器の小片が出土しており、縄文時代晩期の土坑と考えている。(小林)



第318図 土坑17出土遺物 (1/4)

土坑19 (第297・298・320図)

205 I 区南側において検出した土坑で、北西側1.5mに土坑17が位置する。上面の規模は、長さ230cm、幅123cmで、隅丸方形を呈していた。検出面からの深さは26cmで、底面はほぼ平坦で標高は261cmを測り、断面は逆台形である。時期は、出土した小片の土器から、縄文時代晩期と推定した。(小林)

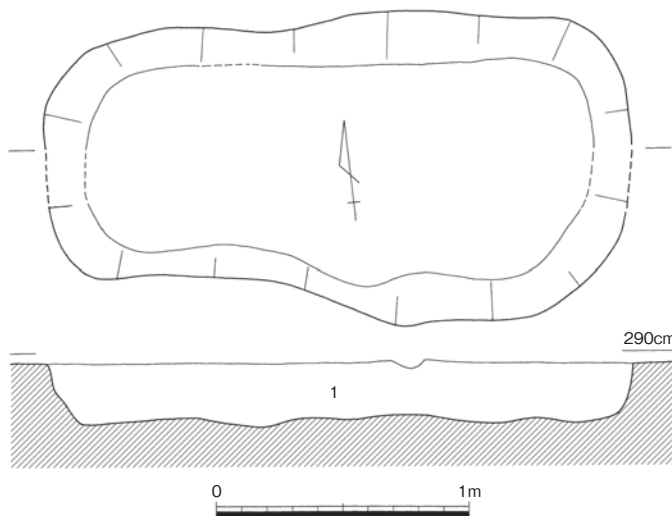


- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂

第319図 土坑18 (1/30)

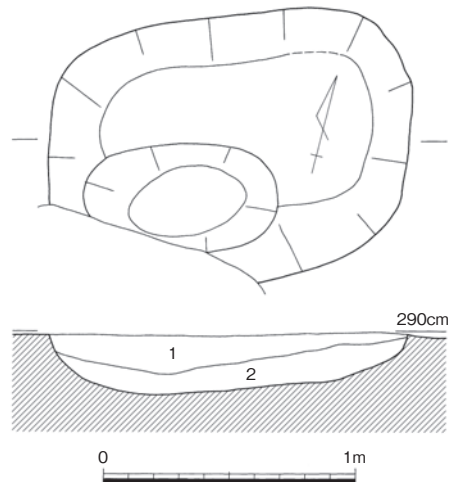
土坑20 (第297・298・321図)

206 I 区中央よりやや北西側において検出した土坑である。上面の規模は、長さが143cm、幅は105cmで、隅丸方形を呈するが南東側が1段凹んでいた。検出面からの深さは23cmで、底面の標高は255cmを測り、断面は碗形を呈する。この土坑の時期は、出土した小片の土器からみて、縄文時代晩期と推定した。(小林)



- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第320図 土坑19 (1/30)



- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第321図 土坑20 (1/30)

第3節 弥生時代前期の遺構・遺物

1 概要

弥生時代前期で掲載する遺構には、環濠1条、竪穴住居2軒、土坑60基、溝12条がある。一方で土坑やピットは存在するものの、掘立柱建物や貯蔵穴と考えられるような定形化した土坑は確認できていない。この点は過去の調査区も同様である（第322図）。よって環濠内の明瞭な遺構は竪穴住居7軒とあって差し支えない。また、遺物の出土量についても、環濠内を含めて必ずしも多くはなく、時期も百間川編年の百・前・Ⅱ期の範疇に収まる。確実に環濠に伴う遺構を抽出することがその機能・用途を考える上で重要な作業となる。

前期遺構の中心となる環濠は既報告分（「百間川沢田遺跡2・3」）も含めて全体の約9割を調査している。本調査分は北辺の約4分の1に相当するが、これまでの調査も含めて入り口や土塁などは確認できていない。この環濠が囲む集落は沢田遺跡最大の微高地の大半を占めており、その中でも北半部に6棟、南半部に1棟の計7棟が存在していた。また、環濠外側端と低位部との間は10m余りと狭いが、低位部は弥生時代前期においても埋没していないことは後述する後期水田の状況をみれば明らかである。環濠は、あえて微高地上を掘削することにより何らかの意義あるいは環濠の機能を示しているのではないだろうか。なお、環濠からの遺物の出土量は少なく、前期中葉のごく短期間の利用で埋没したことがうかがわれた。

竪穴住居2軒は、ともに環濠内において検出している。うち松菊里型の一軒は、平成14年度に調査した住居の南半部にあたり、新たに確認できた一軒は、上部を削平され中央土坑と柱穴のみであった。環濠からの距離が近いことから環濠掘削前後の時期を考える必要がある。

土坑は、掲載の60基以外に柱穴状やたわみ状をなすものも多い。掲載土坑についても、平・断面とも不定形かつ検出面からの掘り込みも浅いなものが大半であり、土器小片や石器剥片を含む場合が多いが、人為的か否か逡巡するものも一定数含まれている。

溝は、微高地上のほか低位部においても確認できたが確実に環濠に伴う（合流する）ものは無い。微高地上の溝は概ね東西方向を指向し、南北方向のものが無いのは、それらの多くが地形に即した自然流路に近い溝といえるのではないだろうか。 (弘田)



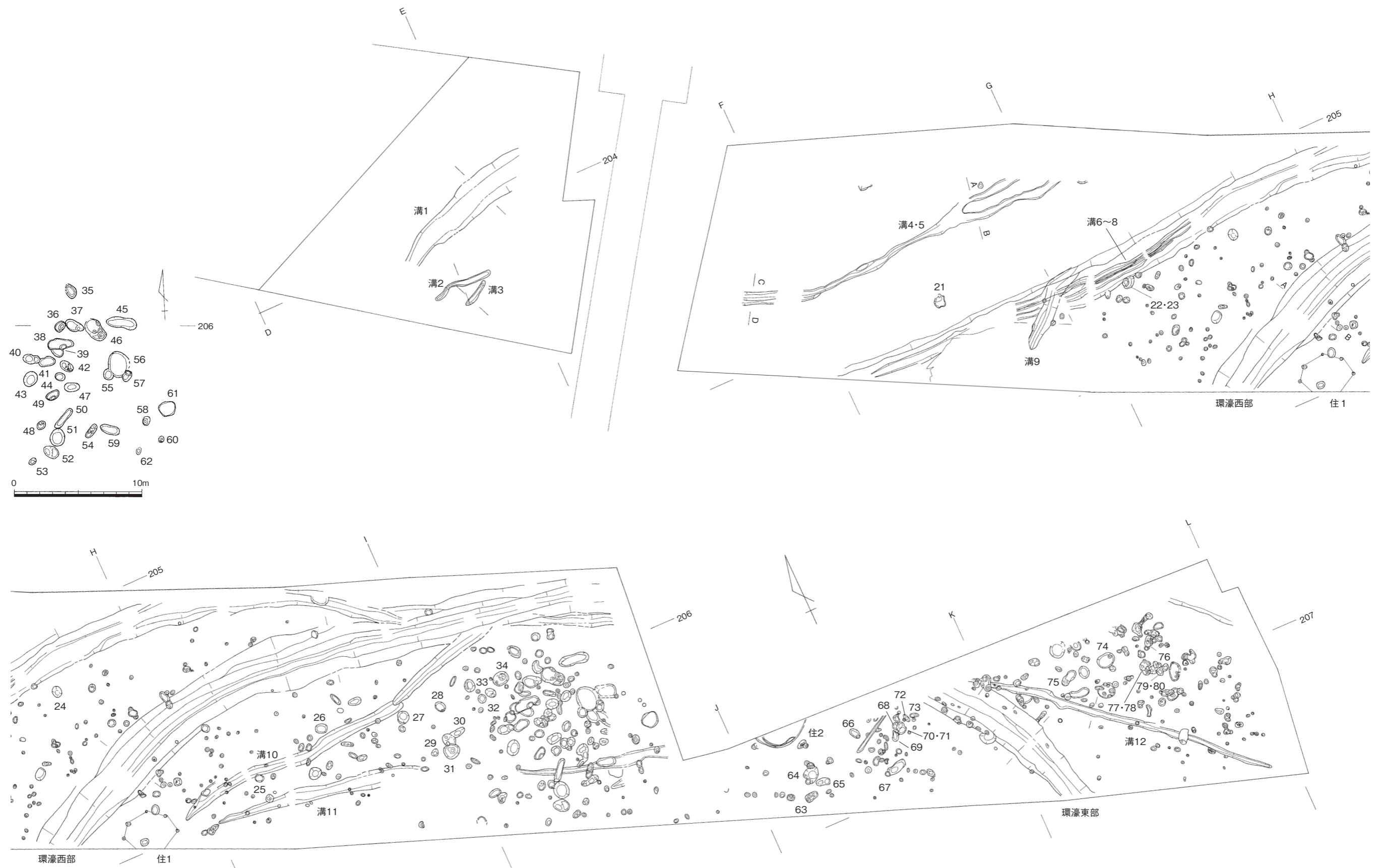
写真47 環濠断面（南西から）



写真48 環濠内遺物出土状況（南から）



第322図 弥生時代前期遺構全体図 (1/1,500)



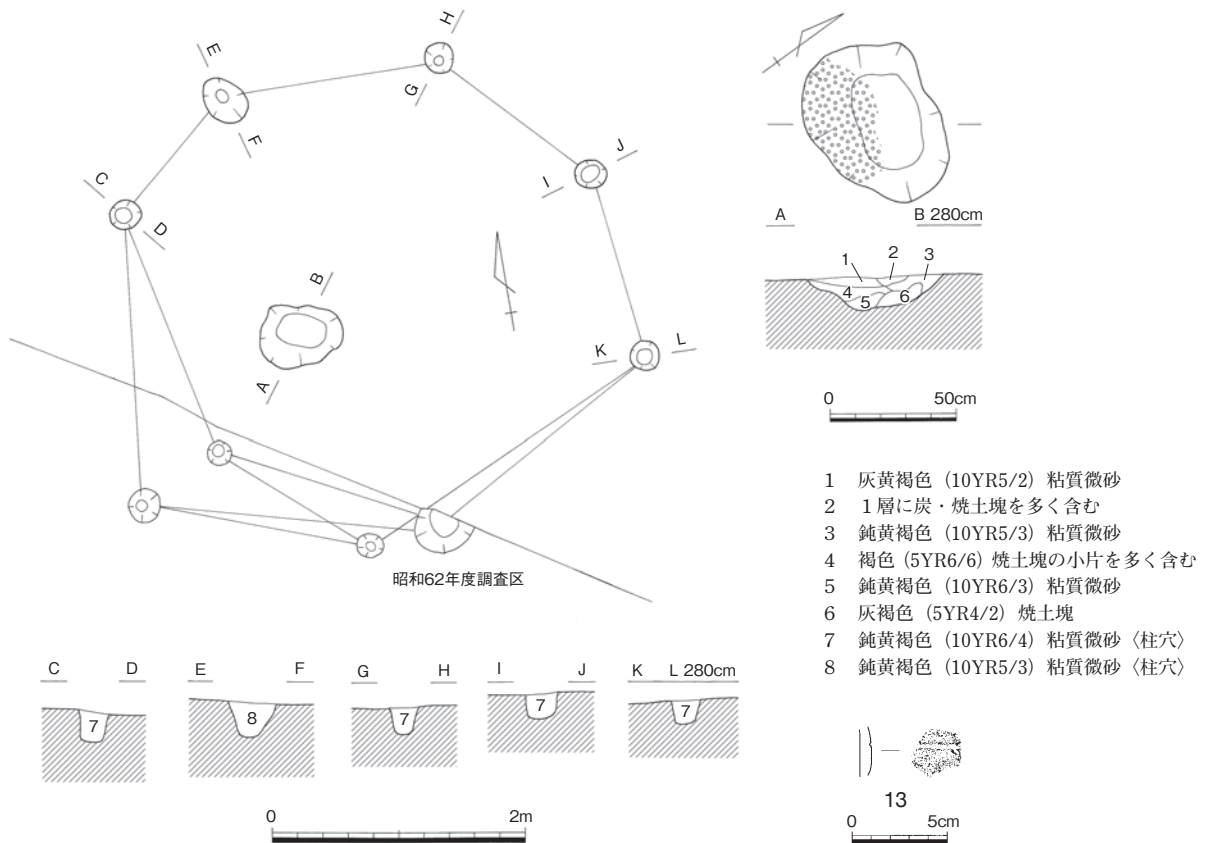
第323図 弥生時代前期遺構配置図・土坑部分図 (1/300)



2 竪穴住居

竪穴住居1 (第322~324図、写真49・50)

205G区に位置する竪穴住居である。中央穴と北東側に中央穴を取り巻く配置の支柱穴5本を検出したことから、床面が削平された竪穴住居であると判断した。基盤層自体が大きく削平を受けていたため、中央穴と支柱穴の残存状況は良くない。南西側については昭和62年度に調査が行われており、当時の実測図と照合したものの支柱穴と確定できるものはなかった。しかし、参考として平面図に候補となり得るものを掲載しておく。柱穴の配置から推定される竪穴住居の直径は、およそ6mとなる。



第324図 竪穴住居1 (1/60)・中央穴 (1/30)・出土遺物 (1/4)



写真49 竪穴住居1 (南から)



写真50 竪穴住居1中央穴断面 (南東から)

中央穴には炭や焼土塊を多く含み、底面の南側には被熱が見られた。

出土遺物には、中央穴から出土した甕**13**がある。多くの砂粒を含む胎土で、外面に1条の沈線を施している。この遺物や周辺の遺構の状況から、竪穴住居の時期は弥生時代前期のものと考えられる。この竪穴住居は、環濠の内側に位置しているが、C-Dラインの断面を切っている柱穴が、北西1.2mで環濠と接している。このため、環濠が機能していたのと同時期の住居であるには、あまりに接していると言える。このことから、環濠集落を構成する住居の一つとは即断できない。(團)

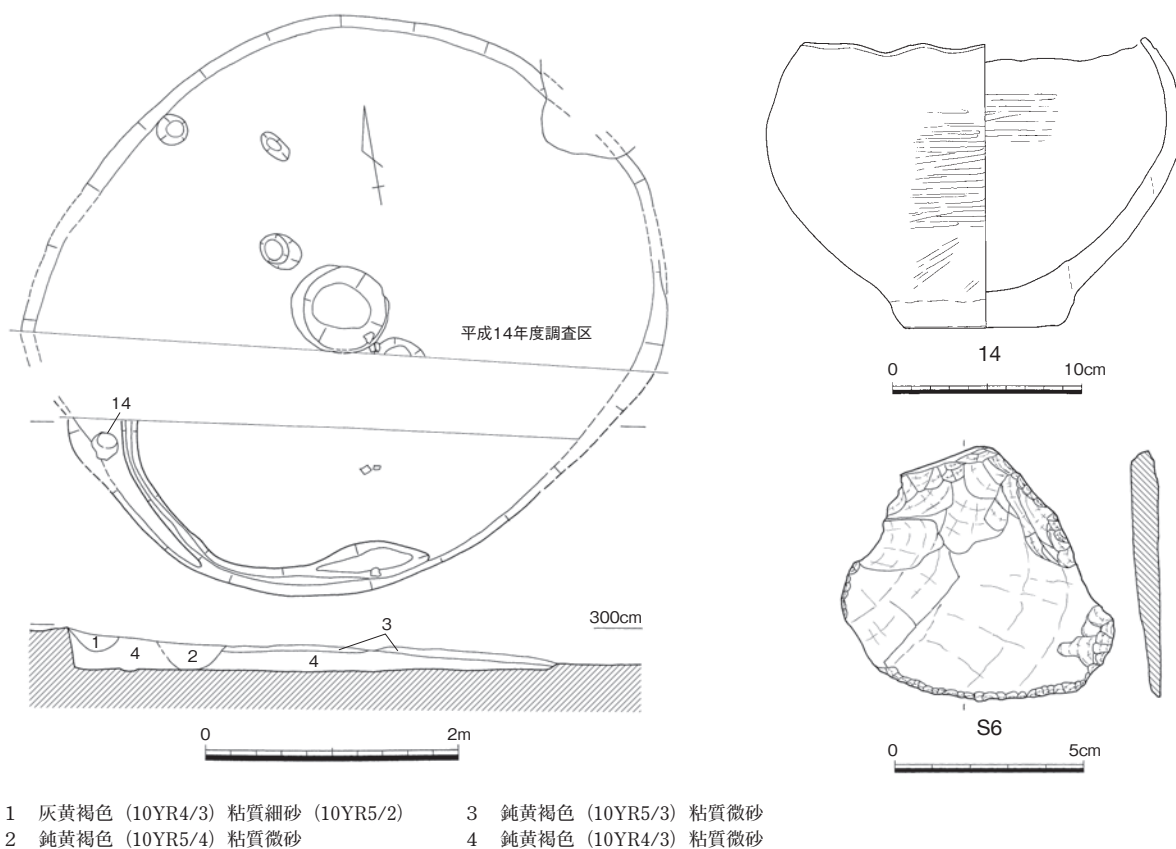
竪穴住居2 (第322・323・325図、図版31-2・38・46)

206J区の西側において検出した住居で、既に報告した百沢田5竪穴住居1の南側1/3に当たり、本調査でほぼ完掘できた。住居の規模は、長軸が480cm、短軸は430cmを測り、床面積は15.9㎡になる。平面形は、円形というより隅丸方形に近い。既報告部分である北側では、73×71cmを測る円形の中央穴を2本の柱が挟み込んでおり、「松菊里型住居」としては本遺跡の中で4例目である。壁面は、標高270cmでほぼ平行になる床面から緩やかに30cmほど立ち上がる。床面には粘土を貼った形跡が認められなかった。また、今回の調査区内では壁体溝状の凹みを検出したが、北側部分では検出されておらず、全周はしないようである。

南西側壁面付近の床面直上から、弥生土器壺**14**が出土している。弥生時代前期の壺であるが、口縁部を打ち欠いている。乳児用の棺になる可能性もあるが、覆土中からは骨・歯は出土しなかった。なお、北側部分からは頸部に3条のヘラガキ沈線を施す壺の口縁部や底部片が出土している。また、土器以外にも、サヌカイト製削器**S6**が出土している。

この住居の時期は、百・前・IIである。

(小林)



第325図 竪穴住居2 (1/60)・出土遺物 (1/2・1/4)

3 土 坑

土坑21 (第322・323・326図)

205F区で検出した不整形の土坑である。底面にも凹凸があり、縄文時代の遺構に多く含まれている焼土や焼土塊を多く含むものの、土器などは出土していない。検出面から弥生時代のものであると判断したが、人為的な遺構であるかは不確実である。(團)

土坑22・23 (第322・323・327図)

205G区で、重複した楕円形の土坑2基を検出している。規模は土坑22が長軸62cm、短軸51cm、深さ24cm、土坑23は長軸104cm、深さ17cmを測る。遺物には、土坑22の上面から出土した縄文時代晩期の深鉢の口縁があるものの、埋土の色調や・検出面などから、弥生時代の遺構と判断した。(團)

土坑24 (第322・323・328図)

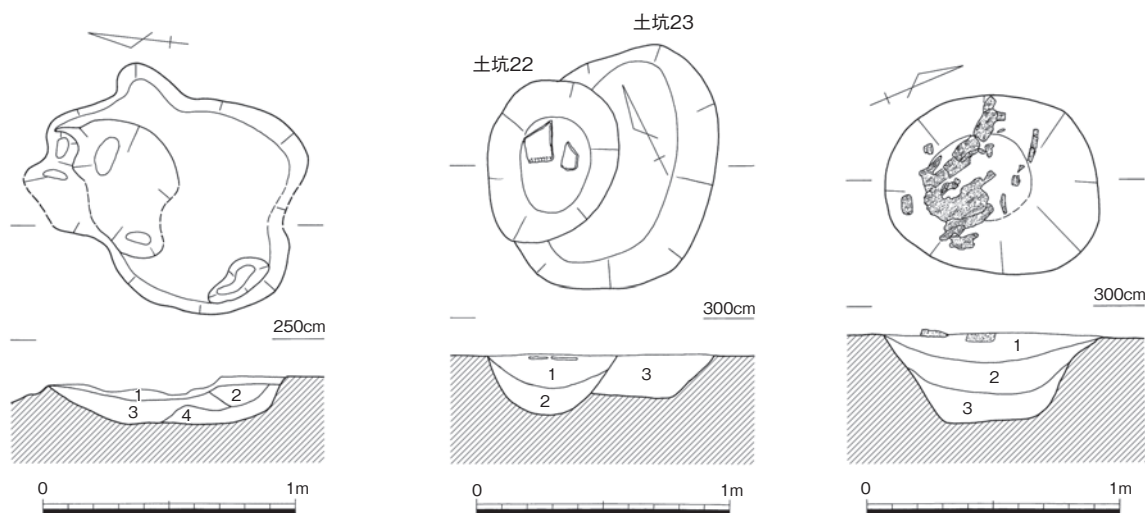
205G区で検出した円形の土坑で、底面は平らで埋土上面に炭を多く含んでいる。規模は長軸85cm、短軸70cm、深さ35cmを測る。出土したものは炭の塊のみで土器は無いものの、埋土の色調や検出面から弥生時代の遺構であると考えられる。(團)

土坑25 (第322・323・329図)

205H区で検出した、円形の土坑で、規模は長軸67cm、短軸62cm、深さ17cmを測る。断面は碗形を呈しており、埋土からはサヌカイトの剥片が多く出土している。しかし、製品は含まれていなかった。近年の工事による削平のため検出面は低い、埋土の色調から弥生時代のもものと判断した。(團)

土坑26 (第322・323・330図)

205H区の南側で検出した。長さが92cm、幅は88cmで、平面形が隅丸方形を呈する。深さは検出面から27cmで、標高251cmを測る底面は平坦であり、断面形は逆台形を呈していた。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



- 1 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘性微砂 焼土を少量含む
- 2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性微砂 焼土塊を多く含む
- 3 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性微砂 焼土を含む
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂

- 1 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘性微砂
- 2 明黄褐色 (10YR6/6) 粘性微砂
- 3 鈍黄褐色 (10YR6/4) 粘性微砂

- 1 鈍黄褐色 (10YR6/4) 粘性微砂 炭を多く含む
- 2 鈍黄褐色 (10YR7/3) 粘性微砂 炭を少量含む
- 3 明黄褐色 (10YR7/6) 粘性微砂

第326図 土坑21 (1/30)

第327図 土坑22・23 (1/30)

第328図 土坑24 (1/30)

土坑27 (第322・323・331図)

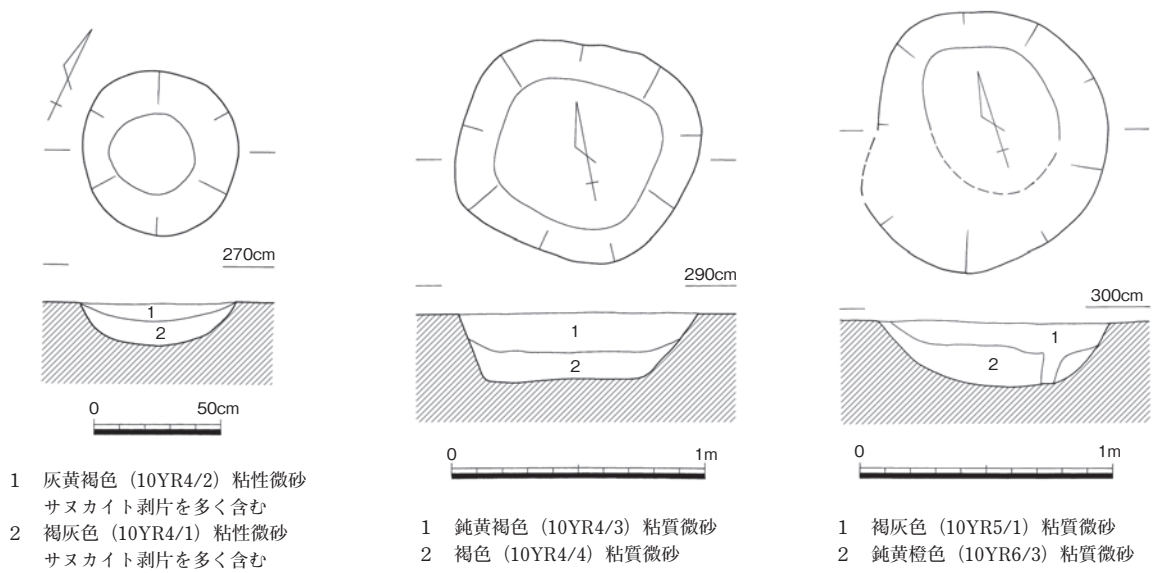
205H区の南東側で検出した。上面の規模は、長さ103cm、幅100cmで、円形を呈する。検出面からの深さは25cmを測り、底面の標高は269cmで、断面は椀形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑28 (第322・323・332図)

205H・I区の間で検出した。上面の規模は、長さ90cm、幅71cmで、隅丸方形を呈する。検出面からの深さは25cm、底面の標高は274cm、断面は逆台形である。焼土塊が分布していた。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑29・30 (第322・323・333図)

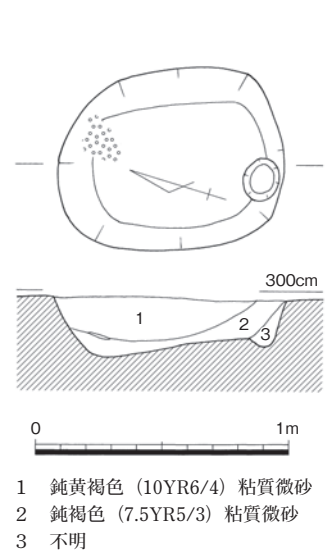
206H・I区の間で検出した。土坑29は、長さ110cm、幅96cmで、楕円形を呈する。検出面からの深さは25cmを測る。土坑30は長さが136cm、幅は54cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは17cmを測る。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



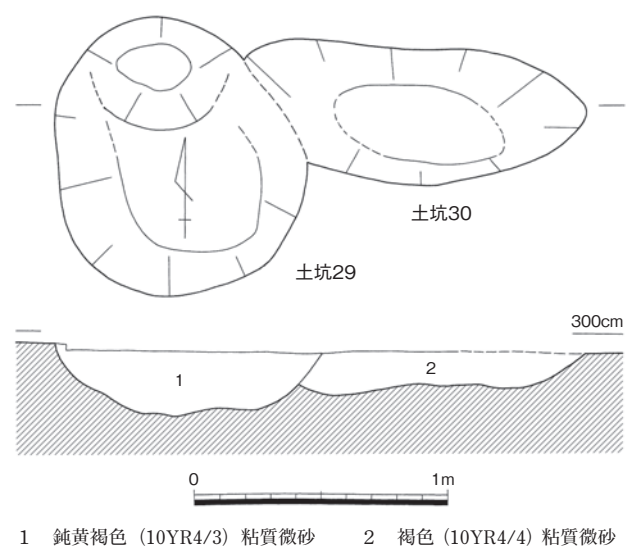
第329図 土坑25 (1/30)

第330図 土坑26 (1/30)

第331図 土坑27 (1/30)



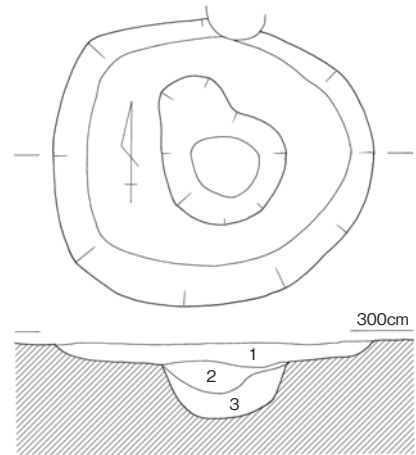
第332図 土坑28 (1/30)



第333図 土坑29・30 (1/30)

土坑31 (第322・323・334図)

206H区の北東側で検出した。上面の規模は、長さが127cm、幅は114cmである。断面は中央部が29cmほど凹む。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



- 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂
- 3 鈍黄橙色 (10YR7/6) 粘質微砂を含む
灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂

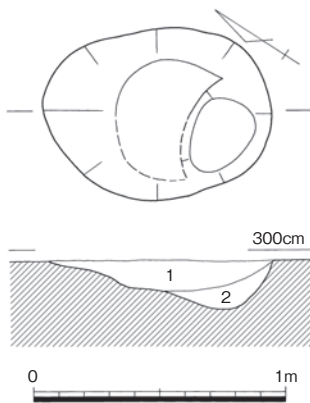
第334図 土坑31 (1/30)

土坑32 (第322・323・335図)

205I区の南西側で検出した土坑である。長さが88cm、幅は70cmである。検出面からの深さは20cmで、底面の標高は276cmを測る。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

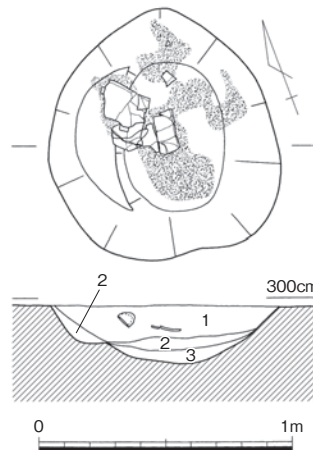
土坑33 (第322・323・336図、図版38)

205I区の南西側において検出した土坑である。上面の規模は、長さ100cm、幅90cmで、円形を呈する。検出面からの深さは23cmで、底面の標高は274cmを測り、断面は楕円形である。ほぼ完形の甕15が底面近くから出土し、周辺に炭化物が多く分布する。時期は弥生時代前期中葉であった。(小林)



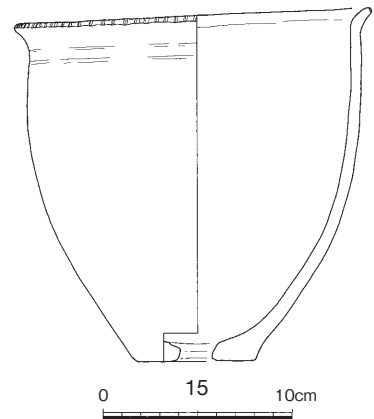
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第335図 土坑32 (1/30)



- 1 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂
- 3 黄褐色 (10YR5/6) 粘質微砂

第336図 土坑33 (1/30)・出土遺物 (1/4)



土坑34 (第322・323・337図)

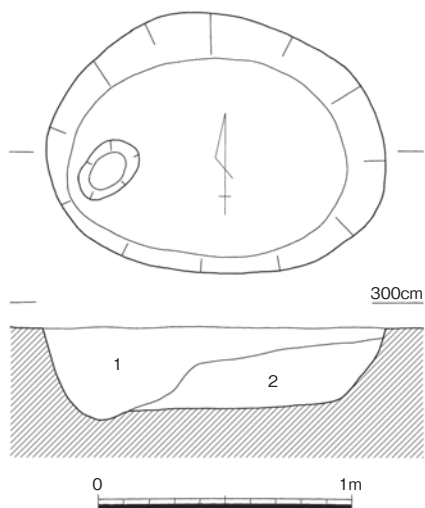
205I区の南西側において検出した。上面の規模は、長さが134cm、幅は102cmで、楕円形を呈する。深さは37cmで、底面の標高は254cmを測る。時期は、弥生時代前期とみる。(小林)

土坑35 (第322・323・338図)

205I区の南側で検出した。規模は、長さが113cm、幅は80cmで、平面形は楕円形を呈する。深さは13cmで、底面の標高は274cmを測り、断面形は楕円形である。中央部付近に径15cmほどの石があった。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

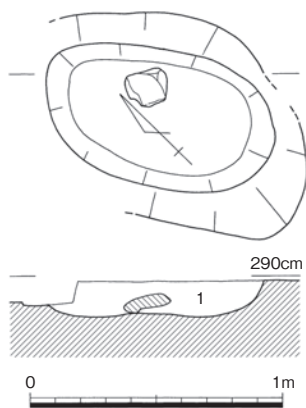
土坑36 (第322・323・339図)

205・206I区間の中央よりやや西側において検出した。上面の規模は、長さが98cm、幅は73cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは24cmで、底面の標高は264cmを測り、断面形は楕円形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



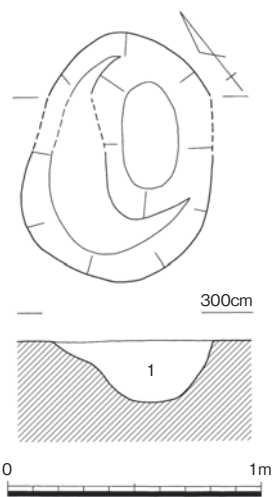
- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂

第337図 土坑34 (1/30)



- 1 鈍黄褐色 (10YR6/4) 粘質微砂

第338図 土坑35 (1/30)



- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第339図 土坑36 (1/30)

土坑37 (第322・323・340図)

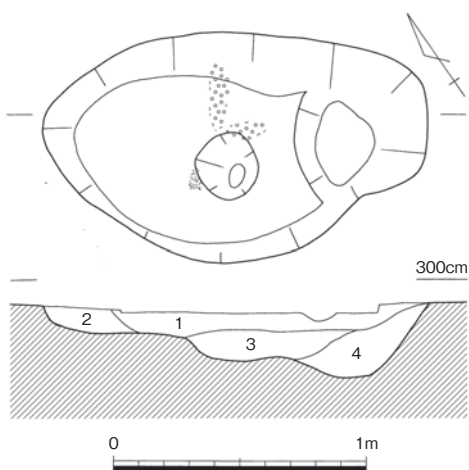
205・206 I 区間の中央よりやや西側において検出した。上面の規模は、長さが152cm、幅は90cmである。平面形はやや歪な方形を呈し、中央付近に炭化物が分布する。深さは29cmで、断面形は不整形を呈していた。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑38 (第322・323・341図)

206 I 区の北西側において検出した。上面の規模は、長さ210cm、幅83cmで、不整形を呈する。検出面からの深さは15cm、断面形は逆台形を呈し、底面の標高は276cmになる。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

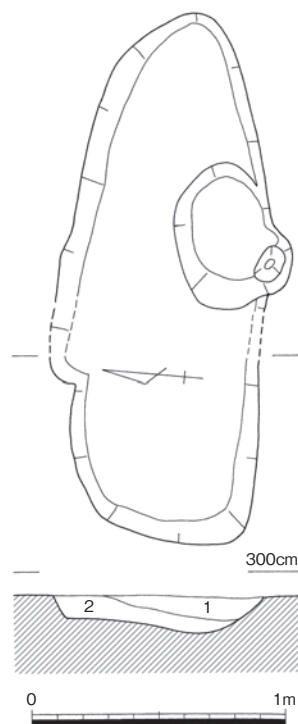
土坑39 (第322・323・342図)

206 I 区の北西側において検出した土坑である。上面の規模は、長さが110cm、幅は84cmで、平面形は隅丸方形を呈していた。検出面からの深さは22cmと浅く、底面は平坦でその標高は269cmを測る。断面の形状は楕形である。北側を先述した土坑38に切られており、かつ出土した土器細片や検出面から判断して、この土坑の時期は弥生時代前期と考えている。(小林)



- 1 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂 炭を含む
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 3 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂 炭を含む
- 4 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第340図 土坑37 (1/30)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂

第341図 土坑38 (1/30)

土坑40 (第322・323・343図)

206 I 区の北西側で検出した。上面の規模は、長さが135cm、幅は79cmで、平面形が瓢形を呈し、西側には炭化物が多く分布する。検出面からの深さは23cmで、底面の標高は271cmを測り、断面形は碗形を呈する。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑41 (第322・323・344図)

206 I 区の北西側において検出した。上面の規模は、長さが135cm、幅は73cmで、平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは21cmで、底面の標高は268cmを測り、断面形は逆台形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑42 (第322・323・345図)

206 I 区の北西側において検出した。上面の規模は、長さが110cm、幅は68cmで、平面形は隅丸方形を呈する。深さは34cmで断面形は碗形を呈するが、標高254cmの底面は凹凸が著しい。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑43 (第322・323・346図)

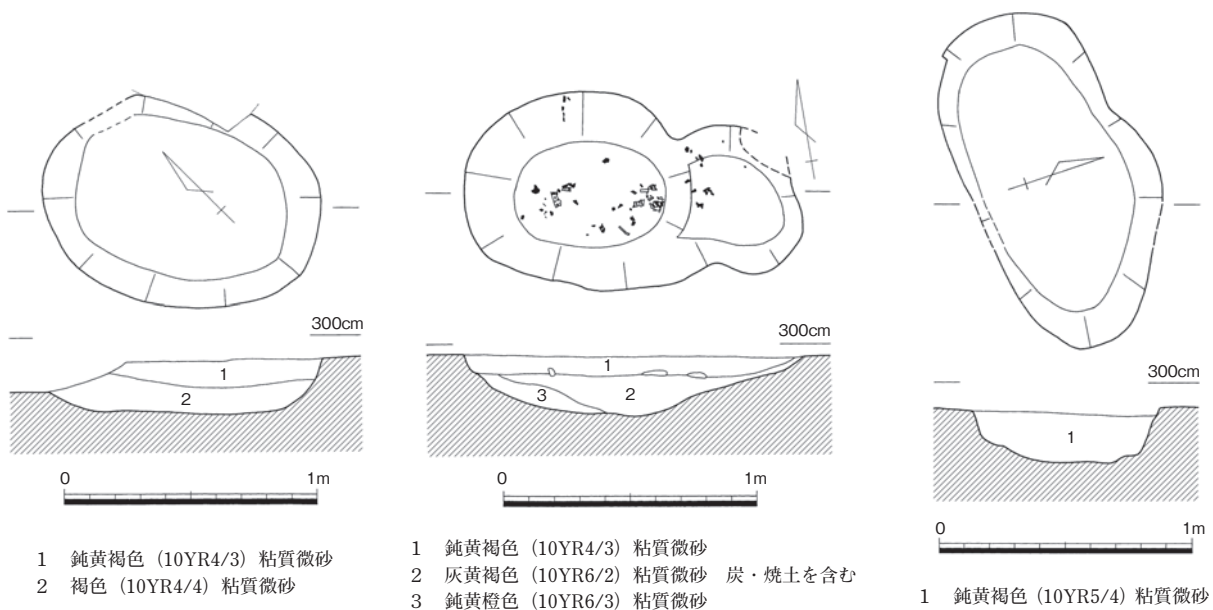
206 I 区の北西側において検出した。上面の規模は、長さが135cm、幅は97cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは25cmで、底面の標高は264cmを測り、断面形は逆台形を呈する。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑44 (第322・323・347図)

206 I 区の北西側において検出した。上面の規模は、長さが83cm、幅は66cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは22cmで、底面の標高は266cmを測り、断面形は逆台形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑45 (第322・323・348図)

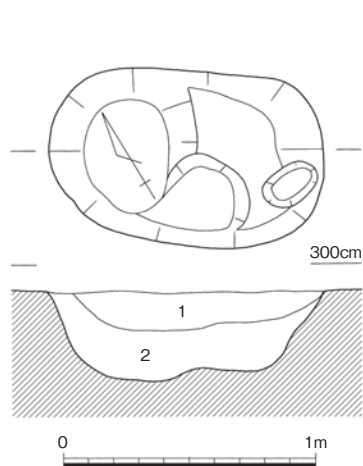
205・206 I 区間のやや東側で検出した。上面の規模は、長さが247cm、幅は85cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは22cmで、底面の標高は270cmを測り、断面形は碗形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



第342図 土坑39 (1/30)

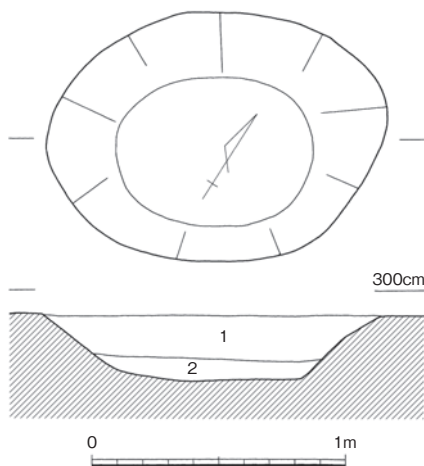
第343図 土坑40 (1/30)

第344図 土坑41 (1/30)



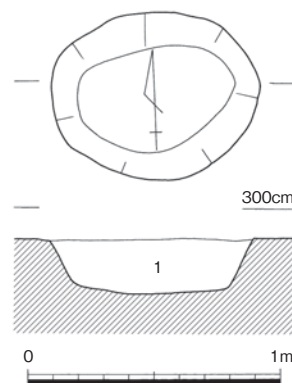
- 1 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR6/4) 粘質微砂

第345図 土坑42 (1/30)



- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第346図 土坑43 (1/30)



- 1 鈍黄橙色 (10YR6/3) 粘質微砂
浅黄色 (10YR8/3) 土を含む

第347図 土坑44 (1/30)

土坑46 (第322・323・349図)

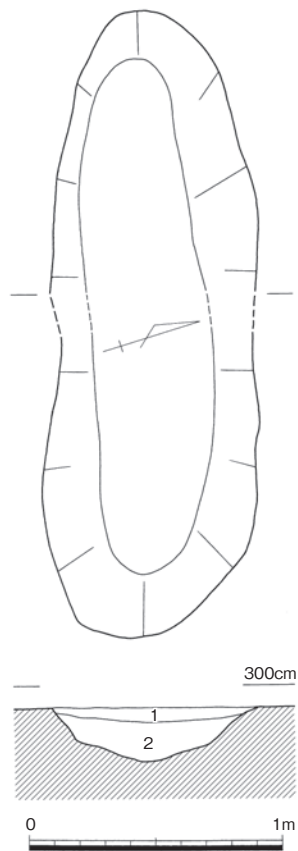
205・206 I 区間の中央よりやや西側で検出した。上面の規模は、長さが200cm、幅は133cmで、平面形は楕円形を呈し、北東側壁面付近に炭化物が分布する。底面は凹凸が著しく、断面形は不整形を呈する。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑47 (第322・323・350図)

206 I 区の中央よりやや北西側において検出した。上面の規模は、長さが121cm、幅は69cmで、平面形は不整形を呈する。検出面からの深さは23cmで、底面の標高は269cmを測り、断面形は碗形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

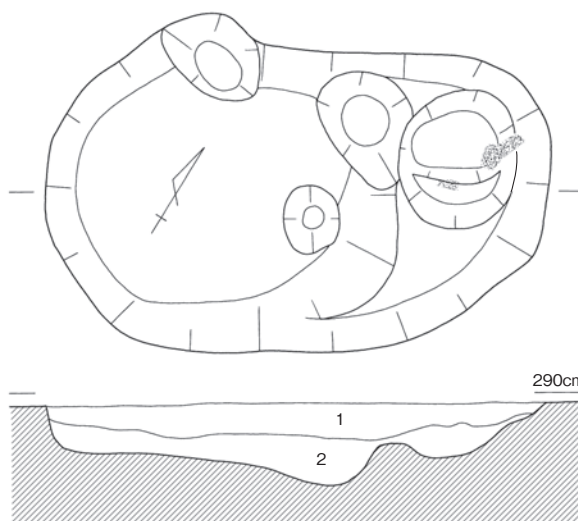
土坑48 (第322・323・351図)

206 I 区の中央よりやや北西側において検出した。上面の規模は、長さ



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第348図 土坑45 (1/30)



- 1 褐色 (10YR4/6) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第349図 土坑46 (1/30)

84cm、幅61cm、深さ14cmで、断面形は椀形である。時期は、前期と考えている。(小林)

土坑49 (第322・323・352図)

206 I 区の中央よりやや北西側において検出した土坑である。上面の規模は、長さが116cm、幅は61cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは10cmで、標高は288cmを測り、断面形は椀形である。時期は、弥生時代前期とみる。(小林)

土坑50 (第322・323・353図)

206 I 区の中央よりやや北西側において検出した。上面の規模は、長さが195cm、幅は54cmで、平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは19cmで、標高は269cmを測り、断面形は逆台形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑51 (第322・323・354図)

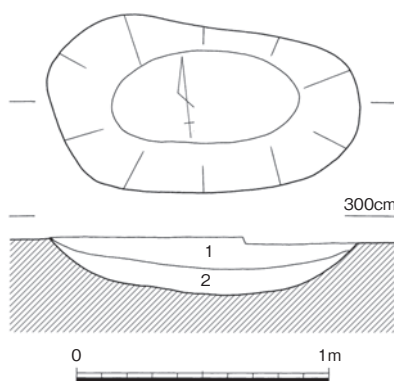
206 I 区の中央よりやや西側において検出した。上面の規模は、長さが137cm、幅は119cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは23cmで、底面の標高は264cmを測り、断面形は椀形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑52 (第322・323・355図)

206 I 区の中央よりやや西側において検出した。上面の規模は、長さは130cm、幅が93cmで、平面形は不整形円形を呈する。検出面からの深さは30cmで、底面の標高は251cmを測り、断面形は不整形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

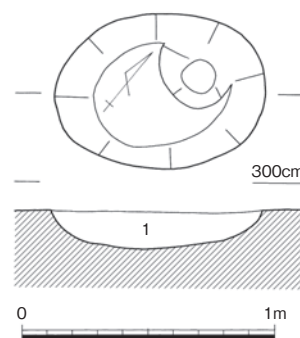
土坑53 (第322・323・356図)

206 I 区の西側において検出した。上面の規模は、長さが65cm、幅は47cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは24cmで、底面の標高は245cmを測り、断面形は椀形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



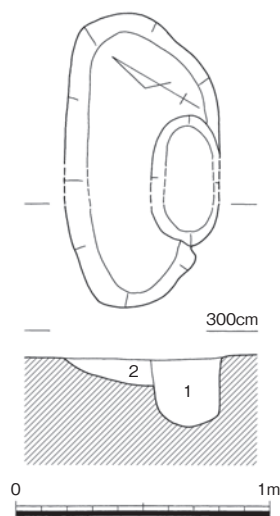
- 1 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第350図 土坑47 (1/30)



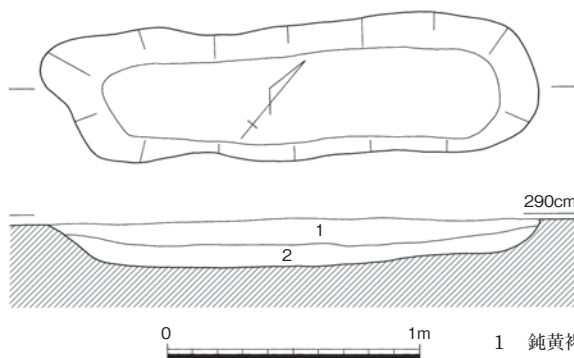
- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第351図 土坑48 (1/30)



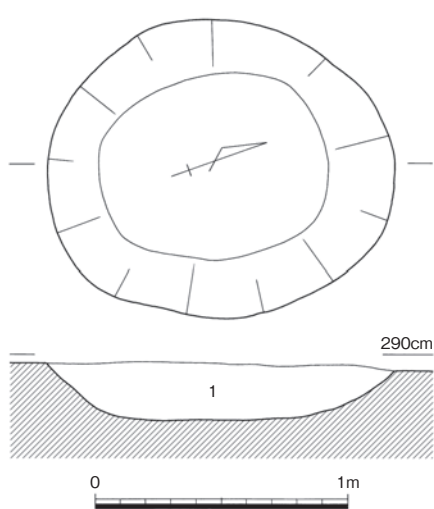
- 1 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂

第352図 土坑49 (1/30)



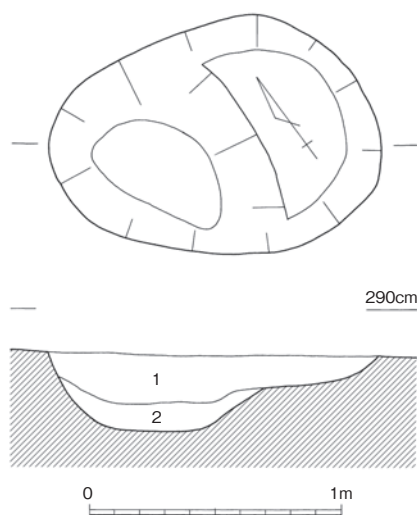
- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第353図 土坑50 (1/30)



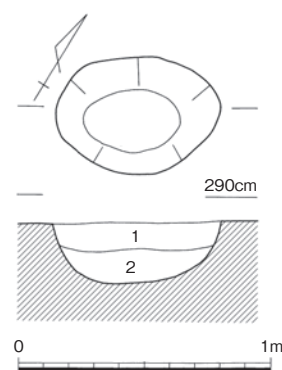
1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂

第354図 土坑51 (1/30)



1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第355図 土坑52 (1/30)



1 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂
2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第356図 土坑53 (1/30)

土坑54 (第322・323・357図)

206 I 区の中央よりやや北西側において検出した小規模な土坑である。上面の規模は、長さが132cm、幅は55cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは11cmで、底面の標高は274cmを測り、断面形は楕形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑55 (第322・323・358図)

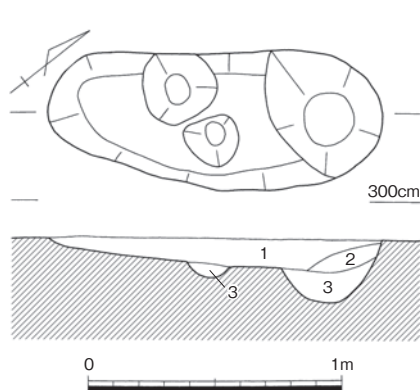
206 I 区の北側において検出した。上面の規模は、長さが80cm、幅は76cmで、平面形は円形を呈する。検出面からの深さは17cmで、底面の標高は276cmを測り、断面形は逆台形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑56 (第322・323・359図)

206 I 区の北側において検出した。上面の規模は、長さが190cm、幅は165cmで、平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは15cmで、断面形は箱形である。標高271cmを測る底面は平坦であった。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

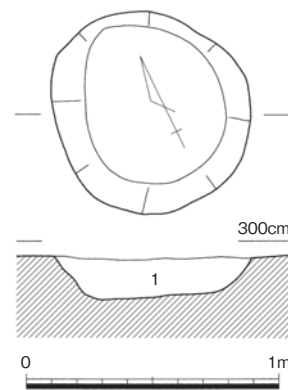
土坑57 (第322・323・360図)

206 I 区の北側で検出した土坑である。上面の規模は、長さ109cm、幅61cmで、平面形は不整形を呈すが方形と円形の2つの土坑ともみえる。検出面からの深さは22cmで、断面形は不整形である。標高268cmを測る東側の底面は、1段凹んでいた。出土遺物から時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
2 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂
3 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第357図 土坑54 (1/30)

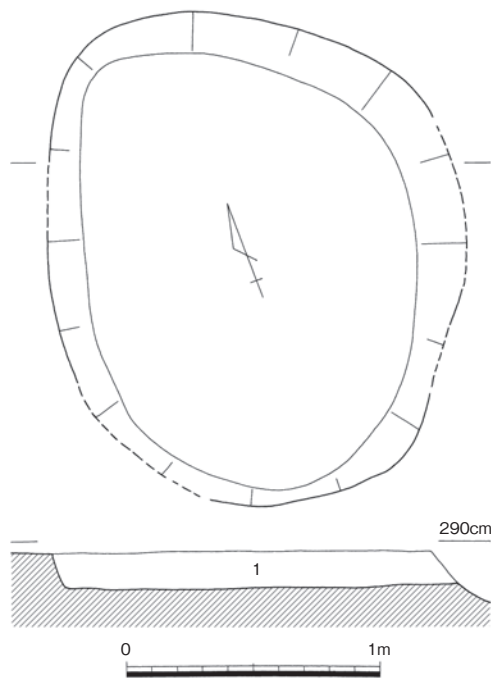


1 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂

第358図 土坑55 (1/30)

土坑58 (第322・323・361図)

206 I 区の中央よりやや北東側において検出した土坑である。上面の規模は、長さ76cm、幅58cmで、隅丸方形を呈する。検出面からの深さは33cmで、底面の標高は257cmを測り、断面形は逆台形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第359図 土坑56 (1/30)

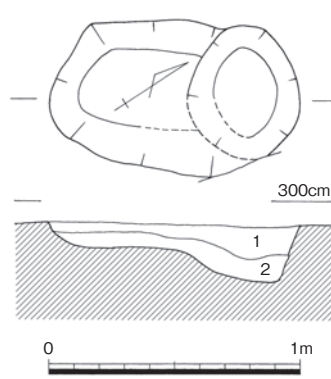
土坑59 (第322・323・362図)

206 I 区の北側で検出した土坑である。上面での規模は、長さが160cm、幅は71cmで、平面形はやや歪な長方形を呈する。深さは24cmで、埋土は2層に分かれるが、ともに基盤層に近い色調をなす。また、断面形は碗形である。出土した土器小片からみて、この土坑の時期は、弥生時代前期と考えている。

(小林)

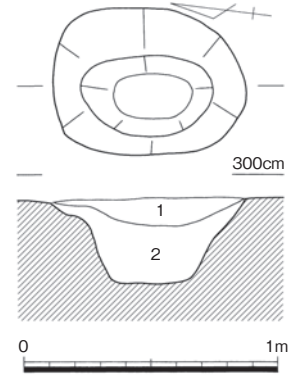
土坑60 (第322・323・363図、図版39)

206 I 区の中央よりやや北東側において検出した土坑である。上面の規模は、長さが43cm、幅は36cmで、平面形は円形を呈する。検出面からの深さは19cm、底面の標高は275cmを測る。断面形は逆台形である。規模や形状からみて柱穴に近い。16が検出面から出土しているが、近在にこれと組み合わせになるピットは存在していない。16はミニチュアの壺で、弥生時代前期である。周辺の遺構の時期から、この土坑も百・前・IIと考えている。(小林)



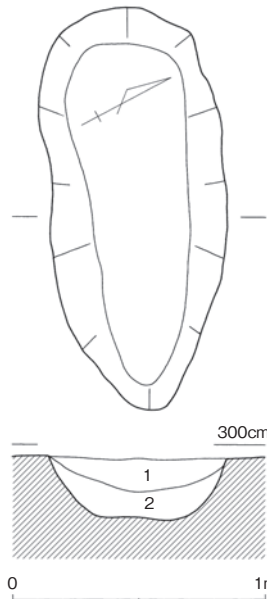
1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第360図 土坑57 (1/30)



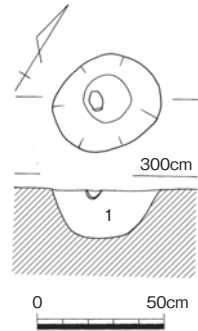
1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
2 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂

第361図 土坑58 (1/30)

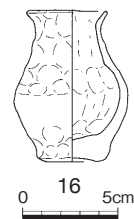


1 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂
2 鈍黄褐色 (10YR6/4) 粘質微砂

第362図 土坑59 (1/30)



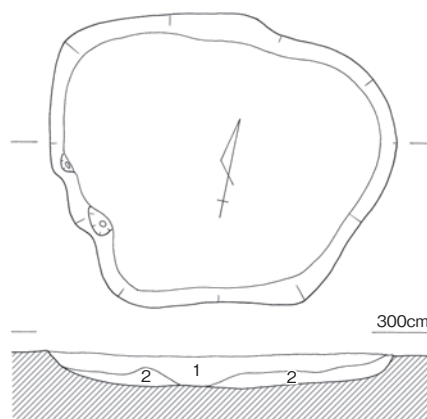
1 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂



第363図 土坑60 (1/30)
・出土遺物 (1/4)

土坑61 (第322・323・364図)

206 I 区の中央よりやや北東で検出した土坑である。上面の規模は、長さが137cm、幅は116cmで、平面形はやや歪な方形を呈する。検出面からの深さは13cmで、断面形は逆台形である。標高278cmを測る底面は平坦であった。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



- 1 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR6/4) 粘質微砂

第364図 土坑61 (1/30)

土坑62 (第322・323・365図)

206 I 区の中央よりやや東側において検出した土坑である。上面の規模は、長さ55cm、幅38cmで、平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは19cmで、底面の標高は265cmを測り、断面形は逆台形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑63 (第322・323・366図)

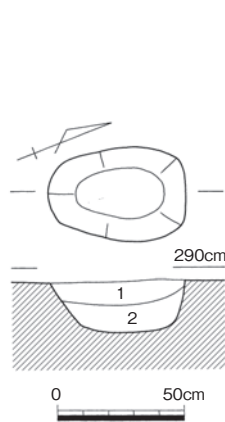
206 J 区の南西側で検出した。上面の規模は、長さが106cm、幅は56cmで、平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは19cmで、断面形は不整形である。標高250cmを測る底面は凹凸が著しい。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑64 (第322・323・367図)

206 J 区の南西側において検出した。上面の規模は、長さが147cm、幅は111cmで、平面形は不整形を呈する。検出面からの深さは29cmで、底面の標高は250cmを測り、断面形は碗形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

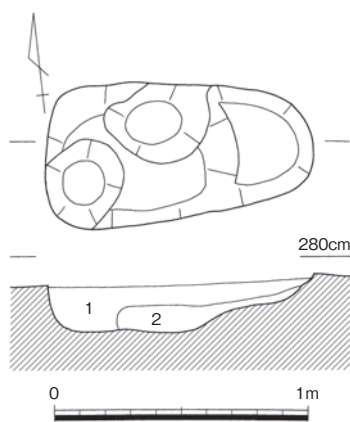
土坑65 (第322・323・368図)

206 J 区の南西側で検出した。上面の規模は、長さは120cm、幅が57cmで、平面形は不整形を呈する。検出面からの深さは23cmで、断面形は不整形である。標高251cmを測る底面は、南東側が凹んでいた。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



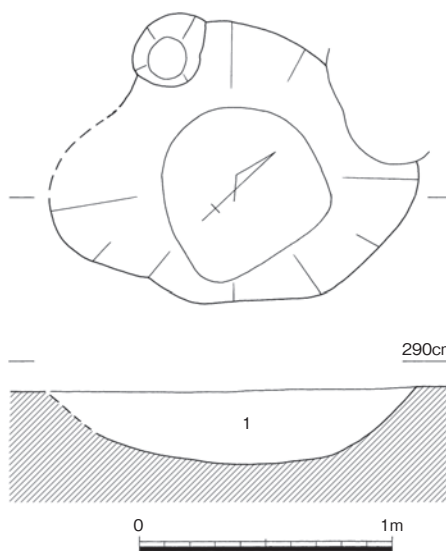
- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第365図 土坑62 (1/30)



- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂

第366図 土坑63 (1/30)



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質微砂

第367図 土坑64 (1/30)

土坑66 (第322・323・369図)

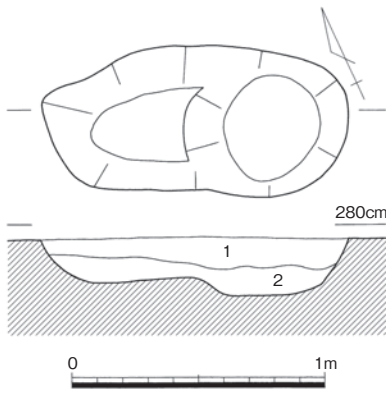
206 J 区の中央よりやや南側において検出した。上面の規模は、長さが93cm、幅は61cmで、平面形は不整形形を呈する。検出面からの深さは12cmで、底面の標高は286cmを測り、断面形は逆台形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑67 (第322・323・370図)

206 J 区の中央よりやや南東側において検出した。上面の規模は、長さが56cm、幅は55cmで、平面形は円形を呈する。検出面からの深さは30cmで、底面の標高は259cmを測り、断面形は逆台形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

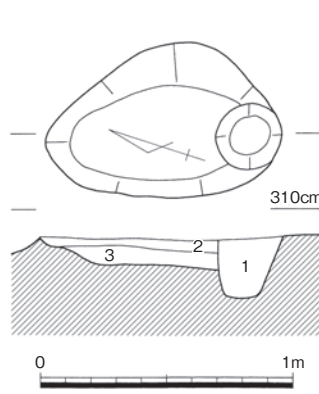
土坑68 (第322・323・371図)

206 J 区の南側において検出した土坑である。西側を柱穴によって削られるが、上面の規模は、長さが165cm、幅66cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは35cmで、底面の標高は240cmを測り、断面形は碗形を呈する。出土した土器の小片などからみて、土坑の時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



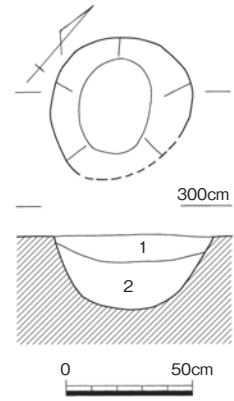
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第368図 土坑65 (1/30)



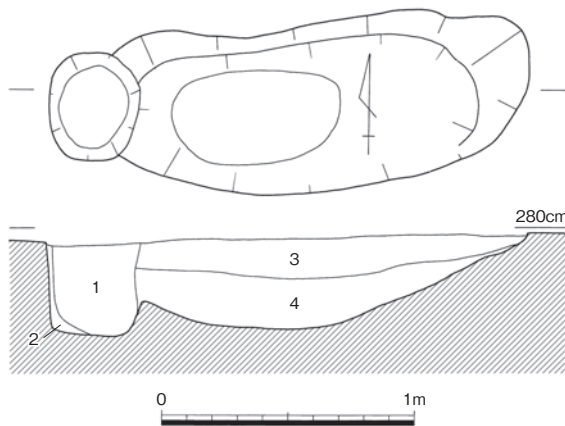
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 3 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第369図 土坑66 (1/30)



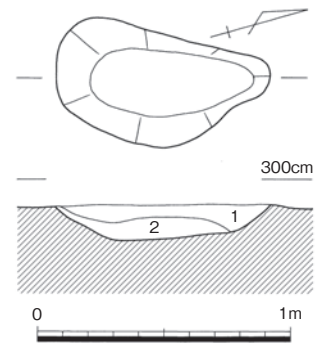
- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第370図 土坑67 (1/30)



- 1 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂
- 3 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 4 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂

第371図 土坑68 (1/30)



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第372図 土坑69 (1/30)

土坑69 (第322・323・372図)

206 J 区の中央よりやや南東側において検出した。上面での規模は、長さは85cm、幅が45cmで、平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは14cmで、底面の標高は277cmを測り、断面形は楕円形である。弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑70・71 (第322・323・373図)

206 J 区中央よりやや南東側で検出した。楕円形の土坑が2つ連なり、規模はともに長さが75cm、幅は42cmを測る。検出面からの深さは21cm、底面の標高は279cmを測り、断面形は楕円形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑72 (第322・323・374図)

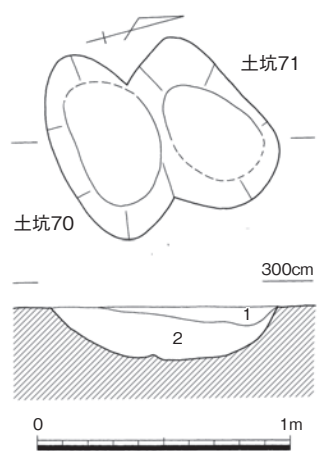
206 J 区の中央よりやや南東側において検出した。上面の規模は、長さが71cm、幅は36cmで、平面形は不整円形を呈する。検出面からの深さは13cmで、底面の標高は277cmを測り、断面形は楕円形である。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑73 (第322・323・375図)

206 J 区の中央よりやや南東側において検出した。上面の規模は、長さが78cm、幅は35cmで、平面形は不整形を呈する。検出面からの深さは32cmで、断面形は箱形である。北東壁面付近は1段低くなる。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

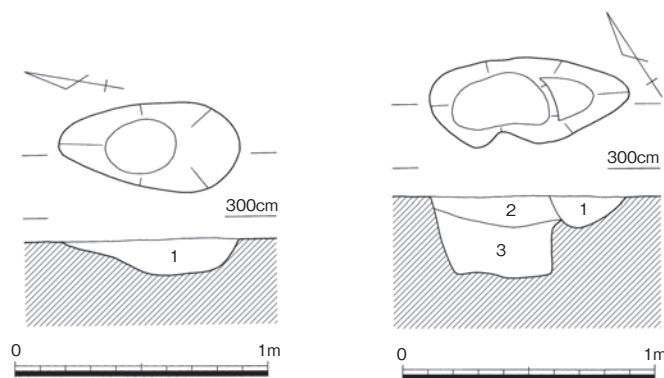
土坑74 (第322・323・376図)

206 K 区の南側で検出した。上面の規模は、長さが150cm、幅は143cmで、平面形は楕円形を呈する。検出面からの深さは29cmで、断面形は楕円形である。底面の標高は231cmを測り、底面には2か所浅い凹みがある。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)



- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂

第373図 土坑70・71 (1/30)

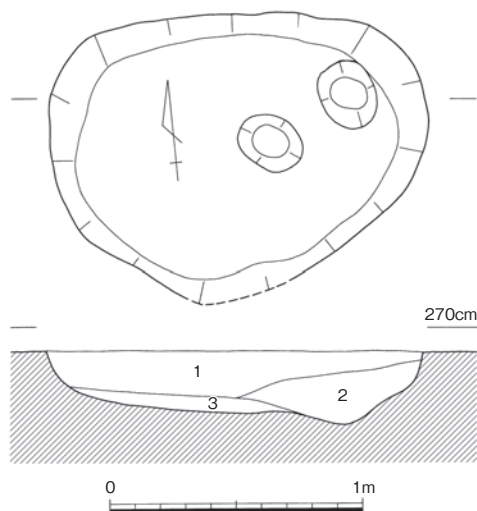


- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第374図 土坑72 (1/30)

- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂

第375図 土坑73 (1/30)



- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 3 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂

第376図 土坑74 (1/30)

土坑75 (第322・323・377図)

環濠外の206K区の南西側で検出した。上面の規模は、長さが155cm、幅は62cmで、平面形はやや歪な長方形を呈する。検出面からの深さは13cmで、断面形は逆台形である。標高は254cmを測る。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑76 (第322・323・378図)

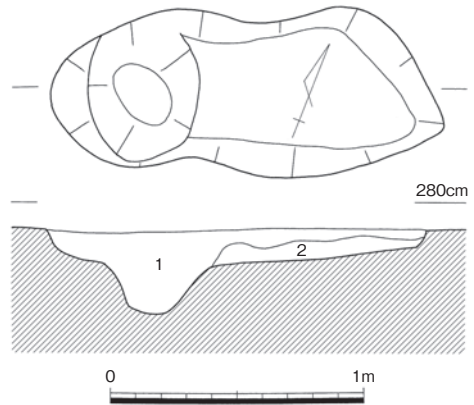
環濠外の206K区の南東側で検出した。上面の規模は、長さが92cm、幅は44cmで、平面形はやや歪な長方形を呈する。検出面からの深さは37cmで、断面形は碗形である。標高は225cmを測る。時期は、弥生時代前期と考えている。(小林)

土坑77・78 (第322・323・379図)

環濠外の206K区において、浅く小規模で平面形が円形を呈する土坑2基う隣接して検出している。この土坑の周辺に密集するピット群よりは一回り大きい。土坑77は、長さが63cm、幅が52cm、深さが14cmである。土坑78は、長さが56cm余り、幅が50cmで、深さは22cmである。切り合い関係から、土坑77が78に後出する。出土遺物は土器細片がわずかにみられるのみであるが、時期は、ともに弥生時代前期と考えている。(小林)

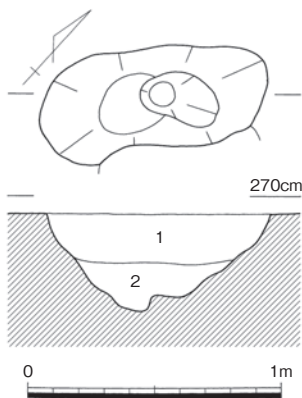
土坑79・80 (第322・323・380図)

環濠外の206K区で検出した。溝12の北東側に位置し、低位部との10mの間に多数の土坑が集中するうちの2基である。先に述べた土坑77・78と同様に浅く小規模な円形を呈する。周辺のピットを含め検討したが建物の柱穴とは考えられない。切り合い関係からみて土坑80が土坑79より後出する。規模は、土坑79が長さ65cm、幅53cm、深さ15cm、土坑80が長さ63cm、幅43cm、深さ16cmである。環濠外の土坑群については、人為的な遺構かどうか判然としないが細片でも遺物を含んでいる。それからみた時期は、ともに弥生時代前期と考えている。(小林)



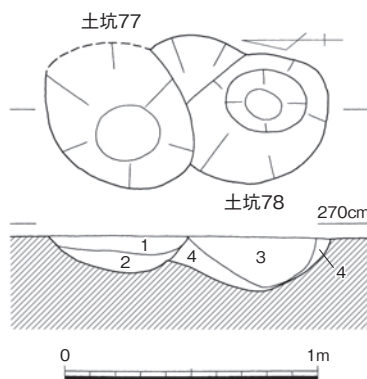
- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第377図 土坑75 (1/30)



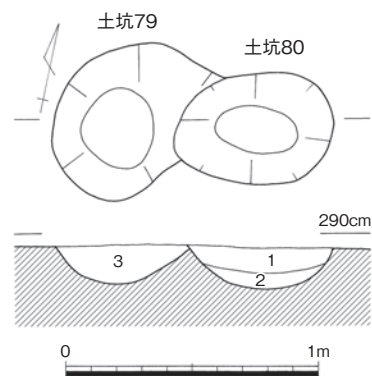
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂
- 3 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第378図 土坑76 (1/30)



- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘質微砂
- 3 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂
- 4 褐色 (10YR4/6) 粘質微砂

第379図 土坑77・78 (1/30)



- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂
- 3 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

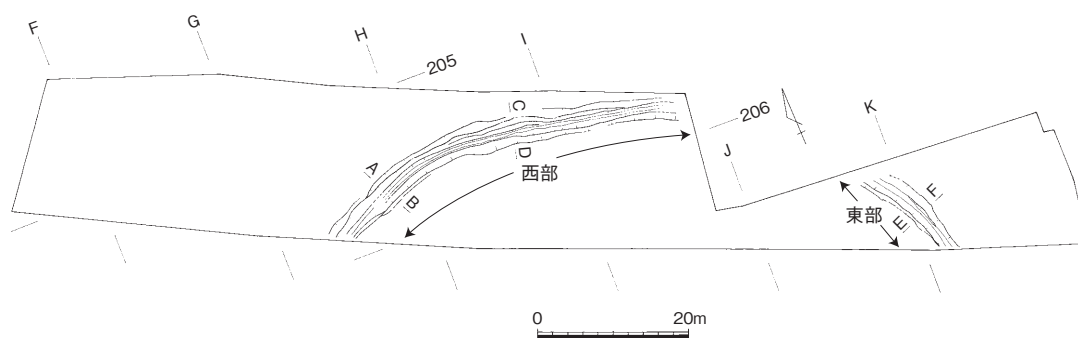
第380図 土坑79・80 (1/30)

4 環濠

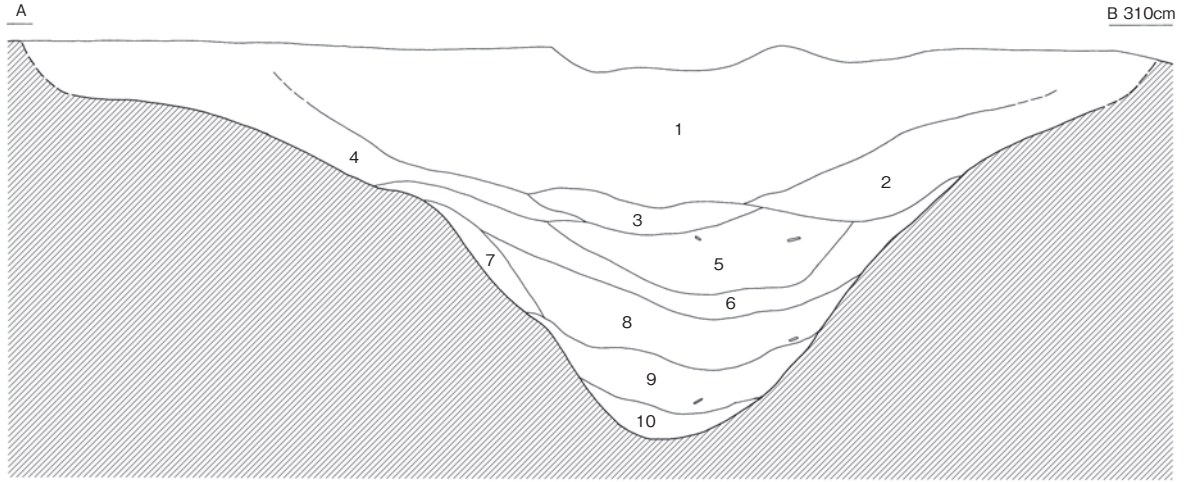
環濠西部 (第322・323・381～383図、写真47・48、巻頭図版6-1・6-2、図版31-3・39・40・46)

205G・205H区にかけての環濠を「環濠西部」として述べる。実際の調査では、西部のC-D断面を境に、さらに東西で分けて調査した。ここは環濠全体の北西部分にあたり、調査部分は延長約50mで、環濠全体のおよそ15%にあたる。環濠西部で計測した規模は、検出幅310～410cm、深さ133～157cmを測る。断面の形状は「V」字を呈しているが、最上層の部分は外に開く形状をしている。検出する際、平面のラインは必ずしも明瞭とは言えず、A-B断面でも、環濠の最上層まで線を明確に引くことができなかつた。これは、環濠が掘削された当時の生活面の残存状況が良好であるために、上層が土壌化しているためと考えられる。環濠の基盤層上部は締まった粘性微砂質土で、第382図のC-D断面の第12・13層にあたる。しかし、環濠の基盤層下部は、細砂を主体とした軟弱なものへと変化し、これは第382図のC-D断面の第14層にあたる。環濠より下層では、微高地が形成される前の河道の状況が看守され、環濠の最下部については、この河道の堆積層である。埋土の状況は、A-B断面の第1～4層、C-D断面の第1・2層は、褐色を呈する単一層で、自然堆積層であると理解される。A-B断面の第3～8層、C-D断面の第3～5層には基盤層の土塊が含まれており、人為的な埋め戻しがなされたことが示唆される。A-B断面の第10層にラミナが、C-D断面の第8層には粘質土がレンズ状に堆積している状況が観察され、環濠は常時ではないとしても滞水状態であったことが想定される。C-D断面の第9層は、粗砂で、壁面が崩落したものと理解される。調査時にも壁面は中位あたりから崩落することが度々あったが、土層の観察からは環濠の維持・管理に伴う再掘削などの痕跡はみられなかつた。また、土塁の有無については言及できない。

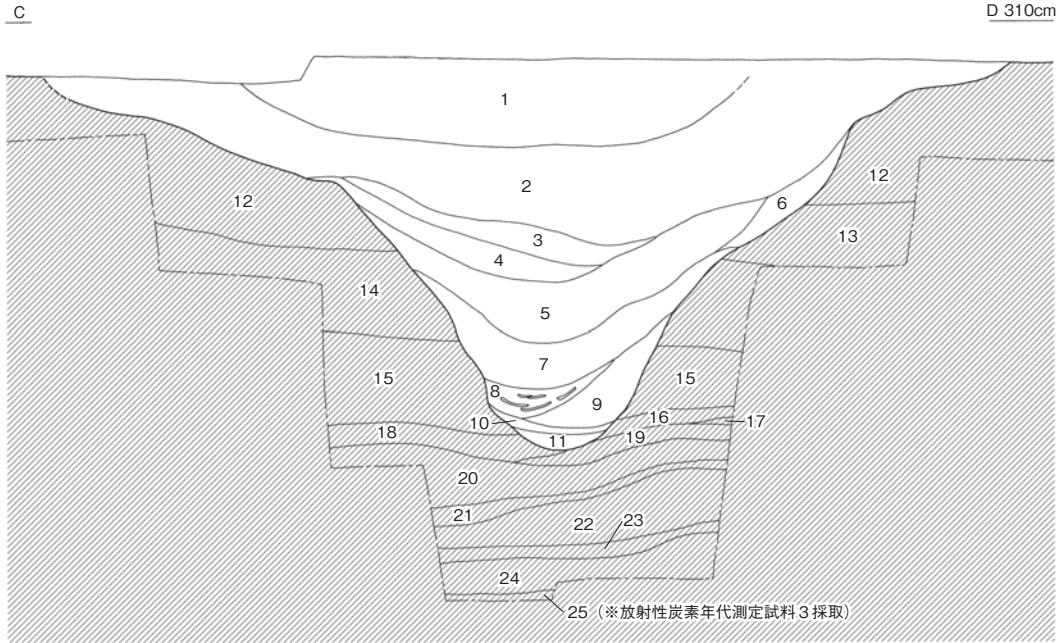
出土遺物には壺17～22・31、甕23～29、鉢30、蓋32、サヌカイト製の石匙S7、石鏃S8・S9、粘板岩製の磨製石包丁S10、花崗岩製の石錘S11などがある。これらの遺物から、環濠の機能した時期は百・中・Ⅱの限られた時期であると考えられる。出土遺物は整理箱にして、およそ3箱出土している。出土した土器は細片であるものが多く、図化できない状態のものも多くあった。また、環濠の上層・下層を問わずに量は少ない。これらのことから、環濠を土器などの生活用具の廃棄場所としていないことが理解できる。環濠の再掘削などの積極的な維持・管理はなされないが、生活用具の廃棄をしないという方向での維持・管理の姿がみられる。遺物のなかで、壺35は口縁部を故意に打ち欠いた状態で環濠上層から出土しており、環濠に関するなんらかの祭祀に使用された可能性とともに、環濠が浅い状態でも区画として機能していたことを示す資料である。(團)



第381図 環濠断面位置・遺物出土地区 (1/1,000)

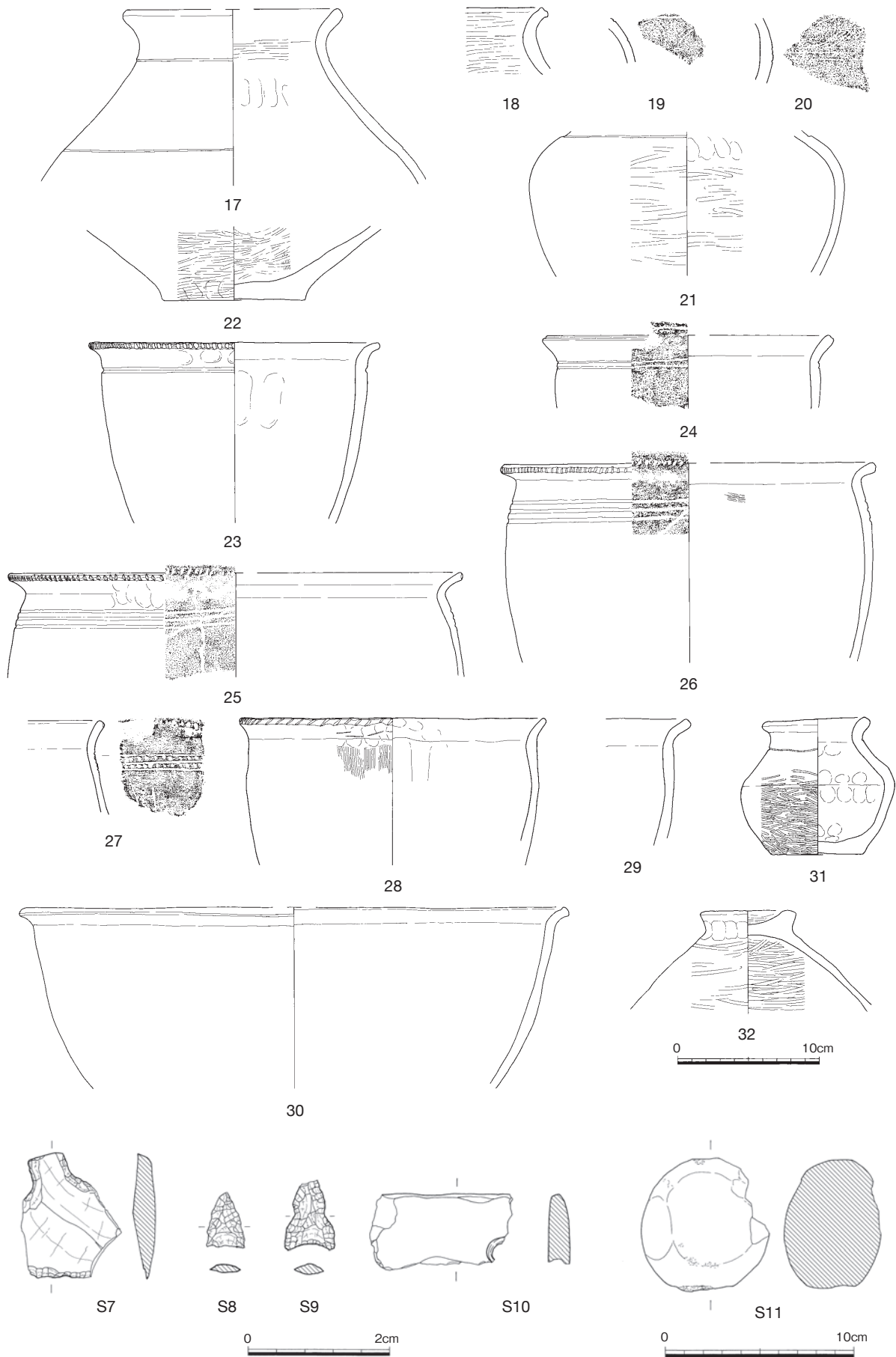


- | | |
|-----------------------|-----------------------------|
| 1 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘性微砂 | 7 明黄褐色 (10YR6/6) 粘性微砂 |
| 2 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘性微砂 | 8 褐灰色 (10YR6/1) 粘性微砂 炭を少量含む |
| 3 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘性微砂 | 浅黄色 (2.5Y7/4) 粘性微砂の土塊多く含む |
| 4 浅黄褐色 (10YR8/4) 粘性微砂 | 9 灰色 (5Y6/1) 粘性微砂 |
| 5 鈍黄褐色 (10YR6/4) 粘性微砂 | 10 灰白色 (5Y7/1) 細砂 |
| 6 浅黄色 (2.5Y7/4) 粘性微砂 | |



- | | |
|--------------------------------|--|
| 1 褐色 (7.5YR4/3) 粘性微砂 | 11 青灰色 (5B6/1) 粗砂 青灰色 (5PB6/1) 粘質土を少量含む |
| 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 | 12 明黄褐色 (10YR6/6) 粘性微砂 |
| 3 明黄褐色 (10YR6/6) 粘性微砂 | 13 明黄褐色 (10YR6/6) 粘性微砂～細砂 |
| 明黄褐色 (2.5Y7/6) 粘性微砂 基盤層多く含む | 14 明黄褐色 (10YR7/6) 微砂～細砂 基盤層が砂層に変化 |
| 4 黄褐色 (2.5Y5/3) 粘性微砂 基盤層を少量含む | 15 鈍黄褐色 (10YR7/4) 細砂 |
| ラミナ層が見られる | 16 鈍黄褐色 (10YR6/4) 微砂でやや粘性を帯びる |
| 5 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘性微砂 基盤層を多く含む | 17 灰白色 (10YR7/1) 粘質土 |
| 6 鈍黄色 (2.5Y6/4) 粘性微砂 | 18 鈍黄褐色 (10YR7/2) 微砂～細砂 |
| 7 黄褐色 (2.5Y5/4) 粗砂 | 19 鈍黄褐色 (10YR7/3) 粗砂 |
| 青灰色 (5PB6/1) 粘質土塊を含む | 20 鈍黄褐色 (10YR7/2) 微砂 |
| 8 明青灰色 (5PB7/1) 細砂～粗砂 | 21 鈍黄褐色 (10YR7/2) 微砂～細砂と褐灰色 (10YR6/1) 粘質土の互層 |
| 灰色 (N4/) 粘質土がレンズ状に堆積 | 22 鈍黄褐色 (10YR7/2) 微砂～細砂 |
| 9 灰黄色 (2.5Y6/2) 粗砂で基盤層下層砂とほぼ同質 | 23 灰白色 (10YR7/1) 粘質土 白色微砂のラミナ層 |
| 10層を少量含む | 24 青灰色 (5PB6/1) 粘質土で黒褐色 (10YR3/1) 粘質土のラミナ層 |
| 10 青灰色 (5PB6/1) 粘質土 | 25 灰白色 (10YR7/1) 粘質土で自然木を多く含む |

第382図 環濠西部断面 (1/30)



第383図 環濠西部出土遺物 (1/2・1/3・1/4)

環濠東部（第322・323・384～386図、図版39・40・46）

土層断面C-D（第393図）より東側を環濠東部として報告する。図中においてこの環濠東部の中央の欠落部分は、既に報告している「百沢田5溝1」に該当する。また、207K区の南側では「百沢田3溝44」と連続し、環濠西部や「百沢田2溝69・70」、「百沢田3溝36」とあわせると、環濠南端部を除いた沢田遺跡環濠のほぼ全容が明らかとなった。

環濠全体の中で北側に当たる部分は、環濠西部で報告した規模・形状に変わりなく、断面はV字に近い形状である。環濠全体の中で東側（E-F断面）の規模は、上面幅280cm、深さ110cmで、底面の標高158cmを測る。この環濠東側になる「百沢田5溝1」の南端部分から本調査区内全域と「百沢田3溝44」にかけては、底部幅が環濠北側に比べて広がっている。E-F断面付近では100cm前後になり、底面はV字というより丸みを帯びた形状になる。

出土した遺物のうち、弥生土器には壺33～45・59、甕46～58、蓋60～65、小形の壺66・67が、石器では、柱状方刃石斧S12、磨製の石包丁S13、サヌカイト製石鏃S14～S17がある。このうち、壺33・34は溝底に接して出土しており環濠掘削から使用開始の時期を示すと考えられる。このほか最下層からは、甕57・小壺66や石斧S12も出土している。先にも述べたようにこれより上層の遺物については、環濠の周辺部を削り埋め戻された土層内に混入したものと考えている。

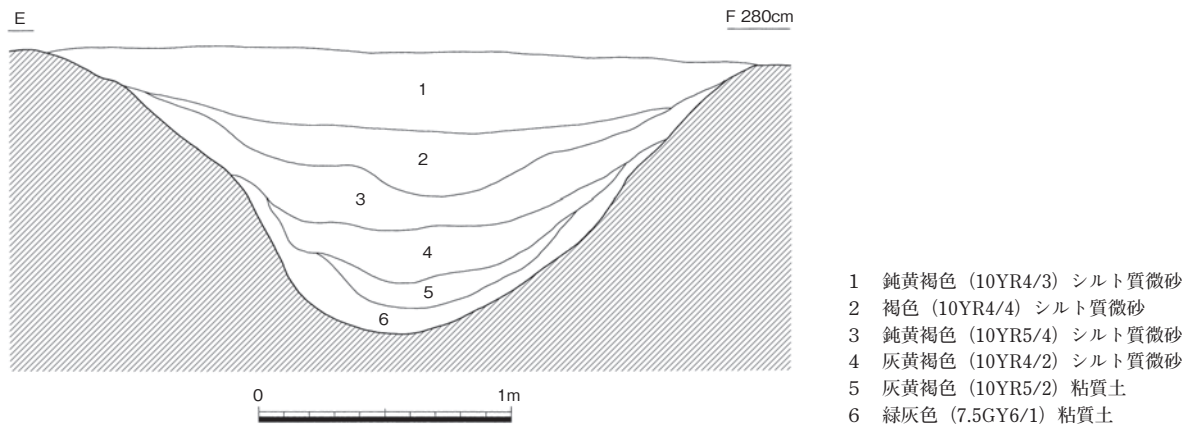
壺には、頸部と胴部との境に段をもつ45のほか、頸部に突帯を削り出すもの、さらにそのうえに沈線を施すもの、頸部や体部に2～3条の沈線を施すもの、口縁部から体中央部にかけてが無紋のものなどがある。壺35体部の波状文は細くて浅い。38では、頸部の貼り付け突帯に刻み目をほどこす。51では、頸部に眼鏡状浮文を施す。

甕は、いずれの個体も「く」の字状に外反する口縁部をもっている。そのうち、口縁端部に刻み目を施すものと施さないもの、頸部に2～4条の沈線を施すもの及び無紋のものがある。前者には沈線間に刺突を施すものもみられる。

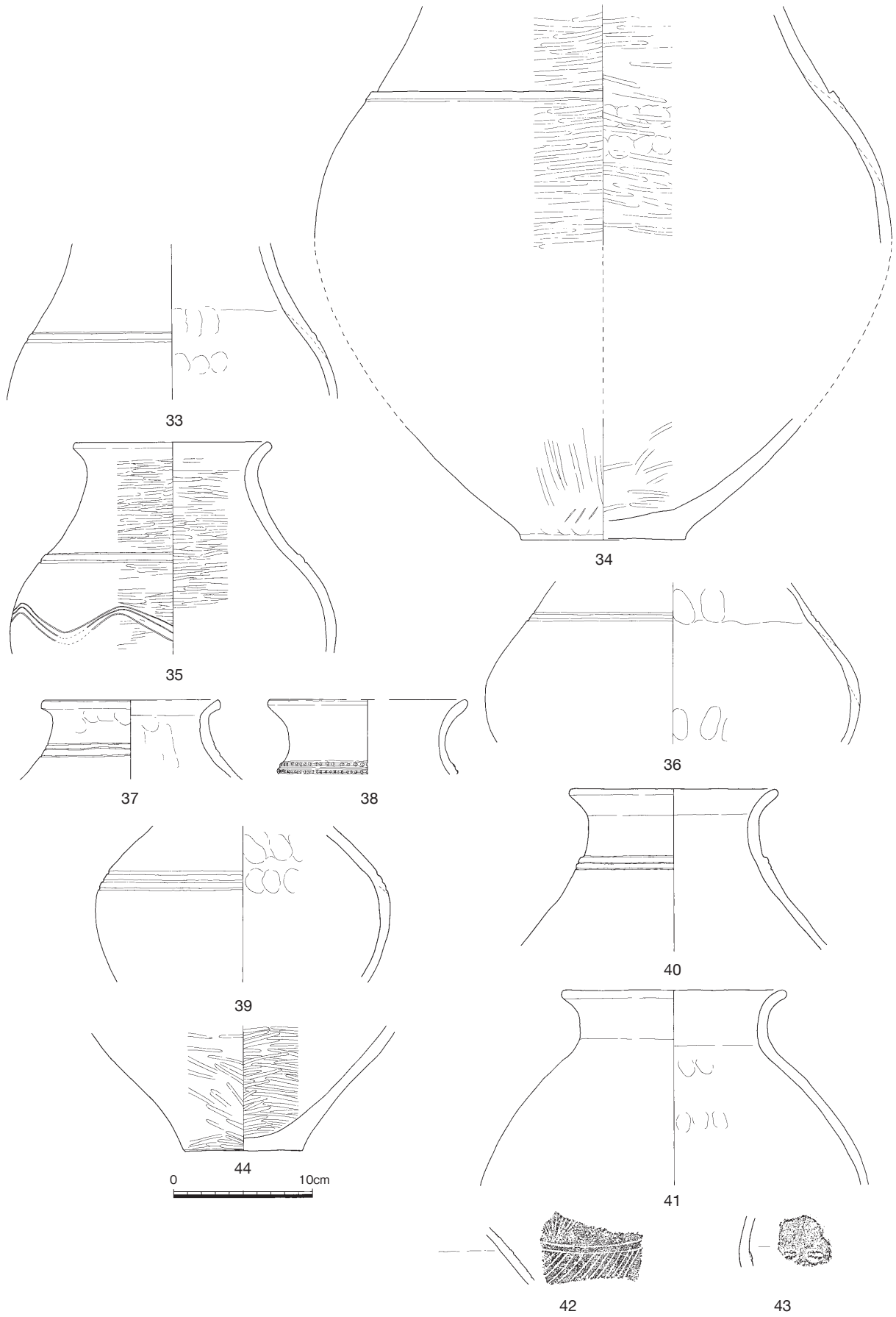
S12・S13ともに、材質は県北部が主要な産地である粘板岩である。このうち、S13は、穿孔が未完通であることから、未製品とみられる。

遺物の時期は、いずれも弥・前・Ⅱでまとまっており、環濠が使用された時間は比較的短期間であったことをうかがわせる。

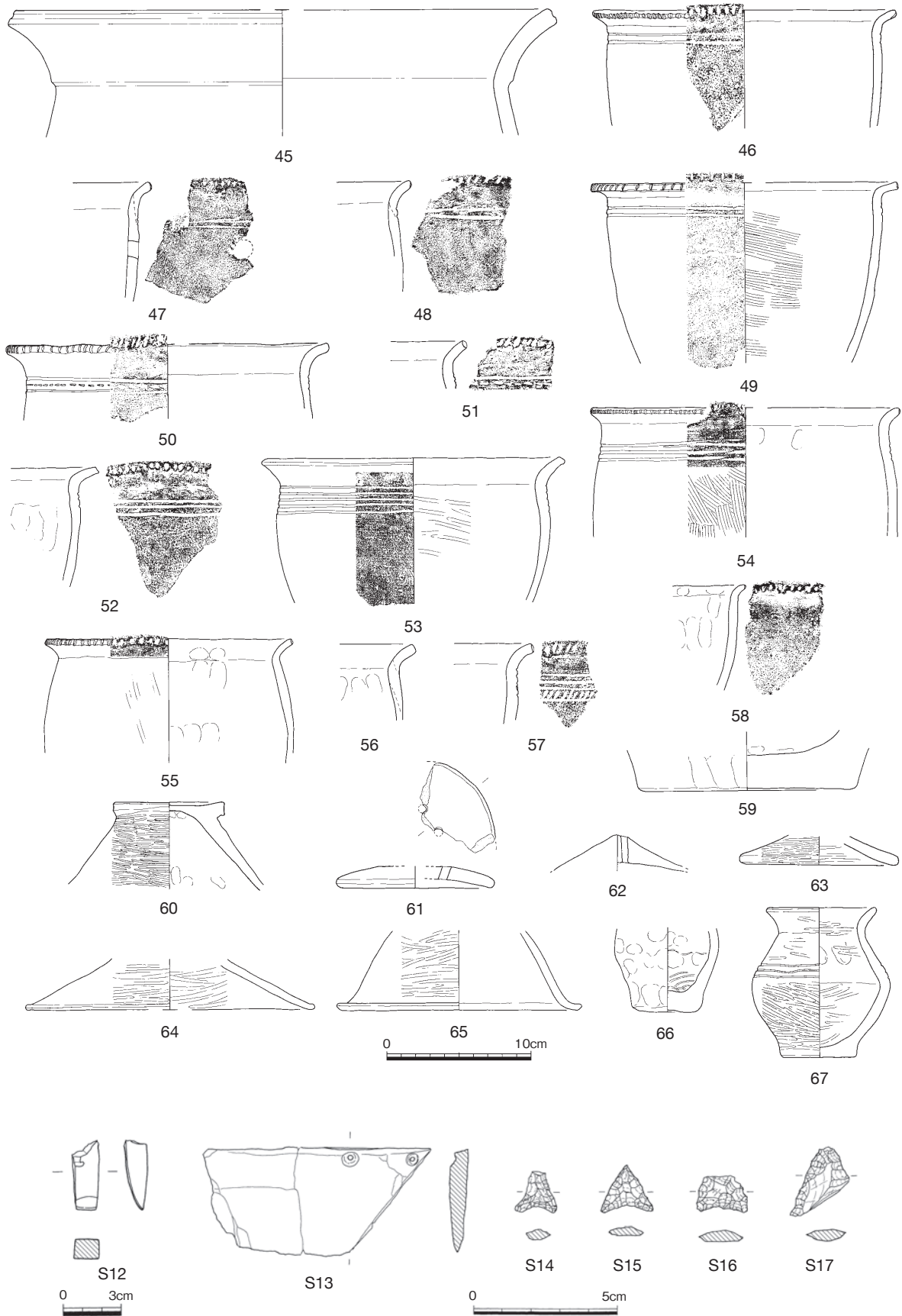
（弘田・小林）



第384図 環濠東部断面 (1/30)



第385図 環濠東部出土遺物① (1/4)



第386図 環濠東部出土遺物② (1/2・1/3・1/4)

5 溝

溝1 (第322・323・387図)

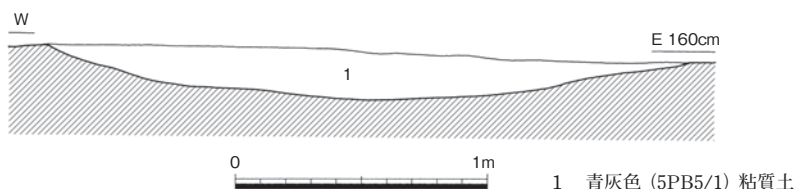
203・204D・E区に位置する溝で、百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡の境となる低位部に立地する。弥生時代中期の水田1の基盤から35cm下層で検出している。埋土はグライ化した粘質土である。出土遺物はないが、検出面から弥生時代前期の遺構であると判断した。(團)

溝2 (第322・323・388図)

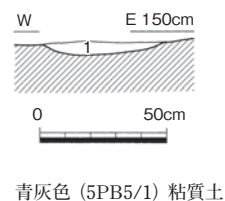
204D区に位置する溝で、全長5mのみを検出している。上端幅25~50cm、深さは4~10cmの規模を測る。埋土はグライ化して青灰色を呈した粘質土である。出土遺物はないが、溝1と同じ検出面となるため、時期は、弥生時代前期と判断した。(團)

溝3 (第322・323・389図)

204D区に位置する溝で、溝2とは東端で接している。上端幅25~50cm、深さは2~5cmの規模を測る。溝1、溝2と同様に埋土はグライ化している。出土遺物はないものの、溝1・2と同様の検出面であることから、弥生時代前期と考えられる。(團)



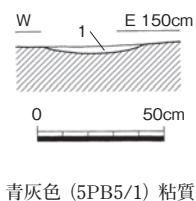
第387図 溝1 (1/30)



第388図 溝2 (1/30)

溝4・5 (第322・323・390図)

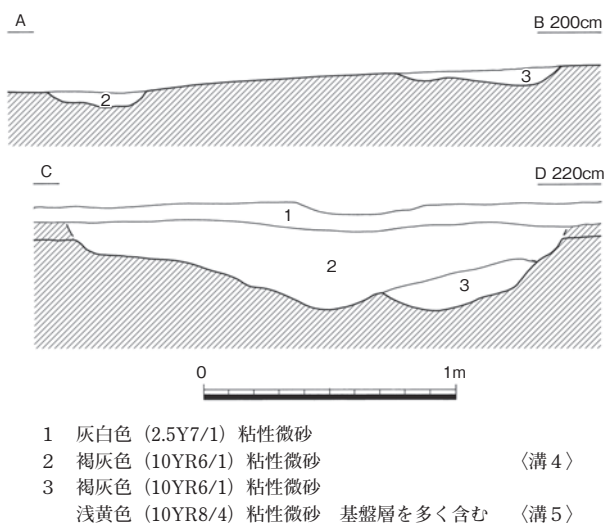
204E・F・G区に位置する溝で、約30cm掘り下げた段階で検出している。実際の溝の幅は、溝4でおよそ150cmを測る。溝4と溝5は調査区の西側では重複し、溝4が新しい。弥生時代前期と思われる土器が出土し、水田3の水田層下層の間層除去後に検出していることから弥生時代前期の遺構と判断した。(團)



第389図 溝3 (1/30)

溝6~8 (第322・323・391図)

205F・G区で検出した3条の溝で、微高地の縁辺に平行して延びている。断面では3条の溝と認識できたが、平面では捉えがたいために、溝7・8は同時に掘り下げることとなった。溝7・8からは甕68が1点出土しており、この遺物から、弥生時代前期と考えられる。(團)



第390図 溝4・5 (1/30)

溝9 (第322・323・392図、図版47)

205G区に位置し、微高地上に延びる溝である。百沢田3溝7につながり、百・

前・Ⅱの時期とされる。北端は弥生時代後期の微高地の開削によって削平を受け、微高地端部で溝6・7に切られている。出土遺物にはS18の石槍がある。時期は、百・前・Ⅱと考えている。(團)

溝10 (第322・323・393図)

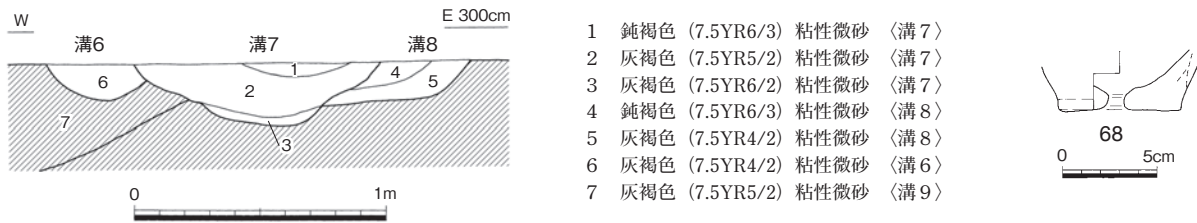
205G・H・I区に位置し、百沢田3溝37につながり、環濠との切り合い関係から、環濠埋没後に掘削された溝であることがわかっている。時期の特定できる遺物は出土していないが、過去の調査で百・前・Ⅲの遺物が出土しており、この時期の遺構であると考えるのが妥当である。(團)

溝11 (第322・323・394図、図版46)

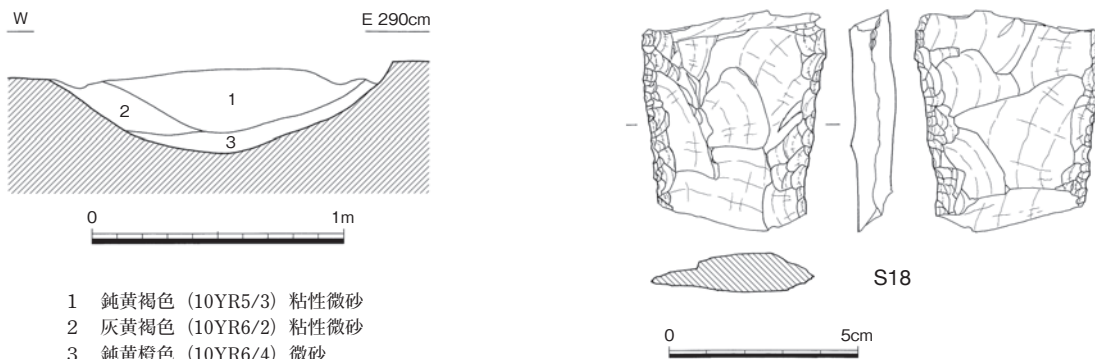
205H区に位置する溝である。溝10同様に微高地上を東西に延びている。円形周溝墓1との切り合いは確認出来ていないが、溝10と併走すること、底面の標高に差がないことなどから、同時期の百・前・Ⅲの時期の遺構であり、円形周溝墓1の周溝に一部が切られていると考えられる。(團)

溝12 (第322・323・395図)

調査区東側で検出した溝で、206K区の西側から207K区の東側へ南東方向に流れ、調査区北側で環濠に合流すると思われる。上面幅116cm、底面幅78cmで、深さは14cmを測る。底面の遺物は小片が出土するのみであるが、時期は弥生時代前期と考える。(小林)

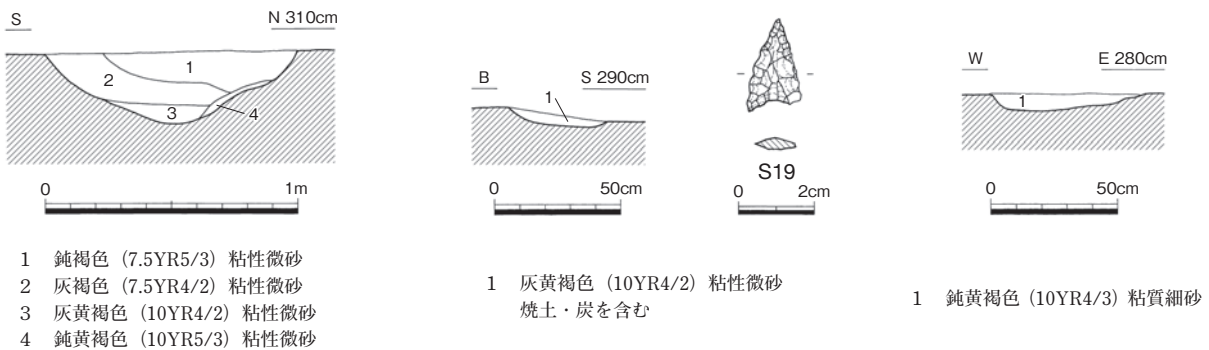


第391図 溝6～8 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘性微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘性微砂
- 3 鈍黄褐色 (10YR6/4) 微砂

第392図 溝9 (1/30)・出土遺物 (1/2)



- 1 鈍褐色 (7.5YR5/3) 粘性微砂
- 2 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘性微砂
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂
- 4 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘性微砂

- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂
焼土・炭を含む

- 1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質細砂

第393図 溝10 (1/30)

第394図 溝11 (1/30)・出土遺物 (1/2)

第395図 溝12 (1/30)

第4節 弥生時代中期の遺構・遺物

1 概要

弥生時代中期に入ると遺構数は激減しており、環濠も完全に埋没していたようである。円形周溝墓1基、土坑1基および百間川原尾島遺跡との境をなす微高地西側低位部において検出した水田1面を掲載するのみである。これらわずかな遺構は、時期的には中期初頭～前葉に位置付けられるが、その消長は西側の微高地である百間川原尾島遺跡（本報告の「百間川原尾島遺跡7」や「百間川原尾島遺跡5」の三ノ坪・横田調査区）へと集落が移動した結果とみなすことができよう。

円形周溝墓については、南半が過去に調査済みで、既に報告（百沢田3円形周溝1）されている。本調査区では弥生時代の基盤上での検出であり、墳丘はほとんど削平されたとみられるが、周溝は正円形に近い。中央付近に木棺の小口溝痕と考えられるピットが存在すること、周溝内における埋葬施設と考えられる土坑の存在やその上から出土し、口縁部を打ち欠いた壺の存在、さらには、溝底より供献とみられる壺の出土したことから円形周溝墓と断じたものである。

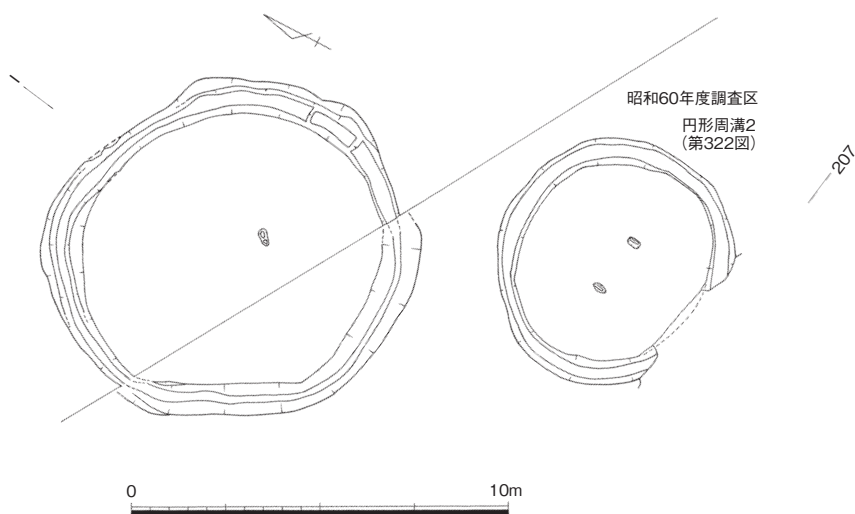
水田は過去の調査によると、百間川沢田遺跡の中核をなす微高地の両側に広がっている。本報告の水田1は、微高地西側の低位部中央のたわみ地形に造られたもので、既報告の百沢田2下層水田、百沢田3中期水田とは一連のものである。百間川遺跡群を象徴する洪水差に埋没した後期水田層とは間層を挟んでおり、小畦畔で区画された水田面の平面形は亀甲状を呈している。（弘田）

2 墓

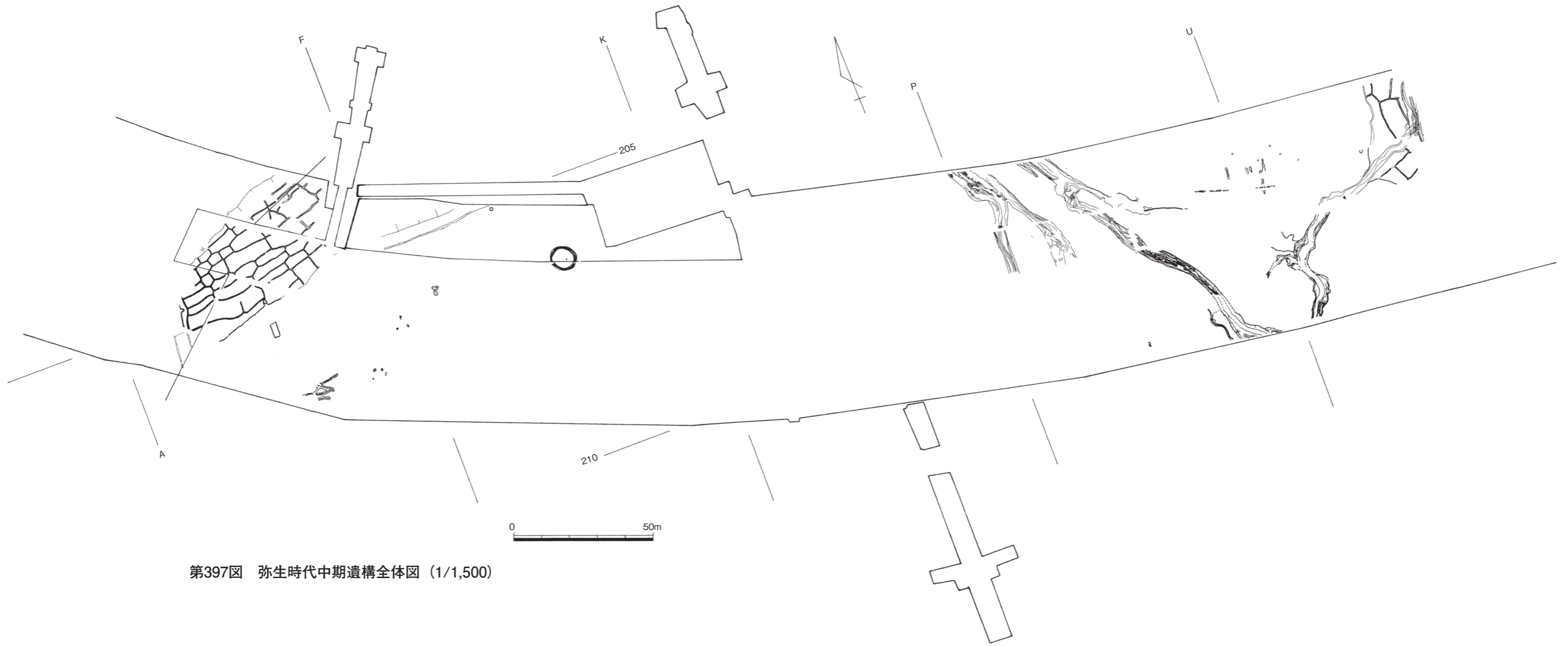
円形周溝墓1（第396～404図、巻頭図版7-1・8-1、図版32-1・32-2・40・47）

205H・I区の間中央よりやや北側で検出した遺構で、今回報告するのは、昭和60年度に調査を行い既報告の百沢田3円形周溝1の北東側2/3に当たる。当遺構がある位置は、環濠集落を形成していた微高地上の中央よりやや北側付近である。検出した遺構は、円形に巡る溝と、周溝内の中央付近にある土坑1基である。溝の規模は、幅60～110cmで断面は逆台形を呈する。この溝は一周しており、溝内側の規模840×709cmで面積は45㎡前後になる。北西方向から南東方向の直径がやや長く、完全な円形にはならず楕円形を呈している。また溝の底のレベルはほぼ一定であり、出入り口を示すような陸橋部は存在しなかった。

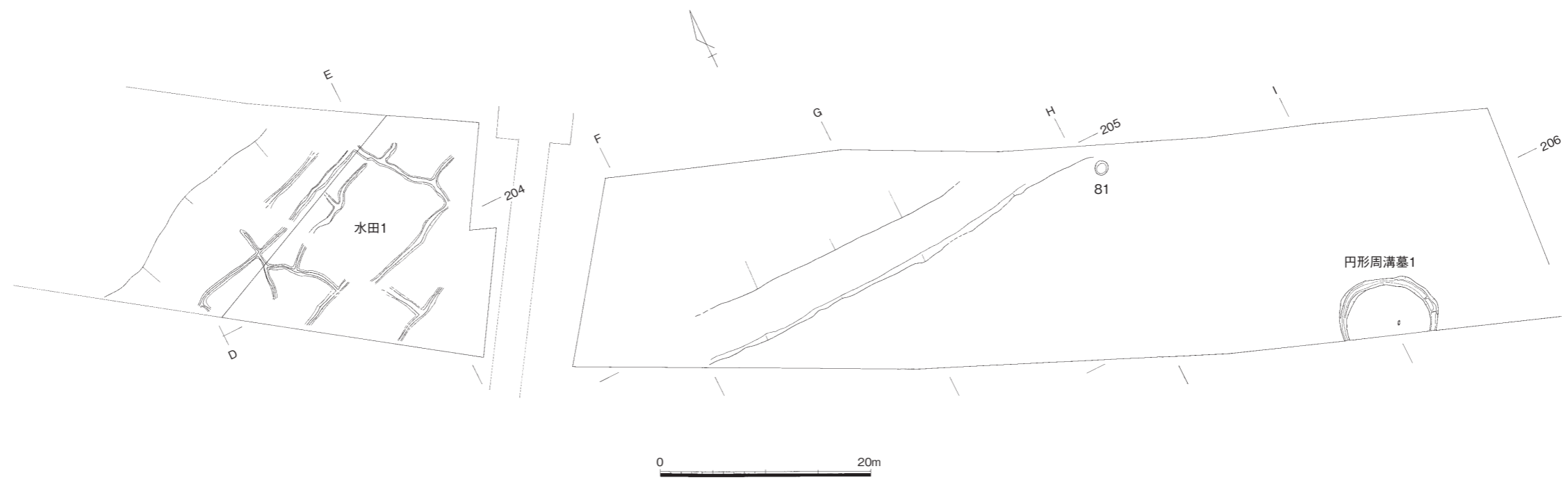
墳丘中央付近の土坑は、長



第396図 円形周溝墓1・円形周溝2位置 (1/200)

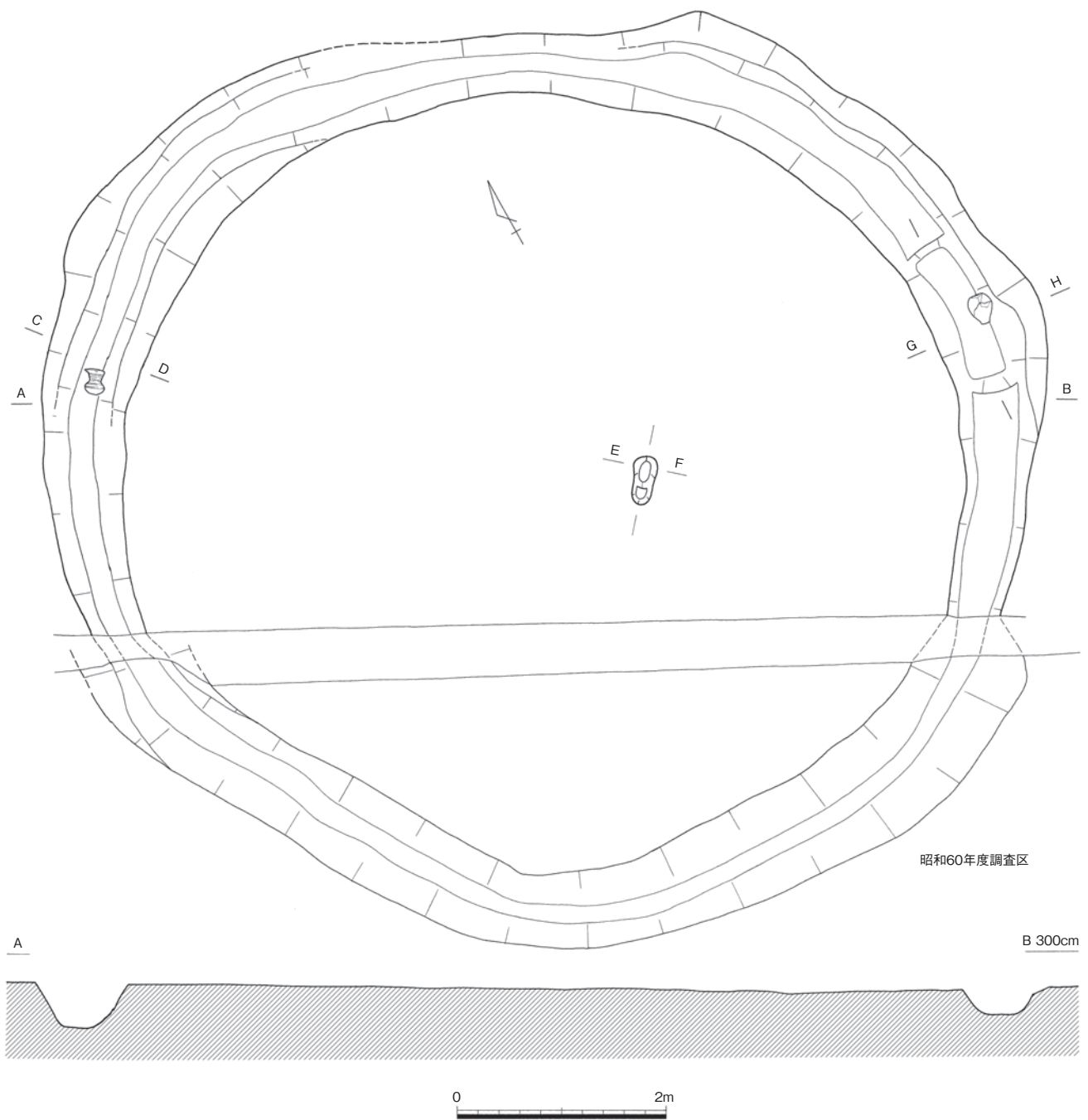


第397図 弥生時代中期遺構全体図 (1/1,500)

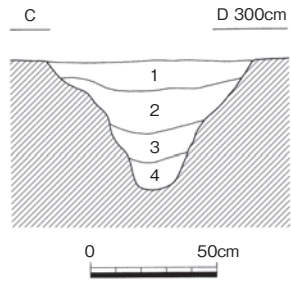


第398図 弥生時代中期遺構配置図 (1/500)

さが50cm、幅は25cmで、平面形が楕円形を呈する。位置的に木棺の小口板をさし込んだ痕跡と考えられる。さらに、周溝内東側には、規模が132×35cmの凹みがある。この凹みの中から、口縁部を欠いた70が底面より上20cmとやや浮いた状態の伏横位で出土した。この凹みは、周溝内埋葬を示す土坑と考えたい。口縁部を欠いた70は、乳児用の棺になると思われるが、埋土中からは骨・歯などは出土しなかった。この土坑が木棺を安置するための土坑で土器70が原位置ならば、木棺のさらに上部に土器棺を安置したことになる。前述した通り周溝内中央である楕円形の土壙は、小口跡の1つと考えられ、また周溝内の凹みも周溝墓の副次的な埋葬施設と考えられる。さらに、周溝内部は上部が削平されていたため、墳丘盛土があったかどうかは不明であるが、墳丘内の小土坑が先に述べたように木棺痕跡

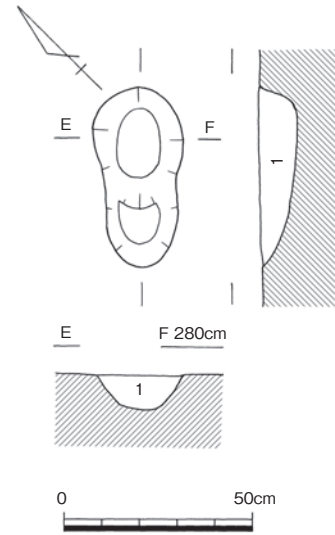


第399図 円形周溝墓1 (1/60)



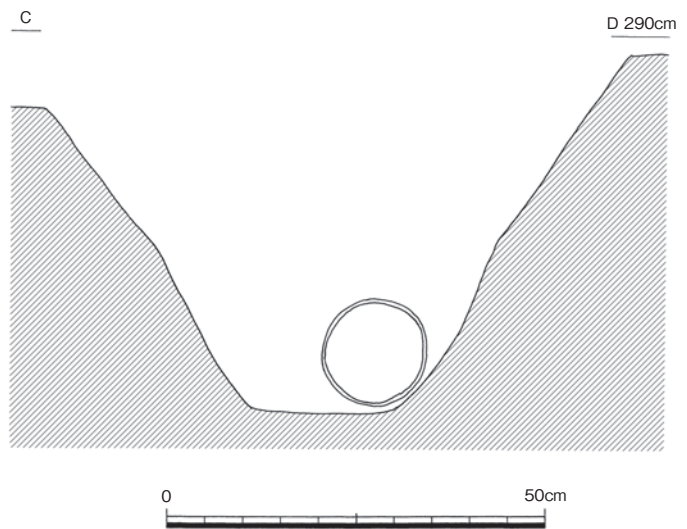
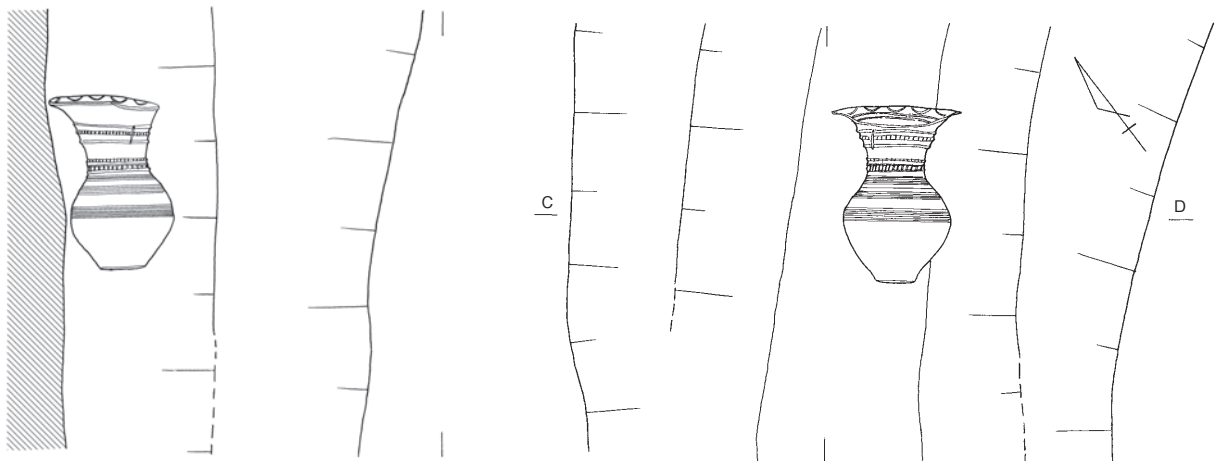
- 1 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR5/3)
- 2 鈍黄褐色粘質微砂 (10YR4/3)
- 3 褐色粘質微砂 (10YR4/4)
- 4 褐色粘質微砂 (10YR4/6)

第400図 円形周溝墓1土層断面 (1/30)



- 1 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第401図 木棺小口痕跡 (1/20)



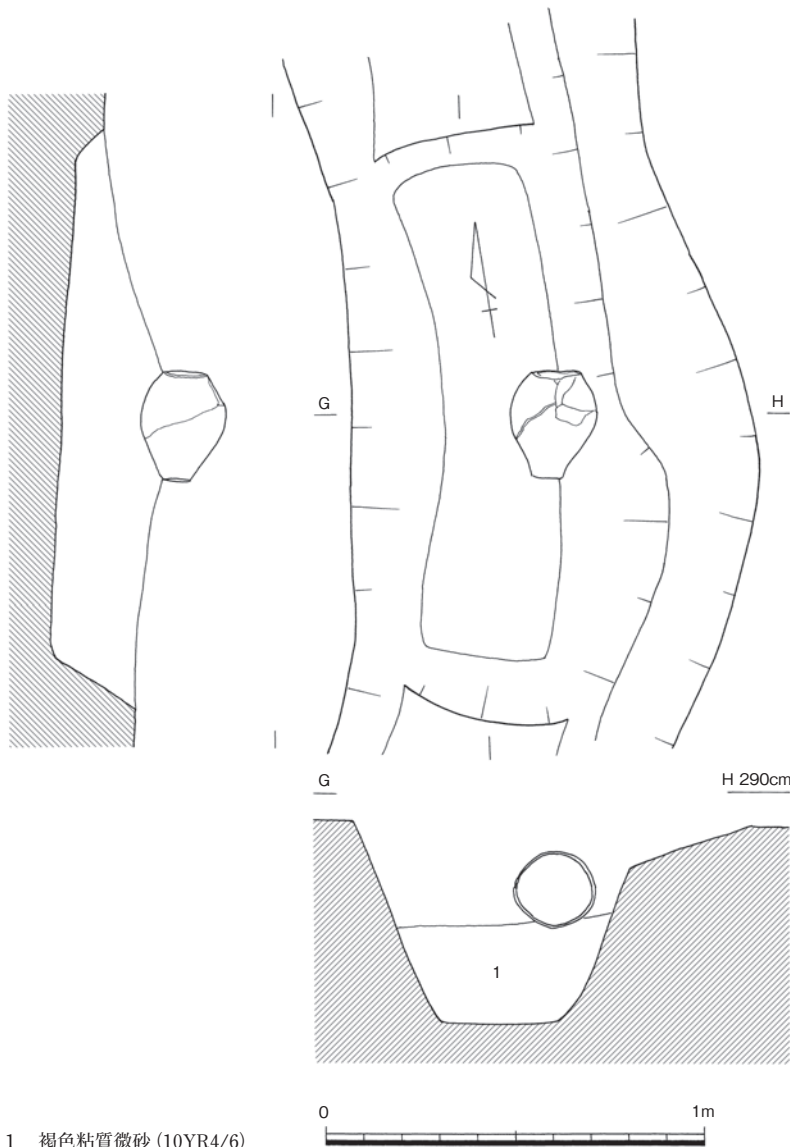
第402図 周溝内遺物出土状況 (1/10)

であれば弥生時代包含層とのレベルとの比較から若干の盛り土があったことが想定できよう。なお、主体部に関しては小口板の痕跡1つ以外は確認できなかった。

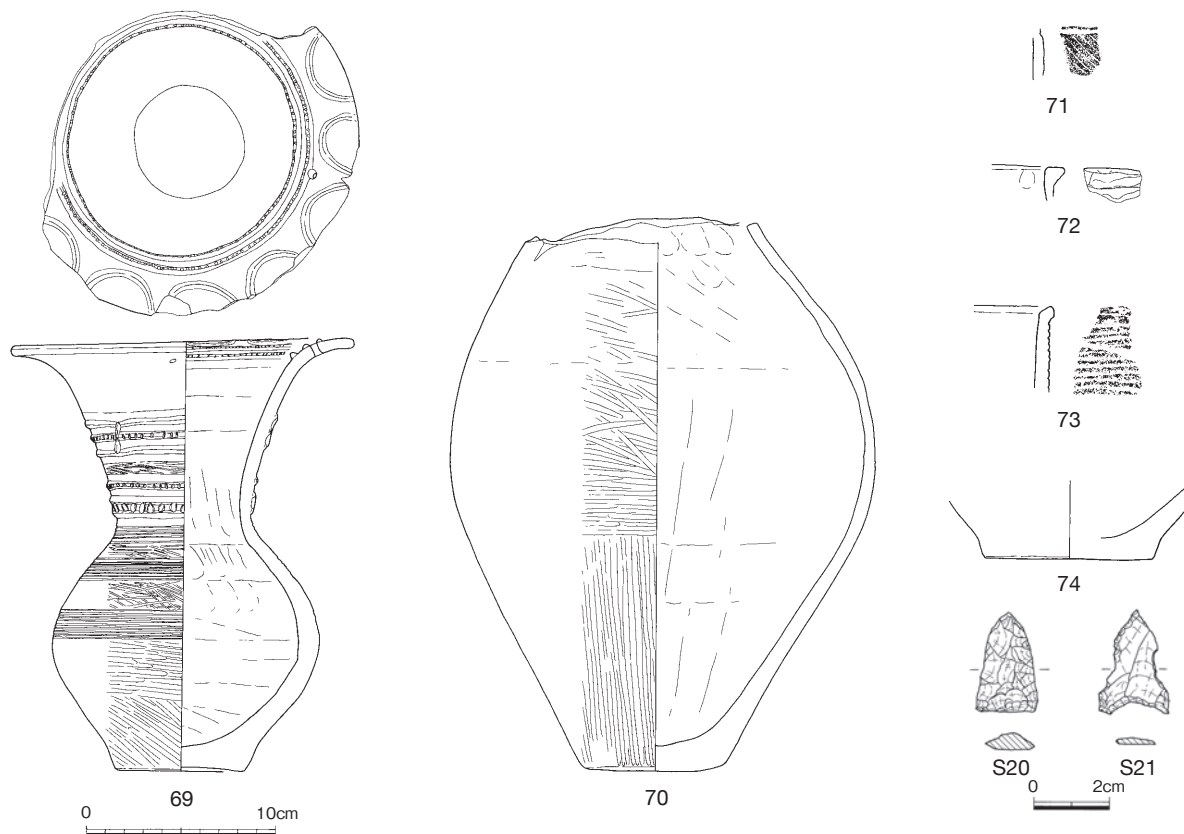
周溝内からは、先述した70以外にも弥生土器69・71～74や石器S20・S21が出土している。周溝内埋葬部とは反対側の周溝底に密着して出土した69は供献用と考えられ、口縁部の一部を欠損する。胴部には上から5条、8条、9条の沈線文（沈線の拡大写真は図版43参照）が施される。施紋具は典型的な櫛状の工具ではないが、ヘラではなく2～3本一単位の櫛状工具を使用したと考えている。口縁部が逆「ハ」の字に開き、口縁部の内側には連弧状と2条の直線突帯で飾る。頸部外面には6条の突帯があり、上から2条目と4条目には刻みを施す。また、下2条の突帯間を棒状浮文で飾る。外面には丁寧にヘラミガキを施す。さらに、口縁部には焼成前の円孔がある。71～74は、周溝の埋土から出土した小片で、確実に周溝墓に伴うとは限らない。71は、横方向の沈線に画された斜め方向の浅い沈線が6条施されている。壺の破片であろう。72は、断面三角形の突帯を貼り付けた甕の口縁部片である。

甕の口縁部73は、沈線が9条確認できるが、施紋具がヘラか櫛状の工具かは判断できない。74は壺の底部片である。これらは、弥生時代前期後葉～中期前葉の様相を示しており、環濠の使用された時期である百・前・IIよりは新しくなる可能性が高い。S20・S21は、ともにサヌカイト製の打製石鏃で、S20は平基式、S21は凹基式である。

この円形周溝墓1の時期は、百・中・Iと考えている。とするとこの遺構は環濠が埋まった跡に築かれることになる。弥生時代前期中葉に環濠集落があった微高地は、前期後葉には集落域から墓域へと変化していったと思われる。（小林）



第403図 周溝内土坑及び遺物出土状況 (1/20)

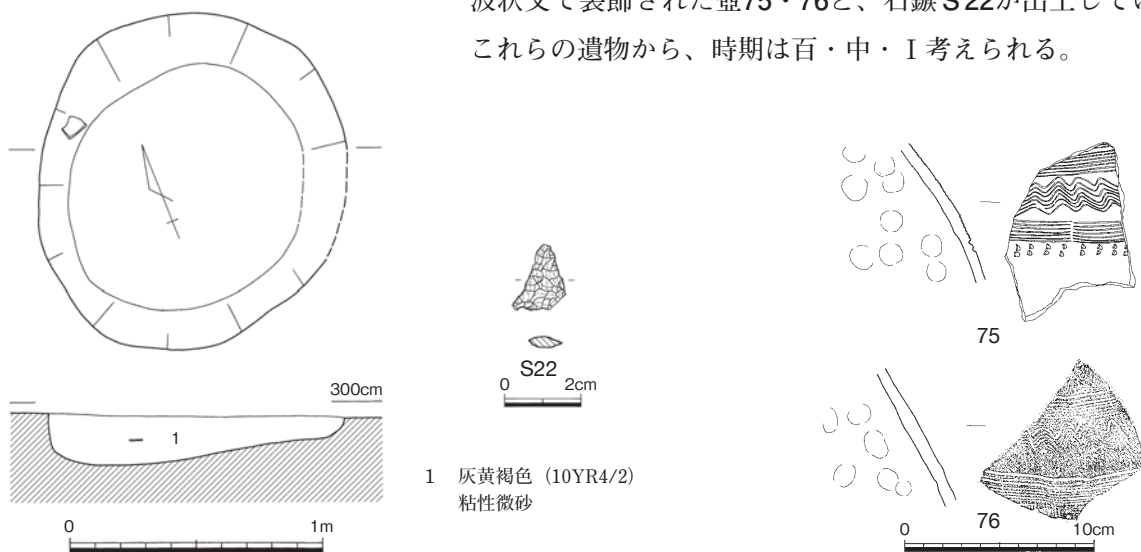


第404図 円形周溝墓1出土遺物 (1/2・1/4)

3 土 坑

土坑81 (第397・398・405図、図版46)

205H区で検出した円形の土坑で、規模は長軸134cm、短軸120cm、深さ20cmを測る。浅い皿形の断面形であるが、西側のほうがやや凹んでいる。埋土は灰黄褐色で、弥生時代前期の遺構と比較するとやや薄い色調を呈しており、上面を10cm程度掘り下げると検出できた。出土遺物には櫛描き直線文と波状文で装飾された壺75・76と、石鏃S22が出土している。これらの遺物から、時期は百・中・I考えられる。(團)



1 灰黄褐色 (10YR4/2)
粘性微砂

第405図 土坑81 (1/30)・出土遺物 (1/2・1/4)

4 水 田

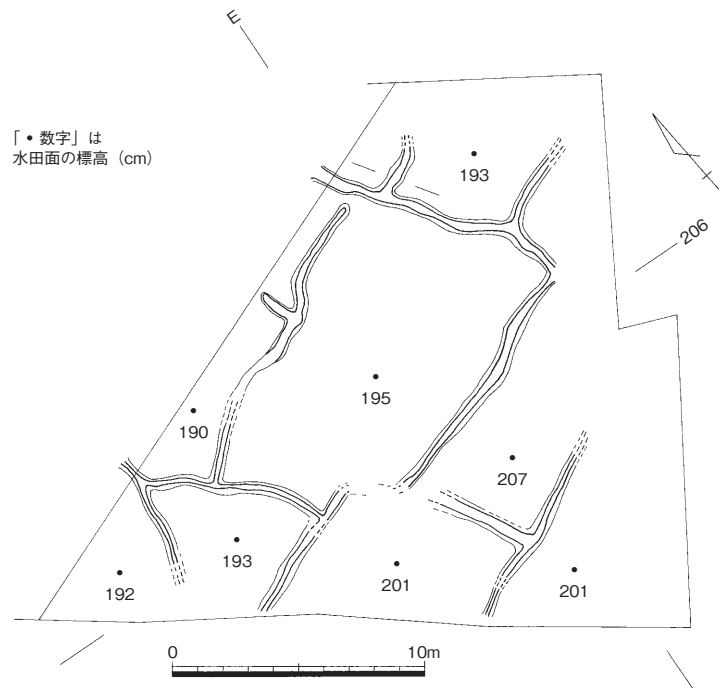
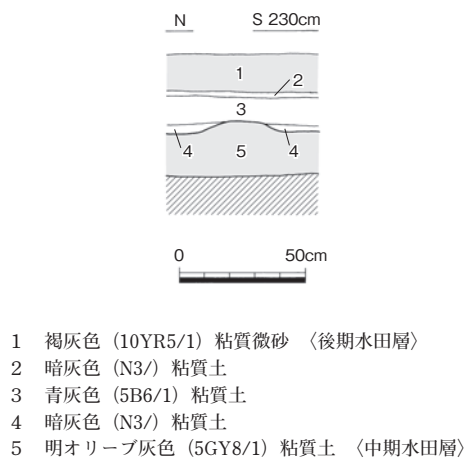
水田1 (第397・398・406図、写真51)

203D・204D区に位置する水田で、百原尾島6水田3と一連の水田である。弥生時代後期の水田3の水田層(第1層)の下約15cmで、粘質層(第2～4層)を除去すると水田1を検出することができた。第2層以下は低位部で水位が高いためか、グライ化している。田面は、幅22～48cm高さ1～3cmの畦畔によって区切られている。畦畔の残存状況は東西方向では良くない。区画の形状は不揃いであり、一区画ごとの大きさも又、不揃いである。水田面の標高は調査区北端が190cm台前半と低く、南端に向かって高く、標高200cmを越える。南東側の調査区では明瞭な中期水田層を確認していないため、水田端が調査区南端にくることが想定される。下層に旧河道が存在し、その残痕のたわんだ地形に作られた水田である。時期は、百沢田6水田3や、百沢田3水田で報告されているように、百・中・I～IIの時期であろう。

(團)



写真51 水田1土層断面(南西から)



第406図 水田1(1/300)・畦畔断面図(1/30)

第5節 弥生時代後期の遺構・遺物

1 概要

弥生時代後期の遺構は、井戸4基、土坑2基、溝10条と水田を掲載する。このうち微高地上では竪穴住居こそみられないが、井戸4基と土坑2基を確認しており、低位部においても水田や水田層下においてピットや溝群が存在した。

井戸のうち1基は、井戸底に礎盤とその上に板材3枚を柄穴で綴じた井戸枠が残存していた。この井戸の時期は百間川遺跡群全体でも遺構数が減少する後期末にあたるが、堆積状況から洪水砂到来以前には埋没していることが明らかである。

土坑のうち1基は、先の井戸と同じ後期末に位置づけられ、既往調査では確認されなかったが当該時期の住居が存在する可能性が高い。

低位部では洪水砂が50～60cmと厚く堆積しており、百間川遺跡群の中では初めてラミナ層が確認できた。ラミナは調査区北壁での観察によると双方向に流れており、土質はシルト質で下層ほど粘性が強い。この洪水砂の状態からは、洪水の本流からはやや離れ、横溢した水流がこのあたりをおそったことが考えられる。この下層においては、洪水砂によってパックされた後期水田や水田下層においてピットや溝群が確認できた。

水田は縄文時代晩期以降に埋没した旧河道上に位置し、弥生時代後期末の洪水砂を除去して検出したものである。百間川遺跡群の低位部に通常みられる小畦畔によって長方形に区画された水田であるが、低位部を横断する形で1条の大畦畔を確認している。なお、本調査地内においては稲株痕跡や足跡は確認できていない。水田層下で検出したピットや溝群のうち、微高地端部に沿って併行する4条の溝は、いずれも水田の肩から幅400cmの範囲に収まっている。これらの溝は径が十数cm程度できわめて浅い楕円形の窪みが連続して溝状を呈するものであり、微高地縁辺部分を順次掘削し、開田する際の鍬など工具の痕跡と考えられる。

遺物は、井戸や土坑からまとまって出土しているほか、微高地際の水田耕作土中や溝群からも少量が出土している。 (弘田)

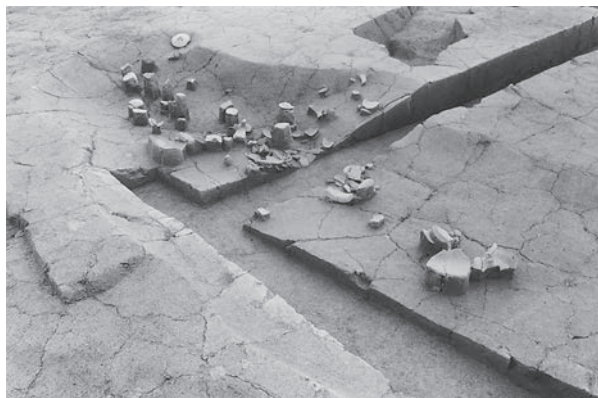
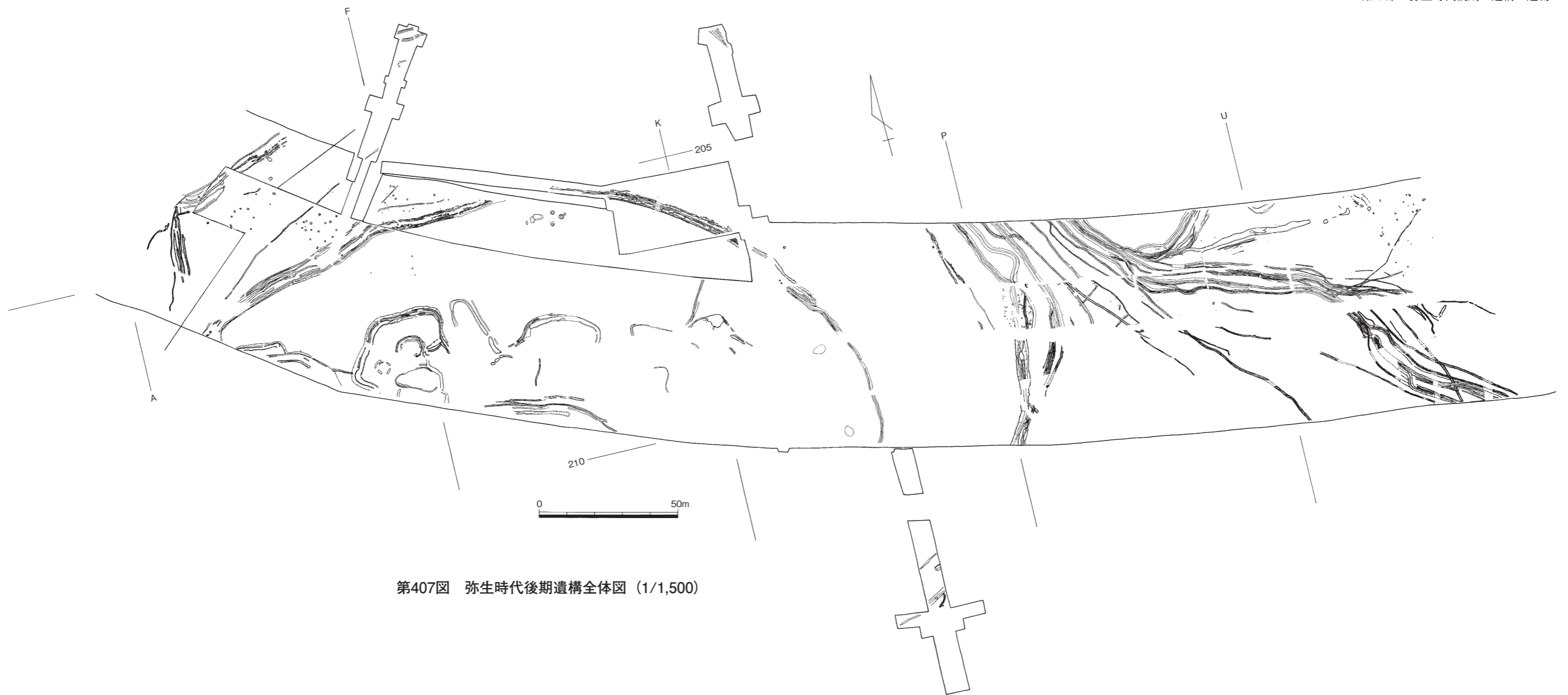


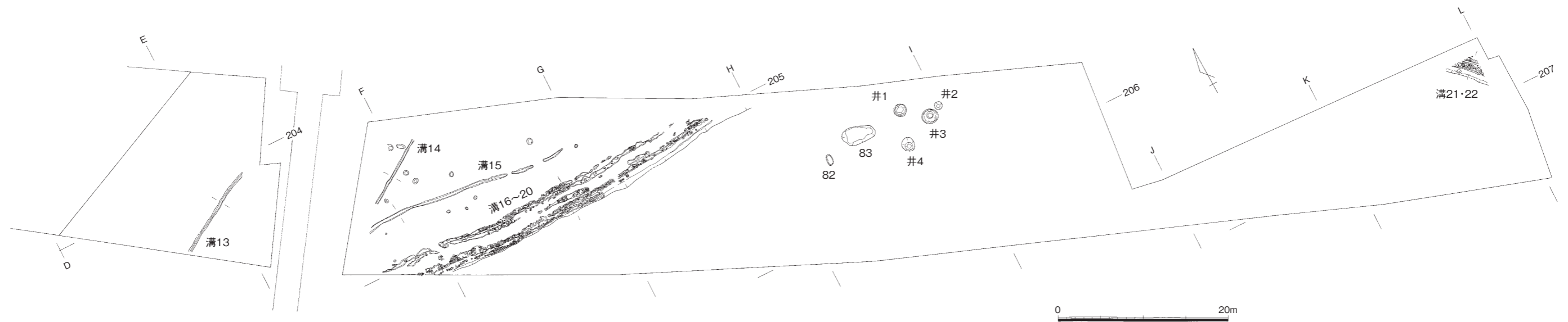
写真52 土坑83 (北西から)



写真53 溝14～20 (南西から)



第407図 弥生時代後期遺構全体図 (1/1,500)

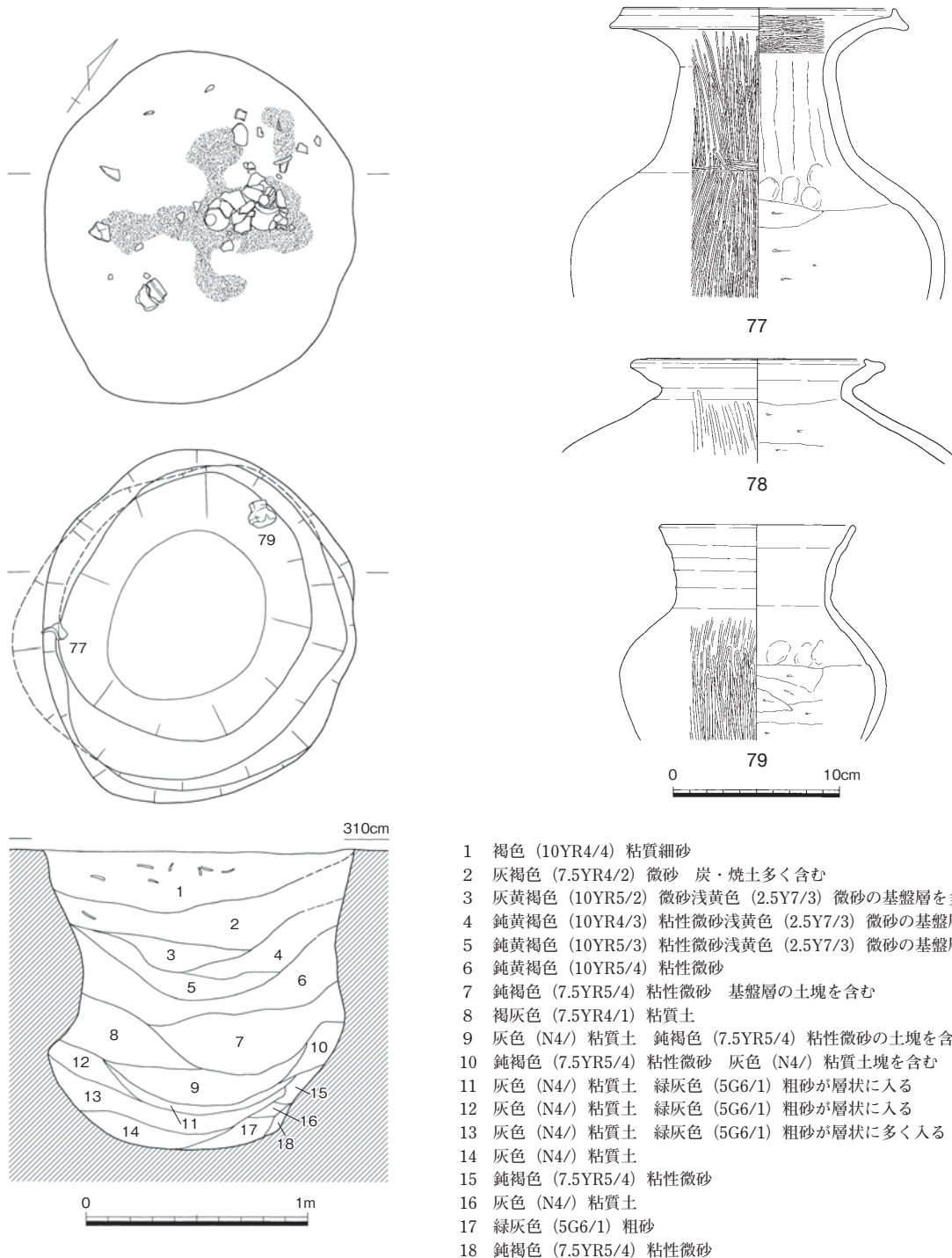


第408図 弥生時代後期遺構配置図 (1/500)

2 井戸

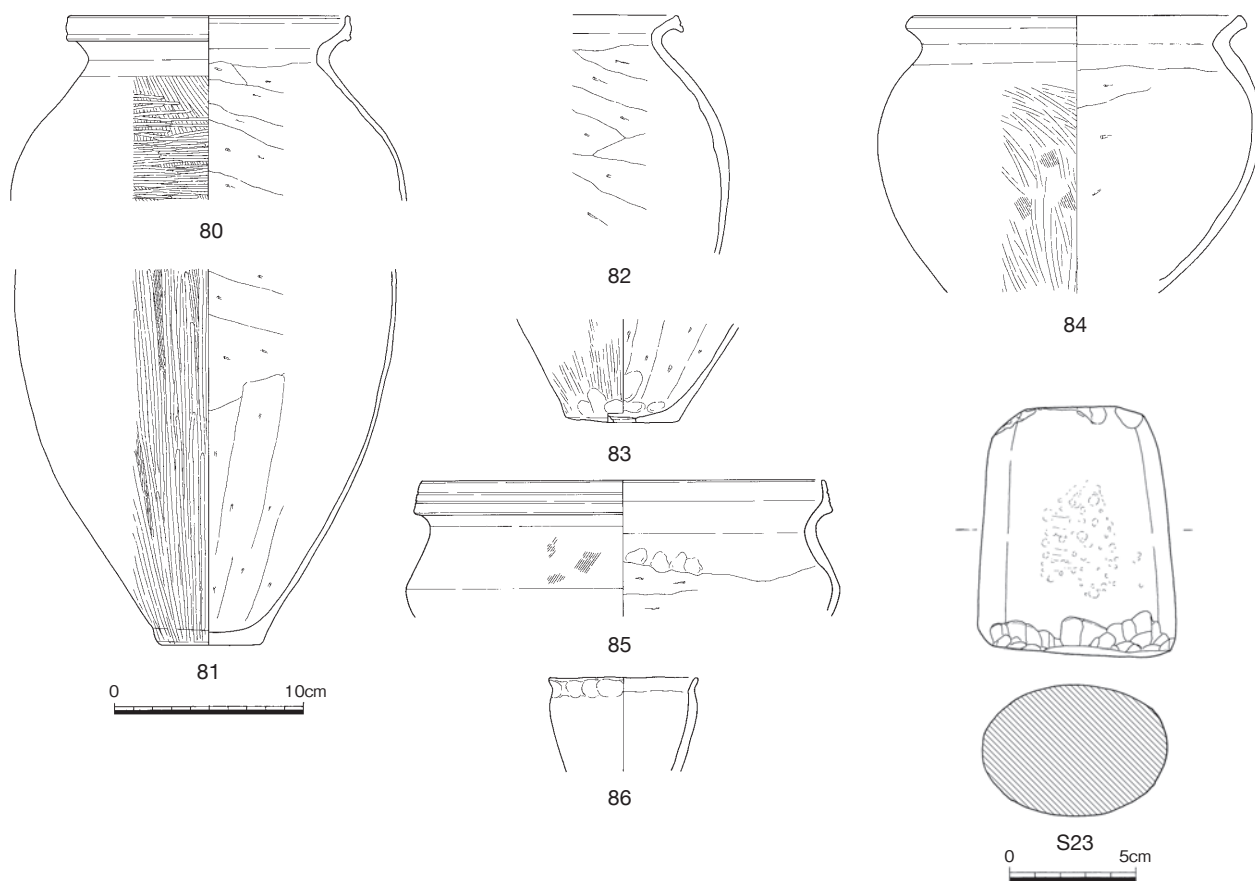
井戸1 (第407~410図、図版47)

205H区で検出した円形の素掘りの井戸で、規模は長軸160、短軸141cm、深さ135cm、底面海拔高170cmを測る。第11層~13層にはラミナが観察され、井戸の湧水による滞水が確認できた。これより上層の第7・9・10層には擬礫が入っている。このことから、底面から20cmの第9層までで井戸の使用を止め、人為的に40cm程度を埋め戻して廃棄したことが想定される。第6層より上層に入っている擬礫



- 1 褐色 (10YR4/4) 粘質細砂
- 2 灰褐色 (7.5YR4/2) 微砂 炭・焼土多く含む
- 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 微砂浅黄色 (2.5Y7/3) 微砂の基盤層を多く含む
- 4 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘性微砂浅黄色 (2.5Y7/3) 微砂の基盤層を少量含む
- 5 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘性微砂浅黄色 (2.5Y7/3) 微砂の基盤層を少量含む
- 6 鈍黄褐色 (10YR5/4) 粘性微砂
- 7 鈍褐色 (7.5YR5/4) 粘性微砂 基盤層の土塊を含む
- 8 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘質土
- 9 灰色 (N4/) 粘質土 鈍褐色 (7.5YR5/4) 粘性微砂の土塊を含む
- 10 鈍褐色 (7.5YR5/4) 粘性微砂 灰色 (N4/) 粘質土塊を含む
- 11 灰色 (N4/) 粘質土 緑灰色 (5G6/1) 粗砂が層状に入る
- 12 灰色 (N4/) 粘質土 緑灰色 (5G6/1) 粗砂が層状に入る
- 13 灰色 (N4/) 粘質土 緑灰色 (5G6/1) 粗砂が層状に多く入る
- 14 灰色 (N4/) 粘質土
- 15 鈍褐色 (7.5YR5/4) 粘性微砂
- 16 灰色 (N4/) 粘質土
- 17 緑灰色 (5G6/1) 粗砂
- 18 鈍褐色 (7.5YR5/4) 粘性微砂

第409図 井戸1 (1/30)・出土遺物① (1/4)

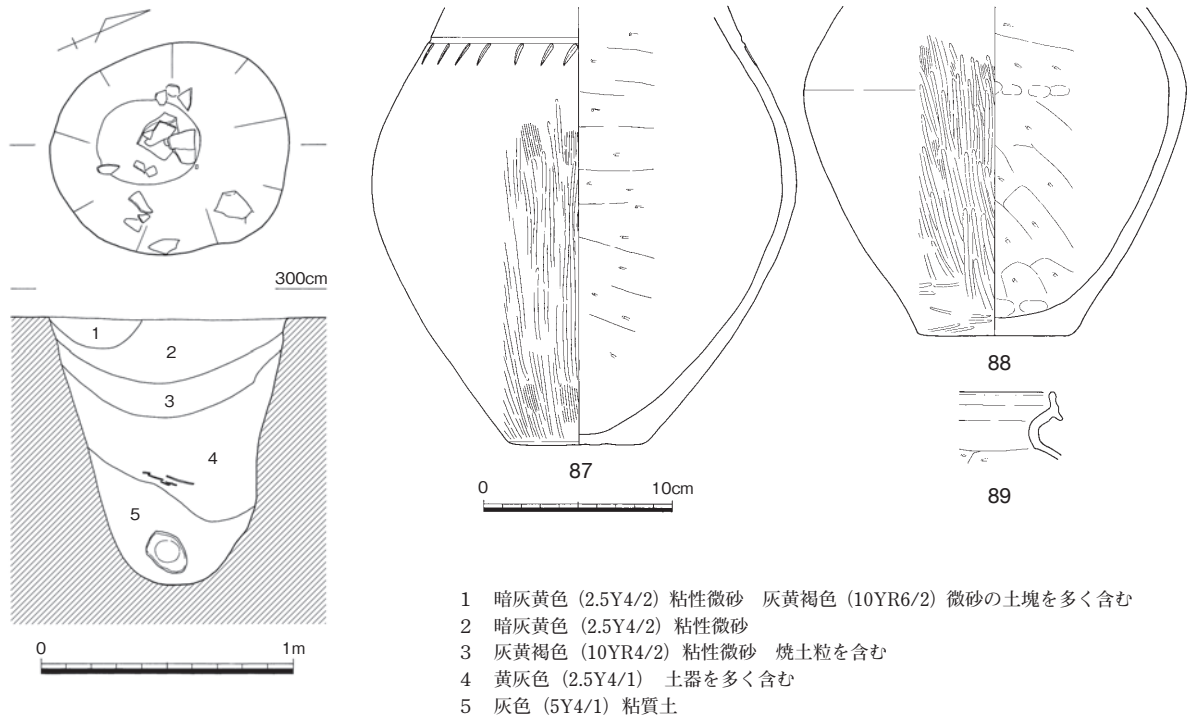


第410図 井戸1出土遺物② (1/3・1/4)

は少量のため、自然堆積と考えられる。第1層には土器を、第2層上面には炭・焼土を多く含んでいたことから、井戸が廃棄されたのちの最上層の凹みを利用して、土器などを廃棄したものと考えられる。また、西側の底部付近の壁面は大きくえぐれている。これは井戸の基盤となる層が底部付近で粗砂と変化しているため、壁面が崩壊したものであろう。出土遺物には、第1層で出土したものに甕80～83、鉢84～86がある。これら上層で廃棄された遺物には、百・後・Ⅲ～Ⅳのものがある。第7・8層には壺77～79が出土しており、井戸の廃絶後直近の時期を示す遺物であるといえる。壺の特徴から、百・後・Ⅲの時期と考えられる。S23は太型蛤刃石斧を転用した敲石である。井戸1は、百・前・Ⅱの環濠と重複しており、井戸使用時または掘削時に、環濠に伴う遺物が井戸1内に落ち込んだ可能性が考えられる。この井戸の時期は、百・後・Ⅲに掘削され、埋没したと考えられる。(團)

井戸2 (第407・408・411図)

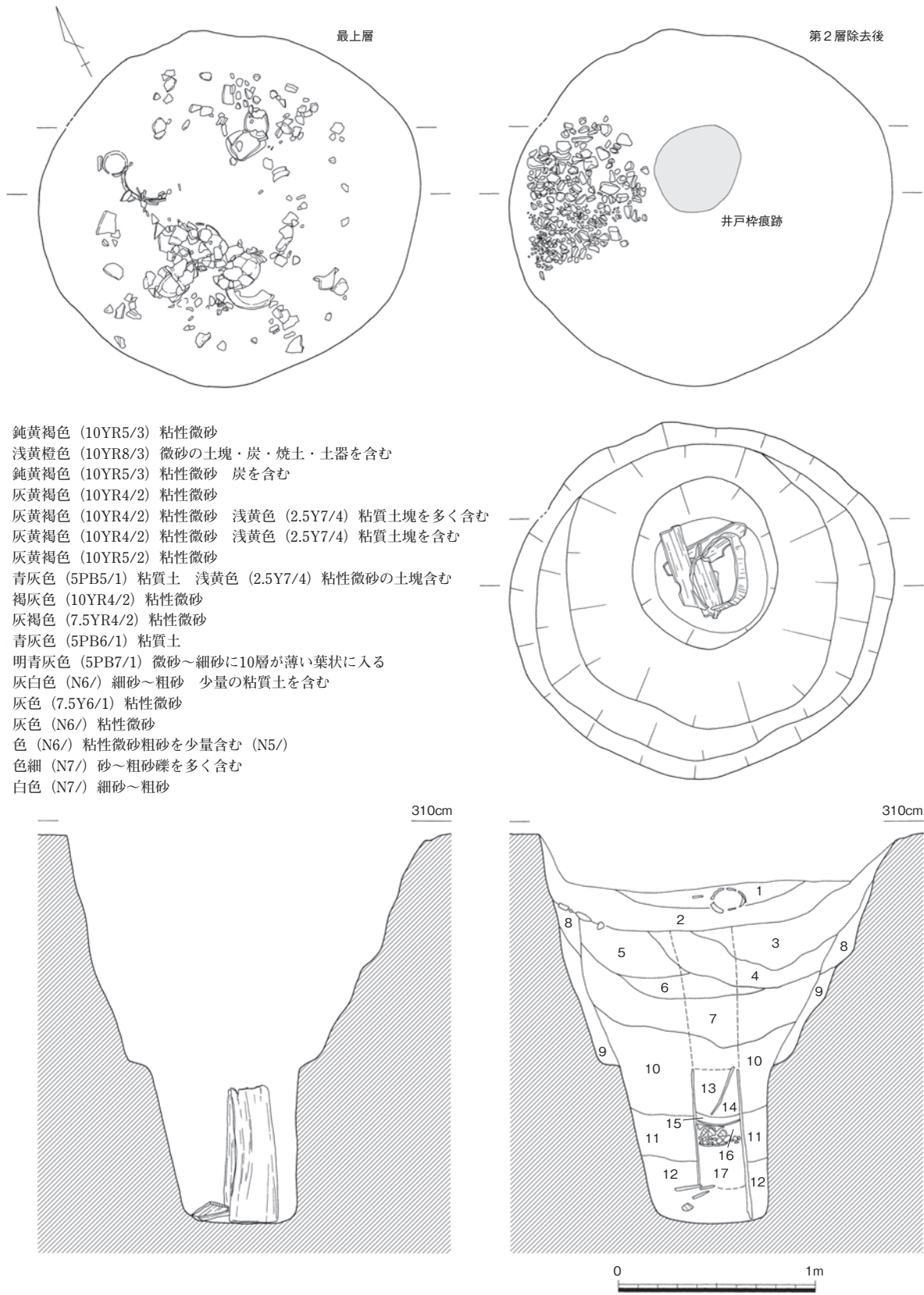
205H区に位置する円形の素掘りの井戸で、長軸94cm、短軸83cm、深さ105cm、を測り、底面海拔高は183cmである。弥生時代後期の井戸は4基検出されたが、その中で一番小型のものである。深さが100cmを越えることと、井戸1と底面海拔高が十数cmしか変わらないことから、井戸として報告する。埋土には、中層の第3・4層に焼土を含み、第4層の下部には土器を多く含んでいた。これらの土器は接合しないことから、廃棄されたものと考えられる。出土遺物には、壺87・88、甕89がある。壺87は、底面付近で出土したものである。出土した土器の多くは体部などの破片であり、実測の可能なものがこの3点であった。甕89の口縁の形態から百・後・Ⅲであると考えられるため、この井戸の時期も、百・後・Ⅲの中で掘削され、廃棄されたものと考えられる。(團)



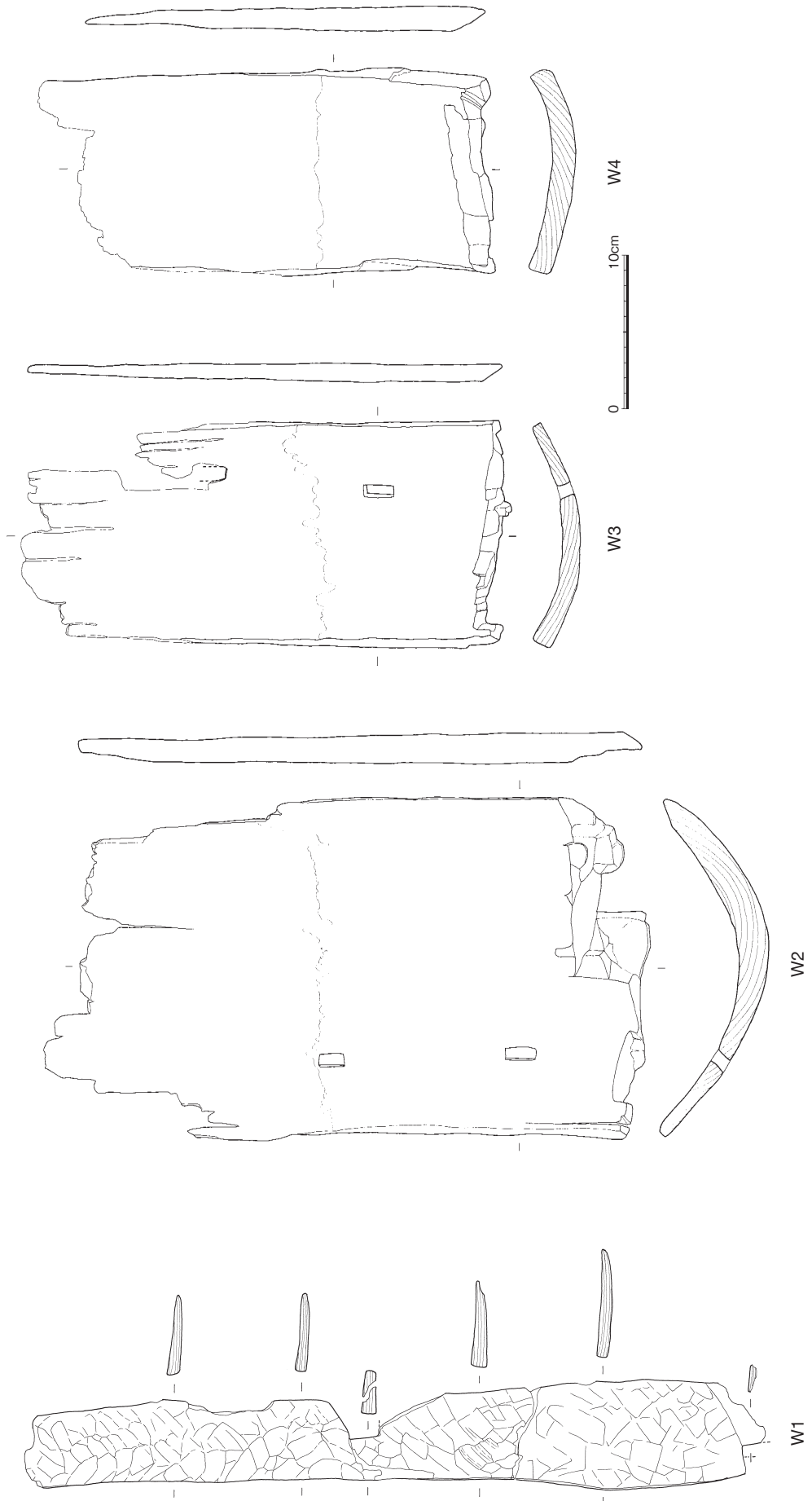
第411図 井戸2 (1/30)・出土遺物 (1/4)

井戸3 (第407・408・412～416図、写真54、図版33-1・33-2・33-3・41・48)

205H区に位置する円形の井戸で、井戸枠が設置されている。掘方の規模は長軸196cm、短軸180cm、深さ196cmを測り、底面海拔高105cmである。この規模に比して井戸枠は直径およそ40cmと小さい。第3層以下の埋土が井戸枠の裏込め土となる。井戸の底面はほぼ平らで、長軸62cm、短軸58cmの円形である。井戸枠はモミ属と鑑定された材を用いており、丸太材で、3分割した後に中を剥り抜いたものを再び合わせて使用したと考えられる。しかし、底面に完全に設置しているものはW2のみであり、W3・W4については床面から20cm程度浮いている。この段差を解消するために、W1を3つ分割したものを差し込み、第12層によって固定している。W1については、何らかの部材の転用であることが理解できる。井戸枠は、W2・W3の側面に方形の穿孔があり、百米田3井戸114の事例から目釘穴とも考えたが、目釘木などは見られず、検出時のW2とW3の穿孔の位置におよそ10cmの高低差があったことから、その可能性は低いと考えられる。このため、井戸枠自体が転用材の可能性もあるといえる。井戸枠内には底面からおよそ40cmまでは粗砂が堆積し、その上に第412図のように土器と礫の集積が見られた。土器の小片の上に直径1～2cm程度の小礫、その上に直径4～7cm程度の礫、そして土器を重ねていた。このような施設は、湧水が巻き上げる砂で水が濁るのを防ぐ工夫であり、このような施設を持つ井戸は、百間川遺跡群で見ついているものでは、百米田3井戸114、百沢田2井戸53の2基がある。上層の第1・2層は井戸廃絶後の埋土であり、多量の土器と礫が検出された。この上層からの遺物は、壺92・93、甕94～104、高杯105、鉢106～109があり、完形に復元できたものも多い。土器の特徴から、時期が百・後・IVと比定される。井戸枠内からは甕90、鉢91が出土しており、同じく百・後・IVの時期であると考えられる。このことから、井戸は百・後・IVに作られ、百・後・IVの中で完全に廃絶して窪地となり、何らかの祭祀に利用された可能性が考えられる。(團)



第412図 井戸3 (1/30)



第413図 井戸3井戸枠 (1/4)

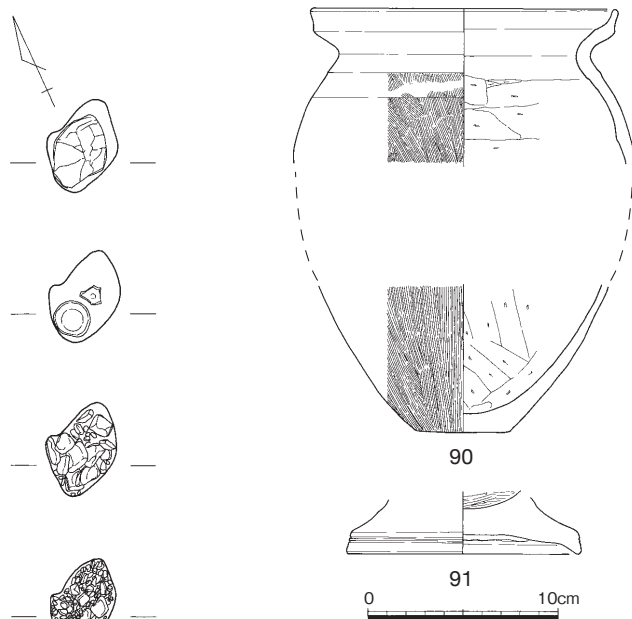
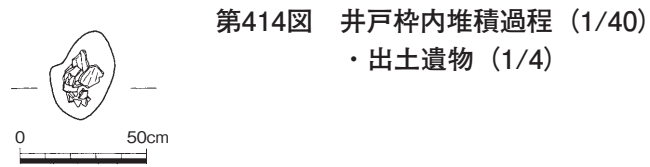
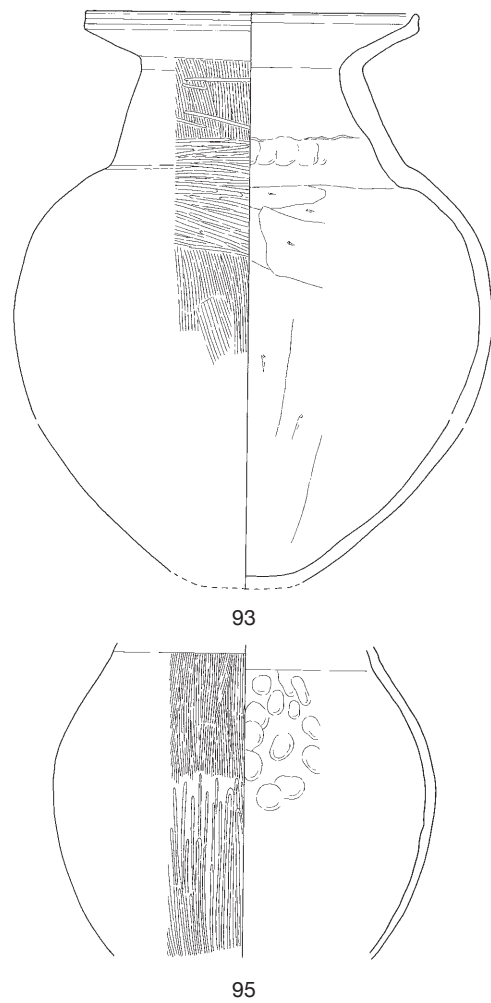
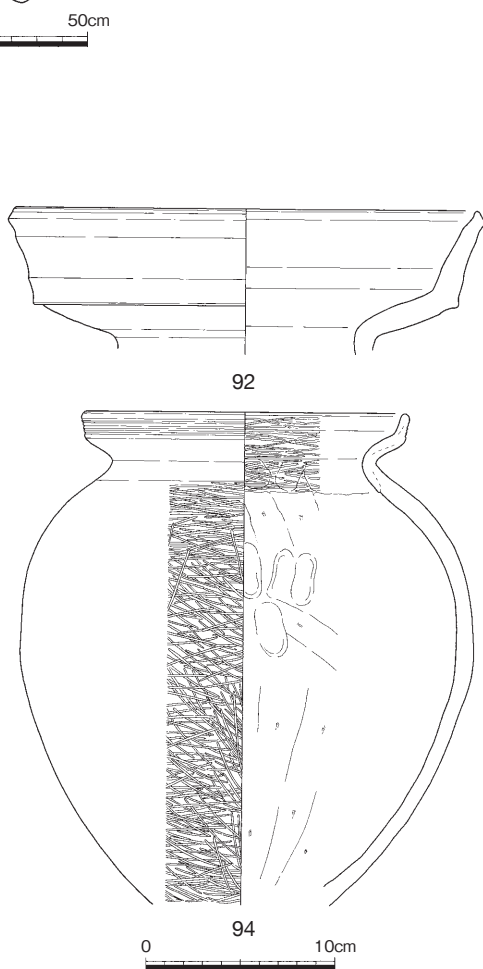


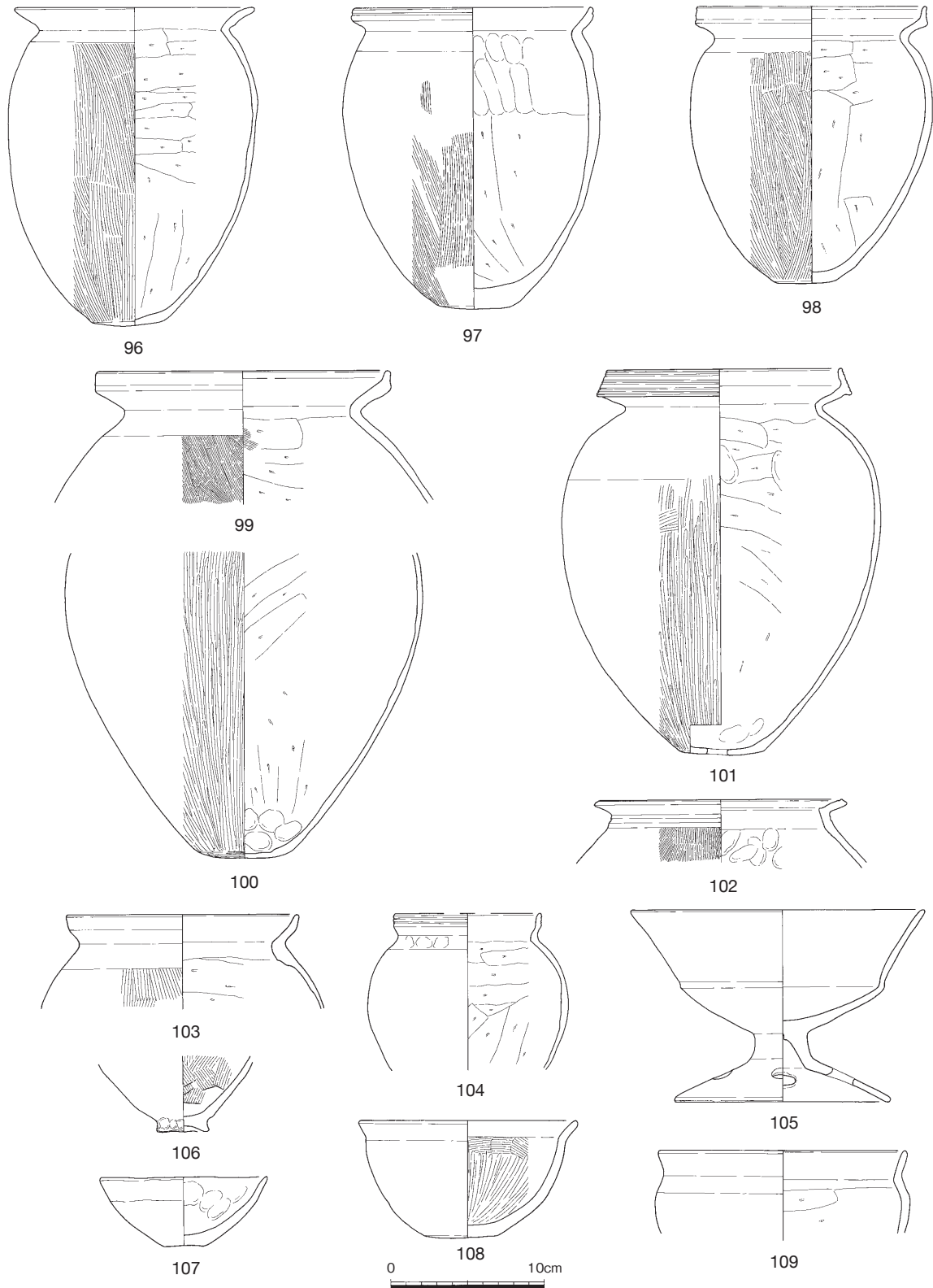
写真54 井戸枠内土器
出土状況（南西から）



第414図 井戸枠内堆積過程（1/40）
・出土遺物（1/4）



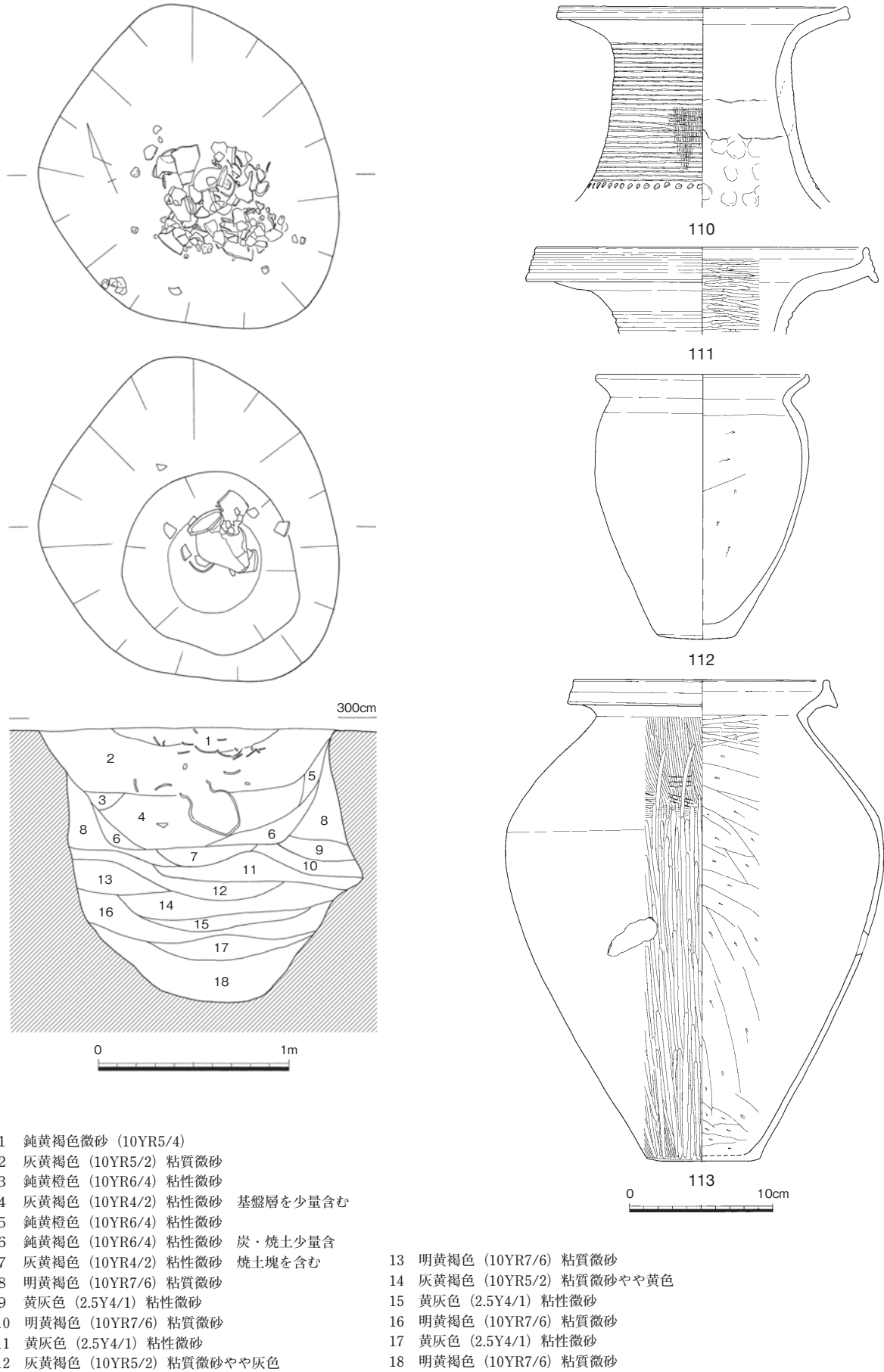
第415図 井戸3出土遺物①（1/4）



第416図 井戸3出土遺物② (1/4)

井戸4 (第407・408・417・418図、図版41)

205H区に位置する、歪な楕円形を呈する素掘りの井戸で、規模は長軸177cm、短軸150cm、深さ143

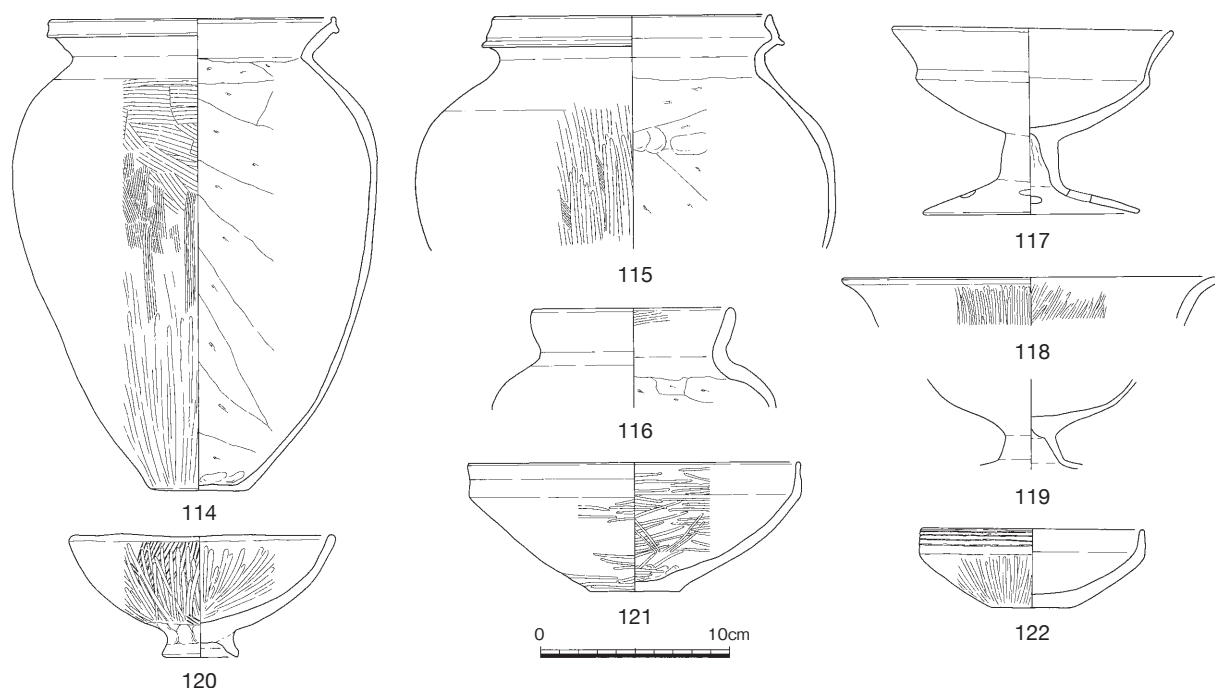


- 1 鈍黄褐色微砂 (10YR5/4)
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂
- 3 鈍黄橙色 (10YR6/4) 粘性微砂
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 基盤層を少量含む
- 5 鈍黄橙色 (10YR6/4) 粘性微砂
- 6 鈍黄褐色 (10YR6/4) 粘性微砂 炭・焼土少量含
- 7 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 焼土塊を含む
- 8 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質微砂
- 9 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂
- 10 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質微砂
- 11 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂
- 12 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂やや灰色

- 13 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質微砂
- 14 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂やや黄色
- 15 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂
- 16 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質微砂
- 17 黄灰色 (2.5Y4/1) 粘性微砂
- 18 明黄褐色 (10YR7/6) 粘質微砂

第417図 井戸4 (1/30)・出土遺物① (1/4)

cmを測り、底面海拔高は151cmである。上層の第1～7層からは、多くの土器・焼土・炭を検出している。この層は、土層の観察から井戸の埋没後の凹みを新たに掘り直していると考えられる。第12層以下は、5mm程度の薄さで堆積した粘質土が各層の底面に広がっており、このような堆積が滞水によるものならば、50cm程度埋没した後でも湧水があり、井戸は機能していたと考えられる。基盤層は下層では粗砂であるため壁面は脆弱であり、東壁の第8～10層に関しては、壁面の崩落土による堆積であろう。遺物は上層でのみ出土している。第1・2層では破片での出土が多いものの第4層では、ほぼ完形で体部に穿孔を施した甕113が出土している。これらの出土遺物から、井戸が百・後・Ⅲには完全に廃絶し、また、窪地を利用して祭祀に利用された可能性も考えられる。(團)



第418図 井戸4出土遺物② (1/4)

3 土坑

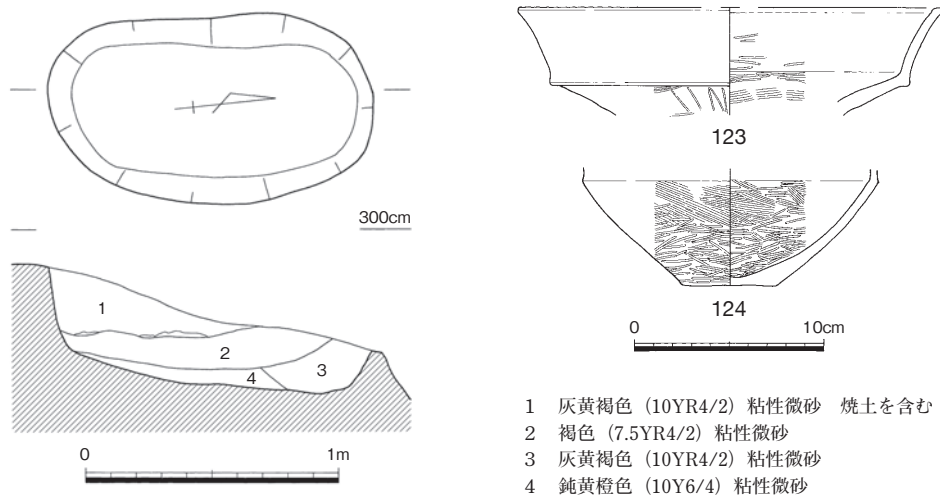
土坑82 (第407・408・419図)

205H区に位置する土坑で、弥生時代前期の環濠を掘削中に検出した。規模は長軸130cm、短軸75cm、深さ35cmを測る。埋土の第1層の底面には炭が面的に検出できた。出土遺物には、壺123、鉢124がある。この遺物と検出状況などからも、百・後・Ⅳの時期の遺構と考えられる。(團)

土坑83 (第407・408・420・421図、写真52)

205区に位置する遺構で、井戸の西側で検出したことと、当初、遺物が広範囲で検出できたため竪穴住居である可能性を考えて精査を行ったが、結果として不整形なものとなった。しかし土器の出土も多いため土坑として報告する。規模は、長軸400cm、短軸204cm、深さ24cmを測る。底面は比較的平坦であり、立ち上がりは緩やかである。埋土には焼土塊や炭を多く含んでいた。遺物はおもに上層か

ら多く出土している。出土遺物には、壺125、甕126~132、高杯133~138、鉢139、ミニチュアの壺140などがある。これらの出土遺物から、遺構の時期は百・後・Ⅲであると考えられる。 (團)



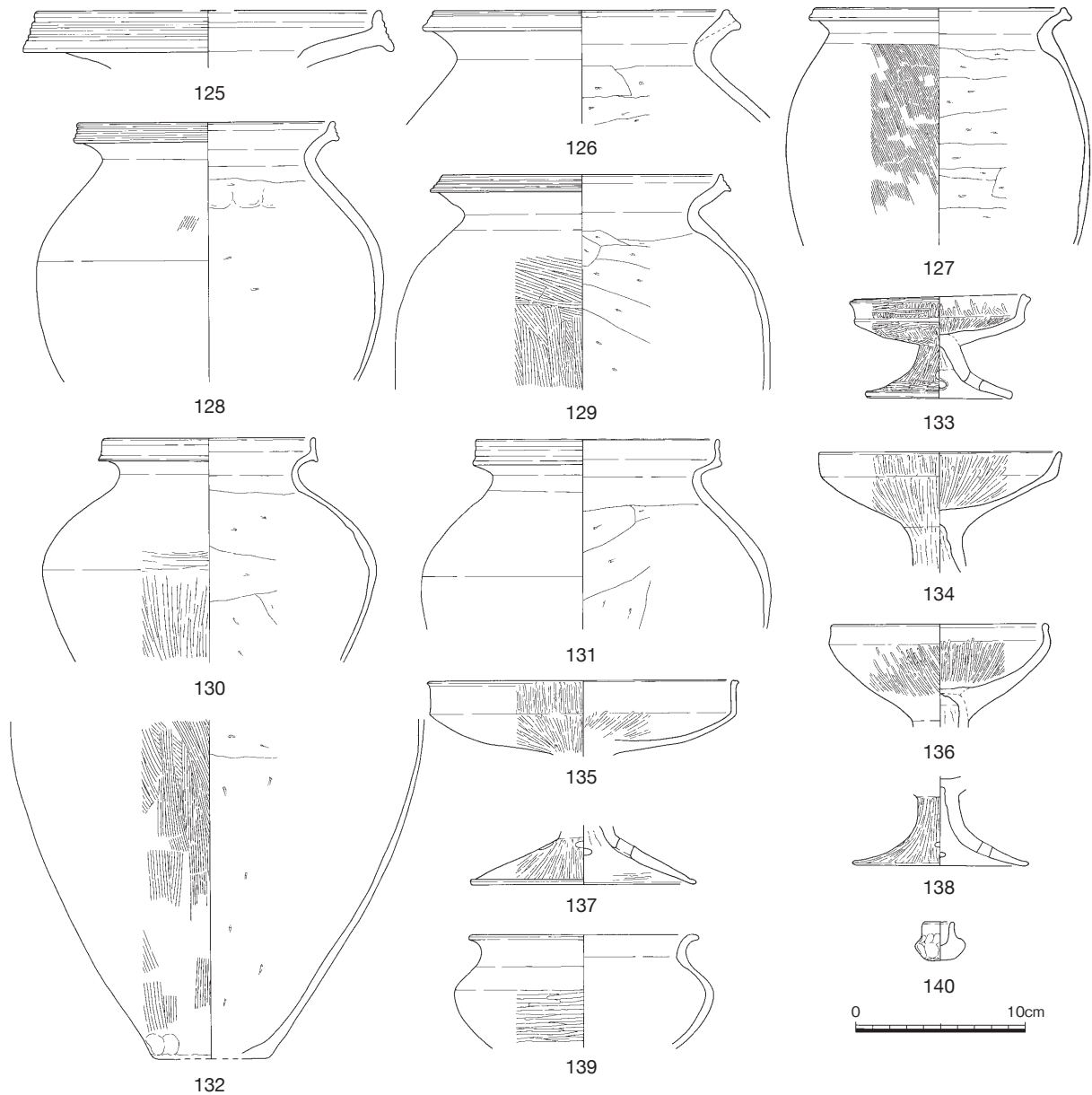
- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 焼土を含む
- 2 褐色 (7.5YR4/2) 粘性微砂
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂
- 4 鈍黄橙色 (10Y6/4) 粘性微砂

第419図 土坑82 (1/30)・出土遺物 (1/4)



- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂
- 2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂 焼土塊を多く含む
- 3 褐灰色 (10YR4/1) 粘性微砂 底面に炭を多く含む
- 4 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂
- 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂 焼土塊を多く含む
- 6 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂
- 7 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂 焼土塊・炭を多く含む
- 8 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘性微砂
- 9 鈍黄色 (2.5Y6/4) 粘性微砂

第420図 土坑83 (1/30)



第421図 土坑83出土遺物 (1/4)

4 溝

溝13 (第407・408・422図)

204D区の低位部に位置する溝で、弥生時代後期の水田2の水田層の直下で検出している。百沢田3溝16に続く溝で、北東から南西に延びている。規模は幅28~40cm、深さ8~17cmで、埋土は単一の粘質土である。出土遺物は無いが、検出状況などからも弥生時代後期の時期であるといえる。(團)

溝14 (第407・408・423図)

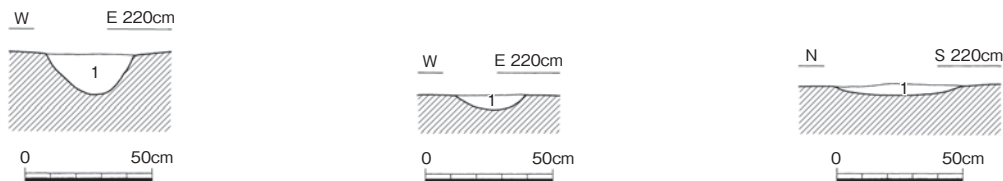
204E・204F区の低位部に位置し、北東から南西に延びる溝である。規模は幅18~36cm、深さ3~6cmを測る。弥生時代後期の水田3の水田層直下で検出している。出土遺物はないものの、検出状況から弥生時代後期の遺構であると判断できる。(團)

溝15 (第407・408・424図)

204E・204F区の低位部に位置し、東西に伸びる溝である。百沢田3溝17に続くものと考えられる。規模は幅20~50cm、深さ1~5cmを測る。溝14と同様に、水田3の水田層直下で検出している。出土遺物はないものの、検出状況から弥生時代後期の遺構であると判断できる。(團)

溝16~20 (第407・408・425図、図版34-2)

205F・205G区の低位部に位置する溝群である。微高地の落ち際からおよそ3.5mの幅のなかで5条の溝が微高地に沿って延びている。これらの溝に共通して、底面に凹凸が見られることがあげられる。このことから、微高地の開削に伴う工具の痕跡である可能性が考えられる。(團)



1 灰色 (N5/) 砂質土
鈍黄橙色 (10YR7/3) 砂質微砂を含む

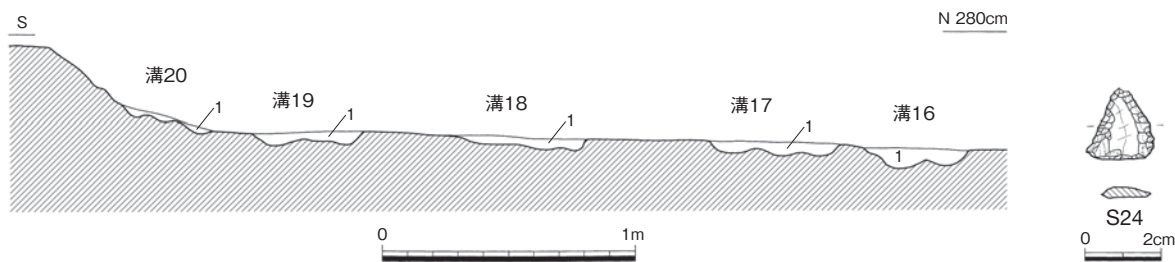
1 灰色 (N5/) 粘質土 鈍黄橙色
(10YR7/3) 粘性微砂を含む

1 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性微砂

第422図 溝13 (1/30)

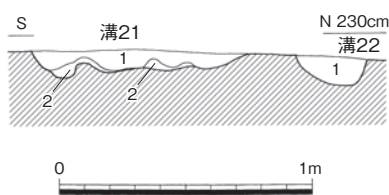
第423図 溝14 (1/30)

第424図 溝15 (1/30)



1 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂で明黄褐色 (10YR7/6) 粘性微砂の土塊を含む

第425図 溝16~20 (1/30)・出土遺物 (1/2)



1 褐灰色 (10YR5/1) 粘質土
2 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質細砂

第426図 溝21・22 (1/30)

溝21・22 (第409・410・426図)

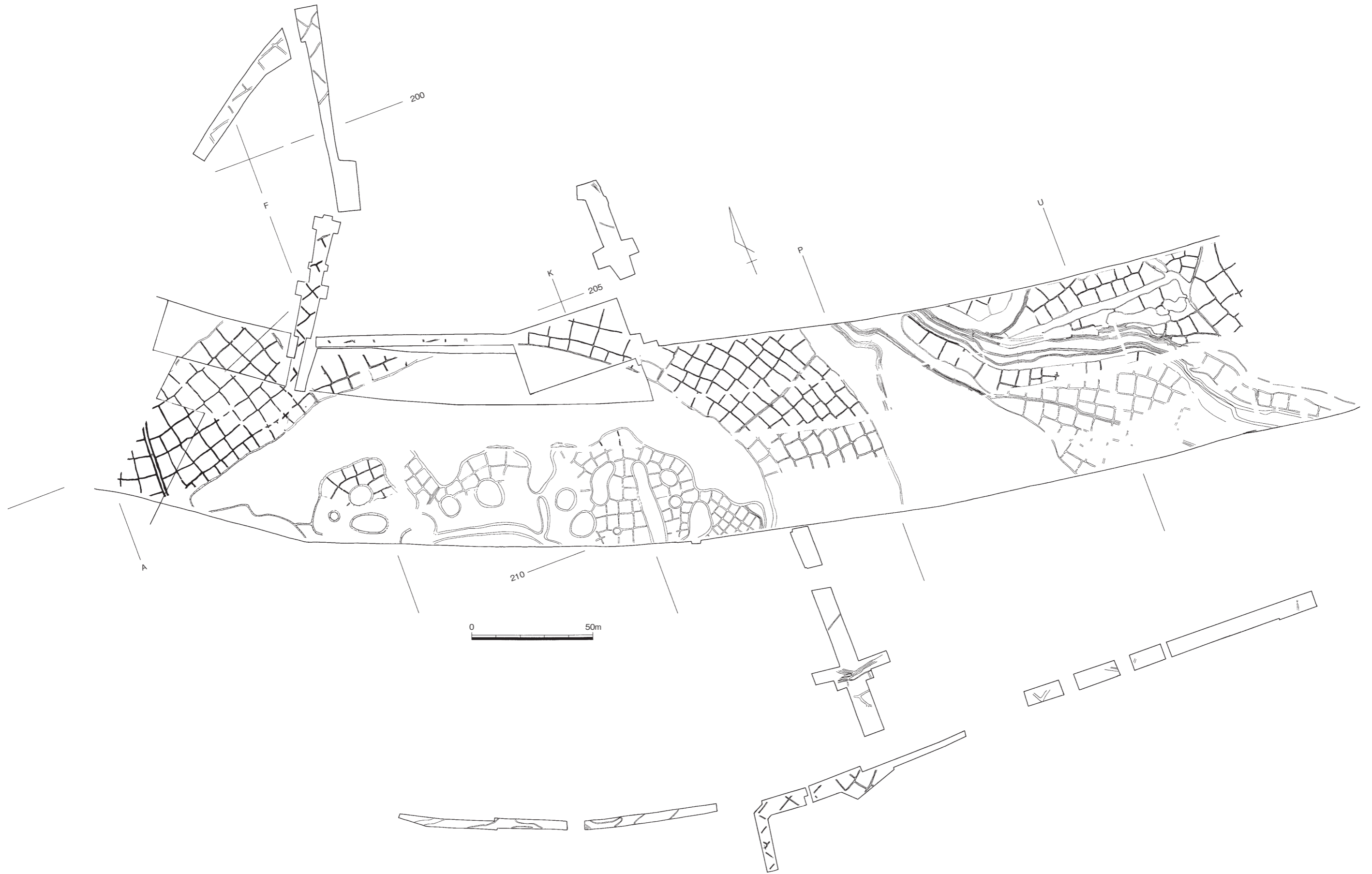
2条とも206K区の南東側で検出した。溝21の規模は、上面幅56cm、底面幅25cmを測る。検出面からの深さは25cmで、底面の標高は188cmになる。溝22の規模は、上面幅174cmで、深さ21cmで、底面の標高は196cmになる。2条とも断面は不定形を呈した。

時期は弥生時代後期である。(小林)

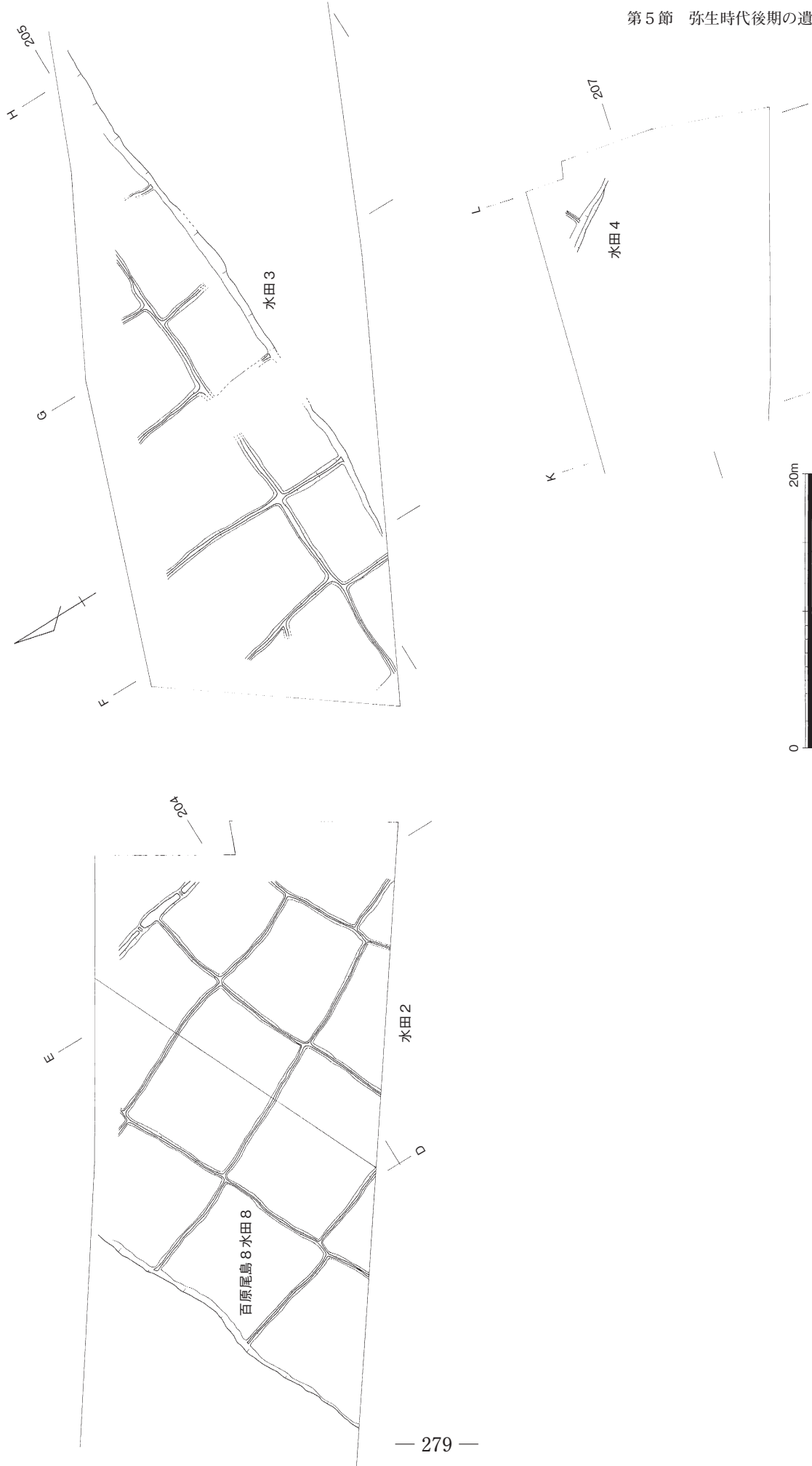
5 洪水砂埋没遺構

水田2 (第427~429図)

203D・204D区に位置する水田で、百原尾島6水田8と一連の水田である。弥生時代後期末の洪水砂を除去すると、幅20~30cm、高さ3~5cmの畦畔によって整然と区画された田面を検出することができた。また、調査区の東端では幅30~40cm、高さ5~7cmの大畦畔を検出した。この大畦畔は、2

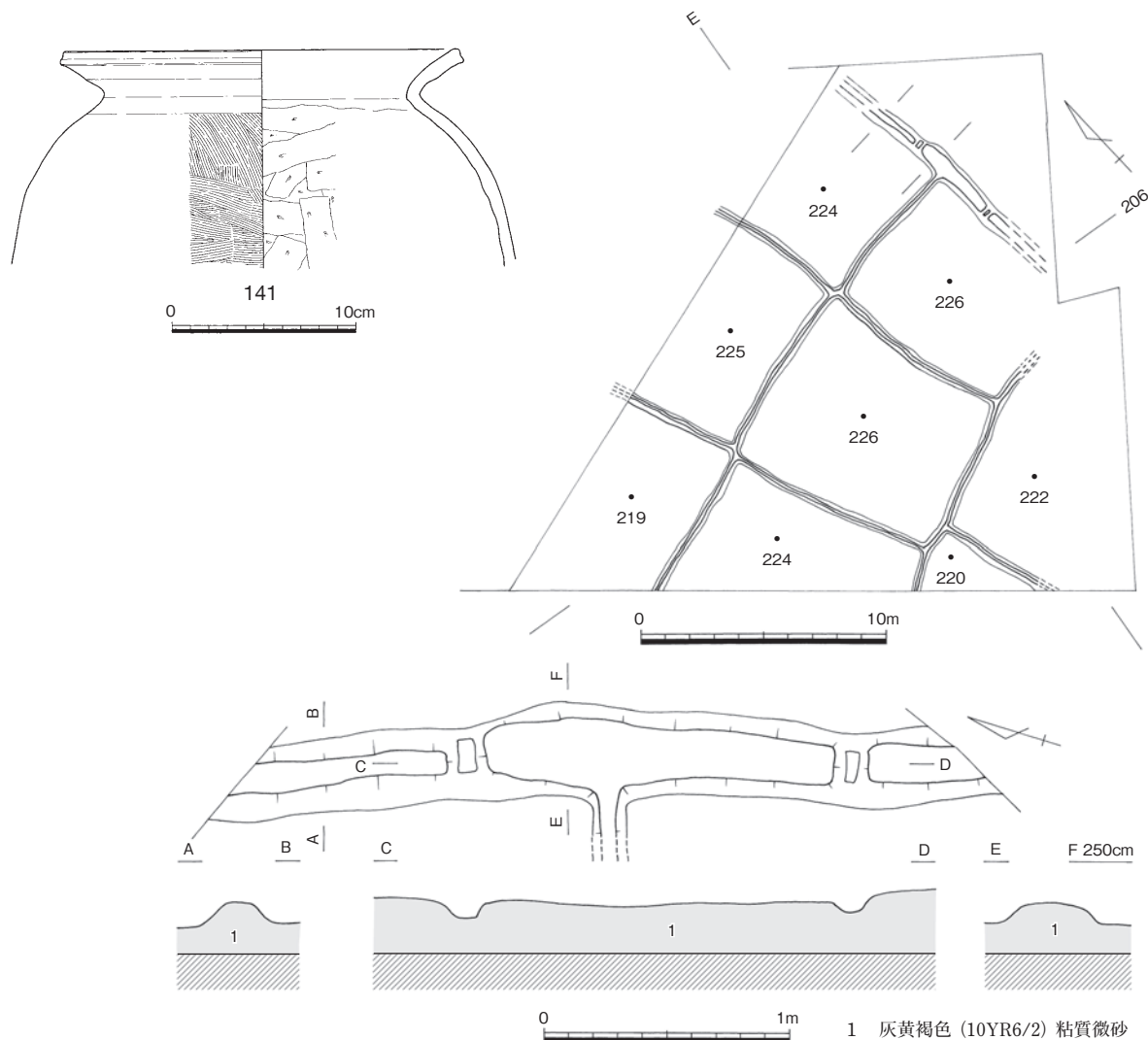


第427図 弥生時代後期水田全体図 (1/1,500)



第428図 弥生時代後期水田配置図 (1/400)

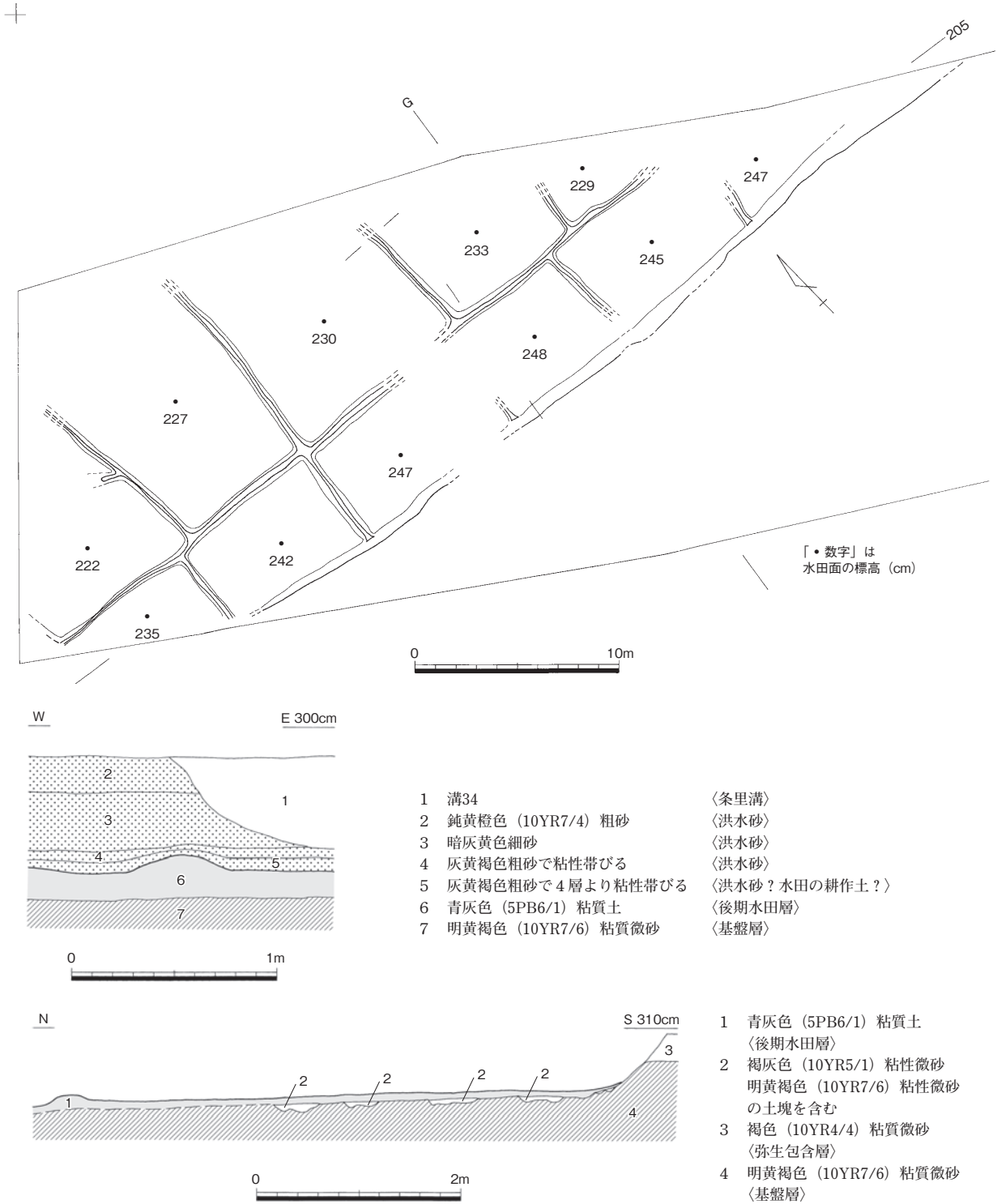
か所で幅15~18cm、深さ5cm程度の凹みを検出しており、水口であると考えられる。この大畦畔の続きが、百沢田3の横田調査区の弥生時代後期の水田の中で報告されており、同じく水口が設けられている。百沢田3高縄手B調査区の後期水田の大畦畔のような基礎工事などの痕跡は見られなかった。水田層からは甕141が出土している。口縁部の特徴から百・後・Ⅱのものであろう。(團)



第429図 水田2 (1/300)・大畦畔断面 (1/30)・出土遺物 (1/4)

水田3 (第427・428・430図、図版34-1)

204F・205G区に位置する水田である。弥生時代後期末の水田層を除去後に検出している。微高地に接する部分では、畦畔によって南北方向が約5m、東西方向8~9mの小さい区画を作っているが、それより北側の区画は、一辺が10m程度と大きくなる。この調査区では畦畔の上層で白色の微砂の広がり認められたため検出は容易であったものの、この白色微砂の堆積の要因は不明と言わざるをえない。田面を覆う洪水砂は、粘質の帯びる強さによって4層に分層した。その最下層である第5層については、洪水砂ではなく水田の耕作に伴う耕作土の可能性もあるが、畦畔上にも堆積していることなどから、洪水砂の可能性も否定できない。調査区の東角では、壁面では大畦畔が確認できたものの、平面では検出できなかった。遺物は出土していない。(團)



第430図 水田3 (1/300)・土層断面 (1/30・1/60)

水田4 (第427・428図)

調査区北東隅の207K区において検出した洪水砂埋没水田で、微高地端部から直交する小畦畔を1条検出している。沢田遺跡の微高地北を弧状に取り囲む旧河道上の水田の一部をなし、前述した水田2・3や既報告の百沢田5後期水田につながる。田面のレベルは海拔231cmで、微高地との比高差は35cmである。

(弘田)

第6節 古墳時代～古代の遺構・遺物

1 概要

古墳時代の遺構は、竪穴住居8軒、掘立柱建物4棟、柱穴列2基、井戸6基、土壇4基、溝11条を掲載する。遺構の時期は、大半が前期に所属するが、唯一、原尾島遺跡と沢田遺跡の間をなす低位部を横断するように走る溝は、7世紀代に入る溝であった。この溝は底面にピット状の列を穿ち、北西部では上面の両側に畦畔を伴うが、これと同様の溝が原尾島遺跡の低位部においても調査されており（「百原尾島2溝218」）、溝下層より6世紀末から7世紀初頭の須恵器が出土している。低位部は、弥生時代末の大洪水によって完全に埋没した訳では無く、低位部としての景観は保っており、そこで何らかの耕作が行われていたことも考えられる。

微高地上に位置する前期の遺構群は、周辺における既往調査区の遺構散布状況を合わせてみても、旧河道に沿った自然堤防上に弧状に立地する集落の一部をなす。ただ、この調査区内においては、西に掘立柱建物群、東に竪穴住居群と明瞭に分かれていた。

掘立柱建物のうち3棟は布堀掘り方をもつ建物であり、すぐ南側の調査区（百沢田3掘立柱建物5）の1棟を含め近接した位置に存在する。また、この建物群は竪穴住居との切り合いがみられず、その周辺をみても一定の空間地を設けていることが注目できる。

竪穴住居群は、規模が一辺310～750cmと大小が存在する。なかでも、一辺750cmの大形住居の床面において、炉や入り口とみられる石敷きを確認している。近接した場所において、鍛冶炉の存在（百沢田3住居10）があり、それとの関連もうかがわれる。

井戸は、掘立柱建物群の西から北側で微高地端に沿うように並ぶ。平面形は円形、断面形が筒形をなし、底面海拔高は105～184cmの間にある。廃絶時の祭祀によるものか底面付近で完形の土器が多く出土している。

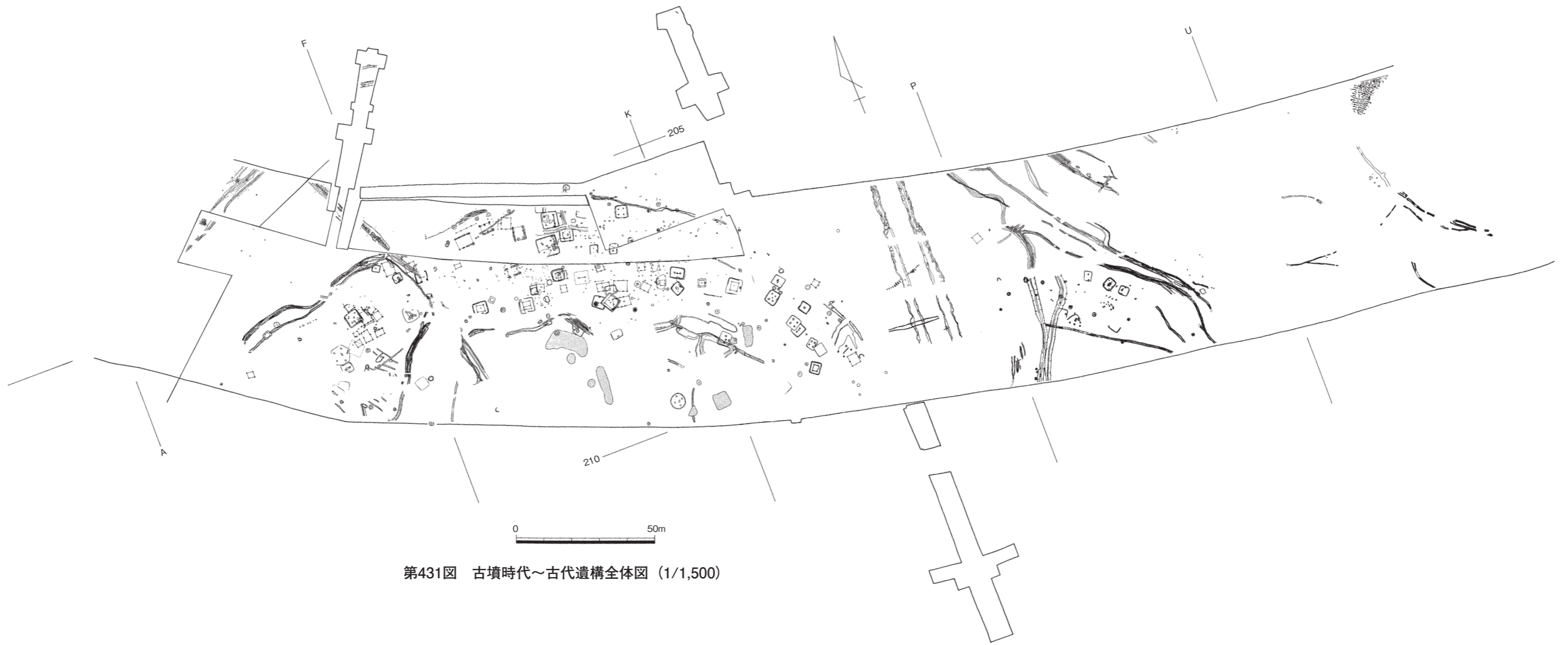
古墳時代の遺物包含層は、微高地上では後世の削平によるものか薄く、逆に低位部上では厚く堆積する。古墳時代前期の土器が大半であった。本調査地の北側に位置する百沢田5横田調査区のような奈良時代の遺物はみられず、6世紀代以降の須恵器、土師器なども少量であった。（弘田）



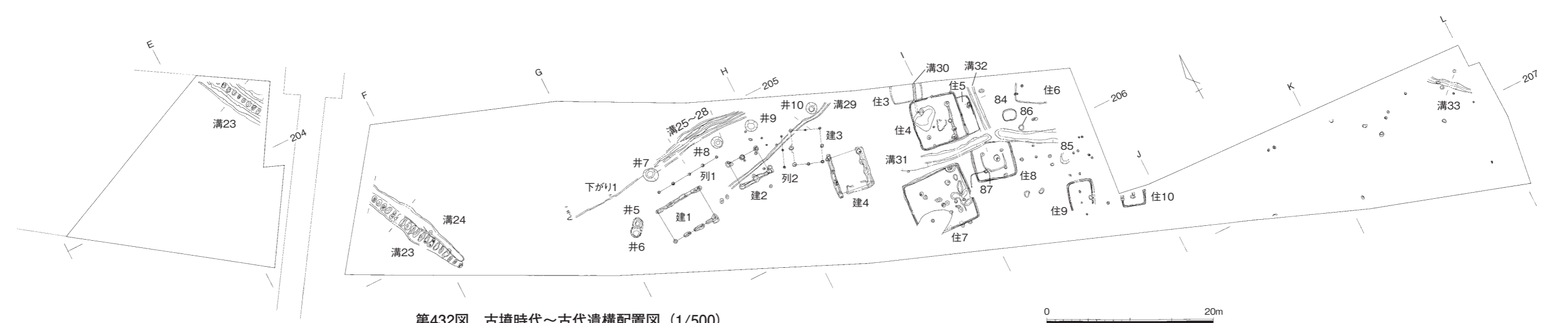
写真55 掘立柱建物4布掘り掘り方（西から）



写真56 井戸5（西から）



第431図 古墳時代～古代遺構全体図 (1/1,500)

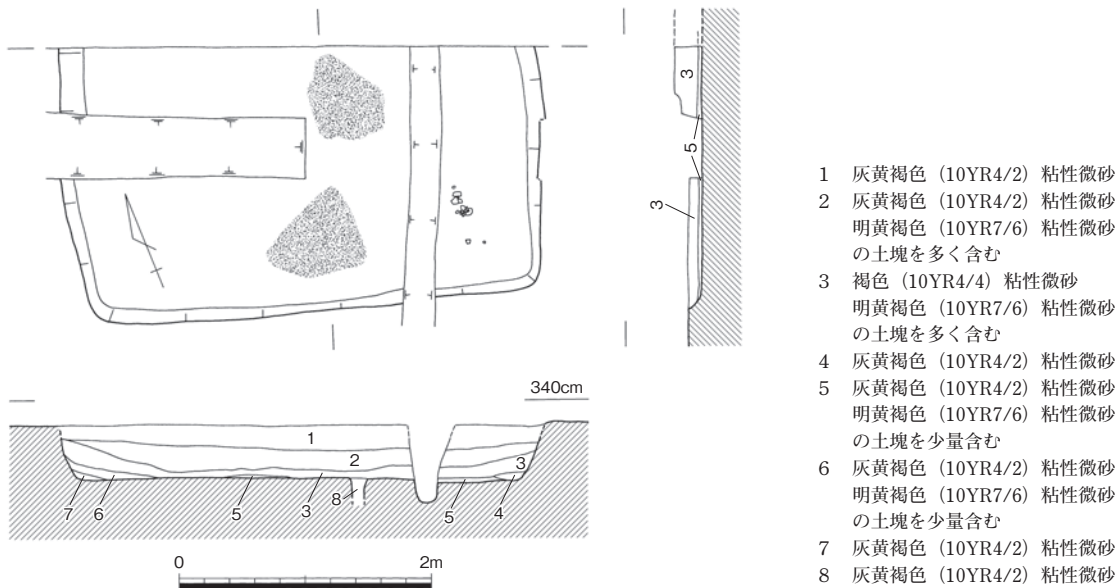


第432図 古墳時代～古代遺構配置図 (1/500)

2 竪穴住居

竪穴住居3 (第431～433図)

205H区に位置する方形を呈する竪穴住居で、調査区の北端で検出したため、およそ半分しか調査できなかった。長軸が380cmを測るため、元々はおおよそ4m四方の規模あったと考えられる。壁体溝や柱穴などは検出してない。床面では炭の広がりか所が2か所で確認された。遺物は、南東隅の床面上で少量出土しているものの、細片であり実測することができなかった。この竪穴住居の時期であるが、周辺の遺構の状況や検出面、また遺物などから、百・古・Iであると考えられる。(團)



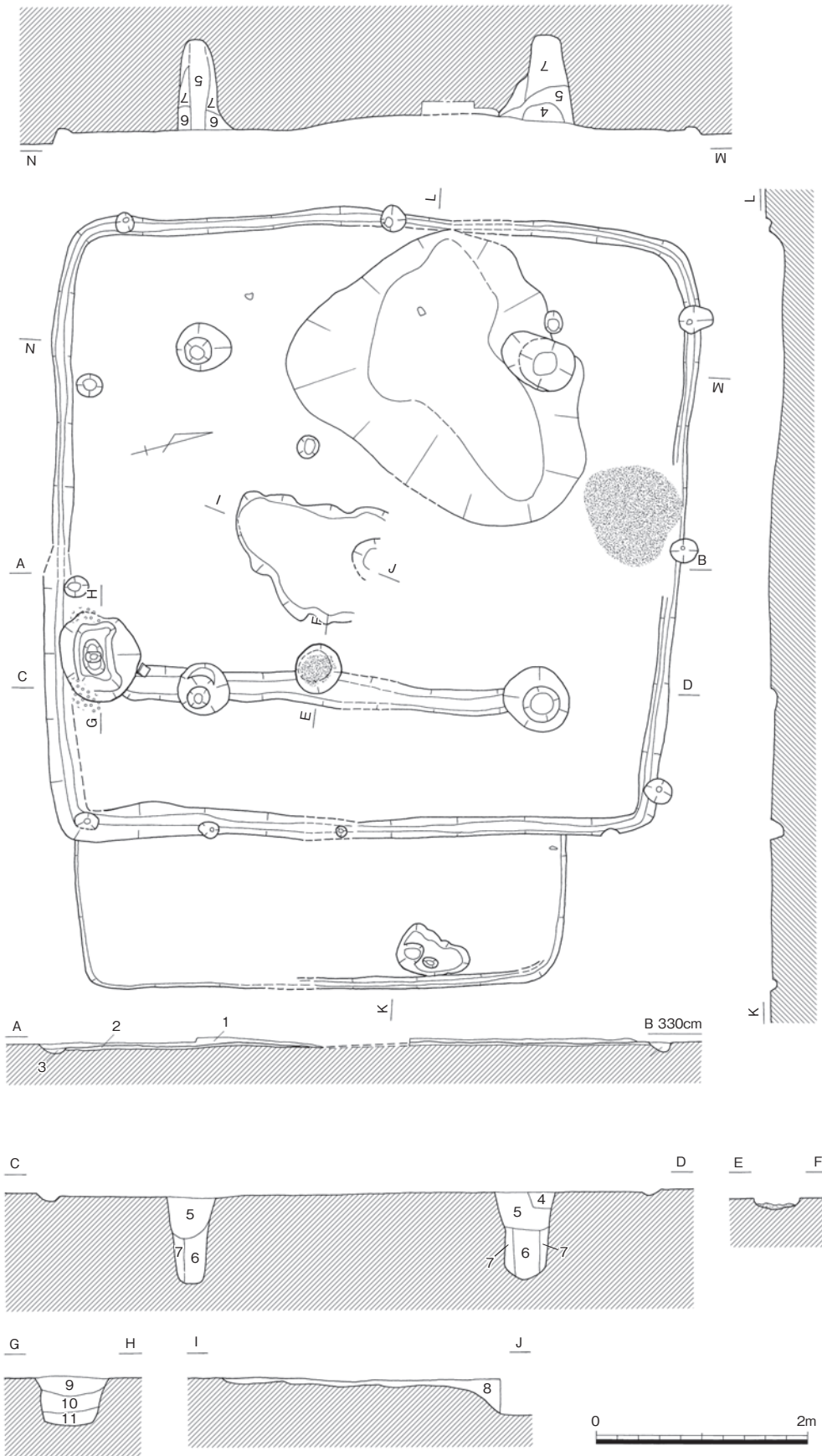
第433図 竪穴住居3 (1/60)

竪穴住居4・5 (第431・432・434・435図、図版47)

竪穴住居4は、205H・I区間の中央よりやや南側において検出した住居である。東側に近接して竪穴住居5が位置し、これを切る。方形を呈する4本柱の住居で、検出面からの深さは5cmを測り、床面は地山まで掘り込まれた後に敷かれていた。床面の標高は320cmで、規模は長さ610cm、幅596cmである。主軸はN-16°-Eで、床面積は30.7㎡を測る。床の周りには14～20cmの壁体溝が巡る。壁体直上に直径10～30cmを測る10基の柱穴が巡るが、壁を支えた柱の痕跡であろうか。壁体から80～100cmの位置にある4基の主柱穴は、径50～76cmの不整形円形を呈する。深さは80～85cmを測り、柱穴間は320～330cmの距離があった。中央穴は、幅40cmを測り、周囲には炭化物の分布が見られる。方形土坑は、南東側の壁面付近にあり、上面の規模は76～74cmで、北側の両隅は径14～20cmほど突出している。また南隅は被熱していた。

覆土から土師器142・143や砥石S25が出土している。142は広口壺の口縁部、143は鉢口縁である。この住居の時期は、百・古・Iになる。

竪穴住居5は、205I区の中央よりやや南東側において検出した住居である。西側に近接して竪穴住居4が位置し、これに切られる。方形を呈する住居であるが、柱は確認できなかった。床面の標高は320cmで、規模は長さ466cmである。東側辺の一部で幅12cmの壁体溝が存在した。また東側壁面付近

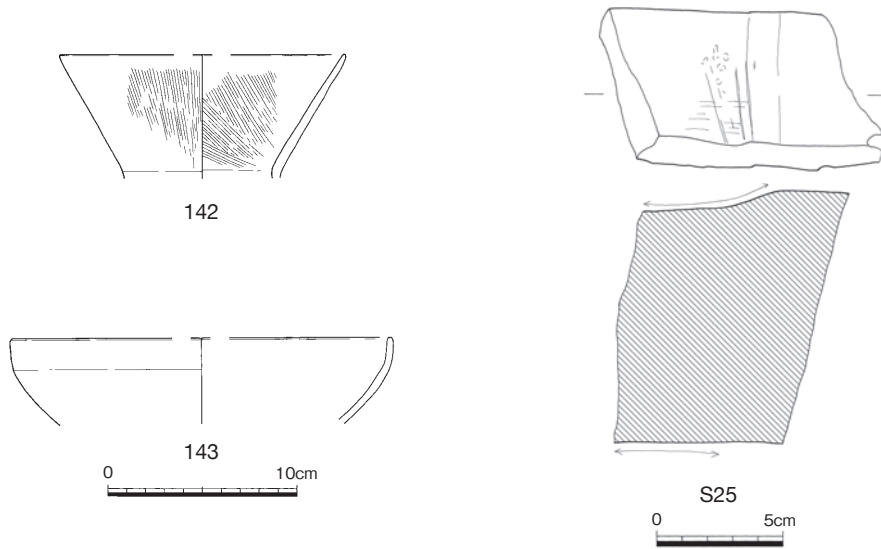


- | | | | |
|-----------------------|-----------------------|-----------------------|-----------------------|
| 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂 | 4 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質細砂 | 7 暗褐色 (10YR3/3) 粘質細砂 | 9 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂 |
| 2 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂 | 5 黒灰色 (10YR3/2) 粘質微砂 | 焼土を含む | 10 黒灰色 (10YR3/1) 粘質微砂 |
| 3 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂 | 6 暗褐色 (10YR3/3) 粘質微砂 | 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂 | 11 褐灰色 (10YR4/1) 粘質細砂 |

第434図 竪穴住居4・5 (1/60)

に66×43cmで不整楕円形の土坑がある。時期は百・古・Iと推定する。

(小林)



第435図 豎穴住居4出土遺物 (1/3・1/4)

豎穴住居6 (第431・432・436図)

205 I 区の中央よりやや南東側で検出した住居であり、南西側1 mに土坑84が位置する。

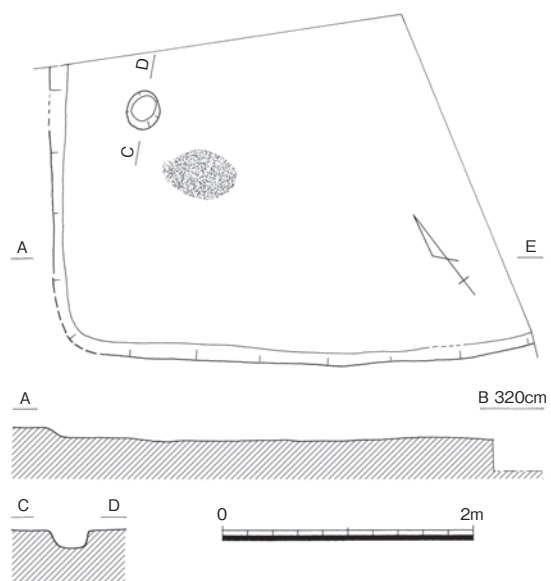
方形を呈し主軸はN52°Wの住居と推定するが、北から北東部は調査区外になるため確認できてなかった。検出面からの深さは5 cmを測り、床面の標高は295cmである。壁体溝は存在しなかった。柱穴は1本のみ検出しており、31×29cmの円形で、深さは15cmを測る。柱穴より南に30cm離れた箇所に炭化物の分布が見られた。住居の時期は、古墳時代前期と推定する。

(小林)

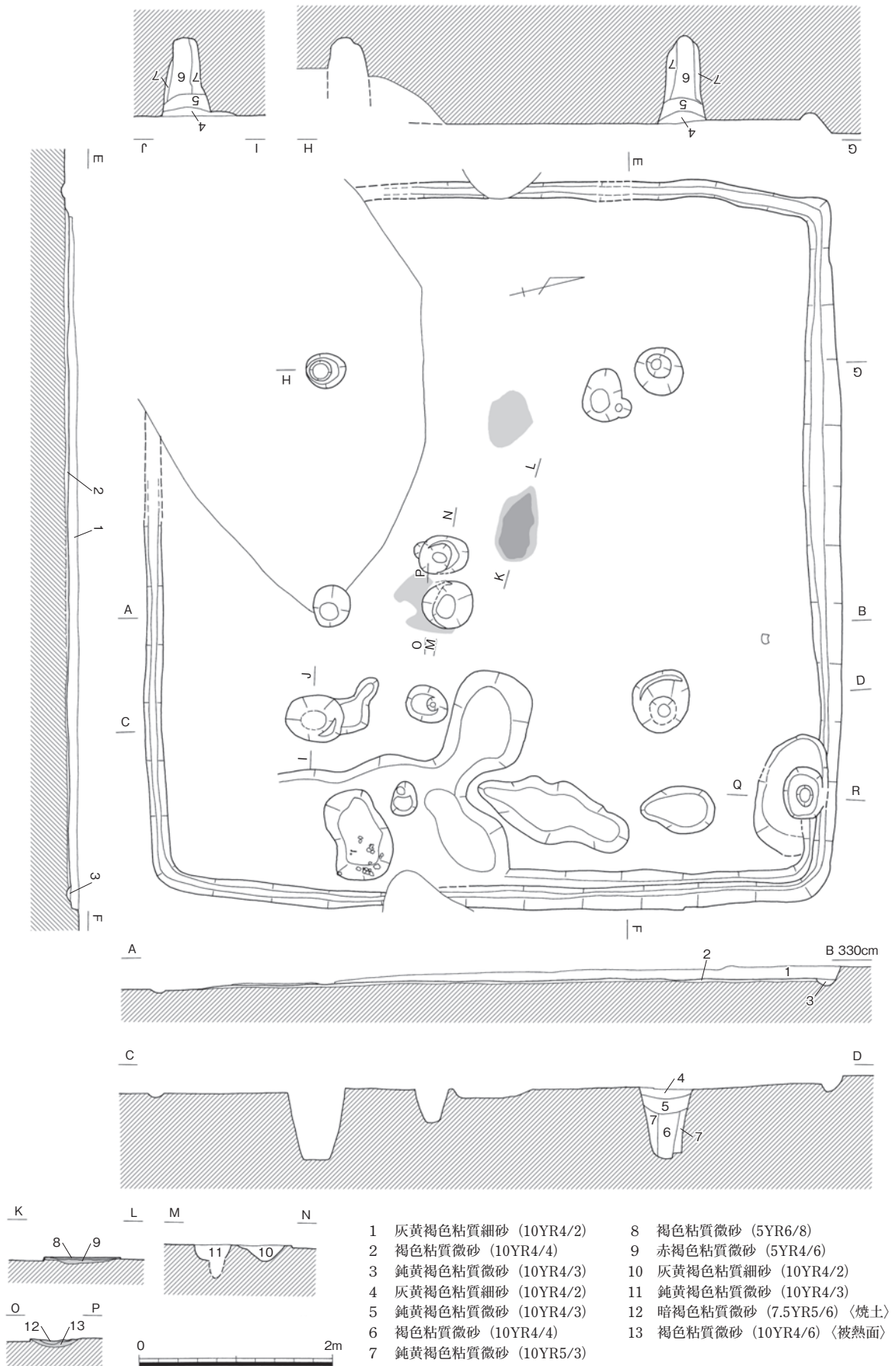
豎穴住居7 (第431・432・437～439図、図版35-2・35-3・35-4)

205・206H区間の東側において検出した住居で、北側に溝31が、東側に土坑87がそれぞれ近接する。

方形を呈する4本柱の住居で、検出面からの深さは10cmを測り、床面は地山まで掘り込まれた後に敷かれていた。床面の標高は310cmで、規模は長さ754cm、幅720cmである。主軸はN78°Wで、床面積は47.2㎡を測る。床の周りには18～49cmの壁体溝が巡る。4基の支柱穴は、径50～70cmの楕円形で、深さは73～88cmを測る。柱穴間は350～365cmの距離があった。中央穴は49×54cmを測り、南壁面は被熱が強く見られる。方形土坑は、北東側の壁面付近にある。上面の規模は125～72cmで、南側に寄って径2～4 cmの細礫が敷かれる。中央土坑の西側に、規模が83×43cmと62×48cm被熱面がある。鍛冶炉になる可能性があるが、鉄滓や鍛造剥片などは確認できなかった。

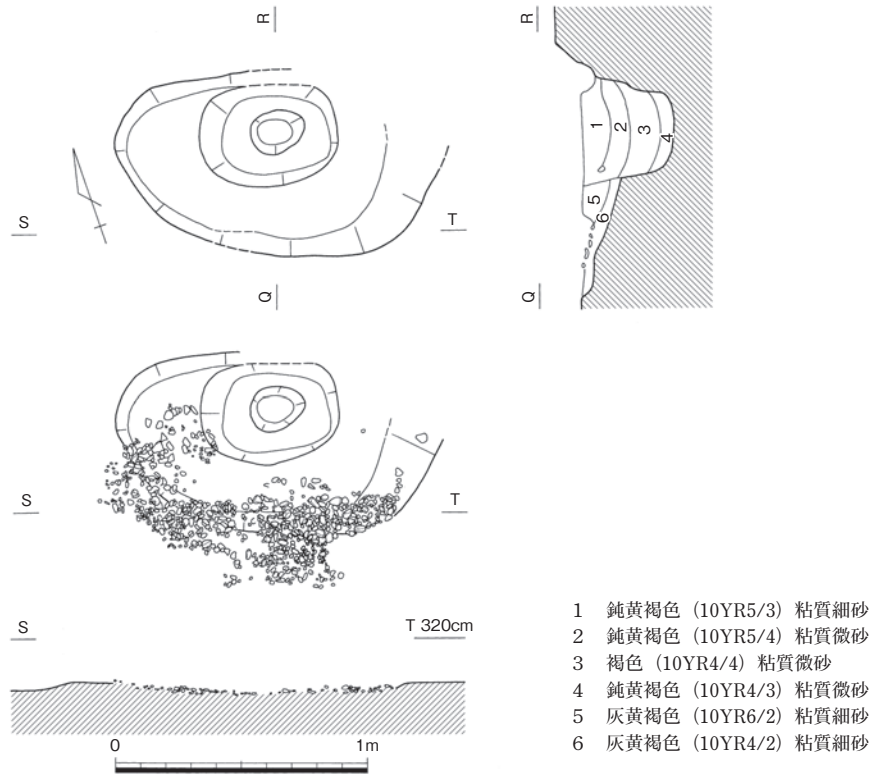


第436図 豎穴住居6 (1/60)

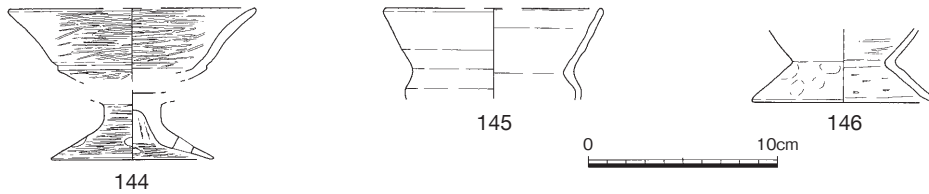


第437図 竪穴住居 7 (1/60)

出土遺物には144～146があり、144は柱穴内、145・146は住居の覆土中で発見した。時期は、百・古・Iになる。(小林)



第438図 竪穴住居7石敷土坑 (1/30)



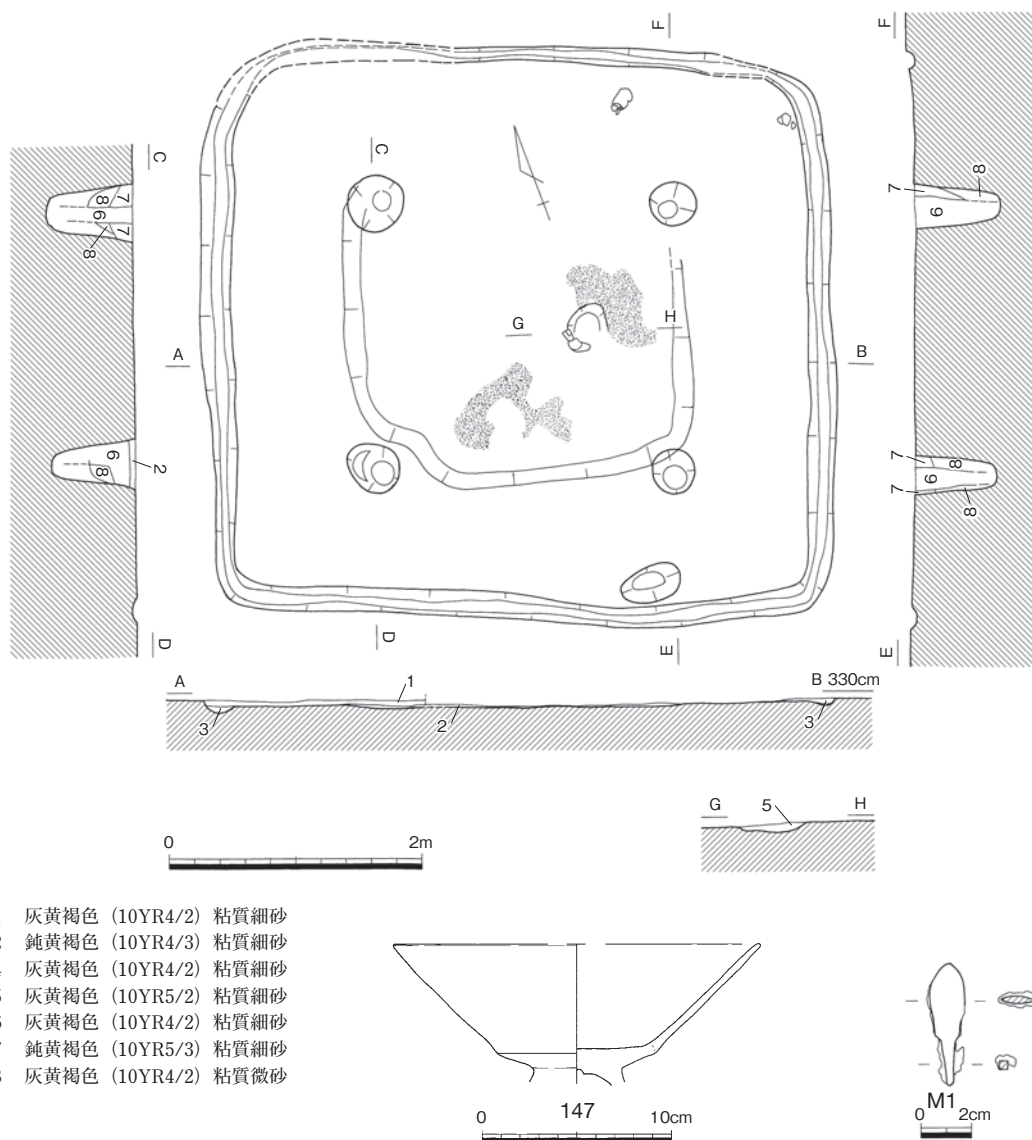
第439図 竪穴住居7出土遺物 (1/4)

竪穴住居8 (第431・432・440図、図版47)

205・206 I 区間の西側において検出した住居で、南西側に近接して土坑87がありこれを切り、北側に近接して溝31がありこれに切られる。

方形を呈する4本柱の住居で、検出面からの深さは7cmを測り、床面は地山まで掘り込まれた後に敷かれていた。床面の標高は315cmで、規模は長さ500cm、幅456cmを測る。床面積は18.9㎡で、主軸はN68°Wの傾きであった。床の周りには14～21cmの壁体溝が巡る。壁体から80～90cmの位置にある4本の柱穴は、径36～55cmの楕円形で、深さは65～70cmを測る。柱穴間は215～230cmの距離があり、また柱穴と壁面の間はわずかに高く、北西側から南東側にかけて高床部が存在した。中央穴は40×32cmを測り、周辺と南西側には炭化物の分布が見られる。また147は、この中央穴出土である。南側壁面のやや東側寄りに、50×26cmの楕円形の土坑がある。位置から考えると方形土坑と同じ役割があったものと推定する。

出土遺物には、147高杯口縁部とM1鉄鏃などがある。147は逆ハ字で直線的に伸びる口縁部である。時期は百・古・Iである。 (小林)



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質細砂
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂
- 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質細砂
- 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂
- 7 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質細砂
- 8 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂

第440図 竪穴住居8(1/60)・出土遺物(1/3・1/4)

竪穴住居9 (第431・432・441図、写真57)

206 I 区の中央よりやや北東側において検出した住居で、南東側3.1mに竪穴住居10が位置する。

長方形を呈する2本柱の住居で、検出面からの深さは5cmを測り、床面は地山まで掘り込まれた後に敷かれた。床面の標高は295cmで、規模は幅316cmで、主軸はN22°Eを測る。床の周りに18~23cmの壁体溝が巡る。東側の壁面付近に方形土坑がある。

図示しうる遺物は出土していないが、時期は百・古・IIと考える。

(小林)

竪穴住居10 (第431・432・442図)

206 I 区の西側において検出した住居で、北側半分は百沢田5住居3である。長方形を呈する2本柱の住居で、検出面からの深さは12cmを測り、床面は地山まで掘り込まれた後に敷かれた。床面の標

高は295cmで、規模は長さ388cm、幅310cmで、床面積は9.0㎡を測る。主軸はN33°Eに傾く。2本の主柱穴は、径48～59cmの楕円形であり、深さは48cmを測る。東側壁面付近にある土坑が、方形土坑と同じ役割になると推定した。

時期は百・古・Iと考える。 (小林)

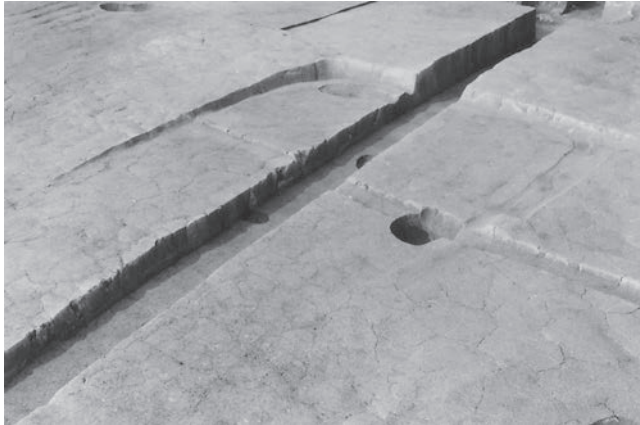
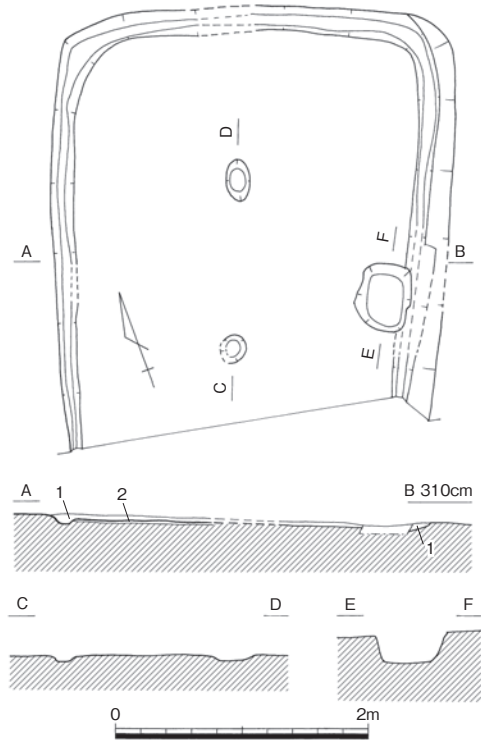
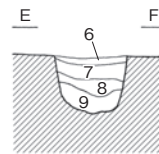
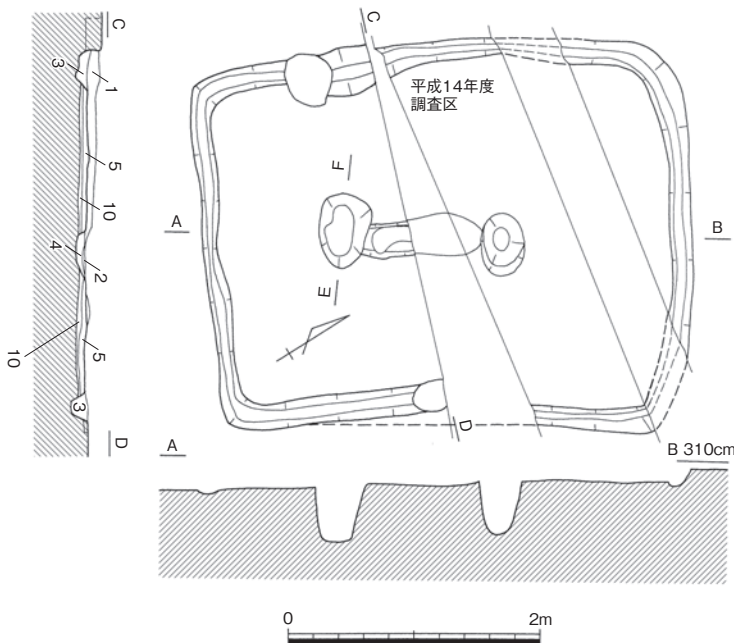


写真57 竪穴住居9 (南西から)

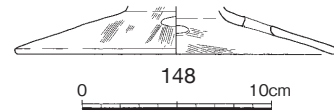


- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂
- 2 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂

第441図 竪穴住居9 (1/60)



- 1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂
- 2 黒褐色 (10YR7/1) 粘質細砂 (炭化物層)
- 3 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 4 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂
- 5 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂
- 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂
- 7 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂
- 8 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂
- 9 褐灰色 (10YR4/1) 粘質微砂
- 10 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂



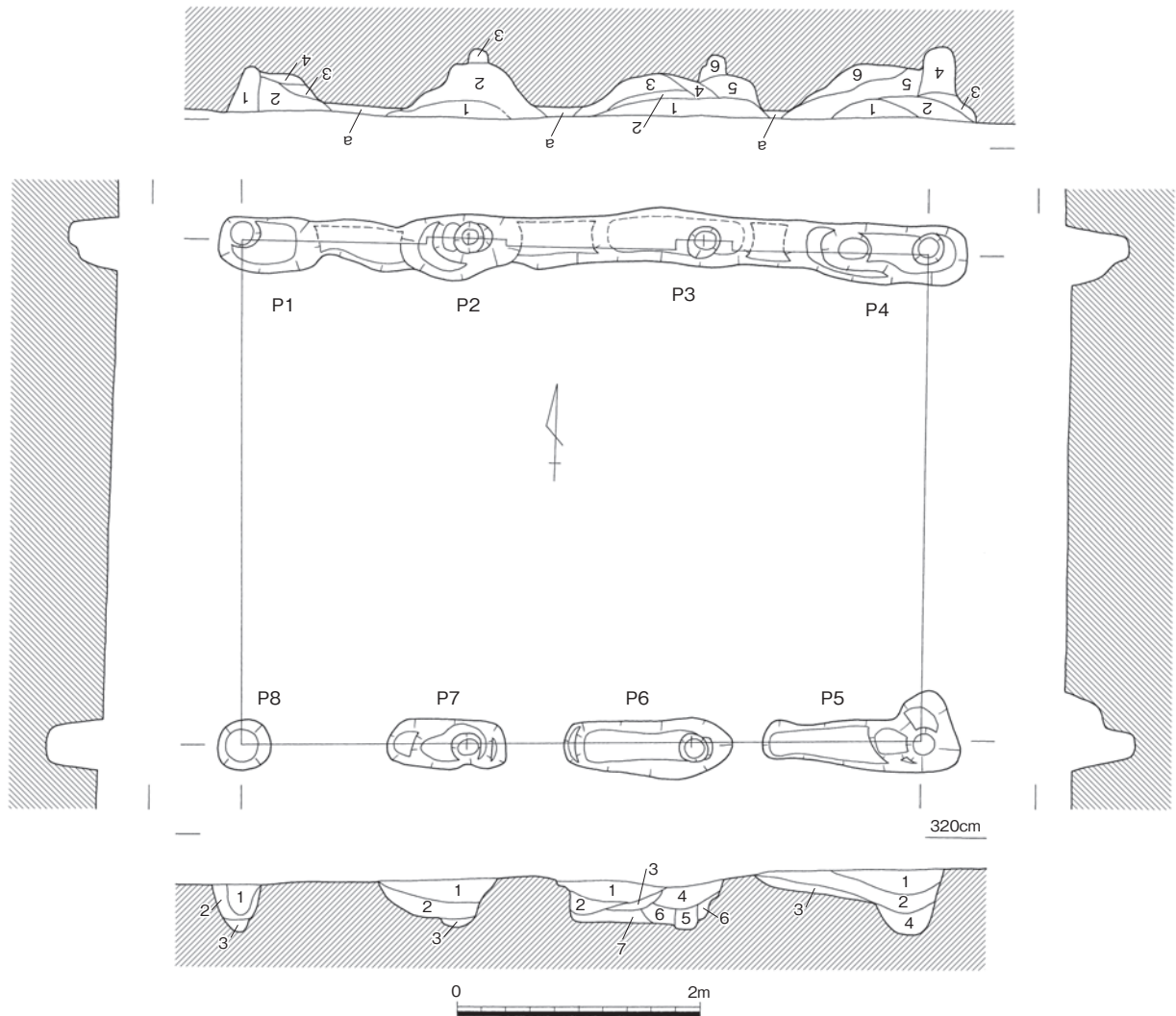
第442図 竪穴住居10 (1/60)・出土遺物 (1/4)

3 掘立柱建物

掘立柱建物1 (第431・432・443図、巻頭図版7-2、図版36-1)

205G区に位置する、3×1間の側柱建物である。この建物の柱掘り方は溝状であり、いわゆる布

掘り建物と呼ばれるもので、規模は、桁行560～565cm、梁間401～416cmを測る。近年の工事によって上面の削平を受けているため、北側の桁行のみが溝状の掘り方を留めているが、本来は南側の桁行も溝状の掘り方を持つものであったと考えられる。掘方の断面形状は、各柱の部分が大きく凹み、柱間



布掘り掘り方埋土

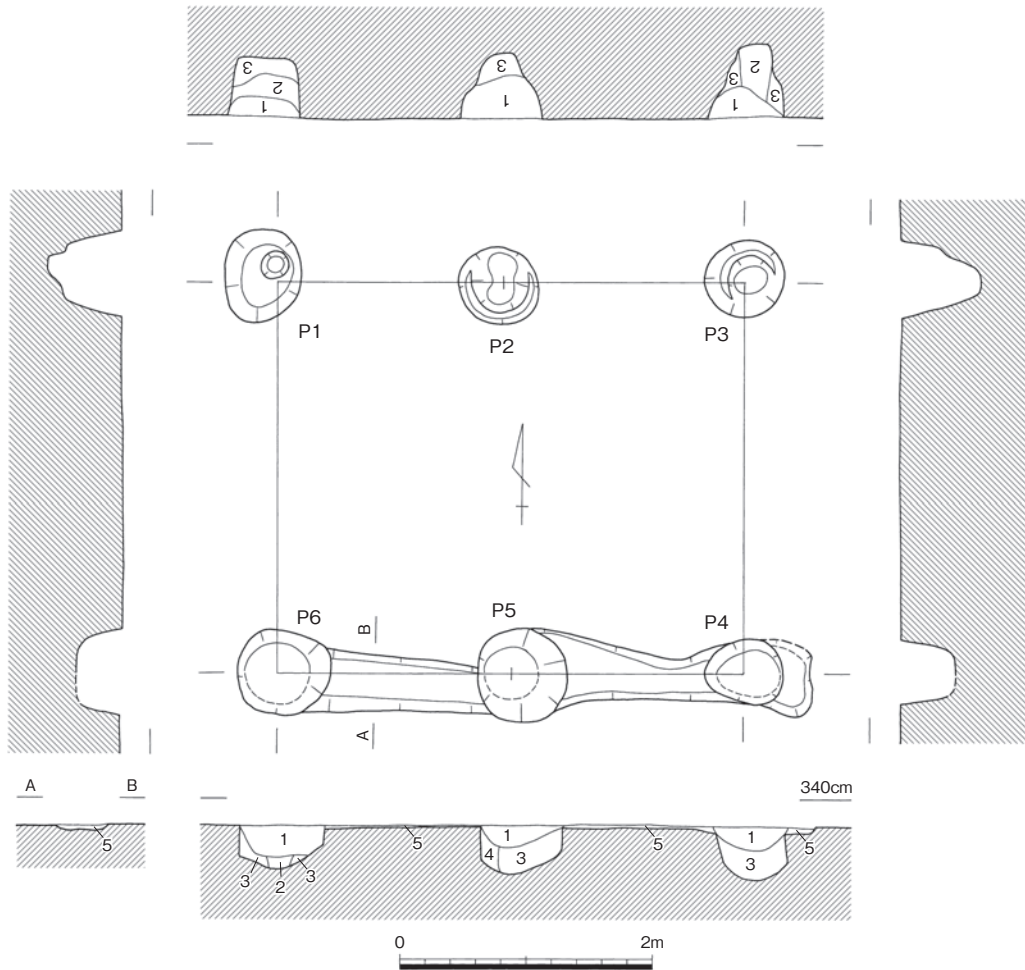
- | | | |
|------------------------|------------------------|---------------------------|
| a 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 2 褐灰色 (5YR4/1) 粘性微砂 | 明黄色 (10YR7/6) 粘性微砂を含む |
| P 1 | 3 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘性微砂 | 3 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 |
| 1 褐灰色 (10YR6/1) 微砂 | 4 褐灰色 (7.5YR5/1) 微砂 | 4 褐灰色 (10YR5/1) 細砂 |
| 2 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 5 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂 | P 6 |
| 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂を含む | 6 淡黄色 (2.5Y8/4) 微砂 | 1 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 |
| 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 | P 4 | 2 褐灰色 (10YR5/1) 細砂 |
| 褐灰色 (10YR6/1) 微砂を少量含む | 1 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 3 褐灰色 (10YR5/1) 細砂 |
| 4 鈍黄褐色 (10YR5/3) 微砂 | 灰黄褐色 (10YR7/2) 粘性微砂を含む | 明黄色 (10YR7/6) 粘性微砂 |
| P 2 | 2 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 4 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 |
| 1 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 3 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂 | 明黄色 (10YR7/6) 粘性微砂 |
| 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂を含む | 4 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂 | 5 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 |
| 2 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 | 褐灰色 (7.5YR5/1) 微砂を少量含む | 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 |
| 褐灰色 (10YR6/1) 微砂を少量含む | 5 灰褐色 (7.5YR5/2) 微砂 | 7 黄橙色 (10YR8/6) 粘性微砂を多く含む |
| 3 淡黄色 (2.5Y8/4) 微砂 | 6 褐灰色 (7.5YR5/1) 微砂 | P 7・P 8 |
| P 3 | P 5 | 1 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 |
| 1 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 1 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 2 鈍黄橙色 (10YR4/3) 細砂 |
| 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂を含む | 2 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 3 淡黄色 (2.5Y8/4) 微砂 |

第443図 掘立柱建物 1 (1/60)

を繋ぐ部分が浅い。各柱に対する掘り方は、長軸90cm～102cm、短軸45～64cmで、平面が長方形を呈していること、土層断面から柱間を繋ぐ溝状の部分の土が先に埋まっているように観察できたことから、この建物の柱が引き抜かれている可能性を考えた。P5の埋土の状況などは、それを証左するものであろう。ただ、P1などは柱痕跡が残存しており、すべてこれで説明できるものではない。出土遺物は無いが、検出面や周辺の遺構の状況などから、百・古・Iの時期の建物であろう。 (團)

掘立柱建物2 (第431・432・444図、図版36-1)

205G区で検出した2×1間の側柱建物である。南側の桁行に、柱間の掘り方を繋ぐ深さ1～3cmの溝状の掘り方を検出しているため、布掘り建物であると判断した。南側の桁行の各柱の第1層と溝状の掘り方の埋土が同一のため、柱を据えたのちに溝状の掘り方とともに同じ土で埋めたものと考えられる。微高地上では、近世水田層直下で古墳時代の遺構が検出でき、上面の削平は著しい。このため、北側の桁行については柱単独の掘り方のみを検出したのであろう。建物の規模は、桁行369cm、梁間308～309cmを測る。掘立柱建物1の東側に位置し、軸線を揃えていること、柱穴列1が、掘立柱建



- | | |
|---|--|
| 1 灰黄褐色 (10YR6/2) 微砂 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 (基盤層) を含む | 3 黄色 (2.5Y8/6) 粘性微砂 褐色 (10YR4/4) 粘性微砂を含む |
| 2 褐灰色 (7.5YR6/1) 微砂 | 4 褐色 (7.5YR4/3) 粘性微砂 |
| | 5 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂 |

第444図 掘立柱建物2 (1/60)

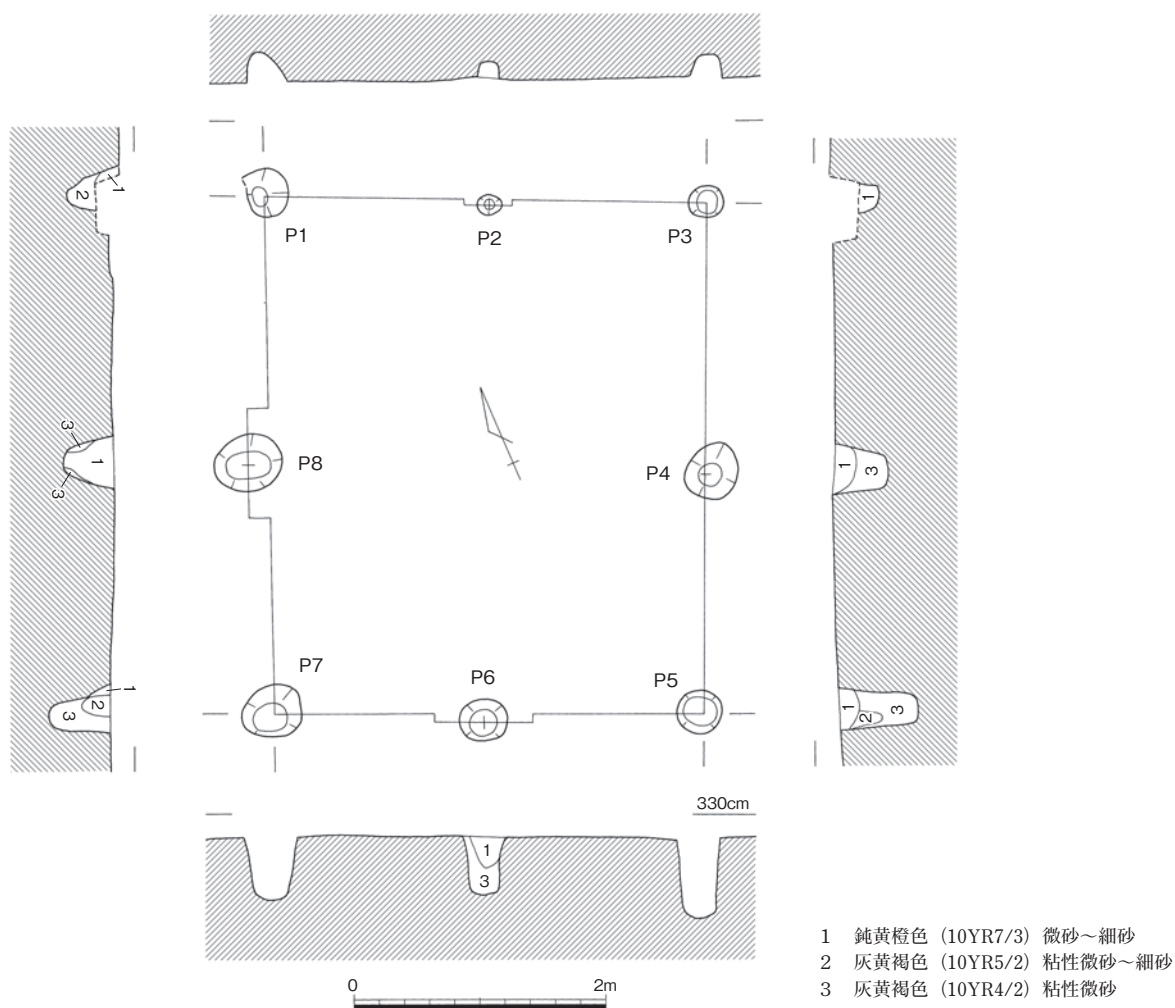
物1と掘立柱建物2の北側を繋ぐように位置することから、この2つの建物は同時に存在した可能性が高いものと考えられる。時期は、検出面や周囲の状況から、百・古・Iと考えられる。(團)

掘立柱建物3 (第431・432・445図)

205H区で検出した、2×2間の側柱建物である。溝29とP1が重複しており、切り合いから溝29より古い時期の建物であったことがわかる。今回調査した掘立柱建物のなかでは唯一、柱掘り方が溝状でなく、柱ごとに単独の掘り方を持つ。また、掘立柱建物2と掘立柱建物4の間に位置しており、特に掘立柱建物4とは近接していること、掘立柱建物1・掘立柱建物2とも桁行の軸線が異なることなどから、これらの建物とは時期を違えて建てられている可能性がある。建物の規模は、桁行405～410cm、梁間345～351cmを測る。西側の桁行に平行して、柱穴列2が位置することから、これは柵といったような、掘立柱建物3と関連する遺構であると考えられる。出土遺物は細片しかないが、周囲の遺構の状況などから、遺構の時期は、百・古・Iであろう。(團)

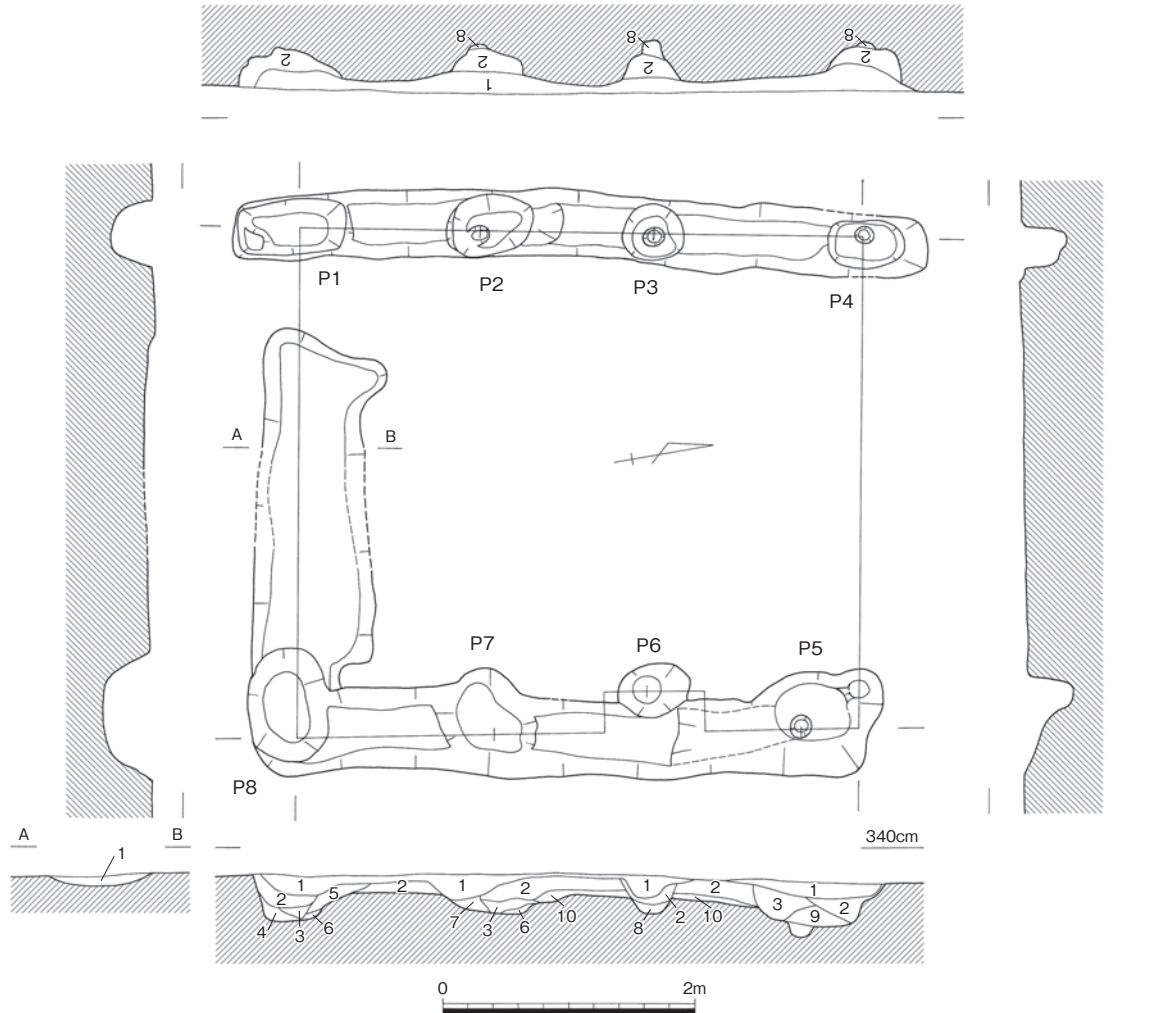
掘立柱建物4 (第431・432・446図、写真55)

205H区で検出した3×1間の側柱建物で、竪穴住居4・8などの西側に位置している。建物の規模は桁行436～444cm、梁間390～404cmを測る、布掘り建物である。掘立柱建物1・2の掘り方と異なり、南側の梁間にも溝状の掘り方を持つ。埋土の状況から、西側桁行の掘り方は第1層で、東側の桁行は



第445図 掘立柱建物3 (1/60)

第1・2層で掘り方全体が埋め戻しされたことが観察できる。東側の桁行に関しては、P6の柱が西側に30cmずれること、P5の北西角にも柱痕跡が確認でき、P8やP7も溝状の掘り方より西に柱掘り方があること、東側桁行の第2層が第3層や第5層に切られていることから、西側に柱を建て替えた可能性があると考えられる。この建物の柱穴からは、出土遺物は細片でしかないものの、周辺の遺構や検出面などから、百・古・Iの時期のものと考えられる。(團)



- | | | |
|--------------------------|----------------------------|------------------------|
| 1 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 5 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 9 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 |
| 2 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 6 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂を少量含む | 10 褐色 (10YR4/4) 粘性微砂 |
| 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂を含む | 7 鈍褐色 (7.5YR5/3) 粘性微砂 | |
| 4 鈍黄橙色 (10YR7/3) 微砂～細砂 | 8 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘性微砂 | |
| 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂を少量含む | | |

第446図 掘立柱建物4 (1/60)

4 柱穴列

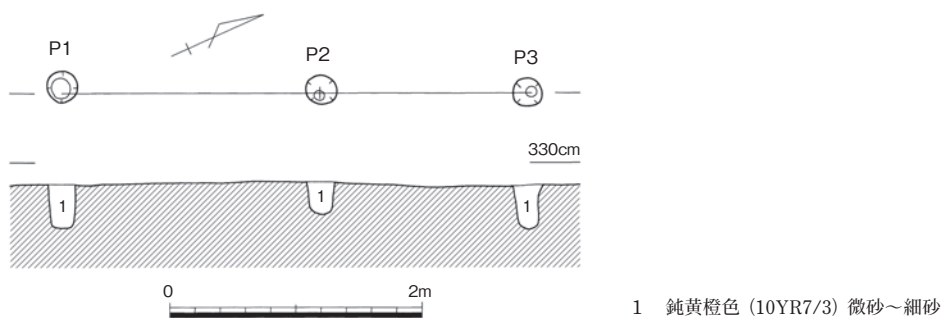
柱穴列1 (第431・432・447図、図版36-1)

205H区で検出している。3本の柱で構成される柱穴列である。掘立柱建物3の西側約120cmに平行して位置していることから、掘立柱建物3に付属する柵のような施設であると考えられる。規模は375

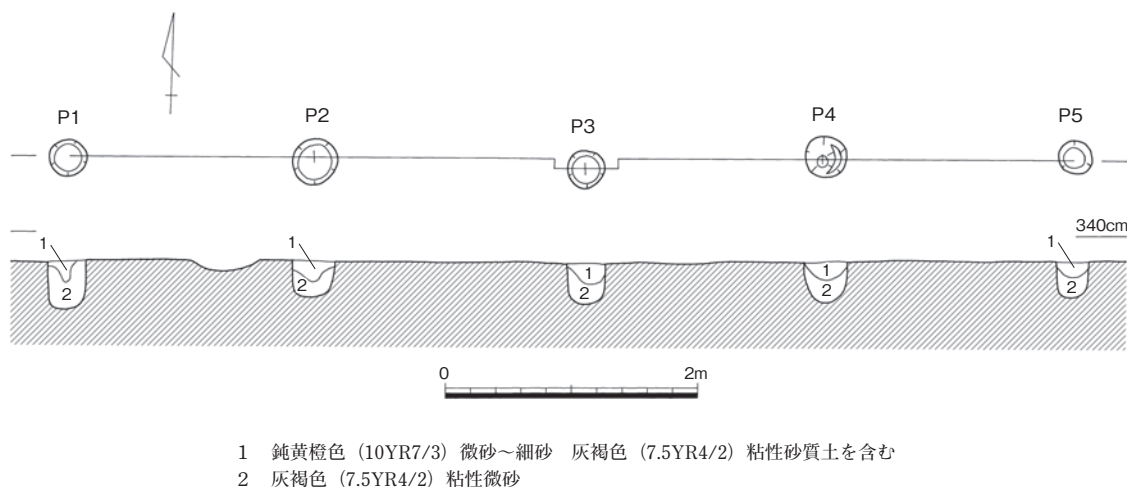
cmで、やや掘立柱建物3の桁行よりも短い。出土遺物は無いものの、時期は掘立柱建物3と同じ百・古・I であると考えられる。(團)

柱穴列2 (第431・432・448図)

205G区で検出している。5本の柱で構成される柱穴列である。掘立柱建物1・2の北側1~2m付近に、2つの建物の隙間をふさぐように位置していることから、これらの建物に付属する柵などの施設であると考えられる。この柱穴列より約2m北側からは、弥生時代まで低位部であった場所であり、井戸7・8が位置し、また溝群が元々の微高地の縁辺に延びている。このため、低位部との境を明瞭にする意図があったと考えられる。時期は、掘立柱建物1・2と同じ百・古・Iか。(團)



第447図 柱穴列1 (1/60)

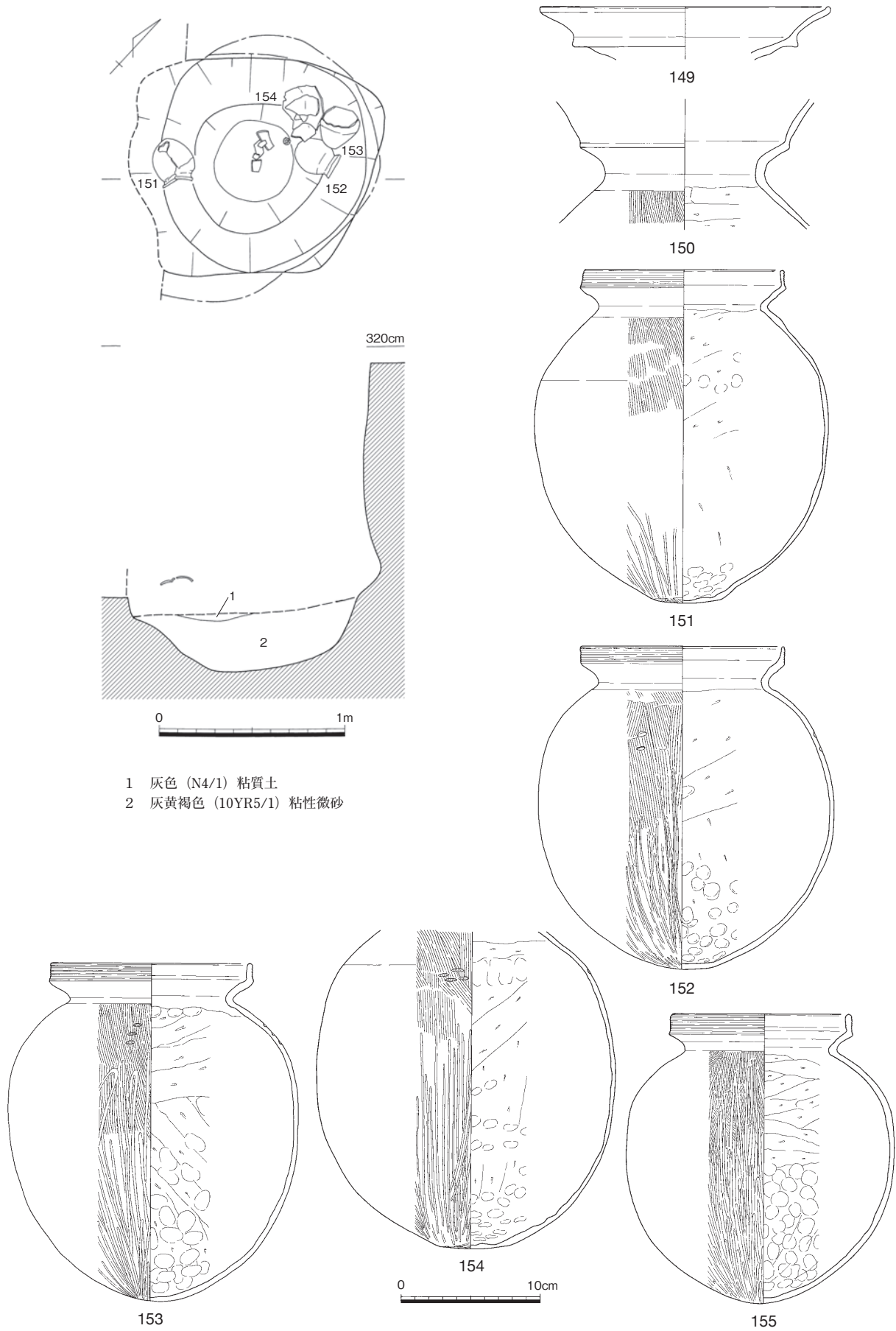


第448図 柱穴列2 (1/60)

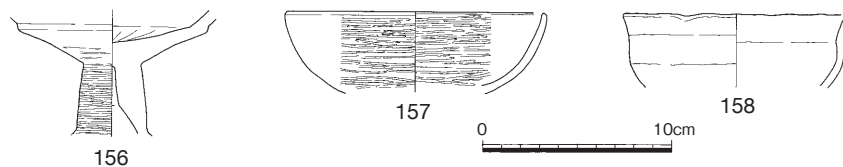
5 井戸

井戸5 (第431・432・449・450図、写真56、図版42)

205G区に位置する素掘りの円形を呈する井戸で、井戸6の北側に隣接して検出した。当初、井戸5・6を一つの長方形の大型土坑と考えて掘り下げをすすめたため、土層観察が十分でない。規模は、長軸147cm、短軸130cm、深さ165cmを測る。甕151~155は第1層の上層でまとまって検出していることから、第2層が堆積した時点で、井戸の使用を停止したと考えられる。第2層からは鉢157・158が出土している。この井戸の時期は、百・古・Iの間に作られ、廃棄されたと考えられる。(團)



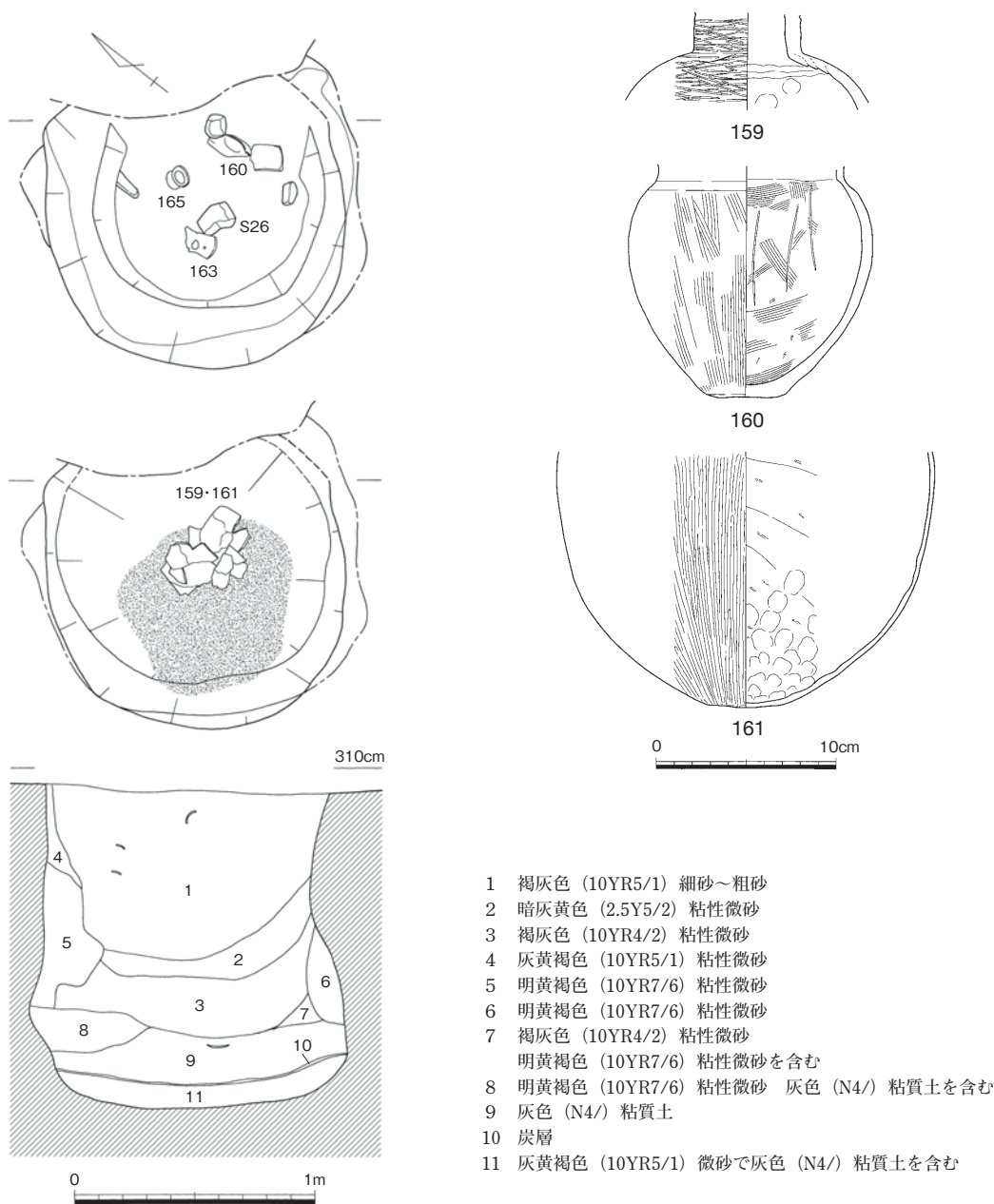
第449図 井戸5 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第450図 井戸5出土遺物② (1/4)

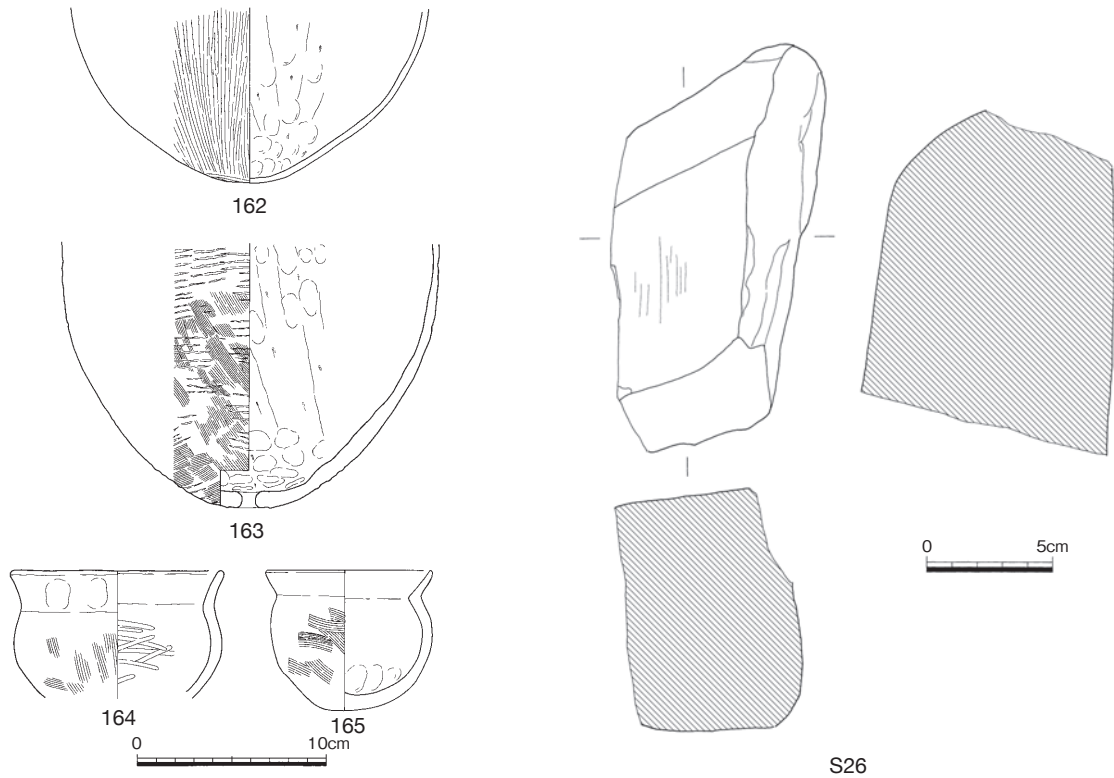
井戸6 (第431・432・451・452図)

205G区に位置する素掘りの井戸で、井戸5の南側に隣接している。井戸5との切り合いを検討したところ、井戸6のほうが古いようである。規模は長軸124cm、深さ135cmとなる。底面海拔高は168



- 1 褐灰色 (10YR5/1) 細砂～粗砂
- 2 暗灰黄色 (2.5Y5/2) 粘性微砂
- 3 褐灰色 (10YR4/2) 粘性微砂
- 4 灰黄褐色 (10YR5/1) 粘性微砂
- 5 明黄褐色 (10YR7/6) 粘性微砂
- 6 明黄褐色 (10YR7/6) 粘性微砂
- 7 褐灰色 (10YR4/2) 粘性微砂
- 8 明黄褐色 (10YR7/6) 粘性微砂 灰色 (N4/) 粘質土を含む
- 9 灰色 (N4/) 粘質土
- 10 炭層
- 11 灰黄褐色 (10YR5/1) 微砂で灰色 (N4/) 粘質土を含む

第451図 井戸6 (1/30)・出土遺物① (1/4)

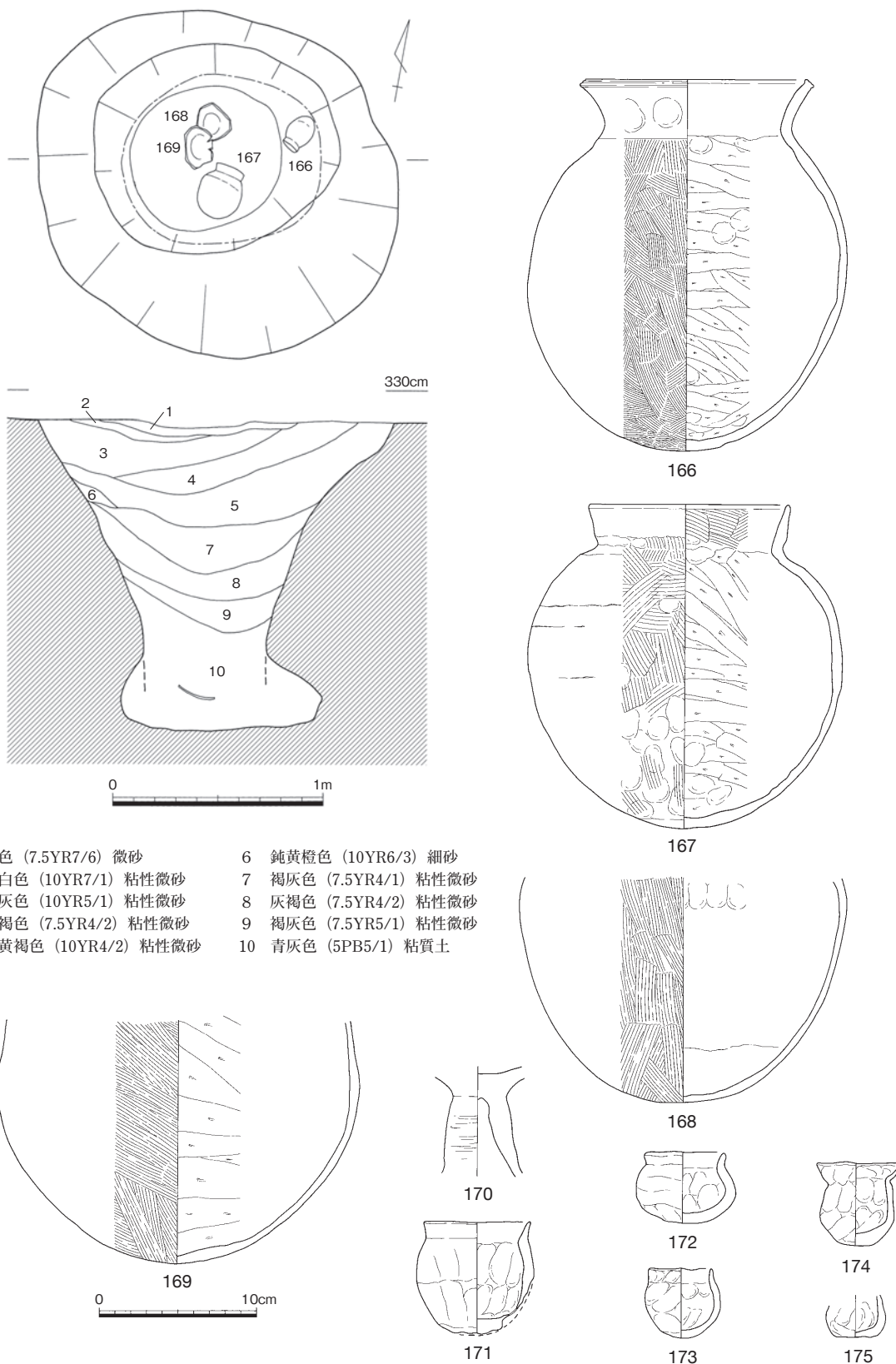


第452図 井戸6出土遺物② (1/3・1/4)

cmで、井戸5よりも約20cm高い。土層断面の第5・6層の明黄褐色粘性微砂は、基盤層と似ている土であったため、この土を残し、第1～4層のみを掘り下げたところ標高230cm付近で平面上段の図のような段差を設けていた。このため井戸枠の裏込め土の可能性も考え精査したが、結果として素掘りの井戸と判断した。この第5・6層は、脆弱な下層の基盤を補強するためのものとも考えられる。底面より約10cmのところ炭層が広がっており、このことから、炭層が広がっている時点ですでに、井戸は機能していなかったのであろう。遺物は、第1層でも上層で細片を多く出土した。また、炭層上層で壺160、甕163、小型丸底壺165を、最下層で壺159、甕161などを検出している。これらの遺物の特徴から、この井戸の時期は、百・古・Iであると考えられる。(團)

井戸7 (第431・432・453図、図版42・43)

205G区に位置する素掘りの井戸で、円形を呈している。規模は長軸184cm、短軸159cm、深さ146cmを測り、底面海拔高は184cmである。弥生時代の微高地と低位部との境に位置している。他の古墳時代の井戸も微高地の縁辺に立地しており、選地を考えるうえでよい資料となる。井戸の壁面はあまり角度を持たず、検出面は長軸180cmを越えるが、底面付近では70cm程度と狭い。最下部では、基盤層が脆弱なために抉られていることを確認し、そこから甕166がほぼ完形で出土している。このことから、湧水によって壁面が抉られた状況で井戸が使用されていたことが理解できる。甕166～169は、いずれも底面から10～15cm程度浮いた状況で検出されたため、井戸の使用期間は短いものと想定がされる。手捏ね土器171～175は、いずれも第4層から出土している。第5～9層に擬礫が混じらないことから自然堆積層であると判断でき、井戸埋没後の窪地を利用した祭祀を行っている可能性が考えられる。井戸の時期は百・古・Iだが、上層の時期はもう少し時期が下る。(團)



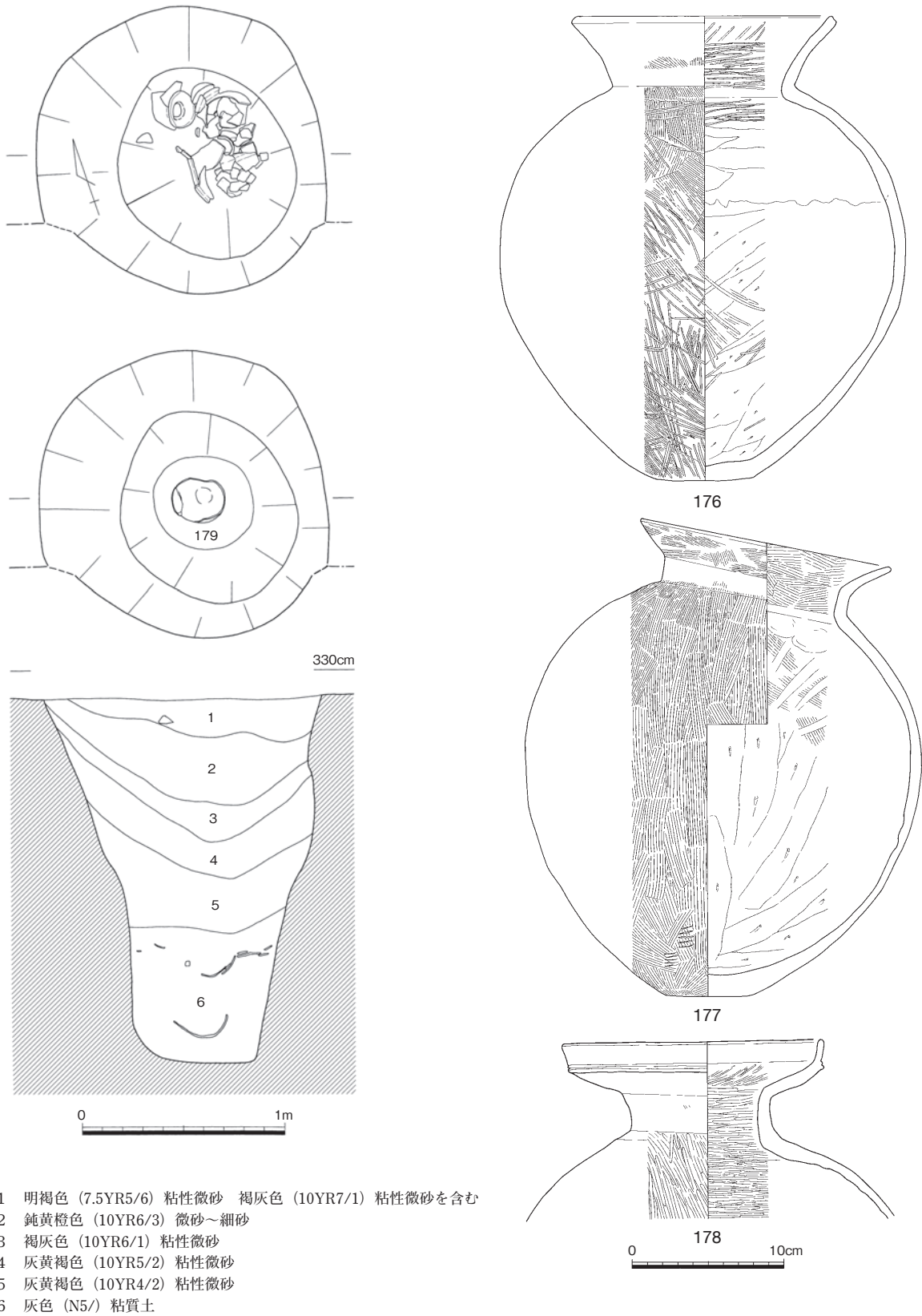
- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 1 橙色 (7.5YR7/6) 微砂 | 6 鈍黄橙色 (10YR6/3) 細砂 |
| 2 灰白色 (10YR7/1) 粘性微砂 | 7 褐灰色 (7.5YR4/1) 粘性微砂 |
| 3 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂 | 8 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘性微砂 |
| 4 灰褐色 (7.5YR4/2) 粘性微砂 | 9 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘性微砂 |
| 5 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂 | 10 青灰色 (5PB5/1) 粘質土 |

第453図 井戸7 (1/30)・出土遺物 (1/4)

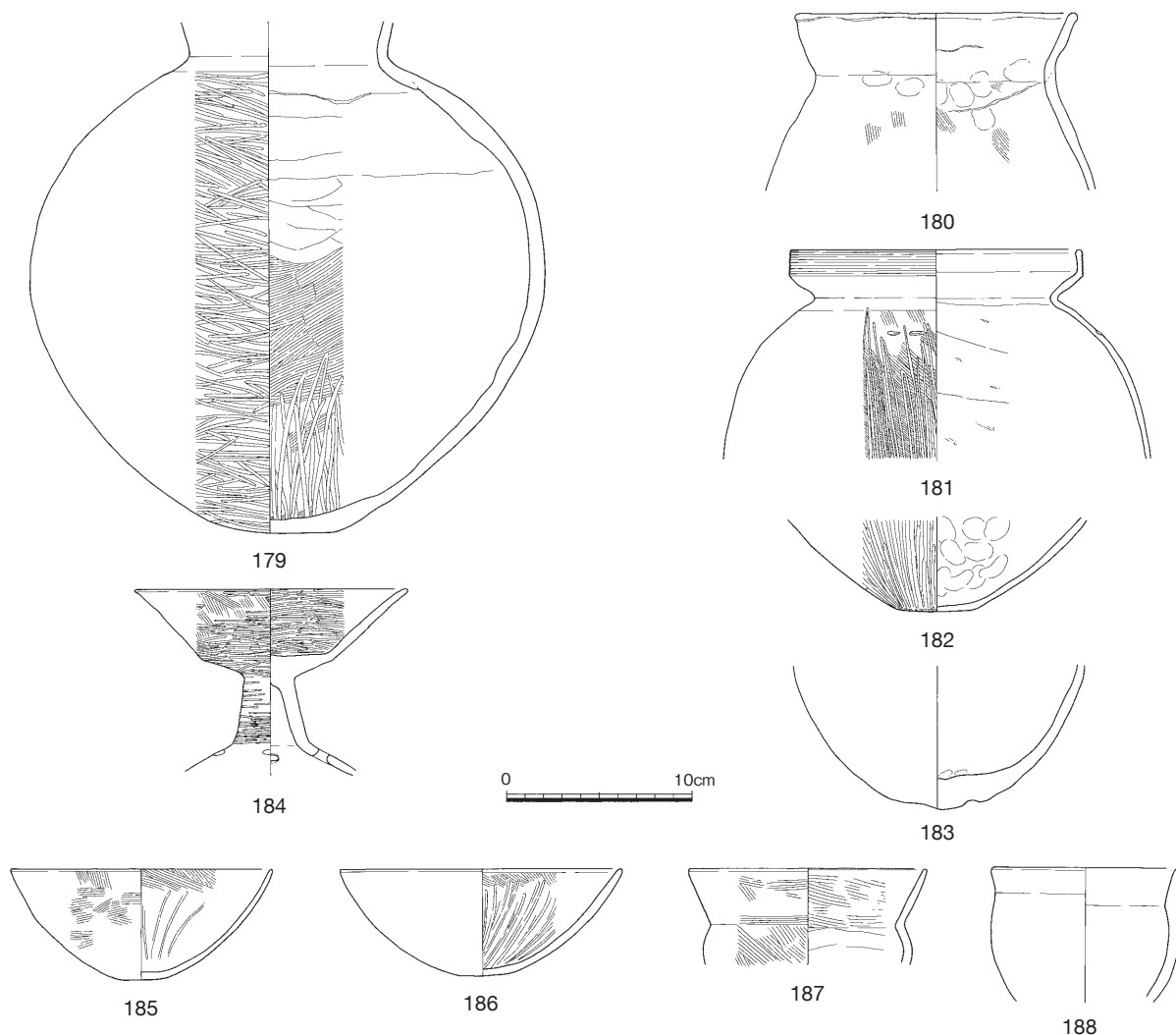
井戸8 (第431・432・454・455図、図版43)

205 G区に位置する素掘りの井戸で、円形を呈している。規模は長軸150cm、短軸138cm、深さ179cm

を測り、底面海拔高は136cmである。井戸7同様、弥生時代の微高地縁辺部で、掘立柱建物2の北側に位置している。遺物は、第5層除去後の、第6層上層でまとまって出土している。鉢185・186のよ



第454図 井戸8 (1/30)・出土遺物① (1/4)

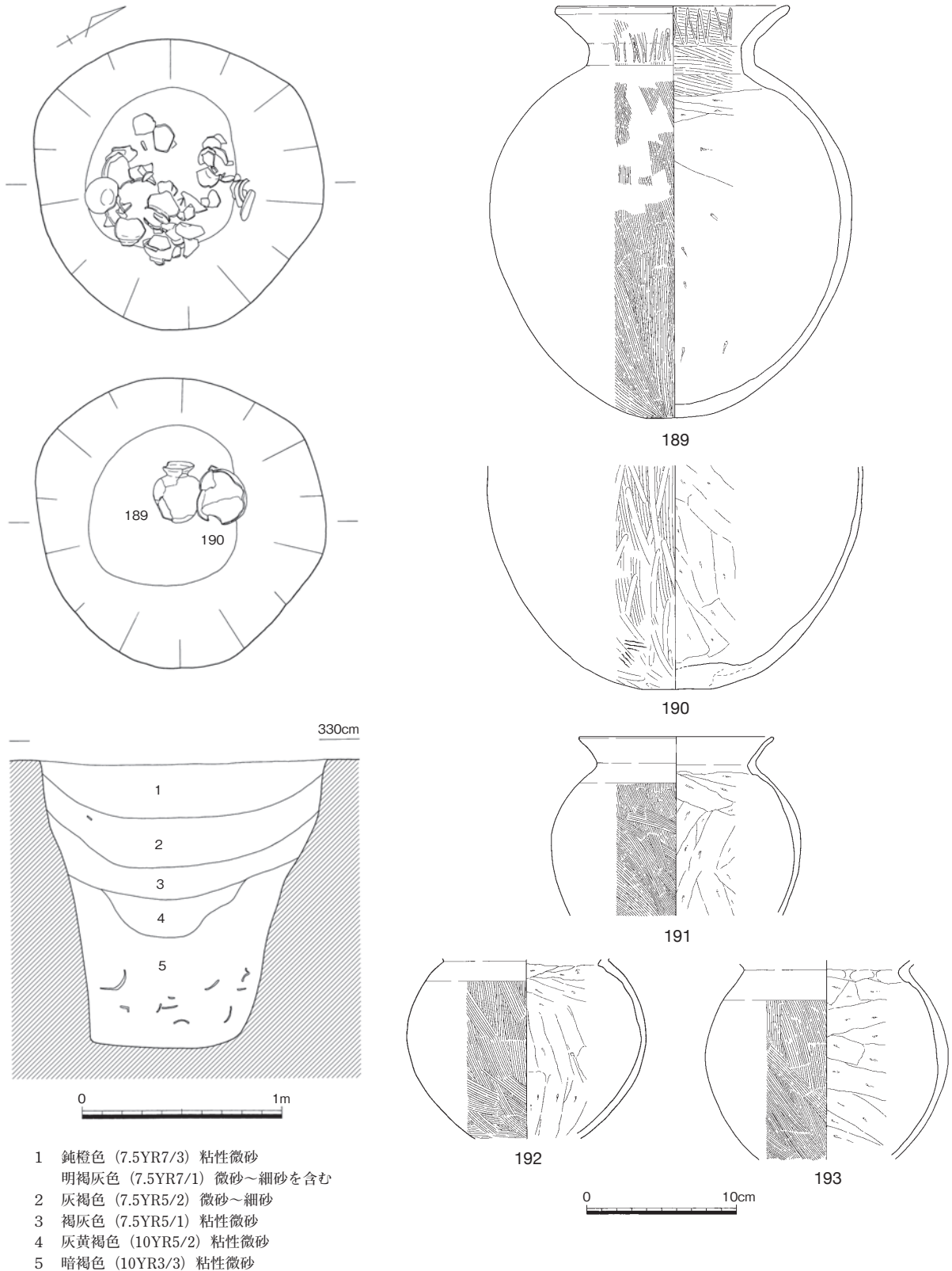


第455図 井戸8出土遺物② (1/4)

うに完形ものや、壺176・177のようにほぼ完形に復元できたものがあった。これよりおよそ30cm下層で壺179が出土している。これは井戸廃棄時に伴うものでなく、井戸の使用時に混入したものであろう。埋土は擬礫を含まないことから、人為的な埋め戻しを行っていないものと考えられる。出土遺物には、壺176～179、甕180～183、高杯184、鉢185～188などがある。これらの出土遺物の特徴から、井戸の時期は、百・古・I であると考えられる。(團)

井戸9 (第431・432・456・457図、図版36-2・43・44)

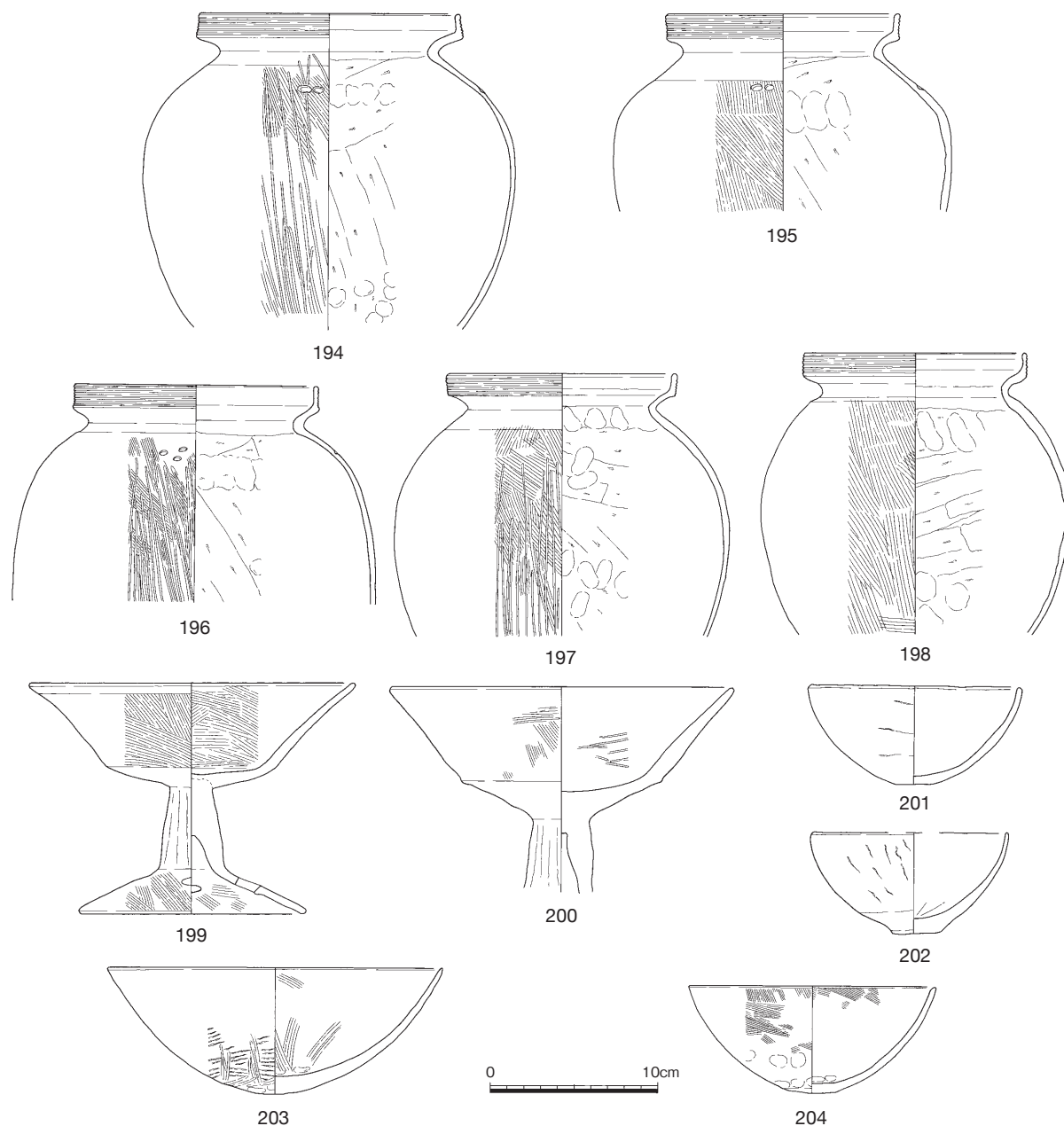
205G・205H区に位置する、平面円形の井戸である。弥生時代の微高地縁辺に位置し、井戸8と井戸10の間で検出している。規模は長軸146cm、短軸142cm、深さ144cmを測る。底面海拔高は175cmである。断面の形状は逆台形で、底面は長軸が83cmの楕円形と比較的広く、平らであった。遺物は底面に近い、第5層の下部でまとまって出土している。これらの土器を除去後直下で、ほぼ底面に接して壺189・190が出土している。このような出土状況から、井戸は掘削後間もなく、その使用を停止したのと考えられる。出土遺物には壺189・190、甕191～198、高杯199・200、鉢201～204が出土している。このうち、完形のものは壺189と高杯199の2点である。これらの出土遺物の特徴から、井戸の時期は百・古・I であると考えられる。(團)



第456図 井戸9 (1/30)・出土遺物① (1/4)

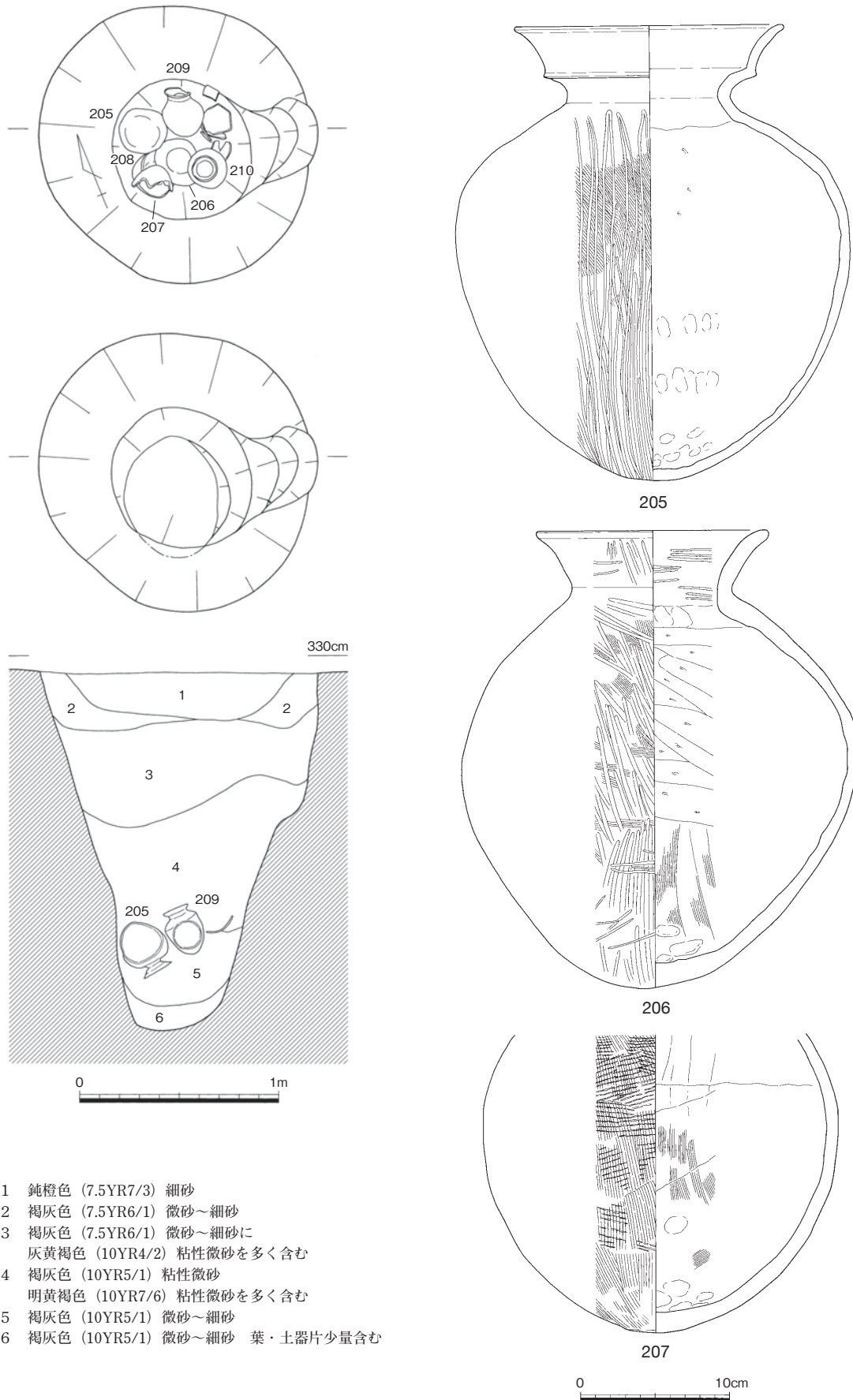
井戸10 (第431・432・458・459図、図版44)

205H区に位置する、平面が円形を呈する素掘りの井戸である。弥生時代の微高地の縁辺、井戸9の東、掘立柱建物3の北側に位置している。井戸の東壁の一部に幅40cm程度の掘りこみが見られる。土



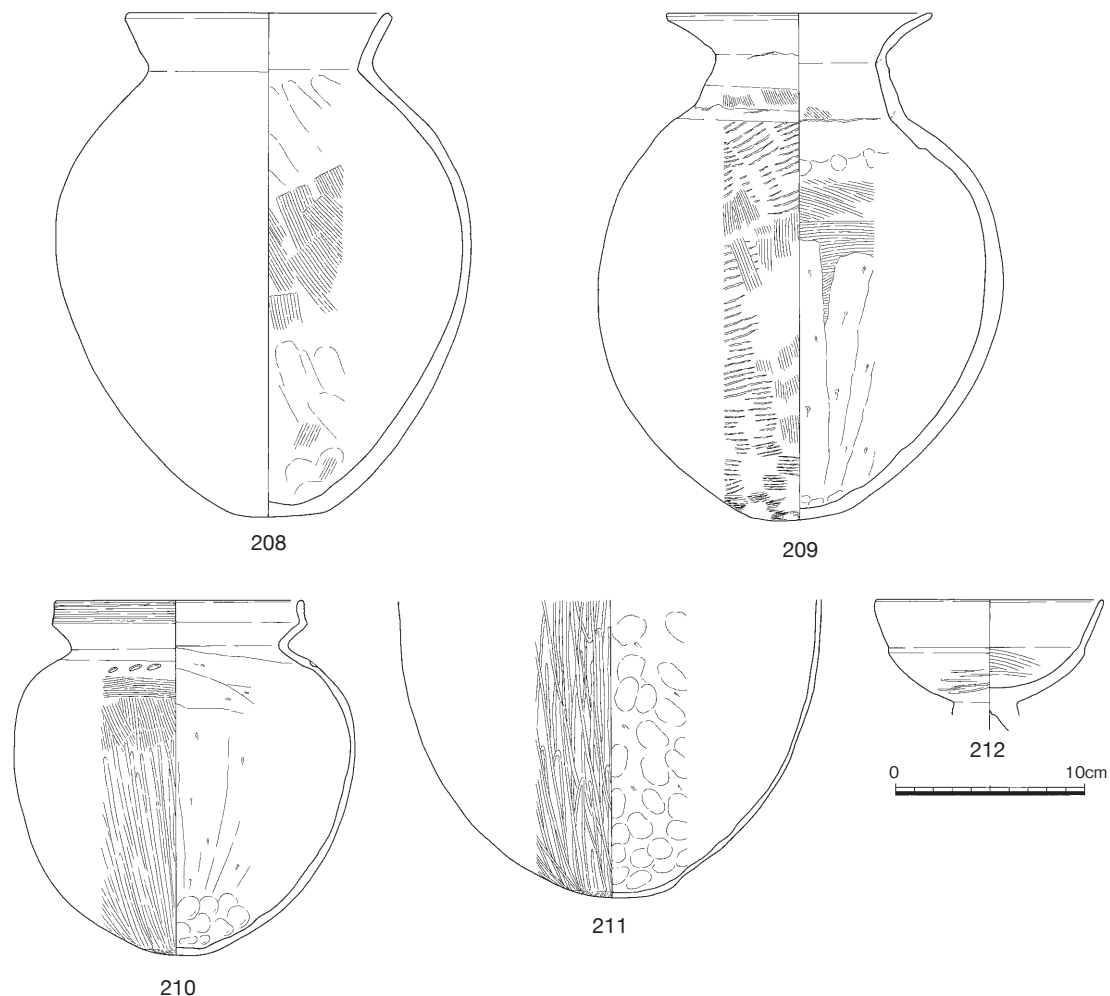
第457図 井戸9出土遺物② (1/4)

層埋土の観察から、井戸に伴うものであることが理解できるが、どのような機能を持つかは判然としない。底面は凹んでおり、遺物は底面から30~40cm程度の第4層と第5層の間で8個体がまとまって出土している。これより下層では土器片が少量と木の葉が出土するのみであり、この埋土には細砂を多く含むことから、湧水による砂の巻き上げによって堆積した様子が顕著である。また、遺物の上層である第3・4層には擬礫を多く含んでいるため、人為的な埋め戻しがあったことが理解される。今回報告する井戸のうち、井戸10のみが埋め戻していることがわかった。出土遺物には壺205~209、甕210~211、高杯212などがある。完形での出土が多く、壺207、甕211、高杯212以外のものは、完形で出土している。完形でないものも、土圧で細片になっているため復元できなかったものである。壺209は口縁部の形状から讃岐の影響を受けたものと考えられるが、胎土が在地のものと同様である。これらの土器の特徴から、井戸の時期は百・古・Iであると考えられる。(團)



- 1 鈍橙色 (7.5YR7/3) 細砂
- 2 褐灰色 (7.5YR6/1) 微砂～細砂
- 3 褐灰色 (7.5YR6/1) 微砂～細砂に
灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性微砂を多く含む
- 4 褐灰色 (10YR5/1) 粘性微砂
明黄褐色 (10YR7/6) 粘性微砂を多く含む
- 5 褐灰色 (10YR5/1) 微砂～細砂
- 6 褐灰色 (10YR5/1) 微砂～細砂 葉・土器片少量含む

第458図 井戸10 (1/30)・出土遺物① (1/4)



第459図 井戸10出土遺物② (1/4)

6 土 坑

土坑84 (第431・432・460図)

205 I 区の中央よりやや南側において検出した土坑で、北東側1 mに竪穴住居6が、南側90cmに土坑86が位置する。上面の規模は、長さ171cm、幅140cmで、隅丸方形を呈する。深さは13cmで、標高293cmを測る底面は平坦であった。断面は逆台形を呈する。時期は古墳時代前期とみる。(小林)

土坑85 (第431・432・461図)

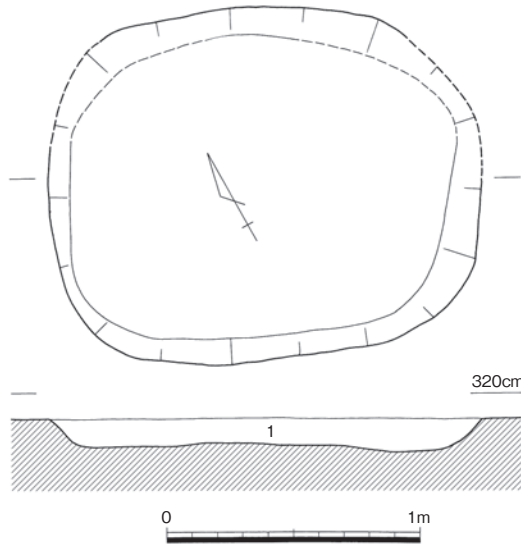
206 I 区の北側において検出した土坑で、南側2.1mに竪穴住居9が位置する。北側から東側にかけては削平されているが、本来は隅丸方形であったと思われる。検出面からの深さは22cmで、底面の標高は293cmを測る。断面は逆台形を呈していた。時期は古墳時代前期と考える。(小林)

土坑86 (第431・432・462図)

205 I 区の南側において検出した土坑で、北側90cmに土坑84が、南側に近接して溝31が位置する。上面の規模は、長さ75cm、幅68cmで、円形を呈していた。深さは53cm、底面の標高は246cmを測り、断面は箱形を呈する。覆土上層から213・214が出土し、時期は古墳時代前期前葉である。(小林)

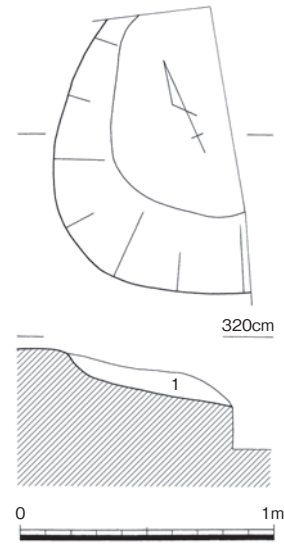
土坑87 (第431・432・463図、写真58)

206 I 区の北西側で検出した土坑で、北東側に竪穴住居8近接してこれに切られ、上面の規模は長



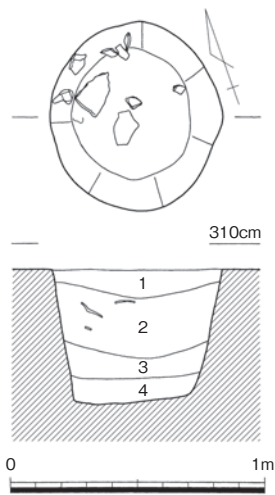
1 鈍黄褐色 (10YR4/3) 粘質微砂

第460図 土坑84 (1/30)



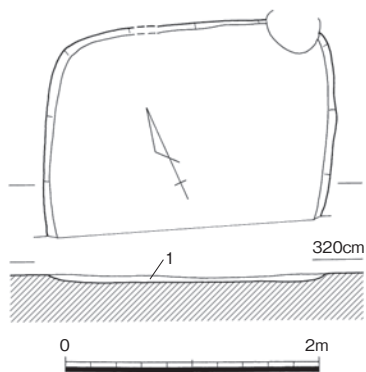
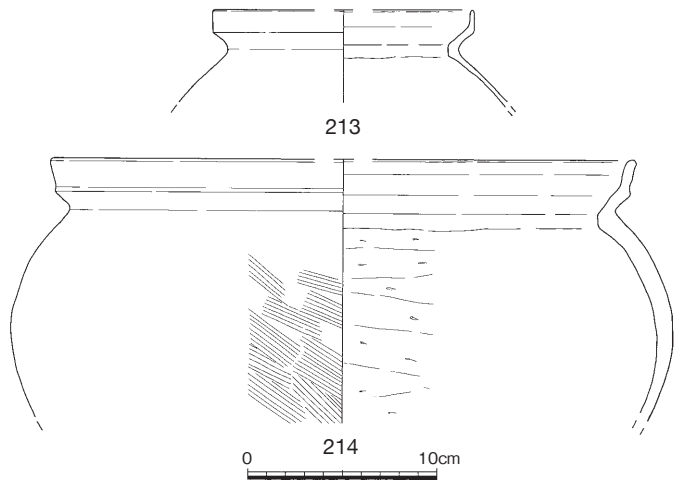
1 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質細砂

第461図 土坑85 (1/30)



- 1 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂
- 2 褐灰色 (10YR4/1) 粘質細砂
- 3 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘質微砂
- 4 褐色 (10YR4/4) 粘質土

第462図 土坑86 (1/30)・出土遺物 (1/4)



1 鈍黄褐色 (10YR5/3) 粘質微砂

第463図 土坑87 (1/60)



写真58 土坑87 (南から)

さ230cmで、隅丸方形を呈する。検出面からの深さは3cmで、標高312cmを測る底面は平坦であり、断面は逆台形を呈する。住居状の遺構であった可能性がある。時期は古墳時代前期と考える。(小林)

7 溝

溝23北西部 (第431・432・464・465図、写真59、図版45)

調査区東側において検出した溝で、203E区の南東側を北西から南東方向へ流れる。途中「百沢田2溝57」を挟み、204E区の南東側へ向かう。規模は上面幅150cmで、幅が90cm、深さは25cmを測る。底面の標高は272cmで、断面は逆台形を呈する。底面に上面70~80cm前後の凹凸が列をなして並ぶ。

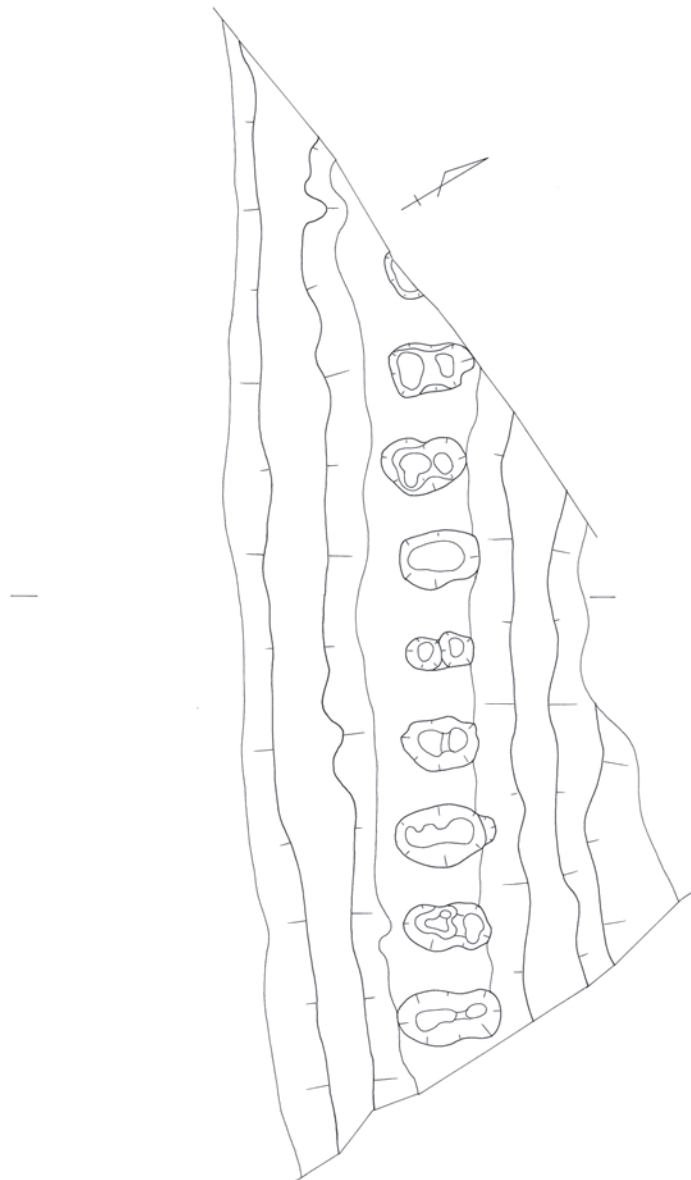
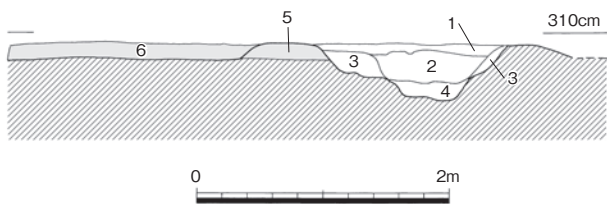
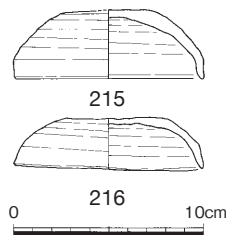


写真59 溝23北西部 (南東から)



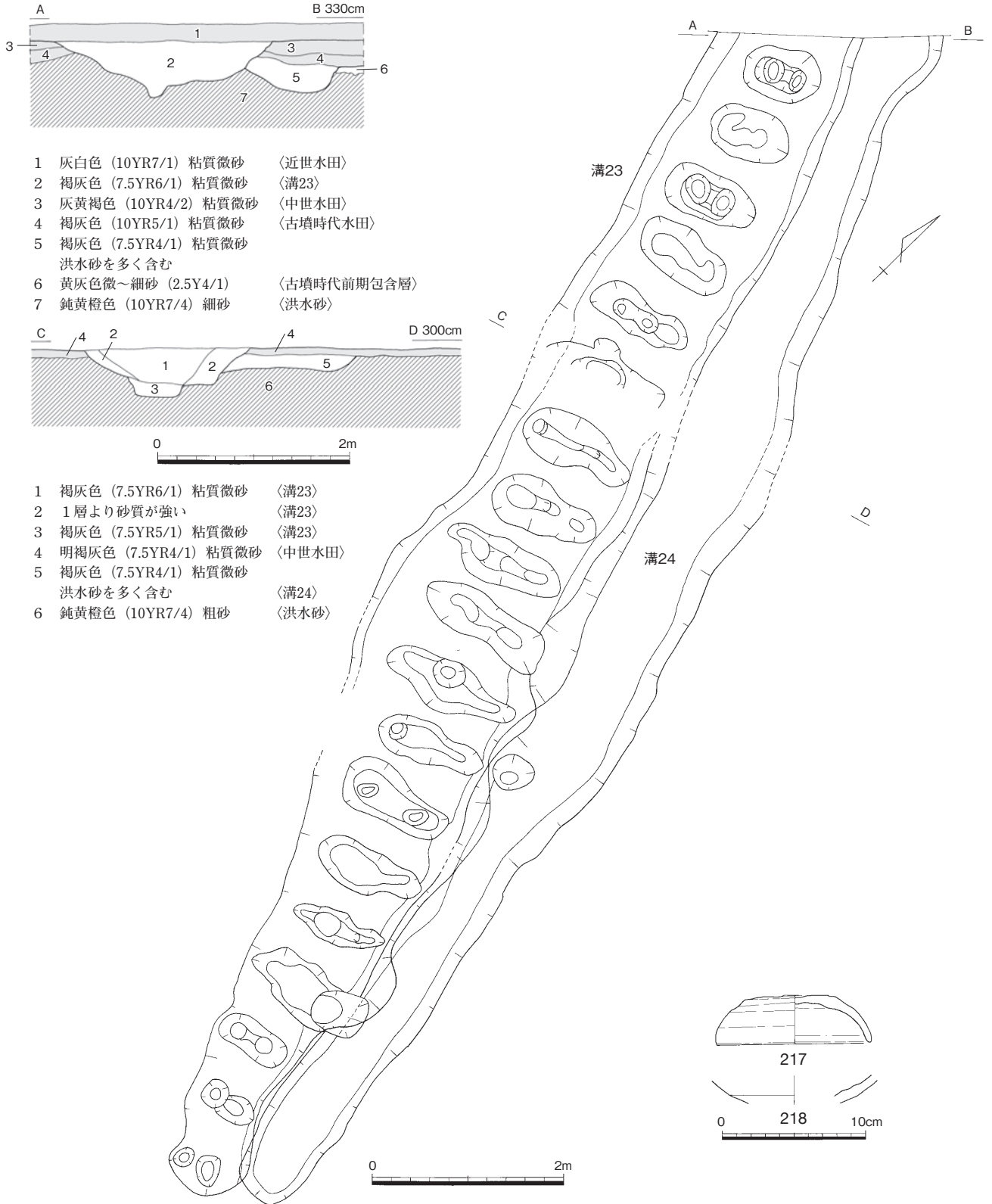
- | | | |
|---|---------------------|-----------|
| 1 | 灰白色 (10YR7/1) 粘性微砂 | 〈溝23〉 |
| 2 | 灰色 (N5/) 粘性微砂 | 〈溝23〉 |
| 3 | 灰黄褐色 (10YR5/2) 粘質微砂 | 〈溝23〉 |
| 4 | 灰色 (N5/) 粘性微砂 | 〈溝23〉 |
| 5 | 灰白色 (N7/) 粘性微砂 | 〈水田畦畔?〉 |
| 6 | 灰色 (N6/) 粘性微砂 | 〈古墳後期水田層〉 |

第464図 溝23北西部 (1/60)・周辺出土遺物 (1/4)

215・216の須恵器が周辺から出土し、時期は古墳時代後期で7世紀中葉である。 (小林)

溝23南東部・溝24 (第431・432・465図、図版37-1)

溝23南東部では、壁面の土層観察から古代以降の溝であることが理解できるが、出土遺物がいずれも細片のため、詳細な時期については不明である。底面の凹みが完全に埋まった後に上層が堆積して



第465図 溝23南東部・溝24 (1/60)・出土遺物 (1/4)

いる状況は、北西部と同様である。溝24は同じく断面から、溝23に切られていることが理解でき、出土した須恵器217・218から、7世紀中頃の時期の遺構であることがわかった。(團)

溝25～28 (第431・432・466図)

205G・205H区に位置する溝群で、弥生時代の微高地の縁辺部に沿って掘削されている溝である。これらの溝から土器は多く出土しているものの、ほとんどが細片であり、図化出来たものは少ない。出土遺物から、百・古・Iのなかで掘られた溝であると考えられる。(團)

溝29 (第431・432・467図)

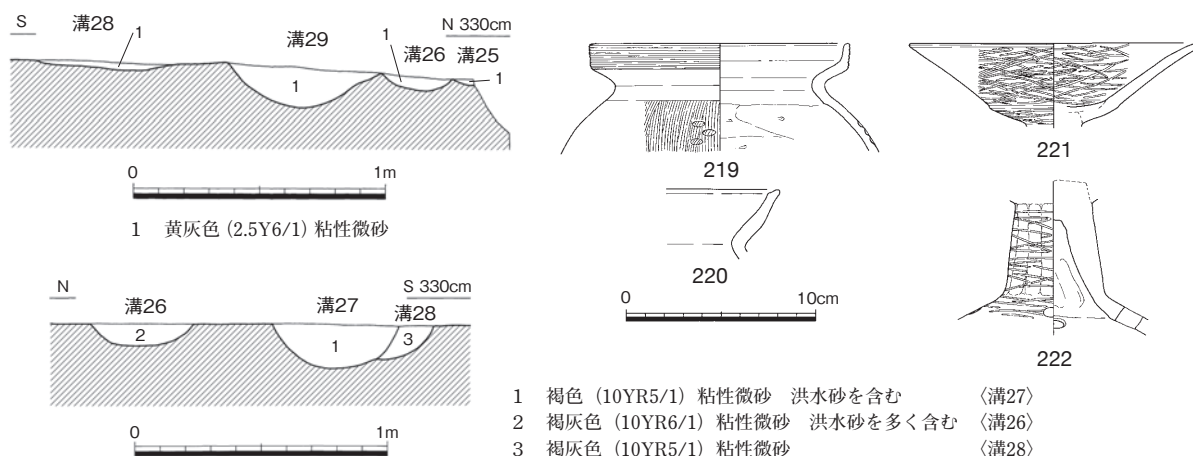
205G・205H区に位置する溝で、掘立柱建物3の柱穴との切り合いから、掘立柱建物3より新しい溝であることがわかった。弥生時代の微高地の縁辺に平行して延びる溝である。出土遺物は、細片のみが出土しているため、詳細な時期は不明であるが、埋土などからも古墳時代の溝であろう。(團)

溝30 (第431・432・468図)

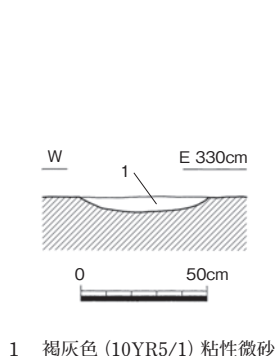
205H区に位置する溝で、竪穴住居3を切っていることが壁面の土層から確認できている。平面では深さ20cm程度であるが、断面から元々60cmほどの深い溝であったことがわかる。出土遺物はなく、詳細な時期はわからないが、古墳時代の溝であろう。(團)

溝31 (第431・432・469図)

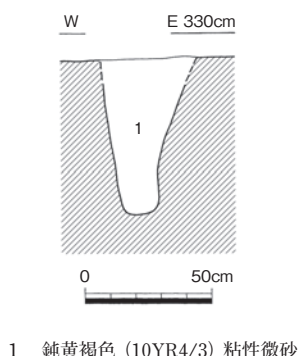
調査区中央付近より東側で検出した溝である。溝の中央付近である205I区南西側が高く、205H区



第466図 溝25～28 (1/30)・出土遺物 (1/4)



第467図 溝29 (1/30)



第468図 溝30 (1/30)

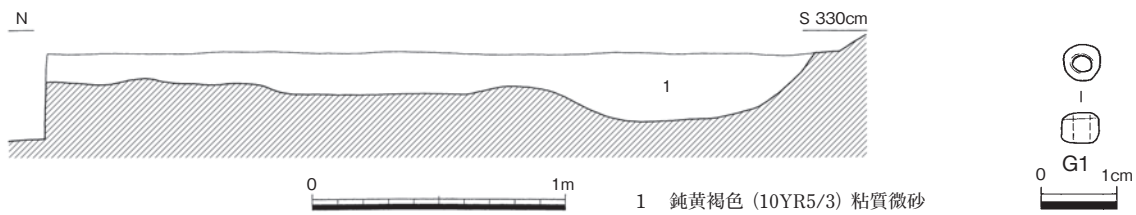
の南東側へ向かう流れと、206 I 区の北東側へ向かう流れがあった。規模は上面幅270cm、底面幅55cm、深さは28cmである。底面の標高は294cmで、底面は皿形である。古墳時代前期とみる。(小林)

溝32 (第431・432・470図)

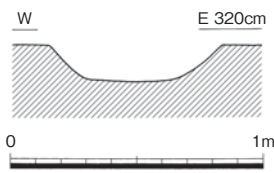
調査区中央付近よりやや東側において検出した溝である。205 I 区南東側の南から北へ流れ、百沢田5溝12に対応する。規模は上面幅68cm、底面幅36cmで、深さ15cmを測る。底面の標高は299cmで、断面は皿形を呈する。時期は古墳時代前期と推定した。(小林)

溝33 (第431・432・471図)

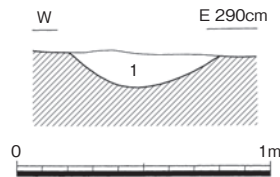
調査区東側において検出した溝で、206 K 区の南東側を北西から南東方向へ流れる。調査区北側で百沢田5溝14と対応する。規模は上面幅48cmで、深さは14cmを測る。底面の標高は267cmで、断面は碗形を呈する。微高地の際に併行して流れる溝で、時期は古墳時代前期と推定する。(小林)



第469図 溝31 (1/30)・出土遺物 (1/1)



第470図 溝32 (1/30)



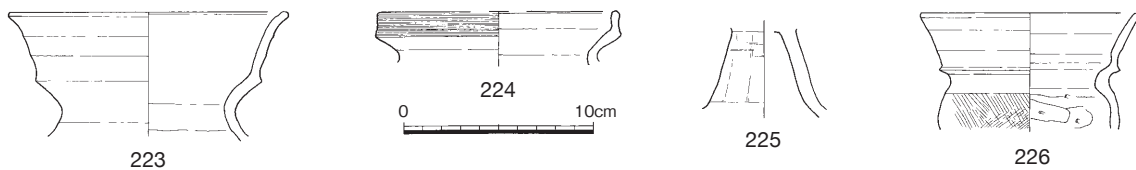
1 灰黄褐色 (10YR4/2) シルト質細砂

第471図 溝33 (1/30)

8 その他の遺構

下がり1 (第431・432・472図)

溝25～28の北側に位置する下がりで、本来は溝となる可能性もあるが、調査区端で北側の立ち上がりが不明瞭であったこと、微高地の縁辺部であることなどから、下がりとして報告する。遺構の検出時には土器の細片が多く出土しているが、図化できたのは4点である。これらの出土遺物から、周辺の溝と同様に百・古・Iの時期であることがわかる。(團)



第472図 下がり1 出土遺物 (1/4)

第7節 中世以降の遺構・遺物

1 概要

中世以降の遺構としては、土坑1基と溝1条を掲載した。掲載遺構以外にも溝、水田畦畔を確認しているが、南北や東西といった方位にのるような溝群の大半は、発掘調査開始以前まで耕作がなされてきた水田に伴う暗渠のと考えられる。

土坑は近世とみられるが遺物は無い。南接する横田調査区、高縄手A調査区では（「百沢田遺跡3」収載）、13世紀後半頃の土坑が確認できるが、本調査区内ではこれ以外に土坑や柱穴もほとんどみられない。溝は南北方向に流走し、字横田（原尾島分）と字高縄手（沢田分）の字境をなす条里溝と考えられる。この溝は、現代まで踏襲され用水路としての機能を果たしており、百間川の河川改修工事により埋め戻されたとみられる。南は「百沢田遺跡2」横田調査区中世遺構全体図の溝（遺構としての掲載無し）に続いている。この溝の東側では、ちょうど1町で南北方向の溝が存在（「百沢田3溝55」）し、西側では百原尾島2溝238がちょうど1町となる。本調査区内の溝からは中世をさかのぼる遺物は出土していないが、隣接する原尾島遺跡では、中世村落は11世紀後半から始まり、その成立当初より条里地割りの規制を受けていた。なお、寛文9年（1669年）より貞享4年（1668年）にかけて、掘削された百間川に関連する遺構は確認できていない。（弘田）



写真60 溝34（北から）



写真61 近世遺構面（北東から）

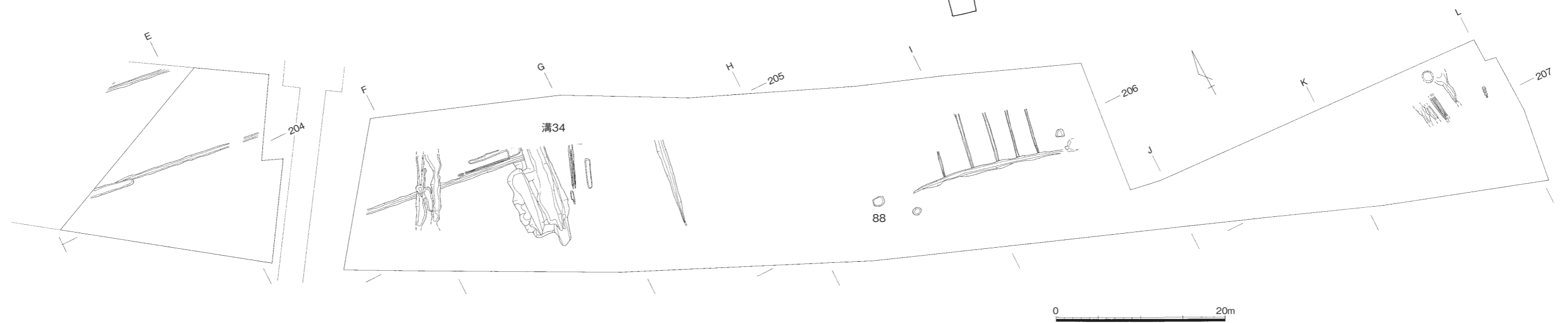
2 土坑

土坑88（第473～475図、写真62）

205H区の南側において検出した土坑である。検出面での規模は、長さが136cm、幅は109cmで、平面形は隅丸方形を呈する。検出面からの深さは20cmで、標高288cmを測る底面は平坦であった。断面は、椀形を呈する。



第473図 中世以降遺構全体図 (1/1,500)



第474図 中世以降遺構配置図 (1/500)

遺物の出土はみられなかったものの、埋土の状況からみて近世と考えている。近世段階の水田に関わる土坑であろう。(小林)

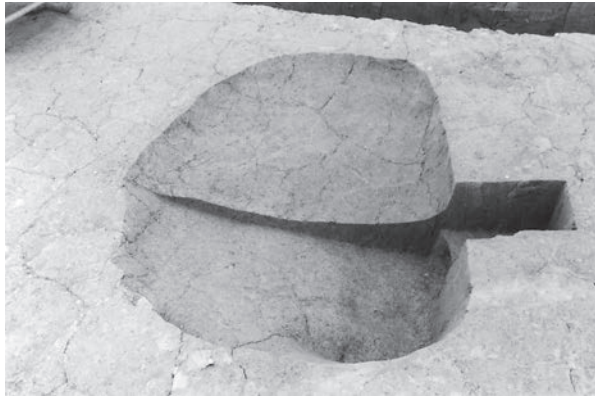
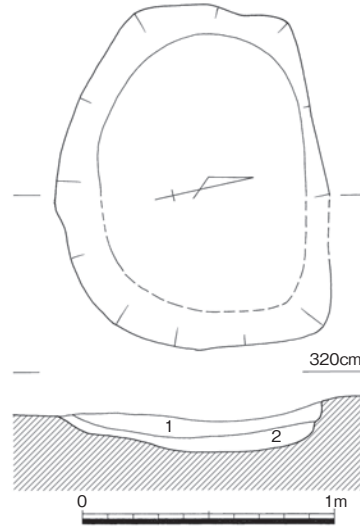


写真62 土坑88 (東から)



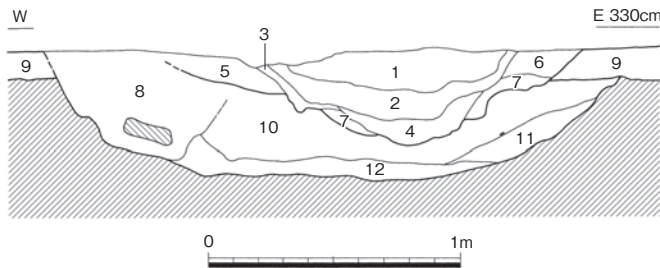
- 1 灰黄褐色 (10YR5/2) 砂質土
- 2 褐色 (10YR4/4) 粘質微砂

第475図 土坑88 (1/30)

3 溝

溝34 (第473・474・476図、写真60、図版37-2・37-3)

204F区に位置する溝で、条里境に位置する南北方向の溝である。百原尾島6溝67から1つ東よりの条里境となる。土層断面の第10~12層が元々掘削された溝であり、断面形は逆台形で、幅2m近い大規模な溝となる。調査区の南西側は削平が大きく及んでいたために、調査区端まで溝が延びてはいるが、百沢田2横田調査区で報告されている溝に続くと考えられる。この層からの出土遺物には、亀山焼の体部片227、備前焼の小皿228があり、中世まで条里溝がさかのぼる可能性があることは、百原尾島6溝67と同じ状況であるといえる。第9層は近世の水田層であり、この層を切るようにして第8層の溝と、第1~7層の溝があり、第10~12層の溝の埋没後に、第8層の溝が、その後第1~7層の溝が場所を踏襲して掘削されている状況が看守された。第1層には造成土が入っており、昭和52年に河川敷が公園化される直前まで使用されていたことがわかる。第1~7層の溝は、東側の壁面に杭が打たれ、簡易な護岸がなされていたものと考えられる。(團)



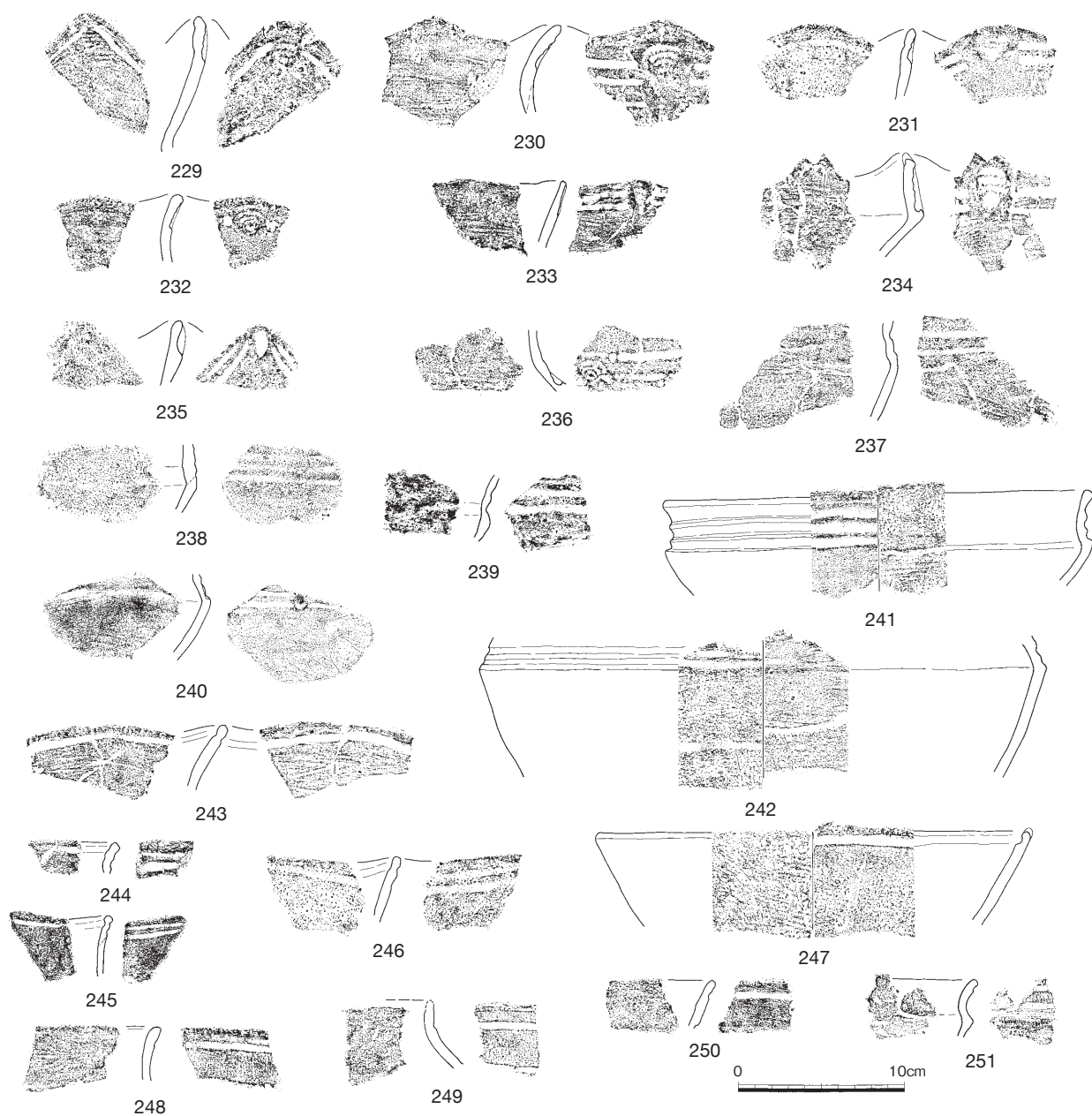
- | | |
|--|---------------------------------|
| 1 鈍褐色 (7.5YR5/3) 黄橙色 (7.5YR8/8) 粘質微砂 (造成土) | 7 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質微砂 |
| 2 褐灰色 (7.5YR5/1) 粘質微砂 明黄褐色 (10YR6/6) 粗砂が入る | 8 黄灰色 (2.5Y6/1) 粘質微砂で角礫を底面に多く含む |
| 3 黄灰色 (2.5Y5/1) 粘質微砂 | 9 灰黄褐色 (10YR6/2) 粘質微砂 (近世水田層) |
| 4 浅黄色 (2.5Y7/3) 粗砂 | 10 褐灰色 (10YR6/1) 粘質微砂 |
| 5 鈍橙色 (7.5YR7/3) 粘質微砂 | 11 灰色 (N6/) 粘質微砂 |
| 6 褐色 (7.5YR4/6) 粘質微砂 | 12 灰色 (N5/) 粘質微砂 |

第476図 溝34 (1/30)・出土遺物 (1/4)

第8節 包含層の遺物

縄文時代の土器 (第479~480図、図版45・47)

深鉢形土器229は、波状口縁の内外面に凹線を施し、外面頂部には巻き貝による扇状圧痕を施す。243は、口端部直下の内外面に巻き貝による凹線を施し、外面にも巻き貝による条痕がみられる。244~246は、口縁部外面に2条、内面に1条、巻き貝による凹線を施す。また、内面は2枚貝による条痕のちナデである。230~235では、231が口縁部内面に巻き貝による凹線を施す。233は、巻き貝により条痕をナデ消す。232や236では、扇状圧痕の両側に巻き貝による刺突がある。235では、外面頂



第477図 包含層出土遺物① (1/4)



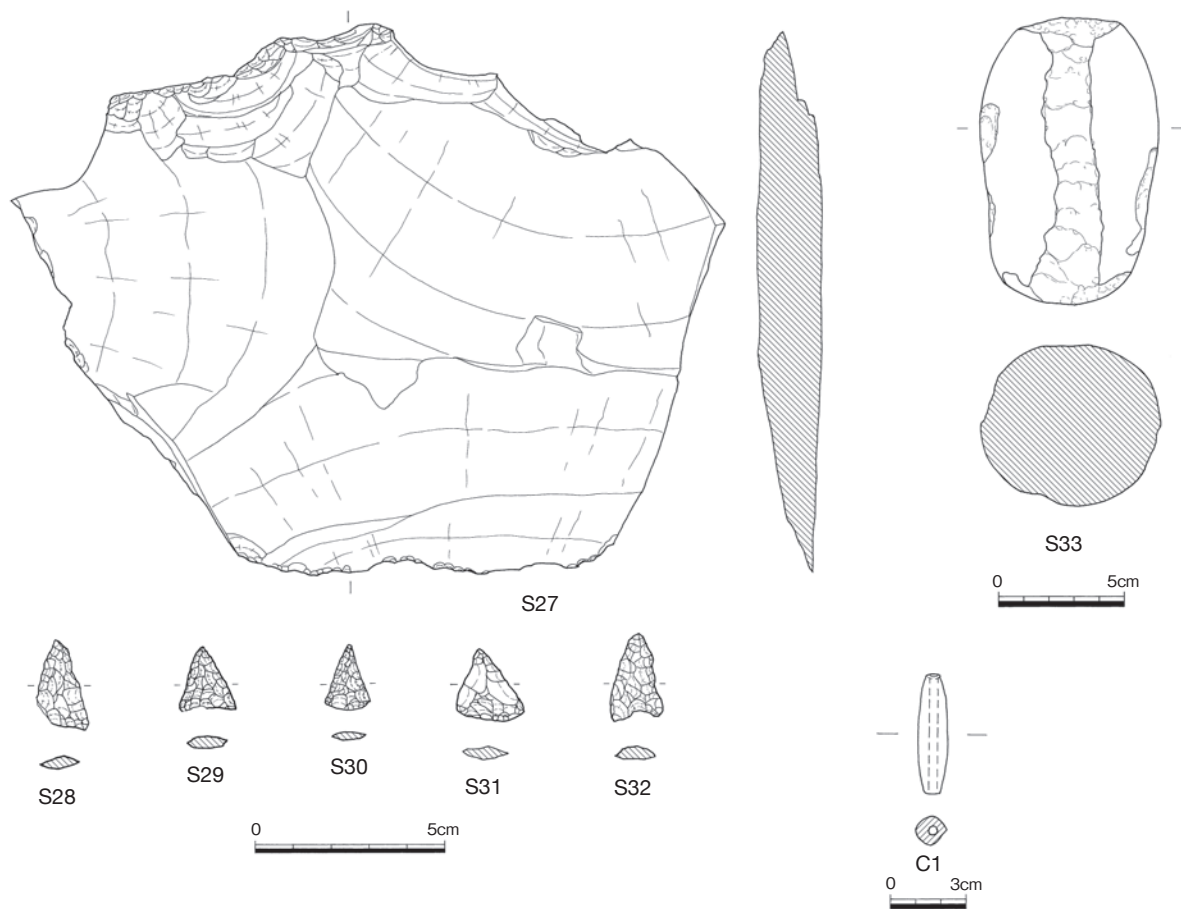
第478図 包含層出土遺物② (1/4)

部に巻き貝の押圧痕がみられる。236～242は、頸部に2～3条の凹線を施す。236や240には、扇状圧痕がみられ、240では外面を磨く。浅鉢247は、口縁部内面に巻き貝による幅広で深い凹線、外面には巻き貝による条痕、内面はナデである。248・249では、口縁部内面に巻き貝による凹線を施し、内外面はナデる。250～252は、口縁部外面に巻き貝による凹線を施し、内外面はナデる。250・251では、凹線部を含め丁寧にナデを施す。口縁部外面直下と頸部に巻貝による凹線がみられる。これらと244～246、248～253の凹線は、前述した229～242・247と比べると浅く不明瞭である。252～258は、粗製の深鉢である。252では、内外面に巻き貝による条痕が残る。257では、内外面ともナデる。259は、外面は条痕をナデ消し、内面はケズリのちナデる。260は、縦位の爪形文が、261には押し引き文がみられる。262～273は、突帯文土器である。262～265では、口縁端部に面をもち、そこに刻み目を施す。また、突帯部の刻み目は浅くて小さい。265～273は、口縁端部に刻み目はなく、口縁端部がいずれも丸く終わる。突帯部に施された刻み目は前者より大きくて深い。内外面の調整は、いずれもナデである。270～273では、突帯を口縁端部直下から垂下させる。275～278は、上げ底状をなす。

石器・土製品 (第479図、図版47)

S27は、サヌカイトの素材剥片と考えられ、鋭利な自然の剥離面を利用した痕跡が認められる。S28～S31はサヌカイト製平基式、S32は凹基式の石鏃である。S33は砂岩製の石錘で、重さは732gである。C1は、中世の土錘である。

(弘田)



第479図 包含層出土遺物③ (1/2・1/3)

第5章 自然科学分野における鑑定・分析

第1節 百間川原尾島遺跡の鑑定・分析

1 百間川原尾島遺跡の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

百間川原尾島遺跡は百間川の沖積地に立地する。既往の発掘調査では、氾濫原低地において弥生時代後期の水田跡、沖積リッジ（微高地）上で弥生時代後期～古墳時代の集落跡が検出されている。また、弥生時代後期の古植生や稲作などの調査区の土地利用に関する情報を得ることを目的とする自然科学分析調査も実施されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2004）。

今回の調査区では、弥生時代後期の水田跡が確認されており、検出面において稲株状痕跡や足跡状痕跡が確認されている。今回の分析調査では、弥生時代後期とその前後の時期の植生に関する情報を得ることを目的として花粉分析を実施する。

試料

分析試料を、表4に示す。

花粉分析は、試料1～試料3の3点について実施する。試料1は弥生時代末に堆積した洪水砂層を覆う厚さ10cm程の褐灰色砂質土層より採取された。この土層の下面には植生に由来する凹凸が見られ、6世紀末～7世紀前半の地表と推定されている。

試料2は、弥生時代後期の水田層直下に広がる厚さ5cm程の灰色粘質土層から採取された。弥生時代前期～中期の河道が埋没した後に形成された土壌である。

試料3は、縄文時代晩期の基盤と推定される厚さ10cm余りの褐灰色粘質土層から採取された。この土層の下面には植生に由来する凹凸が見られる。

分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1972）、中村（1980）などを参考にする。

表4 分析試料

試料	試料	備考
試料1	褐灰色砂質土	6世紀末～7世紀前半の地表,下面に凹凸(植生由来?)
試料2	灰色粘質土	弥生時代前期～中期の河道埋積物に形成された土壌
試料3	褐灰色粘質土	縄文時代晩期の基盤,下面に凹凸(植生由来?)

結果は同定・計数結果の一覧表および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するにとどめておく。

結果

結果を表5、第480図に示す。

花粉化石の産出状況は概して悪く、試料1と試料3は定量解析を行えるだけの個体数が得られない。試料2は花粉化石が産出するものの、保存状態の悪いものが多く含まれる。

試料1では、木本花粉ではツガ属、マツ属、クマシデ属ーアサダ属、カバノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ガマズミ属が、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科が、それぞれ1~14個体程度の検出である。

試料2での花粉群集組成は、草本花粉の割合が高い。草本花粉ではイネ科が優占し、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属、タンポポ亜科などを伴うまた、オモダカ属、ミズアオイ属などの水生植物に由来する花粉も、わずかに認められる。木本花粉ではマツ属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属、クマシデ属ーアサダ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、シイ属などを伴う。

試料3では花粉化石がほとんど検出されず、木本花粉ではマツ属、コナラ亜属、ニレ属ーケヤキ属が、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節、キク亜科が、それぞれ1~2個体程度の産出である。

考察

縄文時代晩期の基盤と推定される褐灰色粘質土（試料3）からは花粉化石がほとんど検出されず、古環境復元のための定量解析を行うことができなかった。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解や消失するとされている（中村,1967; 徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など）。わずかに検出される花粉化石の保存状態が悪いことを考慮すると、堆積時に取り込まれた花粉・シダ類胞子が、その後の経年変化により分解や消失したと考えられる。わずかに検出される種類から、当時の周辺にマツ属、コナラ属コナラ亜属、ニレ属ーケヤキ属などの木本類、イネ科、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節、キク亜科などの草本類の生育がうかがえる。

表5 花粉分析結果

種類	試料番号		
	試料1	試料2	試料3
木本花粉			
マキ属	-	1	-
モミ属	-	18	-
ツガ属	1	26	-
マツ属複雑管束亜属	2	5	-
マツ属 (不明)	1	83	1
コウヤマキ属	-	8	-
スギ属	-	19	-
イチイ科ーイヌガヤ科ーヒノキ科	-	1	-
クルミ属	-	1	-
クマシデ属ーアサダ属	1	3	-
カバノキ属	1	1	-
ブナ属	-	1	-
コナラ属コナラ亜属	3	26	1
コナラ属アカガシ亜属	2	18	-
シイ属	-	3	-
ニレ属ーケヤキ属	-	2	1
クサギ属	-	1	-
ガマズミ属	1	-	-
草本花粉			
オモダカ属	-	1	-
イネ科	11	439	2
カヤツリグサ科	14	35	2
ミズアオイ属	-	2	-
クワ科	-	1	-
サナエタデ節ーウナギツカミ節	-	16	1
アカザ科	1	-	-
ナデシコ科	-	2	-
アブラナ科	1	-	-
マメ科	-	1	-
ヨモギ属	4	9	-
キク亜科	2	1	1
タンポポ亜科	1	4	-
不明花粉	3	25	2
シダ類胞子			
ヒカゲノカズラ属	1	1	-
イノモトソウ属	-	6	1
他のシダ類胞子	386	267	10
合計			
木本花粉	12	217	3
草本花粉	34	511	6
不明花粉	3	25	2
シダ類胞子	387	274	11
総計 (不明を除く)	433	1002	20

弥生時代前期～中期の河道が埋没した後に形成されたと想定される灰色粘質土（試料2）は、直上を弥生時代後期の水田層が覆っていることから、弥生時代中期～後期頃の土壌と想定される。この土壌からは花粉化石が産出するものの、保存状態の悪いものが多く含まれていた。前述した花粉やシダ類胞子の特性を考慮すれば、分解の影響を受けたために、当時の周辺植生を正確に

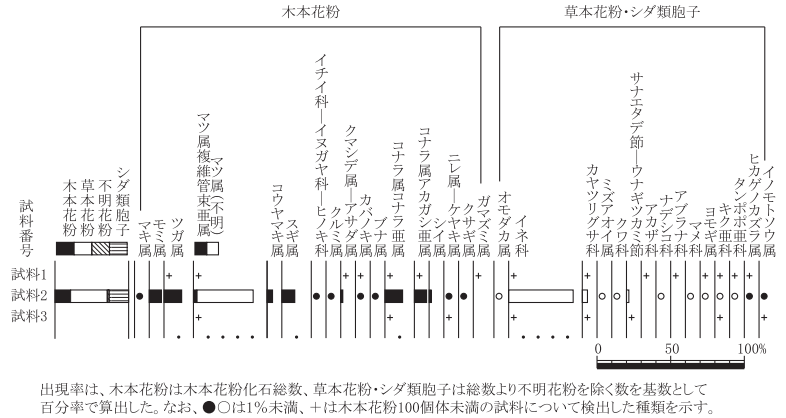
反映していない可能性がある。このことを考慮した上で、古植生を検討する。経年変化による分解の影響を考慮しても、草本類の割合が高い。草本類ではイネ科が優先し、カヤツリグサ科、サナエタデ節ーウナギツカミ節、ヨモギ属、タンポポ亜科などを伴う。これらは、いずれも開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であり、クワ科、ナデシコ科、マメ科、キク亜科なども同様である。したがって、これらが調査地点周辺の草地環境を形成していたと推測される。植物珪酸体で検出された分類群からは、イネ科にタケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科が含まれていたことがうかがえる。またオモダカ属やミズアオイ属、ヨシ属などが生育する水湿地の存在も考えられる。

木本類についてみると、マツ属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属などの針葉樹、クマシデ属ーアサダ属、コナラ亜属などの落葉広葉樹、コナラ属アカガシ亜属、シイ属などの常緑広葉樹が認められる。このうち、アカガシ亜属はシイ属などと共に暖温帯性常緑広葉樹林の主要構成要素である。温帯性針葉樹のモミ属、ツガ属、コウヤマキ属、スギ属なども認められることから、これらが混在するような森林が周辺に分布していた可能性がある。またクマシデ属ーアサダ属やコナラ亜属は河畔などの湿地に生育する種が含まれており、クルミ属、ニレ属ーケヤキ属なども同様であることから、近接する百間川や旭川周辺の河畔・湿地に、これらの木本類が生育していた可能性が指摘される。また、多産するマツ属のうち、亜属まで同定できたものは全て複雑管束亜属であった。マツ属複雑管束亜属（いわゆるニヨウマツ類）は生育の適応範囲が広く、尾根筋や湿地周辺、海岸砂丘上など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能であり、極端な陽樹でもあることから、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類でもある。これより、周辺の森林縁辺などに二次林として分布していた可能性が想定される。

6世紀末～7世紀前半の地表面を形成していたと想定される褐色砂質土（試料1）も、花粉化石の産状・保存状態が悪かった。本層が地表面を形成したと推測されることから、堆積当時に微生物などによる分解の影響を受けた可能性がある。なお、検出される種類からツガ属、マツ属、クマシデ属ーアサダ属、カバノキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属、ガマズミ属などの木本類、イネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、アブラナ科、ヨモギ属、キク亜科、タンポポ亜科などの草本類の生育がうかがえる。

参考文献

三宅 尚・中越 信和「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状」『植生史研究』6 15-30p 1998



第480図 花粉化石群集

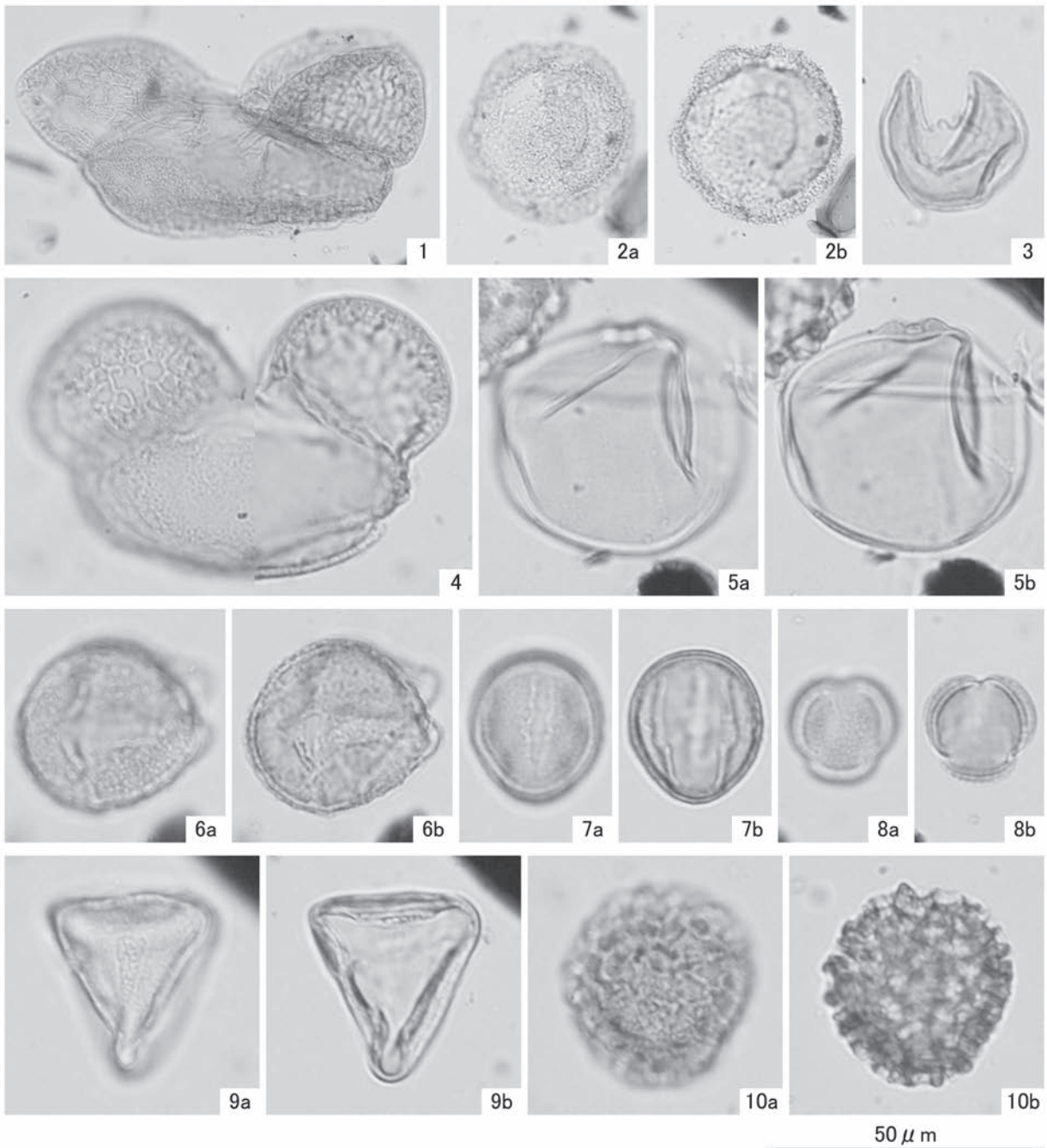
中村 純『花粉分析』古今書院 232p 1967

中村 純『日本産花粉の標徴』Ⅰ・Ⅱ (図版) 『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第12・13集 91p 1980

パリノ・サーヴェイ株式会社「百間川原尾島遺跡の花粉分析・プラントオパール分析」「百間川原尾島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179 岡山県教育委員会 305-314 p 2004

島倉 巳三郎「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 60p 1973

徳永 重元・山内 輝子「花粉・孢子」『化石の研究法』共立出版株式会社 50-73p 1971



- 1 モミ属 (試料2) 2 ツガ属 (試料2) 3 スギ属 (試料2) 4 マツ属 (試料2) 5 イネ科 (試料2)
6 コナラ属コナラ亜属 (試料2) 7 コナラ属アカガシ亜属 (試料2) 8 ヨモギ属 (試料2)
9 カヤツリグサ科 (試料2) 10 サナエタデ節-ウナギツカミ節 (試料2)

写真63 花粉化石

2 百間川原尾島遺跡の植物珪酸体分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

百間川原尾島遺跡は百間川の沖積地に立地する。既往の発掘調査では、氾濫原低地において弥生時代後期の水田跡、沖積リッジ（微高地）上で弥生時代後期～古墳時代の集落跡が検出されている。また、弥生時代後期の古植生や稲作などの調査区の土地利用に関する情報を得ることを目的とする自然科学分析調査も実施されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2004）。

今回の調査区では、弥生時代後期の水田跡が確認されており、検出面において稲株状痕跡や足跡状痕跡が確認されている。また、弥生時代後期の水田7で確認された稲株状痕跡がイネに由来するかなどの当時の調査区の状況を把握するために植物珪酸体分析を実施する。

試料

各試料（表6）について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム，比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリユウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、近藤（2010）の分類を参考に同定、計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量を正確に計量し、堆積物1gあたりの植物珪酸体含量（同定した数を堆積物1gあたりの個数に換算）を求める。

なお、稲株状痕跡の試料では珪化組織片の産状に注目した。植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物遺体には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合がある。そのため、特にイネ属の珪化組織片について有無を確認する。

また、稲株状痕跡の試料については肉眼観察により植物遺体の有無を確認し、得られた植物遺体について珪化組織の有無からイネ属に由来する可能性を検討した。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個/g未満は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸め（100単位にする）、合計は各分類群の丸めない数字を合計した後に丸めている。また、各分類群での植物珪酸体含量を図示する。

結果

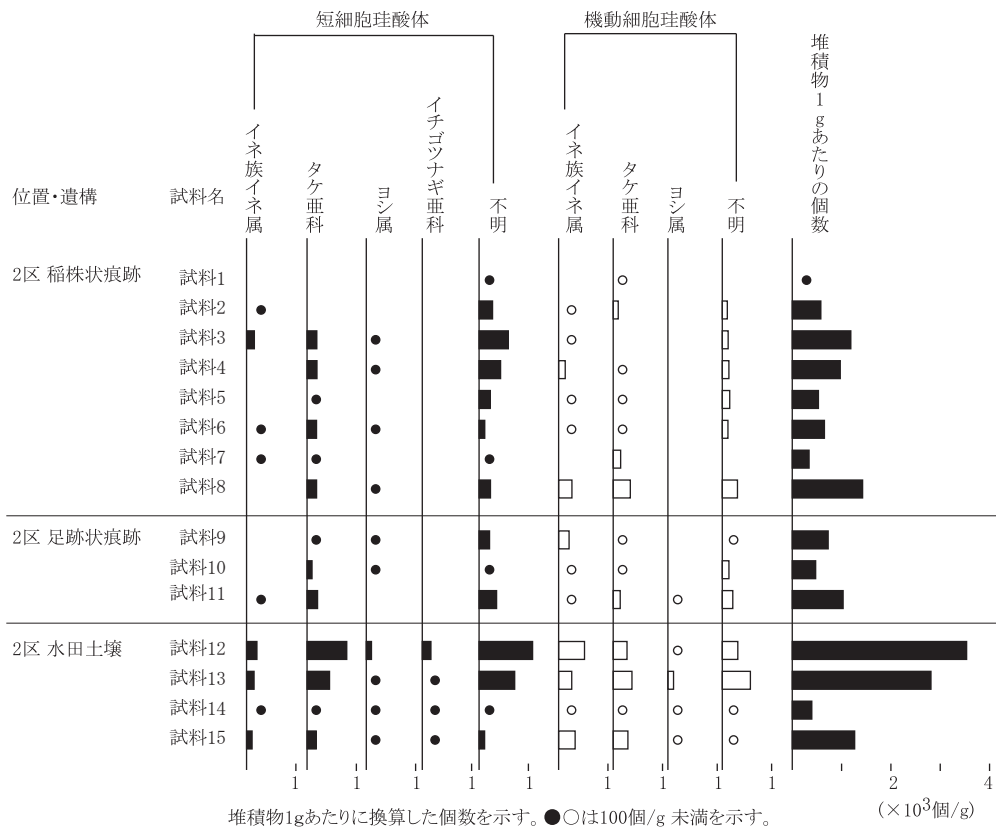
結果を表7、第481図に示す。

表6 分析試料

試料		備考
試料1	稲株状痕跡1	稲株状痕跡の下部より採取
試料2	稲株状痕跡2	
試料3	稲株状痕跡3	
試料4	稲株状痕跡4	
試料5	稲株状痕跡5	
試料6	稲株状痕跡6	
試料7	稲株状痕跡7	
試料8	稲株状痕跡8	
試料9	足跡状痕跡12	足跡状痕跡の下部より採取
試料10	足跡状痕跡13	
試料11	足跡状痕跡14	
試料12	水田土壌1	稲株状痕跡周辺から採取
試料13	水田土壌2	
試料14	水田土壌3	
試料15	水田土壌4（畦畔）	

稲株状痕跡から採取された試料1～8からは、栽培種のイネ属を含むイネ科植物に由来する珪化組織片が全く産出せず、単体の植物珪酸体としてイネ属、タケ亜科、ヨシ属などがわずかに産出する。試料中には、肉眼観察時に微細な植物遺体片（長さ0.5cm前後）が認められたが、この植物遺体片にも珪化組織は認められなかった。

足跡状痕跡の試料9～11も稲株状痕跡の試料と同様に、イネ科植物に由来する珪化組織片は検出されず、単体の植物珪酸体としてイネ属、タケ亜科、ヨシ属などのわずかに産出する。



第481図 植物珪酸体の産状

表7 植物珪酸体分析結果

種類	分析試料														
	2区 稲株状痕跡								2区 足跡状痕跡			2区 水田土壤			
	1	2	3	4	5	6	7	8	12	13	14	1	2	3	4 (畦畔)
	試料1	試料2	試料3	試料4	試料5	試料6	試料7	試料8	試料9	試料10	試料11	試料12	試料13	試料14	試料15
イネ科葉部短細胞珪酸体															
イネ族イネ属	-	<100	200	-	-	<100	<100	-	-	-	<100	200	200	<100	100
タケ亜科	-	-	200	200	<100	200	<100	200	<100	100	200	800	500	<100	200
ヨシ属	-	-	<100	<100	-	<100	-	<100	<100	<100	-	100	<100	<100	<100
イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	200	<100	<100	<100
不明	<100	300	600	400	200	100	<100	200	200	<100	400	1,100	700	<100	100
イネ科葉身機動細胞珪酸体															
イネ族イネ属	-	<100	<100	100	<100	<100	-	300	200	<100	<100	500	300	<100	300
タケ亜科	<100	100	-	<100	<100	<100	200	300	<100	<100	100	300	400	<100	300
ヨシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	<100	<100	100	<100	<100
不明	-	100	100	100	200	100	-	300	<100	100	200	300	600	<100	<100
合計															
イネ科葉部短細胞珪酸体	<100	300	1,000	700	300	400	200	500	400	200	600	2,400	1,500	200	500
イネ科葉身機動細胞珪酸体	<100	300	200	300	300	200	200	900	400	300	400	1,200	1,300	200	700
総計	<100	600	1,200	1,000	500	700	300	1,400	700	500	1,000	3,500	2,800	400	1,300

数値は含量密度（個/g）を示し、10の位で四捨五入した値として示す。合計は各分類群の丸めない数字を合計した後丸めている。<100：100個/g未満を示す。

稲株状痕跡周辺の水田土壌および畦畔構成堆積物の試料12～15でも、珪化組織片は全く産出しない。単体の植物珪酸体としてイネ属、タケ亜科、ヨシ属、イチゴツナギ亜科などが産出する。このうち、イネ属の含量は稲株状痕跡や足跡状痕跡の試料よりも多く、最も多い試料12では機動細胞珪酸体で約500個/gの含量密度を示す。

考察

稲株状痕跡の試料からは、栽培種のイネ属の葉部や稈（茎）の珪化組織片は検出されなかった。比較試料として分析を実施した足跡状痕跡や稲株状痕跡周辺の水田土壌試料でもイネ属由来の珪化組織片は全く産出しておらず、稲株状痕跡との有意な違いは確認されなかった。これらの植物珪酸体分析結果からは、稲株状痕跡を残した植物の種類について特定することができなかった。ただし、単体の植物珪酸体として産出するイネ属の含量密度をみると、水田土壌試料と、稲株状痕跡および足跡状痕跡の試料に比較して、水田土壌試料で高い傾向を示した。このような地点間での差異が何を意味しているかについては微々地形レベルでの植物珪酸体のタフオノミーを踏まえた検討が今後必要である。

また、稲株状痕跡周辺の水田土壌試料における単体のイネ属の機動細胞珪酸体の含量密度は、最も高い試料で約500個/gであった。本遺跡の15B・14C区トレンチにおける弥生時代後期の水田耕土では、イネ属機動細胞珪酸体の含量密度は2,000～10,000個/gとバラツキが生じている（パリノ・サーヴェイ株式会社,2004）ものの、今回の地点より明らかに高い密度を示している。また下流域の百間川兼基遺跡の弥生時代中期後葉とされる水田跡でも、イネ属機動細胞珪酸体の含量密度が1,500-1,900個/gと今回の結果より高い値を示している。このように今回の調査地点では、イネ属の含量密度が低いことが認識される。この原因として、植物珪酸体の堆積時・後の風化作用の影響による分解・消失などに起因する可能性や、堆積物の層相の違いや形成期間の違いに起因する可能性などがある。今回の稲株状痕跡の試料から珪化組織片が産出しないことも、このような条件の違いと間接的に関連している可能性もあることから（例えば、植物珪酸体が分解消失しやすい状況にあったなど）、調査地点の水田耕作土の層相解析と、地形条件などの情報を含めた栽培植物のイネ属珪酸体の産状について比較検討する必要がある。また、稲株状痕跡の垂直方向の断面から不攪乱柱状試料を採取し、X 扇写真や土壌薄片によるメソ・ミクロスケールでの観察を行い、稲株状痕跡の構造と埋没のプロセスについて確認することも必要である。

参考文献

- 近藤 錬三『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会 387p 2010
パリノ・サーヴェイ株式会社「百間川原尾島遺跡の花粉分析・プラントオパール分析」「百間川原尾島遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』179岡山県教育委員会 305-314p 2004

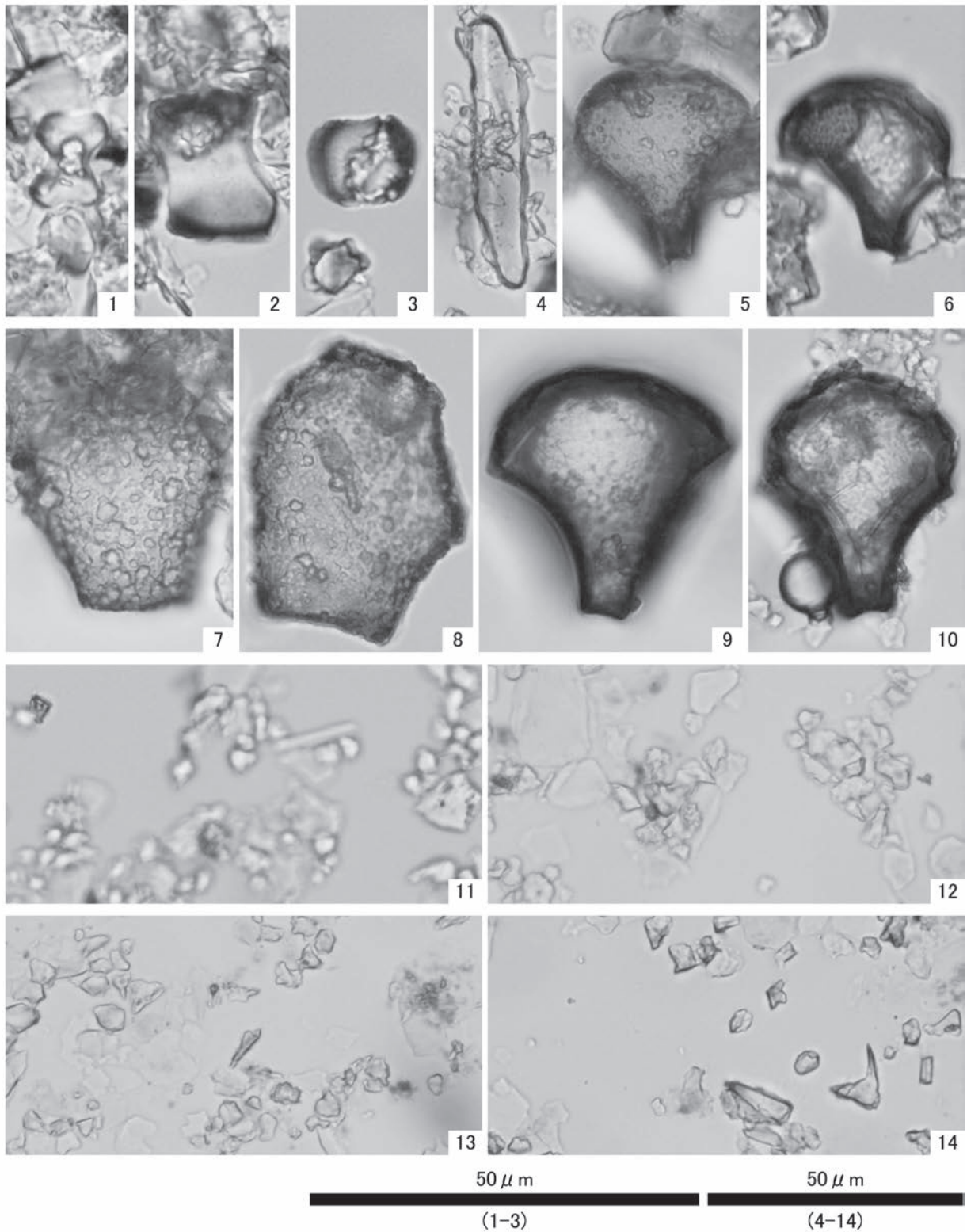


写真64 植物珪酸体

- | | | | |
|---|-----------------------|----|---------------------|
| 1 | イネ属短細胞珪酸体 (試料12) | 8 | ヨシ属機動細胞珪酸体 (試料13) |
| 2 | タケ亜科短細胞珪酸体 (試料12) | 9 | イネ属機動細胞珪酸体 (試料2) |
| 3 | ヨシ属短細胞珪酸体 (試料13) | 10 | イネ属機動細胞珪酸体 (試料9) |
| 4 | イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (試料12) | 11 | 状況 (鉍物粒子が散在) (試料1) |
| 5 | イネ属機動細胞珪酸体 (試料12) | 12 | 状況 (鉍物粒子が散在) (試料5) |
| 6 | イネ属機動細胞珪酸体 (試料15) | 13 | 状況 (鉍物粒子が散在) (試料7) |
| 7 | タケ亜科機動細胞珪酸体 (試料12) | 14 | 状況 (鉍物粒子が散在) (試料11) |

3 百間川原尾島遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

百間川原尾島遺跡から出土した木製品と植物遺体を対象として、遺構の年代確認を目的とした放射性炭素年代測定を実施する。

試料

(1) 試料1 試料1は、杭列2の杭1点(W15)である。長径5.5cm、短径4.5cmの芯持丸木であり、最外年輪を含む3～4年分を採取して測定試料とした。

(2) 試料2～5 試料2は、土坑1から出土した種実遺体(ドングリ)と、杭列1から出土した筵状編み物の構成材、杭列1・2の杭2点の合計4点である(試料2～5)。試料2(ドングリ)は、大量にある中から、状態の良い1点を抽出した。試料3(筵状編み物の構成材)は、当年性の枝材で、状態の良い部分から長さ約1cmの試料を採取した。試料4(W10)は、ミカン割状を呈し、残存する最外年輪を含む2～3年分を採取して試料とした。試料5(W16)は、直径3.3cmの芯持丸木で、最外年輪を含む2～3年分を採取して試料とした。

分析方法

採取した木材表面に付着する、異なる年代を持つ土壌などを超音波洗浄などにより物理的に除去する。その後HC1により炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HC1によりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理)。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅(II)と銀箔(硫化物を除去するため)を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃(30分)850℃(2時間)で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置(NEC Pelletron 9SDH-2)を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma;68%)に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00(Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を用い、誤差として標準偏差(One Sigma)を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い(14Cの半減期5730±40年)を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単

位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

結果

(1) 試料1

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表8、第482図に示す。試料番号1の同位体効果による補正を行った測定結果は、 $2,160 \pm 20$ BPを示す。また、測定誤差を 2σ として計算させた暦年較正結果(確率1)は、cal BC234-110である。

(2) 試料2～5

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表8、第483図に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、試料2が $2,800 \pm 20$ BP、試料3が $2,230 \pm 20$ BP、試料4が $2,300 \pm 20$ BP、試料5が $2,240 \pm 20$ BPを示す。また、測定誤差を 2σ として計算させた暦年較正結果(確率1)は、試料2がcal BC1,011-896、試料3がcal BC322-205、試料4がcal BC403-357、試料5がcal BC318-207である。

表8 百間川原尾島遺跡の放射性炭素年代測定結果

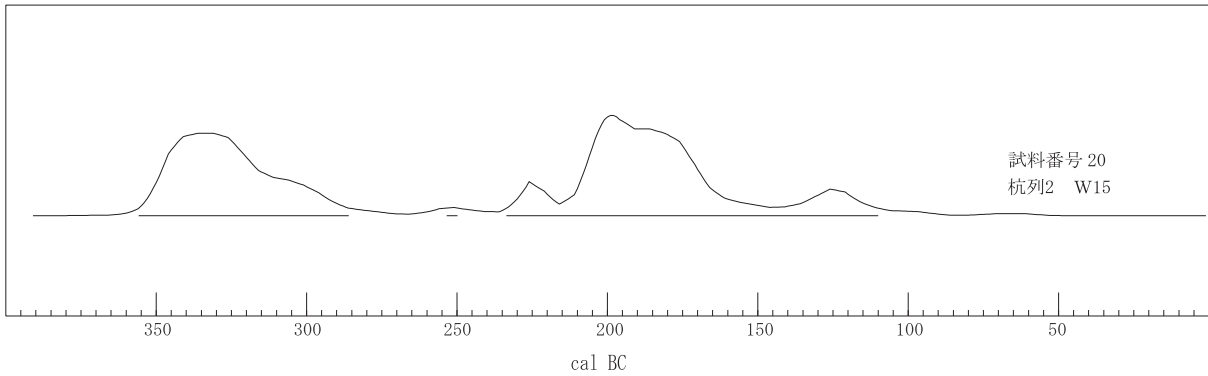
試料番号	遺構取上No	種類(分類群)	処理方法	測定年代BP	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代(暦年較正用)BP	暦年較正結果				CodeNo
							誤差	cal BC/AD		BC	
1	杭列2 (W15)	生木 (コナラ属 アカガシ亜属)	AAA	2,240 ±20	-30.24 ±0.53	2,160±30 (2,158±25)	σ	cal BC 349 - cal BC 312	cal BP 2,298 - 2,261	0.447	IAAA-112789
								cal BC 208 - cal BC 168	cal BP 2,157 - 2,117	0.553	
							2σ	cal BC 356 - cal BC 286	cal BP 2,305 - 2,235	0.417	
								cal BC 253 - cal BC 250	cal BP 2,202 - 2,199	0.004	
2	土坑1 ドングリ	種実 (イチイガシ)	AAA	2,850 ±20	-28.00 ±0.46	2,800±20 (2,796±23)	σ	cal BC 977 - cal BC 913	cal BP 2,926 - 2,862	1.000	IAAA-120505
								cal BC 1,011 - cal BC 896	cal BP 2,960 - 2,845	0.995	
							2σ	cal BC 864 - cal BC 860	cal BP 2,813 - 2,809	0.005	
								cal BC 366 - cal BC 352	cal BP 2,315 - 2,301	0.150	
3	杭列1 籐状編み物構成材	木材 (広葉樹)	AaA	2,350 ±20	-32.19 ±0.43	2,230±20 (2,227±22)	σ	cal BC 296 - cal BC 228	cal BP 2,245 - 2,177	0.750	IAAA-120506
								cal BC 220 - cal BC 211	cal BP 2,169 - 2,160	0.100	
							2σ	cal BC 383 - cal BC 345	cal BP 2,332 - 2,294	0.208	
								cal BC 322 - cal BC 205	cal BP 2,271 - 2,154	0.792	
4	杭列1 (W10)	木材 (ツバキ属)	AAA	2,380 ±20	-30.02 ±0.41	2,300±20 (2,296±24)	σ	cal BC 398 - cal BC 373	cal BP 2,347 - 2,322	1.000	IAAA-120507
								cal BC 403 - cal BC 357	cal BP 2,352 - 2,306	0.866	
							2σ	cal BC 283 - cal BC 256	cal BP 2,232 - 2,205	0.109	
								cal BC 246 - cal BC 235	cal BP 2,195 - 2,184	0.025	
5	杭列2 (W16)	木材 (サカキ)	AAA	2,260 ±20	-26.45 ±0.64	2,240±20 (2,237±24)	σ	cal BC 377 - cal BC 354	cal BP 2,326 - 2,303	0.273	IAAA-120508
								cal BC 291 - cal BC 231	cal BP 2,240 - 2,180	0.718	
							2σ	cal BC 217 - cal BC 215	cal BP 2,166 - 2,164	0.009	
								cal BC 387 - cal BC 347	cal BP 2,336 - 2,296	0.262	
							cal BC 318 - cal BC 207	cal BP 2,267 - 2,156	0.738		

- 1) 前処理は、酸処理—アルカリ処理—酸処理(AAA処理)を行い、アルカリ濃度が1N未満の場合はAaAと表記している。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
- 6) 暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である
- 9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。

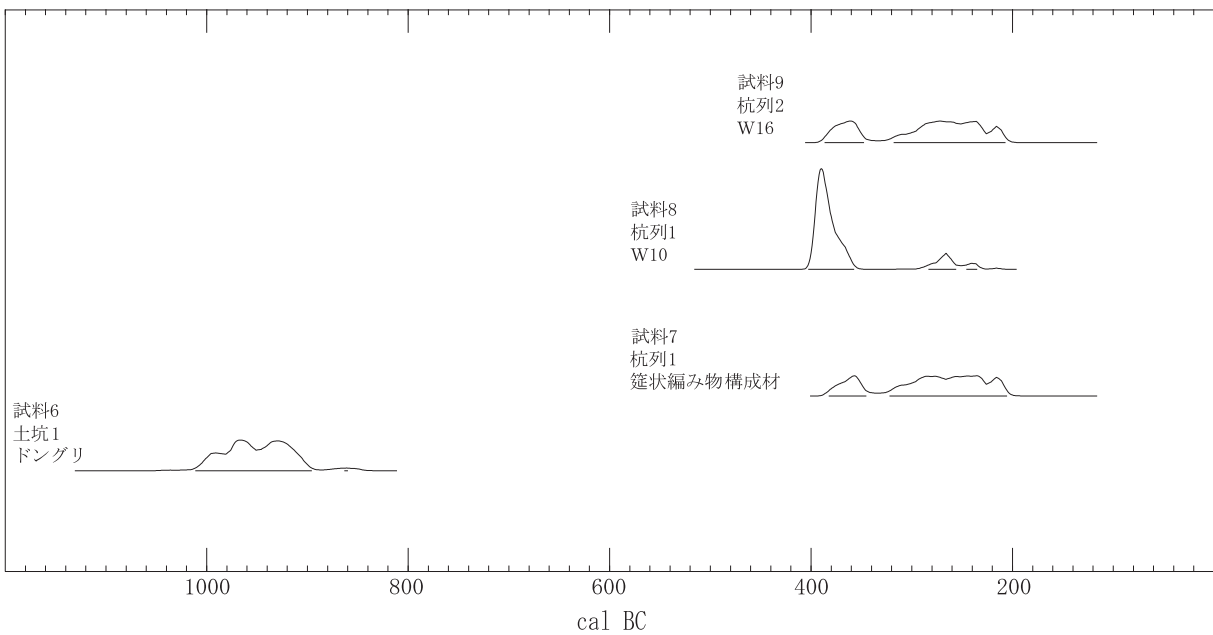
考察

(1) 試料1 試料1は(W15)は、直径5.5×4.5cmの芯持丸木で、最外年輪を含む3～4年分を用いて年代測定を実施している。新しい年代が得られた背景には、杭列の修復などによって、新しい時期の木材が混じた可能性が考えられる。この点は、杭の出土状況なども含めて検討する必要がある。

岡山市内の放射性炭素年代測定結果には、伊福定国前遺跡の弥生時代後期～古墳時代前期の粗朶状の木片で1,840±40 (cal AD75～255)、高松田中遺跡の弥生時代中期の土器付着物で2,260±30 (cal BC305～205)、南方(済生会)遺跡の弥生時代中期の土器付着物で2,720±40～2,160±40 (cal BC935～765および540～200)、南方(済生会)遺跡の弥生時代前期の土器付着物で2,260±30 (cal BC305～205)と2,320±40 (cal BC430～350)等の報告がある(西本2006)。これらの測定結果に基づけば、今回の測定結果は、弥生時代中期末～後期頃の値に相当している。杭列2(W15)は、弥生時代前期後葉と考えられており、年代測定値は、これよりもやや新しい時期を示す。測定値が杭列の年代幅を示しているのかは、他の杭材についても年代測定を実施して、複数の測定結果からクロスチェックすることも必要である。



第482図 百間川原尾島遺跡の暦年較正結果①



第483図 百間川原尾島遺跡の暦年較正結果②

(2) 試料2 土坑1は、調査所見から縄文時代晩期と考えられている。出土したドングリ（イチイガシ）の年代測定結果は、補正年代で $2,800 \pm 20$ BPを示しており、調査所見とも整合的である。

杭列1・2は、調査所見から弥生時代前期後葉と考えられているが、試料1の調査では杭の年代測定で、推定年代よりも新しい $2,160 \pm 30$ BPの補正年代が得られている。今回の結果をみると、試料3が $2,230 \pm 20$ BP、試料4が $2,300 \pm 20$ BP、試料5が $2,240 \pm 20$ BPの補正年代を示す。試料4が若干古い値を示すものの、いずれも弥生時代前期に相当する年代が得られている。試料4については、ミカン割状の分割材を円柱状に成形していることから、最外年輪が失われている可能性があり、それによって若干古い値を示したことが考えられる。これらの結果から、杭列1・2は、弥生時代前期に属する可能性がある。

参考文献

西本豊弘「弥生時代の新年代」『弥生時代のはじまり』第1巻 雄山閣 143p 2006

4 百間川原尾島遺跡出土土器の胎土分析

岡山理科大学 白石 純

分析目的

この分析では、百間川原尾島遺跡の竪穴住居3内から出土した焼成用に使用されたと考えられる粘土と同じ住居内出土土器の理化学的な胎土分析を実施し、胎土の差異について検討した。

分析方法

自然科学的な分析法には、蛍光X線分析とデジタルマイクロスコープを用いた。

蛍光X線分析法は、胎土の成分（元素）量を測定し、その成分量から胎土の違いについて検討した。測定した成分（元素）は、Si、Ti、Al、Fe、Mn、Mg、Ca、Na、K、P、Rb、Sr、Zrの13成分である。測定装置はエネルギー分散型蛍光X線分析計（エスアイアイ・ナテクノロジー製SEA5120A）を使用した。分析試料は、乳鉢で粉末にしたものを加圧成形機で約15トンの圧力をかけ、コイン状に成形したものを測定試料とした。したがって、一部破壊分析である。

測定条件は、管球ターゲットRh、励起電圧は50kV・15kV・7kV、管電流は $4 \mu\text{A} \sim 1000 \mu\text{A}$ 、測定時間は300秒、雰囲気は真空中で測定した。

デジタルマイクロスコープ（キーエンス社製VHX-1000）による分析では、土器表面を20倍～100倍で観察し、胎土中に含まれる砂粒（岩石・鉱物）の種類、大きさなどの大まかな含有量を調べた。なお、砂粒の含有量は、やや曖昧な表現であるが、多量・中量・少量・まれに、の4段階であらわした。

分析した土器試料は7点である。内訳は粘土1、製塩土器2点、甕、鉢は4点である（表9参照）。

分析結果

(1) 蛍光X線分析

第484・485図の両散布図（K-Ca・Ti-Fe）では、粘土と土器（製塩土器・甕・鉢）の間で胎土に極端な差異は見られず胎土的にはほぼ一つにまとまった。

(2) マイクロスコープによる胎土観察結果

デジタルマイクロスコープによる土器表面の胎土観察では、以下のような結果となった。

- ・土器（試料番号4、5、6、7）には1 mm以下の石英を中量程度含み、1 mm以下の長石・雲母を少量含む。
- ・製塩土器（2、3）には、3 mm以下の石英を中量程度と、1 mm以下の長石を少量含む。また、岩石片で3 mm程度の花崗岩、流紋岩が観察された。
- ・粘土には1 mm以下の石英を中量程度含み、1 mm以下の長石・雲母を少量含む。

以上のように、胎土中に含まれる砂粒も土器と粘土でも違いが見られなかった。ただ製塩土器には3 mm程度の円礫が目立ち、甕・鉢とは異なっていた。

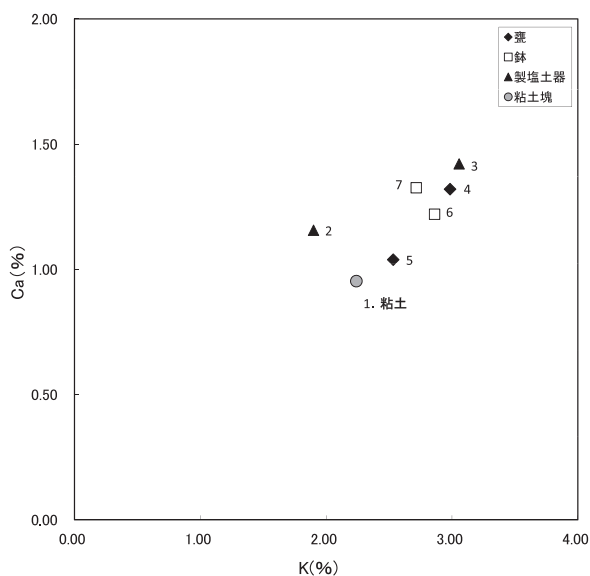
おわりに

以上の分析結果から、蛍光X線分析では土器と粘土の間で胎土に明確な違いはなかった。

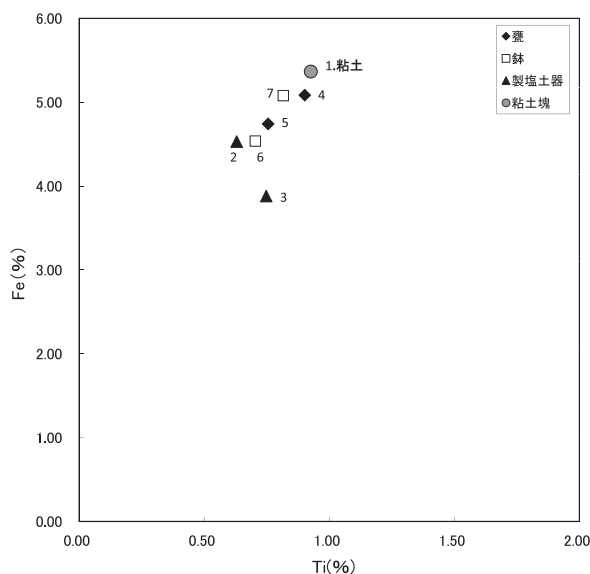
また、胎土中の砂粒観察でも土器（甕、鉢類）と粘土の砂粒構成に目立った違いは見られなかった。しかし、製塩土器に含まれる砂粒は異なっていた。このような分析結果よりと住居内出土の粘土は土器（甕、鉢類）の焼成用粘土の可能性が考えられる。

表9 原尾島遺跡出土遺物の胎土分析結果 (Si ~ P : %、Rb ~ Zr : ppm)

試料番号	実測番号	種類	Si	Ti	Al	Fe	Mn	Mg	Ca	Na	K	P	Rb	Sr	Zr
1		粘土塊	68.83	0.93	19.72	5.37	0.02	1.57	0.95	0.21	2.24	0.06	60	130	221
2	388	製塩土器	73.44	0.63	16.73	4.53	0.05	0.17	1.16	0.75	1.90	0.43	32	178	103
3	389	製塩土器	71.24	0.75	17.79	3.88	0.02	0.25	1.42	0.95	3.06	0.51	62	229	256
4	382	甕	71.08	0.90	16.39	5.09	0.00	0.28	1.32	1.27	2.98	0.50	85	212	363
5	384	甕	73.51	0.76	16.46	4.74	0.01	0.08	1.04	0.02	2.53	0.70	49	195	242
6	385	鉢	72.90	0.70	16.21	4.54	0.01	0.15	1.22	0.50	2.86	0.78	60	235	324
7	387	台付鉢	71.89	0.82	16.24	5.08	0.00	0.49	1.33	0.71	2.72	0.59	53	200	250



第484図 竪穴住居内出土土器と粘土塊の胎土比較①



第485図 竪穴住居内出土土器と粘土塊の胎土比較②

第2節 百間川沢田遺跡の鑑定・分析

1 百間川沢田遺跡の花粉分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、百間川沢田遺跡の環濠から採取された土壌を対象として、古植生推定のための花粉分析を実施する。

試料

試料は、百間川沢田遺跡より検出された弥生時代前期の環濠西半部の覆土3点（試料1～試料3）である。なお、試料1は環濠覆土上層、試料2は中層、試料3は下層より採取されている。

分析方法

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類（分類群）について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉（1973）、中村（1980）等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表として表示する。表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。

結果

結果を表10に示す。いずれの試料においても検出される花粉化石数は少なく、定量分析を行うだけの個体数は得られなかった。花粉化石の産状は、試料1および試料2では検出される種類数・個体数が少なく、保存状態も悪いが、試料3は他の2試料と比較すると種類数・個体数も多く、保存状態も良好である。

検出される種類についてみると、試料1、試料2ではマツ属、スギ属、ハンノキ属、イネ科、ヨモギ属、キク亜科などの木本花粉・草本花粉が認められる。試料3では、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属等の木本花粉、イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科などの草本花粉が検出される。

考察

百間川沢田遺跡の環濠から採取された試料1～試料3の

表10 花粉分析結果

種類	環濠		
	試料1	試料2	試料3
木本花粉			
ツガ属	-	-	6
マツ属複雑管束亜属	-	1	2
マツ属（不明）	-	-	1
コウヤマキ属	-	-	1
スギ属	1	-	-
ハンノキ属	-	1	1
コナラ属コナラ亜属	-	-	2
コナラ属アカガシ亜属	-	-	5
草本花粉			
イネ科	1	1	5
カヤツリグサ科	-	-	3
ヨモギ属	1	1	2
キク亜科	8	3	1
不明花粉			
不明花粉	1	2	1
シダ類胞子			
ヒカゲノカズラ属	1	1	2
イノモトソウ属	2	-	-
他のシダ類胞子	16	24	34
合計			
木本花粉	1	2	18
草本花粉	10	5	11
不明花粉	1	2	1
シダ類胞子	19	25	36
合計（不明を除く）	30	32	65

花粉分析結果をみると、花粉化石がほとんど検出されず、古植生推定のための定量解析を行うことができなかった。環壕下層に位置する試料3では、花粉化石の保存状態は他の試料と比べて良好であったが、検出量が少ないことから、元々堆積層自体に取り込まれにくかった可能性が想定される。これに対し、環壕中層の試料2、上層の試料1では花粉化石の産出量・保存状態とも悪いことから、堆積層に取り込まれにくかった、あるいは取り込まれた花粉・シダ類胞子が、経年変化により分解・消失した可能性が指摘される。一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされている（中村,1967;徳永・山内,1971;三宅・中越,1998など）。このことから、環壕内が好氣的環境であった可能性も想定される。

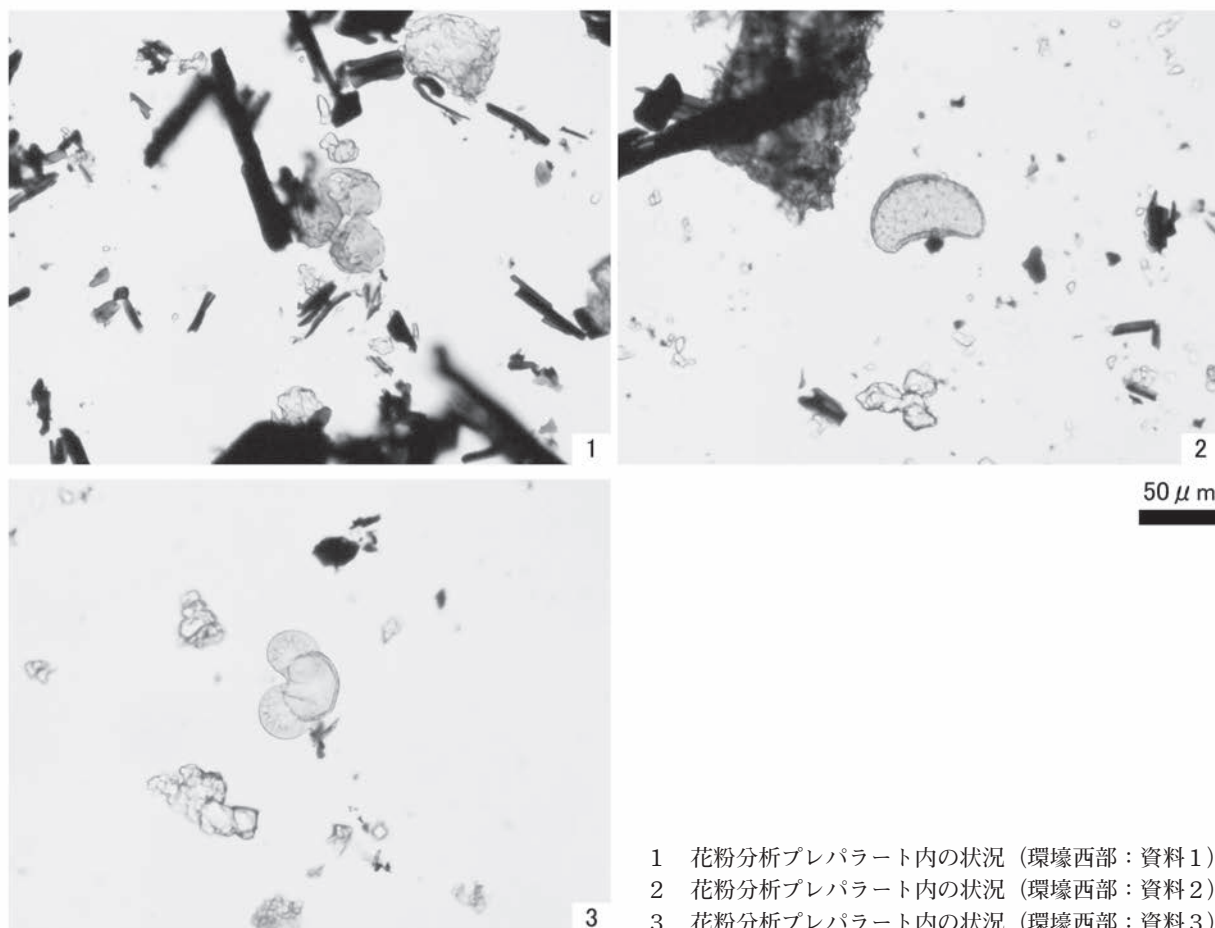
なお、検出される種類から、環壕が機能していた弥生時代前期中葉頃の遺跡周辺には、ツガ属、マツ属、コウヤマキ属、スギ属等の針葉樹、ハンノキ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属等の広葉樹が分布した可能性が指摘される。

また、草本類ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科などが検出されている。これらは、林縁や人里などの開けた明るい場所に生育する種を含む分類群であることから、環壕周辺の草地環境を反映している可能性がある。

既往の百間川沢田遺跡の花粉分析では、縄文時代晩期～弥生時代後期の群集組成が確認されている（パリノ・サーヴェイ株式会社,1993a,bなど）。当時の森林植生は、アカガシ亜属を主体とし、シイ属などを伴う暖温帯性常緑広葉樹林であり、モミ属やツガ属などの温帯性針葉樹、コナラ亜属、ニレ属一ケヤキ属、エノキ属ームクノキ属などの落葉広葉樹を伴っていたとされている。本報告で検出された種類も、これまでの調査事例と矛盾しないことから、同様の植生を反映していると推測される。

参考文献

- 三宅 尚・中越信和「森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態」『植生史研究』6 15-30p 1998
- 中村 純『花粉分析』古今書院 232p 1967
- 中村 純「日本産花粉の標徴」Ⅰ・Ⅱ（図版）『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第12・13集 91p 1980
- パリノ・サーヴェイ株式会社「植物化石分析報告」「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』84 405-417p 1993
- 島倉巳三郎「日本植物の花粉形態」大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集 60p 1973
- 徳永重元・山内輝子「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社 50-73p 1971



- 1 花粉分析プレパラート内の状況（環壕西部：資料1）
- 2 花粉分析プレパラート内の状況（環壕西部：資料2）
- 3 花粉分析プレパラート内の状況（環壕西部：資料3）

写真65 花粉分析プレパラート状況

2 百間川沢田遺跡の放射性炭素年代測定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

百間川沢田遺跡から出土した木材・炭化材を対象として、遺構の年代確認を目的とした放射性炭素年代測定を実施する。

試料

試料は、低位部下、河道埋土から出土した木片（試料番号1）と、炉1から出土した炭片（試料番号2）及び、微高地形成前河道（試料番号3）の3点である。

試料番号1は、長径5cm、短径3cmの芯持丸木であり、最外年輪を含む2年分を測定試料として採取した。試料番号2はミカン割状を呈する炭化材である。保存状態が悪く、年輪を確認することができないことから、残存する最外部を7～8mm厚で採取して試料とした。試料3は、直径2.5cmの芯持丸木であり、最外年輪を含む2～3年分を採取して試料とした。

分析方法

各試料に付着している、異なる年代を持つ土壌等をピンセットや超音波洗浄などにより物理的に除

去する。その後HClにより炭酸塩等酸可溶成分を除去、NaOHにより腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する（酸・アルカリ・酸処理）。

試料をバイコール管に入れ、1gの酸化銅（Ⅱ）と銀箔（硫化物を除去するため）を加えて、管内を真空にして封じきり、500℃（30分）850℃（2時間）で加熱する。液体窒素と液体窒素+エタノールの温度差を利用し、真空ラインにてCO₂を精製する。真空ラインにてバイコール管に精製したCO₂と鉄・水素を投入し封じ切る。鉄のあるバイコール管底部のみを650℃で10時間以上加熱し、グラファイトを生成する。

化学処理後のグラファイト・鉄粉混合試料を内径1mmの孔にプレスして、タンデム加速器のイオン源に装着し、測定する。測定機器は、3MV小型タンデム加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC Pelletron 9SDH-2）を使用する。AMS測定時に、標準試料である米国国立標準局（NIST）から提供されるシュウ酸（HOX-Ⅱ）とバックグラウンド試料の測定も行う。また、測定中同時に13C/12Cの測定も行うため、この値を用いて $\delta^{13}C$ を算出する。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代（BP）であり、誤差は標準偏差（One Sigma;68%）に相当する年代である。なお、暦年較正は、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.00（Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer）を用い、誤差として標準偏差（One Sigma）を用いる。

暦年較正とは、大気中の14C濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の14C濃度の変動、及び半減期の違い（14Cの半減期5,730±40年）を較正することである。暦年較正に関しては、本来10年単位で表すのが通例であるが、将来的に暦年較正プログラムや暦年較正曲線の改正があった場合の再計算、再検討に対応するため、1年単位で表している。

暦年較正は、測定誤差 σ 、 2σ 双方の値を計算する。 σ は統計的に真の値が68%の確率で存在する範囲、 2σ は真の値が95%の確率で存在する範囲である。また、表中の相対比とは、 σ 、 2σ の範囲をそれぞれ1とした場合、その範囲内で真の値が存在する確率を相対的に示したものである。

結果

放射性炭素年代測定および暦年較正結果を表11、第486図に示す。同位体効果による補正を行った測定結果は、試料番号1が3,050±30BP、試料番号2が3,110±30BP、試料番号3が3,500±20BPを示す。また、測定誤差を 2σ として計算させた暦年較正結果（確率1）は、試料番号1がcal BC1,405～1,259、試料番号2がcal BC1,437～1,306、試料番号3がcal BC1,887～1,749である。

考察

低位部下、河道埋土から出土した木片と炉1から出土した炭片及び、微高地形成前河道から出土した木材は、縄文時代の試料と考えられている。年代測定結果は、低位部下、河道埋土の木片が3,050±30BP、炉1が3,110±30BPを示す。測定誤差を 2σ として計算させた暦年較正結果は、河道埋土の木片がcal BC1,405～1,259、炉1の炭化材がcal BC1,437～1,306であり、ほぼ同時期を示す。今回の測定値は、岡山県内の彦崎貝塚、南方前池遺跡、南溝手遺跡等の放射性炭素年代測定結果（西本,2006）と比較すると、縄文時代晩期の土器付着物から得られた年代測定値に相当する。微高地形成前河道から出土した木材の年代測定結果は、補正年代で3,500±20BPであり、縄文時代後期の木材と考えられる。試料1・2よりも約400～500年古い時期を示している。

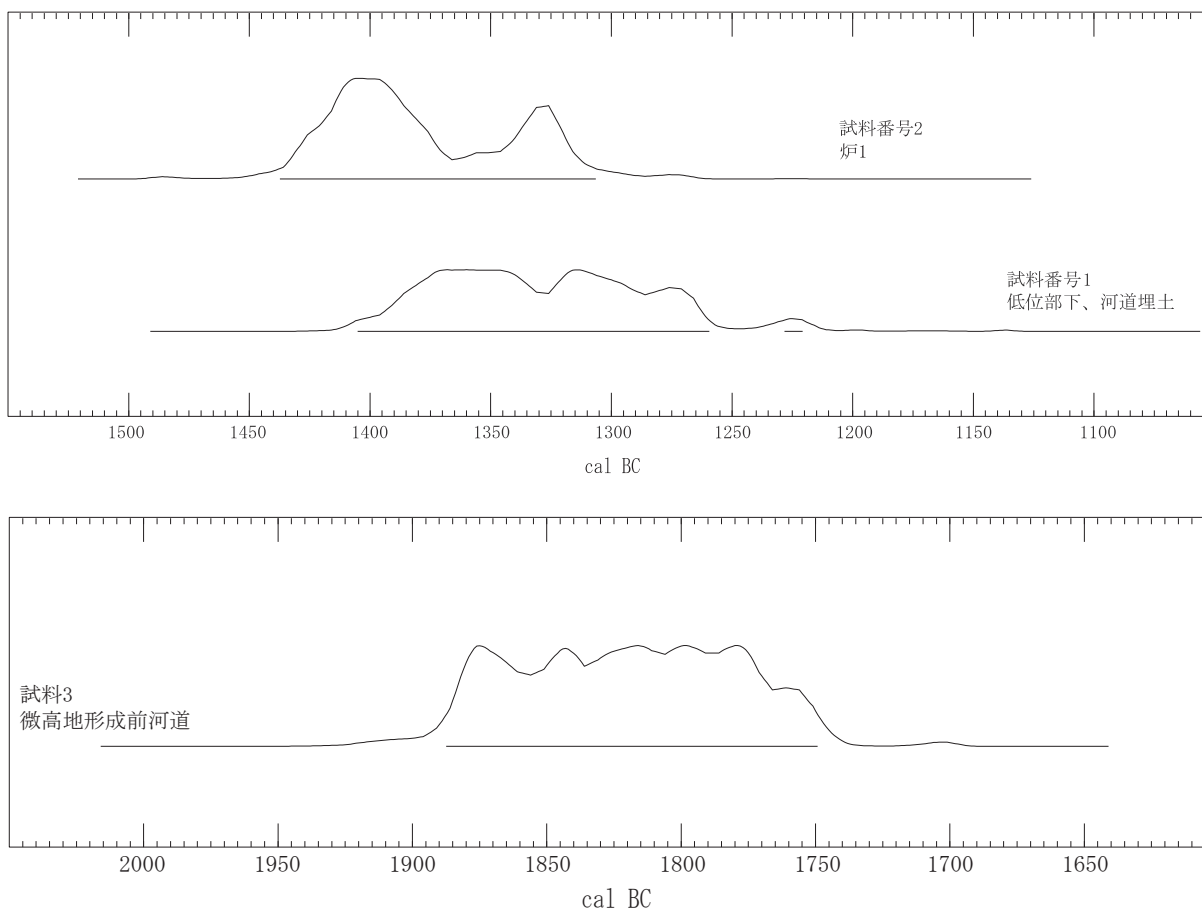
参考文献

西本豊弘『弥生時代の新年代 弥生時代のはじまり』第1巻 雄山閣 143p 2006

表11 百間川沢田遺跡の放射線炭素年代測定結果

試料番号	遺構など	種類(分類群)	処理方法	測定年代 BP	$\delta^{13}C$ (‰)	補正年代(暦年較正用) BP	暦年較正結果				CodeNo
							誤差	cal BC/AD	BC	相対比	
1	低位部 河道埋土	生木 (ムクロジ)	AAA	3,150±30	-30.91 ±0.59	3,050±30 (3,049±27)	σ	cal BC 1,383 - cal BC 1,333	cal BP 3,332 - 3,282	0.597	IAAA- 112790
								cal BC 1,324 - cal BC 1,292	cal BP 3,273 - 3,241	0.359	
2	炉1	炭化材 (コナラ属)	AAA	3,190±30	-29.89 ±0.55	3,110±30 (3,106±29)	σ	cal BC 1,277 - cal BC 1,273	cal BP 3,226 - 3,222	0.045	
								cal BC 1,405 - cal BC 1,259	cal BP 3,354 - 3,208	0.986	
3	微高地 形成前 河道	木材 (アカシ 亜属)	AAA	3,640±20	-33.64 ±0.40	3,500±20 (3,497±24)	σ	cal BC 1,228 - cal BC 1,221	cal BP 3,177 - 3,170	0.014	
								cal BC 1,423 - cal BC 1,377	cal BP 3,372 - 3,326	0.774	
2	炉1	炭化材 (コナラ属)	AAA	3,190±30	-29.89 ±0.55	3,110±30 (3,106±29)	2σ	cal BC 1,337 - cal BC 1,321	cal BP 3,286 - 3,270	0.226	
								cal BC 1,437 - cal BC 1,306	cal BP 3,386 - 3,255	1.000	
3	微高地 形成前 河道	木材 (アカシ 亜属)	AAA	3,640±20	-33.64 ±0.40	3,500±20 (3,497±24)	σ	cal BC 1,880 - cal BC 1,865	cal BP 3,829 - 3,814	0.162	
								cal BC 1,849 - cal BC 1,837	cal BP 3,798 - 3,786	0.135	
3	微高地 形成前 河道	木材 (アカシ 亜属)	AAA	3,640±20	-33.64 ±0.40	3,500±20 (3,497±24)	2σ	cal BC 1,833 - cal BC 1,773	cal BP 3,782 - 3,722	0.704	
								cal BC 1,887 - cal BC 1,749	cal BP 3,836 - 3,698	1.000	

- 1) 前処理は、酸処理－アルカリ処理－酸処理(AAA処理)である。
- 2) 年代値の算出には、Libbyの半減期5568年を使用した。
- 3) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 4) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 5) 暦年の計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV6.0 (Copyright 1986-2010 M Stuiver and PJ Reimer)を使用した。
- 6) 暦年の計算には、補正年代に()で暦年較正用年代として示した、一桁目を丸める前の値を使用している。
- 7) 年代値は、1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムが改正された場合の再計算や比較が行いやすいように、暦年較正用年代値は1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68.3%、 2σ は95.4%である
- 9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。



第486図 百間川沢田遺跡の暦年較正結果

第6章 総括

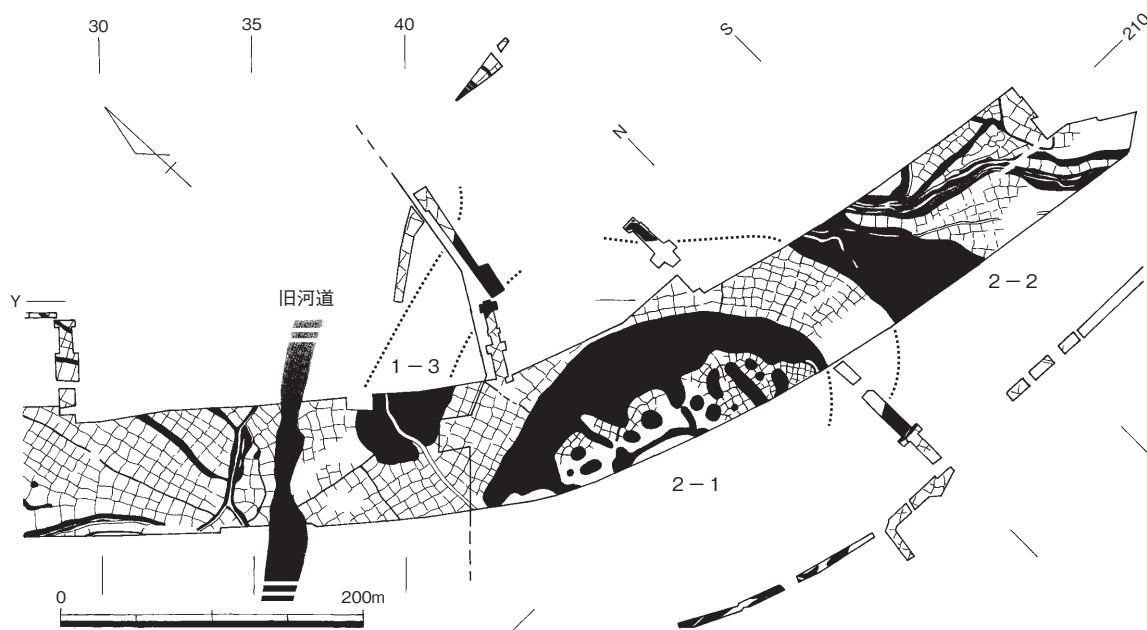
第1節 調査の概要

1 百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡

百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡は、隣接した遺跡である。2つの遺跡の境界は、大字より西に位置する低位部に設定されており、本報告書でもそれに倣っている。低位部に遺跡の境界があることから一見して違和感はないが、今回初めて百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡の境界をまたぐ形で発掘調査が行われたことで、改めて百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡について検討した結果、特に弥生時代前期～中期の集落の変遷を考えるうえで、遺跡の境界となっている低位部を挟んで東西に位置する、百間川原尾島遺跡の東端の微高地と、百間川沢田遺跡西端の微高地との関連性が高いことが明らかとなった。遺跡の実態としての境界としては、第487図で示している百間川原尾島遺跡を北東から南西へ貫流する旧河道（百原尾島2溝168、百原尾島4旧河道2、百原尾島8旧河道）が重要な境界の意味を持つと考えられよう。このため、事実報告は従来通りに百間川原尾島遺跡と百間川沢田遺跡とを分けて掲載しているが、総括ではこの2つの遺跡の双方の成果をあわせて述べることにする。

2 遺構・遺物の概要

ここでは本報告書に掲載している調査成果について述べる。百間川原尾島遺跡で検出した遺構を「原一土坑1」百間川沢田遺跡で検出した遺構を「沢一土坑1」と、百間川原尾島遺跡7⁽¹⁾の報告書に倣



第487図 百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の微高地 (1/5,000)

い、百間川原尾島遺跡の東端の微高地を、「微高地1-3」、百間川沢田遺跡の西端の微高地を「微高地2-1」と表記し、微高地には、煩雑となるため各々に遺跡名を付さない。

縄文時代

百間川原尾島遺跡では、縄文時代晩期のものと考えられるドングリの貯蔵穴である原一土坑1が検出された。原一土坑1が位置する原一旧河道の右岸では、縄文時代晩期の土器や焼土などは検出されているものの、このような明確な遺構が検出されたのは初めてであり、原-旧河道右岸に縄文時代の遺構の存在が想定できることが可能となった。百間川沢田遺跡では、多くの遺構・遺物を検出しているが、遺物の多くは包含層中からであり、微高地の形成過程で土器を包含したのものと考えられる。遺構には炉や土坑があり、沢一炉1からは、乳棒状石器（沢-S1）が出土している。個別に掲載した土坑の一部については、形状が不定形で、埋土が基盤層と明瞭な差がないものも多く、人為的なものであると判断し難いものもある。また、微高地2-1形成以前の河道内、西側低位部に設定したトレンチから出土した自然木及び沢一炉1から出土した炭の放射性炭素年代測定を行った（第296・382図に取り上げ位置）。結果、環濠集落の位置する微高地2-1は約3500年前には河道の流路内であったが、約3100年前には沢一炉1が微高地2-1上に形成されており、およそ400年の間に厚さ2mにおよぶ土砂の堆積が進んだ結果、微高地2-1が形成されたようである。微高地2-1の西側の低位部は、約3050年前には河道の中であったことが判明したが、2-1微高地東側の低位部に位置する百沢2旧河道は、河道が一定程度埋没した斜面に沢田式の土器が包含することから、2-1微高地を弓状にとりまく低位部は、微高地の西側と東側では埋没した時期が異なることが推測され、北からの河道は当初、微高地2-1の東側を流れていたが、堆積作用が進むことで、西側へと流れが変化した可能性がある。

弥生時代前期

この時期の最も古い遺構は、微高地2-1に位置する環濠集落に代表される、百・前・Ⅱの時期のものである。環濠は、出土遺物から百・前・Ⅱの限定的な時期の遺構であることが理解できる。土層観察から、掘り直すなどの環濠の維持・管理に伴う活動が行われていない点が特徴として挙げられる。しかし、環濠と同時期であると明確な遺構は、沢一溝9、沢一住1・2や沢一土坑33のように少数で、微高地1-3や低位部には、この時期の明確な遺構は検出されていない。環濠内外には多くの土坑が検出され、個別にも報告しているが、環濠に伴う遺構であるかは判然としないものも多い。百・前・Ⅲになると、微高地2-1上には沢一溝10・11など、東西方向の溝が埋没した環濠を横断して掘削されるが、その他の遺構は希薄である。これとは対照的に、微高地1-3およびその西側の低位部では、百・前・Ⅲになって初めて、遺構が多く検出されるようになる。微高地1-3では、土坑67基、柱穴多数などが検出され、集落が微高地2-1から微高地1-3に移動したのものと考えられる。この微高地上の土坑の多くは、方形・長方形を呈するものであり、貯蔵穴として利用されていた可能性が考えられる。土坑25は平面形が長方形でありながら、深さ1.4mで、基盤層が砂層に変化する深度まで掘削を行っており、底面の標高が弥生時代・古墳時代の井戸底面と変わらないことから、湧水があった可能性がある。岡山市南方（後楽館）遺跡⁽²⁾で同じ時期の井戸が見つかるが、形態などは異なり、井戸とは断定できないため、土坑として報告している。また、サヌカイト集積遺構が1か所検出されている。石材でなく製品を集積したものである。百間川原尾島遺跡の西側の低位部では、この時期に水田1、水路と考えられる溝11条、原一旧河道の西側に接して杭列が見つかり、井堰である可

能性が考えられるものである。このような遺構には、居住域の拡大に伴う低位部における生産域の拡大と、河道を積極的に利用する技術力の高さが垣間見える。遺物では百・前・Ⅲの土器の細片とともに、小片ではあるが粘土帯土器が出土していることが、注目される。この粘土帯土器は、口縁部の形状の他にも、見かけの胎土や色調がこの時期の土器と異なり、砂粒をあまり含まず、色調は明黄褐色であったものの、口縁部上部を強くナデていることなどから、朝鮮系無文土器そのものではなく、渡来した人々の直近の子孫が作製した土器である可能性を指摘されている⁽³⁾。

弥生時代中期

微高地1-3では百・前・Ⅲ新段階～百・中・Ⅰの古段階の土器が共伴する土坑が7基あり、百・前・Ⅲと連続して集落が営まれる状況が看取される。その後、百・中・Ⅱの古段階にも竪穴住居1軒、土坑5基などが検出されるが、弥生時代前期と比べると遺構数・遺物数ともに減少する。微高地2-1では百・中・Ⅰに円形周溝墓1が作られたことが判明した。この円形周溝墓1は、昭和62年に南半部分を調査されていたが、主体部が確認できなかったことから「円形周溝1」として報告（百沢田3掲載）され、県内の周溝墓の検出例の少ないことから、墓と積極的に評価されてこなかった部分もあった。今回の調査でも、主体部は木棺の小口穴のみの検出だが、周溝内からは口縁部や頸部を打ち欠いた供献土器と周溝内埋葬と想定される土坑が検出され、円形周溝墓であることが明確となった。岡山県下で円形周溝墓の類例は、瀬戸内市堂免遺跡⁽⁴⁾のみであるため、当該地域の墓制を考えるうえでも重要な成果といえる。また、隣接する円形周溝2も、同様に円形周溝墓であったことが推測されるが、円形周溝2の時期については、出土遺物が無いために詳細は不明である。他の遺構の切り合い関係から、百・前・Ⅲである可能性はある。この時期の遺構が沢-円形周溝墓以外には希薄であることから、微高地2-1が集落域から墓域へ変化したことがうかがえる。また、包含層中にもこの時期の遺物はほぼないといえる。遺構・遺物はともに減少しているが、低位部においては百間川原尾島遺跡の西端では、原-水田2と微高地1-3の東側の原-水田3・沢-水田1が検出されている。原-水田3・沢-水田1の位置する低位部は中期になって初めて水田として利用されており、水田域の拡大が見られるといえよう。これらの水田へ水の供給を行っていたと考えられる微高地1-3西側の低位部を流れる原-旧河道と原-溝14は、遺物から百・中・Ⅲの時期には埋没したと考えられる。

弥生時代後期

微高地上では、後期になると、微高地1-3では、竪穴住居を2軒、井戸2基、土器棺1基、土坑19基、製塩炉2基などがある。微高地1-3東側では、微高地端に溝が巡り他の微高地1-2などと同じ状況が看守できる。この後、微高地1-3上には、原-溝43、原-水路3が南北に貫流するのみで、居住域としては百・後・Ⅰ～Ⅱの時期にのみ使われていたようである。百・後・Ⅲ～Ⅳになると、今まで弥生時代後期の遺構が検出されていなかった微高地2-1で、井戸4基、土坑2基が検出された。井戸のなかには木製の井戸枠を設置したもの（沢-井戸3）も検出された。微高地2-1の南半は、水田にするために大きな開削をしており、もともと居住域として利用する意識の希薄さを感じられる。百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の低位部には、全面に水田が展開する。この水田層の下層で溝や土坑が検出されているが、時期が明確にわかるものはほとんどないのが現状である。水田層からは百・後・Ⅱの土器が出土し、従前通り、この時期に作られた水田であることが理解される。また、水田への用水路としての機能が考えられる原-溝33の埋没後の上層に水田層が観察できたことから（第471図）、微高地の開削が、後期水田を最初に作ったときよりも一段階遅れることが理解でき

る。水田に付帯する施設として、水路も検出されている（原一水路1～3）。低位部の原一水路1・2の下層で検出した原一溝21・24・25の時期が、水路1・2と同じ時期の百・後・Ⅳの土器が出土することから、水路や畦畔の補修が示唆され、水田経営の維持・管理の様子が垣間見える。また、原一水田7では、洪水砂の詰まった楕円形の穴が規則的に並んでいる状況で検出された。稲株の痕跡であると考えられている遺構で、1区画の田面でまとまって検出されている。後期末には、大規模な洪水によって低位部のみならず、微高地までもが洪水によって運ばれた土砂によって完全に埋没してしまう。百間川沢田遺跡の壁面では、洪水による堆積土に明瞭なラミナが観察され、北から土砂が流れて堆積したことが判明した。また、この洪水による堆積土は幾層かに分層でき、これは粒子の大きさによって沈殿のスピードが異なるために小さい粒子の土砂から堆積し、最終的には粗い粒子の砂礫が堆積することで、その粒子の大きさの違いによって視覚的には分層が可能な堆積の状況を結果的に呈しており、この土砂の堆積状況から、一度の洪水によって大量の土砂が運ばれて埋没したことを指摘されている⁽⁵⁾。また、百間川原尾島遺跡では、百原5製塩炉の西側に隣接して、製塩炉が新たに2基検出され、合計3基となり、内陸で製塩を行う、この集落の特殊性がうかがえる。

古墳時代

弥生時代後期末の洪水による土砂の堆積により、弥生時代以前には微高地と低位部とで高低差のあったものが、平坦な地形と変化している。洪水後、百・古・Ⅰには、百間川原尾島遺跡では竪穴住居7軒、井戸7基、百間川沢田遺跡では竪穴住居7軒、掘立柱建物4棟、井戸6基などを検出している。井戸は、もともと低位部であったところに近い場所で検出され、百間川沢田遺跡2⁽⁶⁾で指摘されているように、竪穴住居に比して井戸の数は多い。両遺跡ともに竪穴住居や掘立柱建物といった集落を構成する遺構は、弥生時代以前の微高地上に立地していることがわかる。このうち、百間川沢田遺跡で見つかった掘立柱建物4棟のうち3棟は、いわゆる布掘り建物であった。また、竪穴住居の床面積が約50㎡を越えると大形のものが検出されていることなどから、調査区周辺にこの時期の集落の中心があったと考えられる。竪穴住居には、入り口の施設と考えられる礫を伴う土坑が検出されたものが3軒見つかるなど、竪穴住居内の使い方がわかる事例が検出されたといえる。後期後半には、もともと低位部であった場所に溝が多数検出されている。

中世以降

この時期の遺構・遺物は少ない。遺構全体図に掲載している多数の溝は、近世～近現代にかけての水田に関連した遺構である。このなかに条里地割に合致した溝があり、出土遺物から中世にまで条里遺構の時期が遡る可能性がある。この条里境の溝は、位置を踏襲しながら何度も掘り直しが行われ、改修工事直前の昭和52年まで使われていたことが判明した。 (團)

註

- (1) 「百間川原尾島遺跡7 百間川二の荒手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』215 2008
- (2) 『南方（後楽館）遺跡』岡山市教育委員会 2011
- (3) 片岡宏二氏（小都市埋蔵文化財調査センター）からのご教示による。
- (4) 「堂免遺跡」『邑久町史』考古編 邑久町史編纂委員会 2006
- (5) 趙哲済氏（財団法人大阪文化財研究所）からのご教示による。
- (6) 中野雅美「第4節 古墳時代初頭の井戸について」「百間川沢田遺跡2 百間川長谷遺跡2」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』59 岡山県教育委員会 1985

第2節 百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の変遷

1 弥生時代の集落

この節では、過去の調査を含めた弥生時代の百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡についてまとめを行い、その範囲として、第487図にあるように、微高地1-3西側の低位部、微高地1-3、微高地2-1、微高地2-2及び、百間川沢田（市道）遺跡⁽¹⁾と原尾島遺跡⁽²⁾を対象に含むこととする。これは、西側は、原-旧河道に井堰を設け（百原尾島2井堰1～3）、右岸と左岸の双方の水田に水の供給を行っていたと考えられること、微高地2-2の東側では遺構が希薄なこと、百間川沢田（市道）遺跡と原尾島遺跡は、微高地1-3に含まれると考えられることから、この範囲とした。また、微高地2-1の環濠集落や弥生時代前期末～中期初頭の土器が共伴して出土しているため、ここでは、第2節の時期区分よりも弥生時代前・中期の時期を細分して遺跡の変遷を考えたい。

弥生時代前期中葉（百・前・Ⅱ）

弥生時代の最も早い段階の遺構は、微高地2-1の環濠集落と環濠外の竪穴住居1軒、溝1条、微高地2-2上には、微高地の西端に溝が1条と、土坑墓が1基確認されている。また、微高地2-2上のたわみ部分に作られた水田は、この時期まで遡るものと考えられている。微高地1-3ではこの時期の遺構は見つかっていないが、微高地1-3の北側と考えられる百間川沢田（市道）遺跡では、この時期の土器棺墓が検出されており、その周囲で検出されている木棺墓の一部については、この時期のものであると考えられている。百間川遺跡群全体からみても、弥生時代のなかで最も古い時期の遺構の一つがこの周辺で、まとまっているといえる。環濠は南側の一部を除いて調査が行われ、環濠の内部では7軒の竪穴住居が検出されている。ただ、この微高地2-1の南部については、弥生時代後期の水田域の拡大に伴う開削が大きく、およそ30cmの深度で削平を受けているために環濠の南半では竪穴住居が検出されていない可能性も考えられる。このことから、微高地2-1上の居住域には環濠を巡らせ、居住域とはそれぞれ低位部を挟んで、東側には生産域、北側には墓域を設けていた

表12 百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の主要遺構数

微高地	主な遺構	時 期												
		百・前・Ⅰ	百・前・Ⅱ	百・前・Ⅲ	前期	百・中・Ⅰ	百・中・Ⅱ	百・中・Ⅲ	中期	百・後・Ⅰ	百・後・Ⅱ	百・後・Ⅲ	百・後・Ⅳ	後期
1-3 微高地	竪穴住居			3		1					4			
	掘立柱建物									1	1			
	井戸		1?								3			
	土坑			108	5	24	12		2	3	12			11
	土坑墓		5	1										
	土器棺		2								1			
	製塩炉										3			
計		7	112	5	24	13		2	4	24			11	
2-1 微高地	竪穴住居		8											
	掘立柱建物													
	井戸											3	1	
	土坑		25	9	64	2	2	1	7				2	
	土坑墓													
	円形周溝墓			1		1			2					
	土器棺													
計		33	10	64	3	2	1	9			3	3		
2-2 微高地	竪穴住居													
	掘立柱建物													
	井戸													
	土坑			3	15									3
	土坑墓		1	5	4	1								3
	土器棺													
計		1	8	19	1								6	

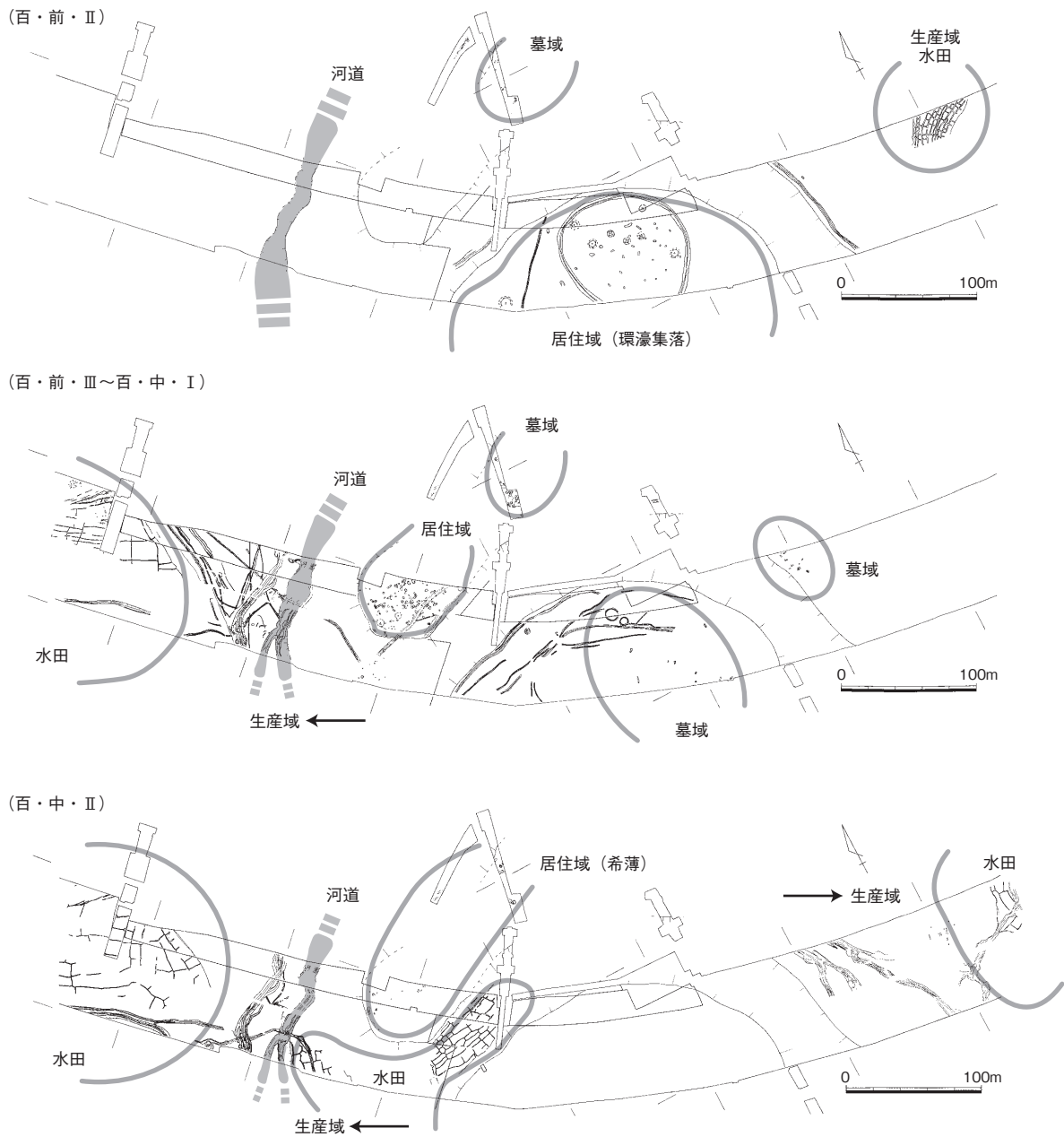
ことが理解できる。居住域のある微高地とは地点を異にして、低位部を挟んで近接した微高地それぞれに、墓域と生産域を設けている点特徴的である。過去の調査で、環濠内で見つかった円形周溝状の遺構は、出土遺物の希薄さもあって、環濠と同時期の遺構であると考えられていた。このことから、円形周溝状遺構を墓と考え、環濠集落内に住居と墓が混在する様相を呈する、もしくは円形周溝状の遺構を、墓として積極的に評価しない状況が見受けられた。しかし、今回の調査において円形周溝墓が環濠集落廃絶後のものであることが判明したことから、環濠集落内には、居住域のみの利用であったと考えたい。総社市の南溝手遺跡では、弥生時代前期の居住域と墓域が混在する状況はみられる⁽³⁾が、ここでは他地域の同時期の環濠集落と同様に⁽⁴⁾、居住域と墓域は分離して設定されていると考えた。環濠集落内には、時期不詳の木棺墓が2基検出されており、これらの墓の評価をどう考えるかであるが、環濠集落内には居住域のみであったと考えるならば、これらの木棺墓の時期は、円形周溝墓と同様に百・前・Ⅲ～百・中・Ⅰの時期のものとするのが妥当であると考えられる。

弥生時代前期後葉～中期前葉（百・前・Ⅲ～百・中・Ⅰ）

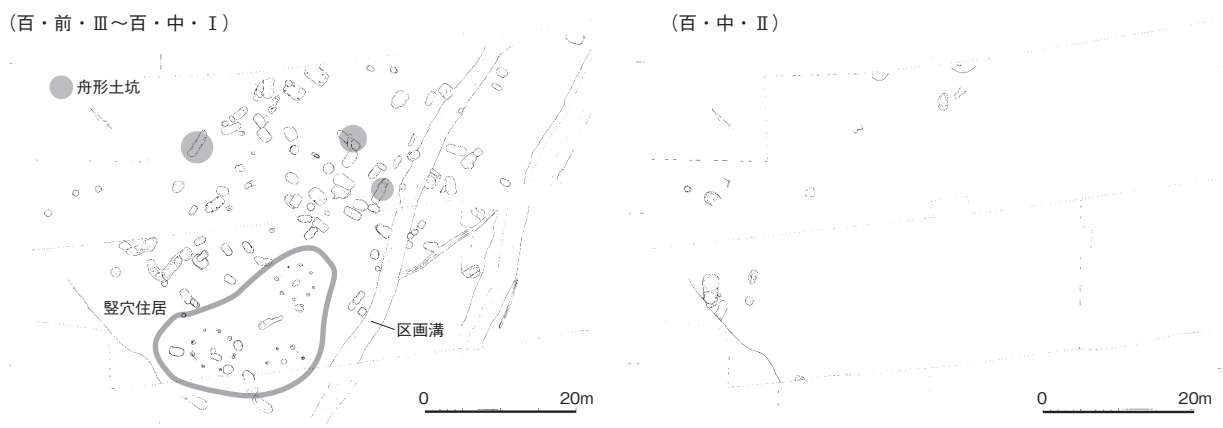
百・前・Ⅲになると、微高地1-3及び低位部全体に、多数の遺構が確認され、集落の急激な拡大が見られる。その一方で、微高地2-1上では環濠集落は百・前・Ⅱのなかで埋没したのちは、集落は継続しない。このことから、微高地2-1から微高地1-3に集落が移動していることが理解される。微高地1-3には、竪穴住居3軒、土坑多数、特に微高地1-3東側の溝12は、幅3m、深さ1mと規模の大きなもので、出土した土器から、百・前・Ⅲ～百・中・Ⅰの時期の溝である。この集落には環濠は巡らしていないものの、集落の東端に溝を掘削することで集落を区画したのと考えられる。このことから遡って、百・前・Ⅱの環濠の機能の一つとして、集落を区画する目的があったことが推測される。微高地2-1上には、環濠埋没後のこの時期には溝が東西方向に延び、また、円形周溝墓が2基築かれる。微高地2-1南半には、土坑などが少数みられるものの、積極的な土地の利用はみられない。前段で触れているが、微高地2-1上の木棺墓については、円形周溝墓と同時期であると考えられ、微高地2-1は居住域から墓域と変化したと推測される。それとは地点を変えて、微高地2-2の西側にも13基の土坑墓・木棺墓が作られ、供献土器の出土を多くみる。また、たわみ部分に前代から引き続いて水田が営まれているが、その他の明確な遺構については不明である。このことから、微高地1-3上に集落は移動し、墓域は微高地2-1、微高地2-2上、微高地1-3北部の百間川沢田（市道）遺跡に点在するようになる。ただ、微高地1-3の舟形土坑は、墓である可能性もあり、居住域と墓域が混在していた可能性も否定できない。そして低位部では、微高地1-3西側では、旧河道に井堰を複数設けて（原一杭列1、百原2井堰1）用水路を整備し、低位部に水田を広げて生産域を拡大していったものと考えられる。

弥生時代中期中葉～後葉（百・中・Ⅱ～Ⅲ）

微高地1-3では、引き続き集落が営まれ、竪穴住居や土坑が検出されている。しかし、遺構数は減少し、百・前・Ⅲ～百・中・Ⅰに多く見られた平面が長方形の貯蔵穴と考えられる土坑は、この時期には見られなくなり、大型の土坑の形状は断面が椀状で平面が円形を呈する。集落内では他に貯蔵施設と考えられるような遺構も見られず、居住域としては希薄になる。このことから百・前・Ⅲ～百・中・Ⅰの時期の集落の継続性と、百・中・Ⅰと百・前・Ⅱの集落の断絶がうかがわれる。また、他の微高地上でも遺構・遺物ともに希薄である。それに対して、低位部では旧河道で井堰（百原2井堰2・3）と、それにもなって多くの水路が見つまっている。また、弥生時代前期末に作られた水路



第488図 百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡の弥生時代前期～中期の変遷 (1/5,000)



第489図 百間川原尾島遺跡の微高地における弥生時代前期～中期の遺構 (1/1,000)

(原一溝11)は、基幹水路であったのか、幾度もの補修を繰り返しながら弥生時代中期を通して(原一溝14)、旧河道が埋没するまで使用され続けるようである。井堰と、井堰から東西へ延びる水路が整備されることで、低位部の広い範囲に水田が新たに作られ、弥生時代前期と比べて、生産域が飛躍的に増大していることがわかる。水田の区画は前期の水田と同様に微地形に即し、不整形で一区画あたりの面積に大きな差が見られる。百・中・Ⅲになると、この時期の遺構はほとんど見られない。ただ、遺構は希薄であるが、原一旧河道や原一溝14からまとまった量の遺物が出土していることから、旧河道の上流に当たる部分に、この時期の集落の中心が存在していた可能性が考えられるものの、微高地1-3の北側でもこの時期の遺構は検出されておらず、不明な点が多い。百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡全体をみても、この時期の遺構は希薄であり、微高地1-3で少数が検出されているにすぎない。低位部での生産域の拡大を支えた集団の拠点については、調査範囲外に求められるといえよう。土層断面の観察から、原一水田2の上層には、厚さ5cmの洪水砂が覆っており、この洪水砂からは遺物が出土していないが、今までの調査成果から、百・中・Ⅲの時期の洪水堆積物であると考えられるもので、弥生時代後期末の大洪水と比べると規模の小さい洪水ではあるが、この時期に水田経営が一旦、中断したことが推測される。後に百・後・Ⅱになって再び低位部には水田が作られる。

弥生時代後期

弥生時代後期は、低位部全体に水田が広がり、百間川原尾島遺跡から下流の百間川今谷遺跡でも弥生時代後期末の洪水砂で覆われた水田が検出されている。この水田層の出土遺物などから百・後・Ⅱ以降の時期の水田であることがわかっており、百・後・Ⅱの時期には、低位部のみならず微高地の端部を開削してまでも広大な範囲で水田経営が行われる。これらの水田は、後期末の洪水層によって覆われていることから洪水直前の景観を知ることのできる良好な状態で検出されている。弥生時代中期の水田とは異なって区画が整然と並び、直線的に延びる島状高まりや大畦畔によって大きく区画され、その区画ごとに田面の高さを変えていることなどから、水田の区画や水路が計画的に配置されているといえる。水路は維持するための改修が幾度も行われ、長年にわたって多くの労力が投入されており、区画の形状からも、弥生中期水田と比べて格段に水の供給・排水の整備がなされているといえる。この水田が作られた百・後・Ⅱには、微高地1-3で集落がみられ、微高地2-1・2-2には遺構は水田関連の遺構以外は無いことから、微高地1-3に、この時期の水田の経営を中心的に担った集落が展開することが想定される。後期後半になると、一転して微高地1-3は居住域としては放棄され、微高地2-1上に、土坑および井戸が検出される。ただ、遺構が井戸と土坑と限定的で少数なこと、微高地2-1南半はすでに水田として開削されていると考えられることから、微高地2-1上に集落が展開した可能性は低く、今までの調査成果から、後期の集落の中心は百間川原尾島遺跡の西側にあたる微高地1-1・1-2であり、これら集落の規模に比べると、はるかに規模の小さな集落であったといえよう。(團)

註

- (1) 『百間川沢田(市道)遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1992
- (2) 「原尾島遺跡 沢田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』153 岡山県教育委員会 2000
- (3) 松木武彦「墓と集落および人口からみた弥生-古墳移行期の社会変化-吉備南部を分析対象として-」『古代吉備』第25集 古代吉備研究会 2013
- (4) 川部浩司『大和弥生文化の特質』学生社 2009

2 古墳時代の集落

本節では古墳時代の集落を中心に、これまでの調査成果をまとめる。まず、百間川沢田遺跡（以下、各遺跡とも百間川を略す。）を中心として隣接する原尾島遺跡、今谷遺跡、兼基遺跡における時期別の主要遺構数を表13にまとめた。このうち原尾島遺跡については既に「百原尾島5」、「百原尾島6」において触れたところであり、ここでは沢田遺跡及び、原尾島遺跡微高地1-3を中心に述べる。

沢田遺跡は、大きく3つの微高地からなり、これを上流側から微高地2-1（横田・高縄手A調査区）、微高地2-2（高縄手B調査区）、微高地2-3（四元調査区）と呼び、微高地1と原尾島遺跡との間の低位部を低位部1とし、そこから下流に向けて順に低位部2、低位部3と呼ぶこととする。微高地1-3（原尾島遺跡三ノ坪・横田調査区）については、沢田（市道）遺跡と一連の微高地とみるべきであろう。

沢田遺跡では、竪穴住居が49軒、掘立柱建物28棟、井戸69基を、原尾島微高地1-3では竪穴住居を7軒、井戸14基確認しているが、これまでの調査が集落のごく一部を明らかにしたに過ぎないことを前提にこれらを中心に論を進める。なお、ここにいう古墳時代とは土師器吉備型甕の成立をもって弥生時代と画している。古墳時代の始まりを定形化した前方後円墳の成立とするならば（箸中山古墳の出現）、百・古・Iは弥生時代末となる。

竪穴住居

平面が矩形、長方形、五角形を呈し、規模は一辺が2.6mから最大で7.5mを越えるものまでである。1辺2～4m程度の小形竪穴では柱穴が2本ないしは無柱穴であり、中央穴は確認できない場合も多いが、床面中央部には炭や灰の堆積がみられる場合が多い。一辺が5mを越える大形の住居13棟のうち、2棟は平面形が円形ないしは多角形をなしていた。また、大形竪穴のうち沢田3竪穴住居15や沢田3竪穴住居15、沢田6竪穴住居7のように住居では無く鍛冶工房やその可能性がある竪穴も存在する。竪穴の内部構造のうち、ベッド状遺構を持つものは4軒と少ないが、方形土坑の周囲に敷石を持つ竪穴（本書原尾島竪穴住居6・10、沢田竪穴住居7、原尾島3竪穴住居14）が確認できた。石敷きは一度掘削した方形土坑を埋め戻した後に敷かれている。沢田竪穴住居7では、土坑底にさらに木梯を据え付けた円形の凹みがみられた。原尾島竪穴住居10（本書）では土坑底にも敷石に使われた小礫がみ

表13 百間川各遺跡の主要遺構数

遺跡	微高地	種別	古・I	古・II	古・III	前期	古墳計	遺跡	微高地	種別	古・I	古・II	古・III	前期	古墳計
百間川 沢田遺跡	2-1 (横田高縄手A)	竪穴住居	21	13	3	5	42	百間川 原尾島遺跡	1-1	竪穴住居	23	6	5	4	38
		建物	0	0	0	26	26			建物	1	0	0	1	2
		井戸	25	22	0	8	55			井戸	12	3	0	0	15
	2-2 (高縄手B)	竪穴住居	0	2	0	4	6		1-2	竪穴住居	5	0	0	1	6
		建物	0	0	0	1	1			建物	0	0	0	0	0
		井戸	5	5	0	1	11			井戸	7	0	0	0	7
	2-3 (四元)	竪穴住居	0	1	0	0	1		1-3	竪穴住居	7	0	0	0	7
		建物	0	0	0	1	1			建物	0	0	0	0	0
		井戸	0	3	0	0	3			井戸	12	0	0	2	14
	合計	竪穴住居	21	16	3	9	49		合計	竪穴住居	35	6	5	5	51
		建物	0	0	0	28	28			建物	1	0	0	1	2
		井戸	30	30	0	9	69			井戸	31	3	0	2	36
兼基遺跡	合計	竪穴住居						合計	竪穴住居	1	3	18	2	24	
		建物							建物	0	0	17	7	24	
		井戸							井戸	0	3	16	3	22	



第490図 百間川沢田遺跡の古墳・古代集落 (1/1,500・1/3,000)

られたことから木蓋の存在も想定できよう。

注目すべき出土遺物には、沢田2 竪穴住居21から素文鏡や滑石製白玉といった祭祀に関わるものがある。

布掘り建物群

掘立柱建物1・2・4は百沢田3建5とともにまとまった建物群を形成する。

時期は、百・古・I～IIの間を想定するが、建物群のその周囲には百・古I～IIを通じて竪穴住居が存在しないことから集落内において特別な場所であったとみられる。また、これらが同時に存在した確証はないが、建物2と百沢田3建5は建物規模や軸線が近似することから同時期の所産である可能性が高い。

県下では、沢田遺跡以外にも津寺遺跡や原尾島遺跡において古墳時代の布掘り建物が存在する。総柱建物で倉庫と考えられる百原尾島6建物4以外は側柱建物である。津寺遺跡5建物54は、柵に囲われた区画の北東部に位置し、床面積も約42㎡と他を圧倒し、独立した棟持ち柱をもつ可能性も考えられる。また、津寺遺跡や原尾島遺跡では、布掘り建物がいずれも集落の中央部に位置する傾向がある。沢田遺跡例では、建物の床面積が竪穴住居のそれと特に隔たりはなく、沢田遺跡の中心的な集落B-2に付随する倉庫群あるいは、「布掘り」痕が柱材据え付けの痕跡であれば平地式建物の可能性も考えておきたい。

井戸

百間川遺跡群では、弥生時代中期以降の井戸は集落内において竪穴住居と密接に結びついて存在しており、上道遺跡でみられたような集落内での井戸の位置に変化はない。沢田遺跡の古墳時代集落においても、集落B2にみられるように微高地端や微高地上の窪地部といった竪穴住居や建物の周囲に位置することが多い。検出面での規模が1m未満から2mを越える大形のものまでみられるがいずれも素掘りであった。

これまでに指摘された通り、竪穴住居に対して井戸の比率が高いこと、井戸底や最下層堆積土中（あるいは直上）に甕を主体とした完形土器が出土することが多いことは本報告においても変わらない。先に述べたように竪穴の一部が工房など住居以外の機能をもつとするならば、住居一軒あたりの井戸の保有比率はさらに高くなる。これまでに井戸として報告したもののうち井戸以外の機能を考えるべきだろうか。本報告の井戸5・6のように近接した時期の遺構で切り合い関係にあり、さらに井戸6では底部付近に炭層が水平に堆積していた。この状況は通常の井戸遺構にはみられないことから貯蔵施設の可能性を指摘する。いずれの井戸も概ね湧水層には達しており、水を利用した貯蔵を考えたい。

井戸底の土器については、土師器甕を主体とした完形品が1から複数個体出土する例があり、底部に穿孔を施す個体もあることから祭祀との関わりで評価されている。ただし、このような土器の埋納は井戸83基中27基に限られることから、井戸廃絶時などに必ず行われたというよりも、雨乞いなどの儀礼を考える必要があるのでは無かろうか。

集落の動向

弥生時代後期の様相は、微高地1-3では竪穴住居と考えられる柱列を1箇所、微高地2-1では、弥生時代後Ⅲ～Ⅳにかけての井戸や土坑が数基存在するものの、竪穴住居はみられなかった。後・Ⅳ古層を示す井戸3（本報告）では、堆積土に洪水砂はみられない。その後起こった大洪水の後、各微高地上において古・Iから古・IIにかけての集落が展開する。微高地1-3（集落A）では、古・

Iの竪穴住居7基及び井戸14基（他に時期不明1）が存在するものの、古・II以降は生活の痕跡はない。集落はさらに北側に広がる可能性はあるが、沢田（市道）遺跡の範囲には及んでいない。微高地2-1（集落B）では、自然堤防上に弧状に展開し、古・Iの竪穴住居21軒、井戸25基、古・IIの竪穴住居13軒、井戸22基、時期不明の竪穴住居5軒、井戸8基、掘立柱建物26棟からなり、沢田遺跡の中心といえる。この集落BはさらにB-1～3の3グループに分かれる可能性があり、古・IからIIにかけて西から東へと遺構の分布が移る傾向がある。微高地2-2（集落C）では、竪穴住居6軒、井戸11基がある。井戸の時期から、古・Iから古・IIにかけての集落が展開したとみられるが、南北に集落が広がる可能性は低く、集落Aとともに集落Bの子村であった可能性が高い。低位部の土地利用については、古・I～II段階は明らかでないが、以降、6世紀代には微高地を含め遺物が散見され、低位部3では耕作痕が認められる。低位部2では7世紀代には水田層が確認できるほか、低位部（旧河道）を直交するような溝が低位部1・2において確認できる。本報告溝23、原尾島2溝218では、溝底に2～3列ほどのピット列を確認しており、低位部を横断する木道の可能性を指摘しておきたい。

古・I～IIに増大した集落も古・IIIには再び衰退し、唯一微高地2-1において、竪穴住居3軒を確認するのみである。原尾島遺跡では微高地1-1に5軒が確認されるが、集落の中心は別地点あるいは別の微高地に移ったと考えられている。この傾向は百間川遺跡群のみならず備中域の大集落である津寺遺跡をはじめ吉備南部域の拠点的集落とみられる上東遺跡、加茂A・B遺跡や矢部南向遺跡も同様な傾向を示す。一方で沢田遺跡に隣接する今谷遺跡や兼基遺跡では古・IIIになると遺構数が急増することから、沢田遺跡との間での集落の移動が考えられる。吉備南部域におけるこのような集落の消長は、巨大前方後円墳の造営と密に関わっていたとも考えられよう。

なお、微高地1-2・3では5世紀後半以降、7世紀にかけて再び集落が活気を呈するが、微高地2-1～3および微高地1-3では、微高地2-1に奈良時代の遺構（掘立柱建物2棟、井戸1基）が存在するのみで水田化されてしまうのである。

古代以降

上道郡幡多郷に属す。遺構は微高地2の中央部に建物3棟と井戸1基がある。井戸からは、奈良時代後半の須恵器、土師器と供に斎串や馬形の木製品などが出土しており、祭祀に用いられたと考えられる。また、微高地2と3の間では、真北方向を指向する2条の溝百沢田3溝124・125、百沢田2溝161・162がある。旧河道上において洪水砂層上から掘りこまれた遺構で、周辺にある溝は地形に即して流走しており、北西から南東方向を指向することに比べて時期的な差や人為的な感を受ける。報告では古墳時代として掲載しているが、奈良時代の可能性も指摘されている。ちなみに周辺には古墳時代の建物と井戸が2基ずつ存在するのみである。この遺構を北に延長させると備前国府推定地に至ることから道路遺構の可能性も考えておきたい。道路遺構の側溝とするならば幅員9～10.5mになる。

（弘田）

参考文献

- 「上東遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』158 岡山県教育委員会 2001
『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1992
百間川原尾島遺跡、百間川沢田遺跡、百間川今谷、百間川兼基遺跡の各報告書

3 中世以後の百間川

中世の集落

古墳時代以後、この地域に再び生活の場が求められるのは平安時代後期のことである。この時期の明確な遺構は原尾島3井戸9のみであるが、その方形をなす井側の痕跡はこの周辺に残る条里地割の方位と一致している。対岸の御野平野では、津島遺跡や田益田中遺跡において8～9世紀にさかのぼる条里地割の痕跡が確認されており⁽¹⁾、備前国府から南に離れたこの地域においても、その施行がこの時期までさかのぼる可能性がある。

鎌倉時代には、東西の坪境を3.4～3.8mの間隔を保って併走する溝（原尾島2溝25、原尾島3溝52、原尾島5溝37～39、原尾島6溝135～140）が掘削される。これらは道路の側溝と考えられており、その南北には小規模な建物や白磁・青磁碗を副葬する土坑墓も検出されていることから屋敷地が展開していたものと思われるが、これを画する明瞭な施設は認められない。しかし室町時代前期に入ると、周囲を溝で囲んだ区画をいくつか指摘できる（原尾島6溝117・原尾島4溝84、原尾島4溝87・92、原尾島4溝93・原尾島6溝123、原尾島2溝88・原尾島4溝94、原尾島4溝96・原尾島5溝40・41・45）。これらは一辺20mほどの規模をもち、道路と見られる幅5mほどの空地によって相互に隔てられている。このような状況はほかに、鹿田遺跡、高塚遺跡、津寺遺跡などでも認められる⁽²⁾。

ところで、県南部では鎌倉時代に入ると集落遺跡の数が著しく増加するものの、室町時代前期には次第にその数を減らし、後期まで存続するものは極めてまれである（表1）。集落が移動もしくは廃絶する原因として、百間川原尾島遺跡では大規模な自然災害が想定されているが、中島遺跡のように居館の形成を契機とする政治的な再編も考えられる⁽³⁾。江戸時代には、検地によって複雑な土地の所有関係が整理され村境が定められると、耕地の間に散開していた人家は一か所に集約され、現在まで続く集落が形成されたものと思われる。

百間川の築造

承応3年（1654）、岡山城下を襲った洪水を契機として、津田永忠が献策した熊沢蕃山の川除け法に基づき、旭川の左岸に越流堤（荒手堤）と放水路（荒手川）の建設が計画される。寛文9年（1669）に荒手（後の二の荒手）の築造に着手し、その翌年には「水請堤」の工事が行われたが、その普請を命じられた尾沢彦助の奉公書から築堤工事が3か月という短期間のうちになされたことが判明している。このため、百間川の築造経過を検討した中野美智子は「この筋に在来の堤防が残存していて、築堤はそれをかさ上げしたり、腹付によって拡幅したり、あるいは後方に移動する引堤工事等を主体にした可能性がある」と指摘した⁽⁴⁾。しかし、発掘調査の成果はもとより、百間川築造以前の様子を描いた『上道郡古図』においても、こうした河川の存在は確認できない。ところで、この『上道郡古図』には、操山北麓に広がる窪所（低湿地）が図示されている。寛文度の工事は、この低湿地へ溢水を導き、操山東端を流れる中川へと排水することを目的として行われたのではなかろうか。これに要する

表14 中世集落の消長（県南部）

	900	1000	1100	1200	1300	1400	1500	1600年
旭川東岸	天神河原遺跡							
	国長遺跡							
	中島遺跡							
	東岡山遺跡							
	百間川原尾島遺跡							
	米田遺跡							
旭川西岸	北方藪内遺跡							
	伊福定国前遺跡							
	鹿田遺跡（岡大）							
	鹿田遺跡（県立病院）							
足守川	高塚遺跡							
	三手原遺跡							
	津寺（土筆山）遺跡							
	津寺（丸田）遺跡							
	津寺（中屋・高田）遺跡							
	川入・中撫川遺跡							

堤の延長は川筋全体の1/3ほどであり、しかもその間には自然堤防の高みを利用して堤を省略した箇所も存在する。しかし、こうした不十分な放水路では溢水を滞りなく流下させることは難しく、流域の村々は水害のたびに甚大な損害を被ることとなった。『集義外書』に記された熊沢蕃山の批判は、こうした状況を指摘したものであろう。そこで、貞享3年(1686)に中島村から海吉村までの「荒手堤繕普請」が行われる。この工事では延長約7kmにわたる堤防の修築が行われるとともに、竹田に一の荒手、二本松に三の荒手が新たに構築されて三段構えの越流堤を完成させた。こうして、昭和41年(1966)に改修工事ははじまるまで残されていた百間川の姿が完成したのである⁽⁵⁾。

さて、こうした百間川の築造にかかわる痕跡について、発掘調査により明らかになった点をいくつか述べておきたい。平成7年(1995)に実施した二の荒手の発掘調査では、右岸導流堤に施された巻石の下から、厚さ30cmほどある花崗岩の割石を70度の勾配で5～6段積み上げた古い石積みを確認した⁽⁶⁾。標高5.3mを測る石積みの天端は荒手本体の石張りの下に残る盛土の上面とほぼ一致し、1.7mという石積みの高さは文化11年(1814)に作成された見取絵図の「直高五尺五寸」という寸法と近似する。このことから現在の導流堤は、近代以後になって高さ1.8mほどの土砂が盛り上げられ、さらに約40度の緩やかな勾配をもつ石張りで被覆したことが判明した。放水路に築かれた堤防については米田の排水機場建設に伴う調査に際してその土層断面が観察されている⁽⁷⁾。基底幅6m、高さ2mを測る旧堤防の盛土は、比較的均質な砂質土を旧地表面から一気に積み上げた様相を呈しており、土質や施工方法に格段配慮した様子はいかがいえない。こうした状況は、16世紀後半を上限とする足守川左岸堤防でも観察されている⁽⁸⁾。積み上げられた盛土に含まれている中世の遺物は、堤内に広がっていた中世遺構に由来するもののようで、築堤に伴う採土が近傍で行われたことを示している。こうした採土の様子を具体的に示す遺構が百間川原尾島遺跡において見つかった⁽⁹⁾。幅10m前後ある長方形の区画を深さ0.8mにわたって連続的に掘削しており、南北に長い帯状をなす採土地の間は幅2mの土手状に掘り残している。地割に沿って計画的に行われたこの大規模な採土は、17世紀末～18世紀初頭という出土遺物の年代観からしても、隣接して行われた築堤工事との関連を想起させる。この築堤にあたっては、南北の地割に沿って走る水路に石積みの伏樋を設けて堤防の下を通してあり、『撮要録』



写真66 足守川左岸堤防の土層断面

収載の『荒手川筋絵図』には30か所にのぼる樋門の位置が記されている。近年、低水路の掘削に伴って改修工事が行われたが、その際に石積み樋門の基礎として丸太を多数打ち込んでいる様子が観察されている⁽¹⁰⁾。

その後の百間川

百間川が築造された後も洪水被害は頻発しており、明治25年（1893）には三の荒手が決壊する被害を出している。昭和9年の室戸台風による大水害を契機に旭川の改修が計画されたが、戦局の悪化に伴い中断を余儀なくされた。昭和41年によく策定された改修計画では、昭和9年の最大水流量を基準として、幅80m、深さ2mの低水路を新たに掘削し、その排土をもって高さ3m、上幅3mほどの堤防を高さ5m、上幅7mにかさ上げすることとなった。改修工事は昭和49年から本格的にはじまり、平成9年には一定の完成を見た。これにより、かつて田畑が広がっていた河川敷は公園として整備され、休日ともなれば多くの市民に利用されている。しかしその一方で、百間川そのものが文化財として取り扱われることなく工事が進められたことも否めない事実である。これは、百間川が治水のための施設として築造されたがゆえにやむを得ないことではあったが、今後、江戸時代の高度な土木技術を今に伝える文化遺産としての価値を再認識し、その保存・活用に向けてさらなる検討が行われることを期待したい⁽¹¹⁾。

（亀山）

註

- (1) 「田益田中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』140、岡山県教育委員会 1999
「津島遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』173、岡山県教育委員会 2002
- (2) 「鹿田遺跡5」『岡山大学構内遺跡発掘調査報告』23、岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 2007
「津寺遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』90、岡山県教育委員会 1994
「高塚遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』150、岡山県教育委員会 2000
- (3) 「中島遺跡・宮南遺跡・国長遺跡・天神河原遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』221、岡山県教育委員会 2009
「中島遺跡」岡山市教育委員会 2011
- (4) 岡山河川工事事務所編「百間川の歴史」1978
- (5) この工事の主眼は百間川下流の沖新田開発に置かれており、流域の村々に生じる損害には「加損米」を支給することで解決を図っている。
- (6) 「百間川二の荒手遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』215、岡山県教育委員会 2008
- (7) 「米田遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』101、岡山県教育委員会 1995
- (8) 「津寺遺跡6」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』143、岡山県教育委員会 1999
- (9) 「百間川原尾島遺跡」2『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』56、岡山県教育委員会 1984
「百間川原尾島遺跡」3『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』88、岡山県教育委員会 1994
「百間川原尾島遺跡」7『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』215、岡山県教育委員会 2008
- (10) 中野雅美氏教示。
- (11) 「百間川分流部周辺の有効活用に向けた提言について」百間川分流部周辺有効活用方策検討協議会 2009

第3節 遺構と遺物

1 環濠集落

百間川沢田遺跡における弥生時代前期の環濠については、1984年「百沢田2溝69と溝70」の調査によってその存在が明らかとなった。この両溝が「調査区外において接続・合流の可能性」が指摘され、当初から「同時代の遺構をとり囲む環濠」と考えられていた。さらに後年次に行われた「百沢田3溝36・溝44」の調査によって「環濠集落」と断定するにいたり、環濠がとり囲む形もある程度推定できるまでに至った。さらに「百沢田5」及び本報告の調査によって、環濠は南端を除き全容がほぼ明らかとなり、規模が南北約95m・東西90mになること、形状が楕円形になることが解明した。

環濠集落とは、これまで防御的な機能を有する弥生時代の集落の一形態であり、高地性集落と共に弥生時代の戦乱的様相を示すと論じられることが多かった。環濠の認定やその内部構造の把握には大規模開発による発掘調査が前提となるが、これまでに環濠を伴う遺跡の総数は既に300余にのぼり、藤原哲氏によってその詳細が論じられている。氏によると環濠集落とは弥生時代を通して普遍的な存在では無く希少な集落形態であること、集落ではない環濠遺跡が多数存在することを明らかにし、特定の農耕集団の所産と推定している。

百間川沢田遺跡は、岡山市中央部を貫流する旭川が形成した沖積平野の微高地上にあり、周囲を縄文時代以降の河道が取り巻くように流走する。環濠が機能した前期後半におけるこの河道部の土地利用は明確ではないが、その比高は少なくとも0.5mを測る。東西240m程の微高地の中にあえて東西90m、南北95mの環濠を掘削した理由は何であろうか。単に防御や用排水であれば河道部の利用が妥当と考えるのである。また、濠の規模は、幅が3.3～5m、深さは1.3～1.6mで、底面の海拔高は1.3～1.6mである。調査した範囲内では出入り口や逆茂木等は確認できず土塁も明確に出来なかった。

環濠内外の遺構 環濠内においては、これまで住居6、土坑67、土墳墓2、溝11を確認している。時期別では前期Ⅱ：住居6軒、土坑43基。前期Ⅲ：土坑1、溝11がある。本報告ではこれに、前期Ⅱの住居1、時期を明確にしがたい土坑53基が加わった。ただし掘立柱建物や貯蔵穴などの定形化した土坑は確認できず（柱穴を多数検出しており建物が存在した可能性はある）、明瞭な遺構は竪穴住居7軒とあって差し支えない。その竪穴住居も6軒が環濠内の北半部に集中（残り1軒は中央東部。）する。南半部は不定形の土坑、溝やピットが存在するが空閑地の可能性もある。また土塁の存在については、「百沢田3」において「基盤層と同じ色調・土質が、溝の内側より流れ込んで」おり「土塁状のものがあつたと推定」したところである。ただこれは、環濠が内側から埋め戻したことを示すもので内側に土塁があつたことを示すとは限らないのであり、本報告では土塁の存在は明確では無いと訂正しておく。また、環濠外の遺構は、環濠西側で低位部との間に竪穴住居1軒が存在するが西側の微高地（前期後葉の集落）との間の低位部は水田は確認できなかった。環濠東側では、低位部の東端（高縄手B調査区：微高地）に幅1.2～2.4m、深さ1～1.4mの溝一条が微高地端に沿って存在するものの微高地上には遺構は存在しない。さらにその東の低位部には水田2面が確認できている。

環濠の時期 環濠堆積層の下層（第382図A-B断面第9・10層、C-D断面第8～11層：細～粗砂層）は、環濠が機能時の堆積とみられ、一部でラミナが看取できたように滞水していたことをうかが

わせる。その下層から出土した遺物に大きな時間幅は無く、前・Ⅱの範疇に収まる。それより上層は、偽礫が混じり環濠がその意義を失ってからの埋め戻し土で、前・Ⅱを中心として前・Ⅲの遺物を含む。下層遺物出土量の僅少を含めて環濠が機能した時間の短さを表すと考える。なお、環濠内の竪穴との間に時間的な差異はなく共存したとみられる。

この環濠が掘削された弥生時代前期中葉の時期とは、弥生時代早期に北部九州において確立した環濠「集落」が、九州から、中国、四国、近畿、東海まで拡がり、中部瀬戸内を境に、九州側では貯蔵穴群を圍繞し、東部瀬戸内から東海にかけては竪穴建物を圍繞、山陰地域では環濠内に竪穴建物や貯蔵穴を伴わない空地といった地域性を形成する時期に当たる。

岡山県内の環濠集落 岡山県下においては、明確に環濠といえる遺跡に矢掛町清水谷遺跡（前期中葉～後葉）、津山市京免遺跡（後期）の2遺跡である。また、環濠の可能性のある遺跡として岡山市北区南方（済生会）遺跡（中期前葉）、瀬戸内市門田貝塚（前期後葉）・堂免遺跡（前期後葉）があげられるが、このうち門田貝塚例は、報文では集落内の防湿防水施設とされ、環濠説にやや否定的である。これらのうち環濠遺跡であることが確実な清水谷遺跡が百間川沢田遺跡と同時期の遺跡として注目される。清水谷遺跡では、内法が50×60mの環濠の約半分が調査されており、環濠は幅4～5m、深さが1～1.2mで断面はU字状をなし、環濠の堆積は上層と下層で時期差がある。環濠内の遺構は、竪穴住居6軒、建物28棟、柵列や溝状土坑群からなる。また、竪穴住居群が環濠下層の土器群に対応し、柵列や建物群が上層土器群に対応すると想定されているが、下層では生活廃棄物の堆積は少なく、掘り直しの痕跡も部分的に認められている。下層堆積後は浅い溝状の地形を呈したと考えられ、上層堆積層は集落内からの土器等の投棄が下層と比べ顕著であることが指摘されている。環濠については防衛的な機能に否定的な見解が示されている。

さて、百間川沢田遺跡と清水谷遺跡の2つの環濠集落が登場する弥生時代前Ⅱ期における、岡山県南部域の遺跡数は18遺跡を数え、環濠を伴わない集落が一般的であったことに間違いは無い。18遺跡のうち集落全体の様相がほぼ明らかとなった南溝手・北溝手・窪木遺跡では、「前期中葉の竪穴住居8軒が低位部や河道を挟んだ各微高地上に50m以上の間隔を置いて点在」していた。このようなあり方が吉備南部における一般的な集落のあり方であれば、先の2遺跡が長径60～95m程の環濠内に6～7棟の竪穴（住居とは限らない）が集中することの特異性を指摘しておきたい。また、環濠内の面積は、百間川沢田遺跡は約6,400㎡で清水谷遺跡（約2,700㎡）や香川県の龍川五条遺跡（約3,400㎡）、広島県の大宮遺跡（内側約2,800㎡・外側約5,500㎡）、亀山遺跡（内側約3,000㎡・外側約3,400㎡）といった周辺域の環濠と比べ大きく凌駕し、前期の遺跡では福岡県の板付遺跡（約7,000㎡）にほぼ匹敵する。

百間川沢田遺跡環濠とその内部において出土遺物から、集落の防衛や争乱を示す証拠は見当たらなかった。もし、環濠遺跡がその地域性を越えて同じ機能を果たしたのであれば、環濠の内における竪穴建物（住居）について、居住空間では無く工房など特定の機能をもつものが無いか。遺跡全体に工房、交易など特異な性格が認められないか、今後検討してゆく必要がある。（弘田・小林）

参考文献

- 藤原 哲 「弥生社会における環濠集落の成立と展開」『総研大文化科学研究』第7号 2011
「清水谷遺跡<一本木地区>」『矢掛町埋蔵文化財発掘調査報告』1 矢掛町教育委員会 2001

2 円形周溝墓

百間川沢田遺跡の円形周溝墓

今回の調査で検出した円形周溝墓1は、「百沢田3」で報告している円形周溝1の北東部2/3分であり、その全貌が明らかになったものの新規に発見された遺構ではない。この遺構からは、円形に巡る周溝と周溝の内側中央付近にある土坑1基のみを検出した訳であるが、周溝内にはさらに1か所深く掘り込まれた箇所がある。周溝の内側にある1基の土坑は、形状と規模が近接する円形周溝2の木棺の推定小口穴に類似している。このことから円形周溝墓1にも中央部に墓坑があった可能性がある。百間川沢田遺跡では、かつて2基の円形周溝が報告されていた。1基は今回検出した円形周溝墓1の南西側1/3である。もう1基は、周溝墓1の南東側に近接する円形周溝2である。一部溝によって削平されていたが、ほぼ全周を復元できる状態で検出された。規模は周溝内側で570cmを測り、周溝内の中央部分には2個の相対する穴が見つかっており、これらは木棺の小口穴であった可能性が指摘されている。今回の調査の終了で、この2基の周辺を調査し尽くしたことになるが、他に周溝はなく、2基のみが近接して存在したと考えるとよかろう。この2基はかつての報告で、ともに円形周溝墓の可能性を示唆されたものの、「円形周溝」の名称を使用し、墓であると断定はしていなかった。それではこの2基は墓と断定してもよいのだろうか。まず2基とも木棺小口穴の跡があり、墓坑があった可能性がある。また今回検出の円形周溝墓1の周溝内掘り込みは埋葬跡の可能性が高く、周溝内出土土器も生活用土器とは違う形態である。周溝の規模も香川県龍川五条遺跡⁽¹⁾、佐古川・窪田遺跡⁽²⁾、岡山県堂免遺跡⁽³⁾と大差はない。また周溝の断面形状もこれらと類似する。以上から中心主体部が確実に乏しいものの、2基とも円形周溝墓であったと評価したい。

続いて時期であるが、かつての報告では2基とも弥生時代前・Ⅱとなり、環濠集落とほぼ同時期であると位置付けられていた。今回の調査では、ほぼ完形に近い69・70が周溝内と周溝内墓坑から出土している。この2つの土器はともに弥生時代中・Ⅰの様相であり、今まで想定されていた時期よりも新出する。これに対し近接する円形周溝2は、「百沢田3」の溝38に切られる。溝38の時期は弥生時代前期後葉であり、それより前出する円形周溝2は前・Ⅱ～Ⅲに位置付けられる。これは円形周溝墓1より1段階古い時期にあたり、円形周溝2が先に築かれ、円形周溝墓1がやや遅れて築かれたことになる。環濠集落の廃絶→円形周溝2の造営→円形周溝墓1の造営、という順になるのではないか。かつて環濠集落があった場所は、墓域に変わったと推定される。

他の土坑墓との比較

次に周溝墓と、遺跡内でほぼ同時期になる土坑墓とを比較してみたい。これらは円環状に巡る微高地上の数箇所に集中して存在していた。一つは高縄手B調査区⁽⁴⁾であり、もう一つは市道調査区⁽⁵⁾である。高縄手B調査区では、溝58～59の間に13基の土坑墓が密集し、他にも墓である可能性の高い土坑が複数存在する。市道調査区では、7基の土坑墓が集中し、やはり他にも墓である可能性の高い土坑が複数存在する。これらの土坑墓は、群集するが周溝は存在しない。各土坑墓の規模⁽⁶⁾は、表15のようになる。土坑墓の中には100cm以下のものがあり、幼児用の可能性があるものも含まれるが、100～200cm前後のものも数多く、大人と子供がほぼ同一箇所に埋葬されている。円形周溝墓の墓坑規模は、円形周溝墓1が推定190cm⁽⁷⁾、円形周溝2は150cmを測る。円形周溝墓1のあり方から、大人が周溝中央部、子供を周溝内に埋葬した可能性もある。墓坑の規模を他の土坑墓と比較すると、円形周溝

墓のものは大きい部類に入るが特別大きい訳ではないようである。ただし、埋葬者一人に要する面積には差がみられる。円形周溝墓は約140㎡の範囲に2基のみ造営されていた。これに対し高縄手B土坑墓群は、約340㎡の範囲に13基が築かれている。円形周溝墓は、周溝内埋葬を除けば2人のために140㎡を必要としていることとなり、これは1人あたりに換算すると約70㎡である。高縄手B土坑墓群は、1人あたり約25㎡になり、他に墓の可能性のある土坑を含めるとさらに面積が減ると考えられる。円形周溝墓と高縄手B調査区などの土坑墓群の間には、墓坑の大きさには明確な差が無く、身体的特徴によって墓所などを区別していないようだが、1人あたりのかかる面積には差が見え始めている。この違いは、弥生時代後期の墳丘墓やその後の古墳に見られるような大きな差ではない。残念ながら墓坑の削平により副葬品での比較は出来なかったが、両者の間にはまだ小さくはあるが格差が発生し始めていた可能性がある。

表15 百間川沢田遺跡の墓坑幅

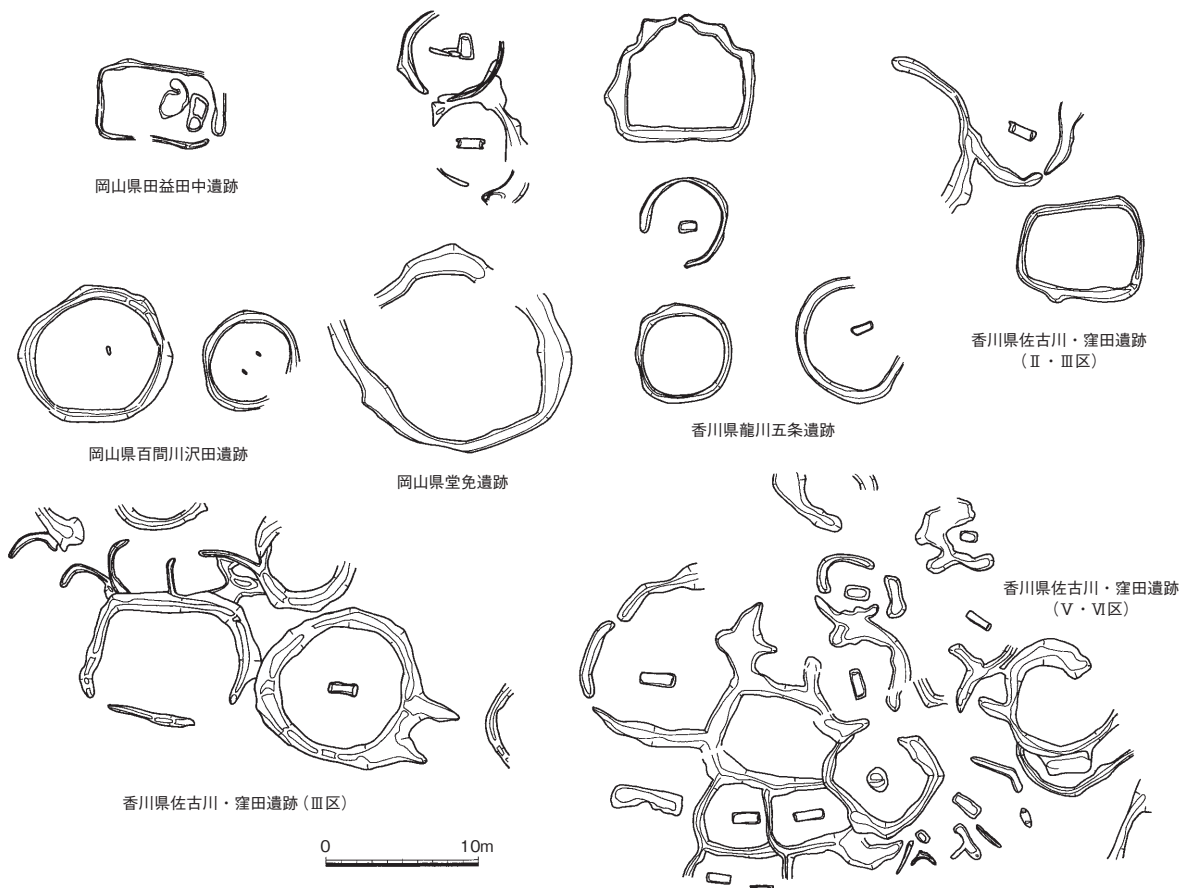
	円形周溝墓	高縄手B調査区	市道調査区	合計
100未満		3	1	4
100～130		4	1	5
131～150	1		2	3
151～200	1	2	3	6

(単位：cm)

表16 岡山近隣の円形周溝墓面積 (単位：㎡)

	～30	31～50	50以上	合計
前期中葉	2			2
前期後葉	○4	1	2	7
中期前葉	2	3	○2	7

○の部分に百間川沢田遺跡例が入る



第491図 岡山近隣の周溝墓 (1/500)

他地域周溝墓との比較

出現期の周溝墓は、面積上の類似から朝鮮半島からの影響が指摘されている⁽⁸⁾。墳形は円形と方形を採用した地域があり、北九州・畿内は方形、中部瀬戸内（岡山県・香川県）地域は円形が主流である。中部瀬戸内地域で見ついている円形周溝墓の周溝内側面積を比べると（表2）、前期は30㎡以下のもが多いが、中期になると30㎡以上の割合が増す。少しずつだが、大型化の傾向が読み取れる。百間川沢田遺跡の場合、前・Ⅱ～Ⅲの円形周溝2は23.7㎡、中・Ⅰの周溝墓1は51.7㎡で、まさにこの範疇である。一方方形周溝墓も、兵庫県東武庫遺跡⁽⁹⁾の例を見てみると、やはり前期より中期の方が大型化の傾向がある。岡山県田益田中遺跡では方形周溝状遺構が見ついているが⁽¹⁰⁾、この遺構の面積は35㎡であり、同時期の香川県龍川五条遺跡の方形周溝墓とさほど変わりはない。墓域ではなく集落域に存在するという問題も残るが、面積や構造の上から見て方形周溝墓である可能性が高い。

続いて埋葬主体の数を見ていきたい。出現期の周溝墓は、北九州の東小田峯遺跡⁽¹¹⁾などの例外を除けば、円形・方形とも単独葬が多い。百間川沢田遺跡の2基も単独葬であったと思われる。中期以降になると、円形は単独葬、方形は複数葬になる傾向が指摘されているが⁽¹²⁾、出現期周溝墓には単独葬が多い。このことは先に挙げた面積の上でも読み取れ、中期以降では円形の方が方形より上位になると言われているが⁽¹³⁾、前期段階ではやはりその差は微弱である。

百間川沢田遺跡円形周溝墓の位置付け

円形周溝墓は弥生時代前期に中部瀬戸内地域を中心に発生するが、中・Ⅰを最後にその系譜が途絶える。中期以降は東部瀬戸内地域の播磨を中心に発展し大型化していく。一方方形周溝墓は畿内で発展し、中期以降やはり大型化の傾向を示す。百間川沢田遺跡の2基は、まさに最古級の円形周溝墓の範疇になり、大型化の一手手前で系譜が途絶える中部瀬戸内地域の典型といってよい。（小林）

註

- (1) 「龍川五条遺跡Ⅰ」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第二十三冊 香川県教育委員会 1996
- (2) 「佐古川・窪田遺跡」『一般国道32号綾歌バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告』第1冊 香川県教育委員会 2006
- (3) 「堂免遺跡」『邑久町史』考古編 邑久町史編纂委員会 2006
- (4) 「百間川沢田遺跡3」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』84 岡山県教育委員会 1993
- (5) 『百間川沢田（市道）遺跡発掘調査報告』岡山市教育委員会 1992
- (6) 木棺痕跡の残っていない墓坑は、木棺痕跡がある例を墓坑幅で割った数値の平均値をかけて推定した。
- (7) 円形周溝墓1の墓坑幅は、1つ見ついている小口跡と周溝までの距離から推定したものである。
- (8) 岸本一宏「弥生時代の低地円丘墓について」『兵庫県埋蔵文化財研究紀要』創刊号 2001
- (9) 「東武庫遺跡」『兵庫県文化財調査報告』第150冊 兵庫県教育委員会 1995
- (10) 「田益田中遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』140 岡山県教育委員会 1999
- (11) 『夜須町史』1984
- (12) 岸本一宏「周溝墓を中心とした播磨地域の様相」『弥生墓からみた播磨』第9回播磨考古学研究集会の記録 2009
- (13) 岸本道昭「播磨の周溝墓」「小神辻の堂遺跡」『龍野市文化財調査報告』20 龍野市教育委員会 1998

3 百間川原尾島遺跡の方形土坑について

百間川原尾島遺跡の微高地1-3では、弥生時代前期後葉から中期初頭の遺構が多く検出され、特に土坑が多く検出されている。いわゆる舟形土坑や平面が円形の袋状土坑と呼ばれるもののほか、平面形が方形・長方形を呈するものが数多く検出された。この方形土坑群がこの集落の一つの特徴であるといえる。微高地1-3で検出した方形土坑とは、平面・底面の形が方形・長方形を呈するだけでなく、断面形が箱状および袋状で、検出面から壁面の角度が70度を超える。また、底面が平坦であるといった特徴を持つ。規模は長辺が2mを越える大型のものもあり、底面の面積は0.41~2.50㎡とばらつきが見られ、規模はとくにまとまりをもつものではないが、残存する深さは、約40~90cmと深いものが多い。これら方形土坑の中で、原一土坑6・69・70の3基については、底面に柱穴を持ち、上屋が存在していたことが推測される点が特徴的である。これらの埋土には基盤層の土塊が多く入り、人為的な埋め戻しが示唆される。また、焼土・炭を含むものが多く、炭が薄く層状に堆積するものもある。出土する土器は底面より浮いていて、ほとんどが破片であるといった状況がみられる。微高地1-3では、他に原一土坑6~25・69~75の27基、原尾島5で報告している10基の、合計37基の方形土坑が検出され、弥生時代前期後葉~中期初頭の限られた時期でのみ検出された。これらの方形土坑の用途は、平面が方形・長方形で壁面が角度を持って立ち上がり、かつ底面が水平であることから特定の用途が推定される⁽¹⁾。形状からすると土坑墓の可能性もあるが、人為的に埋められた埋土に炭・焼土を多く含む状況からは、墓と断定することも難しい。ただ、底面に柱穴が検出された3基の方形土坑については上屋の存在が想定でき、貯蔵穴と考えられている円形の袋状土坑にしばしば、底面に柱穴が見られるものもあることから、方形土坑で柱穴を持つものは、貯蔵穴である可能性があると考えられる。また柱穴が無いものについても、埋土や遺物の出土状況が底面に柱穴を持つ方形土坑と類似することから、同じく貯蔵穴であると考えた。森下靖士は、山口県内の弥生時代貯蔵穴の検討のなかで、このような方形土坑の性格として貯蔵穴である可能性を指摘している⁽²⁾。

そこで岡山県内で検出されている弥生時代の方形土坑を見てみる（深さについては残存状況の差を考慮し、浅いものも含めた）と、表17のように37遺跡で見られ、県内では弥生時代前期~後期を通じて一定量みられるといえるが、その性格を示すような出土遺物や検出状況を呈するものはあまり無い⁽³⁾。方形土坑の底面に柱穴の存在するものは、真庭市の旦山遺跡の弥生時代後期に属する土壙113・125・209に類例があり、今回の検出例同様、貯蔵穴の可能性があると考えている。また、平面が円形の袋状土坑と混在または近接して立地している方形土坑（鏡野町・夏栗遺跡、赤磐市・佐古遺跡、岡山市・足守川加茂B遺跡・奥坂遺跡・加茂政所遺跡、津山市・西吉田北遺跡）については、その立地から貯蔵穴である可能性があるのではないだろうか。また方形土坑の周囲に柱穴が規則的に並び、上屋が想定されるものに赤磐市の土井遺跡の土壙6、真庭市の上野遺跡の土壙42・43、総社市の南溝手遺跡の土壙215、岡山市の百間川原尾島遺跡7の土壙19があり、底面に柱穴を持つもの同様に上屋を持つ貯蔵穴の可能性もある。これらはいずれも弥生時代後期のものであることから、上屋を持つ貯蔵施設もまた、弥生時代を通じて見られると考えられる。ただし南溝手遺跡の例では、土器焼成遺構と想定されており、深さも浅く、貯蔵穴としての利用ではない可能性がある。このように、方形土坑のすべてについて貯蔵という性格はいえないものの、一部については貯蔵穴としての性格を有するといえるのではないだろうか。

表17 岡山県内の弥生時代の方形土坑

(前期)			
所在地	遺跡名	遺構名	報告書№
岡山市	百間川原尾島遺跡 8	土坑 6～24 (前期Ⅲ)	県238
岡山市	百間川原尾島遺跡 5	土壇66・67・69・70・74・79～81・97・98 (前期Ⅲ)	県106
岡山市	百間川沢田遺跡 2	土壇56 (前期Ⅱ)	県59
岡山市	百間川沢田遺跡 3	土壇 7・37・46 (前期Ⅱ)	県84
岡山市	南方遺跡	土壇48 (前期後葉)	県40
岡山市	津寺遺跡 5	土壇-334 (前期Ⅲ)	県127
総社市	南溝手遺跡 1	土壇55・58～61 (前期)・90 (前期前～中葉)	県100
総社市	南溝手遺跡 2	土壇165 (前期) 後葉	県107
(中期)			
所在地	遺跡名	遺構名	報告書№
岡山市	百間川原尾島遺跡 8	土坑69～75 (中期Ⅰ)	県238
岡山市	百間川米田遺跡 3	土壇122 (中期前半)・123 (中期)	県74
岡山市	百間川兼基遺跡 4	土壇43・55 (中期Ⅱ・Ⅲ)	県208
岡山市	南方 (済生会) 遺跡 2	S K 70・97 (中期中葉)	—
岡山市	津島遺跡	土壇 2 (中期)	県206
岡山市	加茂政所遺跡	土壇33・39・46 (中期)	県138
瀬戸内市	熊山田遺跡	土壇13 (中期中葉)	町1
総社市	北溝手	土壇97 (中期中葉)	県235
総社市	南溝手遺跡 1	土壇122 (中期後葉)	県100
総社市	南溝手遺跡 2	土壇164・177 (中期前葉)・212 (中期後葉)	県107
鏡野町	久田堀ノ内遺跡	土壇74 (中期後葉)	県192
(後期)			
所在地	遺跡名	遺構名	報告書№
岡山市	百間川原尾島遺跡 1	5-P-15 (後期Ⅳ)	県39
岡山市	百間川原尾島遺跡 3	土壇 3 (後期Ⅱ)	県88
岡山市	百間川原尾島遺跡 5	土壇10～12 (後期)	県127
岡山市	百間川原尾島遺跡 7	土壇19・46 (後期Ⅳ)・69 (後期Ⅱ)・49・68 (後期)	県215
岡山市	百間川今谷遺跡 4	土壇20・23・27・39 (後期Ⅲ)	県217
岡山市	百間川兼基遺跡 4	土壇104 (後期Ⅱ)	県208
岡山市	高下遺跡	土壇1 (後期後半)	県123
岡山市	津島遺跡 1	土壇 2 (後期後半)	県137
岡山市	津島遺跡 4	土壇 1・4 (後期)	県116
岡山市	津島岡大遺跡11	土壇23～25 (後期前葉)	岡大16
岡山市	奥坂遺跡	土壇57・147 (後期Ⅳ)	県53
岡山市	津寺遺跡 2	袋状土壇 5 (中期Ⅲ)	県98
岡山市	津寺遺跡 4	土壇226・227 (後期Ⅱ)	県116
岡山市	津寺遺跡 5	袋状土壇-143 土壇372 (中期末～後期初頭)	県127
岡山市	高塚遺跡	土壇65～67・112・135 (後期) 方形土壇 1～163 (後期後半)	県150
岡山市	加茂政所遺跡	土壇310・312・264・293 (後期Ⅳ)	県138
岡山市	足守川加茂B遺跡	土壇41・54・55・60・62・67・68～71・79・87・93・94・102・121・126 (後期後半)	県94
倉敷市	足守川矢部南向遺跡	土壇64～66・69・70・73・82・89 (後期後半)	県94
総社市	南溝手遺跡 1	土壇103 (後期)	県100
総社市	南溝手遺跡 2	土壇215 (後期前葉)	県107
総社市	南溝手遺跡	土壇30 (後期後葉)	県235
赤磐市	佐古遺跡	袋状土壇 3・4・9・20・31・43 (後期前半)	県174
赤磐市	土井遺跡	土壇 6 (後期前半)	県191
赤磐市	斎富遺跡	土壇17 (後期後葉)	県105
赤磐市	門前池遺跡	土壇 3・4・6 (後期前葉)	県 9
津山市	美作国府跡	土壇121 (後期)	県228
津山市	竹ノ下遺跡	長方形土壇 1～3 (後期初頭)	市11
津山市	西吉田遺跡	土壇 1・2 (後期)	市17
津山市	小原遺跡	土壇 1・2・5・6・8 (後期前半)	市38
津山市	西吉田北遺跡	土壇23・26・27・36・38～42 (後期)	市58
津山市	太田茶屋遺跡	土壇43 (後期前葉)	県129
津山市	太田松山久保遺跡	土壇 1～4 (後期前葉)	県129
美作市	高岡遺跡 2	土壇10 (後期後半)	県232
鏡野町	夏栗遺跡	土壇20・43・44・49・50・67・68 (後期前半)	県194
真庭市	上野遺跡	土壇34・35・42・43・52・56 (後期Ⅳ)	県91
真庭市	且山遺跡	土壇101・106・113・125・149・154・201・203・208・209・212・219・221・222・224・232・235・236・239・240・243・280・301・315 (中期末～後期前半)	県136
新見市	塚の峰遺跡	土壇26・27 (後期)	県22

百間川原尾島遺跡の微高地 1 - 3 では、弥生時代前期後葉の貯蔵穴は、方形を呈するものが37基に対し、円形を呈する袋状土坑は 4 基検出されている。これより古い時期の百間川沢田遺跡、総社市・南溝手遺跡⁽⁴⁾に円形の袋状土坑はなく、方形の土坑のみが検出されている。このことから、貯蔵穴の形態が、弥生時代前期前葉から中葉にかけては方形であり、前期後葉になって円形のもの加わると考えられるが、遺跡・遺構数ともに少なく、今後の検証が必要である。しかしこのような方形土坑の祖形として考えられるものは、福岡県板付遺跡の夜臼式土器及び板付Ⅰ式土器が共伴して出土する弥生時代前期前葉の方形竪穴に求められること⁽²⁾、福岡県小郡市三国丘陵遺跡群では、弥生時代前期の環濠を保持する集団が、長方形の貯蔵穴の形態を採用していることが認められるという⁽⁵⁾ことから、方形土坑は弥生時代になってもたらされた貯蔵形態の一つであると考えられるのではないだろうか。微高地 1 - 3 の集落は、百間川沢田遺跡の微高地 2 - 1 上に環濠集落を営んだ集団が、環濠廃絶後に微高地を移動して新たに営んだものと考えられ、微高地 2 - 1 の環濠集落と同時期のものと考えられる貯蔵穴に方形のものが採用されたことから、微高地 1 - 3 の集落でも、方形の貯蔵穴を多く採用する意図が強く働いたものと考えられる。(團)

註

- (1) 岡田博「第2節 土壙について」「南方遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告』40 岡山県教育委員会 1981
- (2) 森下靖士「山口県内の弥生時代貯蔵穴について」『山口大学構内遺跡調査研究年報』V 山口大学埋蔵文化財資料館 1987
- (3) 鏡野町夏栗遺跡、美作市高岡遺跡2では、本文中で貯蔵穴の可能性を指摘している。
- (4) 渡邊恵里子「岡山県における弥生時代早期～前期の遺跡の動向」「弥生集落の成立と展開」第55回埋蔵文化財研究集会資料集 埋蔵文化財研究会 2006
- (5) 杉本岳史「貯蔵穴の形態変遷を通してみた弥生時代の集落の動向」『九州と東アジアの考古学』九州大学考古学研究室50周年記念論文集刊行会 2008

4 百間川原尾島遺跡・百間川沢田遺跡出土の前期から中期の過渡期の土器について

岡山県では、弥生時代前期から中期にかけての過渡期の様相がわかる遺跡の数は少なく、この時期の土器についての資料の蓄積も多くない。このような中で、百間川原尾島遺跡の調査では、弥生時代前期～中期への過渡期の様相が伺えるような資料が出土している。これらの土器について、特に沈線の施文原体・方法について、今回の調査の出土遺物から気付いた点について述べる。

百間川原尾島遺跡の微高地1-3で検出された遺構のなかに、百・前・Ⅲ新段階～百・中・Ⅰ古段階の土器が供伴して出土したものがある（原一土坑69～73・75・84・89）。この時期の甕・壺の外表面には、多条の沈線が施されることが多い。この沈線がヘラ描きから櫛描き（櫛描直線文）へと置き換わることが、中期の指標の要素の一つとなっている。今回の調査で出土した甕・壺の外表面に観察された多条の沈線の一部には、複数条（6～10条）の沈線をまとめて施しているものが確認された。原一土坑70から出土した土器289は、広口壺の頸部であるが、この頸部に施された沈線は、写真22の▽部分の2か所において、施文原体の停止箇所が観察される。この停止箇所では、6条の沈線がほぼ同じ箇所で停止していることから、6条をまとめて、かつ頸部を2回に分けて施文していることは間違いないであろう。だが、沈線の間隔には大きなばらつきが見られ、沈線自体にも太・細が見られる。ここで観察された複数条の沈線の施文原体は、岡山県では一般的に「櫛描き沈線」と呼ばれているものの施文原体（施文原体の停止箇所に直線的な痕跡が残っていることや、沈線の間隔が一定であることなどから、板状工具であると推測される）とは、明らかに異なっている。同様の土器は、4点出土している（原一289・297・309・362）。このような沈線の施文原体として考えられるものとしては、幅が1～3mmと太・細があることや、ヘラ描き沈線と見紛うことから、ヘラ状工具を用いたことが考えられる。しかし、沈線の間隔が一定しないことから、ヘラ状工具同士が固定されておらず、紐などで束ねたというよりも手にまとめて持ち、施文したのではないだろうか。これらの、「一見、1条ずつ引かれたヘラ描き沈線と見えるが、実際はまとめて施文されている沈線」を施されている土器については、器形からは弥生時代前期とも、中期とも判断しえないが、今回出土した土器のうち、原一362を除く3点は、ヘラ描き沈線とともに板状工具により施文されたと考えられる櫛描き沈線を施した土器と供伴していることから、弥生時代中期の時期に属するものとして取り扱った。弥生時代前期後葉の瀬戸内市門田貝塚の資料で、ヘラ状の工具で一度に数条の沈線を引くものが、1条ずつ沈線を別個に引くヘラ描き沈線を施す土器と供伴していることを若林邦彦は指摘しており⁽¹⁾、このような沈線は弥

生時代前期後葉から中期初頭にかけて、存在するのであろう。百間川沢田遺跡3で報告されている当該期の遺物を観察すると、百沢田3土壙墓9から出土した壺(588)には、口縁部から肩部にかけて、ヘラ描き沈線と櫛描き沈線を併用していることが観察できる(写真67)。このことから、効率的に沈線を多条化するにあたり、「①1つのヘラ状工具で多条の沈線を施すことによる沈線の多条化→②複数のヘラ状工具で一括施文することによる沈線の多条化→③1つの板状工具で一括施文する櫛描き沈線による沈線の多条化」といったような、段階を経るような変化があったと考えることは難しく、1条ずつのヘラ描き沈線から板状工具による櫛描き沈線への移行が、単純に進んでいないことがうかがえる。今回、報告書を作成するにあたり、ヘラ状工具を使用して一括施文による多条沈線を施している土器については、まとめて多条の沈線を施すという意識の変化を重視し、櫛描き沈線という位置付けを行っている。

また、百間川沢田遺跡の円形周溝墓から出土した土器(沢-15)に施文された沈線について見てみる。沈線文帯は、胴部から頸部にかけて3帯で、上から5条、8条、9条が施されている(図版43に、施文された沈線の展開写真を掲載)。沈線は1mm程度で、沈線の間隔は約2mmと狭いものの、その間隔には若干のばらつきが認められた。しかし、一帯の中の沈線が1本ずつすべて完結しており、1条の沈線が螺旋状に施されてはおらず、かつ施文の終始箇所は観察されない。このことから、これらの沈線が施されている場所が、内傾している肩部～体部という曲面であること、沈線が細く、また沈線の間隔が狭いといったことから、1条ずつの施文のほうが困難であると考えられ、まとめて施文されたと理解するほうが自然である。条線の幅については、太・細は見られないことからこの沈線の施文原体としては何らかの植物繊維を束ねたものが想定できるのではないだろうか。沈線の間隔に若干ではあるがばらつきが見られるのは、曲面に施文していることが理由の一つと考えられる。このため、この土器に施された沈線については、櫛描き沈線と呼称するのは妥当であると考えられることから、共伴して出土した遺物は無かったものの、本文中では弥生時代中期の時期区分の中で報告している。

(團)

註

- (1) 若林邦彦「弥生土器における櫛描文原体の地域性」『研究紀要Vol. 2』財団法人大阪文化財センター 1995

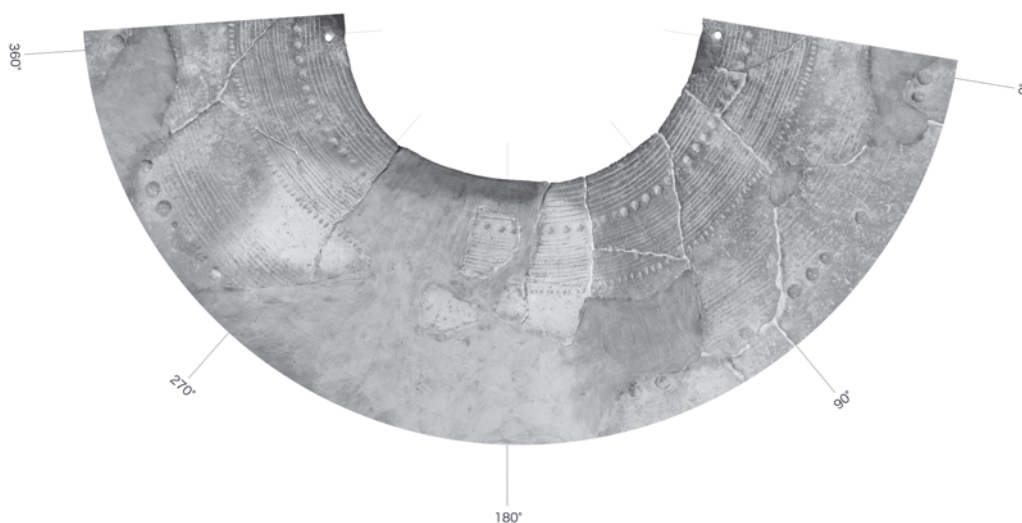


写真67 ヘラ描き沈線文と櫛描き沈線文を併用した土器

百間川原尾島遺跡遺構一覽表

竪穴住居

地区	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (m ²)	柱穴	中央穴 (cm)			貯蔵穴 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	時期	備考	
							平面形	長×短	深さ	形	長×短	深さ						
40B	竪穴住居1	円形	—	—	(1.5)	1/?	—	—	—	—	—	—	無	有	無	百・中・Ⅱ	直径推定370cm	
39B	竪穴住居2	円形	382	371	(9.0)	?	—	—	—	—	—	—	2	有	無	百・後・Ⅱ		
39B	竪穴住居3	円形	552	—	(13.3)	3/4	円形	81×75	49	—	—	—	無	無	無	百・後・Ⅱ		
39B	竪穴住居4	方形	(455)	(317)	(7.0)	?	—	—	—	—	—	—	?	有	?	百・古・Ⅰ	壁体溝のみ検出	
39B	竪穴住居5	方形	336	272	(8.3)	無	×	×	×	—	—	—	—	1	無	無	百・古・Ⅰ	
40B	竪穴住居6	方形	495	490	21.8	4/4	×	×	×	×	×	×	1	有	有	百・古・Ⅰ	入り口部、礎敷有り	
40B	竪穴住居7	方形	418	342	11.0	1/?	×	×	×	×	×	×	無	有	有	百・古・Ⅰ		
40B	竪穴住居8	方形	305	(207)	(3.7)	無	—	—	—	—	—	—	—	2	有	有	百・古・Ⅰ	
40B	竪穴住居9	方形	423	325~338	11.0	2/2	×	×	×	楕円	79×45	31	無	有	無	百・古・Ⅰ		
40B・41B	竪穴住居10	方形	523	471	18.7	2/2	×	×	×	隅丸方形	100×75	40	無	有	無	百・古・Ⅰ	入り口部、礎敷有り	

井戸

地区	遺構名	構造	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
38B・38C	井戸1	素掘り	円形	上部：逆「ハ」字 下部：逆台形	125	112	90	168	百・後・Ⅱ	
39B	井戸2	素掘り	円形	逆台形	168	158	135	161	百・後・Ⅱ	
39B	井戸3	素掘り	隅丸長方形	逆台形	113	78	93	216	百・古・Ⅰ	
40B	井戸4	素掘り	円形	逆台形	121	110	151	160	百・古・Ⅰ	
39B	井戸5	素掘り	不整形円形	逆台形	155	127	147	180	百・古・Ⅰ	最上層で礎、中層で粘土層を検出
40B	井戸6	素掘り	楕円形	逆台形	106	103	156	165	百・古・Ⅰ	
40B	井戸7	素掘り	不整形円形	逆「ハ」字	150	135	125	187	百・古・Ⅰ	
41B	井戸8	素掘り	円形	逆台形	108	106	136	168	百・古・Ⅰ	
41B	井戸9	素掘り	楕円形	逆「ハ」字	110	78	126	169	百・古・Ⅰ	

土坑

地区	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
35B	土坑1	楕円形	Ⅲb	(102)	(80)	92	-17	縄文晩期	ドングリの貯蔵
33B	土坑2	長方形	Ⅲb	418	100	17	236	百・前・Ⅲ	
39B	土坑3	舟形	Ⅲa	396	104	48	270	百・前・Ⅲ	
40B	土坑4	舟形	Ⅲa	359	109	30	248	百・前・Ⅲ	
40B	土坑5	舟形	Ⅲa	356	106	42	225	百・前・Ⅲ	
39B	土坑6	長方形	Ⅱa	495	366	174	238	百・前・Ⅲ	底面に7か所の柱穴
39B	土坑7	長方形	Ⅲa	268	140	83	204	百・前・Ⅲ	
39B	土坑8	長方形	Ⅲa	206	155	64	232	百・前・Ⅲ	
39B	土坑9	長方形	Ⅱa	200	110	63	279	百・前・Ⅲ	
39B 40B	土坑10	長方形	Ⅲa	252	169	52	215	百・前・Ⅲ	
39C	土坑11	長方形	Ⅱa	187	100	38	232	百・前・Ⅲ	
40B	土坑12	長方形	Ⅲa	230	152	69	198	百・前・Ⅲ	
40B	土坑13	長方形	Ⅱa	275	173	61	207	百・前・Ⅲ	
40B	土坑14	長方形	Ⅱa	(195)	103	37	236	百・前・Ⅲ	
40B	土坑15	長方形	Ⅱa	137	65	40	235	百・前・Ⅲ	
40B	土坑16	楕円形	Ⅱa	174	122	78	200	百・前・Ⅲ	
40B	土坑17	楕円形	Ⅱa	102	68	60	250	百・前・Ⅲ	
40B	土坑18	不整形	Ⅲa	250	174	78	224	百・前・Ⅲ	
40B	土坑19	楕円形	Ⅲa	153	106	51	222	百・前・Ⅲ	
40B	土坑20	方形	Ⅲa	156	(94)	42	228	百・前・Ⅲ	
40B	土坑21	長方形	Ⅲa	236	132	55	195	百・前・Ⅲ	
40B 41B	土坑22	長方形	Ⅲa	224	125	59	200	百・前・Ⅲ	
41B	土坑23	長方形	Ⅱa	136	60	42	223	百・前・Ⅲ	
41B	土坑24	長方形	Ⅱa	235	135	46	184	百・前・Ⅲ	
39B	土坑25	方形	Ⅲa	168	126	140	128	百・前・Ⅲ	井戸状遺構
39B	土坑26	円形	I a	115	107	30	255	百・前・Ⅲ	袋状
40B	土坑27	円形	I a	145	138	56	215	百・前・Ⅲ	袋状
39B 40B	土坑28	円形	Ⅱa	108	98	43	220	百・前・Ⅲ	

地区	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
38B	土坑29	円形	Ⅲb	97	89	28	231	百・前・Ⅲ	
38B	土坑30	円形	Ⅱc	89	81	56	239	百・前・Ⅲ	
38B	土坑31	円形	Ⅲb	87	86	28	266	百・前・Ⅲ	
39B	土坑32	楕円形	Ⅲb	170	145	38	266	百・前・Ⅲ	
39B	土坑33	長方形	Ⅲb	137	67	25	266	百・前・Ⅲ	
39B	土坑34	楕円形	Ⅲb	162	127	33	247	百・前・Ⅲ	底面に炭
39B	土坑35	楕円形	Ⅲb	90	59	32	241	百・前・Ⅲ	
39B	土坑36	不整形	Ⅲb	140	88	10	280	百・前・Ⅲ	
39B	土坑37	不整形	Ⅲb	103	62	15	264	百・前・Ⅲ	
39B	土坑38	不整形	Ⅲb	90	(75)	17	263	百・前・Ⅲ	
39B	土坑39	楕円形	Ⅲb	92	64	11	212	百・前・Ⅲ	
39B	土坑40	楕円形	Ⅲb	93	68	11	295	百・前・Ⅲ	
39B	土坑41	楕円形	Ⅲb	143	100	34	270	百・前・Ⅲ	
39B	土坑42	楕円形	Ⅲb	118	92	26	271	百・前・Ⅲ	
39B	土坑43	楕円形	Ⅲb	54	44	32	264	百・前・Ⅲ	
39B	土坑44	楕円形	Ⅲb	81	61	17	285	百・前・Ⅲ	
39B	土坑45	楕円形	Ⅲb	(112)	(49)	21	271	百・前・Ⅲ	
39B	土坑46	楕円形	Ⅲb	113	83	37	260	百・前・Ⅲ	
39B	土坑47	長方形	Ⅲa	(220)	77	43	260	百・前・Ⅲ	
39B	土坑48	楕円形	Ⅲb	(100)	(48)	(50)	268	百・前・Ⅲ	
39B	土坑49	長方形	Ⅲb	(280)	(86)	15	285	百・前・Ⅲ	
39B	土坑50	楕円形	Ⅲb	91	84	67	230	百・前・Ⅲ	
39B	土坑51	楕円形	Ⅲb	183	127	19	254	百・前・Ⅲ	
40B	土坑52	楕円形	Ⅲb	(200)	137	27	235	百・前・Ⅲ	
40B	土坑53	楕円形	Ⅲb	(180)	92	32	212	百・前・Ⅲ	
40B	土坑54	長方形	Ⅲb	116	39	25	254	百・前・Ⅲ	
40B	土坑55	長方形	Ⅲa	187	57	57	220	百・前・Ⅲ	
40B	土坑56	円形	Ⅲb	82	79	64	196	百・前・Ⅲ	
40B	土坑57	長方形	Ⅲb	177	74	16	254	百・前・Ⅲ	
40B	土坑58	溝状	Ⅲb	200	46	11	257	百・前・Ⅲ	
40B	土坑59	長方形	Ⅲb	204	81	20	268	百・前・Ⅲ	
40B	土坑60	楕円形	Ⅲb	100	63	18	252	百・前・Ⅲ	
41A	土坑61	楕円形	Ⅲb	100	(58)	55	219	百・前・Ⅲ	
40B	土坑62	円形	Ⅲb	176	(105)	46	225	百・前・Ⅲ	
40B	土坑63	不整形	Ⅲb	(110)	61	26	213	百・前・Ⅲ	
40B	土坑64	長方形	Ⅲb	163	53	20	239	百・前・Ⅲ	
40B 41B	土坑65	楕円形	Ⅲb	88	67	10	242	百・前・Ⅲ	
41B	土坑66	方形	Ⅲb	115	105	48	201	百・前・Ⅲ	
41B	土坑67	長方形	Ⅲb	100	61	28	232	百・前・Ⅲ	
41B	土坑68	楕円形	Ⅲa	146	92	23	207	百・前・Ⅲ	
39B	土坑69	長方形	Ⅲa	248	136	47	264	百・中・Ⅰ	底面に6か所の柱穴
39B 40B	土坑70	長方形	Ⅲa	309	194	80	216	百・中・Ⅰ	底面に3か所の柱穴
39B	土坑71	長方形	Ⅲa	273	110	62	244	百・中・Ⅰ	
39B	土坑72	長方形	Ⅲa	186	122	55	237	百・中・Ⅰ	
39B	土坑73	長方形	Ⅲa	200	136	41	264	百・中・Ⅰ	
40B	土坑74	長方形	Ⅲa	261	134	46	228	百・中・Ⅰ	
40B 41B	土坑75	長方形	Ⅲa	270	121	34	230	百・中・Ⅰ	
38B	土坑76	円形	Ⅲb	89	82	40	255	百・中・Ⅱ	
38B	土坑77	楕円形	Ⅱb	(190)	176	96	199	百・中・Ⅱ	
38B	土坑78	—	Ⅱb	(100)	(40)	41	255	百・中	
38B	土坑79	—	Ⅲb	(115)	(45)	(51)	245	百・中・Ⅱ	
39B	土坑80	楕円形	Ⅲb	144	118	17	279	百・中	
39B	土坑81	楕円形	Ⅲb	(80)	69	24	293	百・中	
39B	土坑82	楕円形	Ⅲb	(70)	63	33	271	百・中・Ⅱ	
39B	土坑83	楕円形	Ⅲb	(233)	(82)	96	215	百・中・Ⅱ	
39B	土坑84	楕円形	Ⅲb	144	86	56	241	百・中・Ⅰ	
40B	土坑85	楕円形	Ⅲb	232	128	98	200	百・中・Ⅱ	
40B	土坑86	楕円形	Ⅲb	87	66	7	283	百・中	
40B	土坑87	楕円形	Ⅲb	(95)	84	11	280	百・中	
40B	土坑88	楕円形	Ⅲb	101	72	68	233	百・中・Ⅰ	
40B	土坑89	楕円形	Ⅲb	70	56	79	194	百・中・Ⅰ	壁面被熱
41B	土坑90	楕円形	Ⅲb	151	120	24	258	百・中・Ⅰ	
29C	土坑91	円形	Ⅲb	73	59	33	244	百・後	
29C	土坑92	円形	Ⅲb	56	49	24	249	百・後	
29C	土坑93	円形	Ⅲe	80	57	38	242	百・後	
29C	土坑94	円形	Ⅲb	66	32	36	247	百・後	
30C	土坑95	円形	Ⅲe	75	55	25	259	百・後	
38B	土坑96	—	Ⅲb	86	(34)	102	233	百・後	
39B	土坑97	楕円形	Ⅲb	102	83	15	193	百・後	
39B	土坑98	楕円形	Ⅲb	106	67	15	194	百・後	
39B	土坑99	長方形	Ⅲb	245	99	50	260	百・後・Ⅱ	
39B 40B	土坑100	楕円形?	Ⅲb	(203)	68	42	255	百・後・Ⅱ	
40B	土坑101	不整形	Ⅲb	150	111	14	304	百・後・Ⅱ	
40B	土坑102	楕円形	Ⅲe	243	103	10	272	百・後	
40B	土坑103	楕円形	Ⅲb	185	110	33	275	百・後・Ⅱ	
40A 40B	土坑104	長方形	Ⅲb	152	86	24	291	百・後・Ⅱ	
40A	土坑105	不整形	Ⅲb	(75)	73	15	287	百・後・Ⅱ	
40A	土坑106	円形	Ⅲb	62	60	50	242	百・後	
40B	土坑107	楕円形	Ⅲe	114	58	12	298	百・後	
40B	土坑108	不整形	Ⅲb	116	(68)	14	290	百・後・Ⅱ	
40A 40B	土坑109	不整形	Ⅲb	182	127	10	204	百・後・Ⅱ	
40A	土坑110	楕円形	Ⅲb	114	73	12	280	百・後・Ⅱ	

地区	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
41A	土坑111	楕円形	Ⅲb	143	114	34	254	百・後・Ⅱ	
41B	土坑112	円形	Ⅲb	136	132	74	200	百・後	
41B	土坑113	長方形	Ⅲb	170	130	37	191	百・後・Ⅱ	
41B	土坑114	楕円形	Ⅲb	138	102	29	165	百・後	
31B	土坑115	円形	Ⅲb	56	46	17	522	古墳後期	
31B	土坑116	不整形	Ⅲe	70	42	9	335	古墳後期	
31B	土坑117	不整形	Ⅲe	(103)	62	11	335	古墳後期	
31B	土坑118	楕円形	Ⅲe	65	47	12	335	古墳後期	
31B	土坑119	楕円形	Ⅲe	49	31	5	340	古墳後期	
33C	土坑120	楕円形	Ⅲb	84	66	10	301	古墳後期	
39B	土坑121	円形	Ⅲb	75	(47)	95	176	百・古・Ⅰ	
41A	土坑122	円形	Ⅲb	63	60	50	253	百・古・Ⅰ	

溝

地区	遺構名	断面形	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (cm)	時期	備考
30B・C・31C	溝1	碗状	160~168	12~22	34~44	224~238	百・前・Ⅲ	
31B・C・32C	溝2	逆台形	82~100	18~22	36~41	244~252	百・前・Ⅲ	
31B・C	溝3	碗状	122~186	46~122	14~18	265~280	百・前・Ⅲ	
31A・C・32C	溝4	碗状	55以上	16	6~12	284~289	百・前・Ⅲ	
31・32B・31・32C	溝5	逆台形	150~180	98~132	30	249~258	百・前・Ⅲ	
33B・C・34C	溝6	逆台形	90~184	23~50	45~55	207~222	百・前・Ⅲ	
33B・C・34C	溝7	碗状	36~38	12	13~18	241~249	百・前・Ⅲ	
34B・C	溝8	皿状	102~124	88~90	6~8	251~258	百・前・Ⅲ	
34B・C	溝9	碗状	30~32	10	19~25	230~236	百・前・Ⅲ	
34B・C	溝10	碗状	30~50	6~18	17~36	232~237	百・前・Ⅲ	
34・35B・34・35C	溝11	碗状	312~535	80~152	41~109	149~166	百・前・Ⅲ	
41A・41・42B	溝12	逆台形	208~285	80~142	69~78	177~212	百・前・Ⅲ~百・中・Ⅰ	
41A・41・42B	溝13	皿状	358~449	70~82	47~50	178~182	百・前・Ⅲ	
34B・C・35C	溝14	碗状	512~608	100	90~99	157~166	百・中・Ⅰ~Ⅲ	
35C	溝15	碗状	50~72	22~36	4~11	191~198	百・中	
29C	溝16	碗状	30~42	14~20	3	267	百・後	
29C	溝17	碗状	30~56	12~18	8~11	265~270	百・後	
29C	溝18	逆台形	60~86	36~52	32	234~237	百・後	
29・30C	溝19	碗状	32~43	12~20	28	251~258	百・後	
33C	溝20	皿状	38~42	15~30	3~5	273~279	百・後	
34B・C・35C	溝21	碗状	220~258	124~176	13~42	243~245	百・後・Ⅳ	
34B・C・35C	溝22	碗状	40	12	12~16	229~235	百・後・Ⅳ	
34B・C・35C	溝23	碗状	38~54	10~16	6~12	234~241	百・後・Ⅳ	
34B・C・35C	溝24	碗状	130	30~60	12~16	225~230	百・後・Ⅳ	
34B・C・35C	溝25	碗状	42~58	12~20	35~42	245	百・後・Ⅳ	
34B・C・35C	溝26	碗状	82	14~34	30	247~255	百・後	
34B・C・35C	溝27	皿状	28~36	8~12	3~5	232~247	百・後	
34B・C・35C	溝28	碗状	20~30	4	3~6	244~250	百・後	
36C	溝29	碗状	20~25	2~10	3~5	214~228	百・後	
40A・B	溝30	皿状	26~58	11~42	4~7	275~280	百・後・Ⅱ	
40A・B	溝31	皿状	37~49	16~24	7~13	290~294	百・後・Ⅱ	
40A・B	溝32	碗状	72~100	50~75	8~17	284~297	百・後・Ⅱ	
41A・B	溝33	碗状	46~71	17~20	39~48	209~215	百・後・Ⅱ	
38B・C	溝34	碗状	96~190	23~50	9	249~254	百・後・Ⅱ	
39B・C	溝35	碗状	88~124	20~40	8	247~250	百・後・Ⅱ	
39B・C	溝36	碗状	69~152	28~43	8~14	248~250	百・後・Ⅱ	
39B・C	溝37	碗状	20~121	10~50	1~4	260	百・後・Ⅱ	
39B・C	溝38	碗状	131~200	31~90	5~10	255	百・後・Ⅱ	
41A・B	溝39	皿状	51~72	25~40	4~6	224~229	百・後・Ⅱ	底面に凹凸
41A・B	溝40	碗状	35~67	12~25	2~3	230	百・後・Ⅱ	底面に凹凸
41A・B	溝41	皿状	20~52	12~36	3~5	232	百・後・Ⅱ	底面に凹凸
41A・B	溝42	碗状	19~58	8~37	5~8	218~228	百・後・Ⅱ	
39B・C	溝43	碗状	398~462	24~90	79~98	229~250	百・後・Ⅱ	
32B・C・33B・C	溝44	碗状	40~61	6~12	11~15	309~312	古墳後期	
32B・C・33B・C	溝45	碗状	102~78	30~54	20~27	298~308	古墳後期	
32B・C・33B・C	溝46	皿状	46~58	20~36	4	311~317	古墳後期	
32B・C・33B・C	溝47	皿状	72~96	34~58	6~8	291~313	古墳後期	底面に凹凸
32B・C・33B・C	溝48	碗状	32~60	12~33	6~12	306~309	古墳後期	
32B・C・33B・C	溝49	碗状	110~140	25~40	14~48	286~292	古墳後期	
32B・C・33B・C	溝50	逆台形	94~138	38~50	36	272~278	古墳後期	底面に凹凸
33B・C・34C	溝51	碗状	40~48	14~20	6~10	317~322	古墳後期	
33B・C・34C	溝52	碗状	48~60	18~40	6~9	312~322	古墳後期	
33B・34B・C	溝53	碗状	62~94	21~50	16~24	306~312	古墳後期	底面に凹凸
33B・34B・C	溝54	碗状	132~153	42~52	35~40	278~292	古墳後期	
34・35C	溝55	碗状	18~50	8~20	2~7	291~294	古墳後期	
34~36C	溝56	碗状	20~42	6~12	2~7	258~283	百・古	
37B	溝57	皿状	12~54	8~23	2~5	273~276	百・古	
38B・C	溝58	逆台形	50~58	24~34	16~22	265~270	百・古・Ⅰ	
38B・C	溝59	碗状	40~52	12~20	13~16	273~276	百・古・Ⅰ	

地区	遺構名	断面形	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (cm)	時期	備考
38B・C	溝60	椀状	30~48	12~20	3~10	292~298	百・古・I	
39・40B	溝61	逆台形	46~62	17~28	19~33	275~311	百・古・I	
39B・C	溝62	皿状	47~70	38~54	1~2	323~327	百・古・I	
40A・B・41B	溝63	皿状	48~75	24~38	4~8	318~325	百・古・I	
40B・41A・B	溝64	皿状	30~173	12~96	3~10	269~322	百・古・I	
41A・B	溝65	逆台形	45~192	20~30	11~45	264~293	百・古・I	
41A・B	溝66	逆台形	70~255	16~40	8~36	286~290	百・古・I	
31B・C・32C	溝67	逆台形	85~116	28~42	35~59	269~274	中・近世	
35B・C・36B	溝68	椀状	42~75	12~30	8~17	308~314	近現代	
35C・36B・C	溝69	椀状	13~53	30~38	9~24	304~312	近現代	

百間川原尾島遺跡遺物観察表

土器

掲載 番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
1	土坑3		弥生土器	壺	(26.6)				にぶい橙 (7.5YR6/4)	口唇部刻み目
2	土坑3		弥生土器	壺		8.4			にぶい黄橙 (10YR7/4)	
3	土坑3		弥生土器	甕	(22.6)				にぶい橙 (5YR7/4)	
4	土坑3		弥生土器	甕	(19.6)				にぶい黄橙 (10YR7/2)	
5	土坑4	最下層	弥生土器	壺	30.4				浅黄橙 (10YR8/3)	口縁部内面に沈線
6	土坑4		弥生土器	甕	27.9				橙 (7.5YR6/6)	
7	土坑4	最下層	弥生土器	蓋	6.9		8.0	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR6/3)	
8	土坑5		弥生土器	壺	(28.4)				にぶい黄橙 (10YR6/3)	口縁部内面に浮文
9	土坑5		弥生土器	壺					橙 (5YR6/8)	口縁部端部、やや肥厚
10	土坑5		弥生土器	壺	12.6	8.3	30.2		浅黄橙 (10YR8/4)	
11	土坑5		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR6/3)	
12	土坑5		弥生土器	甕					灰褐 (7.5YR4/2)	沈線下に、三角形刺突文
13	土坑5		弥生土器	甕	(17.0)				黒 (7.5YR2/1)	
14	土坑6		弥生土器	壺	15.2				灰白 (10YR7/1)	
15	土坑6		弥生土器	甕					橙 (5YR6/6)	
16	土坑6		弥生土器	鉢	15.8				にぶい橙 (10YR7/2)	
17	土坑6		弥生土器	鉢	29.6				灰白 (2.5Y8/1)	
18	土坑7		弥生土器	壺	(35.8)				にぶい黄橙 (10YR7/2)	
19	土坑7		弥生土器	壺	(30.3)				褐灰 (10YR4/1)	
20	土坑7		弥生土器	壺	28.4				灰黄褐 (10YR4/2)	口唇部に2段の刻み目
21	土坑7		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR4/2)	
22	土坑7		弥生土器	甕	(22.0)				灰白 (2.5Y8/2)	
23	土坑8		弥生土器	甕					にぶい橙 (7.5YR7/3)	
24	土坑9		弥生土器	甕	(30.2)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
25	土坑9		弥生土器	蓋	つまみ 径4.1				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
26	土坑10		弥生土器	壺	11.0	(9.0)	30.2		にぶい橙 (7.5YR6/4)	櫛描沈線の可能性がある
27	土坑10		弥生土器	甕					浅黄橙 (7.5YR8/4)	
28	土坑10		弥生土器	甕	21.9	7.4	24.8	ほぼ完形	にぶい橙 (7.5YR6/4)	底部穿孔
29	土坑11		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
30	土坑11		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/3)	
31	土坑12・13		弥生土器	壺					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
32	土坑12・13		弥生土器	壺					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
33	土坑12・13		弥生土器	甕					橙 (5YR6/6)	細く、浅いへら描沈線
34	土坑12・13		弥生土器	甕	(20.6)				黒褐 (10YR3/1)	
35	土坑12		弥生土器	甕	26.0				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
36	土坑12		弥生土器	甕	27.2				橙 (7.5YR6/6)	
37	土坑14		弥生土器	壺	29.3				橙 (5YR6/6)	口縁部内面に浮文
38	土坑14		弥生土器	甕	23.7	7.1	27.6		灰白 (10YR8/2)	底部穿孔
39	土坑15		弥生土器	壺	28.4				灰黄褐 (10YR6/2)	口縁部内面に浮文
40	土坑15		弥生土器	甕	(27.4)				にぶい黄褐 (10YR5/4)	へら描沈線間に円形刺突
41	土坑15		弥生土器	甕	(18.8)				にぶい褐 (7.5YR5/3)	
42	土坑16		弥生土器	壺	24.4				灰黄褐 (10YR4/2)	口唇部刻み目後、沈線
43	土坑16		弥生土器	甕					橙 (7.5YR6/6)	
44	土坑16		弥生土器	甕	(24.3)				浅黄橙 (10YR8/3)	4条の極細く浅い沈線
45	土坑16		弥生土器	甕	21.7				にぶい黄橙 (10YR7/2)	
46	土坑16		弥生土器	甕		6.6			橙 (5YR6/6)	底部穿孔
47	土坑18	東半	弥生土器	壺					灰黄褐 (10YR6/2)	口唇部刻み目後、沈線
48	土坑18	西半上層	弥生土器	壺					にぶい橙 (7.5YR7/4)	
49	土坑18		弥生土器	壺		8.3			にぶい黄橙 (10YR6/3)	
50	土坑18	東半下層	弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/3)	山形文
51	土坑18		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR5/2)	
52	土坑18		弥生土器	甕	(30.8)				橙 (5YR6/6)	
53	土坑18	東半	弥生土器	甕	37.6				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
54	土坑18		弥生土器	甕	(44.0)				にぶい黄橙 (10YR7/4)	

掲載番号	遺構名・層位	種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
				口径	底径	器高			
55	土坑18	弥生土器	甕	(19.2)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
56	土坑19	弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR5/2)	
57	土坑19	弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR5/2)	
58	土坑19	弥生土器	甕					橙 (7.5YR6/6)	
59	土坑20	弥生土器	壺	(23.4)				灰白 (2.5Y8/2)	口唇部に2段の円形刺突
60	土坑20	弥生土器	壺	36.4				灰黄褐 (10YR4/2)	口縁部内面に浮文
61	土坑20	弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR6/3)	
62	土坑21	弥生土器	壺	19.8				灰黄 (2.5Y6/2)	
63	土坑21	弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/2)	
64	土坑21	弥生土器	壺	18.8				灰黄 (2.5Y6/2)	頸部の刺突位置は不揃い
65	土坑21	弥生土器	壺		8.4			浅黄橙 (10YR8/4)	
66	土坑21	弥生土器	甕	17.2				にぶい褐 (7.5YR5/4)	
67	土坑21	弥生土器	甕	20.6				灰黄褐 (10YR6/2)	
68	土坑21	弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
69	土坑21	弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/2)	
70	土坑21	弥生土器	甕	(20.8)				灰黄褐 (10YR6/2)	
71	土坑22	弥生土器	壺					橙 (7.5YR6/6)	
72	土坑22	弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR6/3)	
73	土坑22	弥生土器	甕					黒 (N2/)	
74	土坑23	弥生土器	甕					にぶい褐 (7.5YR5/3)	
75	土坑23	弥生土器	甕	22.3	7.0	27.3		にぶい橙 (7.5YR6/4)	
76	土坑23	弥生土器	甕		7.1			にぶい赤褐 (5YR5/4)	底部穿孔
77	土坑24	弥生土器	壺					にぶい赤褐 (5YR4/4)	口縁部内外面に刻み目
78	土坑24	弥生土器	甕		7.0			橙 (5YR7/6)	
79	土坑24	弥生土器	甕					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
80	土坑24	弥生土器	甕	(17.0)				灰褐 (7.5YR4/2)	
81	土坑25	弥生土器	壺					橙 (2.5YR6/6)	
82	土坑25	弥生土器	壺		(9.0)			にぶい橙 (7.5YR7/4)	
83	土坑25	弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR5/2)	
84	土坑25	弥生土器	甕		7.1			橙 (5YR7/6)	
85	土坑26	弥生土器	壺		11.3			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
86	土坑26	弥生土器	甕					にぶい黄褐 (10YR5/3)	
87	土坑26	弥生土器	甕	(26.2)				灰黄褐 (10YR4/2)	
88	土坑27	弥生土器	壺					褐灰 (10YR4/1)	木葉文の可能性
89	土坑27	弥生土器	壺		9.1			灰黄 (2.5Y6/2)	
90	土坑27	弥生土器	甕	25.2				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
91	土坑28	弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR6/3)	
92	土坑28	弥生土器	甕	16.1				橙 (7.5YR6/6)	
93	土坑35	弥生土器	甕	(11.7)				にぶい橙 (7.5YR6/4)	粘土帯土器
94	土坑35	弥生土器	甕					灰白 (10YR8/2)	
95	土坑35	弥生土器	甕					黒 (2.5Y2/1)	
96	土坑37	弥生土器	甕		6.4			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
97	土坑39	弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR6/3)	
98	土坑40	弥生土器	壺	9.3	6.0	19.4		にぶい橙 (7.5YR7/4)	在地で製作
99	土坑40	弥生土器	甕					橙 (7.5YR7/4)	
100	土坑40	弥生土器	鉢					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
101	土坑41	弥生土器	甕	20.0				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
102	土坑41	弥生土器	甕					灰黄 (2.5Y7/2)	
103	土坑46	弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/3)	
104	土坑46	弥生土器	甕	16.0				灰黄褐 (10YR5/2)	口縁部上端に山形文
105	土坑47	弥生土器	壺	20.2				灰黄褐 (10YR5/2)	
106	土坑47	弥生土器	甕					橙 (5YR6/6)	
107	土坑50	弥生土器	甕					にぶい黄褐 (10YR4/3)	
108	土坑51	弥生土器	甕					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
109	土坑52	弥生土器	壺					橙 (5YR7/6)	口縁部内面に浮文
110	土坑52	弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR4/2)	
111	土坑52	弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
112	土坑52	弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR6/2)	
113	土坑52	弥生土器	蓋					褐灰 (7.5YR6/1)	
114	土坑53	弥生土器	甕					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
115	土坑54	弥生土器	甕	14.0				にぶい褐 (7.5YR5/4)	
116	土坑54	弥生土器	甕	11.2				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
117	土坑56	弥生土器	壺	26.8				にぶい黄橙 (10YR7/3)	木葉文
118	土坑56	弥生土器	甕	16.8				橙 (7.5YR6/6)	
119	土坑56	弥生土器	甕	22.9	7.4	19.7		にぶい黄橙 (10YR7/2)	
120	土坑37	弥生土器	甕	(20.4)				灰褐 (7.5YR4/2)	
121	土坑37	弥生土器	甕	26.6				灰黄 (2.5Y7/2)	
122	土坑59	弥生土器	甕					褐 (7.5YR4/3)	
123	土坑61	弥生土器	甕	29.8	8.5	35.1		橙 (5YR6/8)	
124	土坑62	弥生土器	甕					にぶい褐 (7.5YR6/3)	
125	土坑64	弥生土器	甕					にぶい黄褐 (10YR5/4)	
126	土坑66	弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/3)	
127	土坑68	弥生土器	壺		9.6			灰白 (2.5Y7/1)	
128	土坑68	弥生土器	壺					赤橙 (10R6/6)	
129	土坑68	弥生土器	甕		7.3			灰黄 (2.5Y6/2)	
130	溝1	弥生土器	甕		6.8			橙 (5YR7/6)	
131	溝2	弥生土器	甕					灰黄 (2.5Y6/2)	
132	溝2	弥生土器	甕					灰白 (2.5Y8/2)	
133	溝6	弥生土器	壺		4.2			にぶい黄橙 (10YR7/2)	
134	溝6	弥生土器	壺		(7.8)			にぶい橙 (7.5YR7/4)	
135	溝7	弥生土器	壺		4.1			にぶい黄橙 (10YR7/2)	

掲載番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
136	溝8		弥生土器	壺	(26.4)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
137	溝8		弥生土器	壺		11.4			にぶい橙 (7.5YR7/4)	
138	溝8		弥生土器	甕	21.2				灰黄褐 (10YR4/2)	
139	溝11		弥生土器	壺	20.0				にぶい褐 (7.5YR5/4)	
140	溝11		弥生土器	甕	(26.4)				灰黄 (2.5Y7/2)	
141	溝11		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR6/2)	
142	溝11		弥生土器	甕		7.4			にぶい黄橙 (10YR7/3)	底部穿孔
143	溝12	上層	弥生土器	壺					灰黄褐 (10YR6/2)	
144	溝12	上層	弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR6/3)	
145	溝12	西半上層	弥生土器	壺					橙 (7.5YR7/6)	
146	溝12	上層	弥生土器	甕	(16.6)	6.8	24.2		にぶい黄橙 (10YR6/3)	
147	溝12	上層	弥生土器	甕	(26.8)				橙 (7.5YR6/6)	
148	溝12	上層	弥生土器	甕	16.1	5.6	17.2	完形	にぶい黄橙 (10YR6/4)	
149	溝12	上層	弥生土器	甕	23.4				橙 (7.5YR7/6)	
150	溝12	上層	弥生土器	甕	21.0				橙 (5YR6/6)	
151	溝12	北側上層	弥生土器	甕	18.6				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
152	溝12	西半上層	弥生土器	甕	24.3	6.0	27.9		にぶい黄橙 (10YR7/4)	
153	溝12	東半上層	弥生土器	甕	21.6				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
154	溝12	上層	弥生土器	甕	(27.0)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
155	溝12	東半上層	弥生土器	甕	(23.0)				橙 (7.5YR7/6)	
156	溝12	北側上層	弥生土器	甕	24.4				にぶい褐 (7.5YR5/3)	
157	溝12	上層	弥生土器	甕		7.2			にぶい橙 (7.5YR7/3)	
158	溝12	東半上層	弥生土器	鉢	21.5				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
159	溝12	中層	弥生土器	壺		(2.7)			にぶい褐 (7.5YR5/4)	
160	溝12	中層	弥生土器	壺					橙 (5YR6/6)	
161	溝12	中層	弥生土器	壺	(27.3)				浅黄橙 (10YR8/3)	
162	溝12	中層	弥生土器	甕					にぶい褐 (7.5YR5/4)	
163	溝12	中層	弥生土器	甕	18.5				にぶい赤褐 (5YR5/4)	
164	溝12	中層	弥生土器	甕	24.0	7.4	(26.5)		橙 (2.5YR6/8)	
165	溝12	中層	弥生土器	甕	39.8				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
166	溝12	中層	弥生土器	甕	25.0				灰黄 (2.5Y7/2)	
167	溝12	中層	弥生土器	甕	25.4	8.3	28.2		明赤褐 (5YR5/6)	
168	溝12	下層	弥生土器	壺	10.3	5.9	17.2		にぶい黄橙 (10YR7/4)	
169	溝12	下層	弥生土器	壺	14.8				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
170	溝12	下層	弥生土器	壺		9.4			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
171	溝12	下層	弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/3)	
172	溝12	下層	弥生土器	壺	23.8				にぶい赤褐 (5YR4/4)	
173	溝12	下層	弥生土器	壺	10.5				橙 (7.5YR6/6)	
174	溝12	下層	弥生土器	壺		15.1			にぶい橙 (7.5YR7/3)	
175	溝12	下層	弥生土器	甕	19.4				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
176	溝12	下層	弥生土器	甕	21.8				橙 (7.5YR6/6)	
177	溝12	下層	弥生土器	甕	20.2				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
178	溝12	東半下層	弥生土器	甕	(38.5)				灰褐 (7.5YR4/2)	
179	溝12	下層	弥生土器	甕	(34.0)				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
180	溝12	下層	弥生土器	甕	28.2				褐灰 (10YR5/1)	
181	溝12	下層	弥生土器	甕		6.0			にぶい赤褐 (5YR5/4)	
182	溝12	下層	弥生土器	甕		7.4			明赤褐 (5YR5/6)	
183	溝12	最下層	弥生土器	壺					灰黄 (2.5Y6/2)	
184	溝12	最下層	弥生土器	壺					橙 (2.5YR6/8)	
185	溝12	最下層	弥生土器	壺		7.4			黄灰 (2.5Y6/1)	
186	溝12	最下層	弥生土器	壺	27.6	14.0	62.0	完形	橙 (5YR6/6)	
187	溝12	最下層	弥生土器	壺		11.7			にぶい赤褐 (5YR5/4)	
188	溝12	最下層	弥生土器	甕	20.6				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
189	溝12	最下層	弥生土器	甕	20.4				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
190	溝12	最下層	弥生土器	甕	22.4				灰黄褐 (10YR4/2)	
191	溝12		弥生土器	壺	23.8				灰白 (2.5Y8/2)	
192	溝12		弥生土器	壺					橙 (5YR6/8)	
193	溝12	東半	弥生土器	壺	23.2				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
194	溝12		弥生土器	壺	18.4				灰黄褐 (10YR6/2)	
195	溝12		弥生土器	壺					浅黄橙 (10YR8/3)	
196	溝12	東半土手	弥生土器	壺	(17.3)				にぶい褐 (7.5YR6/3)	
197	溝12	土手	弥生土器	壺	12.0				橙 (7.5YR6/6)	
198	溝12	東半	弥生土器	壺	13.0				にぶい黄褐 (10YR4/3)	
199	溝12	中央部	弥生土器	壺	(12.8)				灰黄褐 (10YR6/2)	
200	溝12	東半	弥生土器	壺	(9.0)				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
201	溝12		弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR6/3)	
202	溝12	北側	弥生土器	壺	19.8				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
203	溝12		弥生土器	壺	14.0				灰黄褐 (10YR6/2)	
204	溝12	北側	弥生土器	壺	21.6				灰黄褐 (10YR4/2)	
205	溝12	中央部	弥生土器	壺	(22.8)				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
206	溝12		弥生土器	壺					にぶい赤褐 (5YR5/4)	
207	溝12	中央部	弥生土器	壺	27.5				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
208	溝12	中央部	弥生土器	壺	30.5				橙 (5YR7/6)	
209	溝12		弥生土器	壺	(24.2)				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
210	溝12		弥生土器	壺	38.4				にぶい黄橙 (10YR7/2)	
211	溝12		弥生土器	壺		8.0			にぶい黄橙 (10YR6/3)	
212	溝12	中央部	弥生土器	甕	22.0				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
213	溝12	西底 北側 西半上層	弥生土器	甕	21.6				明赤褐 (5YR5/6)	
214	溝12	サブトレ掘下中	弥生土器	甕	21.5				赤褐 (5YR4/6)	
215	溝12		弥生土器	甕	21.5				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
216	溝12		弥生土器	甕	(24.8)				にぶい橙 (7.5YR6/4)	

掲載番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
217	溝12		弥生土器	甕	24.6	7.9	31.3		にぶい黄橙 (10YR6/3)	
218	溝12		弥生土器	甕	22.4	7.8	27.6	完形	浅黄橙 (7.5YR8/6)	
219	溝12	北側	弥生土器	甕	20.1				灰黄褐 (10YR5/2)	
220	溝12	北側	弥生土器	甕	23.4				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
221	溝12		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR4/2)	口縁部押圧で波状に
222	溝12		弥生土器	甕					黒褐 (7.5YR3/2)	
223	溝12	中央部	弥生土器	甕					明赤褐 (5YR5/6)	
224	溝12		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR6/3)	4条の極細く浅い沈線
225	溝12		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR6/3)	櫛描沈線
226	溝12		弥生土器	甕					にぶい褐 (7.5YR5/4)	櫛描沈線
227	溝12		弥生土器	甕					橙 (7.5YR6/6)	櫛描沈線
228	溝12		弥生土器	甕					褐灰 (10YR5/1)	櫛描沈線
229	溝12		弥生土器	甕	23.3	8.0	17.5	完形	浅黄橙 (10YR8/4)	
230	溝12	北側	弥生土器	甕		6.9			橙 (7.5YR6/6)	
231	溝12		弥生土器	甕		6.8			橙 (5YR6/6)	底部穿孔
232	溝13		弥生土器	壺					灰黄 (2.5Y6/2)	
233	溝13		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR5/2)	
234	溝13		弥生土器	甕	(21.0)				にぶい黄橙 (10YR6/3)	
235	土器溜まり1		弥生土器	甕	27.2				にぶい黄橙 (10YR7/4)	沈線間に円形浮文
236	下がり1		弥生土器	壺		8.9			橙 (7.5YR7/6)	
237	下がり1		弥生土器	壺		9.2			にぶい赤褐 (5YR5/4)	
238	下がり1		弥生土器	壺	20.0	10.6	40.5		にぶい黄橙 (10YR6/3)	
239	下がり1		弥生土器	壺		8.3			浅黄2.5Y7/3	胴部穿孔
240	下がり1		弥生土器	壺		10.5			にぶい橙 (7.5YR7/4)	胴部穿孔
241	柱穴1		弥生土器	壺	14.2				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
242	柱穴2		弥生土器	甕	(27.0)				灰褐 (5YR4/2)	
243	柱穴3		弥生土器	壺					暗灰黄 (2.5Y5/2)	
244	柱穴4		弥生土器	壺		10.6			にぶい橙 (7.5YR6/4)	
245	柱穴4		弥生土器	壺	11.8				にぶい黄橙 (10YR6/3)	
246	柱穴4		弥生土器	甕	19.8				橙 (7.5YR6/6)	
247	柱穴8		弥生土器	壺	13.2				にぶい褐 (7.5YR5/4)	
248	柱穴8		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR5/2)	
249	柱穴10		弥生土器	壺	(23.4)				黒褐 (5YR3/1)	
250	柱穴10		弥生土器	壺	32.0				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
251	柱穴11		弥生土器	壺					暗灰黄 (2.5Y5/2)	
252	柱穴11		弥生土器	壺					灰黄 (2.5Y7/2)	
253	柱穴11		弥生土器	甕					にぶい赤褐 (5YR5/4)	
254	柱穴12		弥生土器	壺					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
255	柱穴14		弥生土器	壺	(24.4)				橙 (7.5YR6/6) やや黄褐	
256	柱穴15		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR4/2)	粗雑な沈線、器壁厚い
257	柱穴16		弥生土器	壺	30.6				橙 (5YR6/8)	
258	柱穴16		弥生土器	壺	30.6				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
259	柱穴16		弥生土器	甕	22.0				橙 (5YR6/6)	
260	柱穴16		弥生土器	甕					褐 (7.5YR4/3)	
261	柱穴17		弥生土器	甕	18.8				灰黄褐 (10YR5/2)	
262	柱穴18		弥生土器	壺	(26.0)				赤褐 (5YR4/6)	
263	旧河道		縄文土器	深鉢					灰黄褐 (10YR4/2)	
264	旧河道		縄文土器	深鉢	23.7				黄灰 (2.5Y5/1)	
265	旧河道		縄文土器	深鉢	34.4				灰黄褐 (10YR4/2)	口縁外面に線刻
266	旧河道		縄文土器	深鉢					黒 (N2/) やや灰色が入る	
267	旧河道		縄文土器	浅鉢					暗灰黄 (2.5Y5/2)	
268	旧河道		縄文土器	浅鉢					灰黄褐 (10YR5/2)	
269	旧河道		縄文土器	浅鉢	(42.0)				灰黄褐 (10YR6/2)	
270	旧河道		弥生土器	甕	27.3				にぶい黄橙 (10YR7/2)	
271	旧河道		弥生土器	蓋	6.4				にぶい褐 (7.5YR6/3)	
272	旧河道	重機掘削中上層	弥生土器	壺		13.2			にぶい橙 (5YR7/4) やや赤が入る	
273	杭列1		弥生土器	壺		8.08			褐灰 (10YR4/1)	
274	杭列1		弥生土器	壺					灰黄 (2.5Y6/2)	
275	杭列1		弥生土器	壺					灰黄褐 (10YR4/2)	
276	杭列1		弥生土器	甕					黒褐 (10YR3/1)	
277	杭列1		弥生土器	甕					黒 (N1.5/)	
278	竪穴住居1		弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/2)	
279	竪穴住居2		弥生土器	甕	(24.4)				にぶい黄橙 (10YR3/7)	
280	土坑69	北半	弥生土器	甕					明赤褐 (5YR5/6)	
281	土坑69	北半	弥生土器	甕					橙 (7.5YR7/6)	
282	土坑69	北半	弥生土器	甕		6.9			橙 (5YR7/6)	
283	土坑69	北半	弥生土器	蓋					灰黄褐 (10YR6/2)	
284	土坑70		弥生土器	壺	41.7				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
285	土坑70		弥生土器	壺					橙 (7.5YR7/6)	
286	土坑70		弥生土器	壺		9.8			浅黄橙 (10YR8/3)	ヘラ描沈線
287	土坑70		弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/3)	
288	土坑70		弥生土器	壺					にぶい橙 (5YR6/4)	
289	土坑70		弥生土器	壺					明赤褐 (2.5YR5/6)	櫛描沈線
290	土坑70		弥生土器	壺	9.1				にぶい橙 (5YR6/4)	ヘラ描沈線
291	土坑70		弥生土器	壺					黄灰 (2.5Y4/1)	櫛描沈線
292	土坑70		弥生土器	壺	(11.0)				にぶい黄橙 (10YR7/2)	櫛描沈線
293	土坑70		弥生土器	壺					灰黄褐 (10YR5/2)	櫛描沈線
294	土坑70		弥生土器	壺		9.6			橙 (2.5YR6/8)	
295	土坑70		弥生土器	甕					橙 (5YR6/6)	ヘラ描沈線
296	土坑70		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/2)	ヘラ描沈線
297	土坑70		弥生土器	甕	23.3				褐 (7.5YR4/3)	櫛描沈線

掲載番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
298	土坑70		弥生土器	甕	(24.0)				褐灰 (10YR6/1)	ヘラ描沈線
299	土坑70		弥生土器	甕	(20.9)				浅黄 (2.5Y7/3)	ヘラ描沈線
300	土坑70		弥生土器	甕					にぶい橙 (5YR7/4)	櫛描沈線
301	土坑70		弥生土器	甕					にぶい赤褐 (5YR5/4)	櫛描沈線
302	土坑70		弥生土器	甕					褐灰 (7.5YR4/2)	櫛描沈線
303	土坑70		弥生土器	甕	22.4				明赤褐 (5YR5/6)	櫛描沈線
304	土坑70		弥生土器	甕	(20.0)				にぶい橙 (5YR7/4)	
305	土坑70		弥生土器	鉢	32.1				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
306	土坑70		弥生土器	蓋	つまみ径5.15				灰黄褐 (10YR5/2)	つまみ部分に、2個一対の穿孔
307	土坑71		弥生土器	壺					にぶい赤褐 (5YR5/4)	
308	土坑71		弥生土器	甕	26.5	6.3	28.9~29.1	完形	灰白 (10YR8/2)	ヘラ描沈線 底部穿孔
309	土坑71		弥生土器	甕	18.1	7.2	27.0	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/4)	櫛描沈線
310	土坑71		弥生土器	甕	21.3				にぶい橙 (5YR6/4)	ヘラ描沈線
311	土坑71		弥生土器	甕	20.4				橙 (5YR7/6)	ヘラ描沈線
312	土坑71		弥生土器	甕	26.8	6.6	29.8		にぶい黄橙 (10YR7/3)	ヘラ描沈線
313	土坑71		弥生土器	甕	26.0				灰黄褐 (10YR5/2)	ヘラ描沈線
314	土坑71		弥生土器	甕	22.4				灰黄褐 (10YR4/2)	櫛描沈線
315	土坑71		弥生土器	甕	24.0				褐灰 (10YR4/1)	
316	土坑71		弥生土器	甕	21.4				灰白 (2.5Y7/1)	
317	土坑71		弥生土器	甕	(34.0)				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
318	土坑72		弥生土器	甕					灰白 (2.5Y8/2)	ヘラ描沈線
319	土坑72		弥生土器	甕					にぶい褐 (7.5Y5/4)	櫛描沈線
320	土坑73		弥生土器	甕					明赤褐 (5YR5/6)	ヘラ描沈線
321	土坑73		弥生土器	甕					にぶい橙 (7.5YR6/4)	櫛描沈線
322	土坑73		弥生土器	甕	21.8				褐灰 (10YR4/1)	櫛描沈線
323	土坑74		弥生土器	壺		6.0			黄灰 (2.5Y6/1) ?	
324	土坑74		弥生土器	甕	18.0				にぶい橙 (7.5YR6/4)	櫛描沈線
325	土坑74		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR4/2)	櫛描沈線
326	土坑74		弥生土器	甕		6.9			にぶい黄橙 (10YR7/4)	底部穿孔
327	土坑75		弥生土器	甕	(24.0)				明褐 (7.5YR5/6)	ヘラ描沈線
328	土坑75		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/3)	ヘラ描沈線
329	土坑75		弥生土器	甕					にぶい黄褐 (10YR5/3)	櫛描沈線
330	土坑75		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR4/2)	櫛描沈線
331	土坑75		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/3)	櫛描沈線
332	土坑75		弥生土器	甕	23.6				浅黄橙 (7.5YR8/3)	櫛描沈線
333	土坑75		弥生土器	甕					黒褐 (7.5YR3/1)	櫛描沈線
334	土坑76		弥生土器	壺	12.0	6.0	23.5	完形	褐灰 (10YR6/1)	
335	土坑76		弥生土器	甕	19.0				橙 (5YR7/6)	
336	土坑77		弥生土器	壺	16.0				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
337	土坑77		弥生土器	甕	24.6	8.2	39.9	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/4)	底部穿孔
338	土坑77		弥生土器	高杯	(15.0)				にぶい黄橙 (10YR6/3)	
339	土坑79		弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/2)	
340	土坑79		弥生土器	甕	17.2				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
341	土坑82		弥生土器	高杯					にぶい黄橙 (10YR7/3)	
342	土坑83		弥生土器	壺	26.3	7.0	(37.1)		灰白 (2.5Y8/2)	
343	土坑83		弥生土器	甕	(17.0)				にぶい褐 (7.5YR5/4)	
344	土坑83		弥生土器	甕		7.4			灰黄 (2.5Y7/2)	
345	土坑83		弥生土器	甕	42.0				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
346	土坑83		弥生土器	高杯		11.1			黄灰 (2.5Y6/1)	
347	土坑84		弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR6/3)	
348	土坑84		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR4/2)	
349	土坑84		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
350	土坑85		弥生土器	壺	13.5				灰黄褐 (10YR6/2)	
351	土坑85		弥生土器	壺	8.8				にぶい黄橙 (10YR6/3)	
352	土坑85		弥生土器	壺		10.7			にぶい褐 (7.5YR5/4)	
353	土坑85		弥生土器	壺		10.7			にぶい褐 (7.5YR5/4)	
354	土坑85		弥生土器	甕	17.4				浅黄橙 (7.5YR8/3)	
355	土坑85		弥生土器	甕	15.9	5.1	25.9	完形	にぶい黄褐 (6YR5/4)	
356	土坑85		弥生土器	甕	16.6				褐灰 (10YR5/1)	
357	土坑85		弥生土器	甕		5.5			にぶい黄橙 (10YR6/3)	
358	土坑85		弥生土器	高杯					にぶい黄橙 (10YR7/2)	
359	土坑85		弥生土器	高杯	18.7				にぶい黄橙 (10YR7/2)	
360	土坑88		弥生土器	高杯					橙 (5YR6/6)	
361	土坑89		弥生土器	甕	(17.2)				にぶい黄橙 (10YR6/3)	
362	土坑89		弥生土器	甕	18.0				橙 (5YR6/6)	
363	土坑90		弥生土器	壺					にぶい褐 (7.5YR5/4)	
364	土坑90		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/2)	
365	土坑90		弥生土器	甕					明赤褐 (5YR5/6)	
366	土坑90		弥生土器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/3)	
367	溝14		弥生土器	壺	16.4				灰白 (10YR7/1)	
368	溝14		弥生土器	壺					灰黄 (2.5Y6/2)	
369	溝14		弥生土器	壺		7.6			灰白 (5Y7/1)	
370	溝14		弥生土器	甕	(27.6)				灰黄褐 (10YR4/2)	
371	溝14		弥生土器	甕	(27.3)				にぶい黄橙 (10YR7/2)	
372	溝14		弥生土器	甕	15.0				浅黄橙 (7.5YR8/3)	
373	溝14		弥生土器	甕	18.6				にぶい黄橙 (10YR7/2)	
374	溝14		弥生土器	甕		5.4			灰白 (2.5Y7/1)	
375	溝14		弥生土器	甕	(41.0)				灰白 (10YR8/2)	
376	溝14		弥生土器	高杯	20.7				灰黄 (2.5Y7/2)	
377	溝14		弥生土器	高杯					にぶい黄橙 (10YR7/2)	
378	溝14		弥生土器	蓋					オリープ黒 (5Y3/1)	

掲載 番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
379	水田3	中期水田検出中	弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/3) 赤色顔料の跡 (5YR6/6)	
380	竪穴住居3		弥生土器	壺	15.7	11.85	33.9~34.3	完形	灰黄 (2.5Y7/2)	
381	竪穴住居3	上面土器	弥生土器	甕	13.2	6.8	(28.8)		灰黄褐 (10YR6/2)	
382	竪穴住居3		弥生土器	甕	15.2				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
383	竪穴住居3		弥生土器	甕	12.4	4.8	21.7~22.7	ほぼ完形	灰白 (2.5Y7/1)	
384	竪穴住居3	中央穴	弥生土器	甕	14.85	4.8	21.0		橙 (7.5YR6/6)	
385	竪穴住居3		弥生土器	鉢	17.0	7.8	15.9		にぶい橙 (7.5YR7/4)	
386	竪穴住居3		弥生土器	鉢	12.8				橙 (5YR7/6)	
387	竪穴住居3		弥生土器	鉢	9.6	5.0	8.7		浅黄橙 (10YR8/4)	
388	竪穴住居3		弥生土器	製塩土器		4.9			灰白 (10YR8/2)	
389	竪穴住居3		弥生土器	製塩土器		4.1			にぶい黄橙 (10YR7/2)	
390	竪穴住居3		弥生土器	製塩土器		4.2			灰白 (10YR8/2)	
391	井戸1		弥生土器	壺					灰黄 (2.5Y6/2)	
392	井戸1		弥生土器	製塩土器		5.5			灰黄 (2.5Y7/2)	
393	井戸2		弥生土器	壺	14.2				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
394	井戸2		弥生土器	甕	10.2				にぶい黄橙 (10YR7/2)	
395	井戸2		弥生土器	甕	12.8				灰白 (5Y8/1)	
396	井戸2		弥生土器	高杯	(24.0)				浅黄橙 (10YR8/3)	
397	井戸2		弥生土器	製塩土器	14.0				褐灰 (10YR4/1)	
398	井戸2		弥生土器	製塩土器	12.7				黄灰 (2.5Y5/1)	
399	井戸2		弥生土器	製塩土器	13.8				灰黄褐 (10YR6/2)	
400	井戸2		弥生土器	製塩土器	14.4				黄灰 (2.5Y5/1)	
401	井戸2		弥生土器	製塩土器	14.6				灰黄褐 (10YR6/2)	
402	井戸2		弥生土器	製塩土器	12.3				オリーブ黒 (5Y3/1)	
403	井戸2		弥生土器	製塩土器	12.0				褐灰 (10YR4/1)	
404	井戸2		弥生土器	製塩土器	14.2				灰黄 (2.5Y7/2)	
405	井戸2		弥生土器	製塩土器		5.6			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
406	井戸2		弥生土器	製塩土器		5.1			にぶい橙 (7.5YR7/4)	
407	井戸2		弥生土器	製塩土器		4.8			にぶい橙 (5YR7/4)	
408	井戸2		弥生土器	製塩土器		4.4			灰黄褐 (10YR5/2)	
409	井戸2		弥生土器	製塩土器		4.4			にぶい黄橙 (10YR7/2)	
410	井戸2		弥生土器	製塩土器		5.0			灰黄 (2.5Y7/2)	
411	井戸2		弥生土器	製塩土器		5.2			灰黄 (2.5Y7/2)	
412	井戸2		弥生土器	製塩土器		4.8			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
413	井戸2		弥生土器	製塩土器		5.4			にぶい橙 (7.5YR6/4)	
414	井戸2		弥生土器	製塩土器		5.0			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
415	井戸2		弥生土器	製塩土器		4.6			灰黄 (2.5Y7/2)	
416	土器棺1		弥生土器	壺					浅黄 (2.5Y7/3)	
417	土器棺1		弥生土器	壺		8.2			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
418	土器棺1		弥生土器	壺	15.4	8.2	38.8		橙 (7.5YR7/6)	
419	土坑99		弥生土器	壺	13.2	6.8	22.7	ほぼ完形	橙 (7.5YR7/6)	
420	土坑99		弥生土器	壺		6.7			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
421	土坑99		弥生土器	壺	20.0	8.0	34.6	完形	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
422	土坑99		弥生土器	甕	14.6	4.8	18.5		にぶい橙 (7.5YR7/4)	
423	土坑99		弥生土器	鉢	19.1	7.0	16.0~16.6	ほぼ完形	赤褐 (10R5/4)	
424	土坑99		弥生土器	高杯	17.1	14.3	15.2	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
425	土坑99		弥生土器	高杯	30.7	15.4	18.5	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
426	土坑99		弥生土器	鉢	12.0	3.6	11.0		にぶい黄橙 (10YR7/3)	
427	土坑99		弥生土器	鉢	19.2	8.1	19.4	完形	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
428	土坑99		弥生土器	ミニチュア器台	3.7	4.3	3.4	完形	にぶい黄橙 (10YR6/3)	
429	土坑100		弥生土器	甕	(14.8)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
430	土坑100		弥生土器	高杯		8.0			浅黄橙 (10YR8/3)	
431	土坑100		弥生土器	高杯	(31.8)				浅黄橙 (7.5YR8/3)	
432	土坑100		弥生土器	高杯	24.2	11.7	13.7~14.7		橙 (5YR6/6)	
433	土坑100		弥生土器	鉢	15.8	8.5	11.1	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
434	土坑100		弥生土器	器台		31.0			浅黄橙 (10YR8/3)	
435	土坑101		弥生土器	壺	15.7				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
436	土坑101		弥生土器	高杯	(29.0)				にぶい黄橙 (10YR7/2)	
437	土坑101		弥生土器	高杯	32.0				橙 (7.5YR6/6)	
438	土坑101		弥生土器	鉢	13.8	5.8	13.9		にぶい黄橙 (10YR7/4)	
439	土坑101		弥生土器	鉢	17.3	4.9	10.4	ほぼ完形	にぶい橙 (7.5YR7/4)	
440	土坑101		弥生土器	鉢	12.2	4.5	9.4	ほぼ完形	灰白 (10YR8/2)	
441	土坑101		弥生土器	製塩土器		4.8			黄灰 (2.5Y4/1)	
442	土坑103		弥生土器	壺	7.35	4.1	9.6	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
443	土坑103		弥生土器	壺	19.8				灰白 (10YR8/2)	
444	土坑103		弥生土器	甕	14.6				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
445	土坑103	下層	弥生土器	甕	13.0	4.5	26.0		浅黄 (2.5Y7/3)	
446	土坑103	下層	弥生土器	高杯	27.8				橙 (5YR6/6)	
447	土坑103		弥生土器	高杯		20.6			橙 (7.5YR7/6)	
448	土坑103		弥生土器	高杯		14.7			にぶい黄橙 (10YR7/4)	
449	土坑103		弥生土器	鉢	10.5	4.7	9.4	ほぼ完形	灰黄 (2.5Y7/2)	
450	土坑103		弥生土器	鉢	17.3				灰黄 (2.5Y6/2)	
451	土坑103	下層	弥生土器	鉢	16.7	4.6	9.5		橙 (7.5YR7/6)	
452	土坑103		弥生土器	鉢	39.9				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
453	土坑103	下層	弥生土器	鉢	40.5	7.8	17.5		にぶい褐 (7.5YR5/4)	
454	土坑104		弥生土器	甕					にぶい黄褐 (10YR5/3)	
455	土坑104		弥生土器	甕	15.9				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
456	土坑104		弥生土器	高杯	31.6	19.2	(18.4)		灰黄 (2.5Y7/2)	
457	土坑105		弥生土器	壺	14.0				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
458	土坑105		弥生土器	高杯		16.4			にぶい黄橙 (10YR7/3)	

掲載番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
459	土坑105		弥生土器	鉢	11.4	3.8	5.5		にぶい黄橙 (10YR7/4)	
460	土坑108		弥生土器	高杯					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
461	土坑109		弥生土器	壺		5.6			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
462	土坑109		弥生土器	甕	15.0				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
463	土坑109		弥生土器	甕	15.4				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
464	土坑109		弥生土器	甕	15.3				灰黄 (2.5Y7/2)	
465	土坑109		弥生土器	甕	14.8				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
466	土坑109		弥生土器	高杯					にぶい褐 (7.5YR6/3)	
467	土坑109		弥生土器	鉢	10.6	3.2	10.7		灰黄 (2.5Y7/2)	
468	土坑109		弥生土器	鉢	(39.2)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
469	土坑110		弥生土器	甕					にぶい橙 (7.5YR7/4)	
470	土坑110		弥生土器	高杯					浅黄橙 (10YR8/3)	
471	土坑111		弥生土器	壺		4.0			にぶい黄橙 (10YR6/3)	
472	土坑111		弥生土器	壺	15.6				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
473	土坑111		弥生土器	甕	13.2	4.65	19.5		浅黄 (2.5Y7/2)	
474	土坑111		弥生土器	甕	14.0				橙 (7.5YR6/6)	
475	土坑111		弥生土器	甕	14.9				明黄褐 (10YR7/6)	
476	土坑111		弥生土器	高杯	13.6	16.4	10.8		浅黄橙 (10YR8/4)	
477	土坑111		弥生土器	鉢	17.2	9.0	17.1		にぶい黄橙 (10YR7/4)	
478	土坑113		弥生土器	壺	15.5				灰黄 (2.5Y7/2)	
479	土坑113		弥生土器	壺	11.6				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
480	土坑113		弥生土器	鉢		11.2			にぶい橙 (7.5YR7/4)	
481	土坑113		弥生土器	製塩土器	13.0				灰白 (10YR8/2)	
482	土坑113		弥生土器	製塩土器		4.4			浅黄橙 (10YR8/3)	
483	土坑113		弥生土器	製塩土器		4.2			灰白 (2.5Y8/2)	
484	土坑113		弥生土器	製塩土器		3.8			橙 (2.5YR7/6)	
485	土坑113		弥生土器	製塩土器		4.8			にぶい黄橙 (10YR7/2)	
486	土坑113		弥生土器	製塩土器		5.0			褐灰 (10YR4/1)	
487	土坑114		弥生土器	鉢	9.7	4.2	8.3	完形	浅黄橙 (10YR8/3)	
488	製塩炉1		弥生土器	製塩土器		4.8			にぶい橙 (5YR7/4)	
489	製塩炉1		弥生土器	製塩土器		4.5			明褐灰 (7.5YR7/2)	
490	製塩炉1		弥生土器	製塩土器		4.5			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
491	製塩炉1		弥生土器	製塩土器		4.8			にぶい赤褐 (2.5YR5/4)	
492	製塩炉1		弥生土器	製塩土器		4.0			浅黄橙 (10YR8/3)	
493	製塩炉1		弥生土器	製塩土器		4.3			黒褐 (10YR3/1)	
494	製塩炉2		弥生土器	製塩土器		4.8			浅黄橙 (7.5YR8/4)	
495	製塩炉2		弥生土器	製塩土器		4.4			橙 (5YR7/6)	
496	溝21		弥生土器	甕	(16.0)				にぶい褐 (7.5YR5/3)	
497	溝21		弥生土器	甕	14.1	6.1	28.3		橙 (7.5YR7/6)	底部穿孔
498	溝21		弥生土器	高杯	(19.6)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
499	溝24		弥生土器	高杯	(19.6)				橙 (5YR6/6)	
500	溝25		弥生土器	壺	26.4				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
501	溝25		弥生土器	高杯		(13.2)			橙 (7.5YR6/6)	
502	溝33		弥生土器	甕	16.1				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
503	溝33		弥生土器	高杯	33.6				明赤褐 (2.5YR5/6)	
504	溝33		弥生土器	高杯		12.3			灰黄 (2.5Y7/2)	
505	溝33		弥生土器	鉢		11.6			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
506	溝33		弥生土器	器台		13.2			灰黄 (2.5Y7/2)	
507	溝34~38		弥生土器	甕					灰黄褐 (10YR5/2)	
508	溝34~38		弥生土器	ミニチュア壺	1.1	0.7	3.3		灰黄 (2.5Y7/2)	
509	溝43		弥生土器	壺	14.6				橙 (7.5YR7/6)	
510	溝43	下層	弥生土器	高杯	14.7				灰白 (10YR8/2)	
511	溝43		弥生土器	高杯	(31.6)				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
512	溝43		弥生土器	製塩土器		4.8			灰白 (10YR8/2)	
513	溝43	下層	弥生土器	製塩土器		5.1			浅黄橙 (10YR8/3)	
514	土器溜まり2		弥生土器	壺		10.0			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
515	土器溜まり2		弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
516	土器溜まり2		弥生土器	甕	(15.6)				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
517	土器溜まり2		弥生土器	甕	14.2				灰黄 (2.5Y6/2)	
518	土器溜まり2		弥生土器	高杯					灰白 (2.5Y8/2)	
519	土器溜まり2		弥生土器	高杯		21.0			にぶい橙 (7.5YR7/4)	
520	土器溜まり2		弥生土器	高杯	(32.8)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
521	土器溜まり2		弥生土器	鉢	15.6				橙 (2.5YR6/6)	
522	土器溜まり2		弥生土器	鉢	16.0	5.8	13.6		浅黄橙 (10YR8/3)	
523	土器溜まり2		弥生土器	鉢	20.9				灰黄 (2.5Y7/2)	
524	土器溜まり2		弥生土器	鉢	7.6	(3.8)	(5.9)		にぶい橙 (7.5YR7/4)	
525	土器溜まり2		弥生土器	ミニチュア甕	5.9				黄灰 (2.5Y4/1)	
526	土器溜まり3		弥生土器	壺	12.9				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
527	土器溜まり3		弥生土器	甕		5.0			にぶい黄橙 (10YR6/3)	底部穿孔
528	土器溜まり3		弥生土器	甕	14.7				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
529	土器溜まり3		弥生土器	高杯					灰黄 (2.5Y7/2)	
530	土器溜まり3		弥生土器	高杯					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
531	土器溜まり3		弥生土器	高杯		(16.9)			橙 (2.5YR6/6)	
532	土器溜まり3		弥生土器	製塩土器		5.6			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
533	土器溜まり3		弥生土器	製塩土器		5.6			灰白 (10YR8/2)	
534	土器溜まり3		弥生土器	製塩土器		4.0			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
535	土器溜まり3		弥生土器	製塩土器		4.2			褐灰 (10YR4/1)	
536	柱穴25		弥生土器	鉢	16.8	6.25	11.7		橙 (5YR6/6)	
537	柱穴26		弥生土器	甕	(14.0)				にぶい黄橙 (10YR6/3)	
538	水田6		弥生土器	甕	12.2				浅黄橙 (10YR8/3)	

掲載番号	遺構名・層位	種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
				口径	底径	器高			
539	水田6		弥生土器 高杯					灰黄 (2.5Y7/2)	
540	水田6・7	小畦盛土内	弥生土器 高杯	(17.0)				橙 (5YR6/6)	
541	水田6・7		弥生土器 高杯					橙 (5YR6/6)	
542	水田7	後期水田層中	弥生土器 高杯					橙 (5YR7/6)	
543	水路1		弥生土器 甕					にぶい褐 (7.5YR5/4)	
544	水路1		弥生土器 鉢		5.2			浅黄橙 (10YR8/4)	
545	鳥状高まり2	L=3.1~3.0m	弥生土器 壺	(8.6)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
546	鳥状高まり2	L=3.1mまで	弥生土器 高杯					にぶい黄橙 (10YR7/3)	
547	鳥状高まり3	L=3.1mまで	弥生土器 壺		5.4			灰黄 (2.5Y7/2)	
548	鳥状高まり3		弥生土器 壺	15.2				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
549	鳥状高まり3	L=3.10mまで	弥生土器 甕	9.1				灰白 (10YR8/2)	
550	鳥状高まり3	L=3.1~2.9m	弥生土器 高杯					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
551	鳥状高まり3		弥生土器 高杯	33.8				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
552	鳥状高まり3	L=3.1~2.9m	弥生土器 高杯	(22.6)				にぶい橙 (7.5YR7/6)	
553	鳥状高まり3	L=3.10mまで	弥生土器 鉢	15.3	5.8	16.3	ほぼ完形	にぶい橙 (7.5YR7/4)	
554	鳥状高まり3		弥生土器 鉢	16.5	7.0	16.7		にぶい黄橙 (10YR7/2)	
555	竪穴住居5	下層	土師器 鉢	14.6				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
556	竪穴住居5		土師器 甕	12.8				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
557	竪穴住居5		土師器 甕	(15.0)				灰黄褐 (10YR4/2)	
558	竪穴住居5		土師器 甕	(15.0)				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
559	竪穴住居5		土師器 高杯					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
560	竪穴住居6		土師器 小形丸底壺	14.2				橙 (5YR6/6)	
561	竪穴住居6		土師器 小形丸底壺	13.3				橙 (5YR6/6)	入り口縁敷上面検出
562	竪穴住居6		土師器 小形丸底壺	13.0				橙 (5YR6/6)	
563	竪穴住居6		土師器 小形丸底壺	(11.8)				橙 (5YR6/6)	
564	竪穴住居6	上層	土師器 甕					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
565	竪穴住居6		土師器 高杯	12.1	(17.4)	10.4	ほぼ完形	橙 (5YR6/6)	
566	竪穴住居6	上層	土師器 鉢	17.7				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
567	竪穴住居7		土師器 壺	19.0				にぶい黄橙 (10YR6/4)	
568	竪穴住居7		土師器 甕					灰黄褐 (10YR5/2)	
569	竪穴住居9	P 3	土師器 甕	15.7				にぶい黄褐 (10YR5/3)	
570	竪穴住居9		土師器 高杯	13.2				橙 (7.5YR7/6)	
571	竪穴住居9	P 3	土師器 鉢	14.8		7.2	ほぼ完形	にぶい橙 (7.5YR6/4)	
572	竪穴住居10		土師器 壺	15.7				にぶい褐 (7.5Y6/3)	
573	竪穴住居10		土師器 甕	12.4				にぶい黄橙 (10YR6/3)	
574	竪穴住居10		土師器 甕	14.0	3.0	(23.5)		灰黄褐 (10YR6/2)	
575	竪穴住居10		土師器 高杯	20.7	15.5	14.9	ほぼ完形	橙 (5Y R6/6)	
576	竪穴住居10		土師器 鉢	12.9	2.3	4.8		にぶい黄橙 (10YR7/2)	
577	竪穴住居10		土師器 鉢	13.8	4.8	7.6		にぶい橙 (7.5YR7/4)	
578	井戸3	上層	土師器 壺	7.1	2.0	14.4	完形	にぶい黄橙 (10YR6/3)	
579	井戸3	上層	土師器 壺	14.5				橙 (5YR6/6)	
580	井戸3	上層	土師器 壺	16.8	27.1			にぶい橙 (5YR6/4)	
581	井戸3		土師器 甕					にぶい黄橙 (10YR6/3)	
582	井戸3	上層	土師器 甕	13.6				橙 (7.5YR7/6)	
583	井戸3	上層	土師器 甕	14.8	4.2	21.9	完形	橙 (5YR7/6)	
584	井戸3	下層	土師器 甕	15.3			ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/4)	
585	井戸3	上層	土師器 鉢	7.6	1.9	6.6		にぶい黄橙 (10YR7/4)	
586	井戸3	上層	土師器 鉢	10.8	4.4	5.6		にぶい褐 (7.5YR6/3)	
587	井戸3	上層	土師器 鉢	27.8	(4.0)	(16.4)		にぶい橙 (7.5YR7/6)	
588	井戸4		土師器 鉢	(9.9)				橙 (2.5YR6/6)	
589	井戸4		土師器 甕	15.0		25.3	完形	にぶい橙 (7.5YR6/4)	
590	井戸4		土師器 甕	14.0				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
591	井戸4		土師器 甕	20.0	5.2		完形	にぶい黄 (2.5Y6/3)	
592	井戸4		土師器 高杯		(15.0)			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
593	井戸5		土師器 壺					にぶい黄橙 (10YR6/3)	外面に波状文
594	井戸5		土師器 壺	18.7				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
595	井戸5		土師器 甕	18.7				灰白 (5Y8/1)	
596	井戸5		土師器 甕	15.0				にぶい黄 (2.5Y6/3)	
597	井戸5		土師器 甕	(16.0)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
598	井戸5		土師器 高杯	17.8				橙 (5YR7/6)	
599	井戸5		土師器 高杯					橙 (5YR6/6)	
600	井戸5		土師器 高杯					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
601	井戸5		土師器 鉢		4.3			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
602	井戸5	中央穴 下層	土師器 鉢	(12.4)	(4.4)	6.0		にぶい黄橙 (10YR7/3)	
603	井戸5		土師器 鉢	15.6				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
604	井戸6		土師器 甕	9.4		13.2	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR3/7)	
605	井戸6	下層	土師器 壺	9.9	3.1	11.7		にぶい黄橙 (10YR7/2)	
606	井戸6		土師器 甕	16.4	5.0	23.2~25.5	ほぼ完形	灰黄 (2.5Y7/2)	
607	井戸6	下層	土師器 甕	(15.6)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
608	井戸6	下層	土師器 甕	16.8	5.2	25.6	完形	灰黄 (2.5Y6/2)	
609	井戸6	下層	土師器 甕	15.2	(4.8)	23.5		にぶい黄橙 (10YR7/4)	
610	井戸6		土師器 甕	13.8	4.0	20.8		灰黄褐 (10YR6/2)	
611	井戸6	下層	土師器 高杯	21.0				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
612	井戸6		土師器 高杯		15.1			にぶい黄橙 (10YR6/3)	
613	井戸6		土師器 高杯		15.4			にぶい橙 (7.5YR7/4)	
614	井戸7		土師器 壺	15.2				浅黄2.5Y7/3)	
615	井戸7		土師器 甕	13.3				にぶい黄橙 (10YR7/4)	
616	井戸7		土師器 高杯	14.0				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
617	井戸7		土師器 鉢	10.3	4.0	5.6		にぶい黄橙 (10YR7/3)	
618	井戸8	上層	土師器 壺		10.2			浅黄橙 (7.5YR8/4)	
619	井戸8	4層	土師器 甕	(17.2)				にぶい黄橙 (10YR7/3)	

掲載番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
620	井戸8	4層	土師器	甕		4.0			にぶい黄橙 (10YR7/3)	釣瓶として利用か
621	井戸8	上層	土師器	鉢	17.1	2.8	10.1	ほぼ完形	橙 (5YR6/6)	
622	井戸9		土師器	壺	15.0				淡黄 (2.5Y8/3)	
623	井戸9		土師器	甕	15.0	6.7	24.9		にぶい黄橙 (10YR7/2)	
624	井戸9		土師器	甕	15.0				にぶい黄橙 (10YR6/3)	
625	井戸9		土師器	高杯		14.8			にぶい橙 (7.5YR7/3)	
626	土坑121		土師器	壺	19.5				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
627	土坑121		土師器	壺	11.2				灰黄 (2.5Y7/2)	口縁部外面に線刻
628	土坑121		土師器	高杯		9.6			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
629	土坑122		土師器	鉢	8.7		6.0	完形	灰白 (2.5Y8/2)	
630	溝45		土師器	杯身	(10.1)				灰白 (2.5Y7/1)	
631	溝49		土師器	杯身					灰 (N6/)	
632	溝51		土師器	杯身					灰 (N6/)	
633	溝54		土師器	杯蓋					灰 (N6/)	
634	溝54		土師器	杯身					灰 (N6/)	
635	溝55	上層	土師器	杯蓋	(14.8)				灰白 (N7/)	
636	溝55	上層	土師器	甕					にぶい黄橙 (10YR7/3)	
637	溝58~60		土師器	鉢					浅黄橙 (10YR8/3)	
638	溝58~60		土師器	壺	(19.7)				灰黄 (2.5Y7/2)	
639	溝61	北半	土師器	甕					浅黄橙 (7.5YR8/4)	
640	溝65		土師器	甕	(13.0)				にぶい橙 (7.5YR6/4)	
641	溝66		土師器	壺	17.8				にぶい黄橙 (10YR7/4)	頸部外面に線刻
642	溝66		土師器	甕	14.8				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
643	溝66		土師器	高杯	20.0				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
644	下がり2		須恵器	杯蓋	13.8				灰白 (N7/)	
645	下がり2		須恵器	杯蓋	13.0		4.5		黄灰 (10YR6/1)	
646	下がり2		須恵器	杯蓋	13.6				灰 (N6/)	
647	下がり2		須恵器	杯蓋	11.8				灰 (5Y6/1)	
648	下がり2		須恵器	杯身	10.6				灰白 (2.5Y7/1)	
649	下がり2		須恵器	杯身	(9.2)		3.3		灰白 (2.5Y7/1)	
650	下がり2		須恵器	高杯		7.6			灰 (N6/)	
651	下がり2		須恵器	甕					灰白 (5Y7/1)	
652	下がり2		須恵器	甕	(53.4)				灰 (N5/)	
653	下がり3		土師器	壺	19.2				浅黄橙 (10YR8/3)	
654	下がり3		土師器	壺					灰黄褐 (10YR6/2)	頸部外面に線刻
655	下がり3		土師器	甕	11.8	3.7	13.6	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/4)	
656	下がり3		土師器	甕	11.2	5.6	15.1		灰黄 (2.5Y7/2)	
657	下がり3		土師器	甕	16.65	5.25			にぶい黄橙 (10YR7/3)	
658	下がり3		土師器	甕	15.65				にぶい黄橙 (10YR7/3)	
659	下がり3		土師器	高杯	12.1	(11.6)	(9.7)		にぶい黄橙 (10YR7/3)	
660	下がり3		土師器	高杯	19.1	14.7	14.0		橙 (5YR6/6)	
661	下がり3		土師器	高杯	20.4	16.8	14.8		にぶい橙 (7.5YR7/4)	
662	下がり3		土師器	鉢	11.8	5.6	6.5		にぶい黄橙 (10YR7/3)	
663	下がり3		土師器	鉢	10.8	3.3	6.5	ほぼ完形	にぶい黄橙 (10YR7/3)	
664	下がり3		土師器	鉢	19.1	7.5	7.3		浅黄 (2.5Y7/3)	
665	下がり3		土師器	鉢	24.6	6.9	14.5	ほぼ完形	橙 (5YR7/6)	
666	溝67		土師器	椀		(7.0)			浅黄橙 (10YR8/3)	
667	溝67		土師器	皿	(8.8)	(7.0)	1.25		にぶい橙 (5YR6/4)	
668	溝67		備前焼	播鉢					灰 (N5/)	
669	溝67		備前焼	播鉢					灰褐 (7.5YR5/2)	
670	溝67		土師器	鍋					黄灰 (2.5Y6/1)	
671	包含層		縄文土器	深鉢	(15.8)				黒 (2.5Y2/1)	
672	包含層	西包含層	弥生土器	壺	(26.8)				にぶい赤褐 (5YR4/3)	
673	包含層	弥生包含層 (南西端)	弥生土器	壺	13.6				にぶい褐 (7.5YR5/4)	
674	包含層		弥生土器	甕					にぶい橙 (7.5YR6/4)	2条のヘラ描沈線
675	包含層	弥生包含層 (南西端)	弥生土器	甕					にぶい橙 (7.5YR6/4)	2条のヘラ描沈線
676	包含層	弥生包含層	弥生土器	壺					明褐 (7.5YR5/6)	櫛描沈線
677	包含層		弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
678	包含層	微高地斜面 (包含層)	弥生土器	壺					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
679	包含層	東包含層 L=1.47m	弥生土器	壺					灰黄褐 (10YR4/2)	
680	包含層		弥生土器	蓋	8.3			完形	にぶい黄橙 (10YR6/3)	雷文帯状の線刻
681	包含層		弥生土器	甕	(9.8)				にぶい橙 (7.5YR7/4)	
682	包含層		弥生土器	甕		5.4			褐灰 (10YR4/1)	底面に葉脈痕跡
683	包含層		弥生土器	蓋	つまみ径6.45				にぶい橙 (5YR6/4)	上面・側面に穿孔
684	包含層		弥生土器	高杯					にぶい橙 (7.5YR7/3)	杯部中央に穿孔
685	包含層		弥生土器	高杯	16.4	10.0	13.1		橙 (7.5YR7/6)	
686	包含層		須恵器	蓋	(9.2)		4.95		灰白 (N7/)	
687	包含層	古墳包含層	須恵器	杯蓋	12.5		4.0		灰白 (N7/) 灰色をしている	
688	包含層	微高地斜面	須恵器	杯身	12.0				灰 (N6/) 少し青色がかかる	
689	包含層	古墳包含層	須恵器	杯身	12.8		5.0		灰 (N7/) 少し青色がかかる	
690	包含層		須恵器	高杯	(8.6)				灰 (5Y5/1)	
691	包含層	古墳包含層	須恵器	ハソウ					灰白 (7.5Y7/1)	
692	包含層	近世包含層	土師器	椀		(6.0)			にぶい黄橙 (10YR7/2)	

石器・石製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	土坑7	石錐	37.0	23.0	6.8	4.25	サヌカイト	欠損	
S2	土坑10	磨製石包丁	111.0	52.0	6.5	69.20	粘板岩	欠損	
S3	土坑12・13	石鎌	26.5	16.0	4.5	1.64	サヌカイト	完形	
S4	土坑12・13	磨製石包丁	33.0	49.5	6.0	18.06	粘板岩	欠損	泥岩の割合多い
S5	土坑16	磨製石包丁	(48.0)	(46.0)	(5.7)	(18.09)	緑色片岩	欠損	旭川中流域
S6	土坑17	石鎌	24.0	12.0	28.0	0.81	サヌカイト	一部欠損	
S7	土坑18	扁平片刃石斧	79.0	43.0	11.0	69.49	粘板岩のホルンフェルス	完形	
S8	土坑18	石錐	(27.0)	22.0	7.5	(3.49)	サヌカイト	欠損	
S9	土坑18	石鎌	(21.0)	20.5	2.8	(0.98)	サヌカイト	一部欠損	
S10	土坑18	石錐	(32.0)	24.0	5.0	(3.44)	サヌカイト	欠損	
S11	土坑19	石鎌	(126.0)	66.0	16.0	(128.48)	サヌカイト	欠損	
S12	土坑21	磨製石包丁	(92.0)	(44.0)	(10.0)	(46.28)	粘板岩	欠損	
S13	土坑21	石鎌	15.5	12.5	1.8	0.34	サヌカイト	完形	
S14	土坑21	石鎌	22.0	21.0	2.5	0.94	サヌカイト	完形	
S15	土坑22	打製石包丁	154.0	6.0	13.5	142.83	珪化木	完形	刃部は磨いている
S16	土坑23	石鎌	(13.0)	19.0	3.0	(0.71)	サヌカイト	欠損	
S17	土坑24	扁平片刃石斧	(38.0)	(47.0)	(11.0)	(26.85)	粘板岩	欠損	江尻層
S18	土坑27	石錐	35.0	13.5	7.3	3.35	サヌカイト	欠損	
S19	土坑35	石鎌	29.0	12.5	2.5	0.51	サヌカイト	欠損	
S20	土坑36	石鎌	22.0	16.5	4.0	1.09	サヌカイト	完形	
S21	土坑39	石鎌	34.0	25.5	5.0	4.20	サヌカイト	完形	
S22	土坑41	石鎌	31.0	4.0	4.5	2.51	サヌカイト	完形	
S23	土坑41	石鎌	18.3	16.0	3.3	0.68	サヌカイト	完形	
S24	土坑51	砥石	78.0	47.0	31.0	118.61	砂岩(金川層)	欠損	被熱
S25	土坑51	石鎌	21.0	15.0	5.0	1.05	サヌカイト	一部欠損	
S26	土坑51	石錐	16.0	22.5	3.0	0.72	サヌカイト	欠損	
S27	土坑52	石鎌	18.2	16.0	3.3	0.82	サヌカイト	完形	
S28	土坑53	石鎌	17.0	14.0	2.5	0.51	サヌカイト	欠損	
S29	土坑64	大型蛤刃石斧	(71.0)	(58.5)	(38.0)	(120.64)	安山岩	欠損	
S30	土坑65	打製石包丁	108.0	(43.0)	11.0	(56.10)	サヌカイト	一部欠損	
S31	土坑65	打製石包丁	128.0	48.0	10.0	61.92	サヌカイト	一部欠損	
S32	土坑65	打製石包丁	108.0	42.0	11.0	58.38	サヌカイト	完形	
S33	土坑65	打製石包丁	171.0	52.0	13.0	134.89	サヌカイト	完形	
S34	土坑65	打製石包丁	126.0	46.0	8.0	53.79	サヌカイト	一部欠損	
S35	土坑65	砥石	65.0	52.0	55.0	226.15	砂岩	欠損	金川層
S36	土坑65	砥石	148.0	(70.0)	60.0	(822.93)	砂岩	欠損	金川層
S37	土坑66	石鎌	(19.0)	15.0	3.0	(0.87)	サヌカイト	完形	
S38	土坑66	石鎌	21.0	14.5	3.8	0.71	サヌカイト	完形	
S39	溝2	石鎌	18.0	13.0	4.0	0.72	サヌカイト	一部欠損	
S40	溝12	石鎌	(22.5)	22.5	3.5	(1.35)	サヌカイト	一部欠損	
S41	溝12	石鎌	(20.0)	16.0	3.0	(0.86)	サヌカイト	一部欠損	
S42	溝12	石鎌	22.0	18.5	3.5	0.93	サヌカイト	完形	
S43	溝12	石鎌	20.5	12.5	4.0	0.70	サヌカイト	完形	
S44	溝12	石鎌	19.0	17.5	2.0	0.59	サヌカイト	完形	
S45	溝12	石錐	30.0	15.0	4.5	1.48	サヌカイト	一部欠損	
S46	溝12	削器	(58.5)	56.5	6.0	(19.61)	サヌカイト	欠損	
S47	溝12	磨製石包丁	(80.5)	(38.0)	(10.5)	(34.78)	砂質粘板岩	欠損	
S48	溝12	石錐	86.0	73.0	40.5	393.84	安山岩	完形	
S49	水田1	砥石	44.5	19.0	17.0	23.88	粘板岩	欠損	弱く成層
S50	水田1	投弾	43.4	40.4	28.3	65.04		一部欠損	
S51	水田1	投弾	39.8	28.2	19.3	29.46		完形	
S52	水田1	投弾	49.0	34.2	21.4	55.58		完形	
S53	土器溜まり1	石鎌	24.5	17.0	4.0	1.20	サヌカイト	完形	
S54	柱穴5	砥石	(120.0)	97.0	85.0	1035.00	花崗岩	欠損	細粒
S55	柱穴2	石鎌	23.0	17.0	4.0	0.92	サヌカイト	一部欠損	
S56	柱穴3	石鎌	21.0	13.5	2.8	0.71	サヌカイト	完形	
S57	柱穴7	石鎌	18.0	18.0	4.0	0.91	サヌカイト	一部欠損	
S58	柱穴10	石鎌	20.0	15.5	3.5	0.83	サヌカイト	完形	
S59	柱穴13	石鎌	(19.0)	13.0	3.3	(0.73)	サヌカイト	完形	
S60	柱穴6	小型方柱状片刃石斧	65.0	15.5	12.0	23.75	粘板岩	一部欠損	江尻層
S61	柱穴16	砥石	91.0	65.0	40.0	405.52	安山岩	欠損	蛤刃石斧の転用
S62	柱穴19	砥石	64.5	49.0	42.0	172.26	花崗岩	完形	
S63	旧河道1	石鎌	24.0	20.5	4.0	1.68	サヌカイト	完形	
S64	土坑69	石鎌	26.5	17.0	3.0	0.92	サヌカイト	完形	
S65	土坑70	台石	281.0	228.0	75.0	6300.00	細粒花崗岩	欠損	
S66	土坑71	石錐	42.0	12.5	4.8	2.15	サヌカイト	欠損	
S67	土坑72	石鎌	18.3	18.5	4.0	1.08	サヌカイト	完形	
S68	土坑72	石鎌	21.0	18.5	3.0	0.90	サヌカイト	完形	
S69	土坑75	石鎌	25.0	19.0	4.0	1.17	サヌカイト	完形	
S70	土坑77	大型蛤刃石斧	157.5	80.0	57.5	1231.00	安山岩	欠損	
S71	土坑79	石錐	19.0	12.5	3.0	0.59	サヌカイト	欠損	
S72	土坑81	砥石	141.0	65.0	55.0	869.17	安山岩	完形	蛤刃石斧の転用
S73	土坑84	石鎌	17.0	12.0	3.0	0.40	サヌカイト	完形	
S74	溝14	石鎌	21.0	11.0	2.2	0.94	サヌカイト	欠損	
S75	溝14	石鎌	19.0	17.0	4.0	0.98	サヌカイト	一部欠損	
S76	水田2	スクレイパー	59.0	38.5	11.0	27.32	サヌカイト	欠損	

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S77	水田2	投弾	39.1	43.8	28.0	64.43		完形	
S78	水田2	投弾	44.1	30.3	21.8	45.62		完形	
S79	水田2	投弾	40.0	31.0	22.2	38.33		完形	
S80	水田2	投弾	46.0	36.2	21.5	42.42		完形	
S81	水田2	投弾	49.6	42.8	33.2	92.97		完形	
S82	水田3	スクレイパー	52.0	(41.0)	8.0	(20.94)	サヌカイト	欠損	
S83	柱穴23	砥石	186.0	183.0	138.0	4700.00	砂岩	完形	金川層
S84	柱穴21	石鏃	16.5	15.0	3.5	0.73	サヌカイト	一部欠損	
S85	柱穴22	石鏃	17.5	15.0	3.5	0.58	サヌカイト	完形	
S86	柱穴22	石鏃	28.0	20.5	4.5	2.08	サヌカイト	欠損	
S87	柱穴24	砥石	119.0	98.0	49.5	900.50	花崗岩	完形	細粒
S88	竪穴住居2	石鏃	17.0	14.0	3.0	0.54	サヌカイト	完形	
S89	竪穴住居2	石鏃	22.0	18.0	3.5	0.90	サヌカイト	完形	
S90	竪穴住居2	砥石	65.5	77.0	29.0	159.85	流紋岩	欠損	
S91	竪穴住居2	砥石	66.5	24.0	25.5	61.08	流紋岩	欠損	
S92	竪穴住居3	石鏃	18.0	13.5	3.5	0.78	サヌカイト	一部欠損	
S93	土坑98	石鏃	19.0	15.0	3.3	0.79	サヌカイト	完形	
S94	土坑99	石鏃	18.0	15.0	4.3	0.85	サヌカイト	完形	
S95	土坑104	砥石	85.0	65.0	50.0	390.00	流紋岩	完形	
S96	溝33	石鏃	22.0	16.5	4.0	1.37	サヌカイト	完形	
S97	溝33	石鏃	(35.5)	12.0	5.0	(1.70)	サヌカイト	一部欠損	
S98	溝33	凹石	117.0	85.0	57.0	1066.03	砂岩	完形	金川層
S99	水田4	石鏃	23.5	10.0	2.5	0.62	サヌカイト	完形	
S100	水田4	投弾	31.5	25.5	19.0	22.01		完形	
S101	水田4	投弾	36.0	30.0	25.0	35.29		完形	
S102	水田4	投弾	40.0	36.0	29.0	53.95		完形	
S103	水田4	投弾	43.5	28.5	24.0	44.66		完形	
S104	水田4	投弾	44.0	23.0	22.0	29.60		完形	
S105	水田5	石鏃	16.0	17.0	3.5	0.83	サヌカイト	欠損	
S106	水田5	投弾	47.0	35.6	26.3	62.85		完形	
S107	水田5	投弾	52.3	49.2	37.8	125.68		完形	
S108	水田7	石鏃	20.5	12.0	2.5	0.66	サヌカイト	一部欠損	
S109	水田7	石鏃	20.0	18.0	3.5	0.89	サヌカイト	完形	
S110	水田7	石鏃	22.0	20.5	4.0	1.20	サヌカイト	一部欠損	
S111	水田7	石鏃	22.3	14.5	3.0	0.94	サヌカイト	完形	
S112	水田7	石鏃	23.0	18.5	3.5	1.21	サヌカイト	完形	
S113	水田7	石鏃	24.5	10.0	3.5	0.83	サヌカイト	完形	
S114	水田7	投弾	55.4	30.0	22.8	50.06		完形	
S115	水田7	投弾	33.1	28.2	19.9	27.20		完形	
S116	水田7	投弾	32.6	31.0	19.1	27.10		完形	
S117	水田7	投弾	44.9	33.0	30.2	51.65		一部欠損	
S118	水田7	投弾	42.6	34.0	28.0	49.40		完形	
S119	水路1	石鏃	22.0	15.5	4.0	1.19	サヌカイト	一部欠損	
S120	水田8	石鏃	18.0	14.0	2.0	0.45	サヌカイト	完形	
S121	竪穴住居6	砥石	75.0	44.0	31.0	96.99	流紋岩	欠損	
S122	竪穴住居9	砥石	122.0	49.0	29.0	210.85	流紋岩	完形	
S123	包含層	石鏃	23.5	17.5	3.0	0.69	サヌカイト	完形	
S124	包含層	石鏃	27.5	19.0	3.0	1.21	サヌカイト	完形	
S125	包含層	石鏃	23.0	15.0	3.0	1.00	サヌカイト	完形	
S126	包含層	石鏃	23.0	16.0	3.3	0.87	サヌカイト	完形	
S127	包含層	石鏃	23.0	16.5	4.5	1.10	サヌカイト	完形	
S128	包含層	石鏃	18.0	12.0	2.8	0.54	サヌカイト	完形	
S129	包含層	石鏃	21.5	13.0	3.0	0.85	サヌカイト	完形	
S130	包含層	石鏃	21.5	14.0	3.5	0.61	サヌカイト	完形	
S131	包含層	石鏃	22.0	20.0	5.0	1.49	サヌカイト	完形	
S132	包含層	石鏃	26.0	17.5	4.0	1.68	サヌカイト	完形	
S133	包含層	石鏃	22.5	16.0	2.5	0.40	サヌカイト	完形	
S134	包含層	石鏃	20.0	15.0	2.8	0.70	サヌカイト	完形	
S135	包含層	石鏃	22.5	16.0	3.0	0.82	サヌカイト	完形	
S136	包含層	石鏃	23.0	12.5	3.5	0.74	サヌカイト	完形	
S137	包含層	石鏃	21.5	(13.0)	3.0	(0.94)	サヌカイト	完形	
S138	包含層	石鏃	16.5	13.0	3.5	0.65	サヌカイト	完形	
S139	包含層	石鏃	15.0	11.0	3.0	0.45	サヌカイト	完形	
S140	包含層	石鏃	17.0	14.5	3.5	0.65	サヌカイト	完形	
S141	包含層	石鏃	18.5	13.0	3.0	0.69	サヌカイト	完形	
S142	包含層	石鏃	25.5	13.5	3.0	0.96	サヌカイト	完形	
S143	包含層	石鏃	19.5	14.5	3.3	0.66	サヌカイト	完形	
S144	包含層	石鏃	16.0	12.0	3.0	0.63	サヌカイト	完形	
S145	包含層	石鏃	29.0	13.0	4.0	1.45	サヌカイト	欠損	
S146	包含層	石鏃	37.0	21.0	9.5	5.47	サヌカイト	欠損	
S147	包含層	石鏃	26.0	15.0	3.5	1.38	サヌカイト	欠損	
S148	包含層	石鏃	22.0	7.0	4.5	0.72	サヌカイト	欠損	
S149	包含層	磨製石包丁	50.0	36.0	40.0	11.96	粘板岩	欠損	
S150	包含層	打製石包丁	42.5	(35.0)	14.0	(27.70)	サヌカイト	欠損	
S151	包含層	打製石包丁	87.5	44.0	13.5	66.07	砂質な粘板岩	完形	砂質
S152	包含層	砥石	80.0	33.0	17.0	52.93	粗いサヌカイト(火成岩)	完形	打製石包丁の転用
S153	包含層	砥石	99.0	36.5	12.0	64.66	粘板岩	完形	
S154	包含層	石鏃	77.0	58.0	33.0	215.65	花崗岩	完形	万成石
S155	包含層	大型蛤刃石斧	(36.5)	(65.0)	(45.0)	(176.64)	安山岩	欠損	
S156	包含層	大型蛤刃石斧	56.0	57.0	40.0	128.50	安山岩	欠損	
S157	包含層	小型方柱状片刃石斧	66.0	14.0	12.0	21.49	粘板岩	完形	

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S158	包含層	扁平片刃石斧	59.5	31.5	8.5	34.37	粘板岩	完形	
S159	包含層	砥石	(190.0)	133.0	121.0	4900.00	花崗岩	完形	細粒
S160	包含層	勾玉	11.5	8.0	4.0	0.60	翡翠	完形	若緑 (10GY8/7)
S161	包含層	管玉	5.0		10.0	0.25	緑色凝灰岩	完形	薄緑色 (1.5G8.5/4)

土製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	残存状況	備考
			最大幅	最大厚	孔径				
C1	土坑19	円盤形土製品	43.0	8.0	—	17.14	にぶい赤褐 (5YR5/4)	完形	
C2	土坑21	円盤形土製品	58.0	10.5	—	40.47	灰黄褐 (10YR6/2)	完形	
C3	土坑21	円盤形土製品	61.5	8.5	—	38.60	灰黄褐 (10YR5/2)	完形	
C4	土坑43	紡錘車	56.0	13.0	9.0	48.55	灰黄 (2.5Y6/2)	完形	
C5	溝12	紡錘車	43.0	12.0	8.5	26.79	灰褐 (7.5YR6/2)	完形	
C6	溝12	円盤形土製品	45.0	8.5	—	18.46	灰黄褐 (10YR6/2)	完形	
C7	柱穴9	紡錘車	52.0	10.0	—	9.34	橙 (7.5YR7/6)	欠損	
C8	土坑70	円盤形土製品	41.0	5.5	—	11.45	にぶい黄橙 (10YR7/3)	完形	
C9	柱穴20	紡錘車	(43.0)	(6.5)	9.5	14.98	灰黄褐 (10YR6/2)	完形	
C10	井戸5	紡錘車	48.0	3.5	4.0	7.42	にぶい橙 (7.5YR6/4)	欠損	
C11	井戸5	紡錘車	(38.0)	(6.0)	9.0	9.45	にぶい黄橙 (10YR7/3)	完形	
C12	井戸5	紡錘車	(43.0)	(5.0)	8.0	7.45	にぶい黄橙 (10YR7/4)	欠損	未製品
C13	包含層	紡錘車	(46.0)	16.0	6.0	17.66	にぶい黄橙 (10YR7/4)	欠損	
C14	包含層	紡錘車	47.0	7.5	9.0	15.30	にぶい橙 (5YR6/4)	完形	
C15	包含層	紡錘車	56.0	16.0	9.0	43.20	にぶい黄橙 (10YR7/2)	欠損	
C16	包含層	円盤形土製品	46.0	7.5	—	19.97	にぶい橙 (7.5YR6/4)	完形	
C17	包含層	円盤形土製品	94.0	19.0	—	240.33	にぶい黄橙 (10YR7/2)	欠損	

金属器・金属製品

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M1	竪穴住居3	鉄鏃	鉄	43.0	21.0	1.0	5.05		
M2	竪穴住居9	鉄鏃	鉄	43.0	20.0	12.0	11.81		
M3	竪穴住居9	鉄鏃	鉄	31.0	5.0	4.0	1.15		
M4	井戸7	鉄鏃	鉄	55.5	18.0	3.0	7.34		
M5	下がり2	耳環	鉄	26.0	8.0	6.0	15.79	完形	鍍金
M6	包含層	鉄鏃	鉄	46.0	20.0	3.0	4.97		

木器・木製品

掲載番号	遺構名・層位		器種	計測値 (mm)			樹種	木取り	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
W1	溝11		容器	133	116	15		板目	欠損	底部のみ残存
W2	溝11		部材	707	34			芯持丸木	欠損	
W3	溝11		部材	411	59	10	スギ	板目	欠損	
W4	溝11		部材	435	219	36	コウヤママキ	柃目	欠損	
W5	旧河道		広楸	354	120	18		柃目	欠損	
W6	旧河道		部材	145	50	50	コナラ属アカガシ亜属	板目	欠損	
W7	旧河道		部材	180	178	46	コナラ属アカガシ亜属	板目	欠損	
W8	杭列1		容器	205	105	10		柃目	完形	
W9	杭列1		用途不明品	226	121	17		芯持丸木	一部欠損	
W10	杭列1		杭	1317	125			芯持丸木	一部欠損	
W11	杭列2	土盛り部分	杭	1444	82		コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	一部欠損	
W12	杭列2	土盛り部分	杭	1102	47		コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	一部欠損	
W13	杭列2	土盛り部分	杭	974	66			芯持丸木	一部欠損	
W14	杭列2	土盛り部分	杭	803	66		コナラ属アカガシ亜属 コナラ節	芯持丸木	一部欠損	
W15	杭列2	土盛り部分	杭	848	45		コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	一部欠損	
W16	杭列2	土盛り部分	杭	632	53			芯持丸木	一部欠損	
W17	杭列2	土盛り部分	杭	665	56		コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	一部欠損	
W18	杭列2	土盛り部分	杭	511	53			芯持丸木	一部欠損	
W19	杭列2	土盛り部分	杭	412	56		コナラ属アカガシ亜属	芯持丸木	一部欠損	
W20	杭列2	土盛り部分	杭	679	42			芯持丸木	一部欠損	
W21	杭列2	土盛り部分	杭	365	48			芯持丸木	一部欠損	
W22	杭列2	土盛り部分	杭	451	58			芯持丸木	一部欠損	
W23	杭列2	土盛り部分	杭	325	46			芯持丸木	一部欠損	
W24	杭列2	土盛り部分	杭	376	80		サカキ	芯持丸木	一部欠損	

ガラス製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	残存状況	備考
			最大径	最大厚	孔径				
G1	竪穴住居3	小玉	6.0	3.0	2.2	0.11	青磁色 (7.5G6.5/4)	完形	
G2	竪穴住居3	小玉	6.0	4.0	2.0	0.15	浅青色 (2.5B5/8)	完形	

百間川沢田遺跡遺構一覽表

竪穴住居

地区	遺構名	平面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	床面積 (㎡)	柱穴	中央穴 (cm)			貯蔵穴 (cm)			焼土面	壁体溝	高床部	時期	備考
							平面形	長×短	深さ	形	長×短	深さ					
205G	竪穴住居 1	円形	—	—	10.4 11.9	7/?	楕円形	136× 102	28	×	×	×	×	—	×	百・前・Ⅱ	
206J	竪穴住居 2	円形	480	430	15.9	2/2	円形	73×71	34	×	×	×	×	南半	×	百・前・Ⅱ	
205H	竪穴住居 3	方形	380	(220)	(7.0)	—	×	×	×	×	×	×	×	—	×	百・古・Ⅰ	
205H・Ⅰ	竪穴住居 4	方形	610	596	30.7	4/4	×	×	×	×	×	×	×	全周	×	百・古・Ⅰ	
205I	竪穴住居 5	方形	466	(142)	(6.0)	—	×	×	×	×	×	×	×	一部	×	百・古・Ⅰ	
206H	竪穴住居 6	方形	(370)	(273)	(8.34)	1/?	×	×	×	×	×	×	×	無	×	百・古・Ⅰ	
205・206I	竪穴住居 7	方形	754	720	47.2	4/4	×	×	×	×	×	×	2	全周	×	百・古・Ⅰ	石敷き土抗
205I	竪穴住居 8	方形	500	456	18.9	4/4	楕円形	78×54	8	×	×	×	×	全周	×	百・古・Ⅱ	
206I	竪穴住居 9	長方形	(350)	316	(7.4)	2/2	×	×	×	×	×	×	×	全周	×	百・古・Ⅰ	
206I	竪穴住居10	長方形	388	310	9.0	2/2	×	×	×	×	×	×	×	全周	×	百・古・Ⅰ	北半部は沢田5に報告

掘立柱建物

地区	遺構名	規模	柱間距離 (cm)		桁行 (cm)	梁間 (cm)	面積 (㎡)	棟方向	柱穴平面形	時期	備考
			桁	梁							
205G	掘立柱建物 1	3×1	184~194	401~416	560~565	401~416	23.0	N-88°-E	隅丸方形	古墳時代前期	掘り方「布掘り」
205G	掘立柱建物 2	2×1	189~216	166~179	405~410	345~351	14.1	N-24°-E	円形	古墳時代前期	
205H	掘立柱建物 3	3×1	179~190	308~309	369	308~309	11.4	N-88°-E	円形	古墳時代前期	掘り方「布掘り」
205H	掘立柱建物 4	3×1	112~168	390~404	436~444	390~404	17.7	N-10°-E	隅丸方形	古墳時代前期	掘り方「布掘り」

柱穴列

地区	遺構名	規模	桁行 (cm)	柱間距離 (cm)	主軸	柱穴平面形	時期	備考
205G	柱穴列 1	4間	794cm	188~214	N-89°-E	円形	古墳前期	建物1・2と並行
205H	柱穴列 2	2間	372cm	168~204	N-24°-E	円形	古墳前期	建物3と並行

井戸

地区	遺構名	構造	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
205H	井戸 1	素掘り	円形	U字形	160	141	135	170	百・弥・Ⅲ	
205H	井戸 2	素掘り	楕円形	U字形	94	83	105	183	百・弥・Ⅲ	
205H	井戸 3	素掘り	円形	上半:逆台形、下半:筒形	196	180	196	105	百・弥・Ⅳ	井筒あり
205H	井戸 4	素掘り	楕円形	U字形	177	150	143	151	百・弥・Ⅲ	
205G	井戸 5	素掘り	隅丸方形?	筒形	147	130	165	146	百・古・Ⅰ	
205G	井戸 6	素掘り	隅丸方形?	筒形+下膨れ	124	(118)	135	168	百・古・Ⅰ	
205G	井戸 7	素掘り	楕円形	逆台形+下膨れ状	184	159	146	184	百・古・Ⅰ	
205G	井戸 8	素掘り	円形	逆台形	150	138	179	136	百・古・Ⅰ	
205G・H	井戸 9	素掘り	円形	逆台形	146	142	144	175	百・古・Ⅰ	
205H	井戸10	素掘り	円形	逆台形	143	133	179	142	百・古・Ⅰ	

墓

地区	遺構名	墳丘径 (m)	墳丘高 (cm)	埋葬施 設数	中心墓壇 (cm)				その他の墓壇 (cm)				時期	備考
					施設	平面形	底面長×短	深さ	施設	平面形	底面長×短	深さ		
206H・I	円形周溝墓 1	7.9~ 8.4	30	2?	木棺?小 口痕有	×	×	×	木棺?	長方形	132×35	20	百・中・I	南半部は沢田3 に報告

土坑・炉

地区	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
205H	土坑 1	不整形	Ⅲ b	310	205	45	234	縄文晩期	炭・焼土を多く含む
205・206H	土坑 2	不整円形	Ⅲ a	233	75	32	264	縄文晩期	
205H	土坑 3	楕円形	Ⅲ b	85	55	34	261	縄文晩期	
206H	土坑 4	楕円形	Ⅱ a	153	109	32	263	縄文晩期	
205H	土坑 5	隅丸方形	Ⅲ b	135	53	24	271	縄文晩期	
205H	土坑 6	楕円形	Ⅱ a	103	64	30	265	縄文晩期	
205・206H・I	土坑 7	楕円形	Ⅲ a	123	73	27	266	縄文晩期	
206H	土坑 8	隅丸方形	Ⅲ a	73	70	28	269	縄文晩期	
206I	土坑 9	不整形	Ⅲ a	120	64	30	262	縄文晩期	
205I	土坑10	不整方形	Ⅲ a	(196)	97	37	256	縄文晩期	
206I	土坑11	不整円形	Ⅲ a	125	65	20	271	縄文晩期	
206H	土坑12	不整円形	Ⅲ a	118	69	11	285	縄文晩期	
206I	土坑13	不整方形	Ⅲ a	232	173	33	259	縄文晩期	
206I	土坑14	隅丸方形	Ⅲ a	98	82	30	261	縄文晩期	
205I	土坑15	不整方形	Ⅲ a	218	182	36	248	縄文晩期	炭・焼土を多く含む
205・206I	土坑16	隅丸方形	Ⅲ a	187	100	36	256	縄文晩期	
205I	土坑17	不整方形	Ⅲ a	279	223	20	263	縄文晩期	
205・206I	土坑18	不整円形	Ⅲ a	182	57	32	256	縄文晩期	
205I	土坑19	隅丸方形	Ⅲ a	230	123	26	261	縄文晩期	
206I	土坑20	隅丸方形	Ⅲ a	143	105	23	255	縄文晩期	
205F	土坑21	不整形	Ⅲ a	111	88	19	216	弥生前期	
205G	土坑22	楕円形	Ⅲ b	62	51	24	261	弥生前期	
205G	土坑23	楕円形	Ⅲ a	104	(68)	17	268	弥生前期	
205G	土坑24	楕円形	Ⅲ a	85	70	35	254	弥生前期	
205H	土坑25	円形	Ⅲ a	67	62	17	238	弥生前期	
205H	土坑26	隅丸方形	Ⅲ a	92	88	27	251	弥生前期	
205H	土坑27	円形	Ⅲ a	103	100	25	269	弥生前期	
205・206H・I	土坑28	隅丸方形	Ⅲ a	90	71	25	274	弥生前期	
206H	土坑29	楕円形	Ⅲ a	110	96	25	266	弥生前期	
206I	土坑30	楕円形	Ⅲ a	(136)	54	17	278	弥生前期	
206H	土坑31	隅丸方形	Ⅲ b	127	114	29	266	弥生前期	
205I	土坑32	楕円形	Ⅲ b	88	70	20	276	弥生前期	
205I	土坑33	円形	Ⅲ a	100	90	23	274	百・前・Ⅱ	底面に炭
205I	土坑34	楕円形	Ⅲ a	134	102	37	254	弥生前期	
205I	土坑35	楕円形	Ⅲ a	(113)	80	13	274	弥生前期	
205・206I	土坑36	楕円形	Ⅲ a	98	73	24	264	弥生前期	
205・206I	土坑37	不整形	Ⅲ b	152	90	29	261	弥生前期	
206I	土坑38	不整方形	Ⅲ a	210	83	15	276	弥生前期	
206I	土坑39	隅丸方形	Ⅲ a	110	84	22	269	弥生前期	
206I	土坑40	瓢形	Ⅲ a	135	79	23	271	弥生前期	
206I	土坑41	不整円形	Ⅲ a	135	73	21	268	弥生前期	
206I	土坑42	隅丸方形	Ⅲ a	110	68	34	254	弥生前期	
206I	土坑43	楕円形	Ⅲ a	135	97	25	264	弥生前期	
206I	土坑44	楕円形	Ⅲ a	83	66	22	266	弥生前期	
205・206I	土坑45	楕円形	Ⅲ b	247	85	22	270	弥生前期	
205・206I	土坑46	楕円形	Ⅲ b	200	133	32	253	弥生前期	
206I	土坑47	不整円形	Ⅲ a	121	69	23	269	弥生前期	
206I	土坑48	楕円形	Ⅲ a	84	61	14	273	弥生前期	
206I	土坑49	楕円形	Ⅲ b	116	61	10	288	弥生前期	
206I	土坑50	隅丸方形	Ⅲ a	195	54	19	269	弥生前期	
206I	土坑51	楕円形	Ⅲ a	137	119	23	264	弥生前期	
206I	土坑52	不整円形	Ⅲ b	130	93	30	251	弥生前期	
206I	土坑53	楕円形	Ⅲ a	65	47	24	245	弥生前期	
206I	土坑54	楕円形	Ⅲ b	132	55	11	274	弥生前期	
206I	土坑55	円形	Ⅲ a	80	76	17	276	弥生前期	
206I	土坑56	隅丸方形	Ⅲ a	190	165	15	271	弥生前期	
206I	土坑57	不整形	Ⅲ b	109	61	22	268	弥生前期	
206I	土坑58	隅丸方形	Ⅲ a	76	58	33	257	弥生前期	
206I	土坑59	不整方形	Ⅲ a	160	71	24	270	弥生前期	
206I	土坑60	円形	Ⅲ a	43	36	19	275	弥生前期	
206I	土坑61	不整形	Ⅲ a	137	116	13	278	弥生前期	
206I	土坑62	隅丸方形	Ⅲ a	55	38	19	265	弥生前期	
206J	土坑63	隅丸方形	Ⅲ a	106	56	19	250	弥生前期	
206J	土坑64	不整形	Ⅲ a	147	111	29	250	弥生前期	

地区	遺構名	平面形	断面形	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	底面海拔高 (cm)	時期	備考
206J	土坑65	不整形	Ⅲ a	120	57	23	251	弥生前期	
206J	土坑66	不整円形	Ⅲ a	93	61	12	286	弥生前期	
206J	土坑67	円形	Ⅲ a	56	55	30	259	弥生前期	
206J	土坑68	楕円形	Ⅲ a	(165)	66	35	240	弥生前期	
206J	土坑69	不整円形	Ⅲ a	85	45	14	2765	弥生前期	
206J	土坑70	楕円形	Ⅲ a	150	(42)	21	279	弥生前期	
206J	土坑71	隅丸方形	Ⅲ a	150	(47)	21	279	弥生前期	
206J	土坑72	不整円形	Ⅲ a	71	36	13	277	弥生前期	
206J	土坑73	不整形	Ⅲ a	78	35	32	257	弥生前期	
206K	土坑74	楕円形	Ⅲ a	150	143	29	231	弥生前期	
206K	土坑75	不整形	Ⅲ b	155	62	13	254	弥生前期	
206K	土坑76	隅丸方形	Ⅲ b	92	44	37	225	弥生前期	
206K	土坑77	円形	Ⅲ a	63	52	14	251	弥生前期	
206K	土坑78	円形	Ⅲ a	(56)	50	22	243	弥生前期	
206K	土坑79	隅丸方形	Ⅲ a	65	53	15	250	弥生前期	
206K	土坑80	隅丸方形	Ⅲ a	63	43	16	248	弥生前期	
205H	土坑81	楕円形	Ⅲ a	134	120	20	275	百・中・Ⅰ	
205H	土坑82	楕円形	Ⅲ a	130	75	35	235	百・弥・Ⅳ	
205H	土坑83	不整形	Ⅲ a	400	204	24	270	百・弥・Ⅲ	
205I	土坑84	隅丸方形	Ⅲ a	171	140	13	296	古墳前期	
206I	土坑85	隅丸方形?	Ⅲ a	(105)	(75)	22	293	百・古・Ⅰ	
205I	土坑86	円形	Ⅲ a	75	68	53	246	百・古・Ⅰ	
206I	土坑87	隅丸方形	Ⅲ a	230	(164)	3	312	古墳前期	
205H	土坑88	隅丸方形	Ⅲ a	136	109	20	288	近世	
206J	炉1	隅丸方形	Ⅲ b	210	(152)	70	135	縄文晩期	壁面被熱

環濠・溝

地区	遺構名	断面形	上端幅 (cm)	底面幅 (cm)	深さ (cm)	底面標高 (cm)	時期	備考
205G・H	環濠西部	V字状	310~410	30~48	133~157	133~150	百・前・Ⅱ	
205I・206J・K	環濠東部	V字状	208~236	40~88	73~124	157~166	百・前・Ⅱ	
203・204D・E	溝1	皿状	115~270	75~125	3~25	128~141	弥生前期	
204D	溝2	皿状	25~50	10~28	4~10	134~144	弥生前期	
204D	溝3	皿状	25~50	8~21	2~5	138~140	弥生前期	
204E・F・G	溝4	皿状	28~192	21~174	7~12	150~167	弥生前期	
204E・F・G	溝5	皿状	28~82	21~65	7~30	168~182	弥生前期	
205F・G	溝6	碗状	30~52	7~35	2~21	269~280	百・前・Ⅲ	
205F・G	溝7	碗状	46~53	16~32	4~27	260~264	百・前・Ⅲ	
205F・G	溝8	碗状	65~175	28~125	4~24	261~275	百・前・Ⅲ	
205F	溝9	碗状	65~135	22~25	17~38	236~241	百・前・Ⅱ	
205G・H・I	溝10	碗状	49~110	13~51	9~14	265~279	百・前・Ⅲ	
205H	溝11	皿状	28~143	14~76	1~9	270~289	百・前・Ⅲ	
206・207K	溝12	皿状	34~82	20~52	3~7	261~267	百・前・Ⅲ	
204D	溝13	碗状	28~40	9~17	8~17	192~202	弥生後期	
204E・F	溝14	皿状	18~36	9~25	3~6	205~209	弥生後期	
204E・F	溝15	皿状	20~50	14~35	1~5	208~216	弥生後期	
205F・G	溝16	不定形	18~59	55~43	1~10	220~233	弥生後期	底面凸凹が著しい
205F・G	溝17	不定形	21~75	4~70	2~14	227~233	弥生後期	底面凸凹が著しい
205F・G	溝18	不定形	18~75	10~72	4~12	228~234	弥生後期	底面凸凹が著しい
205F・G	溝19	不定形	20~95	14~72	1~13	227~238	弥生後期	底面凸凹が著しい
205F・G	溝20	不定形	20~70	6~40	3~23	238~248	弥生後期	底面凸凹が著しい
206K	溝21	不定形	48~56	9~21	9~21	207~215	弥生後期	
206K	溝22	不定形	84~96	68~76	7~15	216~214	弥生後期	底面凸凹が著しい
203E	溝23北西部	逆台形	136~150	78~84	68~76	240~274	7世紀代	
204・205E・F	溝23南東部	逆台形~碗状	70~230	118~153	3~64	222~277	7世紀代	
204・205E・F	溝24	皿状	60~120	40~88	13~22	264~279	7世紀代	
205H	溝25	皿状	10以上	—	3以上	—	古・前・Ⅰ~Ⅱ	微高地縁辺で削平
205G・H	溝26	碗状	54~80	—	5~20	284~315	古・前・Ⅰ~Ⅱ	微高地縁辺溝群
205G・H	溝27	碗状	28~69	8~28	7~34	274~312	古・前・Ⅰ~Ⅱ	微高地縁辺溝群
205G・H	溝28	皿状	19~80	6~41	6~18	272~315	古・前・Ⅰ~Ⅱ	微高地縁辺溝群
205G・H	溝29	皿状	31~56	20~34	2~6	310~314	古墳前期	
205H	溝30	筒状	25~35	22~30	13~51	261~265	古墳前期	
205H・I	溝31	皿状	80~145	30~90	3~14	294~308	古墳前期	
205I	溝32	皿状	58~75	26~42	9~15	297~306	古墳前期	
206K	溝33	碗状	48~75	14~35	5~14	260~270	古墳前期	
204F	溝34	箱状	135~595	95~400	12~105	230~245	中世	

百間川沢田遺跡遺物観察表

土器

掲載番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
1	炉1		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
2	炉1		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
3	炉1		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
4	土坑1		縄文土器	深鉢	(31.6)				鈍黄橙 (10YR6/3)	
5	土坑7		縄文土器	深鉢					黒褐 (5YR3/1)	
6	土坑7		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR5/3)	
7	土坑8		縄文土器	浅鉢					灰黄褐 (10YR4/2)	
8	土坑10		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
9	土坑14		縄文土器	浅鉢					灰褐 (7.5YR4/2)	
10	土坑14		縄文土器	浅鉢					鈍黄褐 (10YR5/3)	
11	土坑17		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
12	土坑17		縄文土器	浅鉢					浅黄橙 (10YR8/3)	
13	竪穴住居1	中央穴	弥生土器	甕					鈍赤褐 (5YR5/4)	
14	竪穴住居2		弥生土器	壺		8.2		体部完存	浅黄橙 (10YR8/3)	頸部打ち欠き
15	土坑33		弥生土器	甕	18.5	6.25	17.9	ほぼ完形	鈍黄橙 (10YR6/4)	底部穿孔
16	土坑60		弥生土器	ミニチュア壺	(4.0)	3.5	8.0	ほぼ完形	鈍黄橙 (10YR7/4)	
17	環濠西部	下層 東端	弥生土器	壺	(15.0)				橙 (5YR6/6)	
18	環濠西部	中層	弥生土器	壺					浅黄橙 (10YR8/3)	
19	環濠西部	最下層	弥生土器	壺					鈍黄橙 (10YR7/2)	
20	環濠西部	南半最上層	弥生土器	壺					鈍黄橙 (10YR7/3)	
21	環濠西部		弥生土器	壺					灰白 (2.5Y7/1)	
22	環濠西部		弥生土器	壺		(10.0)			鈍黄橙 (10YR7/2)	
23	環濠西部		弥生土器	甕	20.4				鈍黄橙 (10YR6/3)	
24	環濠西部	最上層	弥生土器	甕	(19.7)				鈍黄褐 (10YR5/3)	
25	環濠西部	中層 (上層)	弥生土器	甕	(31.8)				鈍黄橙 (10YR7/4)	
26	環濠西部	中層 (5層)	弥生土器	甕	(26.0)				鈍黄橙 (10YR7/3)	
27	環濠西部	中層	弥生土器	甕					鈍黄褐 (10YR5/3)	
28	環濠西部	上~中層肩部	弥生土器	甕	(21.2)				鈍橙 (7.5YR7/4)	
29	環濠西部	最下層	弥生土器	甕					浅黄橙 (7.5YR8/3)	
30	環濠西部	最下層	弥生土器	鉢	(38.0)				灰黄褐 (10YR4/2)	
31	環濠西部		弥生土器	壺	6.3	6.4	9.7	ほぼ完形	鈍橙 (7.5YR7/4)	口縁部一部、打ち欠き
32	環濠西部	中層	弥生土器	蓋					鈍黄橙 (10YR7/3)	
33	環濠東部	最下層	弥生土器	壺					灰白 (10YR8/2)	
34	環濠東部	最下層	弥生土器	壺		11.8			灰白 (10YR8/2)	
35	環濠東部		弥生土器	壺	(13.8)				鈍橙 (7.5YR7/4)	
36	環濠東部	中層	弥生土器	壺					浅黄橙 (10YR8/3)	
37	環濠東部		弥生土器	壺	(12.5)				鈍黄橙 (10YR7/3)	
38	環濠東部		弥生土器	壺	(14.0)				浅黄橙 (10YR8/4)	
39	環濠東部	上層	弥生土器	壺					明褐灰 (7.5YR7/2)	
40	環濠東部		弥生土器	壺	14.6				鈍橙 (10YR8/3)	
41	環濠東部		弥生土器	壺	(16.0)				浅黄橙 (7.5YR8/4)	
42	環濠東部		弥生土器	壺					浅黄橙 (10YR8/3)	
43	環濠東部		弥生土器	壺					橙 (7.5YR7/6)	眼鏡状浮文
44	環濠東部	中層	弥生土器	壺		8.4			鈍黄橙 (10YR7/2)	
45	環濠東部		弥生土器	壺	(36.8)				橙 (5YR7/8)	
46	環濠東部		弥生土器	甕	20.6				鈍黄橙 (10YR6/4)	
47	環濠東部		弥生土器	甕					鈍黄橙 (10YR7/2)	
48	環濠東部		弥生土器	甕					鈍橙 (7.5YR6/4)	
49	環濠東部	中層	弥生土器	甕	20.8				褐灰 (10YR4/1)	
50	環濠東部		弥生土器	甕	(22.0)				鈍黄橙 (10YR7/3)	
51	環濠東部		弥生土器	甕					鈍黄橙 (10YR7/4)	
52	環濠東部	中層	縄文土器	甕					鈍黄橙 (10YR7/3)	
53	環濠東部		弥生土器	甕	20.2				橙 (7.5YR6/6)	
54	環濠東部		弥生土器	甕	(21.2)				鈍黄橙 (10YR6/4)	
55	環濠東部		弥生土器	甕	16.8				鈍黄橙 (10YR7/2)	
56	環濠東部		弥生土器	甕					浅黄橙 (10YR8/3)	
57	環濠東部		弥生土器	甕					にぶい橙 (7.5YR6/4)	
58	環濠東部		弥生土器	甕					鈍黄橙 (10YR7/2)	
59	環濠東部	上層	弥生土器	壺		15.0			鈍黄橙 (10YR7/2)	
60	環濠東部	中層	弥生土器	蓋					鈍黄橙 (10YR7/4)	
61	環濠東部		弥生土器	蓋	10.9				橙 (5YR6/6)よりやや鈍	透かし孔2
62	環濠東部	北部	弥生土器	蓋					鈍黄橙 (10YR7/3)	
63	環濠東部		弥生土器	蓋	10.8				灰黄 (2.5Y7/2)	
64	環濠東部	下層	弥生土器	蓋	(19.8)				鈍黄橙 (10YR7/3)	
65	環濠東部		弥生土器	蓋					灰白 (10YR8/2)	
66	環濠東部	最下層	弥生土器	壺		4.8			鈍黄橙 (10YR7/2)	
67	環濠東部	下層	弥生土器	壺	7.3	4.8	10.4	完形	橙 (5YR6/6)	
68	溝7or8		弥生土器	甕		6.0			橙 (7.5YR6/6)	底部穿孔
69	円形周溝墓1	周溝底	弥生土器	壺	17.9	6.8	23.0	ほぼ完形	鈍橙 (7.5YR7/4)	口縁部、一部打ち欠き
70	円形周溝墓1	周溝内土坑上面	弥生土器	壺		7.4	(27.9)	体部完形	鈍黄橙 (10YR7/3)	口縁部打ち欠き

掲載 番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
71		円形周溝墓1	弥生土器	壺					にぶい黄橙 (10YR7/4)	
72		円形周溝墓1	弥生土器	甗					にぶい黄橙 (10YR6/4)	
73		円形周溝墓1	弥生土器	甗					橙 (7.5YR6/6)	
74		円形周溝墓1	弥生土器	壺		(8.8)			明黄褐 (10YR6/6)	
75		土坑81	弥生土器	壺					鈍黄橙 (10YR7/2)	
76		土坑81	弥生土器	壺					鈍黄橙 (10YR7/2)	
77		井戸1 第7～8層	弥生土器	壺	16.2				橙 (5YR7/6)	
78		井戸1 第7～8層	弥生土器	壺	(13.0)				鈍橙 (7.5YR7/4)	
79		井戸1 第7～8層	弥生土器	壺	11.4				鈍橙 (7.5YR7/4)	
80		井戸1 第1層	弥生土器	甗	14.7				鈍黄橙 (10YR7/3)	
81		井戸1 第1層	弥生土器	甗		5.0			鈍黄橙 (10YR6/3)	
82		井戸1 第1層	弥生土器	甗	(13.8)				黒褐 (5YR3/1)	
83		井戸1 第1層	弥生土器	甗		6.0			鈍橙 (7.5YR7/4)	
84		井戸1 第1層	弥生土器	鉢	17.2				明赤褐 (5YR5/6)	
85		井戸1 第1層	弥生土器	鉢	(21.2)				橙 (7.5YR7/6)	
86		井戸1 第1層	弥生土器	鉢	7.7				浅黄橙 (10YR8/3)	
87		井戸2 東半底面付近	弥生土器	壺		7.3			鈍黄橙 (10YR7/3)	
88		井戸2 底面付近 土器	弥生土器	壺		8.0			灰黄 (2.5Y7/2)	
89		井戸2 東半	弥生土器	甗					鈍赤褐 (5YR5/4)	
90		井戸3	弥生土器	甗	(15.8)	5.0	(22.4)		鈍黄橙 (10YR7/2)	
91		井戸3	弥生土器	台付鉢		12.2			灰黄褐 (10YR5/2)	
92		井戸3	弥生土器	壺	24.3				浅黄橙 (10YR8/3)	
93		井戸3	弥生土器	壺	17.4		(30.2)		鈍橙 (7.5YR7/4)	
94		井戸3	弥生土器	甗					鈍橙 (7.5YR6/4)	
95		井戸3	弥生土器	甗	17.0		(26.1)		明赤褐 (2.5YR5/6)	
96		井戸3	弥生土器	甗	15.4	4.8	20.7		鈍黄橙 (10YR6/4)	
97		井戸3	弥生土器	甗	15.4	4.7	19.6		鈍橙 (7.5YR7/4)	
98		井戸3	弥生土器	甗	14.8	4.0	18.0		鈍橙 (7.5YR7/4)	
99		井戸3	弥生土器	甗	19.0				浅黄橙 (10YR8/4)	
100		井戸3 中層	弥生土器	甗		5.8			黒褐 (10YR3/1)	
101		井戸3	弥生土器	甗	15.1	5.4	25.2	ほぼ完形	鈍黄橙 (10YR7/3)	底部穿孔
102		井戸3	弥生土器	甗	15.8				鈍褐 (7.5YR5/4)	
103		井戸3	弥生土器	甗	15.0				鈍黄橙 (10YR7/3)	
104		井戸3	弥生土器	甗	(9.4)				鈍黄橙 (10YR7/3)	
105		井戸3	弥生土器	高杯	19.0	14.0	12.5		橙 (5YR6/8)	
106		井戸3	弥生土器	鉢		3.2			浅黄 (2.5Y7/3)	
107		井戸3	弥生土器	鉢	(10.8)	(2.6)	4.5		鈍橙 (7.5YR7/4)	
108		井戸3	弥生土器	鉢	14.0	4.7	7.6	完形	橙 (7.5YR6/6)	
109		井戸3	弥生土器	鉢	(16.0)				鈍黄橙 (10YR7/3)	
110		井戸4 第1～2層	弥生土器	壺	(20.0)				橙 (2.5YR6/8)	
111		井戸4 第4層	弥生土器	壺	23.0				明赤褐 (5YR5/6)	
112		井戸4 第1～2層	弥生土器	甗	14.6	5.9	18.5	ほぼ完形	橙 (5YR7/8)	
113		井戸4 第4層	弥生土器	甗	17.5	8.0	33.7	ほぼ完形	鈍橙 (7.5YR6/4)	胴部打ち欠き
114		井戸4 第1～2層	弥生土器	甗	15.0	5.2	25.0	ほぼ完形	橙 (5YR6/6)	
115		井戸4	弥生土器	甗	14.6				鈍黄橙 (10YR7/4)	
116		井戸4	弥生土器	甗	10.4				鈍橙 (7.5YR6/4)	
117		井戸4 第1～2層	弥生土器	高杯	14.6	11.2	10.6		橙 (5YR7/8)	
118		井戸4	弥生土器	高杯	(19.8)				橙 (5YR6/6)	
119		井戸4 第1～2層	弥生土器	高杯					橙 (7.5YR6/6)	
120		井戸4 第4層	弥生土器	鉢	13.7	3.8	6.5	完形	橙 (7.5YR6/6)	
121		井戸4	弥生土器	鉢	17.4	4.6	7.8	ほぼ完形	7.5YR7/3	
122		井戸4	弥生土器	鉢	11.6	4.0	4.2		橙 (5YR7/8)	
123		土坑82	弥生土器	壺	(22.2)				鈍橙 (7.5YR7/4)	
124		土坑82	弥生土器	鉢		4.8			鈍橙 (7.5YR7/4)	
125		土坑83	弥生土器	壺	(20.0)				明赤褐 (5YR5/8)	
126		土坑83	弥生土器	甗	17.2				浅黄 (2.5Y7/3)	
127		土坑83	弥生土器	甗	14.6				橙 (5YR6/6)	
128		土坑83	弥生土器	甗	14.9				橙 (7.5YR7/6)	
129		土坑83	弥生土器	甗	16.4				橙 (5YR7/6)	
130		土坑83	弥生土器	甗	12.2				橙 (7.5YR6/6)	
131		土坑83	弥生土器	甗	14.1				橙 (7.5YR7/6)	
132		土坑83	弥生土器	甗		(6.6)			灰褐 (5YR4/2)	
133		土坑83	弥生土器	高杯	10.0	8.4	6.2	完形	鈍橙 (7.5YR7/4)	
134		土坑83	弥生土器	高杯	14.1				橙 (5YR6/6)	
135		土坑83	弥生土器	高杯	18.0				橙 (5YR7/8)	
136		土坑83	弥生土器	高杯	12.4				橙 (5YR7/6)	
137		土坑83	弥生土器	高杯		13.1			橙 (5YR7/8)	
138		土坑83	弥生土器	高杯		9.8			鈍黄橙 (10YR7/3)	
139		土坑83	弥生土器	鉢	13.2				浅黄橙 (10YR8/3)	
140		土坑83	弥生土器	ミニチュア壺	1.7	1.7	2.3		橙 (7.5YR7/6)	
141		後期水田	弥生土器	甗	21.2				鈍黄橙 (10YR7/4)	
142		竪穴住居4	土師器	壺	(15.0)					
143		竪穴住居4	土師器	鉢	(20.1)					
144		竪穴住居7	土師器	高杯	(12.9)		(7.0)		橙 (5YR6/6)	
145		竪穴住居7	土師器	小型丸底壺	(11.5)				鈍黄橙 (10YR7/4)	
146		竪穴住居7	土師器	器台		(9.6)			鈍橙 (7.5YR7/4)	
147		竪穴住居8	土師器	高杯	(19.2)				橙 (5YR6/8)	
148		竪穴住居10 壁体溝	土師器	高杯		(16.8)			鈍橙 (7.5YR7/4)	
149		井戸5 第2層	土師器	壺	(10.8)				鈍黄橙 (10YR6/4)	
150		井戸5 第2層	土師器	壺					橙 (7.5YR6/6)	
151		井戸5 第1層	土師器	甗	14.2	4.9	23.9	ほぼ完形	鈍黄橙 (10YR7/3)	

掲載 番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
152	井戸5	第1層	土師器	甕	14.6	4.2	23.2	完形	鈍黄橙 (10YR7/3)	
153	井戸5	第1層	土師器	甕	14.2		24.3	完形	鈍黄橙 (10YR7/3)	
154	井戸5	第1層	土師器	甕		4.9			鈍黄橙 (10YR7/2)	
155	井戸5	第1層	土師器	甕	12.6		20.8	完形	灰黄褐 (10YR6/2)	
156	井戸5		土師器	高杯					橙 (7.5YR6/6)	
157	井戸5	第2層	土師器	鉢	(13.5)				橙 (5YR6/6)	
158	井戸5	第2層	土師器	鉢	(11.8)				橙 (5YR6/6)	
159	井戸6	第11層	土師器	壺					鈍褐 (7.5YR5/3)	
160	井戸6		土師器	壺		4.4			橙 (5YR6/6)	
161	井戸6	第11層	土師器	甕					鈍黄橙 (10YR6/3)	
162	井戸6	第10 (炭) 層直上	土師器	甕					煤付着のため不明	
163	井戸6		土師器	甕					明黄褐 (10YR6/6)	底部穿孔
164	井戸6		土師器	鉢	11.0				浅黄橙 (10YR8/3)	
165	井戸6		土師器	鉢	8.6		7.4	完形	灰白 (2.5Y8/2)	
166	井戸7	第11層	土師器	甕	14.0		23.6	完形	灰黄 (2.5Y6/2)	
167	井戸7		土師器	甕	12.6		20.6	完形	鈍黄橙 (10YR7/3)	
168	井戸7		土師器	甕					灰黄褐 (10YR4/2)	内底面に炭化米
169	井戸7		土師器	甕					鈍黄橙 (10YR6/4)	
170	井戸7	北半	土師器	高杯					鈍黄橙 (10YR7/4)	
171	井戸7	第4層	土師器	手捏ね土器	6.6		7.2	完形	淡赤橙 (2.5YR7/3)	上層でまとめて出土
172	井戸7	第4層	土師器	手捏ね土器	4.8		4.6	完形	橙 (7.5YR6/6)	上層でまとめて出土
173	井戸7	第4層	土師器	手捏ね土器	3.9		4.4	完形	鈍黄橙 (10YR7/3)	上層でまとめて出土
174	井戸7	第4層	土師器	手捏ね土器	5.2	2.0	5.1	完形	鈍橙 (7.5YR6/4)	上層でまとめて出土
175	井戸7	第4層	土師器	手捏ね土器		2.0		ほぼ完形	鈍黄橙 (10YR7/4)	上層でまとめて出土
176	井戸8	第6層	土師器	壺	16.6	6.4	30.7	完形	鈍黄橙 (10YR7/2)	
177	井戸8	第6層	土師器	壺	16.4	5.6	31.7	ほぼ完形	浅黄 (2.5Y7/3)	
178	井戸8		土師器	壺	16.9				鈍黄橙 (10YR7/3)	
179	井戸8	第6層	土師器	壺		7.3			灰黄 (2.5Y7/2)	
180	井戸8		土師器	甕	14.8				鈍黄橙 (10YR7/2)	
181	井戸8		土師器	甕	15.4				鈍黄橙 (10YR6/3)	
182	井戸8		土師器	甕		4.4			灰黄褐 (10YR6/2)	
183	井戸8		土師器	甕		5.6			浅黄橙 (10YR8/3)	
184	井戸8		土師器	高杯	14.6				橙 (2.5YR6/6)	
185	井戸8	第6層	土師器	鉢	14.0	2.9	6.0	完形	鈍黄橙 (10YR7/3)	
186	井戸8	第6層	土師器	鉢	15.1	3.0	5.8	完形	鈍黄橙 (10YR7/3)	
187	井戸8		土師器	鉢	12.7				鈍黄橙 (10YR7/3)	
188	井戸8		土師器	鉢	9.8				灰白 (2.5Y8/1)	
189	井戸9	第5層	土師器	壺	15.4		27.5	完形	淡黄 (2.5Y8/3)	
190	井戸9	第3～4層	土師器	壺		(5.0)			灰白 (2.5Y8/2)	
191	井戸9	第3～4層	土師器	甕	12.8				鈍橙 (7.5YR7/4)	
192	井戸9	第3～4層	土師器	甕					鈍黄橙 (10YR7/4)	
193	井戸9	第3～4層	土師器	甕					鈍黄橙 (10YR7/3)	
194	井戸9		土師器	甕	15.4				鈍橙 (7.5YR6/4)	
195	井戸9	第3～4層	土師器	甕	13.6				橙 (7.5YR7/6)	
196	井戸9	第5層	土師器	甕	14.4				鈍黄橙 (10YR7/4)	
197	井戸9	第5層	土師器	甕	13.5				鈍黄橙 (10YR7/4)	
198	井戸9	第5層	土師器	甕	13.0				鈍橙 (7.5YR6/4)	
199	井戸9	第5層	土師器	高杯	19.3	13.3	13.8	完形	橙 (7.5YR7/6)	
200	井戸9		土師器	高杯	20.2				灰白 (2.5Y8/2)	
201	井戸9	第3～4層	土師器	鉢	12.4	2.2	5.9		鈍黄橙 (10YR7/3)	
202	井戸9	第3～4層	土師器	鉢	(11.5)	(2.9)	6.1		鈍黄橙 (10YR7/4)	
203	井戸9		土師器	鉢	19.8		7.6	完形	橙 (2.5YR6/6)	
204	井戸9		土師器	鉢	(14.6)	3.0	6.4		鈍橙 (7.5YR7/4)	
205	井戸10	第4～5層	土師器	壺	18.0		30.5	完形	浅黄橙 (7.5YR8/3)	
206	井戸10	第4～5層	土師器	壺	15.4		30.7	完形	浅黄橙 (7.5YR8/4)	
207	井戸10	第4～5層	土師器	壺		4.0			灰黄 (2.5Y7/2)	
208	井戸10	第4～5層	土師器	壺	13.7	4.9	26.7	ほぼ完形	灰白 (2.5Y7/1)	
209	井戸10	第4～5層	土師器	壺	13.8	5.4	26.9	ほぼ完形	鈍黄橙 (10YR7/2)	
210	井戸10	第4～5層	土師器	甕	12.9	3.9	18.8	ほぼ完形	鈍黄橙 (10YR7/3)	
211	井戸10	第4～5層	土師器	甕					鈍黄橙 (10YR6/4)	
212	井戸10	第4～5層	土師器	高杯	12.0				橙 (5YR7/6)	
213	土坑86		土師器	甕	(12.2)				鈍黄橙 (10YR7/4)	
214	土坑86		土師器	鉢	(30.6)				灰白 (2.5Y8/2)	
215	溝23北西部周辺		須恵器	杯蓋	9.85		3.7	完形	灰白 (10YR7/1)	
216	溝23北西部周辺		須恵器	杯蓋	9.9		3.0	完形	灰 (N6/)	
217	溝23南東部		須恵器	杯蓋	10.6		3.5	完形	灰白 (N7/) もう少し灰色	
218	溝23南東部		須恵器	杯身					灰 (N6/)	
219	溝25～28		土師器	甕	13.5				鈍黄褐 (10YR5/3)	
220	溝25～28		土師器	甕					鈍橙 (7.5YR6/4)	
221	溝25～28		土師器	高杯	15.1				鈍橙 (7.5YR6/4)	
222	溝25～28		土師器	高杯					橙 (5YR6/6) 暗灰黄 (2.5Y5/2) 一部	
223	下がり1		土師器	壺	14.6				鈍橙 (7.5YR7/4)	
224	下がり1		土師器	甕	(12.4)				鈍橙 (7.5YR6/4)	
225	下がり1		土師器	高杯					鈍橙 (7.5YR7/4)	
226	下がり1		土師器	壺	11.0				未記入	
227	溝34		龜山焼	甕					灰 (N5/)	
228	溝34		須恵器	皿					灰 (N6/)	
229	包含層		縄文土器	深鉢					灰黄褐 (10YR5/2)	
230	包含層		縄文土器	深鉢					灰黄褐 (10YR5/2)	
231	包含層		縄文土器	深鉢					黒 (7.5YR2/1)	
232	包含層	L=2.70m	縄文土器	深鉢					灰黄褐 (10YR5/2)	

掲載番号	遺構名・層位		種別	器種	計測値 (cm)			残存状況	色調 (外面)	備考
					口径	底径	器高			
233	包含層		縄文土器	浅鉢					鈍黄橙 (10YR7/2)	
234	包含層		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/4)	
235	包含層	L=2.80m	縄文土器	深鉢					灰黄褐 (10YR6/2)	
236	包含層	L=2.80m	縄文土器	深鉢					灰黄褐 (10YR6/2)	
237	包含層	L=2.77m	縄文土器	深鉢					黒 (N2/)	
238	包含層		縄文土器	浅鉢					灰褐 (7.5YR5/2)	
239	包含層		縄文土器	浅鉢					橙 (7.5YR7/6)	
240	包含層		縄文土器	浅鉢					褐灰 (10YR4/1)	
241	包含層	環濠南 重機掘下中	縄文土器	浅鉢	(25.4)				明赤褐 (5YR5/6)	
242	包含層	調査区北	縄文土器	浅鉢					鈍黄橙 (10YR7/3)	
243	包含層	L=2.75~2.85m	縄文土器	浅鉢					灰黄褐 (10YR5/2)	
244	包含層		縄文土器	浅鉢?					鈍橙 (7.5YR7/3)	
245	包含層		縄文土器	浅鉢?					鈍黄橙 (10YR5/3)	
246	包含層	調査区北	縄文土器	深鉢?					浅黄 (2.5Y7/3)	
247	包含層		縄文土器	浅鉢	25.7				鈍黄橙 (10YR6/3)	
248	包含層	L=2.70m	縄文土器	浅鉢					褐灰 (10YR4/1)	
249	包含層	L=2.70m	縄文土器	浅鉢					黒褐 (10YR3/1)	
250	包含層		縄文土器	浅鉢?		5.1			褐灰 (7.5YR4/2)	
251	包含層	L=2.74m	縄文土器	浅鉢					灰黄褐 (10YR5/2)	
252	包含層		縄文土器	深鉢	(39.2)				鈍黄橙 (10YR6/3)	
253	包含層	L=2.78m	縄文土器	浅鉢					明赤褐 (2.5YR5/6)	
254	包含層	L=2.84m	縄文土器	浅鉢					褐灰 (10YR4/1)	
255	包含層	L=2.80m	縄文土器	深鉢					黄灰 (2.5Y4/1)	
256	包含層		縄文土器	浅鉢					褐灰 (10YR4/1)	
257	包含層	L=2.74m	縄文土器	深鉢?					黄灰 (2.5Y5/1)	
258	包含層		縄文土器	浅鉢					褐灰 (10YR6/1)	
259	包含層	L=2.80m	縄文土器	深鉢	(34.2)				鈍黄橙 (10YR6/3)	
260	包含層		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
261	包含層		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
262	包含層		縄文土器	浅鉢?					鈍黄橙 (10YR7/3)	
263	包含層		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
264	包含層	調査区南半	縄文土器	深鉢					灰黄褐 (10YR6/2)	
265	包含層		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
266	包含層		縄文土器	深鉢					灰黄 (2.5Y4/1)	
267	包含層		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
268	包含層	弥生後期水田層掘下中	縄文土器	深鉢					褐灰 (10YR5/1)	
269	包含層		縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
270	包含層	L=2.90m	縄文土器	深鉢					鈍黄褐 (10YR5/3)	
271	包含層	L=3.05m	縄文土器	深鉢					鈍黄褐 (10YR5/3)	
272	包含層	微高地精査中	縄文土器	深鉢					鈍黄橙 (10YR6/3)	
273	包含層		縄文土器	深鉢					灰黄褐 (10YR4/2)	
274	包含層		縄文土器	深鉢					灰黄褐 (10YR6/2)	
275	包含層	L=2.73m	縄文土器	底部		4.8			鈍橙 (7.5YR7/4)	
276	包含層		縄文土器	底部		5.0			褐灰 (10YR5/1)	
277	包含層	L=2.80m	縄文土器	底部		6.2			鈍橙 (5YR6/4)	
278	包含層	L=2.75~2.85m	縄文土器	底部		5.2			鈍黄橙 (10YR6/3)	

石器・石製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S1	炉1	乳棒状石器	(90.0)	40.0	45.0	(215.99)	角閃石	欠損	
S2	土坑4	石鏃	17.0	13.0	4.0	0.63	サヌカイト	完形	
S3	土坑6	石鏃	17.0	(12.0)	3.0	(0.53)	サヌカイト	完形	
S4	土坑12	石鏃	(13.0)	13.0	2.5	(0.34)	サヌカイト	完形	
S5	土坑12	石鏃	(14.5)	18.5	3.5	(0.60)	サヌカイト	一部欠損	
S6	竪穴住居2	削器	72.0	67.0	8.5	36.70	サヌカイト	完形	
S7	環濠西部	石匙	(36.0)	44.0	8.0	(12.30)	サヌカイト	一部欠損	
S8	環濠西部	石鏃	20.0	(13.5)	3.0	(0.75)	サヌカイト	完形	
S9	環濠西部	石鏃	(25.0)	18.0	4.0	(1.47)	サヌカイト	一部欠損	
S10	環濠西部	磨製石包丁	(50.0)	(27.0)	(7.5)	(17.46)	粘板岩ホルンフェルス	欠損	
S11	環濠西部	石鏃	71.0	68.0	52.0	290.16	花崗岩	一部欠損	
S12	環濠東部	小型方柱状片刃石斧	(36.0)	14.0	12.0	(9.07)	粘板岩	欠損	
S13	環濠東部	磨製石包丁	(78.5)	(38.0)	6.5	(23.40)	粘板岩	欠損	未製品
S14	環濠東部	石鏃	(14.0)	14.5	4.0	(0.57)	サヌカイト	一部欠損	
S15	環濠東部	石鏃	16.0	18.0	3.0	0.63	サヌカイト	完形	
S16	環濠東部	石鏃	(12.5)	18.0	4.0	(0.91)	サヌカイト	欠損	
S17	環濠東部	石鏃	(24.0)	(20.0)	5.0	(1.55)	サヌカイト	欠損	
S18	溝9	石槍	(58.5)	49.0	12.0	(39.37)	サヌカイト	欠損	
S19	溝11	石鏃	24.0	(14.5)	4.0	(0.77)	サヌカイト	完形	
S20	円形周溝墓1	石鏃	26.0	16.0	4.5	1.76	サヌカイト	完形	
S21	円形周溝墓1	石鏃	27.5	18.5	2.0	0.98	サヌカイト	完形	
S22	土坑81	石鏃	(17.0)	(14.0)	3.5	(0.57)	サヌカイト	一部欠損	
S23	井戸1	敲石	99.0	78.0	55.0	674.32	砂岩	欠損	蛤刃石斧の転用
S24	溝16~20	石鏃	(19.0)	12.5	3.0	(1.00)	サヌカイト	完形	

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	石材	残存状況	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
S 25	竪穴住居 4	砥石	(113.0)	(64.0)	102.0	(988.80)	流紋岩	欠損	
S 26	井戸 6	砥石	(161.0)	(86.0)	101.0	(1813.64)	流紋岩	欠損	
S 27	包含層	剥片	188.0	146.0	18.5	492.45	サヌカイト	完形	
S 28	包含層	石鏃	24.0	14.0	4.0	0.96	サヌカイト	一部欠損	
S 29	包含層	石鏃	16.5	15.0	3.4	0.97	サヌカイト	完形	
S 30	包含層	石鏃	17.5	12.0	2.5	0.39	サヌカイト	完形	
S 31	包含層	石鏃	19.0	18.0	4.0	0.68	サヌカイト	完形	
S 32	包含層	石鏃	23.0	9.0	3.8	0.90	サヌカイト	完形	
S 33	包含層	石錘	114.0	71.0	64.0	732.82	砂岩	完形	

土製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	残存状況	備考
			最大幅	最大厚	孔径				
C1	包含層	土錘	47.0	12.0	12.0	5.10	鈍橙色 (7.5YR7/4)	完形	水田層

金属器

掲載番号	遺構名	器種	材質	計測値 (mm)			重量 (g)	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚			
M 1	竪穴住居 8	鉄鏃	鉄	48.5	13.5	3.5	6.72	完形	

木製品

掲載番号	遺構名・層位		器種	計測値 (mm)			樹種	木取り	残存状況	備考
				最大長	最大幅	最大厚				
W1	井戸 3	井戸底	礎盤	(96.0)	(14.1)	(2.0)	モミ属	柁目	ほぼ完存	転用材
W2	井戸 3		井戸枠	79.0	43.6	3.9	コナラ属アカガシ亜属	刳抜材	ほぼ完存	柄穴 2 孔
W3	井戸 3		井戸枠	61.0	29.2	3.6	コナラ属アカガシ亜属	刳抜材	ほぼ完存	柄穴 2 孔
W4	井戸 3		井戸枠	(58.8)	(26.3)	(3.6)	コナラ属アカガシ亜属	刳抜材	ほぼ完存	柄穴 2 孔

ガラス製品

掲載番号	遺構名	器種	計測値 (mm)			重量 (g)	色調	残存状況	備考
			最大径	最大厚	孔径				
G1	溝31	小玉	5.00	3.90	0.16	0.13	浅ぎ色 (2.5B5/8)	完形	

新旧遺構名称対照表

百間川原尾島遺跡

掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名	掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名	掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名
竪穴住居 1	3区	No153住居	土坑52	3区	No173土坑	製塩炉 1	3区	No143製塩炉
竪穴住居 2	3区	No127住居	土坑53	3区	No174土坑	製塩炉 2	3区	No144製塩炉
竪穴住居 3	3区	No139住居	土坑54	3区	No167土坑	焼土 1	3区	—
竪穴住居 4	3区	No128住居	土坑55	3区	No163土坑	焼土 2	3区	—
竪穴住居 5	3区	No129住居	土坑56	4区	No39溝 - P 19	溝1	1区	No48溝
竪穴住居 6	3区	No114住居	土坑57	4区	No37土坑	溝2	1区	No47溝
竪穴住居 7	3区	No115住居	土坑58	4区	No65土坑	溝3	1区	No46溝
竪穴住居 8	3・4区	No116住居	土坑59	4区	No63土坑	溝4	1区	No49溝
竪穴住居 9	4区	No 9 住居	土坑60	4区	No66土坑	溝5	1区	No50溝
竪穴住居10	4区	No 8 住居	土坑61	4区	No39溝 - P 32	溝6	1区	No51溝
井戸 1	3区	No207井戸	土坑62	4区	No59土坑	溝7	2区	No94溝
井戸 2	3区	No126井戸	土坑63	4区	No82土坑	溝8	2区	No96溝
井戸 3	3区	No125井戸	土坑64	4区	No34土坑	溝9	2区	No95溝
井戸 4	3区	No113井戸	土坑65	4区	P 116 No72石包丁	溝10	2区	No88溝
井戸 5	3区	No123井戸	土坑66	4区	No85土坑	溝11	2区	No98溝
井戸 6	3区	No117井戸	土坑67	4区	No68土坑	溝12	4区	No39溝
井戸 7	4区	No14井戸	土坑68	4区	No78土坑	溝13	4区	No94溝
井戸 8	4区	No21井戸	土坑69	3区	No152土坑	溝14	2区	No98溝
井戸 9	4区	No73井戸	土坑70	3区	No154土坑	溝15	2区	No99溝
土器棺 1	3区	No145土器棺	土坑71	3区	No183 A・B 土坑	溝16	1区	No41溝
土坑 1	2区	No118貯蔵穴	土坑72	3区	No236土坑	溝17	1区	No40溝
土坑 2	2区	No97土坑	土坑73	3区	No189土坑	溝18	1区	No45溝
土坑 3	3区	No209土坑	土坑74	3区	No166土坑	溝19	1区	No33溝
土坑 4	3区	No164土坑	土坑75	4区	No67土坑	溝20	2区	No84溝
土坑 5	3区・4区	No172土坑・No31土坑	土坑76	3区	No195土坑	溝21	2区	No87 (新) 溝
土坑 6	3区	No159土坑	土坑77	3区	No197土坑	溝22	2区	No87 (旧) 溝
土坑 7	3区	No215土坑	土坑78	3区	No199土坑	溝23	2区	No91溝
土坑 8	3区	No234土坑	土坑79	3区	No200土坑	溝24	2区	No92溝
土坑 9	3区	No176土坑	土坑80	3区	No218土坑	溝25	2区	No85溝
土坑10	3区	No175 B 土坑	土坑81	3区	No186土坑	溝26	2区	No86溝
土坑11	3区	No238土坑	土坑82	3区	No185土坑	溝27	2区	No89溝
土坑12	3区	No205土坑	土坑83	3区	No216土坑	溝28	2区	No90溝
土坑13	3区	No206土坑	土坑84	3区	No230土坑	溝29	2区	No80溝
土坑14	3区・4区	No171土坑・No35土坑	土坑85	3区	No161土坑	溝30	4区	No55溝
土坑15	4区	No36土坑	土坑86	3区	No242土坑	溝31	4区	No49溝
土坑16	4区	No58土坑	土坑87	3区	No243土坑	溝32	4区	No53溝
土坑17	4区	No27土坑	土坑88	4区	No60土坑	溝33	4区	No76溝
土坑18	4区	No56土坑	土坑89	4区	No39溝 - P 26	溝34	3区	No204c溝
土坑19	4区	No62土坑	土坑90	4区	No48土坑	溝35	3区	No204 b 溝
土坑20	4区	No61土坑	土坑91	1区	No38土坑	溝36	3区	No204a溝
土坑21	4区	No64土坑	土坑92	1区	No42土坑	溝37	3区	No203溝
土坑22	4区	No86土坑	土坑93	1区	No39土坑	溝38	3区	No202溝
土坑23	4区	No70土坑	土坑94	1区	No35土坑	溝39	4区	No79溝
土坑24	4区	No81土坑	土坑95	1区	No36土坑	溝40	4区	No87溝
土坑25	3区	No177土坑	土坑96	3区	No198土坑	溝41	4区	No88溝
土坑26	3区	No149土坑	土坑97	3区	No210土坑	溝42	4区	No80溝
土坑27	3区	No168土坑	土坑98	3区	No211土坑	溝43	3区	No124溝下層
土坑28	3区	No178土坑	土坑99	3区	No142土坑	溝44	1区	No22溝
土坑29	3区	No219土坑	土坑100	3区	No162土坑	溝45	1区	No21溝
土坑30	3区	No196土坑	土坑101	3区	No135土坑	溝46	1区	No28溝
土坑31	3区	No220土坑	土坑102	3区	No165土坑	溝47	1区	No25溝
土坑32	3区	No233土坑	土坑103	4区	No30土坑	溝48	1区	No27溝
土坑33	3区	No193土坑	土坑104	4区	No28土坑	溝49	2区	No23溝・No24溝
土坑34	3区 E	No213土坑	土坑105	4区	No24土坑	溝50	2区	No23溝・No24溝
土坑35	3区	No151土坑	土坑106	4区	No46土坑	溝51	1区	No56溝
土坑36	3区	No244土坑	土坑107	4区	No26土坑	溝52	1区	No57溝・No26溝
土坑37	3区	No239土坑	土坑108	4区	No57土坑	溝53	1区	No58溝
土坑38	3区	No240土坑	土坑109	4区	No50土器溜まり	溝54	2区	No61溝
土坑39	3区	No182土坑	土坑110	4区	No52土坑	溝55	2区	No70溝
土坑40	3区	No181土坑	土坑111	4区	No51土坑	溝56	2区	No71溝
土坑41	3区	No146 A 土坑	土坑112	4区	No69土坑	溝57	3区	No103溝
土坑42	3区	No146 B 土坑	土坑113	4区	No92土坑	溝58	3区	No136溝
土坑43	3区	P 400	土坑114	4区	No91土坑	溝59	3区	No137溝
土坑44	3区	No188土坑	土坑115	1区	No 8 土坑	溝60	3区	No138溝
土坑45	3区	No237土坑	土坑116	1区	No11土坑	溝61	3区	No119溝
土坑46	3区	No212土坑	土坑117	1区	No10土坑	溝62	3区	No113 A 溝
土坑47	3区	No214 A 土坑	土坑118	1区	No16土坑	溝63	4区	No11溝
土坑48	3区	No214 B 土坑	土坑119	1区	No15土坑	溝64	4区	No16溝
土坑49	3区	No217土坑	土坑120	1区	No29土坑	溝65	4区	No13溝
土坑50	3区	No157土坑	土坑121	3区	P 299	溝66	4区	No18溝
土坑51	3区	No175 A 土坑	土坑122	4区	No22土坑	溝67	1区	No9溝

掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名
溝68	2区	No65溝
溝69	2区	No67溝
土器溜まり1	3区	No130土器溜まり
土器溜まり2	3区	No120土器溜まり
土器溜まり3	3区	No121土器溜まり
水田1	1区	No52水田
水田2	1区	No44水田
水田3	4区	No93水田

掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名
水田4	1区	No31水田
水田5	2区	No31水田
水田6	2区	No74水田
水田7	2区	No73水田
水田8	4区	No71水田
島状高まり1	1区	No34島状高まり
島状高まり2	1区	No30島状高まり
島状高まり3	2区	No76島状高まり

掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名
水路1	2区	No72溝
水路2	2区	No75溝
水路3	3区	No124溝
杭列1	2区	No101溜め池状遺構
杭列2	2区	No102河道トレンチ
旧河道	2区	No100河道
下がり1	3区	—
下がり2	1区	No20たわみ
下がり3	4区	No25土器溜まり

百間川沢田遺跡

掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名
竪穴住居1	5区	No47住居
竪穴住居2	6区	No31住居
竪穴住居3	5区	No64住居
竪穴住居4・5	6区	No16・35住居
竪穴住居6	6区	No20住居
竪穴住居7	6区	No12住居
竪穴住居8	6区	No11住居
竪穴住居9	6区	No17住居
竪穴住居10	6区	No27住居
掘立柱建物1	5区	No23建物
掘立柱建物2	5区	No20建物
掘立柱建物3	5区	No22建物
掘立柱建物4	5区	No19建物
柱穴列1	5区	No27柵
柱穴列2	5区	No28柵
井戸1	6区	No123井戸
井戸2	5区	No65井戸
井戸3	6区	No122井戸
井戸4	6区	No135井戸
井戸5	5区	No25井戸
井戸6	5区	No31井戸
井戸7	5区	No13井戸
井戸8	5区	No21井戸
井戸9	5区	No33井戸
井戸10	5区	No32井戸
円形周溝墓1	6区	No137円形周溝墓
炉1	6区	No87土坑
土坑1	6区	No180土坑
土坑2	6区	No151土坑
土坑3	6区	No149土坑
土坑4	6区	No150土坑
土坑5	6区	No144土坑
土坑6	6区	No143土坑
土坑7	6区	No167土坑
土坑8	6区	No146土坑
土坑9	6区	No166土坑
土坑10	6区	No168土坑
土坑11	6区	No170土坑
土坑12	6区	No141土坑
土坑13	6区	No169土坑
土坑14	6区	No173土坑
土坑15	6区	No162土坑
土坑16	6区	No148土坑
土坑17	6区	No174土坑
土坑18	6区	No145土坑
土坑19	6区	No165土坑
土坑20	6区	No129土坑
土坑21	5区	No44土坑
土坑22	5区	No56土坑
土坑23	5区	No57土坑
土坑24	5区	No58土坑

掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名
土坑25	5区	No68土坑
土坑26	6区	No179土坑
土坑27	6区	No139土坑
土坑28	6区	No140土坑
土坑29・30	6区	No176土坑
土坑31	6区	No142土坑
土坑32	6区	No101土坑
土坑33	6区	No100土坑
土坑34	6区	No138土坑
土坑35	6区	No113土坑
土坑36	6区	No116土坑
土坑37	6区	No109土坑
土坑38	6区	No114土坑
土坑39	6区	No124土坑
土坑40	6区	No103土坑
土坑41	6区	No115土坑
土坑42	6区	No117土坑
土坑43	6区	No160土坑
土坑44	6区	No121土坑
土坑45	6区	No108土坑
土坑46	6区	No161土坑
土坑47	6区	No126土坑
土坑48	6区	No128土坑
土坑49	6区	No112土坑
土坑50	6区	No131土坑
土坑51	6区	No133土坑
土坑52	6区	No127土坑
土坑53	6区	No132土坑
土坑54	6区	No111土坑
土坑55	6区	No134土坑
土坑56	6区	No125土坑
土坑57	6区	No105土坑
土坑58	6区	No106土坑
土坑59	6区	No136土坑
土坑60	6区	No104土坑
土坑61	6区	No107土坑
土坑62	6区	No110土坑
土坑63	6区	No36土坑
土坑64	6区	No98土坑
土坑65	6区	No95土坑
土坑66	6区	No94土坑
土坑67	6区	No96土坑
土坑68	6区	No34土坑
土坑69	6区	No92土坑
土坑70・71	6区	No91土坑
土坑72	6区	No89土坑
土坑73	6区	No88土坑
土坑74	6区	No58土坑
土坑75	6区	No57土坑
土坑76	6区	No59土坑
土坑77・78	6区	No60土坑

掲載遺構名	旧調査区名	旧遺構名
土坑79・80	6区	No61土坑
土坑81	5区	No59土坑
土坑82	5区	No63土坑
土坑83	5区	No61土坑
土坑84	6区	No19土坑
土坑85	6区	No34土坑
土坑86	6区	No15土坑
土坑87	6区	No18土坑
土坑88	6区	No29土坑
環濠西部	5区	No49溝
環濠東部	5区	No30溝
溝1	4区	No95溝
溝2	4区	No96溝
溝3	4区	No97溝
溝4	5区	No45溝
溝5	5区	No46溝
溝6	5区	No51溝
溝7	5区	No50溝
溝8	5区	No26溝
溝9	5区	No48溝
溝10	5区	No52溝
溝11	5区	No62溝
溝12	6区	No52溝
溝13	4区	No90溝
溝14	5区	No29溝
溝15	5区	No30溝
溝16	5区	No43溝
溝17	5区	No42溝
溝18	5区	No41溝
溝19	5区	No40溝
溝20	5区	No39溝
溝21	6区	No119溝
溝22	6区	No120溝
溝23北西部	4区	No23溝
溝23南東部	5区	No11溝
溝24	5区	No12溝
溝25	5区	No16溝
溝26	5区	No18・36溝
溝27	5区	No14・34溝
溝28	5区	No17・35溝
溝29	5区	No24溝
溝30	5区	No66溝
溝31	6区	No10溝
溝32	6区	No26溝
溝33	6区	No28溝
溝34	5区	No10溝
水田1	4区	No93水田
水田2	4区	No71水田
水田3	5区	No38水田
下がり1	5区	No37下がり



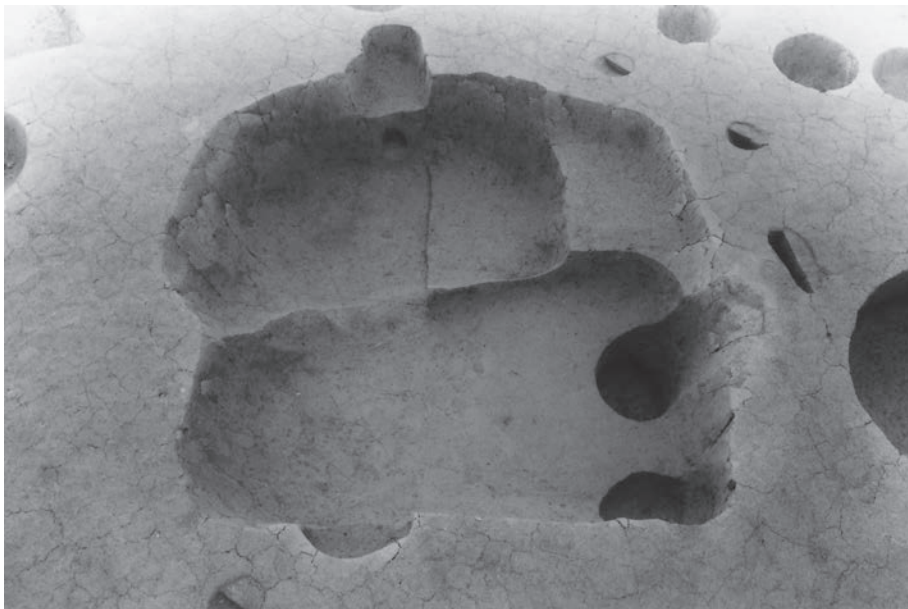
1 縄文時代晩期貯蔵穴（土坑 1）（北から）



2 弥生時代前期水田（水田 1）（北西から）



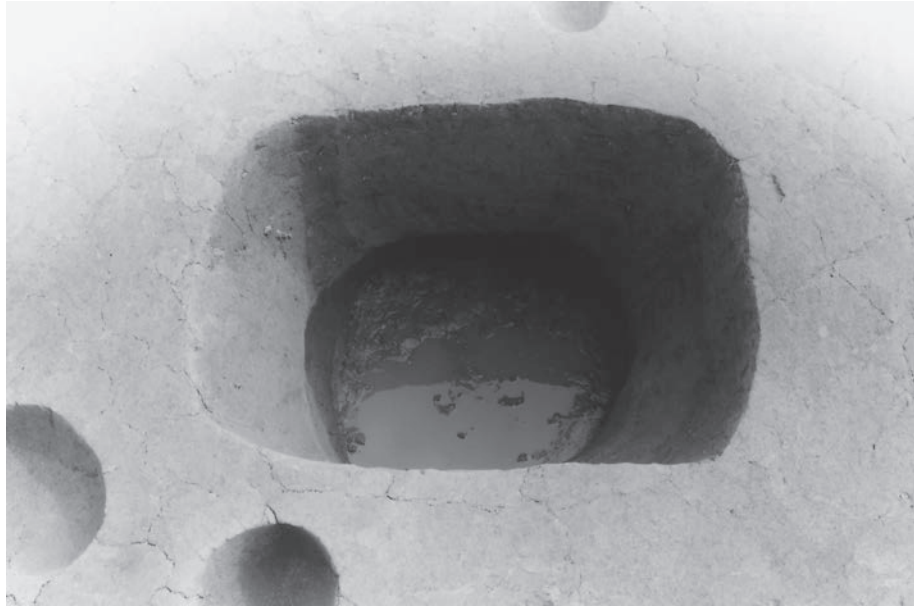
1 土坑6 (南から)



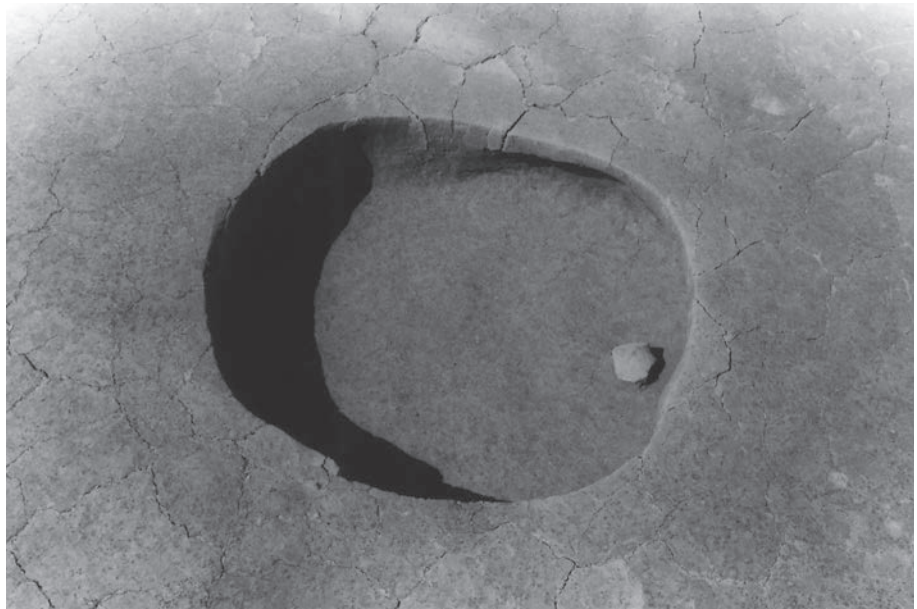
2 土坑12・13
(東から)



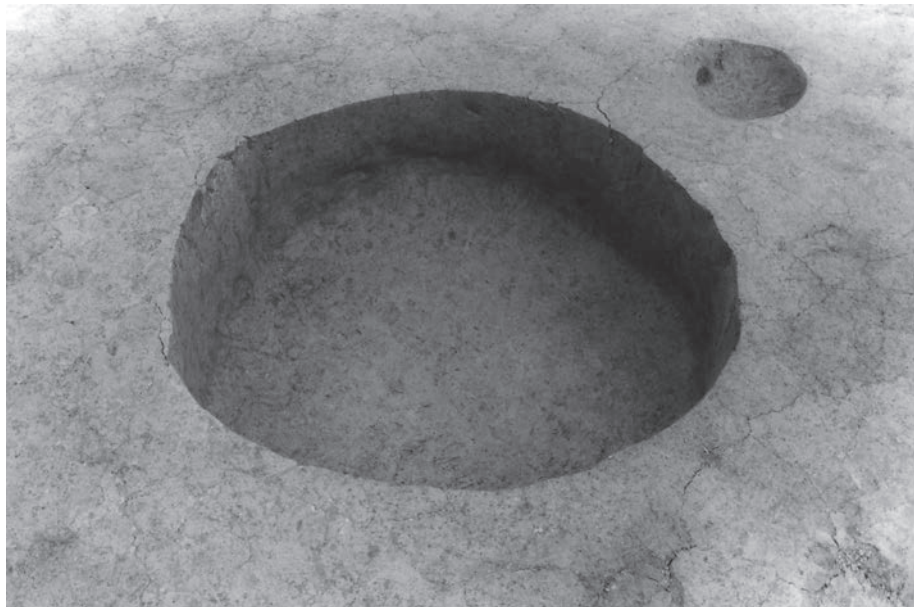
3 土坑15 (南から)



1 土坑25 (北から)



2 土坑26 (南から)



3 土坑27 (南から)



1 土坑5 (西から)



2 土坑56土器117出土状況 (南から)



3 溝12 (東から)

1 旧河道と杭列 1
(北から)



2 杭列 1 (東から)



3 杭列 1 (北から)



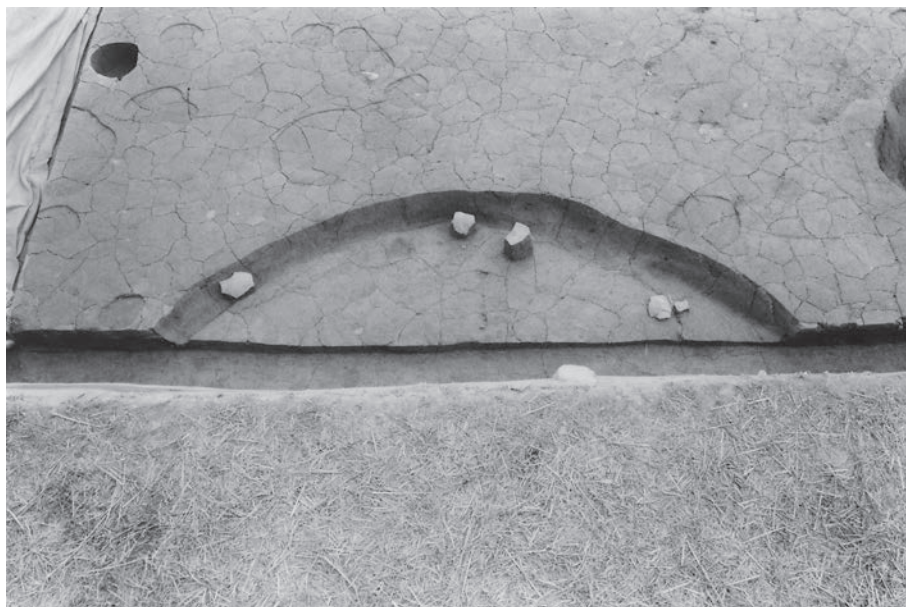


1 弥生時代中期水田（水田2）（北西から）



2 弥生時代中期水田（水田3）（北西から）

1 竪穴住居 1
(北東から)

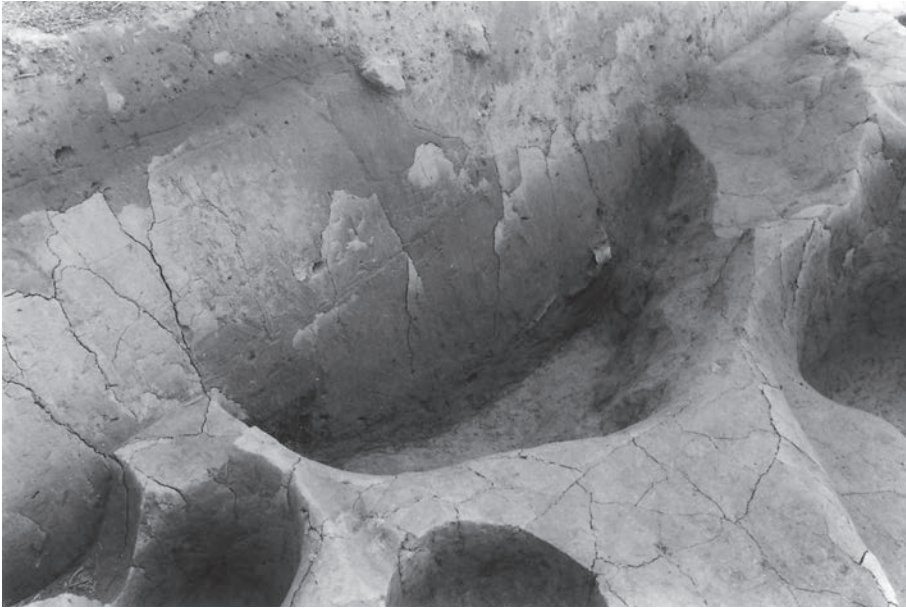


2 土坑69 (南から)



3 土坑75 (東から)





1 土坑83
(南西から)



2 土坑85
(南東から)



3 溝14 (北から)



1 弥生時代後期水田（水田4・5）（北西から）



2 弥生時代後期水田（水田8）（西から）



1 溝21~28 (西から)



2 溝34~38 (西から)



3 溝19・島状高まり2 (北から)



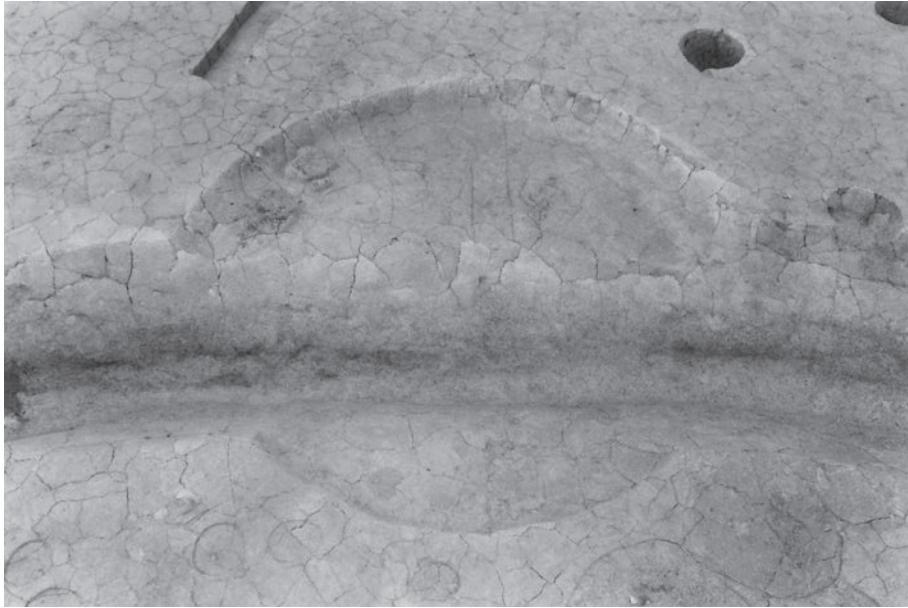
1 水路1・2 (東から)



2 島状高まり2 (北から)



3 水田7微高地取り付け部(西から)



1 豎穴住居 2
(北西から)



2 豎穴住居 3
(北東から)

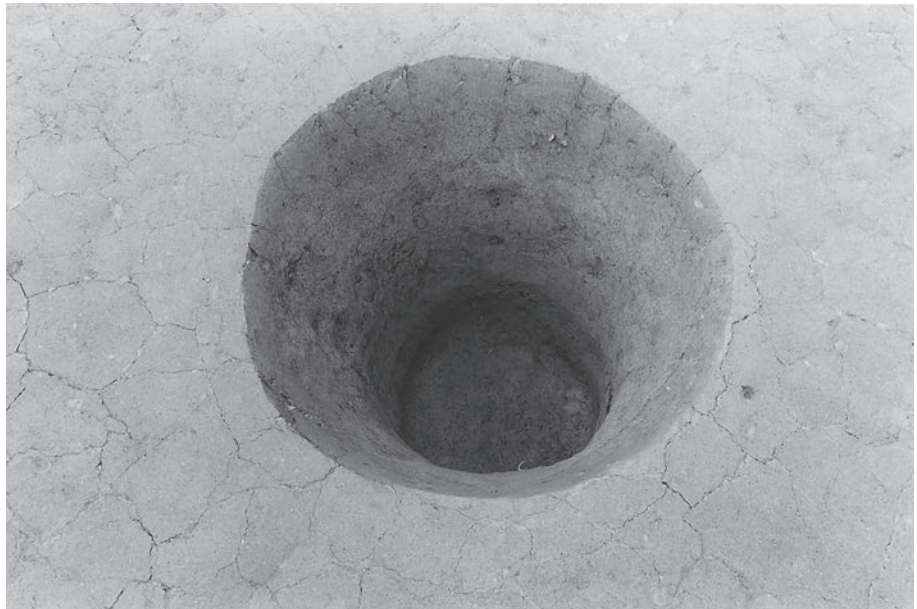


3 土器棺 1
(北東から)

1 井戸1
(北東から)

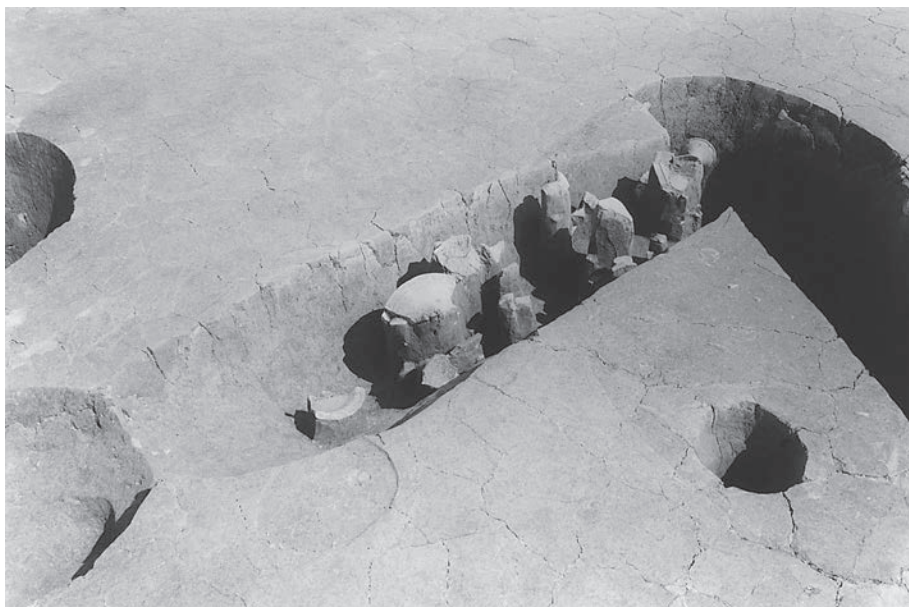


2 井戸2
(東から)

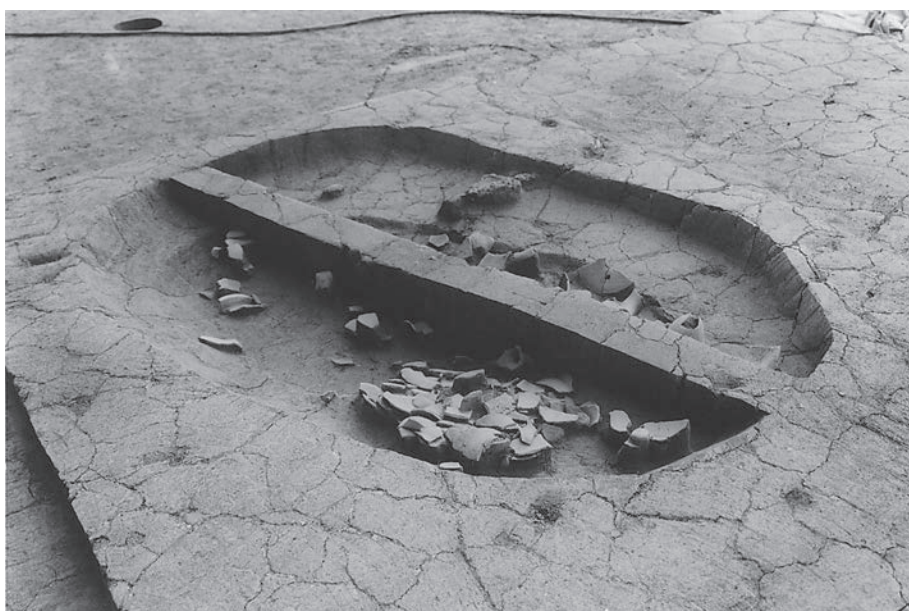


3 土坑99
(東から)

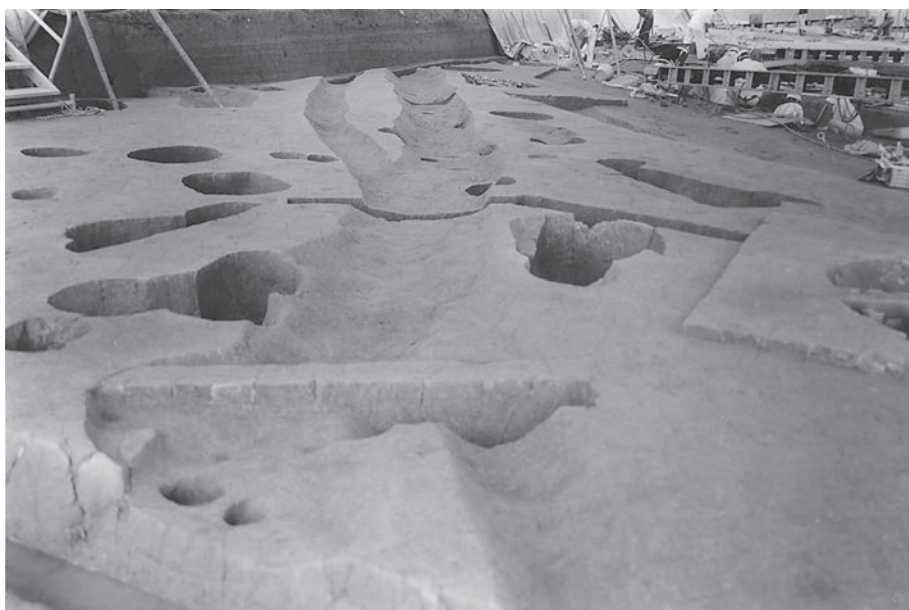




1 土坑100
(南西から)



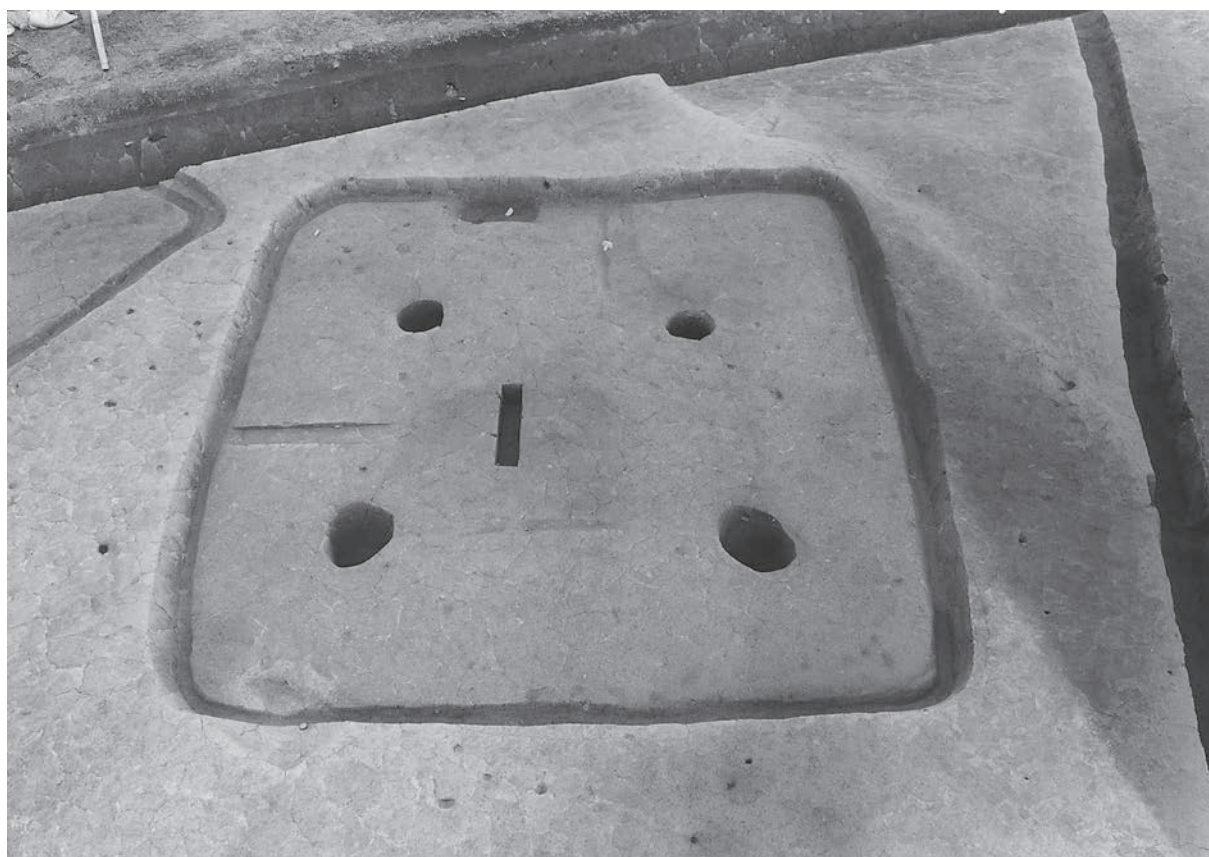
2 土坑103
(北から)



3 溝31・32
(西から)



1 古墳時代前期竪穴住居（住7～10）（北から）



2 竪穴住居6（北西から）



1 豎穴住居9
(東から)

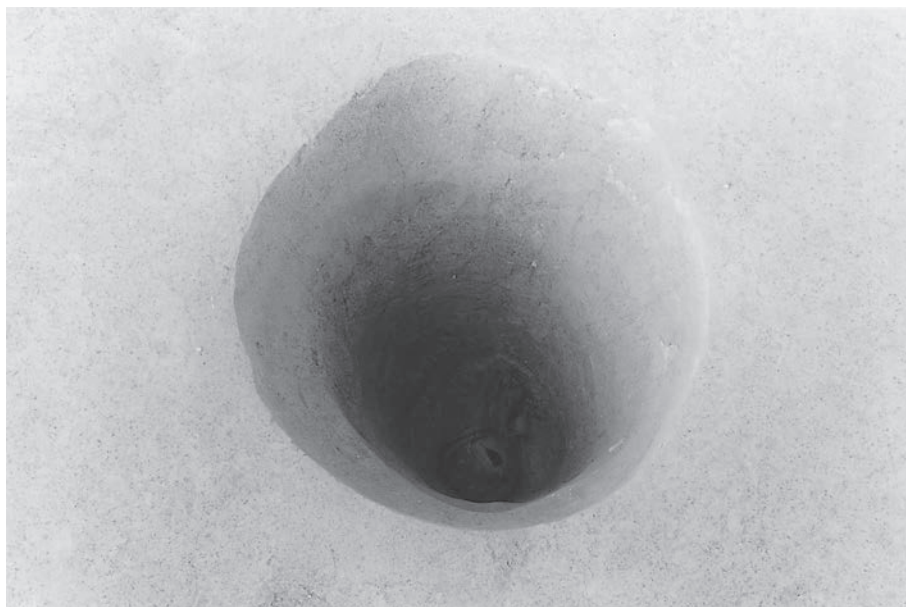


2 豎穴住居10
(南西から)

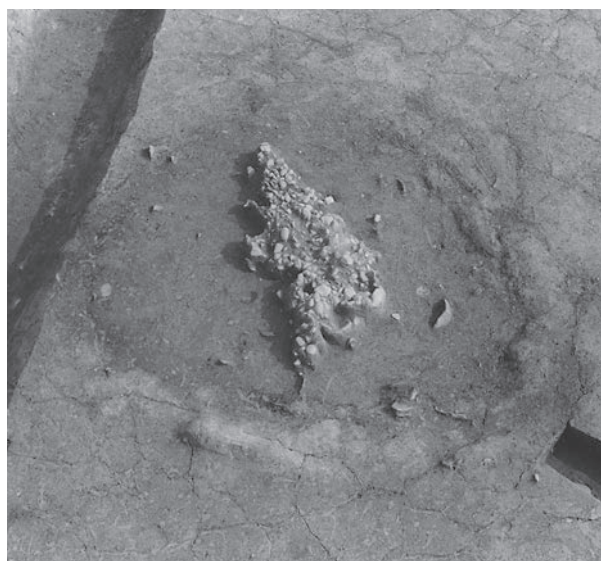


3 井戸3 (北から)

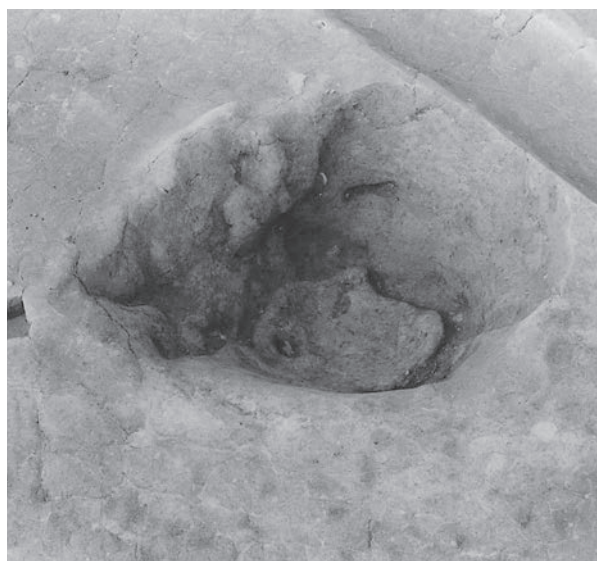
1 井戸4
(南東から)



2 井戸7 (南から)



3 井戸5 上面礫検出状況 (西から)



4 井戸5 粘土検出状況 (南東から)



1 溝48・49 (北から)



2 溝65・66 (南西から)



3 下がり3 (南西から)



1 中世以降水田区画
(南東から)



2 溝67 (南から)



3 溝68・69 (西から)



土坑5・10・23・35・40・溝7出土土器



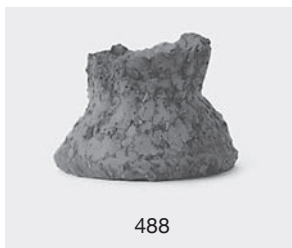
土坑56出土土器、溝12出土土器①



溝12出土土器②、土器溜まり1・旧河道出土土器



杭列 1・土坑76・85・竪穴住居 3 出土土器



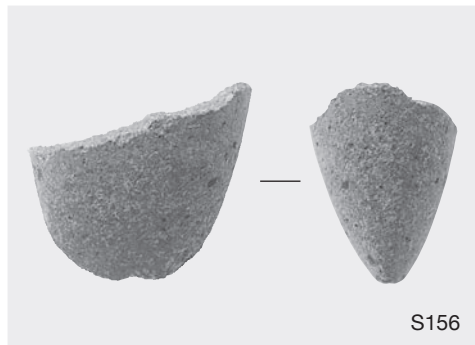
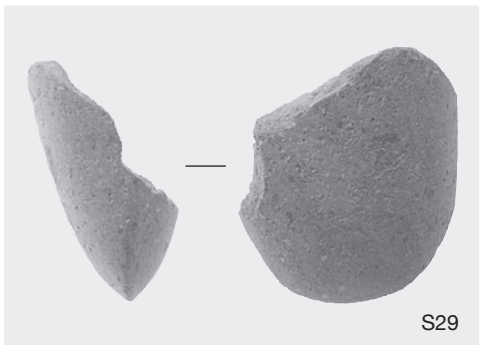
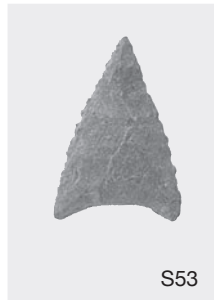
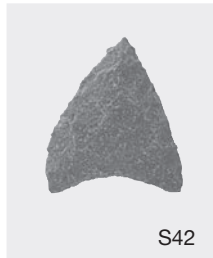
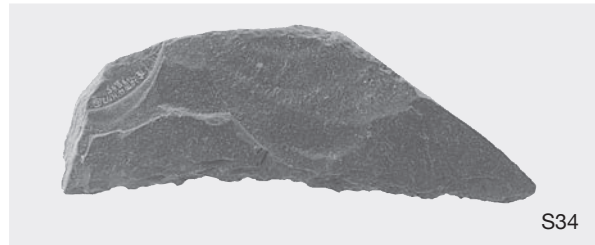
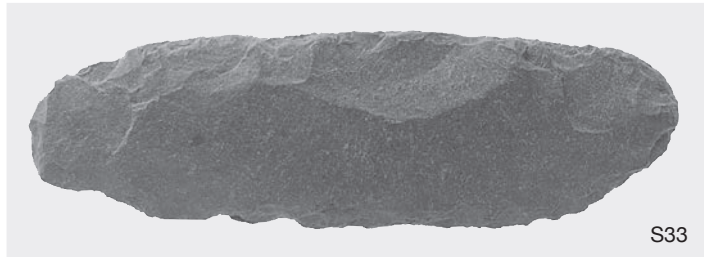
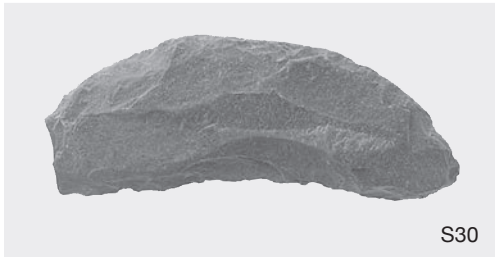
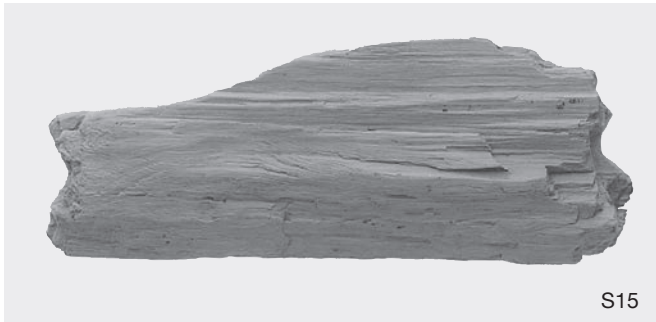
土坑99・100・製塩炉1・2出土土器



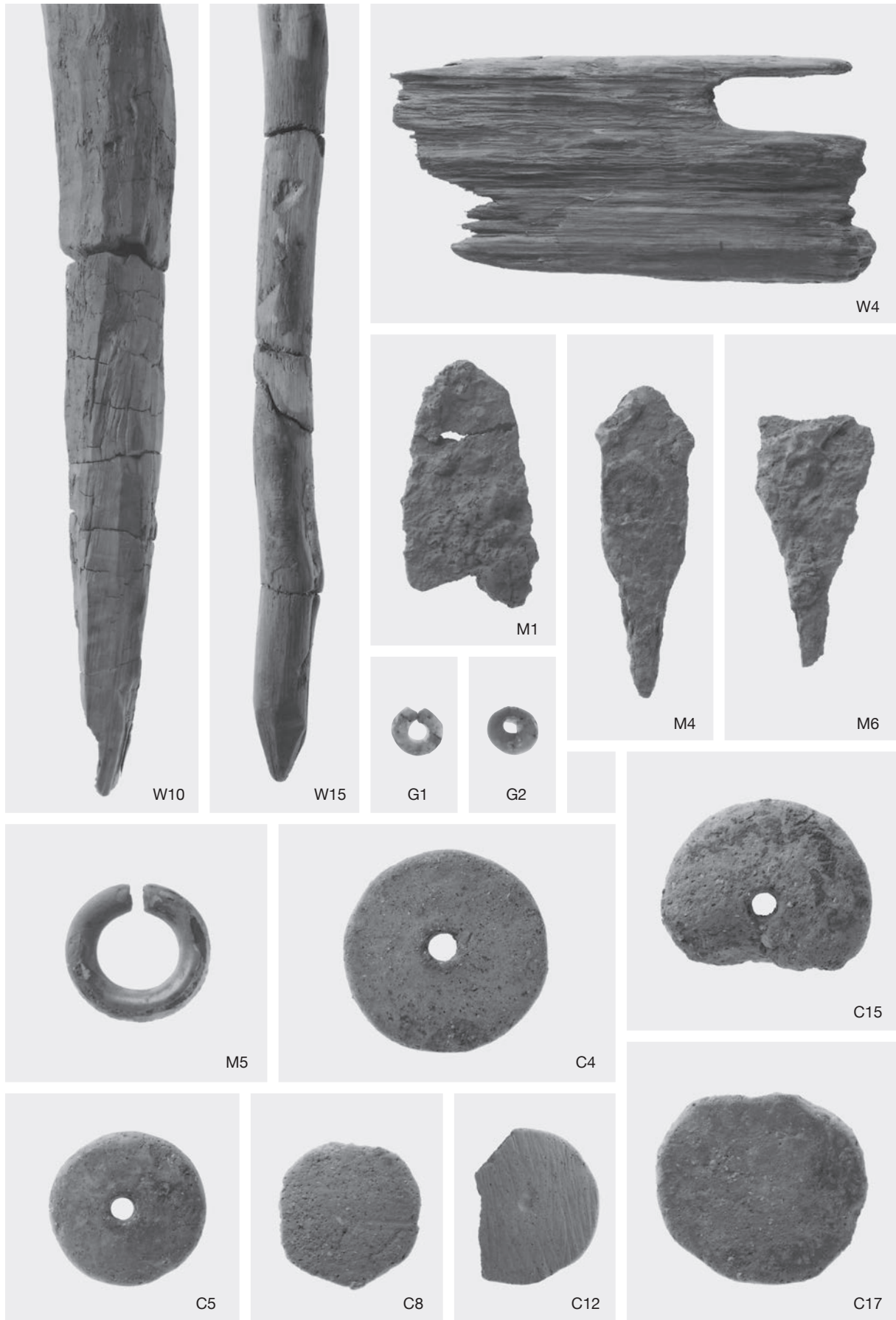
島状高まり3・竪穴住居6・9・10・井戸3出土土器



井戸6・8・9・土坑122・下がり2・3・包含層出土土器







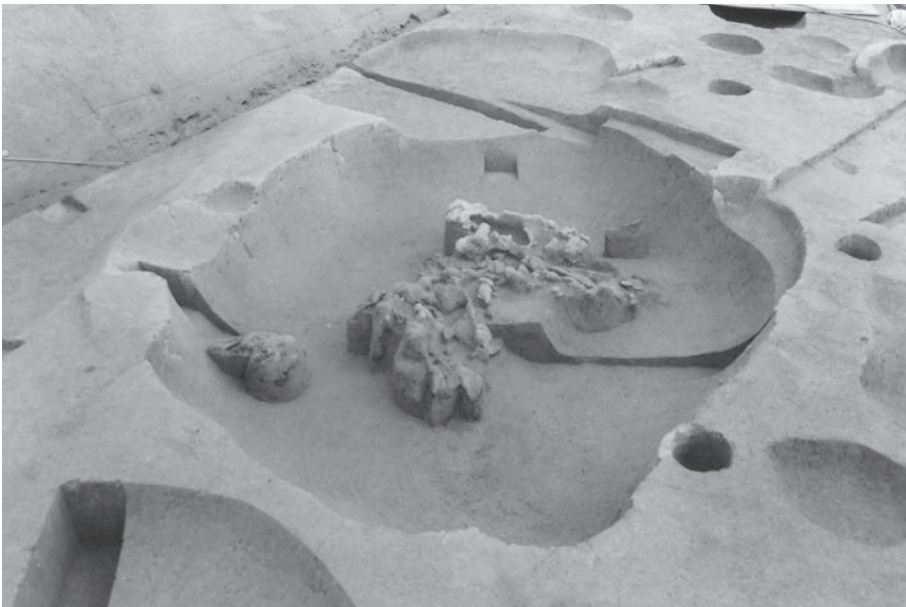
木製品・金属製品・土製品・ガラス製品



1 炉 1 (北西から)



2 土坑 1 (東から)



3 土坑15
(南西から)

1 弥生時代遺構全景
(東から)



2 竪穴住居2
(南から)

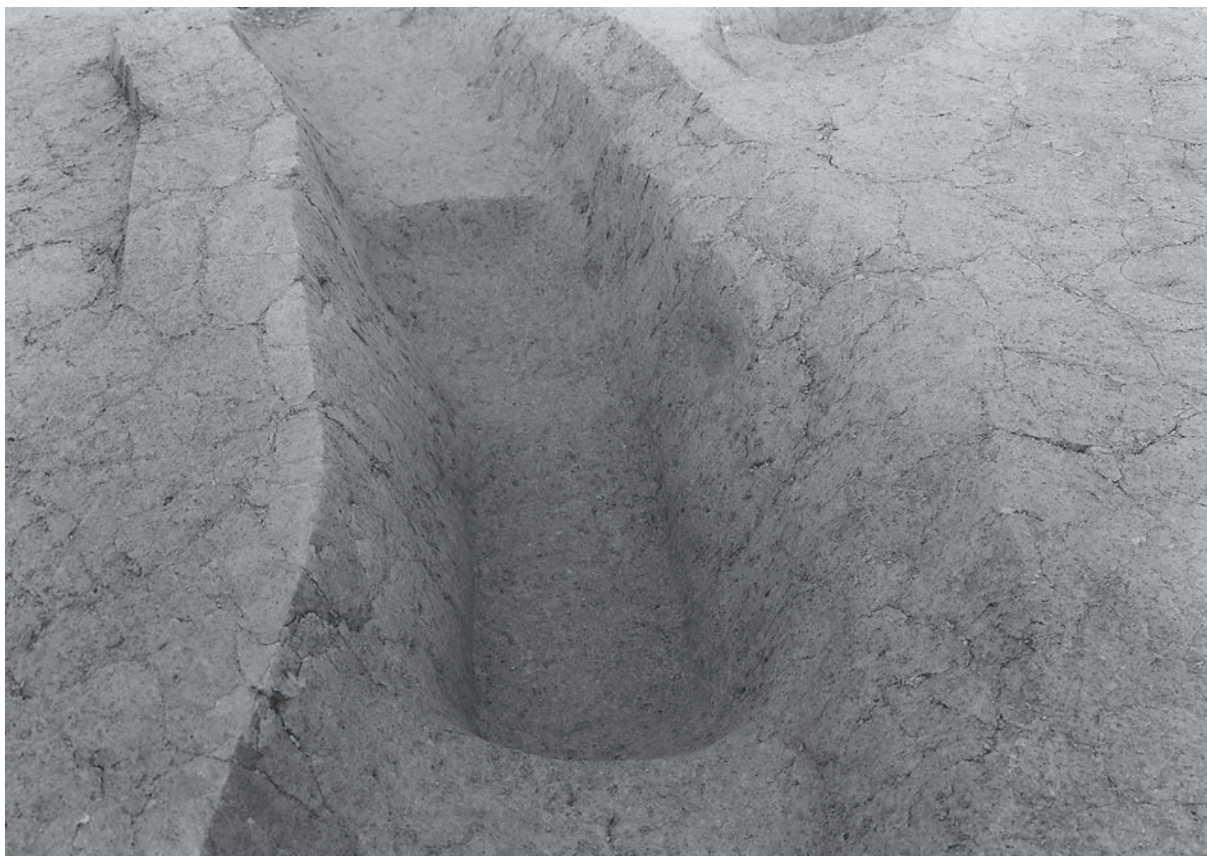


3 環濠西部断面
(西から)





1 円形周溝墓 1 周溝底土器出土状況 (南から)



2 円形周溝墓 1 周溝内土坑 (南から)



1 井戸3上層（南から）



2 井戸枠・礎盤（北西から）



3 井戸枠内礫敷き（南から）



1 水田3 (南西から)

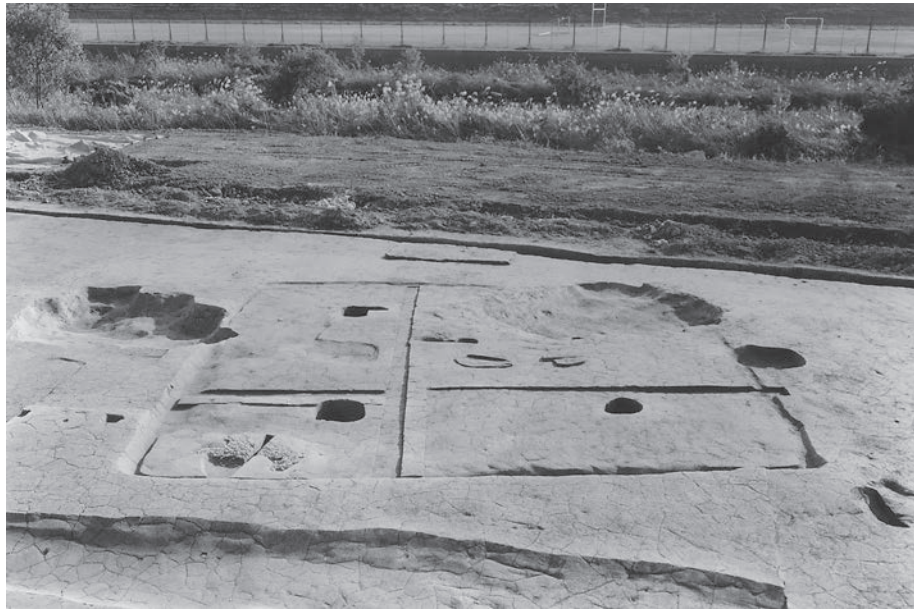


2 溝16~20 (北から)

1 古墳時代全景
(東から)



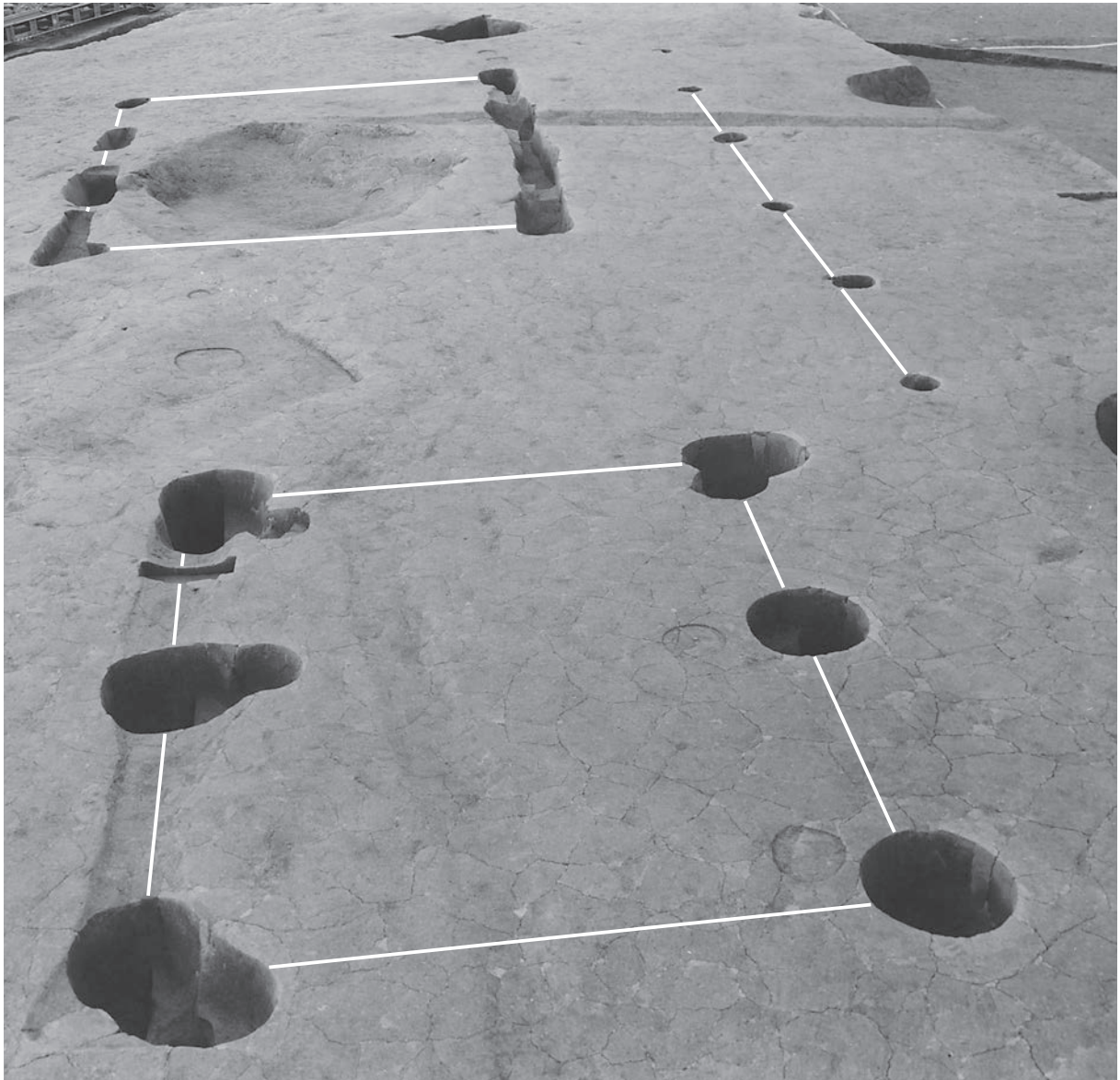
2 竪穴住居7
(北から)



3 竪穴住居7石敷き土坑 (南東から)



4 竪穴住居7焼土面 (南から)



1 掘立柱建物 1・2、柱穴列 1 (東から)



2 井戸 9
(南西から)

1 溝23南東部
(南東から)

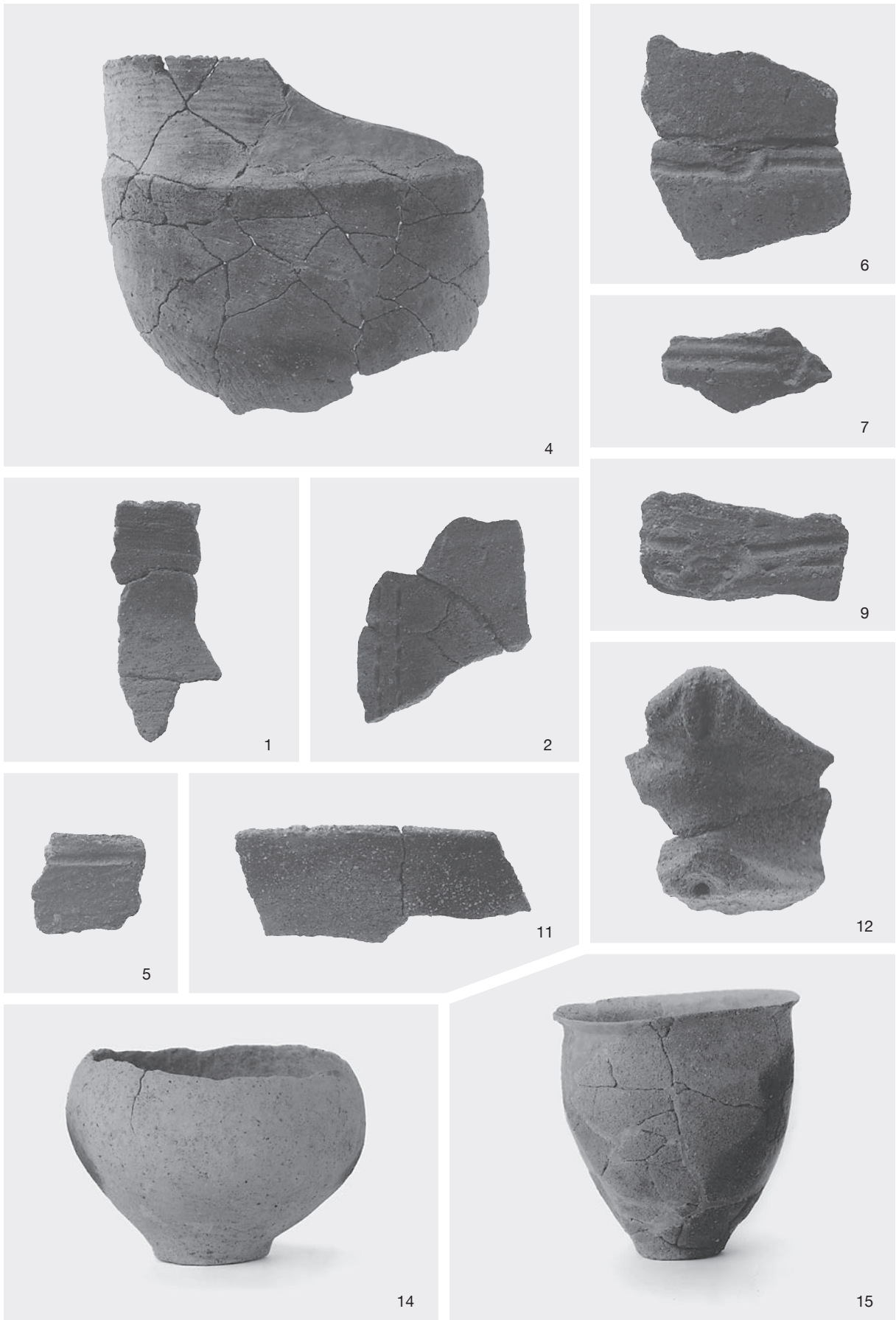


2 溝34 (北から)

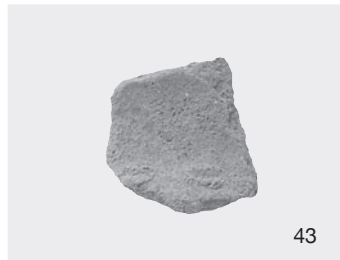
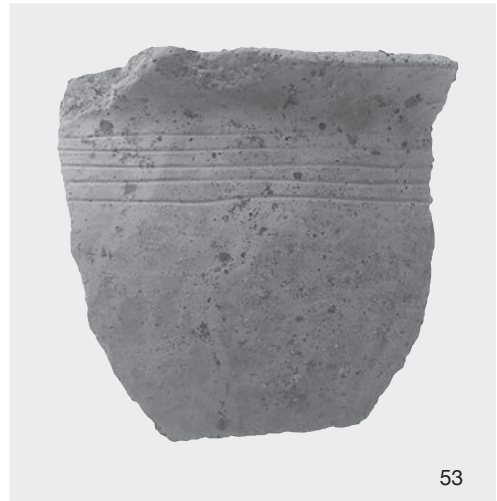


3 溝34断面
(南から)

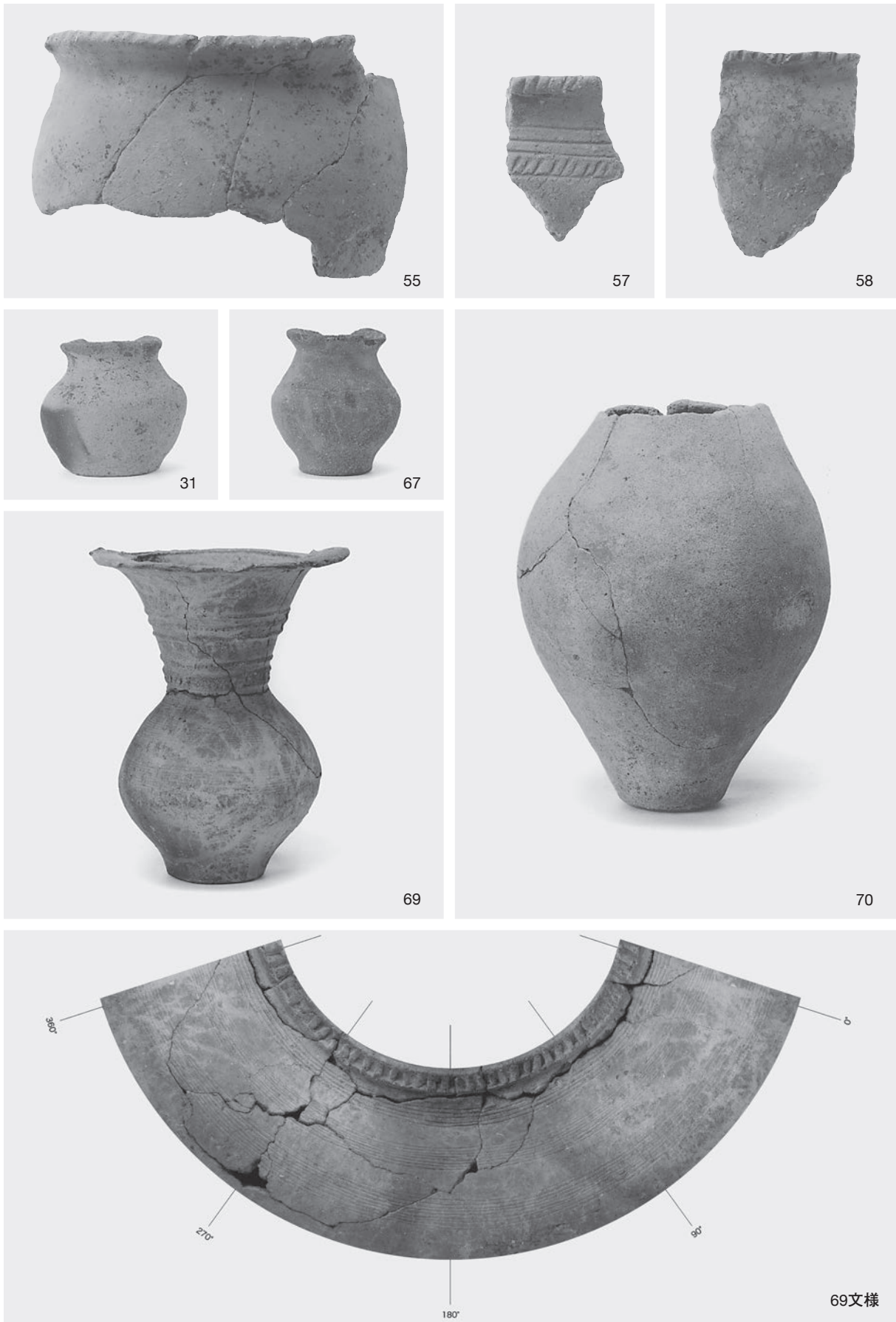




豎穴住居2・炉1・土坑1・7・8・14・17・33出土土器



土坑60出土土器、環濠西部・環濠東部出土土器①



環濠西部・環濠東部出土土器②、円形周溝墓1出土土器



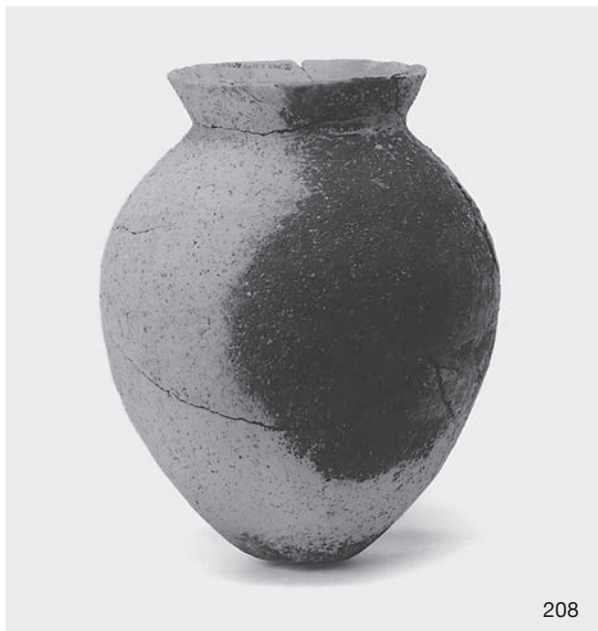
井戸3・4出土土器



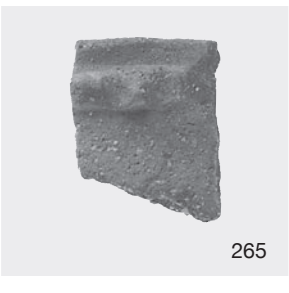
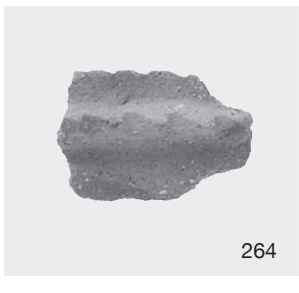
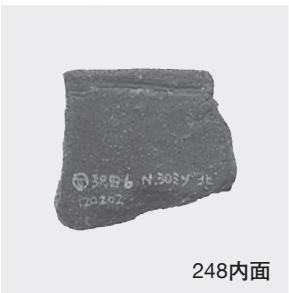
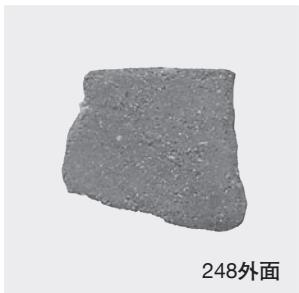
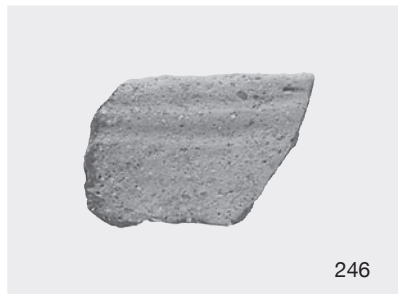
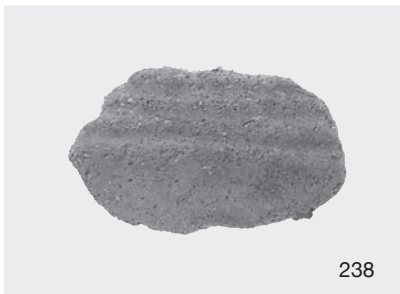
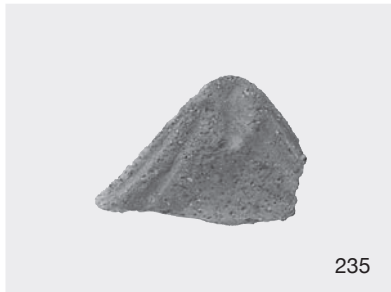
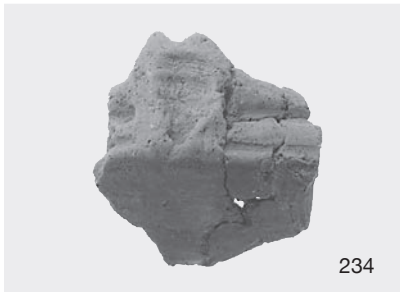
井戸5出土土器、井戸7出土土器①



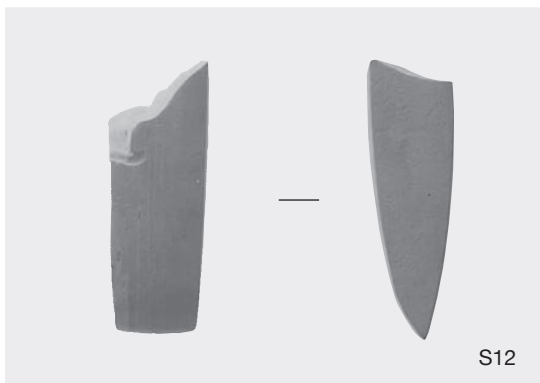
井戸7出土土器②、井戸8出土土器、井戸9出土土器①

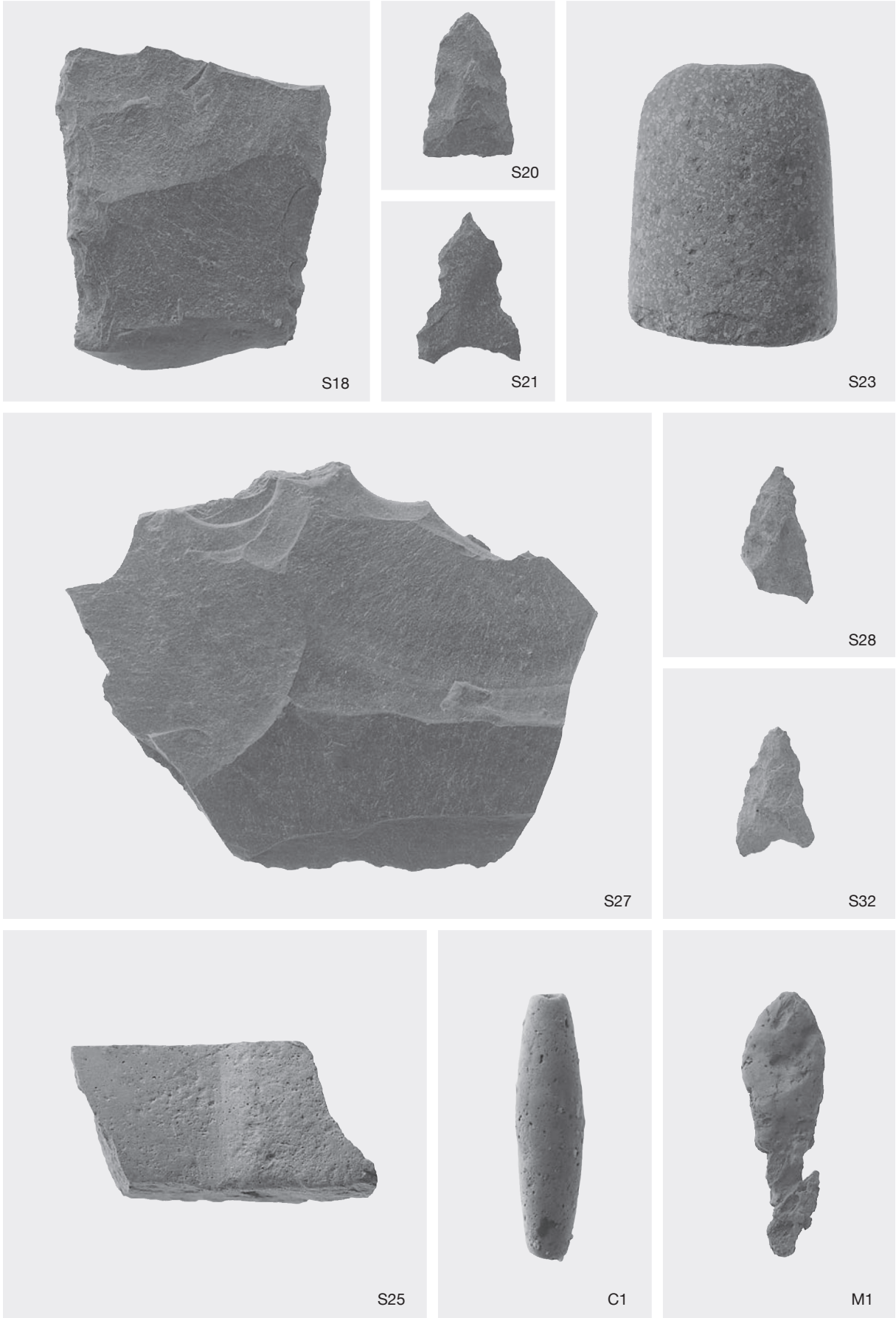


井戸9出土土器②、井戸10出土土器

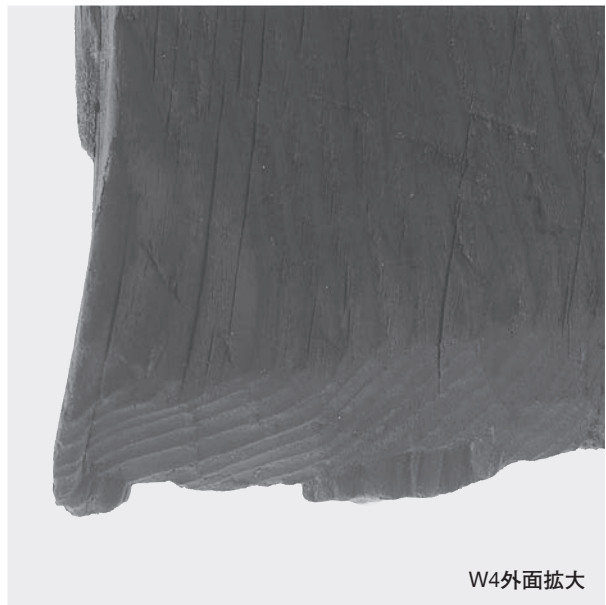


溝23周辺・包含層出土土器





石器②・金属器



井戸3井戸枠

報告書抄録

ふりがな	ひゃっけんがわはらおじまいせき ひゃっけんがわさわだいせき		
書名	百間川原尾島遺跡8 百間川沢田遺跡6		
副書名	旭川放水路改修に伴う発掘調査		
巻次	XIX		
シリーズ名	岡山県埋蔵文化財発掘調査報告		
シリーズ番号	239		
著者名	團 奈歩・亀山行雄・弘田和司・内藤善史・小林利晴・白石 純・パリノサーヴェイ株式会社		
編集機関	岡山県古代吉備文化財センター		
所在地	〒701-0136 岡山県岡山市北区西花尻1325-3		TEL : 086-293-3211
U . R . L	http://www.pref.okayama.jp/kyoiku/kodai/kodaik.htm		
発行機関	岡山県教育委員会		
所在地	〒700-8570 岡山県岡山市北区内山下2-4-6		TEL : 086-224-2111
発行年月日	2013年12月20日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北 緯 。 , ' , ''	東 経 。 , ' , ''	発掘期間	発掘面積 (m ²)	発掘原因
		市区町村	遺跡番号					
ひゃっけんがわ 百間川 はらおじまいせき 原尾島遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやましなかく 岡山市中区 はらおじま 原尾島	33102	332011725	34° 40' 19''	133° 57' 23''	20100401~ 20111021	4,764	記録保存調査
ひゃっけんがわ 百間川 さわだいせき 沢田遺跡	おかやまけん 岡山県 おかやましなかく 岡山市中区 さわだ 沢田	33102	332011726	34° 40' 16''	133° 57' 30''	20110401~ 20120331	2,752	

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
百間川 原尾島遺跡	集落・ 生産遺跡・ 河道	縄文時代	貯蔵穴1	縄文土器	縄文時代晩期の貯蔵穴、 弥生時代前期の集落・ 水田、弥生時代後期の 製塩炉・洪水砂埋没水 田、古墳時代前期の集 落、条里溝
		弥生時代	竪穴住居3、井戸2、土器棺1、 土坑114、製塩炉2、溝43、水 田3、土器溜まり3、杭列2	弥生土器・石器・木製 品・土製品	
		古墳時代	竪穴住居7、井戸7、土坑8、 溝23	須恵器・土師器・石製 品・木製器・土製品・ 金属製品・玉類	
		古代～近世	溝3	須恵器・土師器・土製 品	
百間川 沢田遺跡	集落・ 生産遺跡・ 河道	縄文時代	土坑20	縄文土器・石器	縄文時代晩期炉・土抗 群、弥生時代前期の環 濠集落、中期の円形周 溝墓、後期の洪水砂埋 没水田、古墳時代前期 の布堀り掘立柱建物群、 条里溝
		弥生時代	竪穴住居2、井戸4、円形周溝 墓1、土坑63、環濠1、溝22、 水田2	弥生土器・石器・木製 品	
		古墳時代	竪穴住居8、掘立柱建物4、柱 穴列2、井戸6、土坑4、溝12	須恵器・土師器・石製 品・金属製品・玉類	
		古代～近世	土坑1、溝1	須恵器・土製品	

要 約	<p>百間川原尾島遺跡 微高地には弥生時代前期の貯蔵穴とみられる方形土坑群、後期の竪穴住居や製塩炉、古墳時代前期の竪穴住居や井戸などがみられた。微高地西側の低位部では弥生時代前期から後期の水田や弥生時代前期以前の旧河道を調査しており、ここから井堰の可能性もある前期の杭列を検出した。また、百間川沢田遺跡との間の底位部では弥生時代後期末の洪水砂で埋没した後期水田やその下層において中期水田を確認している。弥生時代前期末葉の遺構が多く、百間川沢田遺跡環濠集落からの集落の移動が考えられる。</p> <p>百間川沢田遺跡 弥生時代前期の環濠集落の北半部にあたり、新たに竪穴住居、土坑群を調査した。これによって環濠集落の全容がほぼ明らかとなった。また、集落廃絶後には県下2例目となる円形周溝墓を検出した。古墳時代前期の集落では、竪穴住居、井戸とともに布堀りの掘り方をもつ掘立柱建物群が存在した。また、縄文時代晩期の炉状遺構や炭や焼土塊を多く含む土坑があった。</p>
-----	---

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 239

百間川原尾島遺跡8
百間川沢田遺跡6

旭川放水路改修に伴う
発掘調査 XIX

平成25年12月20日 印刷
平成25年12月20日 発行

編集 岡山県古代吉備文化財センター
岡山市北区西花尻1325-3

発行 岡山県教育委員会
岡山市北区内山下2-4-6

印刷 サンコー印刷株式会社
総社市真壁871-2